公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（34）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 安良遺跡（やすらいせき）

（志布志市志布志町）

2020年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（鹿屋方面を望む）





炭化ご飯塊

# 序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）の建設に伴って，平成28年度・平成29年度に実施した志布志市志布志町安楽に所在する安良遺跡の発掘調査の記録です。

調査の結果，本遺跡は縄文時代から近世にわたる時期の複合遺跡であることが判明しました。特に，古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構，中世前半期の掘立柱建物跡・竪穴建物跡と遺構の内外から出土した遺物は，数量や種類も豊富です。なかでも中世前半（鎌倉時代）の炭化ご飯塊は県内でも最古の事例であり，九州でも例をみないものです。これらの遺構・遺物は，遺跡の周辺や大隅半島における当時の生活を解明する手がかりとして注目されるものです。

本報告書が，県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及･啓発の一助となれば幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで御協力いただきました国土交通省九州地方地方整備局大隅河川国道事務所，志布志市教育委員会等の関係機関並びに発掘調査や報告書作成において御指導頂きました方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

令和２年３月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　中原一成

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | やすらいせき |
| 書名 | 安良遺跡 |
| 副書名 | 東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 |
| シリーズ名 | 公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第34集 |
| 編集者名 | 上床　真・小田 裕人 |
| 編集機関 | 公益財団法人 鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター |
| 所在地 | 〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-70-0574<br>FAX 0995-70-0576 |
| 発行年月 | 西暦2020年３月 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>(㎡) | 調査起因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| やすらいせき<br>安良遺跡 | かごしまけん<br>鹿児島県<br>しぶしし<br>志布志市<br>しぶしちょう<br>志布志町<br>あんらく<br>安楽 | 46221 | 221-192<br>（旧19-192） | 31°<br>28′<br>28″ | 131°<br>04′<br>31″ | 確認調査<br>2013.8.1～2013.9.5<br><br>本調査<br>2016.10.24～2017.3.7<br>2017.5.9～2017.10.30 | 3,155<br>（表面積）<br><br>7,385<br>（延面積） | 東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う発掘調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 安良遺跡 | 散布地 | 縄文時代早期 | 集石１基 | 前平式土器・小牧３Ａタイプ・轟Ａ式土器 | |
| | 散布地 | 縄文時代中期 | | 大平式土器・阿高式土器 | |
| | 散布地 | 縄文時代後期～晩期 | 土坑１基 | 丸尾式土器・西平系土器・組織痕土器・打製石鏃・スクレイパー・打製石斧・磨石・石錘・石製垂飾品（丸玉） | |
| | 散布地 | 弥生時代 | 土坑１基 | 入来Ⅱ式土器・山ノ口Ⅱ式土器・磨製石鏃 | |
| | 散布地 | 古墳時代 | 溝状遺構３条<br>地下式横穴墓１基 | 笹貫式土器（新段階）・須恵器・鉄器（鉄鏃・鉄鐸等） | |
| | 散布地 | 古代 | 帯状硬化面３ | 土師器(坏・椀・黒色土器・高坏・焼塩土器)・須恵器（坏・蓋・壺・甕） | |
| | 集落 | 中世 | 掘立柱建物跡４棟<br>竪穴建物跡３棟<br>溝状遺構５条<br>土坑19基<br>柱穴多数<br>帯状硬化面２<br>礫集積遺構４基 | 土師器(坏・小皿・柱状高台皿・耳皿・鍋・釜【関西系煮炊具含む】)・国産陶器（東播系・樺番城系・常滑・備前等)・瓦器（楠葉型・和泉型)・輸入陶磁器（白磁・青白磁・青磁・天目等)・滑石製石鍋・鉄関連遺物（釘・鉄滓等)・炭化モモ種核・炭化ご飯塊・炭化モミ塊・貝殻・銭貨（元豊通寶・元祐通寶・皇宋通寶・熙寧元寶)・土錘 | ①帯状硬化面の埋土に紫コラ含む<br>②県内最古の炭化ご飯塊 |
| | 散布地 | 近世・その他 | 土坑<br>帯状硬化面 | 薩摩焼・肥前系陶器・瀬戸産陶器・銭貨（寛永通宝)・鉄製品（轡・棒状鉄器など） | |

**遺跡の概要**

①安良遺跡は，安楽川(日南山地【都城市】が源流で，曽於市末吉町を経て志布志市志布志町安楽で志布志湾に注ぐ河川)左岸の標高約30ｍの河岸段丘上に位置する，縄文時代～近世の複合遺跡である。

縄文時代の集石，縄文時代後期の土坑・土器，弥生時代中期の土坑，古墳時代の笹貫式新段階の土器を伴う地下式横穴墓・溝状遺構，古代の紫コラ（開聞岳起源）が堆積した帯状硬化面，中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑，近世の帯状硬化面・土坑などの成果が注目される。

②古墳時代の溝状遺構からまとまって出土した土器は後期（６世紀中頃～７世紀中頃）のものである。出土遺物の中には，日向系の影響が色濃いものや特徴的な須恵器・鉄器なども一定量入っており，当該時期の様相を考える際に重要な好資料である。

③中世については，前半（12世紀～13世紀後半頃）の遺物(白磁玉縁碗・竜泉窯系青磁鎬連弁文碗・東播系須恵器・常滑産陶器含む)が多く出土している。この中で，瓦器・関西系土製煮炊具などは広域流通品ではないので，本遺跡が拠点的性格をもつ可能性を示唆する。また，炭化ご飯塊は中世前半期（鎌倉時代）のものであり，県内最古の出土例である。

④これらは，当地における人々の生活の在り方，交易や交流を考える上で，きわめて重要な資料である。




遺跡位置図

# 例　言

1　本編は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う安良遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡は鹿児島県志布志市志布志町安楽字勢園に所在する。
3　発掘調査事業は平成28年度から平成29年度まで国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，県教委の監理のもと，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が実施した。

なお，平成29年度の発掘調査は，埋文調査センターの発掘調査担当者の管理・監督のもと，大福コンサルタント株式会社へ支援業務委託を行った。
4　確認調査は県教委が文化庁の国庫補助事業を受けて，県内遺跡事前調査事業として実施した。
5　整理・報告書作成作業は平成30年度から平成31年度まで埋文調査センターが実施した。
6　掲載遺構及び遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
7　遺物注記等で用いた遺跡記号は，「ＹＲ」である。
8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
9　本編で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
10　本編で使用した方位は，すべて磁北である。
11　本平成28年度の本調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。平成29年度の本調査における写真撮影は調査担当者が，実測図作成及び空中写真の撮影は発掘調査の支援業務委託を行った大福コンサルタント株式会社が実施した。
12　平成28年度の本調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。平成29年度の本調査における写真撮影は調査担当者が，実測図作成及び空中写真の撮影は発掘調査の支援業務委託を行った大福コンサルタント株式会社が実施した。
13　本編に係る掲載遺構図の作成及びトレース・レイアウト並びに出土遺物の実測及びトレース・レイアウトは，上床・小田が整理作業員の支援を得て行った。

また，遺物実測（石器）の一部を㈱イビソク及び大福コンサルタント㈱に委託し，上床が監修した。
14　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）の写場にて，埋文調査センターの吉岡康弘・福永修一・鶴田静彦・西園勝彦が行った。
15　本報告に係る自然科学分析は，放射性炭素年代分析測定分析及び炭化種実，種実同定の構造解析を㈱パレオ・ラボに，放射性炭素年代分析測定分析，及び樹種同定，種実同定をを加速器分析㈱に，放射性炭素年代分析測定分析を㈱パレオ・ラボに，放射性炭素年代分析測定分析を加速器分析㈱に委託した。

また，一部については埋文センターの中村幸一郎文化財主事の協力を得た。
16　本編の執筆等は次のように分担し，編集は担当者全員で行った。

| | |
|---|---|
| 第Ⅰ章　発掘調査の経過 | 上床 |
| 第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 | 上床 |
| 第Ⅲ章　調査の方法と層序 | 上床 |
| 第Ⅳ章　発掘調査の成果 | |
| 第１節　縄文時代の調査 | 上床 |
| 第２節　弥生時代の調査 | 上床 |
| 第３節　古墳時代の調査 | 上床・小田 |
| 第４節　古代の調査 | 小田・上床 |
| 第５節　中世の調査 | 小田・上床 |
| 第６節　近世・その他の調査 | 上床・小田 |
| 第Ⅴ章　自然科学分析 | 中村 |
| 第Ⅵ章　総　括 | 上床・小田 |

17　本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は埋文センターで保管し，展示・活用を図ることにしている。

# 凡　例

1　本報告書掲載の遺構位置図・遺物出土状況図は，１グリッド（１マス）が10ｍ四方であり，各図に縮尺を提示してある。
2　本報告書掲載の遺構・遺物の縮尺は基本的には以下のとおりである。ただし，大型の遺構や石器についてはレイアウト用紙に合わせて縮尺が異なる場合もあるので，各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。

| | |
|---|---|
| 遺構（集石・礫集積遺構） | ：1/20 |
| 遺構（掘立柱建物跡） | ：1/80 |
| 遺構（竪穴建物跡） | ：1/60 |
| 土器・礫石器 | ：1/3 |
| 古墳時代の遺物 | ：1/4（一部を除く） |
| 剥片石器 | :原寸 |

3　遺物観察表の器高が括弧書きのものは，残長である。
4　遺構埋土・土器等の色調，埋土や層中に含まれる土壌や含有物等の面積割合（%）等は，『新版標準土色帖』に基づく。
5　遺構の実測図で用いた線種の表現は下記の通りである。

| | |
|---|---|
| 観察できる線 | ―――――― |
| 推定線 | ---------- |

# 本文目次


巻頭図版１
巻頭図版２
序文
抄録
遺跡位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過・・・・・・・・・・・・・・1
　第１節　調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・1
　第２節　事前調査・・・・・・・・・・・・・・・・1
　第３節　本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　第４節　整理・報告書作成・・・・・・・・・・・・5
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・7
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・7
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・7
　第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の調査・・・12
第Ⅲ章　発掘調査の方法と層序・・・・・・・・・・・17
　第１節　発掘調査の方法・・・・・・・・・・・・・17
　第２節　地形と層序・・・・・・・・・・・・・・・18
第Ⅳ章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・29
　第１節　縄文時代の調査・・・・・・・・・・・・・29
　第２節　弥生時代の調査・・・・・・・・・・・・・48
　第３節　古墳時代の調査・・・・・・・・・・・・・60
　第４節　古代の調査・・・・・・・・・・・・・・・90
　第５節　中世の調査・・・・・・・・・・・・・・・96
　第６節　近世・その他の調査・・・・・・・・・・158
第Ⅴ章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・165
　第１節　自然科学分析の概要・・・・・・・・・・165
　第２節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・165
　第３節　安良遺跡出土の炭化種実塊の保存処理・166
　第４節　安良遺跡出土の炭化種実塊の構造解析・168
　第５節　安良遺跡における放射性炭素年代・・・176
　第６節　安良遺跡から出土した炭化材の樹種・・179
　第７節　安良遺跡から出土した炭化種実・・・・180
　第８節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・182
　第９節　安良遺跡における放射性炭素年代・・・183
　第10節　安良遺跡から出土した炭化材の樹種・・185
　第11節　安良遺跡出土遺物の科学分析・・・・・187
第Ⅵ章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・189
　第１節　縄文時代・・・・・・・・・・・・・・・189
　第２節　弥生時代・・・・・・・・・・・・・・・189
　第３節　古墳時代・・・・・・・・・・・・・・・189
　第４節　古代・・・・・・・・・・・・・・・・・190
　第５節　中世・・・・・・・・・・・・・・・・・190
　第６節　近世・その他・・・・・・・・・・・・・194

写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・195


# 挿図目次


第１図　年度別調査範囲・・・・・・・・・・・・・６
第２図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・11
第３図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡・位置図・16
第４図　グリッド配置及び周辺地形図・・・・・・・19
第５図　Ⅱａ層上面地形図・・・・・・・・・・・・21
第６図　Ⅲ層上面地形図・・・・・・・・・・・・・22
第７図　Ⅴ層上面地形図・・・・・・・・・・・・・23
第８図　土層断面図１・・・・・・・・・・・・・・24
第９図　土層断面図２・・・・・・・・・・・・・・25
第10図　土層断面図３・・・・・・・・・・・・・・26
第11図　土層断面図４・・・・・・・・・・・・・・27
第12図　土層断面図５・・・・・・・・・・・・・・28
第13図　縄文時代遺構配置図・・・・・・・・・・・30
第14図　集石遺構・・・・・・・・・・・・・・・・30
第15図　土坑１及び出土遺物・・・・・・・・・・・31
第16図　縄文時代遺物出土状況・・・・・・・・・・32
第17図　縄文時代の土器（１）・・・・・・・・・・33
第18図　縄文時代の土器（２）・・・・・・・・・・34
第19図　縄文時代の土器（３）・・・・・・・・・・35
第20図　縄文時代の土器（４）・・・・・・・・・・36
第21図　縄文時代の土器（５）・・・・・・・・・・37
第22図　縄文時代の石器（１）・・・・・・・・・・39
第23図　縄文時代の石器（２）・・・・・・・・・・40
第24図　縄文時代の石器（３）・・・・・・・・・・41
第25図　縄文時代の石器（４）・・・・・・・・・・42
第26図　縄文時代の石器（５）・・・・・・・・・・43
第27図　縄文時代の石器（６）・・・・・・・・・・44
第28図　弥生時代遺構配置図・・・・・・・・・・・49
第29図　弥生時代遺物出土状況・・・・・・・・・・50
第30図　土坑２及び出土遺物・・・・・・・・・・・51
第31図　弥生時代の土器（１）・・・・・・・・・・51
第32図　弥生時代の土器（２）・・・・・・・・・・52
第33図　弥生時代の土器（３）・・・・・・・・・・53
第34図　弥生時代の土器（４）・・・・・・・・・・54
第35図　弥生時代の土器（５）・・・・・・・・・・55
第36図　弥生時代の土器（６）・・・・・・・・・・56
第37図　弥生時代の石器・・・・・・・・・・・・・57
第38図　古墳時代遺構配置図・・・・・・・・・・・61

第 39 図　地下式横穴墓及び出土遺物・・・・・・・62
第 40 図　溝状遺構１・２・・・・・・・・・・・・63
第 41 図　溝状遺構１出土遺物（１）・・・・・・・・64
第 42 図　溝状遺構１出土遺物（２）・・・・・・・・65
第 43 図　溝状遺構２出土遺物（１）・・・・・・・・66
第 44 図　溝状遺構２出土遺物（２）・・・・・・・・67
第 45 図　溝状遺構２出土遺物（３）・・・・・・・・68
第 46 図　溝状遺構２出土遺物（４）・・・・・・・・70
第 47 図　溝状遺構２出土遺物（５）・・・・・・・・71
第 48 図　溝状遺構２出土遺物（６）・・・・・・・・72
第 49 図　溝状遺構２出土遺物（７）・・・・・・・・73
第 50 図　溝状遺構２出土遺物（８）・・・・・・・・74
第 51 図　溝状遺構２出土遺物（９）・・・・・・・・75
第 52 図　溝状遺構３・・・・・・・・・・・・・・76
第 53 図　溝状遺構３出土遺物（１）・・・・・・・・77
第 54 図　溝状遺構３出土遺物（２）・・・・・・・・78
第 55 図　古墳時代の遺物（１）・・・・・・・・・・80
第 56 図　古墳時代の遺物（２）・・・・・・・・・・81
第 57 図　古墳時代の遺物（３）・・・・・・・・・・82
第 58 図　古墳時代の遺物（４）・・・・・・・・・・83
第 59 図　古墳時代の遺物（５）・・・・・・・・・・84
第 60 図　古代遺構配置図・・・・・・・・・・・・91
第 61 図　帯状硬化面断面図及び出土遺物・・・・・91
第 62 図　古代の遺物（１）・・・・・・・・・・・・92
第 63 図　古代の遺物（２）・・・・・・・・・・・・93
第 64 図　中世遺構配置図（１）・・・・・・・・・・97
第 65 図　中世遺構配置図（２）・・・・・・・・・・98
第 66 図　掘立柱建物跡１・４・・・・・・・・・・99
第 67 図　掘立柱建物跡２・・・・・・・・・・・・100
第 68 図　掘立柱建物跡２出土遺物・・・・・・・・101
第 69 図　掘立柱建物跡３・・・・・・・・・・・・101
第 70 図　竪穴建物跡１及び出土遺物・・・・・・・103
第 71 図　竪穴建物跡２・３及び出土遺物・・・・・105
第 72 図　柱穴１～ 16・・・・・・・・・・・・・107
第 73 図　柱穴出土遺物１・・・・・・・・・・・・108
第 74 図　柱穴出土遺物２・・・・・・・・・・・・109
第 75 図　土坑 3 ～ 5・7 ～ 11・13 ～ 15・19・21・・111
第 76 図　土坑 6・12・16 ～ 18 及び出土遺物・・・112
第 77 図　土坑 20 及び出土遺物・・・・・・・・・113
第 78 図　礫集積遺構１・２・・・・・・・・・・・115
第 79 図　礫集積遺構３・４・・・・・・・・・・・116
第 80 図　礫集積遺構１・２・３出土遺物・・・・・117
第 81 図　礫集積遺構４出土遺物・・・・・・・・・118
第 82 図　溝状遺構４～６及び出土遺物・・・・・・119
第 83 図　溝状遺構７・８及び出土遺物・・・・・・121
第 84 図　特徴的な遺物出土状況・・・・・・・・・122
第 85 図　中世の土師器（１）・・・・・・・・・・125
第 86 図　中世の土師器（２）・・・・・・・・・・126
第 87 図　中世の土師器（３）・・・・・・・・・・127
第 88 図　中世の土師器（４）・瓦器・・・・・・・128
第 89 図　瓦質土器・・・・・・・・・・・・・・・129
第 90 図　中世陶器（１）鉢１・・・・・・・・・・130
第 91 図　中世陶器（２）鉢２・・・・・・・・・・131
第 92 図　中世陶器（３）鉢３・・・・・・・・・・132
第 93 図　中世陶器（４）甕・壺１・・・・・・・・133
第 94 図　中世陶器（５）甕・壺２・・・・・・・・134
第 95 図　輸入陶磁器（１）白磁・・・・・・・・・135
第 96 図　輸入陶磁器（２）青磁・陶器・・・・・・136
第 97 図　再加工品・その他土製品・・・・・・・・137
第 98 図　滑石製品（石鍋・石鍋転用品）・・・・・・138
第 99 図　石製品（１）砥石・・・・・・・・・・・139
第100図　石製品（２）鉄関連遺物１・・・・・・・140
第101図　石製品（３）鉄関連遺物２・・・・・・・141
第102図　石製品（４）火打石・・・・・・・・・・142
第103図　石製品（５）碁石・・・・・・・・・・・143
第104図　銭貨及び金属製品・・・・・・・・・・・144
第105図　炭化ご飯塊周辺遺物出土状況・・・・・・146
第106図　炭化ご飯塊・炭化モミ塊・・・・・・・・147
第107図　近世遺構配置図・・・・・・・・・・・・158
第108図　溝状遺構９及び出土遺物・・・・・・・・159
第109図　近世・その他の遺物（１）・・・・・・・160
第110図　近世・その他の遺物（２）その他の金属製品
・・・・・・・161
第111図　近世・その他の遺物（３）鉄滓・・・・・162
第112図　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・166
第113図　安良遺跡出土の炭化種実塊と保存処理後の写真
・・・・・・・167
第114図　安良遺跡出土の炭化種実塊の全体写真（1）・・170
第115図　安良遺跡出土の炭化種実塊の拡大写真（1）・・171
第116図　安良遺跡出土の炭化種実塊の全体写真（2）・・172
第117図　安良遺跡出土の炭化種実塊の拡大写真（2）・・173
第118図　安良遺跡出土の炭化種実塊のＣＴ画像（1）・・174
第119図　安良遺跡出土の炭化種実塊のＣＴ画像（2）・・175
第120図　暦年較正年代グラフ（参考）・・・・・・178
第121図　安良遺跡出土炭化材・・・・・・・・・・179
第122図　安良遺跡出土炭化種実・・・・・・・・・181
第123図　暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・183
第124図　暦年較正年代グラフ（参考）・・・・・・185
第125図　安良遺跡の炭化材・・・・・・・・・・・186
第126図　安良遺跡の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート
（成分分析）とＦＰＭ定量結果（１）・・187
第127図　安良遺跡の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート
（成分分析）とＦＰＭ定量結果（２）・・188
第128図　溝状遺構２の遺物出土状況・・・・・・・191
第129図　県内出土の柱状高台皿及び耳皿・・・・・193

# 表 目 次


第１表　周辺遺跡一覧表（１）・・・・・・・・・・・９
第２表　周辺遺跡一覧表（２）・・・・・・・・・・・10
第３表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡・・・12
第４表　安良遺跡の基本層序・・・・・・・・・・・20
第５表　縄文時代遺構内出土遺物観察表・・・・・・45
第６表　縄文時代土器観察表（１）・・・・・・・・45
第７表　縄文時代土器観察表（２）・・・・・・・・46
第８表　縄文時代土器観察表（３）・・・・・・・・47
第９表　縄文時代石器観察表・・・・・・・・・・・47
第10表　弥生時代遺構内出土遺物観察表・・・・・・57
第11表　弥生土器観察表（１）・・・・・・・・・・57
第12表　弥生土器観察表（２）・・・・・・・・・・58
第13表　弥生土器観察表（３）・・・・・・・・・・59
第14表　石器・石製品観察表・・・・・・・・・・・59
第15表　古墳時代遺構内出土土器観察表（１）・・・85
第16表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（１）・・・85
第17表　古墳時代遺構内出土土器観察表（２）・・・85
第18表　古墳時代遺構内出土土器観察表（３）・・・86
第19表　古墳時代遺構内出土土器観察表（４）・・・87
第20表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（２）・・・87
第21表　古墳時代遺構内出土土器観察表（５）・・・87
第22表　古墳時代遺構内出土土器観察表（６）・・・88
第23表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（３）・・・88
第24表　古墳時代土器観察表（１）・・・・・・・・88
第25表　古墳時代土器観察表（２）・・・・・・・・89
第26表　古墳時代遺物観察表・・・・・・・・・・・89
第27表　古代帯状硬化面埋土観察表・・・・・・・・91
第28表　古代遺構内出土遺物観察表・・・・・・・・94
第29表　古代遺物観察表（１）・・・・・・・・・・94
第30表　古代遺物観察表（２）・・・・・・・・・・95
第31表　掘立柱建物跡１の各柱穴・・・・・・・・102
第32表　掘立柱建物跡２の各柱穴・・・・・・・・102
第33表　掘立柱建物跡３の各柱穴・・・・・・・・102
第34表　掘立柱建物跡４の各柱穴・・・・・・・・102
第35表　柱穴観察表（１）・・・・・・・・・・・109
第36表　柱穴観察表（２）・・・・・・・・・・・110
第37表　中世土坑観察表（１）・・・・・・・・・113
第38表　中世土坑観察表（２）・・・・・・・・・114
第39表　中世溝状遺構埋土観察表・・・・・・・・121
第40表　中世遺構内出土土器等観察表（１）・・・148
第41表　中世遺構内出土遺物観察表（１）・・・・148
第42表　中世遺構内出土土器等観察表（２）・・・148
第43表　中世遺構内出土遺物観察表（２）・・・・149
第44表　中世遺構内出土土器等観察表（３）・・・149
第45表　中世遺構内出土遺物観察表（３）・・・・149
第46表　中世遺構内出土土器等観察表（４）・・・149
第47表　中世遺構内出土遺物観察表（４）・・・・149
第48表　中世遺構内出土土器等観察表（５）・・・149
第49表　中世遺構内出土遺物観察表（５）・・・・149
第50表　中世遺構内出土土器等観察表（６）・・・149
第51表　中世遺構内出土遺物観察表（６）・・・・150
第52表　中世遺構内出土土器等観察表（７）・・・150
第53表　中世遺構内出土遺物観察表（７）・・・・150
第54表　中世土器等観察表（１）・・・・・・・・150
第55表　中世土器等観察表（２）・・・・・・・・151
第56表　中世土器等観察表（３）・・・・・・・・152
第57表　中世土器等観察表（４）・・・・・・・・153
第58表　中世土器等観察表（５）・・・・・・・・154
第59表　中世土器等観察表（６）・・・・・・・・155
第60表　中世遺物観察表（１）・・・・・・・・・155
第61表　中世遺物観察表（２）・・・・・・・・・155
第62表　中世遺物観察表（３）・・・・・・・・・156
第63表　中世遺物観察表（４）・・・・・・・・・156
第64表　中世遺物観察表（５）・・・・・・・・・156
第65表　中世遺物観察表（６）・・・・・・・・・156
第66表　中世遺物観察表（７）・・・・・・・・・157
第67表　溝状遺構９埋土観察表・・・・・・・・・159
第68表　近世遺構内出土土器等観察表・・・・・・163
第69表　近世遺構内出土遺物観察表・・・・・・・163
第70表　近世土器等観察表・・・・・・・・・・・163
第71表　近世遺物観察表・・・・・・・・・・・・163
第72表　その他の土器等観察表・・・・・・・・・163
第73表　その他の遺物観察表（１）・・・・・・・163
第74表　その他の遺物観察表（２）・・・・・・・164
第75表　測定試料および処理・・・・・・・・・・166
第76表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果・166
第77表　種実塊の粒径の計測値・・・・・・・・・169
第78表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$Ｃ補正値）・177
第79表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$Ｃ未補正値ほか）・177
第80表　安良遺跡出土炭化材の樹種・・・・・・・179
第81表　安良遺跡出土炭化種実一覧表・・・・・・181
第82表　測定試料および処理・・・・・・・・・・182
第83表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果・183
第84表　放射性産業年代測定結果（$\delta^{13}$Ｃ補正値）・184
第85表　放射性産業年代測定結果（$\delta^{13}$Ｃ未補正値ほか）・185
第86表　安良遺跡における樹種同定結果・・・・・186
第87表　古墳時代溝状遺構２出土土器の年代測定結果一覧・191
第88表　安良遺跡出土の炭化米塊・・・・・・・・192
第89表　県内出土の炭化米塊・・・・・・・・・・192
第90表　県内出土の柱状高台皿及び耳皿一覧・・・192

# 図版目次


巻頭図版
巻頭図版１　遺跡遠景
巻頭図版２　炭化ご飯塊
巻末図版
図版１　遺跡遠景・・・・・・・・・・・・・・・・195
図版２　土層断面・・・・・・・・・・・・・・・・196
①・②Ⅰ～Ⅴ層
③紫コラを含む帯状硬化面　④・⑤Ⅵ層以下
図版３　発掘作業風景・・・・・・・・・・・・・・197
①～③遺物包含層掘削状況　④壁面清掃状況
⑤～⑦遺構調査状況
図版４　縄文時代・弥生時代の遺構・古墳時代の遺構１・・198
①集積遺構　②土坑２　③土坑３
④～⑦地下式横穴墓
図版５　古墳時代の遺構２・・・・・・・・・・・・199
①・②溝状遺構１　③～⑥溝状遺構２
⑦・⑧溝状遺構３
図版６　古代の遺構・中世の遺構１・・・・・・・・200
①～③帯状硬化面１　④・⑥帯状硬化面２
⑤帯状硬化面１及び２　⑦・⑧掘立柱建物跡１
図版７　中世の遺構２・・・・・・・・・・・・・・201
①・②掘立柱建物跡１
③～⑤掘立柱建物跡２
図版８　中世の遺構３・・・・・・・・・・・・・・202
①～③掘立柱建物跡３　④掘立柱建物跡４
⑤・⑥竪穴建物跡２　⑦・⑧竪穴建物跡３
図版９　中世の遺構４・・・・・・・・・・・・・・203
①柱穴５　②柱穴６周辺遺物　③柱穴６
④柱穴13　⑤・⑥柱穴14　⑦・⑧柱穴15
図版10　中世の遺構５・・・・・・・・・・・・・・204
①・②柱穴16　③柱穴12　④土坑３
⑤土坑４　⑥土坑５　⑦土坑６
図版11　中世の遺構６・・・・・・・・・・・・・・205
①・②土坑７　③土坑８　④土坑９
⑤土坑10　⑥土坑11　⑦・⑧土坑12
図版12　中世の遺構７・・・・・・・・・・・・・・206
①土坑13　②土坑14　③土坑15
④・⑤土坑16　⑥・⑦土坑17・18
⑧土坑19
図版13　中世の遺構８・・・・・・・・・・・・・・207
①土坑20　②土坑21　③礫集積1～3
④礫集積１　⑤礫集積２　⑥礫集積３
⑦・⑧礫集積４
図版14　中世の遺構９・・・・・・・・・・・・・・208
①溝状遺構５　②溝状遺構６　③溝状遺構７
④溝状遺構８　⑤特徴的な遺物出土状況１
⑥特徴的な遺物出土状況２
図版15　中世の遺物出土状況・近世の遺構・・・・209
①炭化ご飯塊　②炭化モミ塊
③溝状遺構９　④土坑22
図版16　縄文時代の土器（１）・・・・・・・・・・210
図版17　縄文時代の土器（２）・・・・・・・・・・211
図版18　縄文時代の土器（３）・・・・・・・・・・212
図版19　縄文時代の石器（１）・・・・・・・・・・213
図版20　縄文時代の石器（２）・・・・・・・・・・214
図版21　縄文時代の石器（３）・・・・・・・・・・215
図版22　弥生時代の遺構内出土遺物・弥生時代の遺物（1）・216
図版23　弥生時代の遺物（２）・・・・・・・・・・217
図版24　弥生時代の遺物（３）・・・・・・・・・・218
図版25　古墳時代の遺構内出土遺物（溝１）・・・・219
図版26　古墳時代の遺構内出土遺物（溝２－１）・・220
図版27　古墳時代の遺構内出土遺物（溝２－２）・・221
図版28　古墳時代の遺構内出土遺物（溝２－３）・・222
図版29　古墳時代の遺構内出土遺物（溝３）・・・・223
図版30　古墳時代の遺物（１）・・・・・・・・・・224
図版31　古墳時代の遺物（２）・・・・・・・・・・225
図版32　古代の遺物・・・・・・・・・・・・・・・226
図版33　中世の遺構内出土遺物（１）・・・・・・・227
図版34　中世の遺構内出土遺物（２）・・・・・・・228
図版35　中世の遺構内出土遺物（３）・・・・・・・229
図版36　中世の遺物（１）・・・・・・・・・・・・230
図版37　中世の遺物（２）・・・・・・・・・・・・231
図版38　中世の遺物（３）・・・・・・・・・・・・232
図版39　中世の遺物（４）・・・・・・・・・・・・233
図版40　中世の遺物（５）・・・・・・・・・・・・234
図版41　中世の遺物（６）・・・・・・・・・・・・235
図版42　中世の遺物（７）・・・・・・・・・・・・236
図版43　中世の遺物（８）・・・・・・・・・・・・237
図版44　炭化ご飯塊・炭化モミ塊・時代不明の鉄器・238

# 第Ⅰ章　発掘調査の経過

## 第１節　調査に至るまでの経緯

県教委は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業実施に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

これを受けて，文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成12年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間を対象とした埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，埋文センターの４者で協議を重ねた。対応の検討中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い，詳細な遺跡の把握を目的に改めて，詳細分布調査や試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

県教委は，平成13年１月29日～２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して，宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石綰遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日～７月26日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年12月３日～12月25日の２日間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することになり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日～平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が678,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅ＩＣ（平成21年４月28日に「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）～末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結が，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書の締結が行われ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま生きるということになった。ただし，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部分は国土交通省（九州地方整備局）からの受託事業として実施することとなった。

近年，県内では東九州自動車道等をはじめ国関係の道路建設事業等の増加に伴い，埋蔵文化財調査の事業量も増大し，その対応が困難な状況となりつつあった。そこで，鹿児島県は事業の円滑かつ効率的な実施を目的として平成25年４月，公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋文調査センターを設置し，国関係の事業に係る業務を公益財団法人鹿児島県文化振興財団に委託し，埋文調査センターが調査を実施することとなった。

また，事業の効率化を図るために平成24年度から発掘調査の支援業務を民間調査組織へ委託することとなり，平成25年度から埋文調査センターが発足するにあたり「埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」を策定した。それに基づき平成29年度には大福コンサルタント株式会社へ発掘調査の委託を行なった。

安良遺跡の調査経過及び整理・報告書作成に関する詳細については次節以降で報告する。

## 第２節　事前調査

### １　分布調査

安良遺跡に関する分布調査は，日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の分布調査依頼を受け，平成14年４月に実施した。調査体制は次のとおりである。

**調査体制（分布調査：平成14年度）**

事 業 主 体　日本道路公団九州支社鹿児島事務所
調 査 主 体　鹿児島県教育委員会

### ２　確認調査

確認調査は，埋文センターにより県内遺跡事前調査事業として平成25年８月１日～９月５日に行われた（実働17日）。

調査方法は，遺跡内の30か所にトレンチを設定し，重機を使用しながら掘り下げを行った。地層・遺構・遺物の有無の確認を行いながら，約１～３ｍほどの深さまで

掘り下げた。その結果，成川式土器を大量に含む溝状遺構が１条検出され，隣接箇所でも過去の調査で古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されていることなどから，表面積3,000㎡が調査対象範囲となった。

調査体制は次のとおりである。

**調査体制（確認調査：平成25年度）**

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　県立埋蔵文化財センター
　　所長　井ノ上秀文
調査企画　県立埋蔵文化財センター
　　〃　次長兼総務課長　新小田　譲
　　〃　調査課長兼南の縄文調査室長　堂込　秀人
　　〃　調査課第二調査係長　大久保浩二
調査担当　〃　文化財主事　吉岡　康弘
　　〃　〃　切通　雅子
事務担当　〃　総務課主事　池之上勝太

**調査の詳細（調査日誌より）**

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。本調査の詳細も同様に月単位で記すこととする。なお，数字の後の「Ｔ」はトレンチのことである。

【８月】

現場開始に向けての準備（調査範囲確認，現場内の危険箇所点検，駐車場整備等：１日）。

１～30Ｔ掘り下げ。遺物取り上げ。遺物出土状況及び遺構（溝状遺構等）検出状況写真撮影。

井ノ上所長（埋文センター）現地視察・弓削監督官（大隅河川国道事務所）来跡（６日）。

所内安全パトロール・大久保係長現地調査（７日）。

民間業者によるＺ座標計測（21日）。

28Ｔで溝状遺構検出（22日）。27Ｔで土坑２検出（27日）。

トレンチ掘削作業終了。一部埋め戻し（28日）。

【９月】

雨天のため作業中止（２・３日）。

台風接近のため作業中止（４日）。

22・23・30Ｔ土層注記・位置図作成。埋め戻し。

27Ｔ埋め戻し。作業完了。木森遺跡へ移動（５日）。

## 第３節　本調査

確認調査の結果を踏まえ，本調査を平成28年・29年度の２か年にわたり実施した。平成29年度については，発掘調査の実施にあたり，埋文調査センターは，大福コンサルタント株式会社へ発掘調査の支援業務委託を行った。

各年度の調査期間は以下のとおりである。

平成28年度：平成28年11月15日～平成29年２月24日
平成29年度：平成29年５月９日～10月30日

なお，各年度毎の調査範囲は，第１図に示した。

各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

**調査体制（平成28年度）**

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　〃　調査課長　八木澤一郎
　　〃　調査第三係長　岩澤　和徳
調査担当　〃　文化財専門員　石畑　浩一
　　〃　〃　立神　倫史
事務担当　〃　事業推進員　川﨑　麻衣

**調査の詳細（調査日誌より）**

【10月】

事前準備開始。表土剥ぎ・排土処理・搬出（重機使用）開始。営繕用地環境整備。岩澤係長現地調査（26日）。プレハブ設置開始（28日）。

【11月】

調査現場事務所等の仮設工。表土剥ぎ・排土処理（１～14日）。発掘作業開始・オリエンテーション・物品荷入れ（15日。Ｂ・Ｃ～11～13区掘り下げ（Ⅱａ層まで）。帯状硬化面・溝（Ｂ・Ｃ－12・13区），土器集中（Ｄ－６区）調査（21～28日）。

岩澤係長現地調査（15日）。志布志高校生及び相美主任主査（志布志市教委）見学，堂込センター長現地視察（17日）。上園主事・川﨑事業推進員が作業員事務のため来跡（21日）。

【12月】

Ｋ・Ｌ－28～30区：帯状硬化面・溝調査（１～９日）。Ｊ～Ｌ－30～35区：Ⅱ層掘り上げ（１～26日）。遺物取り上げ（№1～111）。

八木澤調査課長現地指導（16日）。岩澤係長現地調査（７日・14日）。

【１月】

Ｊ～Ｌ－26～37区：掘り下げ（Ⅱ層）。帯状硬化面（Ｊ－29区）調査（５日・６日）。アカホヤ上面で土坑，溝（Ｊ・Ｋ－37・38区），柱穴等を確認・調査。旧石器時代該当層からは遺構・遺物は確認されず。Ｆ～Ｉ－８～10区：掘り下げ（Ⅷ～Ｘ層上面まで）。Ｆ～Ｉ－５・６区：Ｘ層上面地形測量。遺物取り上げ（№112～671）。

堂込センター長現地視察（17日）。八木澤調査課長現地指導（27日）。岩澤係長現地調査（11日・12日・25日）。成尾英仁氏（甲南高等学校教諭）来跡（27日）。

【２月】

Ｊ・Ｋ－28～36区：掘り下げ（Ⅱ層）。Ｊ・Ｋ－37～39区：掘り下げ（Ⅱ～Ⅳ層）。下層（旧石器・縄文時代等）確認トレンチ調査（Ｌ－35区ほか）。帯状硬化面（Ｊ－29），溝調査（１～22日）。柱穴跡・土坑（Ｋ－33区）。礫集積（Ｋ－32区），溝（Ｉ～Ｋ－31区）調査（６～24日）。遺物取り上げ（№672～900）。空中写真撮影実施。（15日）。

八木澤調査課長現地指導（20日）。岩澤係長現地調査（９日・17日・22日）。

埋文調査センターへ荷出。作業員による作業終了（24日）。

【３月】

埋め戻し開始（１日）。土層断面図実測（Ｋ・Ｌ－33～35区）。柱穴・土坑実測。Ｊ～Ｌ－36～39区に関しては発掘調査終了。

中村係長現地調査（７日）。岩澤係長現地調査（７日）。

埋め戻し終了・平成28年度作業終了（７日）。

**調査体制（平成29年度）**

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省九州地方整備局 | |
| | 大隅河川国道事務所 | |
| 調査主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 調査統括 | 公益財団法人　鹿児島県文化振興財団 | |
| | 埋蔵文化財調査センター | |
| | センター長 | 前迫　亮一 |
| 調査企画 | 〃　総務課長兼総務係長 | 中村伸一郎 |
| | 〃　調査課長 | 中原　一成 |
| | 〃　調査第二係長 | 岩澤　和徳 |
| 調査担当 | 〃　文化財専門員 | 上床　真 |
| 事務担当 | 〃　主査 | 荒瀬　勝己 |
| 現地指導 | ㈱パレオ・ラボ | 佐々木由香 |
| | 伊集院高等学校　教諭 | 成尾　英仁 |
| | 県立埋蔵文化財センター | |
| | 文化財主事 | 武安　雅之 |

**発掘調査の民間委託（平成29年度）**

発掘調査の実施にあたり，埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，大福コンサルタント株式会社へ埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託を行った。業務体制等は以下のとおりである。

なお，埋文調査センター職員１名が常駐し，調査方法及び業務内容に係る指導，助言及び調査現場の監理を行った。

| | | |
|---|---|---|
| 委託先 | 大福コンサルタント㈱ | |
| 体制 | 〃　主任技術者 | 黒木　淳雄 |
| | 〃　主任調査支援員 | 和田　好史 |
| | 〃　調査支援員 | 岩下　直樹 |
| | 〃　〃 | 長濱　武史 |
| | 〃　主任測量技師 | 澤邊　敏行 |
| | 〃　測量技師 | 川俣　幸次 |
| | 〃　〃 | 斉藤　直樹 |
| 検査 | 中間検査 | 平成29年12月７日 |
| | 完成検査 | 平成30年３月６日（実地検査） |
| | | 平成30年２月26日（成果物の検査） |

※　同年度に調査を実施した春日堀遺跡と併せて１年間の委託業務であったため，１年を通した業務の中間検査として安良遺跡の調査終了後の中間検査となった。

**調査の詳細（調査日誌より）**

【４月】

事前準備開始。営繕用地整地。進入路舗装整備。基準点測量及び着工前測量。

環境整備。調査現場事務所等の仮設工。グリッド杭打設。

【５月】

作業員オリエンテーション。発掘作業開始（９日）。

Ⅰ～Ｌ－28～32区：Ⅱ・Ⅲ層調査。土坑，溝，帯状硬化面，柱穴検出・調査。柱穴14・15内から貝殻が集中して出土。Ｌ－32区Ⅱｂ層上面から炭化種子（モモ核）とともに炭化米塊（905）が出土（26日）。遺物取り上げ（№1001～2441）。

基礎整理作業開始（９日）。遺物水洗・注記。

前迫センター長現地視察（17日・29日）。中原調査課長現地指導（17日・29日）。岩澤係長現地調査（９日・22日・29日）。文化財課監理業務（24日）。

種子島広田遺跡語り部の会（５名）見学（10日）。

相美主任主査（志布志市教委）来跡（11日・29日）。志布志中３年生２名見学（11日）。志布志市地域おこし協力隊２名見学（17日）。黒木所長（国交省曽於出張所）他と営繕用地内の付け替え道路についての協議を行う（22日）。

【６月】

Ｊ～Ｌ－28～32区：Ⅱ・Ⅲ層調査。Ｌ－28・29区：先行トレンチ調査。旧石器時代及び縄文時代早期相当層からは遺構・遺物は確認されず（12～28日）。

柱穴・土坑などの検出・調査。Ｌ-33区・Ⅱｂ層上面から鉄器（945・946）出土。鋤先もしくは鎌の可能性あり（28日）。Ｋ－32区から炭化モミ塊（906）出土（29日）。

遺物取り上げ（№2442～3687）。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

隣接地（迂回路建設地）の試掘調査のため，平文化財主事（文化財課）が来跡。中島専門員（大隅河川国道事務所）も同行。調査の結果，遺構は確認されずに遺物も数点のみの出土であったため，迂回路を建設することとなった。

前迫センター長現地視察（26日）。中村総務課長・塩屋事業推進員現地視察（13日）。岩澤係長現地調査（５日・23日・26日）。堂込所長（埋文センター）監理業務（15日）。文化財課監理業務・試掘調査（12日）。成尾英仁氏（伊集院高等学校教諭）現地指導（23日）。国交省九州整備局用地部長ほか４名現地見学（14日）。

【７月】

Ｊ～Ｋ－31～34区・Ｊ～Ｌ－35・36区：掘り下げ（Ⅱ層）。

竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑，溝，柱穴検出・調査。炭化米塊出土地点の詳細調査。炭化米塊の続きは検出されず（24～26日）。

遺物取り上げ（№3688～4464）。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

前迫センター長現地視察（３日・10日・25日）。中原課長現地指導（11日・20日・21日）。岩澤係長現地調査（３日・５～７日・19日・24～26日）。佐々木由香氏（㈱パレオ・ラボ）現地指導。武安文化財主事（埋文センター）による現地指導（19日）。森脇広氏（鹿児島大学名誉教授）現地指導（10日）。

【８月】

営繕用地内の迂回路完成及び現道部分（市道宮内線）のアスファルト除去終了のため，調査区拡張（Ａ調査区：Ⅰ～Ｍ－26～28区）。表土掘削を行う（１～３日）。Ⅰ～Ｍ－26～28区：掘り下げ（Ⅱ・Ⅲ層）。Ｊ～Ｋ－31～34区・Ｊ～Ｌ－35・36区：掘り下げ（Ⅱ層）。Ⅰ－27・28区：先行トレンチ調査。旧石器時代・縄文時代早期の遺構・遺物は確認されず（28日・29日）。

竪穴建物跡，土坑，溝，柱穴・礫集積検出・調査。礫集積をＪ－31区Ⅱｂ層上面で確認。中世の鍛冶関連遺構の可能性が考えられる。

台風接近に伴う耐風養生実施（４日）。

遺物取り上げ（№4465～5653）。

空中写真撮影（11日）。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

岩澤係長現地調査（１日・23日・24日）。相美主任主査（志布志市教委）来跡（28日・29日）鹿児島大学農学部学生３名見学（28日）。大窪主任主査（志布志市教委）来跡（29日）。

【９月】

Ⅰ～Ｍ－26～28区：掘り下げ（Ⅱ・Ⅲ層）・先行トレンチ調査。旧石器時代・縄文時代早期の遺構・遺物は確認されず。Ａ区調査終了（28日）。Ｊ～Ｋ－31～34区・Ｊ～Ｌ－35・36区：掘り下げ（Ⅱ層）。竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑，溝，地下式横穴墓，帯状硬化面，柱穴検出・調査。

今回調査対象区外で工事予定地である隣接区（Ｌ・Ｍ－38・39区）に，H28年度検出の溝が継続している可能性があるため，文化財課とともに確認調査を行う。その結果，溝状遺構２の延長とみられる溝状遺構を検出（６日）。協議の結果，Ｄ調査区として追加調査することとなり，調査開始（７日）。

炭化木が出土（12日）。武安文化財主事の協力の下，発泡ウレタンにて取り上げを行う（14日）。土師器小皿（ヘラ切り・糸切りが共存）・白磁がまとまって出土。遺構の可能性ありとして調査する（20～22日）。地下式横穴墓は検討の上，安全面等も考慮し，慎重に調査を行うこととする（27日）。埋文センターへの遺物運搬（29日）。遺物取り上げ（№5654～7056）。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

前迫センター長現地視察（13日）。岩澤係長現地調査（６日・12日・19日・21日）。堂込所長（埋文センター）監理業務（６日）。武安文化財主事（埋文センター）による現地指導（14日）。蓬原小学校６年生10名及び引率３名現場見学及び発掘体験（６日）。鴨池中学校２年生１名見学（７日）。安楽校区公民会への現地説明会を２回（午前中及び夕方）実施（21日）。

【10月】

Ｊ～Ｌ－32～34区（Ｂ２調査区）：掘り下げ（Ⅱ～Ⅲ層）。Ｊ～Ｋ－35・36区：先行トレンチ調査を行う。Ⅵ層（縄文時代早期包含層）にて土器１点（３）が出土したことから拡張調査を実施し，集石を確認した。更に掘り下げたが，旧石器時代の遺構・遺物は確認されず。竪穴建物跡，掘立柱建物跡，地下式横穴墓，溝，礫集積，土坑，柱穴検出・調査。台風接近のため耐風養生（20日，27日）。人力掘削作業・測量業務完了（30日）。遺物取り上げ（№7057～8100）。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

前迫センター長現地視察（５日）。岩澤係長現地調査（５日・12日・19日・24日・27日・30日）。上田埋蔵文化財係長・出口指定文化財係長・相美主任主査・大窪主任主査（志布志市教委）による地下式横穴墓の見学（６日）。

【11月】

土工（埋め戻し等）作業完了（７日）。

【12月】

中間検査〈検査員：今村係長，立会者：寺原係長【文化財課】・荒瀬主査，記録者：本髙文化財専門員，進行：岩澤係長〉（７日）。

## 第４節　整理・報告書作成業務

### 整理・報告書作成作業の内容と体制

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は平成30年度から平成31年度に，埋文調査センター第一整理作業所を中心に実施した。なお，平成29年度は，発掘調査の一部にて基礎的整理作業（水洗い・注記）を行った。

作業内容は，以下のとおりである。

### １　整理・報告書作成体制

平成30年度は，整理作業並びに縄文時代と弥生時代に係る報告書作成を行った。平成31年度は，整理作業並びに古墳時代，古代・中世に係る報告書作成を実施した。

なお，整理・報告書作成作業の内容は以下のとおりである。

#### (1) 遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別に実測図の仕分け，注記の確認，トレースへ向けての下図面作成，遺構配置図作成，トレース，レイアウト，原稿執筆。

#### (2) 遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合，遺構図のトレース，報告書掲載用写真選別，報告書掲載用写真撮影，原稿執筆。

イ　土器

注記，分類，接合，実測する土器の選別，実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，土器分布図作成。

ウ　石器

石器と一般礫の仕分け，分類，接合（一部），実測する石器の選別，実測，トレース，レイアウト，石器観察表作成，石器分布図作成。

### ２　作成体制

年度毎の作成体制は以下のとおりである。

**平成30年度**

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省九州地方整備局<br>大隅河川国道事務所 | |
| 作成主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 作成統括 | 公益財団法人　鹿児島県文化振興財団<br>埋蔵文化財調査センター | |
| | センター長 | 前迫　亮一 |
| 作成企画 | 〃　総務課長兼総務係長 | 中村伸一郎 |
| | 〃　調査課長 | 中原　一成 |
| | 〃　調査第一係長 | 今村　敏照 |
| 整理担当 | 〃　文化財専門員 | 上床　真 |
| 事務担当 | 〃　主査 | 小牧　智子 |
| 遺物指導 | 鹿児島大学埋蔵文化財センター | |
| | センター長 | 中村　直子 |

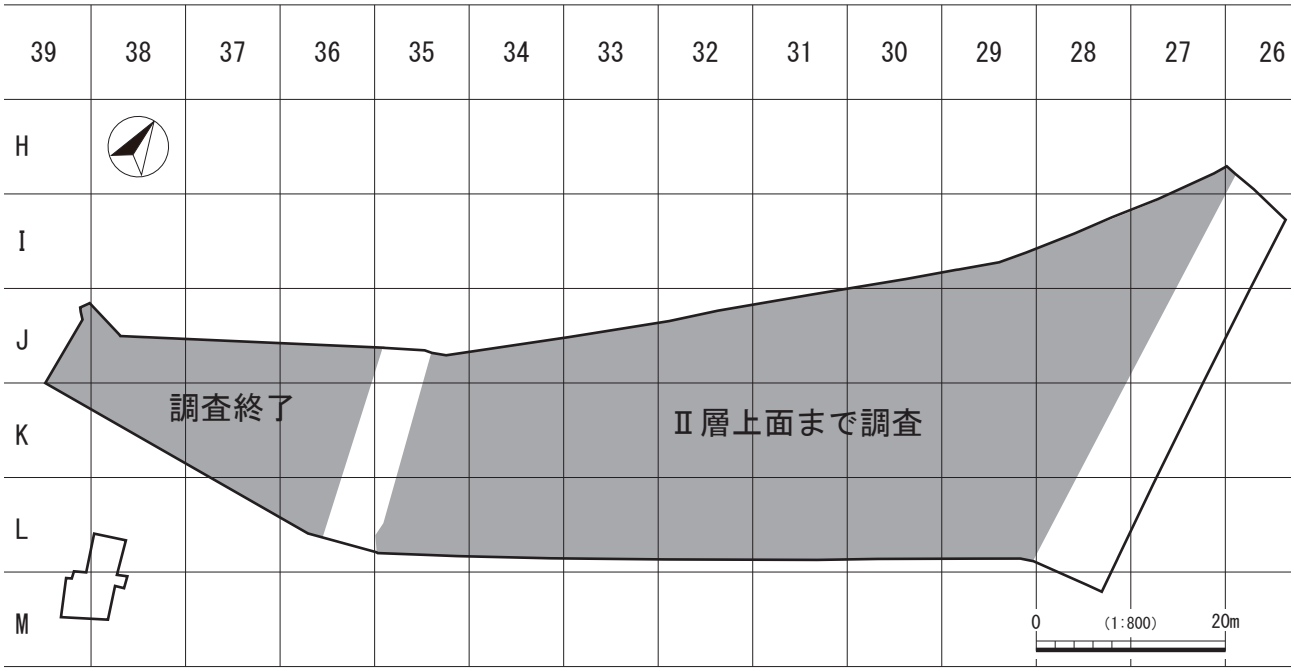
**平成31年度**

| | | |
|---|---|---|
| 事業主体 | 国土交通省九州地方整備局<br>大隅河川国道事務所 | |
| 作成主体 | 鹿児島県教育委員会 | |
| 作成統括 | 公益財団法人　鹿児島県文化振興財団<br>埋蔵文化財調査センター | |
| | センター長 | 中原　一成 |
| 作成企画 | 〃　総務課長兼総務係長 | 中島　治 |
| | 〃　調査課長 | 寺原　徹 |
| | 〃　調査第一係長 | 福永　修一 |
| 整理担当 | 〃　文化財専門員 | 上床　真 |
| | 〃　〃 | 小田　裕人 |
| 事務担当 | 〃　事業推進員 | 川崎　麻衣 |
| 遺物指導 | 鹿児島大学埋蔵文化財センター | |
| | センター長 | 中村　直子 |

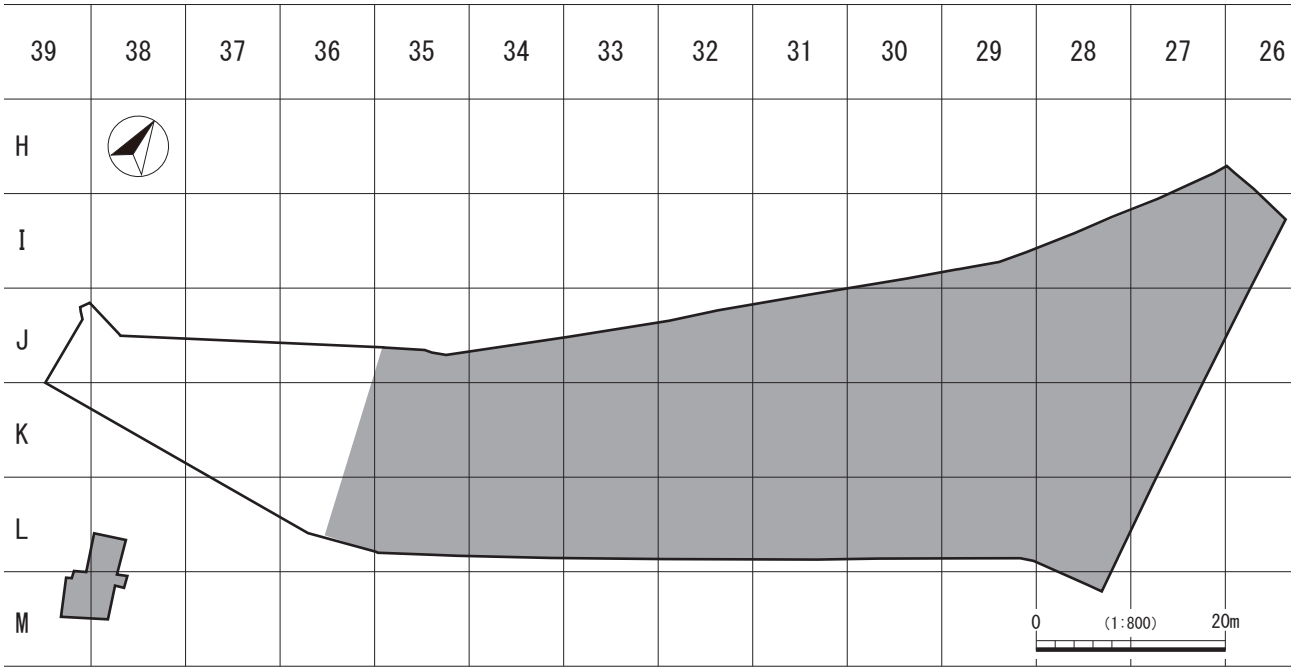
なお，報告書作成指導委員会等は，下記のとおりに実施した。

| | |
|---|---|
| 報告書作成指導委員会 | 令和１年11月26日実施 |
| | 寺原調査課長ほか　７名 |
| 報告書作成検討委員会 | 令和１年11月27日実施 |
| | 中原センター長ほか　６名 |

平成28年度調査範囲




平成29年度調査範囲




第１図　年度別調査範囲

# 第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

## 第１節　地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部に位置し，宮崎県都城市及び串間市と県境をなす。北は曽於市，南西は曽於郡大崎町と接し，南は太平洋に向けて湾口を開く志布志湾に面する。

大隅半島は南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は新生代古第３紀の日南層群によって基盤をなしている。山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス台地となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は，堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析されている。

大隅半島中央部の地形は，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地で形成されている。一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に張り出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は，宮崎県内に位置する鰐塚山（標高1,119m）である。

西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など標高500～600m級の山々と南部の大篦柄岳（標高1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など標高1,000m級の山からなる山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地はともに九州山地の延長上にあり，それらの間は丘陵や台地及び低地帯となっている。海岸線には砂丘が形成される箇所もあり，特に東側の志布志湾岸では幅広い。

志布志市の地形は東側から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し，海岸近くで急崖となり，わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は西側に旧期砂丘・新期砂丘に二分される砂丘海岸が続くのに対し，東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には，日南層群で構成される急峻な山岳地帯がある。

志布志市の西側は入戸火砕流によるシラス台地が広がっており，本地域の主体をなす。このシラス台地は，南流する前川・安楽川・菱田川など大小の河川による浸食作用によって細かく刻まれ，大小の狭長な台地となっている。また，前述の三河川の流域には，高位・中位・低位の３段の段丘が認められる。

安良遺跡は，志布志市志布志町安楽に所在する。志布志湾へ向かって流れる大小の河川は，浸食活動によってシラス台地をいくつかの台地に分断するとともに，河岸段丘を発達させ，段丘上に沖積低地を形成している。特に，前川と安楽川に挟まれた台地は周辺を含めて「志布志台地」と呼ばれる。遺跡はまさにこの志布志台地上の安楽川河口から約１㎞上流左岸（東岸），標高約30ｍの中位段丘上に位置する。周辺には，北側1.2㎞に安楽氏が拠点としたと伝わる安楽城跡が，北側1.5㎞の地点には山宮神社及び中世墓とみられる遺構が発見された山宮古墓が存在する。また，本遺跡と同一事業に伴って調査された遺跡としては，西南西約２㎞の地点には次五遺跡が,西北西約１㎞の地点には安楽小牧B遺跡がある。なお，安楽小牧B遺跡の調査地点から東約250ｍの地点に６世紀前半頃の前方後円墳（全長約40m）と推定される小牧古墳群１号墳があり，志布志市指定史跡となっている。

## 第２節　歴史的環境

安良遺跡の出土遺物としては昭和30～40年頃の道路工事中（周辺住民によると，場所は調査区の西端部付近という）の発見品として完形の大型須恵器甕（６～７世紀頃）があり，志布志市埋蔵文化財センターに展示中である（ただし，経緯・出土地点などの詳細は不明)。

本遺跡が所在する志布志市では，戦後に志布志町の故瀬戸口望氏を中心に分布調査・発掘調査が数多く実施されてきており，主に縄文時代に関して学史上重要な成果を多くあげている。

近年では農道整備に伴う発掘調査が行われ，主として弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。

なお，本地域はかつて日向国に属していた地域であり，本地域の歴史・文化を考えるうえで薩摩・大隅のみでなく，日向地域の影響も考慮する必要がある。

### 旧石器時代

安楽小牧B遺跡では，ナイフ形石器・細石器等が出土している。他には，志布志町の中須Ｂ遺跡・松山町の蕨野Ｂ遺跡・高吉Ｂ遺跡からナイフ形石器・三稜尖頭器（角錐状石器）が，志布志町の道重遺跡・有明町の和田上遺跡から細石器がそれぞれ出土している。

### 縄文時代

特に志布志町において，瀬戸口氏・河口貞徳氏らによる調査によって多数の遺跡が発見されている。

草創期では，志布志町の東黒土田遺跡が著名である。舟形配石炉・貯蔵穴とともに隆帯文土器が出土している。この中で，貯蔵穴内から出土した炭化種実（堅果類）は遺構内出土のものとしては日本最古級とされている。鎌

石橋遺跡でも隆帯文土器が出土している。安楽小牧B遺跡では，縄文時代草創期相当層から薄手の無文土器が出土しており，上記の遺跡との関連なども含め，注目される。

早期では，前半期（貝殻文円筒形土器様式期）の集石・連穴土坑が多数発見された志布志町の倉園Ｂ遺跡，塞ノ神Ａ式の壺形土器などの注目される遺物が出土した志布志町の夏井土光遺跡，早期前半（石坂・下剥峯・桑ノ丸の時期）の集石・土坑が検出された次五遺跡，前平式・石坂式・押型文・手向山式・平栫式・塞ノ神Ｂ式・苦浜式・小山タイプなどの土器とともに集石141基・土坑８基・連穴土坑４基が検出された高吉Ｂ遺跡，早期後半（塞ノ神Ｂ式期）の集石・土坑などが検出された安楽小牧B遺跡などがある。

前期では，深浦式土器が出土した高吉Ｂ遺跡がある。

中期では，南福寺式土器・阿高系土器が多く出土した中原遺跡，大平式土器・阿高系土器が多く出土した宇都遺跡がある。

後期では,指宿式土器・磨消縄文系土器・福田ＫⅡ式土器・一湊松山式土器・市来式土器が出土した中原遺跡，落とし穴状遺構や中岳Ⅱ式土器が出土した船迫遺跡と高吉Ｂ遺跡などがある。

晩期では，干河原式土器・刻目突帯文土器が出土した山角Ｂ・炭床遺跡がある。

**弥生時代**

高吉Ｂ遺跡では，竪穴住居跡７軒・掘立柱建物跡５棟・土坑７基・側壁に抉り込みを持つ土坑１基が山ノ口Ⅱ式土器を伴って検出されている。特に５号竪穴住居跡からは，瀬戸内系の凹線文土器が検出されており注目される。また，側壁に抉り込みを持つ土坑は墓の可能性も指摘されており，今後の類例の増加が期待される。

以上のほかにも，柳町遺跡・長田遺跡・前谷Ｂ遺跡・安良遺跡などで山ノ口Ⅱ式土器を伴う竪穴住居跡などが検出されており，当該時期の遺跡の豊富さが垣間見える。

当地域では，山ノ口Ⅱ式土器と中溝式土器の折衷様式の土器がみられるのが特徴である。当地域は，かつて日向国に属していたことから，大隅系の文化と日向系の文化の融合する地域であったことの傍証となるのではないかとされている。

**古墳時代**

当該地域では前方後円墳としては従来本県最古とされてきたものと，６世紀代としては最南端とされるものの両者が存在する。従来本県最古とされてきた前方後円墳は，飯盛山古墳である。全長80ｍで，壺形埴輪の特徴から４世紀末～５世紀初頭とされる。ただし，近年では５世紀前半代とする見解もあり，必ずしも県内最古といえないということも指摘されている（橋本2010など）。６世紀代としては最南端の部類とされる前方後円墳は，小牧１号古墳である。全長40ｍで，周辺から６世紀前半頃の須恵器が発見されている。ただし，発掘調査は行われていない。

ほかには，春日堀遺跡・安良遺跡からは地下式横穴墓が検出されている。いずれも副葬品などは全く出土していないが，６世紀後半～７世紀前半頃の時期が想定されている。六月坂横穴墓からは７世紀代の須恵器が出土しているが，追加調査の結果「横穴といえる確証はない」とされており，今後の課題となっている。

集落遺跡として，仕明遺跡では中津野～東原段階，屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式段階，長田遺跡・安良遺跡・稲荷迫遺跡では笹貫式新段階，春日堀遺跡では東原段階と笹貫式新段階の竪穴住居跡などが発見されている。以前は，当地域は古墳時代の集落遺跡は少ないとされてきたが，ここ数年の成果はめざましいものがあり，詳細な検討が待たれる。

**古代**

当地域では，本県では類例の少ない７世紀後半～８世紀の資料が数多くみられる。これは，当地域が，日向国であったとされていることが関係する可能性がある。

上苑Ａ遺跡・仕明遺跡・安良遺跡などで７世紀後半～８世紀の資料が多く出土しており，竪穴住居跡も検出されている。稲荷迫遺跡では，９世紀代とされるふいごの羽口のほぼ完形品が出土している。さらに，当地域では焼塩土器の出土が顕著であり，薩摩地域よりもはるかに多く出土している。課題としては，薩摩国が塩の貢納国であるのに対して，日向・大隅の両国は塩の貢納国ではないにも関わらず，焼塩土器が多く出土するという事実であり，検討を要する。

当地域に於いては，上記のように特徴的な資料が発見される反面，掘立柱建物がほとんど検出されておらず，官衙などの律令制に関する実態は不明である。また９・10世紀の様相も資料が少ないため明らかでない。

**中世**

当該時期の遺跡として代表的な遺跡としては，志布志城跡（国指定史跡）がまずあげられる。志布志城は，南九州型城郭の典型的な城であり，志布志小学校の裏山の「内城」，その西側の山にある「松尾城」，志布志中学校前の「高城」と「新城」という4つの城の総称である。特に，「内城」は南北0.6㎞・東西0.3㎞で，6つの廓からなり，その間は空堀で遮る構造となっている。築城時期は明らかではないが，建武３（1336）年に「救仁院志布志城」にあった肝付兼重が重久氏に敗れたという記録が初見であり，南北朝には存在したことが確認される。山宮神社では，明治26（1893）年に大楠倒壊の際，その根元にあった石室様の施設の中から様々なもの（和鏡・太刀・白磁壺・青白磁合子など）が発見されている。この際に，状況を詳細に描いた記録画が作成され，警察署に

提出されている。この記録と遺物から，石室は陶磁器を伴う石組墓で，白磁壺の内底部には骨片が付着することから，再葬された火葬墓（12世紀後半～13世紀前半頃）の可能性がある。当地域における重要な資料である。安楽城跡は，地頭弁済使であった安楽平九郎為成が文治５年（1189）以前に拠点としていた地であると系図に伝わる。安良遺跡とも関連する可能性がある。宝満製鉄遺跡では，県内では類例の少ない，中世の製鉄関連遺物が発見された。遺構は検出されていないものの，出土した炉壁の接合によって炉の形態が復元され，この地域においては当該時期に操業不安定な技術による竪型炉系の炉が使用されていたことが推測されている。

**近世**

現在の志布志小学校には地頭仮屋が置かれ，その周辺一帯は「麓」（薩摩藩の外城制度において郷士が居住していた集落。城下町的機能を有する）が形成されていた。その他として，前川河口に面して津口番所が置かれ，藩米等の集積・積出の見張り・管理などを行っていた。

発掘調査成果としては，近世とみられる帯状硬化面が船迫遺跡・見帰遺跡・安楽小牧B遺跡などで検出されている。また，船迫遺跡における帯状硬化面の周辺からは，本県では初の出土例となる二分金も出土しており，注目されている。

海の玄関口としては，近世には津口番所が置かれた志布志港（資料上の初見は正和５【1316】年の「志布志津」）がある。この志布志港は，平成８(1996)年に九州で唯一の中核国際港湾に位置づけられ，平成23（2011）年５月には「国際バルク戦略港湾」に指定された。

**【参考・引用文献】**

志布志市教育委員会2012『安良遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）
志布志市教育委員会2013『（伝）六月坂横穴墓』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
志布志市教育委員会2014『山角Ｂ・炭床遺跡 付編 宇都遺跡(遺物編)』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
志布志市教育委員会2018『志布志城跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
志布志市教育委員会2018『次五遺跡』志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
志布志町編1972・1984『志布志町誌』上・下巻
志布志町教育委員会1985『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）
志布志町教育委員会2001『宮脇遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(28)
志布志町教育委員会2003『宝満寺・宝満製鉄遺跡・牟田遺跡・弓場ヶ尾遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(33)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2012『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
鹿児島県立埋蔵文化財センター2014『船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(180)
橋本達也2010「九州南部の首長墓系譜と首長墓以外の墓制」『第13回九州前方後円墳研究会発表要旨表』
大矢雅彦1965「志布志（1：50,000地形説明書）」経済企画庁総合開発局国土調査課編『土地分類基本調査　地形・表層地質・土じょう　志布志』
米谷静二1971「地形分類」鹿児島県企画部開発課編『志布志湾地域開発地域　土地分類基本調査　鹿屋・志布志』

**第１表　周辺遺跡一覧表（1）**

| No. | 遺跡名 | 所　在　地 | 遺跡の時代 | 地形 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 渡迫遺跡 | 志布志市志布志町安楽字渡迫 | 古代 | 台地 | |
| 2 | 中原（曲瀬）遺跡 | 志布志市志布志町安楽字中原 | 旧石器時代，縄文早期，縄文中期，縄文後期 | 台地 | |
| 3 | 小瀬A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字中原小瀬・西迫 | 縄文後期 | 台地 | |
| 4 | 小瀬B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字小瀬・中原 | 縄文時代，縄文後期，弥生時代 | 台地 | |
| 5 | 早馬A遺跡 | 志布志市有明町野井倉字早馬 | 弥生時代 | 台地 | |
| 6 | 早馬C遺跡 | 志布志市有明町野井倉字早馬 | 弥生時代 | 台地 | |
| 7 | 早馬B遺跡 | 志布志市有明町野井倉字早馬 | 弥生時代 | 台地 | |
| 8 | 吉原遺跡 | 志布志市有明町野井倉字吉原 | 弥生時代，古代 | 台地 | |
| 9 | 中原遺跡 | 志布志市有明町野井倉字中原，前原 | 弥生時代，古墳時代 | 台地 | S.59調査 |
| 10 | 前原遺跡 | 志布志市有明町野井倉字前原 | 弥生時代 | 台地 | |
| 11 | 金ヶ迫B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字金ヶ迫 | 弥生時代，古墳時代，古代 | 台地 | |
| 12 | 七本松B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字七本松 | 弥生時代 | 台地 | |
| 13 | 大久保C遺跡 | 志布志市志布志町安楽字大久保 | 弥生時代 | 台地 | |
| 14 | 上原遺跡 | 志布志市志布志町安楽字上原 | 弥生時代 | 台地 | |
| 15 | 山角B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字山角，炭床 | 縄文後期，縄文晩期，弥生時代，古墳時代 | 台地 | H.03調査 |
| 16 | 山角A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字山角 | 縄文後期 | 台地 | |
| 17 | 上重遺跡 | 志布志市志布志町安楽字上重 | 縄文後期 | 台地 | |
| 18 | 炭床遺跡 | 志布志市志布志町安楽字炭床 | 縄文後期，縄文晩期，弥生時代，古墳時代 | 台地 | H.03調査 |
| 19 | 大久保A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字大久保 | 縄文時代,弥生時代 | 丘陵 | |
| 20 | 大久保B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字大久保・七本松 | 弥生時代 | 台地 | |

## 第１表　周辺遺跡一覧表（2）

| No. | 遺跡名 | 所　在　地 | 遺跡の時代 | 地形 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 七本松A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字七本松 | 弥生時代 | 台地 | |
| 22 | 高牧遺跡 | 志布志市志布志町安楽字高牧 | 弥生時代 | 台地 | |
| 23 | 金ヶ迫A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字金ヶ迫・高牧 | 弥生時代 | 丘陵 | |
| 24 | 中次B遺跡 | 志布志市有明町野井倉字中次 | 弥生時代 | 台地 | |
| 25 | 中次A遺跡 | 志布志市有明町野井倉字中次 | 弥生時代 | 台地 | |
| 26 | 二重掘B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字二重堀 | 弥生時代, 古代 | 台地 | |
| 27 | 二重堀A遺跡 | 志布志市志布志町安楽字二重堀 | 弥生時代 | 台地 | |
| 28 | 東遺跡 | 志布志市有明町野井倉字東, 下段 | 弥生時代 | 台地 | |
| 29 | 下段C遺跡 | 志布志市有明町野井倉字下段, 東 | 縄文中期, 縄文晩期, 弥生時代 | 台地 | |
| 30 | 高吉遺跡 | 志布志市有明町野井倉字高吉, 前田, 下段 | 縄文中期, 縄文晩期, 弥生時代 | 台地 | |
| 31 | 下段A遺跡 | 志布志市有明町野井倉字下段 | 古代 | 台地 | |
| 32 | 上苑B遺跡 | 志布志市有明町野井倉字上苑, 下段, 上苑下 | 古代 | 台地 | |
| 33 | 横堀遺跡 | 志布志市有明町野井倉字横堀, 下段 | 縄文早期, 弥生時代, 古墳時代, 古代 | 台地 | |
| 34 | 上苑上遺跡 | 志布志市有明町野井倉字上苑上 | 古代 | 台地 | |
| 35 | 甚堀遺跡 | 志布志市有明町野井倉字甚堀, 上苑上 | 弥生時代 | 台地 | |
| 36 | 大代遺跡 | 志布志市有明町野井倉字大代, 鎌迫, 大森, 平 | 縄文時代, 古代 | 台地 | |
| 37 | 鎌迫遺跡 | 志布志市有明町野井倉字鎌迫, 上苑上 | 弥生時代 | 台地 | |
| 38 | 坂上遺跡 | 志布志市有明町野井倉字坂上, 大代 | 古代 | 台地 | |
| 39 | 塩入遺跡 | 志布志市有明町野井倉字塩入, 押山, 山添, 川原 | 弥生時代, 古墳時代 | 台地 | |
| 40 | 松原遺跡 | 志布志市有明町野井倉字松原, 上ノ浜 | 弥生中期, 弥生後期～終末 | 海岸 | |
| 41 | 禅宗仏心院跡 | 志布志市有明町野井倉字通山 | 近世 | 平地 | |
| 42 | 鳥井下遺跡 | 志布志市志布志町安楽字鳥井下 | 縄文早期, 縄文前期 | 台地 | |
| 43 | 別府遺跡 | 志布志市志布志町安楽字別府 | 縄文早期, 弥生中期 | 台地 | S.53調査 |
| 44 | 別府上遺跡 | 志布志市志布志町安楽字別府上 | 古代（奈良, 平安） | 台地 | |
| 45 | 船磯遺跡 | 志布志市志布志町安楽字船磯・水ヶ迫 | 縄文前期, 縄文中期 | 海岸 | |
| 46 | 水ヶ迫横穴墓 | 志布志市志布志町志布志字水ヶ迫 | 古代（奈良） | 丘陵 | |
| 47 | 六月坂横穴墓 | 志布志市志布志町志布志字水ヶ迫 | 古代（奈良） | 丘陵 | |
| 48 | 大西遺跡 | 志布志市志布志町志布志字大西 | 古代（奈良, 平安） | 海岸 | |
| 49 | 外堀遺跡 | 志布志市志布志町志布志字外堀 | 縄文早期 | 台地 | |
| 50 | 湯田堀遺跡 | 志布志市志布志町帖字湯田堀 | 縄文時代, 古墳時代, 中世 | 台地 | |
| 51 | 高吉B遺跡 | 志布志市志布志町安楽字宇都上・茶馬場・雨堤 | 弥生時代 | 台地 | H.22調査 |
| 52 | 大渡Ｂ遺跡 | 志布志市志布志町安楽字大渡 | 縄文早期, 縄文後期 | 丘陵 | |
| 53 | 大渡遺跡 | 志布志市志布志町安楽字大渡 | 縄文時代, 弥生時代 | 台地 | |
| 54 | 船迫遺跡 | 志布志市志布町安楽字船迫・大渡 | 縄文早期, 縄文後期, 弥生中期, 古墳時代 | 台地 | H.22調査 |
| 55 | 見帰遺跡 | 志布志市志布志町志布志字見帰 | 縄文早期, 縄文後期 | 台地 | H.28調査 |
| 56 | 百堂穴遺跡 | 志布志市志布志町安楽字岩戸 | 縄文前期 | 洞穴 | |
| 57 | 尖堀遺跡 | 志布志市志布志町安楽宁尖堀 | 古墳時代, 古代, 中世 | 台地 | |
| 58 | 宮之上遺跡 | 志布志市志布志町安楽字宮之上 | 古代 | 台地 | |
| 59 | 安楽城跡 | 志布志市志布志町安楽字前原 | 中世（鎌倉） | 台地 | |
| 60 | 山宮古墳 | 志布志市志布志町安楽字宮下 | 中世 | 台地 | M.26発見 |
| 61 | 山宮神社跡 | 志布志市志布志町安楽字宮下 | 古代（奈良） | 台地 | |
| 62 | 宮内遺跡 | 志布志市志布志町安楽字宮内・下原 | 弥生時代, 古代（奈良, 平安） | 台地 | |
| 63 | 八ヶ代遺跡 | 志布志市志布志町安楽字八ヶ代 | 弥生時代, 古墳時代 | 台地 | |
| 64 | 権現原遺跡 | 志布志市志布志町安楽字権現原 | 弥生時代 | 台地 | |
| 65 | 次五遺跡 | 志布志市有明町野井倉字次五, 横堀 | 古代 | 台地 | H.26,27調査 |
| 66 | 安楽小牧遺跡 | 志布志市志布志町安楽字小牧 | 縄文早期 | 台地 | |
| 67 | 安楽小牧Ｂ遺跡 | 志布志市志布志町安楽字小牧 | 旧石器時代, 縄文早期, 中世, 近世 | 台地 | H.27,28調査　H.31遺跡名変更 |
| 68 | 小牧古墳群 | 志布志市志布志町安楽5973-10字小牧 | 古墳時代 | 台地 | |
| 69 | 水神松遺跡 | 志布志市志布志町安楽字水神松・三郎丸・小井出手 | 古墳時代 | 平地 | |
| 70 | 宮脇遺跡 | 志布志市志布志町安楽1106-1字宮脇・岩下 | 縄文中期, 縄文後期, 縄文晩期, 古墳時代, 古代 | 台地 | H.12調査 |
| 71 | 安良遺跡 | 志布志市志布志町安楽字勢園 | 縄文早期, 縄文後期, 弥生時代, 古墳時代, 古代～近世 | 台地 | H.23,28,29調査 |




第２図　周辺遺跡位置図

## 第３表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には第３表に示すとおり23か所の遺跡が存在する。ここでは遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書を参照していただきたい。

### 第３表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

| 番号 | 遺跡名 | 所在地・立地 | 発掘調査 | 整理･報告書作成作業 | 遺跡の概要 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 時代・時期 | 主な遺構 | 主な遺物 |
| 1 | 見帰 | 志布志市<br>志布志町<br>志布志<br>台地上<br>標高約70m | H28年度<br>終了<br><br>H25・30年度に埋文センター調査（隣接地） | H30年度<br>刊行<br>R元年度<br>※埋文センター作業中 | 旧石器 | — | ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，ハンマーストーン |
| | | | | | 縄文早期 | 土坑（H25年度埋文センター調査のみ） | 石坂式，押型文，下剥峯式，石鏃，磨石，石皿 |
| | | | | | 縄文前・中期 | 落とし穴，土坑 | — |
| | | | | | 縄文後・晩期 | — | 磨消縄文，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，磨石，敲石 |
| | | 縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は，ナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は，土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が２基検出されている。溝状遺構1号は，時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。 | | | | | |
| 2 | 宮ノ上 | 志布志市<br>志布志町<br>安楽<br>台地上<br>標高約45m | 文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。 | | | | |
| 3 | 安良 | 志布志市<br>志布志町<br>安楽<br>台地上<br>標高約30m | H28年度<br>H29年度<br>終了 | H30年度<br>R元年度<br>刊行 | 縄文早・後期 | 土坑，集石 | 小牧３A，西平式，丸尾式，丸玉 |
| | | | | | 弥生中期 | 土坑 | 山ノ口Ⅱ式 |
| | | | | | 古墳時代 | 地下式横穴墓，溝状遺構 | 笹貫式，鉄鏃，鉄鐸，須恵器 |
| | | | | | 古代～中世 | 帯状硬化面，掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，柱穴他 | 土師器，須恵器，青磁，白磁，瓦器，滑石製石鍋，炭化米塊 |
| | | | | | 近　　世 | 土坑，柱穴 | 肥前系陶器，薩摩焼 |
| | | 古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。 | | | | | |
| 4 | 安楽小牧B | 志布志市<br>志布志町<br>安楽<br>台地上<br>標高約50m | H27年度<br>H28年度<br>終了 | H30年度<br>R元年度<br>刊行 | 旧石器 | — | ナイフ形石器，細石刃核，細石刃 |
| | | | | | 縄文草創期 | 集石 | 土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿 |
| | | | | | 縄文早期 | 集石 | 吉田式，妙見･天道ヶ尾式，塞ノ神A式，塞ノ神B式，苦浜式，耳栓，石鏃，磨石，異形石器 |
| | | | | | 弥　　生 | — | 弥生土器，石包丁 |
| | | 起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器等が出土している。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。 | | | | | |
| 5 | 次五 | 志布志市<br>有明町<br>野井倉<br>台地縁辺部標高約50m | H26年度<br>H27年度<br>終了<br>※志布志市教育委員会調査 | H29年度<br>刊行<br>※志布志市教育委員会刊行 | 旧石器 | — | 畦原型細石刃核，細石刃，剥片 |
| | | | | | 縄文早期 | 落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積 | 前平式，加栗山式，吉田式，札ノ元Ⅶ類，石坂式，中原Ⅴ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神B式，打製･磨製石鏃，石錘，局部磨製石斧 |
| | | 旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。 | | | | | |
| 6 | 大代 | 志布志市<br>有明町<br>野井倉<br>台地縁辺部<br>標高約40m | 文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。 | | | | |
| 7 | 木森 | 志布志市<br>有明町<br>野井倉<br>河岸段丘<br>標高約30m | H26年度<br>H30年度<br>終了 | R年度以降 | 縄文早期 | 竪穴住居状遺構，集石，土器集中，連穴土坑，土坑 | 前平式，加栗山式，吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，石鏃，石匙，磨石，敲石 |
| | | | | | 縄文中・後期 | — | 春日式，凹線文系土器 |
| | | | | | 古墳～古代 | — | 須恵器 |
| | | | | | 中　　世 | 掘立柱建物跡，杭列状遺構 | 須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓 |
| | | 縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の竪穴住居状遺構，連穴土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見され，遺物では縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石の他，中・後期の土器，古墳～古代の須恵器，土師器，中世の青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。 | | | | | |
| 8 | 春日堀 | 志布志市<br>有明町<br>蓬原<br>河岸段丘<br>標高約30m | H26年度<br>H27年度<br>H28年度<br>H29年度<br>H30年度<br>終了 | H30年度<br>R元年度<br>刊行 | 縄文早期 | 竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴 | 前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，塞ノ神式，打製石鏃，打製･環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫 |
| | | | | | 弥　　生 | 竪穴住居跡 | 山ノ口式 |
| | | | | | 古墳～飛鳥 | 竪穴住居跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，棒状礫集積遺構 | 甕（東原式，笹貫式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片 |
| | | | | | 古代～中世 | 竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，杭列跡，焼土跡 | 土師器 |
| | | | | | 近　　世 | 土坑，溝状遺構，古道，遺物集中 | 陶器，磁器 |
| | | 縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古墳･飛鳥味代の竪穴住居跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器等をはじめ，弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。 | | | | | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地・立地 | 発掘調査 | 整理･報告書作成作業 | 遺跡の概要 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 時代・時期 | 主な遺構 | 主な遺物 |
| 9 | 稲荷堀 | 曽於郡<br>大崎町<br>菱田<br>台地上<br>標高約50m | 文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。 | | | | |
| 10 | 平良上C | 曽於郡<br>大崎町<br>井俣<br>台地上<br>標高約40m | H26年度<br>H27年度<br>終了 | H28年度<br>刊行 | 縄文早期 | 竪穴住居跡，連穴土坑，集石，埋設土器，チップ集中 | 吉田式，石坂式，下剥峯式，押型文，平椿式，石鏃，石匙，打製･磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核，フレーク，チップ |
| | | 縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。 | | | | | |
| 11 | 宮脇 | 曽於郡<br>大崎町<br>井俣<br>台地上<br>標高約40m | H27年度<br>H28年度<br>終了 | H30年度<br>R元年度<br>刊行 | 旧石器 | 礫群 | ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石器，石核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，フレーク，チップ，磨石，叩石 |
| | | | | | 縄文早期 | 集石，土坑，土器集中 | 加栗山式，小牧３Ａ，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平椿式，塞ノ神式，打製石鏃，磨石，チップ |
| | | | | | 近世 | — | 薩摩焼，寛永通宝 |
| | | 旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。 | | | | | |
| 12 | 堂園堀 | 曽於郡<br>大崎町<br>井俣<br>台地上<br>標高約45m | 文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。 | | | | |
| 13 | 荒園 | 曽於郡<br>大崎町<br>仮宿<br>台地縁辺部<br>標高約50m | H24年度<br>H25年度<br>H26年度<br>H30年度<br>終了<br><br>※H24年度は埋文センター調査 | H28年度<br>（第１地点）<br>刊行<br>H30年度<br>R元年度<br>（第２地点）<br>（第３地点）<br>作業中 | 旧石器 | — | 畦原型細石核・細石刃，敲石，チップ |
| | | | | | 縄文早期 | 集石，土坑，剥片・チップ集中 | 前平式，吉田式，加栗山式，下剥峯式，押型文，手向山式，平椿式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿，フレーク，チップ |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴住居跡，土坑 | 吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石 |
| | | | | | 古墳 | 竪穴住居跡 | 成川式土器，須恵器，砥石 |
| | | | | | 古代以前 | 片薬研堀溝状遺構 | — |
| | | | | | 中世 | 掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面 | 土師器，東播系須恵器，備前焼，陶器，青磁，華南三彩 |
| | | | | | 近世以降 | 帯状硬化面 | 薩摩焼 |
| | | 縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。 | | | | | |
| 14 | 永吉天神段 | 曽於郡<br>大崎町<br>永吉<br>台地縁辺及び河岸段丘<br>標高30～50m | H24年度<br>H25年度<br>H26年度<br>H27年度<br>終了<br><br>※H24年度は埋文センター調査 | H27年度<br>（第１地点）<br>刊行<br>H28年度<br>（第２地点１）<br>刊行<br>H29年度<br>（第２地点２）<br>刊行<br>H30年度<br>（第３地点）<br>刊行<br>R元年度<br>（第２地点３）<br>刊行 | 旧石器 | 礫群，ブロック | 尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片 |
| | | | | | 縄文早期 | 集石，土器埋設遺構 | 前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平椿式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿，フレーク，チップ |
| | | | | | 縄文前期 | — | 曽畑式 |
| | | | | | 縄文後期 | — | 岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式 |
| | | | | | 縄文晩期 | 竪穴住居跡，落とし穴，土坑 | 入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧 |
| | | | | | 弥生 | 竪穴住居跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑 | 入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉 |
| | | | | | 古墳 | 竪穴住居跡，土坑 | 成川式，須恵器 |
| | | | | | 古代 | 掘立柱建物跡，土坑 | 須恵器，土師器 |
| | | | | | 中世 | 掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑 | 白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭 |
| | | | | | 近世 | 近世墓 | 薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼 |
| | | | | | 時期不明 | 掘立柱建物跡 | — |
| | | 旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。 | | | | | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地・立地 | 発掘調査 | 整理・報告書作成作業 | 遺跡の概要 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 時代・時期 | 主な遺構 | 主な遺物 |
| 15 | 細山田段 | 曽於郡<br>大崎町<br>西持留<br>台地上<br>標高約95m | H25年度<br>H26年度<br>H27年度<br>終了 | H26年度<br>H28年度<br>H30年度<br>R元年度<br>作業中 | 縄文早期 | 集石，埋設土器 | 吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，右京西式，打製石鏃，石匙，磨・敲石，石核，フレーク，チップ |
| | | | | | 縄文前期～中期初頭 | 土坑，土器集中 | 曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，フレーク，チップ |
| | | | | | 縄文後期 | 土坑 | 辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨・敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿，フレーク，チップ |
| | | | | | 縄文晩期 | — | 入佐式，黒川式 |
| | | | | | 弥生前期 | — | 高橋式 |
| | | | | | 古　墳 | — | 成川式 |
| | | | | | 近世以降 | 溝状遺構・古道 | — |
| | | 縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。※遺跡ＧＩＳの変更に伴い，遺跡名を「細山田段遺跡」に変更。 | | | | | |
| 16 | 小牧 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地上<br>標高約60m | H27年度<br>H28年度<br>H29年度<br>終了 | H30年度<br>R元年度<br>刊行 | 旧石器 | — | 細石刃，フレーク，チップ |
| | | | | | 縄文早期 | 竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石 | 前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，平栫式，条痕文，石匙，磨石，石皿 |
| | | | | | 縄文前期 | — | 曽畑式，深浦式，磨石 |
| | | | | | 縄文後期 | 竪穴住居跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑 | 阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠 |
| | | | | | 縄文晩期 | — | 入佐式，黒川式，刻目突帯文 |
| | | | | | 弥生中期 | — | 入来式，山ノ口式，砥石 |
| | | | | | 古　墳 | 竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑 | 東原式，辻堂原式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品 |
| | | | | | 古　代 | 掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑 | 土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車 |
| | | | | | 中世以降 | 掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列 | 土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，鞴羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼 |
| | | 旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形住居跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。 | | | | | |
| 17 | 川久保 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>河岸段丘<br>標高30～50m | H26年度<br>H27年度<br>H28年度<br>H29年度<br>H30年度<br>終了 | H27年度<br>H29年度<br>H30年度<br>（C地点）<br>刊行<br>R元年度<br>（A地点）<br>作業中<br>（B・D地点）<br>刊行 | 旧石器 | 礫群 | 剥片尖頭器，ナイフ形石器，畝原型細石核 |
| | | | | | 縄文早期 | 竪穴住居跡，集石，土坑 | 岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿 |
| | | | | | 縄文前期 | 集石 | 曽畑式，磨製石斧 |
| | | | | | 縄文後期 | — | 中岳式 |
| | | | | | 縄文晩期 | 集石 | 入佐式，黒川式，刻目突帯文 |
| | | | | | 弥生前期 | — | 高橋式 |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴建物跡 | 下城式，山ノ口式 |
| | | | | | 古　墳 | 竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，溝状遺構，道跡 | 成川式土器，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉 |
| | | | | | 古　代 | 掘立柱建物跡 | 須恵器，土師器 |
| | | | | | 中　世 | 掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡 | 青磁，白磁，瓦器椀 |
| | | 旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。 | | | | | |
| 18 | 町田堀 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地縁辺部<br>標高約90m | H25年度<br>H26年度<br>H27年度<br>H28年度<br>終了 | H27年度<br>(1) 刊行<br>H29年度<br>(2) 刊行 | 縄文早期 | 集石 | 下剥峯式，平栫式 |
| | | | | | 縄文後期 | 竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構 | 中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製・磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉 |
| | | | | | 縄文晩期 | — | 黒川式土器，刻目突帯文 |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴住居跡 | 入佐式，山ノ口式土器，土製勾玉 |
| | | | | | 古　墳 | 竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構 | 成川式土器，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器 |
| | | | | | 古　代 | 焼土跡，道跡 | 土師器，須恵器 |
| | | 縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，檜原文を施す完全な石刀が出土している。 | | | | | |

| 番号 | 遺跡名 | 所在地・立地 | 発掘調査 | 整理･報告書作成作業 | 遺跡の概要 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 時代・時期 | 主な遺構 | 主な遺物 |
| 19 | 牧山 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地縁辺部<br>標高約110m | H25年度<br>H26年度<br>H27年度<br>H28年度<br>H29年度<br>終了 | H28年度<br>（A地点１）<br>刊行<br>H30年度<br>R元年度<br>（A地点２，<br>B，C，D地点）<br>刊行 | 旧石器 | — | 剥片 |
| | | | | | 縄文早期 | 竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石構，石器製作跡 | 吉田式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ |
| | | | | | 縄文前期 | 埋設土器（轟式） | 轟式，条痕文 |
| | | | | | 縄文後期 | 土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部 | 市来式，丸尾式，西平式，太郎迫式，三万田式，中岳Ⅱ式，打製･磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠 |
| | | | | | 縄文晩期 | 土坑 | 入佐式，刻目突帯文 |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑 | 山ノ口式，打製･磨製石斧，磨製･打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿 |
| | | | | | 中・近世 | 古道跡 | 青磁，白磁，薩摩焼 |
| | | 旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。 | | | | | |
| 20 | 田原迫ノ上 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地縁辺部<br>標高約120m | H22年度<br>H23年度<br>H24年度<br>H25年度<br>H26年度<br>H28年度<br>H30年度<br>終了<br>※H22～24は埋文センター調査 | H26年度<br>(1) 刊行<br>H27年度<br>H28年度<br>(2) 刊行<br>R元年度<br>(3) 作業中<br>※H23～24は埋文センター作業 | 縄文早期 | 竪穴住居跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡 | 前平式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧 |
| | | | | | 縄文後期 | 落とし穴，礫集積 | 指宿式，市来式，石鏃，磨石 |
| | | | | | 縄文晩期 | — | 黒川式 |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴住居跡，大型建物跡，掘立柱建物跡,円形･方形周溝 | 山ノ口式･中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石 |
| | | | | | 古墳時代以降 | 溝状遺構，畝状遺構 | 土師器碗，薩摩焼 |
| | | 縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。 | | | | | |
| 21 | 立小野堀 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地縁辺部<br>標高約125m | H22年度<br>H23年度<br>H24年度<br>H26年度<br>H30年度<br>終了<br>※H22～24は埋文センター調査 | H24年度<br>H25年度<br>H26年度<br>H27年度<br>H28年度<br>(1) 刊行<br>R２年度以降<br>(2) 作業<br>※H24は埋文センター作業 | 縄文前･中期 | — | 深浦式 |
| | | | | | 縄文後期 | — | 指宿式，市来式，西平式 |
| | | | | | 弥生中期 | — | 山ノ口式 |
| | | | | | 古墳 | 地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構 | 成川式，須恵器，鉄器（刀･剣･槍･鉾･刀子･鏃等），青銅鈴，人骨 |
| | | | | | 時期不詳 | 溝状遺構 | — |
| | | 縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である | | | | | |
| 22 | 十三塚 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地上<br>標高約140m | H20年度<br>H21年度<br>終了<br>※埋文センター調査 | H22年度<br>刊行<br>※埋文センター作業 | 縄文早期 | — | 石坂式 |
| | | | | | 縄文後期 | — | 凹線文，市来式，三万田式 |
| | | | | | 縄文晩期 | — | 黒川式 |
| | | | | | 弥生中期 | 竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑 | 山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃 |
| | | | | | 古墳 | — | 成川式 |
| | | | | | 中世～近世 | 道路状遺構 | 洪武通寶（加治木銭） |
| | | 弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴住居跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。 | | | | | |
| 23 | 石縊 | 鹿屋市<br>串良町<br>細山田<br>台地上<br>標高約140m | H20年度<br>H21年度<br>終了<br>※埋文センター調査 | H22年度<br>刊行<br>※埋文センター作業 | 縄文早期 | 集石，土坑 | 岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文，鎌石橋式，轟Ａ式，打製石鏃，磨石，敲石 |
| | | | | | 弥生中期 | — | 山ノ口式，須玖式土器 |
| | | 縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟Ａ式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。 | | | | | |




第３図　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡・位置図

# 第Ⅲ章　調査の方法と層序

## 第１節　調査の方法

ここでは，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法等，整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

### １　発掘調査の方法

安良遺跡の発掘調査は，平成28年度と平成29年度にわたり実施した。調査対象表面積は3,155㎡，調査対象延面積は7,385㎡であった。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，確認調査時に設定したものを本調査でも踏襲した。具体的には，工事用幅杭のLO34とLO36の２点を結ぶ線を基準に，10m間隔で北側から南側へ向かってA，B，C･･･，東側から西側に向かって1，2，3･･･と設定した。

掘り下げに関しては基本的に人力で行い，無遺物層，火山灰の硬化層については，重機を併用して掘り下げた。遺構については，移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行った。遺物については，平板実測やトータルステーションを用いて取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法等は，以下のとおりである。

#### 平成25年度（確認調査）

平成25年８月１日から10月28日の期間に木森遺跡，小牧遺跡と共に確認調査を実施した。調査対象表面積は18,600㎡であったが，一部未買収部分については調査を実施できなかった。調査対象区域内に30本のトレンチを設定して調査を進めた。その結果，古墳時代・古代・中世・近世の遺物の出土が認められた。特に，古墳時代の土器を埋土に含む溝状遺構が検出された。

#### 平成28年度（本調査）

確認調査の結果を受け，確認調査時に設定した調査区割り（グリッド）のうち，H～M－26～39区の道路建設部分がが調査対象区域となった。本調査は平成28年11月25日から平成29年２月24日までの約３か月間に,表面積及び延べ面積2,250㎡を対象として行った。

調査は用地境界などで安全上の措置として平均で１m程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により無遺物層であるⅠ層を掘削した。その後、Ⅱa層上部から人力による掘り下げにて調査を開始した。併せて調査区北壁面周辺及び南壁面周辺とK-31～35区中央にトレンチを設定し，より詳細な遺構の検出状況や遺物の出土状況を確認するための先行調査を実施した。

調査の結果，Ⅱa層は古墳時代～古代・中世の遺物包含層，Ⅱb層は縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層であることが確認された。ただ，Ⅱb層中の上位に開聞岳起源の噴出物を含む層が一部残存しており，古墳時代～古代の遺物の出土が確認された。

この結果，本遺跡には縄文時代後期から中世にかけての遺物がほぼ全面的に存在することが明らかとなった。Ⅴ層以下の旧石器・縄文時代を対象とした下層確認トレンチを設定し調査を行った結果，縄文時代早期についてはK～L-34～36区に限定される見込みとなった。

遺構は検出の写真撮影後掘り下げ，実測を行った。遺構に応じて１／10もしくは１／20の縮尺で実測した。基本的に出土した遺物は，トータルステーション等を用いて出土位置の記録保存を行った上で取り上げ，その後掘り下げを続けた。まとまって出土した遺物及び遺構に関わりのある遺物については，１／10の縮尺で実測した。

J～L－35～39区の調査終了部分（450㎡）については，町道や民有地に接する用地境界付近の法面崩落防止，排水対策，立ち入り防止柵などの安全対策を施した。

#### 平成29年度（本調査）

前年度に引き続き平成29年5月9日から10月30日の期間に，表面積2,705㎡，延面積6,935㎡を対象に本調査を実施した。

調査区割りについては前年度のものを踏襲した。前年度，Ⅱa層途中で調査を終えた区域については引き続き調査を進め，現道部分や新たに調査対象となった区域については重機により無遺物層であるⅠ層を掘削したあと，Ⅱa層上部から人力による掘り下げにて実施した。　また，Ⅱb層の調査終了後には縄文時代早期を対象とした調査をJ～L-31～36区で実施した。調査は無遺物層であるⅢ層（池田降下軽石層）～Ⅴ層（アカホヤ火山灰層）を重機で除去した後，人力による掘り下げを行い，遺構・遺物の確認を行った。

検出した遺構は，写真撮影や１／10の縮尺で実測を行った。出土した遺物は，トータルステーションで取り上げた。地形測量については，Ⅴ層上面とⅦ層上面で実施した。最終的に，縄文時代早期（Ⅴ層）以下と，旧石器時代（Ⅶ層）以下の下層確認トレンチを設定して調査を行った。いずれも遺構・遺物が確認されなかった。

調査終了後は，町道や民有地に接する用地境界付近の法面崩落防止，排水対策，立ち入り防止柵などの安全対策を施して，引き渡しを行った。

### ２　遺構の認定と検出方法

本遺跡では，検出された多くの遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

**(1) 遺構の認定・分類・時期判断**

本編掲載の遺構は，検出面・埋土状況や色調・規模等を基に発掘調査担当者間で検討し，認定及び時期判断を行ったものである。主な遺構の認定及び時期判断については，以下のとおりである。

竪穴建物跡・土坑・ピットについては，埋土や形状，出土遺物など総合的に検討し，分類・認定・時期判断を行った。ただし，検出面が該当時期の地層よりもかなり下位で検出されたものもあるが，埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のものも含む）遺物等から総合的に検討し，時期判断を行った。

掘立柱建物跡については柱穴の配置状況・形状や埋土などを基に判断した。

溝状遺構については，硬化面の有無にかかわらず，明らかな溝状の掘り込みがあるかを判断基準とした。

集石遺構・集積遺構については，時期を問わず概ね５個以上の礫が集中したものを遺構と認定した。時期については，検出面や集石遺構内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し，判断した。

**(2) 遺構の検出方法**

本編掲載の遺構の検出については，各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めた。検出した遺構は，種類毎に番号を付した。

しかし，遺物包含層の主体となるⅡb層が赤黒色土で遺構の埋土もⅡb層の色調に限りなく類似するという難しさがあり，結果的に判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。また，遺構によっては，プランの検出はしたものの，包含層と遺構内埋土の違いを判別しにくい例や，撹乱を受けるなどして平面形や底面などが明確でない場合もあり，遺構の検出をはじめとする調査に支障があった。この場合，ミニトレンチを設定した検証，撹乱部分の埋土除去等の最善の調査法を調査担当職員で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

### ３　整理・報告書作成作業の方法

平成29年度については，発掘現場において基礎整理作業を調査と並行して進めた。平成30度は，それまでの発掘調査成果品の整理作業を中心に，平成31年度は前年度の整理作業の成果を引き継ぎ，埋文調査センター第一整理作業所で整理作業を実施した。

当初，発掘調査成果品である実測図等の図面整理，出土遺物の水洗い，注記等から整理作業を開始し，これらの作業は平成30年度には終了した。遺跡名を表す記号は「ＹＲ」とした。

以下の整理作業内容は平成30・31年度とも共通することから併せて記載する。

報告書に掲載する縄文時代早期，縄文時代後期，弥生時代，古墳時代，古代，中世の遺構・遺物の分類や数量把握を行った後，時代毎に挿図作成・原稿執筆を行った。

土器の分類・接合は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，胎土や文様等で分類し，さらにグリッドごとに分けて接合を行い，その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器・石製品については，剥片石器，礫石器等に分けた後，器種及び石材別に分類した。

遺物出土分布図は，平板実測で取り上げた情報についてはデジタイザーを用いてデータ化し，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

土層断面や遺構のトレースは，実測図の点検・修正を行った後，鉛筆トレースで下図を作り，ペントレース及びデジタルトレースを行った。

さらに，選別した遺構内及び包含層出土遺物についても実測・拓本の作業の後，ペントレース及びデジタルトレースを行った。図版作成・写真撮影・レイアウトを行った。

## 第２節　地形と層序

### １　地形

安楽川は河口から２㎞程上流で西へ大きく蛇行しながら南流するが，その左岸の中位段丘に遺跡は立地する。遺跡周辺は標高約30ｍのほぼ平坦面が続き，人家と圃場が入り交じる風景が続く。中位段丘は遺跡の西側を流れる安楽川に向かって徐々に低くなり，最後は10m以上の段差をもって低位段丘へと続く。大きく蛇行する安楽川に囲まれた低位段丘には水田が広がる。

調査前の調査区域付近の地表面は，ほぼ平坦であった。26～35区におけるⅢ層上面やＶ層上面の地形状況は多少の起伏はあるものの，その高低差は概ね１ｍ程度であった。しかし，36～39区にかけてはＶ層上面もしくはＶ層自体も削平を受けていた。つまり，調査区内の旧地形は36区付近から西側に向かって急激に標高が高くなる状況が見られる。これは，安楽川が西側へ大きく蛇行する以前の自然堤防であった可能性が考えられる。

なお，周辺地形図，層毎の地形図は第４～６図に示した。

### ２　層序

安良遺跡の基本層序は，次のとおりである。

なお，層厚等については第４表に，土層断面は第７～11図に示した。

Ⅰ層：表土である。黒色もしくは灰褐色の色調を呈し，粘性はなく，しまりも弱い。基本的に３分層でき




第４図　グリッド配置図及び周辺地形図

るが，部分的に撹乱を受けたり，色調等の異なる土壌も確認される。断面では近代～現代とみられる畝も確認される。

Ⅱa 層：粘性をもち，しまりもある黒色土である。直径１～５㎜程度の軽石を僅かに含む。古墳時代～中世の遺物包含層である。

なお，分層はできなかったが，Ⅱa層上位からは中世の遺物が，下位からは古墳時代～古代の遺物が出土する傾向があった。

Ⅱa$_2$層：やや粘性をもち，しまりの強い黒色土である。開聞岳起源の紫コラを含み，本遺跡では一部の残存にとどまる。

Ⅱb 層：やや粘性をもち，しまりのある赤黒色土である。縄文時代後期～弥生時代の遺物包含層でもある。

調査途中で部分的に紫コラがⅡb層上位に残存していることが判明したため，Ⅱb層を紫コラの有無で分層した。

Ⅱc 層：粘性及びしまりのある黒色火山灰層である。極小の御池火山灰（約4,600年前の新期霧島火山起源テフラ）が密に入る。

Ⅲa 層：粘性及びしまりのある池田降下軽石（約5,600年前の池田カルデラ起源テフラ）を少量含む黒色土である。

Ⅲb 層：粘性をもち，しまりが非常に強く，池田降下軽石を含む黒色土である。Ⅲa層と比較して色調が黒い。

Ⅳ　層：やや粘性があり，しまりが強い黒褐色土で，Ⅴ層の腐植土である。

Ⅴ　層：やや粘性があり，しまりが強い暗黄褐色火山灰土である。アカホヤ火山灰（約7,300年前の鬼界カルデラ起源テフラ）層である。

Ⅵ　層：やや粘性があり，しまりの強い黒色土である。直径１㎜程度の黄色軽石を多少含む。出土点数は少ないが，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅶ　層：やや粘性があり，しまりの強い黒褐色土である。直径１～２㎜程度の黄色軽石を多少含む。

Ⅷ　層：黄褐色火山灰土で，薩摩火山灰（約12,800年前の新期桜島北岳起源テフラ・P14）層である。

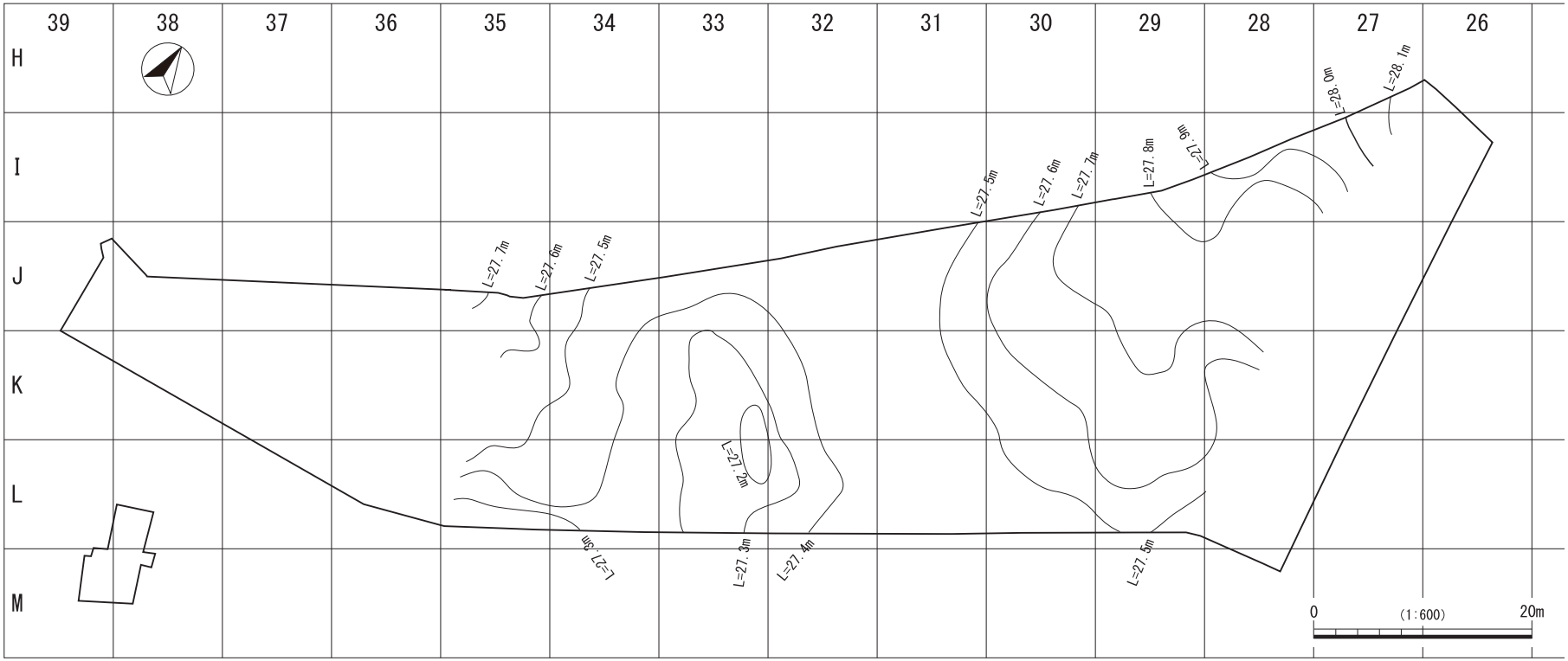
Ⅸ　層：粘性をもち，しまりのある暗褐色土である。通称「チョコ層」と呼ばれている層である。

Ⅹ　層：やや粘質があり，しまりの強い褐色土である。直径２～５㎜程度の黄色軽石を僅かに含む。また，暗オリーブ褐色土のブロック（直径10～50㎜）も混じる。

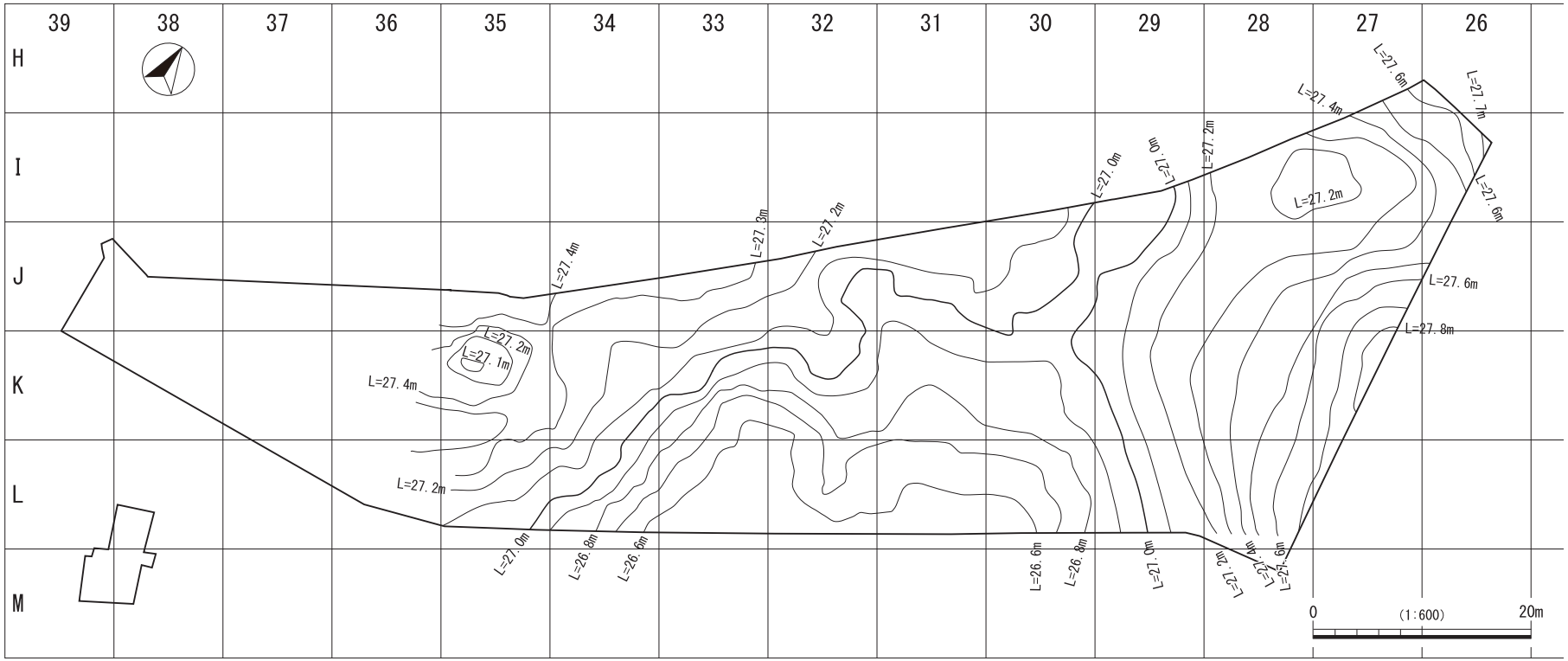
Ⅺ　層：にぶい黄褐色を呈する砂質の火山灰土である。姶良カルデラ噴出物（通称シラス・約29,000年前のテフラ）二次堆積と考えられる。

**第４表　安良遺跡の基本層序**

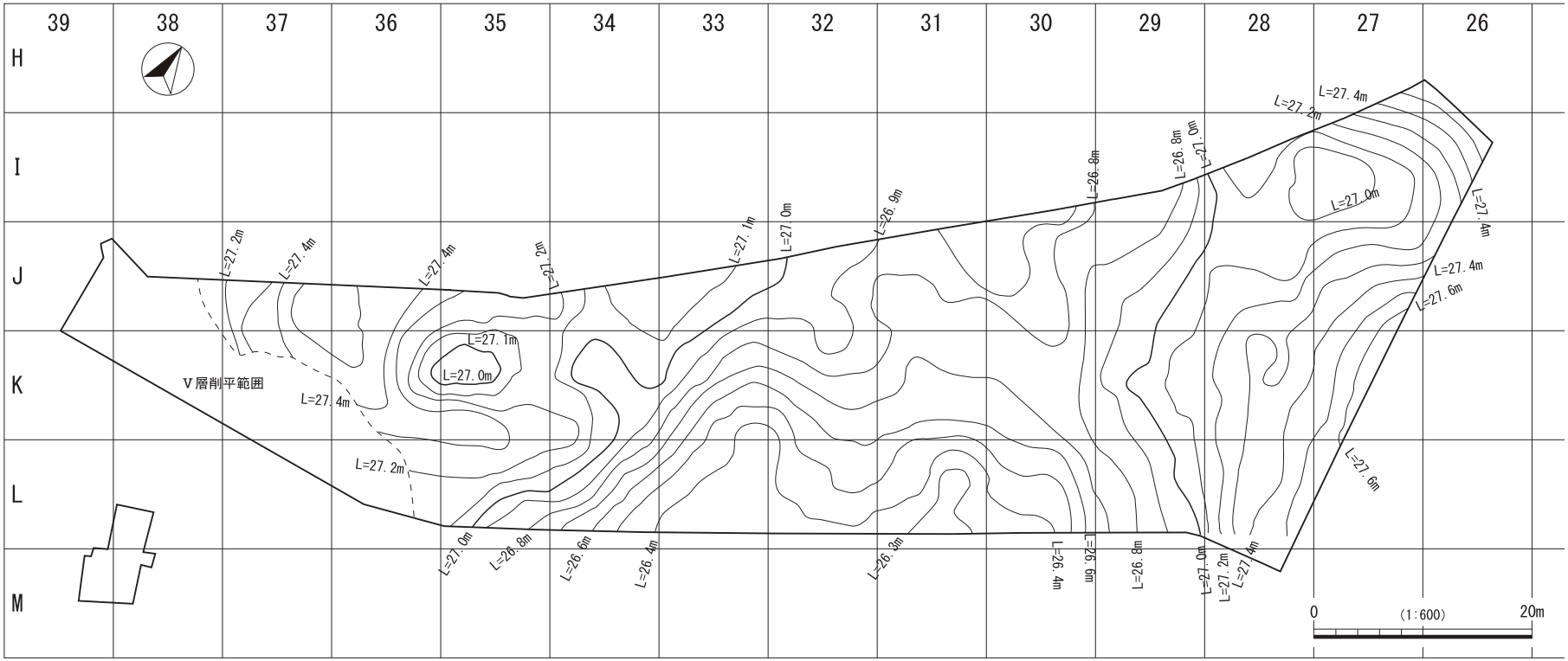
| 層　位 | 色　調　等 | 平均厚㎝ |
|---|---|---|
| Ⅰ　層 | 表土 | 50～80 |
| Ⅱa 層 | 黒色土<br>遺物包含層（古墳～中世） | 15～40 |
| Ⅱa$_2$層 | 黒色土　紫コラを含む<br>遺物包含層（古墳～古代)） | 5～25 |
| Ⅱb 層 | 赤黒色土<br>遺物包含層（縄文後期～弥生） | 15～30 |
| Ⅱc 層 | 黒色土　御池火山灰を含む | 15～30 |
| Ⅲa 層 | 黒色土 | 10～15 |
| Ⅲb 層 | 黒褐色土 | 5～10 |
| Ⅳ　層 | 黒褐色土 | 5～15 |
| Ⅴ　層 | 暗黄褐色土　アカホヤ火山灰 | 50～80 |
| Ⅵ　層 | 黒色土<br>遺物包含層（縄文早期） | 50～80 |
| Ⅶ　層 | 黒褐色土 | 50～60 |
| Ⅷ　層 | 黄褐色土　薩摩火山灰 | 30～50 |
| Ⅸ　層 | 暗褐色土 | 20～50 |
| Ⅹ　層 | 褐色土 | 50～80 |
| Ⅺ　層 | にぶい黄褐色砂質土　シラス | |



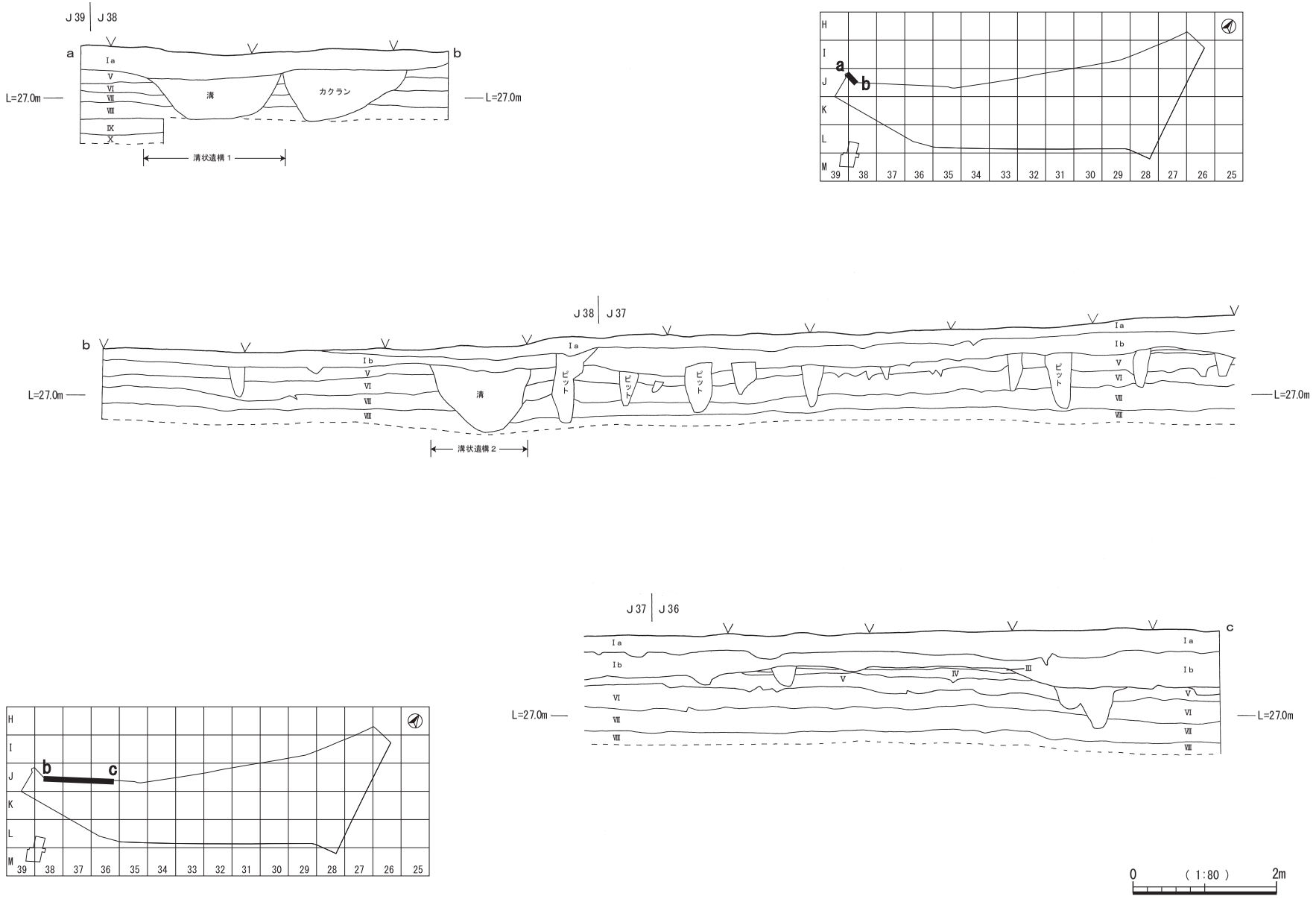

第５図　Ⅱa層上面地形図


39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
H
I
J
K
L
M
L=27.6m
L=27.7m
L=27.4m
L=27.2m
L=27.0m
L=27.0m
L=27.2m
L=27.6m
L=27.6m
L=27.8m
L=27.4m
L=27.3m
L=27.2m
L=27.4m
L=27.2m
L=27.1m
L=27.2m
L=27.0m
L=26.8m
L=26.6m
L=26.6m
L=26.8m
L=27.0m
L=27.2m
L=27.4m
L=27.6m
0
(1:600)
20m

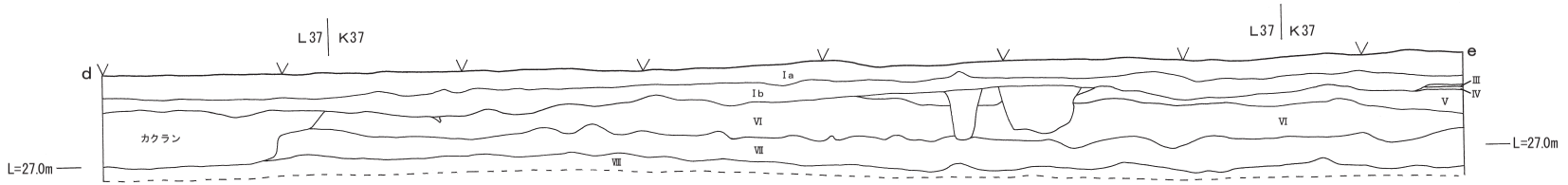
第６図　Ⅲ層上面地形図

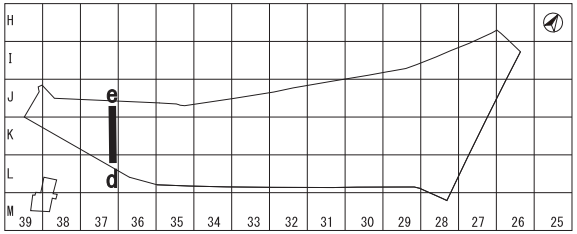

39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
H
I
J
K
L
M
V層削平範囲
L=27.2m
L=27.4m
L=27.4m
L=27.2m
L=27.1m
L=27.0m
L=26.9m
L=26.8m
L=27.0m
L=27.4m
L=27.4m
L=27.6m
L=27.6m
L=27.1m
L=27.0m
L=27.4m
L=27.2m
L=27.0m
L=26.8m
L=26.6m
L=26.4m
L=26.3m
L=26.4m
L=26.6m
L=26.8m
L=27.0m
L=27.2m
L=27.4m
0
(1:600)
20m

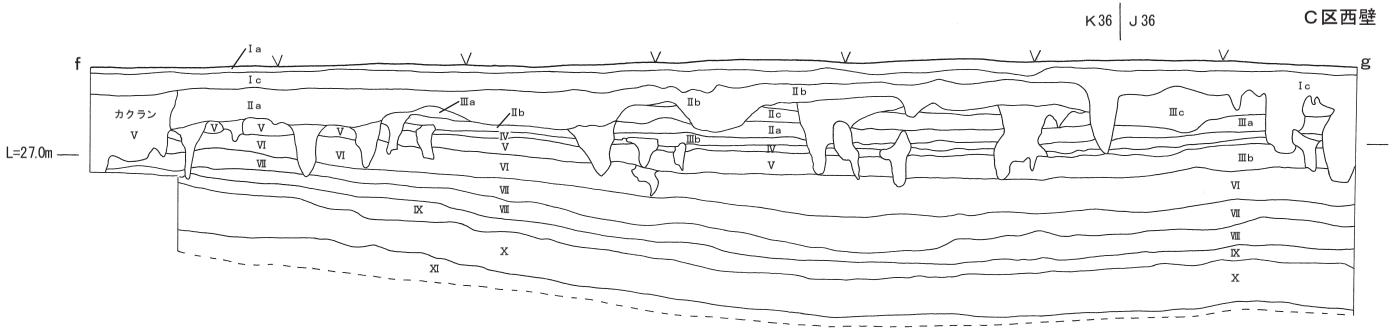
第７図　Ｖ層上面地形図

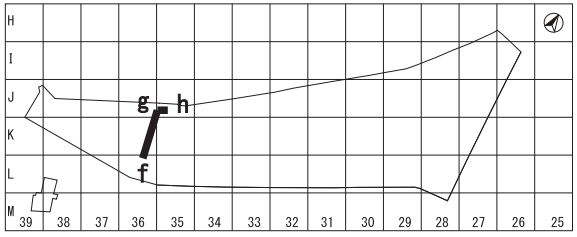

J 39
J 38
a
b
Ⅰa
Ⅴ
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ
Ⅸ
Ⅹ
溝
カクラン
L=27.0m
L=27.0m
溝状遺構 1
H
I
J
K
L
M
39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25
J 38
J 37
Ⅰb
ピット
溝状遺構 2
J 37
J 36
c
Ⅲ
Ⅳ
0
( 1:80 )
2m

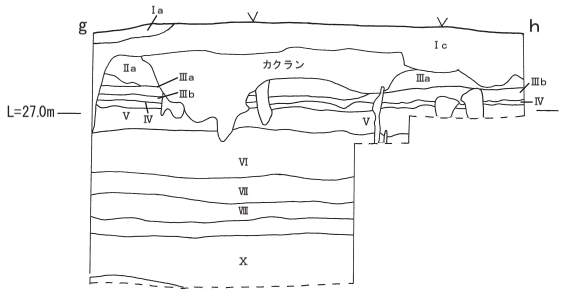
第８図　土層断面図１



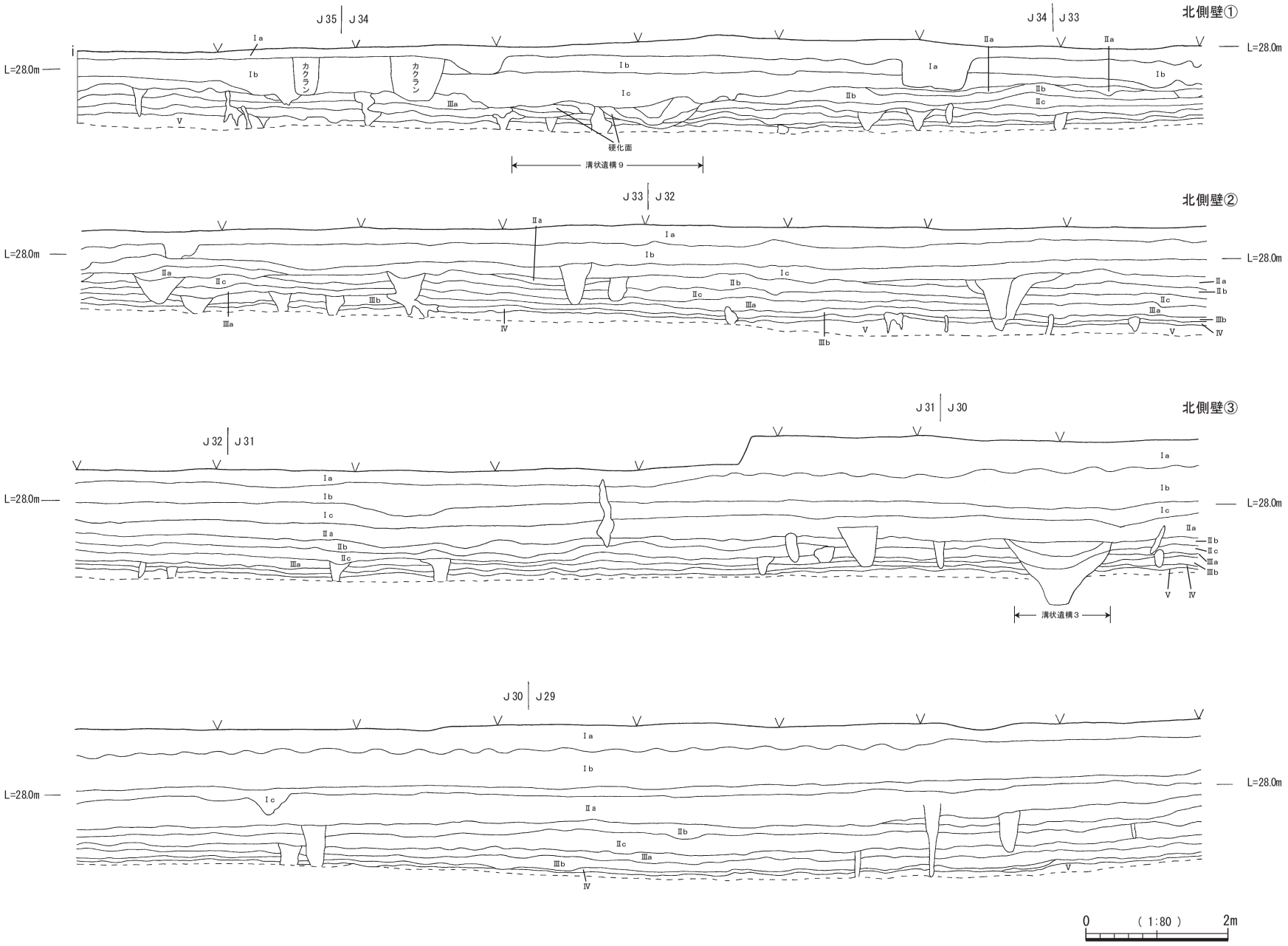



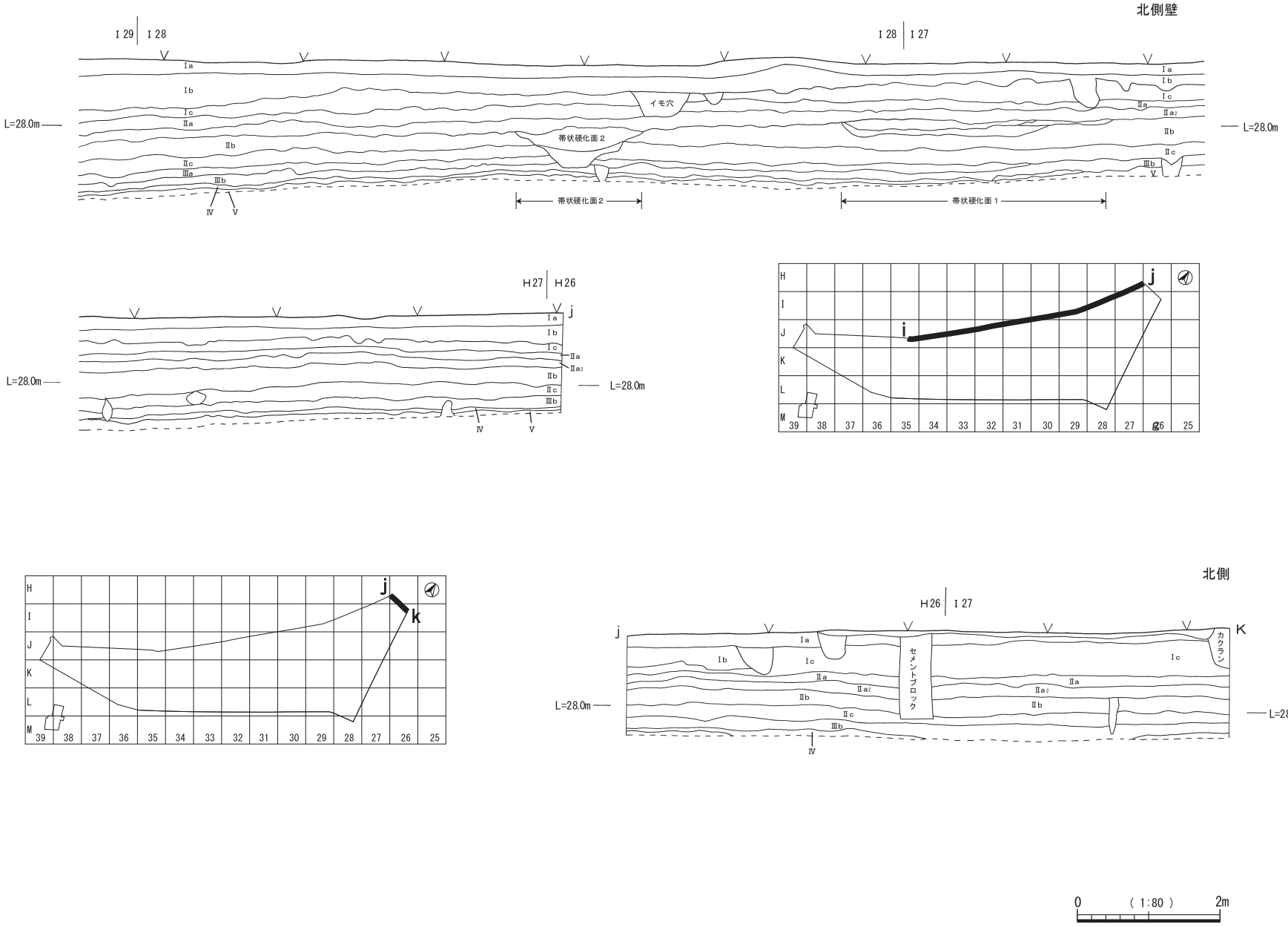




0 ( 1:80 ) 2m

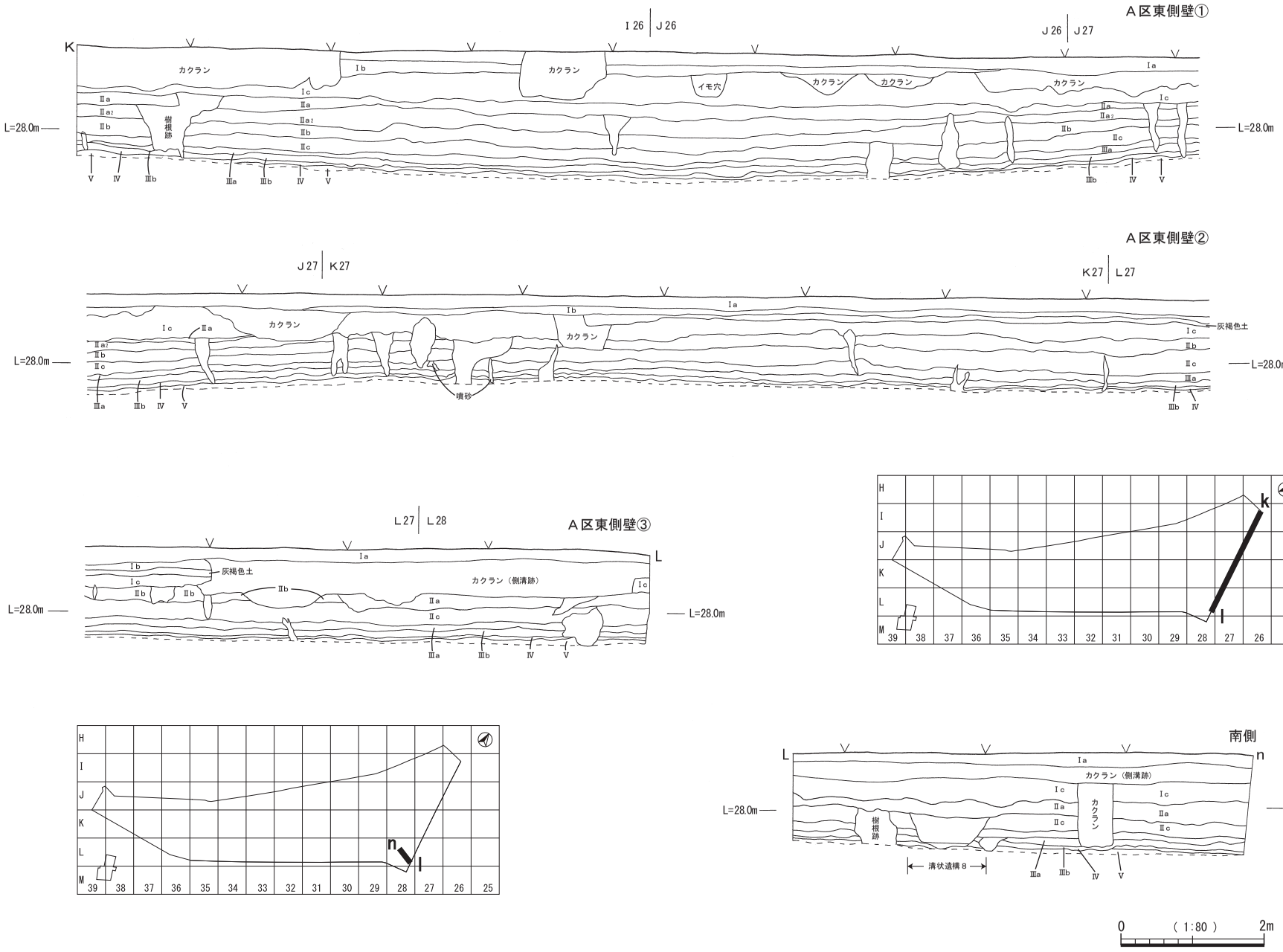
第９図　土層断面図２


北側壁①
J35 J34
J34 J33
L=28.0m
Ia
Ib
Ic
IIa
IIb
IIc
IIIa
IIIb
IV
V
カクラン
硬化面
溝状遺構9
北側壁②
J33 J32
北側壁③
J31 J30
J32 J31
溝状遺構3
J30 J29
0 (1:80) 2m

第10図　土層断面図３


北側壁
I 29
I 28
I 28
I 27
L=28.0m
イモ穴
帯状硬化面２
帯状硬化面１
H27
H26
j
i
k
H
I
J
K
L
M
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
北側
H26
I 27
K
セメントブロック
カクラン
0
( 1:80 )
2m

第11図　土層断面図４


A区東側壁①
I 26 | J 26
J 26 | J 27
K
L=28.0m
カクラン
イモ穴
樹根跡
Ia
Ib
Ic
IIa
IIa2
IIb
IIc
IIIa
IIIb
IV
V
A区東側壁②
J 27 | K 27
K 27 | L 27
灰褐色土
噴砂
A区東側壁③
L 27 | L 28
L
カクラン（側溝跡）
H
I
J
K
L
M
39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25
k
l
n
南側
溝状遺構８
0
（1:80）
2m

第12図　土層断面図５

# 第Ⅳ章　調査の成果

## 第１節　縄文時代の調査

縄文時代の遺構は，早期の集石遺構がⅦ層上面から，後期と考えられる土坑がⅡｂ層から検出された。遺物はⅥ層から早期，Ⅱｂ層から後・晩期のものが確認された。さらに，古墳時代の溝の埋土中からは縄文時代中期の土器片が出土している。ただ，この溝の周辺はⅤ層のアカホヤまで削平を受けており，縄文時代中期に相当する包含層は残存しないと考えられる。

土器の分類は包含層出土遺物を基に，時期毎に分類し，後期の土器については細分した。

石器については，剥片石器と礫石器に大別し，それぞれを器種・形態ごとに細別した。なお，「磨り」と「敲打」の両機能を兼ね備えた石器については，「磨・敲石」と表記した。

### １　縄文時代の遺構

#### (1) 集石遺構（第13・14図）

Ｌ－35区，Ⅶ層上面において最大長1.5m，幅1.3mの範囲で礫が集中して検出された遺構である。多くの角礫で構成されており，そのほとんどが被熱破砕によるものでほぼすべてが元は円礫もしくは亜円礫であったと考えられる。集石遺構を構成する礫は，西側の崖下200～500mの距離を流れる安楽川にあるものと類似する。

全ての礫を取り上げた後に精査を行ったが，掘り込みは確認されなかった。遺構内から土器・石器等の遺物は確認されなかった。検出された層から縄文時代早期の遺構であることが確認された。

#### (2) 土坑１（第13・15図）

Ｊ－28・29区のⅦ層上面で検出した。最大長1.5m，幅0.6m，検出面からの深さ0.13mを測る遺構である。

樹痕に床面まで切られているため，中央部分は残存していない。さらに両端部は周囲を掘り下げてしまっていたことにより検出することができなかったが，もとは長楕円形の土坑であったと考えられる。

本遺構の埋土中から出土した１は石製垂飾品（丸玉）である。中央が穿孔されるもので，一方向から穿孔されている様子が観察される。石材は翡翠と考えられる。

土坑１は縄文時代後期の遺物集中区に存在し，かつ当該時期と考えられる丸玉が埋土中から出土しているため，縄文時代後期のものと判断した。

### ２　縄文時代の遺物

遺物は，土器と石器が確認された。土器は時期毎に，石器は剥片石器と礫石器に大別し，器種毎に記述する。

#### (1) 土器（第17～21図）

##### ①縄文時代早期の土器（第17図　２～９）

確認した当該時期の遺物は，土器のみである。縄文時代早期の土器については，包含層出土の土器と古墳時代の溝の埋土中から出土した土器があった。出土点数も少ないことから個別に記述する。

包含層からは２点の土器が出土している。いずれも貝殻文を有する円筒形土器である。２は底部から胴部下半にかけてのもので，わずかに底部接地面が残存する。３は底部接地面であり，内外面には貝殻による浅い条痕がみられる。

４～９は，古墳時代の溝２の埋土中から出土した縄文時代早期の土器である。４～６の外面には貝殻条痕文が斜位に施され，内面には縦方向の器面調整が観察できる。前平式土器に比定できる。７は，外面に縦方向の貝殻刺突が密に施される。内面は縦にケズリ状の調整が入る。小牧3Ａ式土器と考えられる。８は小片であるが，貝殻腹縁による押し引きが施され，クサビ状に粘土を貼り付けている。吉田式土器に比定される。９は口縁部外面に突帯を貼り付けて刻みを施し，口唇部は平坦に仕上げる。外面は横位や斜位の条痕が施される。轟Ａ式土器に比定できる。

##### ②縄文時代中期の土器（第17図　10・11）

２点確認されたが，いずれも溝２の埋土中から出土したものである。10は，口縁部片である。平坦に仕上げた口唇部には刻みを施す突起をもつ。外面には器面調整の条痕が僅かに観察できる。文様は，櫛歯状工具で曲線的な文様を施す。大平式土器に比定できる。

11は，幅広い凹線を曲線的に施文することから阿高式土器と考えられる。ただし，器面調整の条痕が内外面に残り，凹線も浅いという特徴をもつ。

##### ③縄文時代後期の土器（第17～21図　12～63）

遺物はⅡb層から丸尾式土器，西平式系土器などが出土した。ほとんどがＪ～Ｌ-27～31区周辺での出土であり，特に調査区の西側に集中する傾向がみられる。

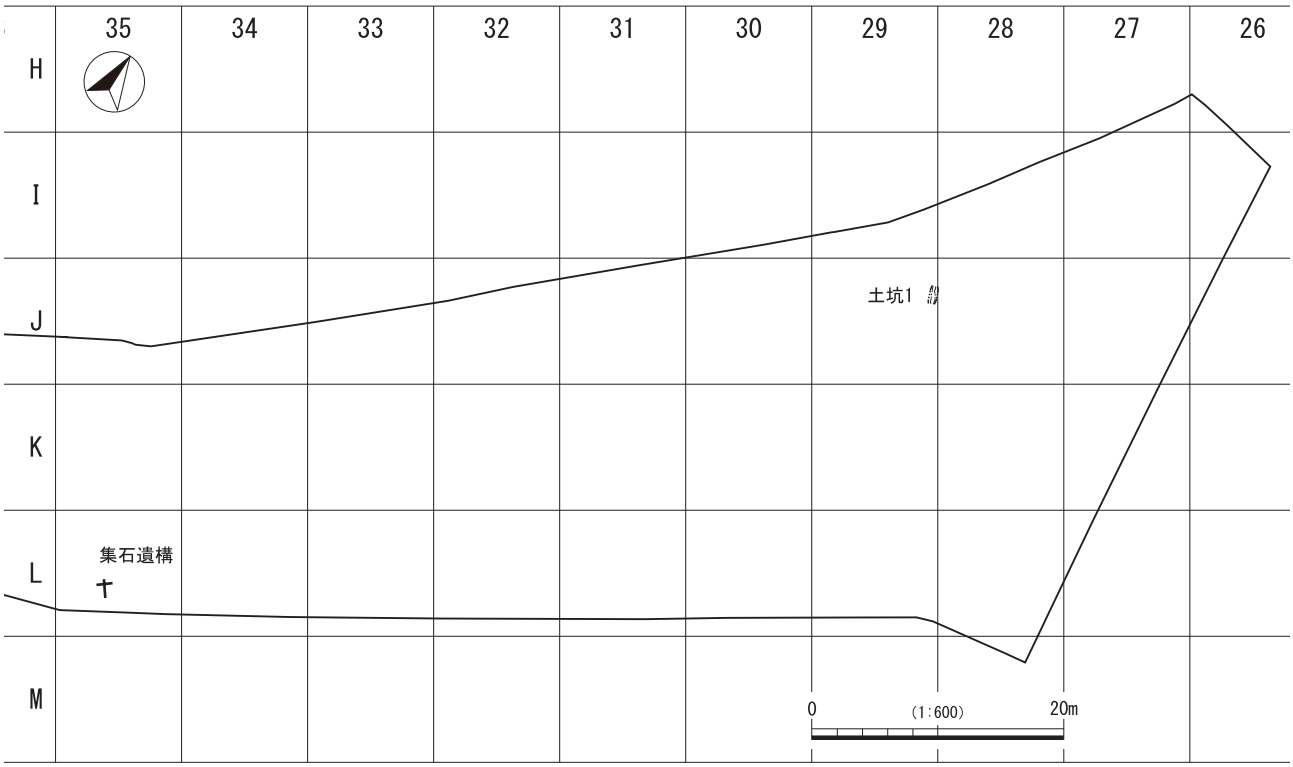
土器については，以下のⅠ類とⅡ類に大別した。

Ⅰ類土器

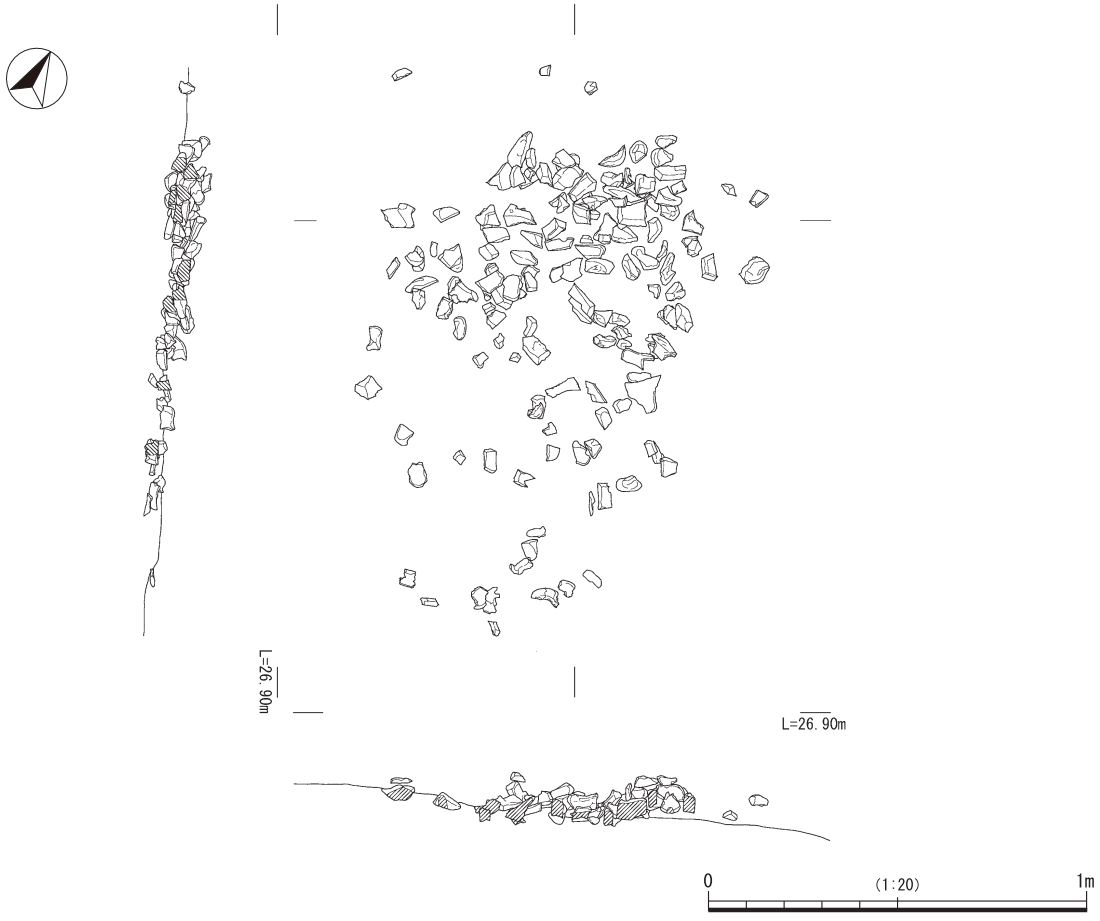
口縁部は平縁ないしは山形の形態を有し，外反・「く」字状の断面形態のものである。基本的には，口縁部下に貝殻刺突文が施文されるが，多重の細沈線を施文するものも少量含まれる。丸尾式土器に該当する。

Ⅱ類土器

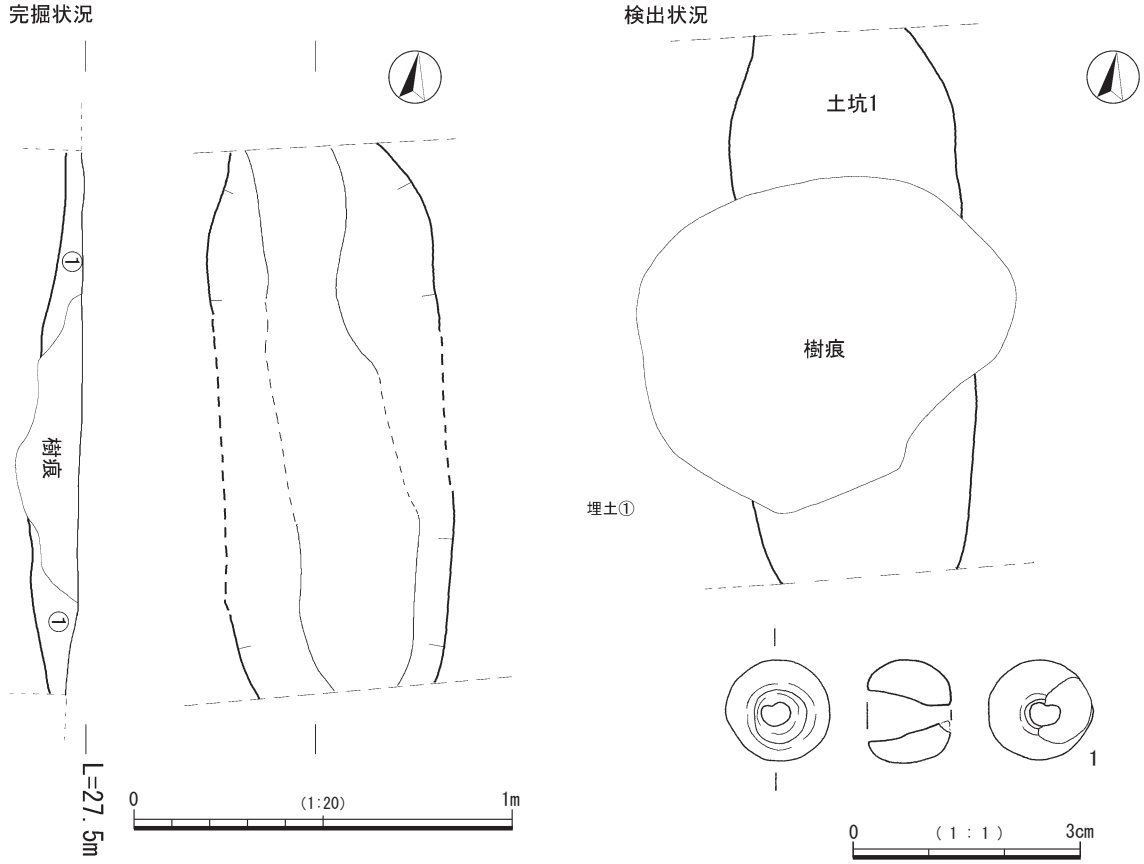
口縁部は，「く」字に内側へ屈曲するもので，屈曲部から口縁部の外面に磨消縄文が施文される。また，胴部




第13図　縄文時代遺構配置図




第14図　集石遺構




第15図　土坑１及び出土遺物

では体部の中央付近で一端屈曲してくびれをつくり，そのくびれからさらに胴部を張り出させる。このくびれから胴部最大径付近までには磨消縄文もしくは刺突文が施文される。

本遺跡で出土した土器は口縁部屈曲部が退化して肥厚したものもみられるが，ここでは同じ系統の西平式系土器として一括した。以下，分類により記述する。

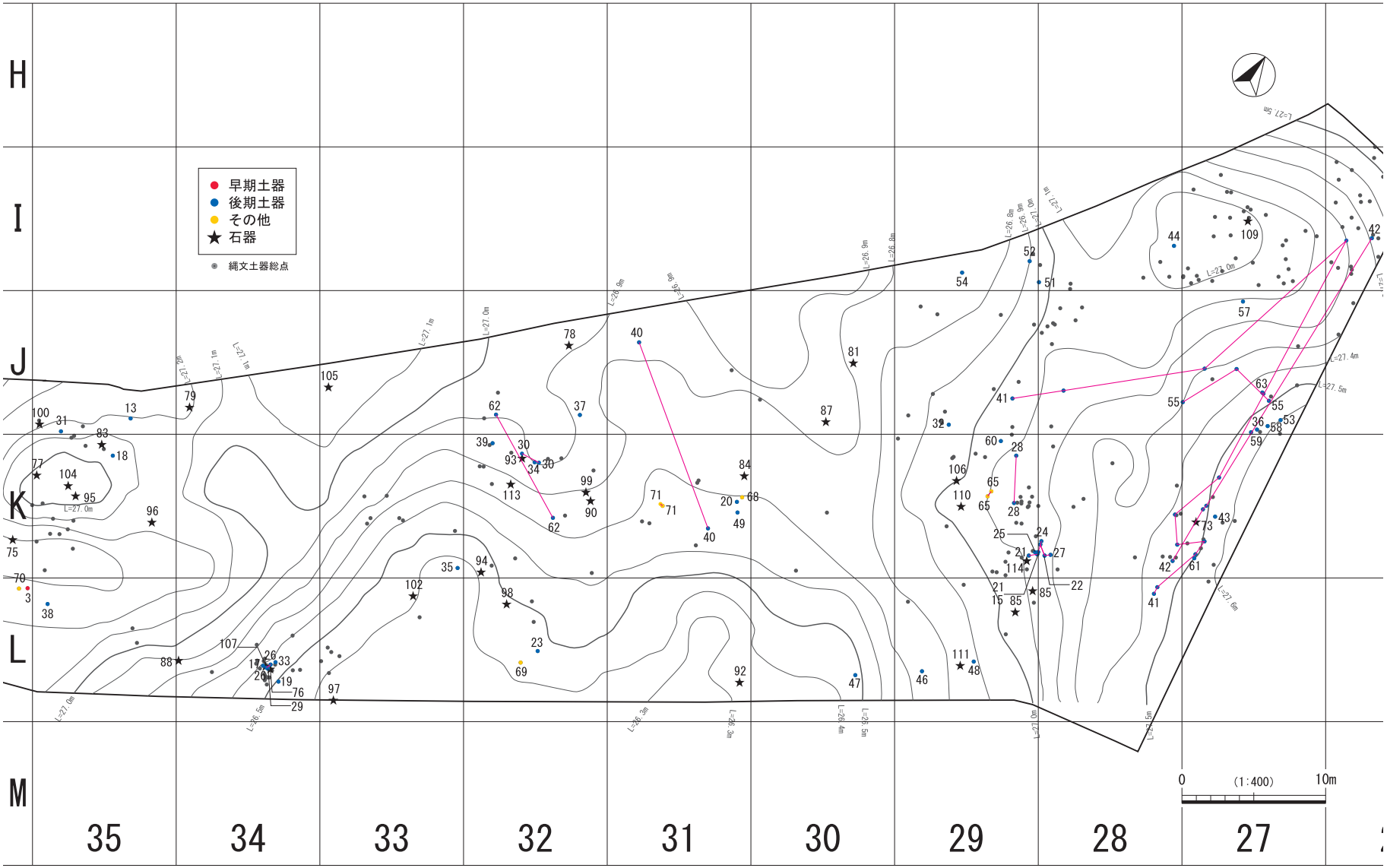
**Ⅰ類土器（第17～18図　12～38）**

12～25は，口縁部である。口縁部下には貝殻腹縁による刺突文が施文される。

12は口縁部が外反するもので，口縁部下に上下２列に貝殻腹縁による刺突文が施されるものである。器壁は比較的薄い。13は明瞭に「く」字状の断面形を示すもので，口縁部下に上下２列に貝殻腹縁による刺突文が施されるものである。14は口縁部外面の一部がはがれているが，口縁部下の貝殻腹縁による刺突文が明瞭に残る。15は12同様に口縁部下に上下２列に貝殻腹縁による刺突文が施されるものであるが，12よりも刺突の角度が鋭角となるものである。15～18は12よりもやや器壁は厚いものの，口縁部下に上下２列に貝殻腹縁による刺突文が施されるという点が同じである。19は口縁部下２～３㎝までは横方向の条痕が施されるもので，その下に貝殻腹縁による刺突文を施すものである。20は，口縁部直下に貝殻腹縁による刺突文を施すものである。21～23は口縁部下から約５㎝のところで一旦わずかに屈曲し，下方へと向かうものである。屈曲部の直下には横方向の沈線が施される。24・25は口縁部下に貝殻腹縁による刺突文が施文されるものであるが，一部が連続して刺突され，沈線のようにみえる。

26～31は，胴部である。いずれも口縁部下に１列ないし上下２列に貝殻腹縁による刺突文が施されるものである。特に30は幅の短い貝殻腹縁で刺突が施されるものである。

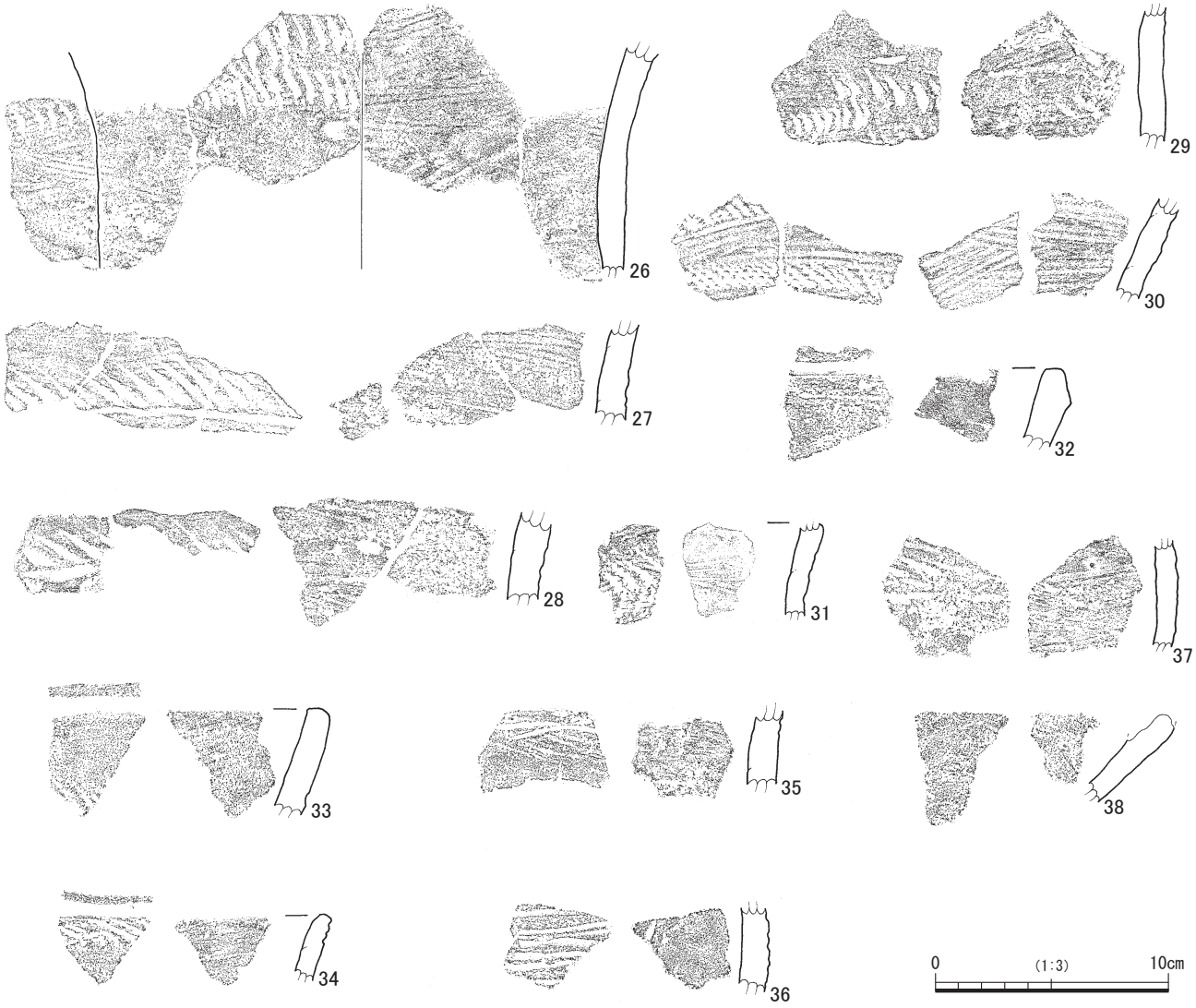
32～38は，Ⅰ類土器の中でも特徴のあるものを集めた。32は，口縁部が若干肥厚するものである。33は施文部が他のものと比較するとやや下にあるもので，一見すると口縁部直下には施文がみられないが，口縁部から約３㎝程下に貝殻腹縁による刺突が施されるものである。34は，口縁部直下に幅の短い貝殻腹縁で刺突が施されるものである。35～37は，胴部である。35は細沈線が施されるもので，一見するとⅠ類土器の範疇から外れるようであるが，他の遺跡においても少量入る場合があることからここで扱っている。36・37は一見すると貝殻腹縁による刺突でないようにみえるが，やはり貝殻腹縁による刺突が




第16図　縄文時代遺物出土状況




第17図　縄文時代の土器(1)




第18図　縄文時代の土器（2）

施されるものである。38は大きく外反するもので，残存部の上端は剥がれるように欠損している。台付皿である可能性がある。

**Ⅱ類土器（第19～21図　39～63）**

39・40は波状の口縁を呈するもので，全体的に器壁が薄く丁寧につくられるものである。口縁部と頸部直下５cm程度の部分には，沈線文と縄文，刺突文が施文される。

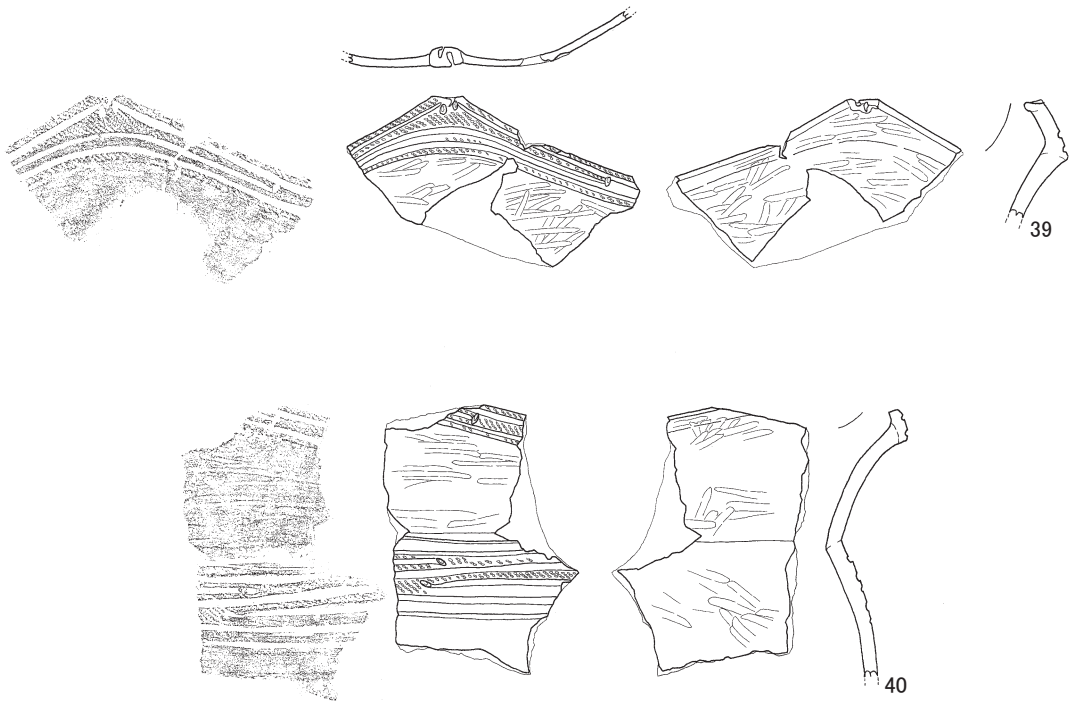
また，この２点は胎土や色調，焼成などの特徴から判断して同一個体の可能性が高い。

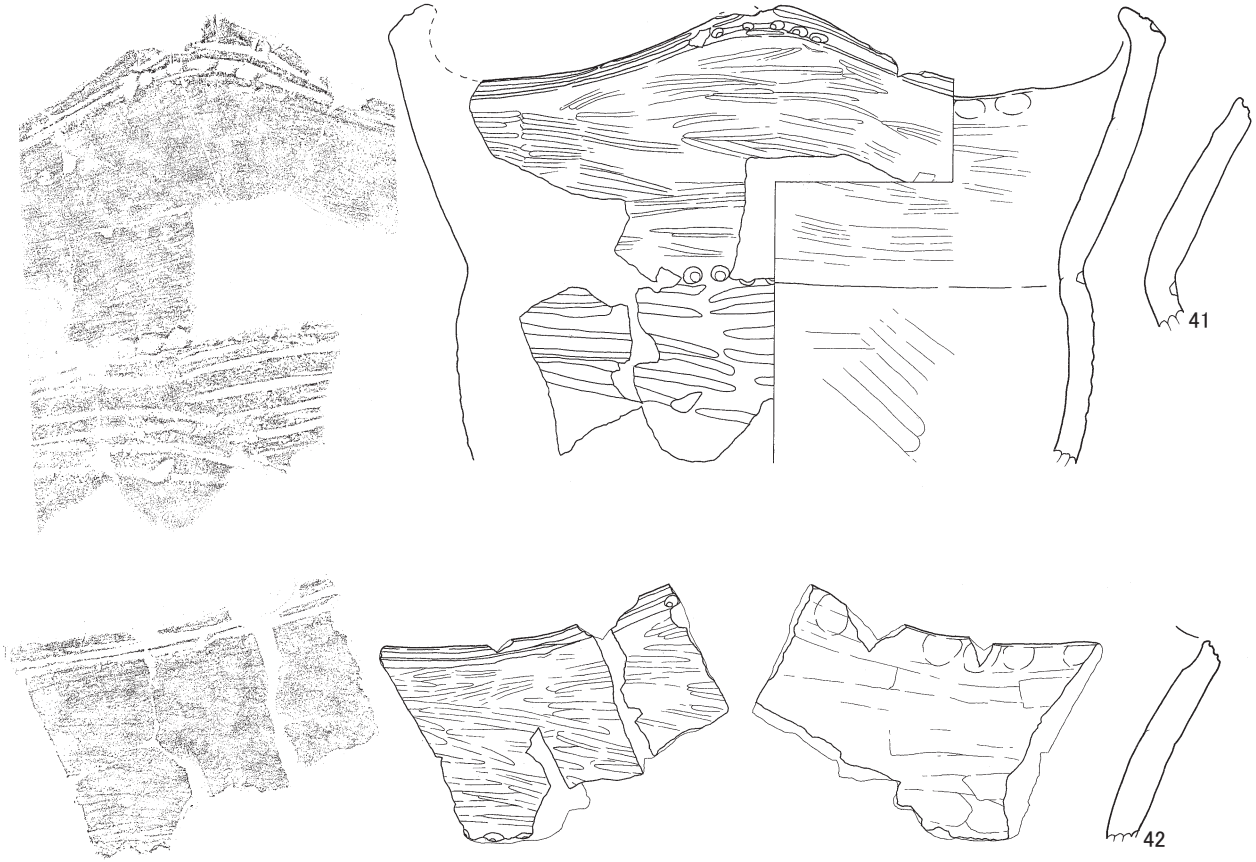
41・42は波状の口縁を呈するものであるが，39・40と比較すると厚手で，シャープさに欠けるものである。41は口縁部と頸部直下５cm程度の部分に沈線文と刺突文が施文される。外面にはほぼ全面的にヘラナデ・ミガキによる器面調整が施される。42の口縁部には沈線が，外面のほぼ全面にはヘラナデ・ミガキによる器面調整が施される。43は，口縁部内面直下に多いユビオサエがみられることや全体的な傾きなどから口縁上端が欠損したものと判断しここに掲載した。器面調整は41・42と同様であるが，胎土や色調，焼成などの特徴から判断して42と同一個体の可能性が高いと考えられる。44～48は，口縁部外面施文帯に押し引き状の文様を２段にわたって施文するものである。また，口縁部下にも押し引き状の連点が施される。西平式に先行する辛川式土器に類似の特徴があるので，辛川式の型式的特徴が残存した可能性も考えられる。

49～54は，口唇部に沈線文を施すものである。その中でも，51・52は，頸部にも刺突文がみられる。

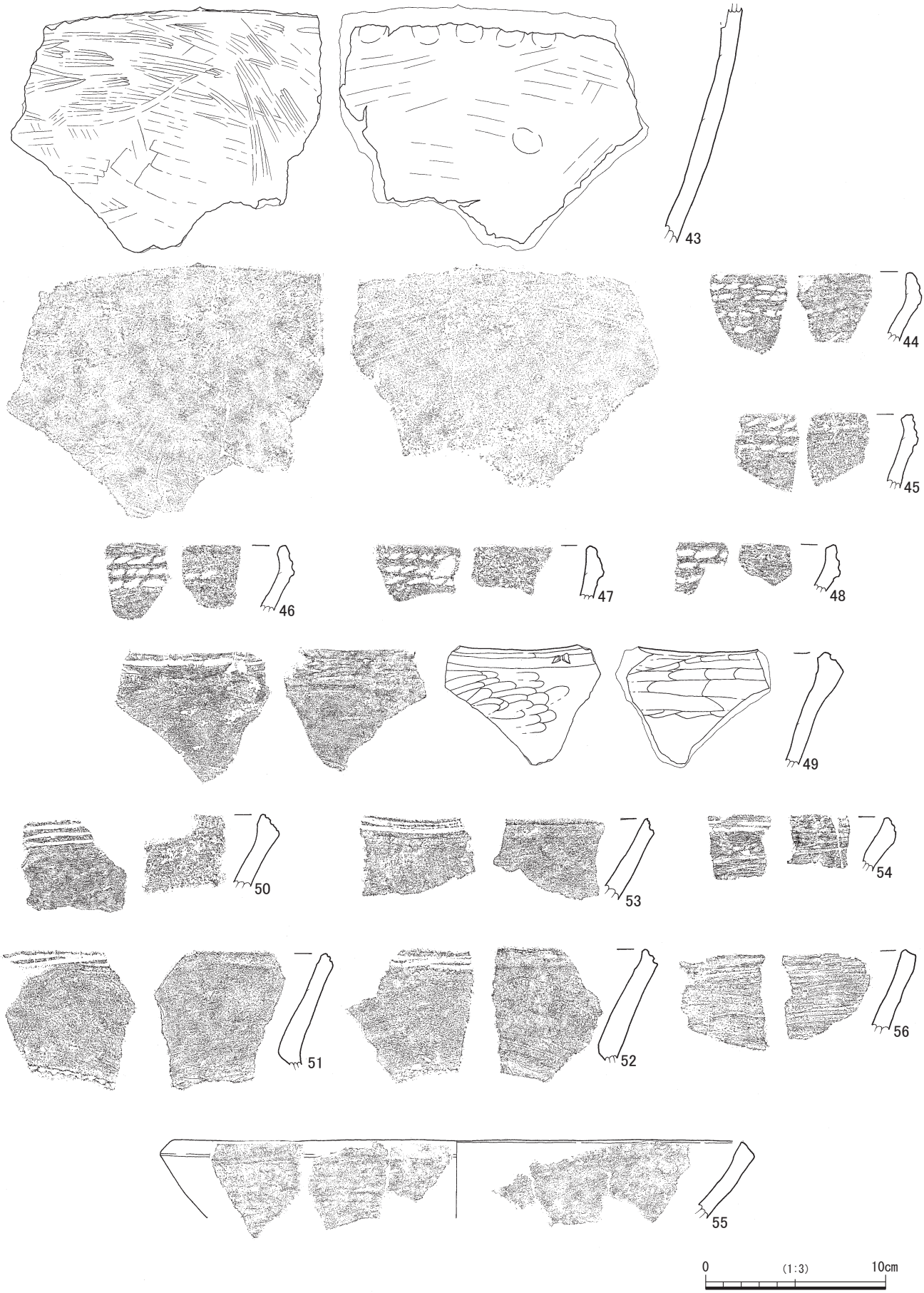
55・56は口縁部であるが，ほぼ無文のものである。57は小破片であるが，口縁部直下に縦方向の刻みがみられるもので，特徴的なものである。

58～63は，頸部・胴部を一括したものである。58・59は，頸部付近に刺突文を施してそのさらに下部に沈線を

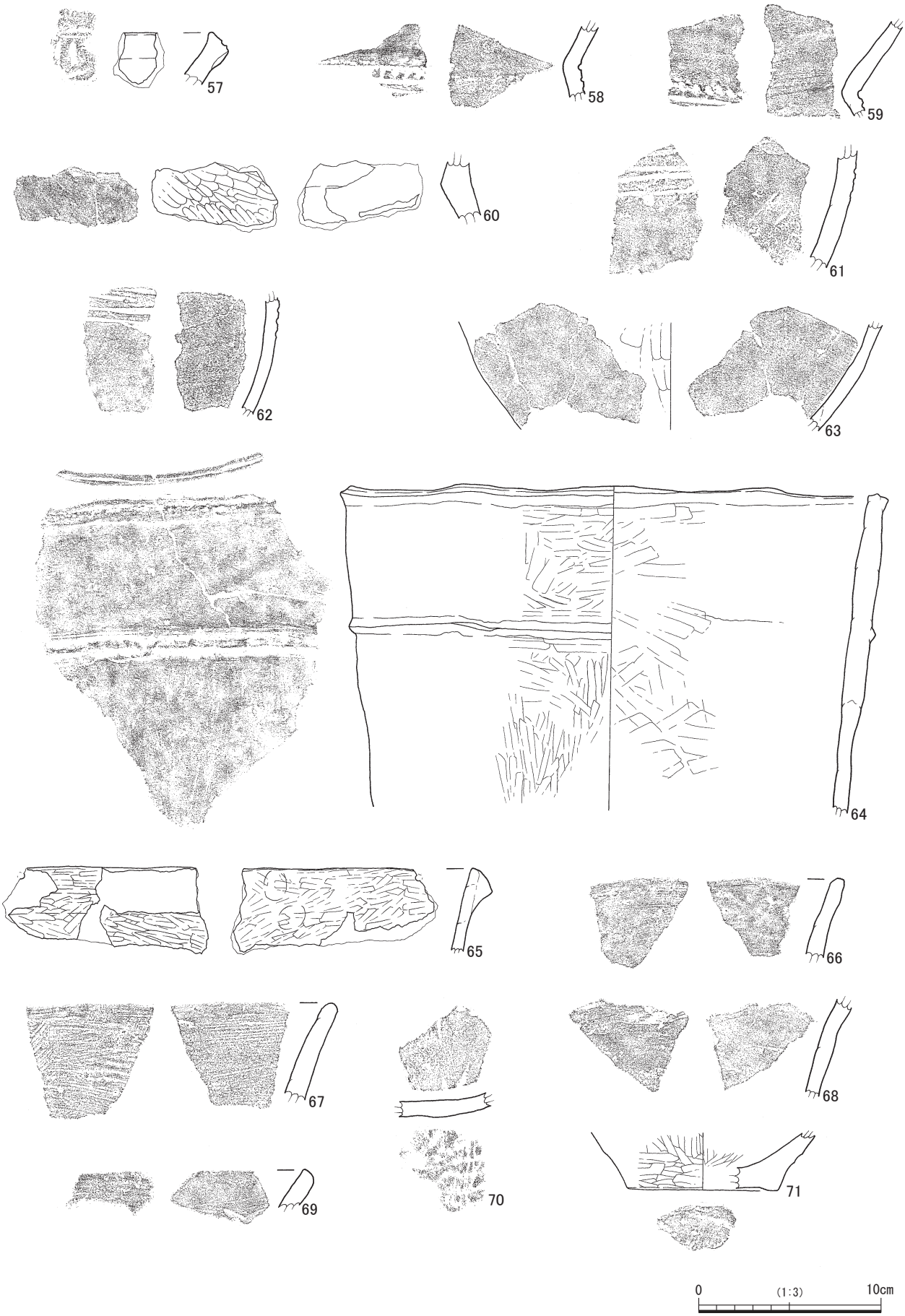



第19図　縄文時代の土器（3）




第20図　縄文時代の土器（4）




第21図　縄文時代の土器（5）

施文するものである。60は外面は丁寧なミガキによる器面調整がなされているが，内面については風化が激しい。61・62は頸部より下の部分であり，沈線が施される。

**④縄文時代晩期の土器（第21図　64～71）**

64～71はⅡb層から出土し，縄文時代晩期の土器と想定されたものを一括したが，具体的な型式名などは明確ではないものである。

64は，口縁部直下と口縁部下７～８㎝程度下の胴部のそれぞれに断面三角形の突帯を貼り付けるものである。その結果として，口唇部に溝を巡らしているような様相となるものである。内外面のほぼ全面にはヘラミガキが施される。65は口縁部に突帯を貼り付けて断面三角形状にするもので，全面的にミガキによる調整がみられる。残存部分の左側上端部には，補修孔の可能性のある穿孔の一部がみられる。

66～68は，ほぼ同様の器形や器面調整をもつ土器である。66・67は口縁部であり，横位の条痕による器面調整が残る。68は胴部であり，わずかにくびれ部が観察される。69は，小破片ではある。口縁部の断面形状がⅢ類土器にも類似するが，肥厚もほとんどないことから特に決め手に欠くため，本類に分類している。70は底面に組織痕のみられる土器である。編布の圧痕の可能性がある。71は底部であり，全面にミガキが施される。65とは胎土や色調，焼成などの特徴から同一個体の可能性がある。

**(2) 石器（第22～27図　72～115）**

石器は，打製石鏃，スクレイパー，打製石斧，磨・敲石などが出土している。その多くがⅡｂ層中の出土で縄文時代後・晩期の可能性が高い。一部は表土中の出土であるが，縄文時代の可能性が高いものはここで取り上げている。

この中で，特に重視したいのが打製石斧の調整・加工に係るとみられる剥片が出土している点である。本遺跡では，打製石斧の再加工が行われた可能性がある。

なお，磨・敲石が多数出土しており，植物加工が行われたことが推察されるが，これに対応する石皿は確認できていない。

**①打製石鏃（第22図　72）**

72は，確認調査の際に出土した長身の鏃である。両側縁の中ほどからやや下部にかけて内湾気味となる。脚部は若干外側に張り出すが，左右非対称であり，基部の抉りは浅い。

**②抉入石器（第22図　73）**

73は，安山岩剥片の一端に幅７～８㎜程度の二次加工を施すものである。

**③スクレイパー（第22・23図　74・75）**

74は下半部は欠損するが，右側縁に鋭い刃部加工がみられるものである。石材は玉随である。75は素材として打製石斧と共通するホルンフェルスを用いるものであるが，打製石斧としての使用痕が認められないものである。背部に刃部の加工痕跡が認められることから，石斧ではなく大型のスクレイパーと判断した。

**④打製石斧（第23～25図　76～89）**

用途は土掘具と考えられる。平面形により，次の４つに分類した。

Ⅰ類　基部と刃部の境に明瞭な肩を持つ凸字形（広刃型・有肩型・ラケット形）を呈するもの
Ⅱ類　両耳形（ヘラ形）を呈するもの
Ⅲ類　平面形が長方形で短冊形（撥形）を呈するもの
Ⅳ類　その他のものを一括した。

以下、分類に従い記述する。

**Ⅰ類（第23図　76～78）**

76・77は，いずれも欠損品である。76は基部のみ残存し，全形が判明しない。側面に敲打調整が残ることから刃部が磨製の石斧であった可能性もある。77は，刃部の基部に対して右側に膨らむ非対称の形状となっている。右下部分の一部には欠損もみられる。いわゆる「靴形」とされるものである。78は凸字形の石斧であり，刃部付近は使用による摩滅が著しい。

**Ⅱ類（第23・24図　79～82）**

79は，完形の打製石斧である。基部と刃部の幅の差が小さいものでヘラ形を呈するものである。両側縁部に結束のためのくびれ部が整形された後，くびれ部に刃潰し状の敲打が施されるものである。

80～82はいずれも両耳形の打製石斧の刃部であり，基部は欠損する。80・82は先端が比較的丸みを帯びるもので，81は先端が尖るものである。いずれも先端部付近には使用によるものとみられる摩耗痕跡が認められる。

**Ⅲ類（第24図　83・84）**

83・84はいずれも短冊形の打製石斧で，中ほどで欠損している。83は基部であり，84は刃部である。

**Ⅳ類（第24～25図　85～89）**

85は完形で，基部から刃部に向かって幅が広がるバチ形を呈する比較的薄手のものである。86は長方形のものに近い平面形状のものであるが，先端に向かって幅が狭くなるものであるので，別分類とした。打製石斧と同じ素材を用いるものであるが，他のものよりも細身で雰囲気が異なるものである。側面を部分的に敲打でつぶしたものであるので，部分磨製の石斧の可能性もある。87～89は打製石斧そのものではないが，打製石斧の再加工を行った際に作出された調整剥片である。調査中には，こういった剥片が散在して出土している。

**⑤磨・敲石（第25～26図　90～102）**

磨・敲石の石材として，多孔質の安山岩や砂岩を多く使用する。直径が10㎝大前後のものが中心で，円形や卵形を呈する。ただし，直径４～５㎝大の小型品も少数な

がら存在するので，大小の使い分けを行っていた可能性もある。磨・敲石は以下のような分類を行った。

Ⅰ類

表裏面の中央に敲打による凹みがみられるもの

Ⅱ類

表裏面の中央に敲打による凹みのないもの

以下、分類に従い説明を行う。

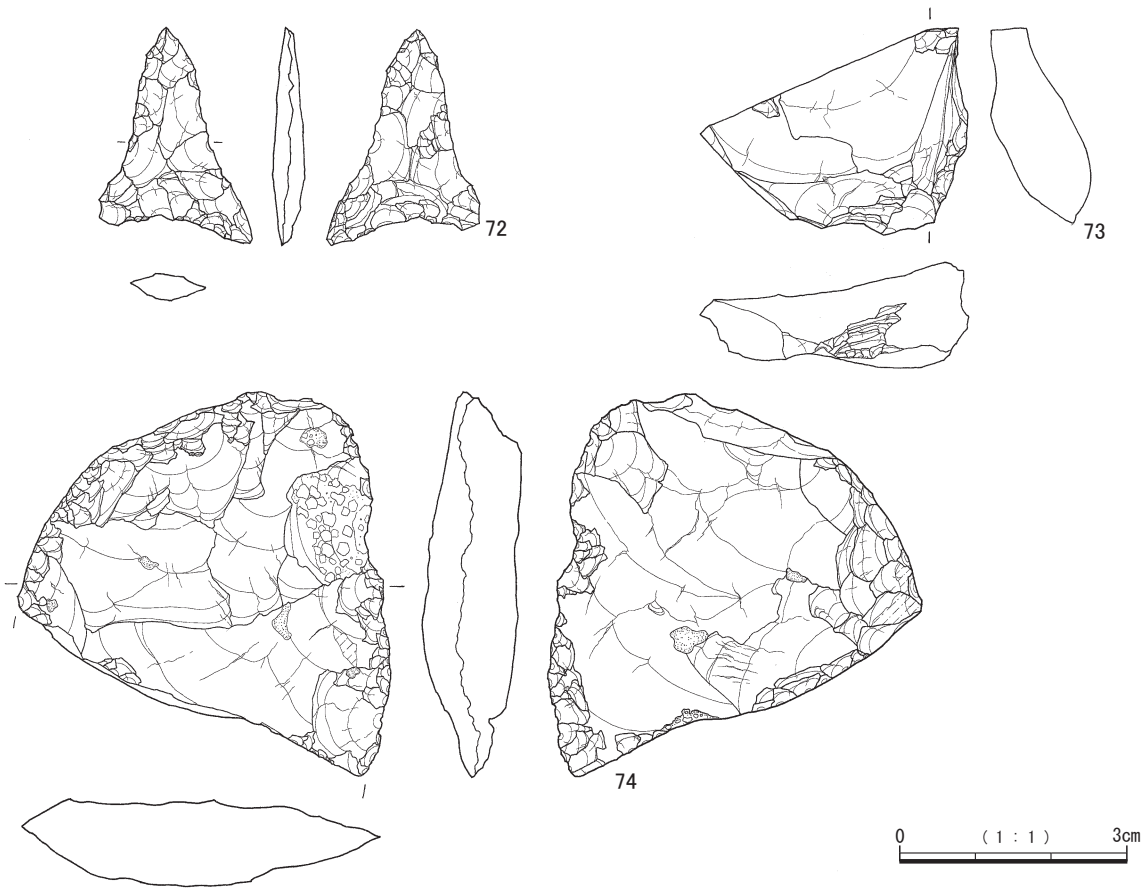
**Ⅰ類（第25～26図　90～96）**

90・91は，平面形が円形のものである。90は，側面のほぼ全面に敲打痕が残るものである。裏面にはクレーター状に凹んだ剥離痕があるが，さらにその部分の最下面にあたる部分を中心として敲打痕が残る。91は，側面の一部が破損のため欠損するものである。欠損の結果として凹んだ部分にも敲打痕が残るものである。以上の２点に共通するのは，欠損してもその部分を活用してさらに敲打に用いているという点であり，注目される点である。

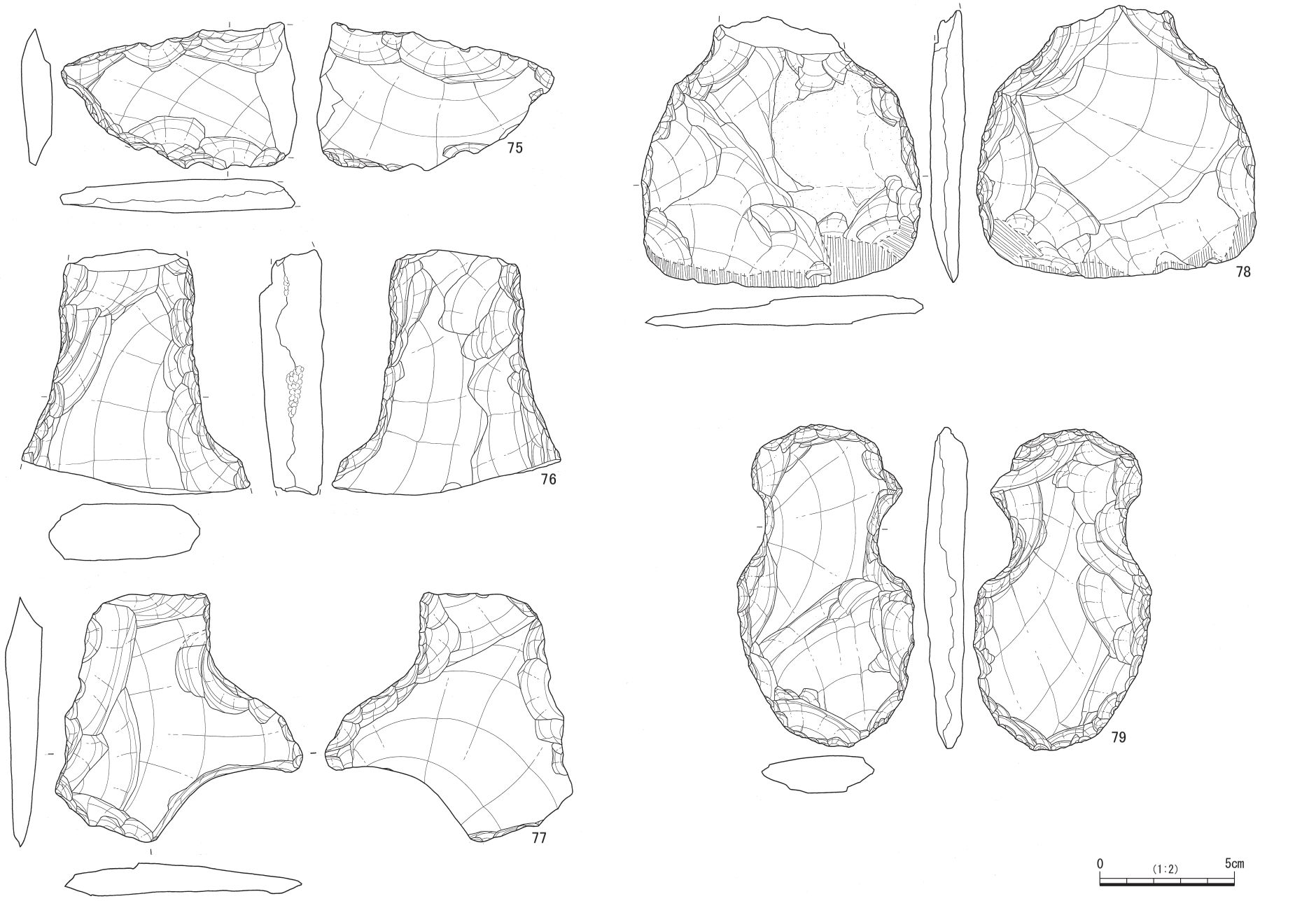
92～95は一部欠損しているものを含むが，もともとは正面形が楕円形もしくはそれに近い形状をしていたとみられるものである。92・93は，ほぼ完全なものである。特に92は，正面と側面にまたがる部分の一部に楕円形状の磨り面が残る。94は，やや不定形のものである。表裏面の凹みは他のものよりも大きく，下面の敲打も同様に大きく凹みが形成されるまで敲打が行われるものである。95は半分ほどの残存であるが，側面の一部に礫器の刃部に類似した部分が形成される。さらに刃部の先端付近には敲打がみられる。なお，ここで掲載している磨・敲石には基本的に表裏の両面敲打による凹みがみられるものがほとんどであるが，本資料だけは凹みは片面にしかみられないのが特徴である。96は，断面形が二等辺三角形に近いものである。正面の稜の中央には敲打による凹みがあり，その裏面にあたる部分にも同様に敲打による凹みがみられる。また，下面にも激しい使用をうかがわせる敲打痕を残す。

**Ⅱ類（第26図　97～102）**

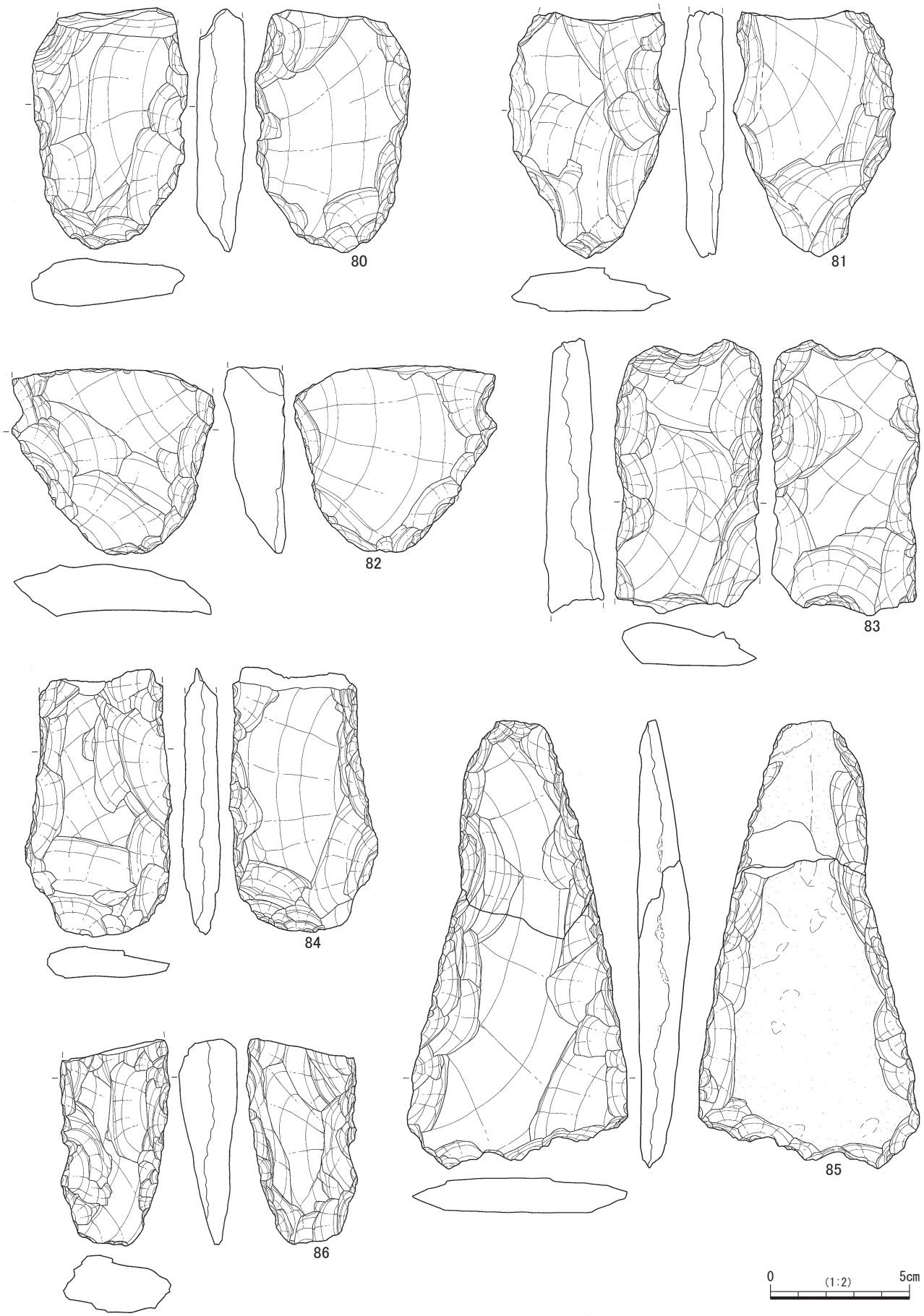
97・98は，側面に敲打を残す。97は側面のほぼ全面に敲打を残すもので，一部には使用によるとみられる欠損もみられる。ただし，欠損した部分の上にも敲打痕を残すものである。98は，上面と下面及び両側面の対向する４箇所に特に明瞭に敲打痕を残すものである。99は軟質の石材を用いるもので風化が激しい。正面の一部に磨り面を残すが，敲打痕は確認することができなかった。100は，側面に若干の敲打痕を残すものである。半分近くが欠損するが，割れた部分にも敲打がみられるので欠損部の根元を再利用したものとみられる。101・102は小型



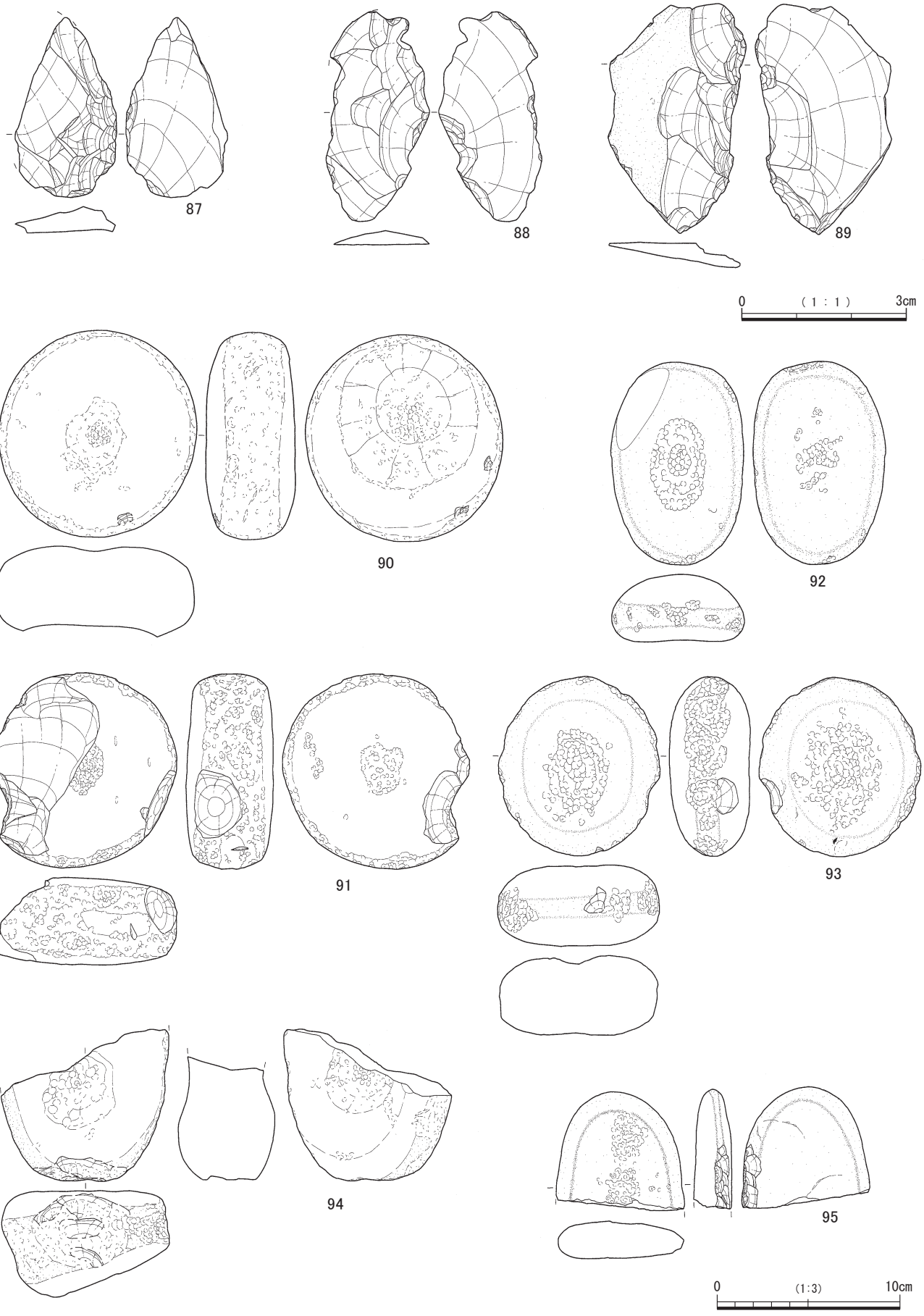

第22図　縄文時代の石器（１）



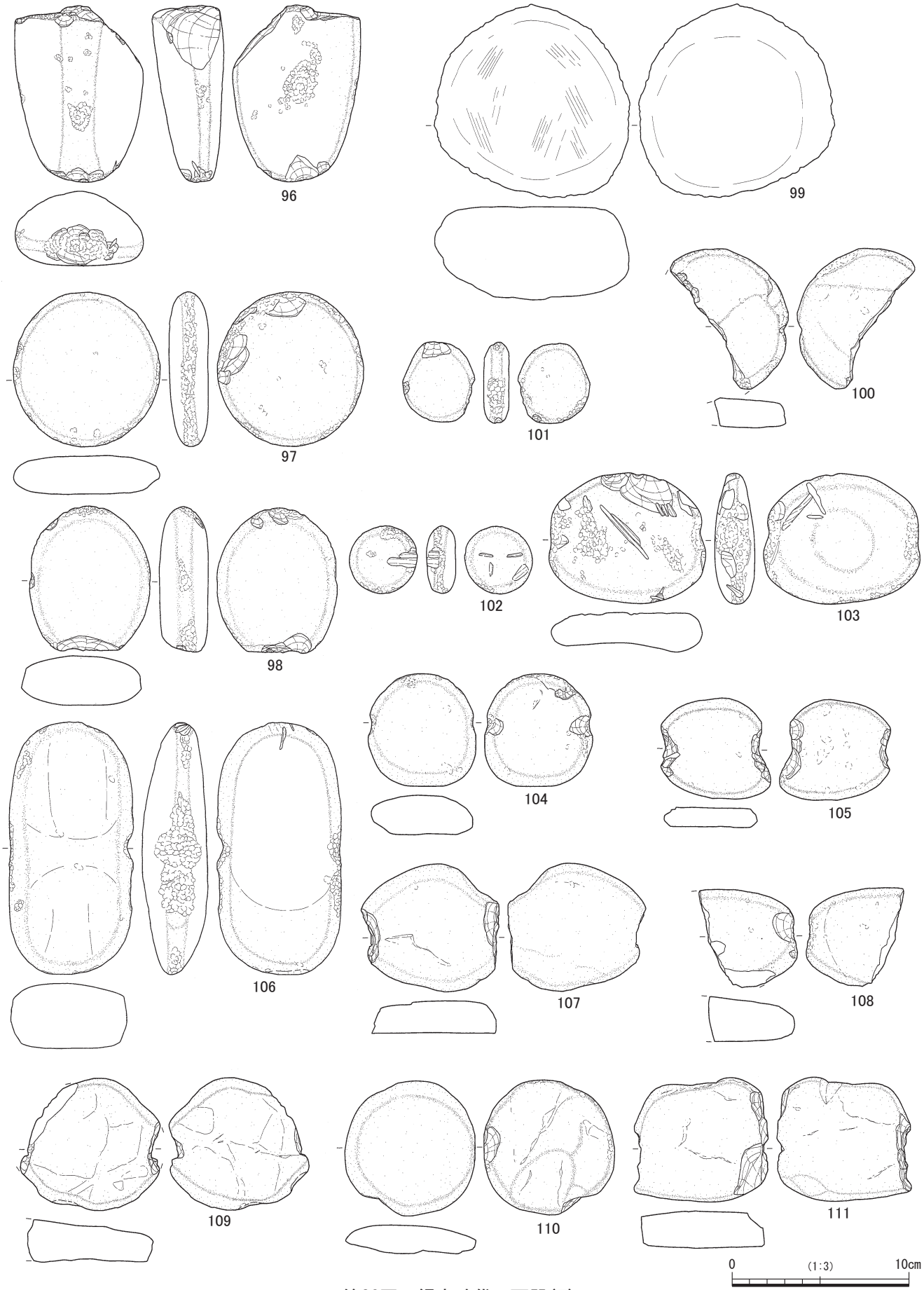

第23図　縄文時代の石器（2）



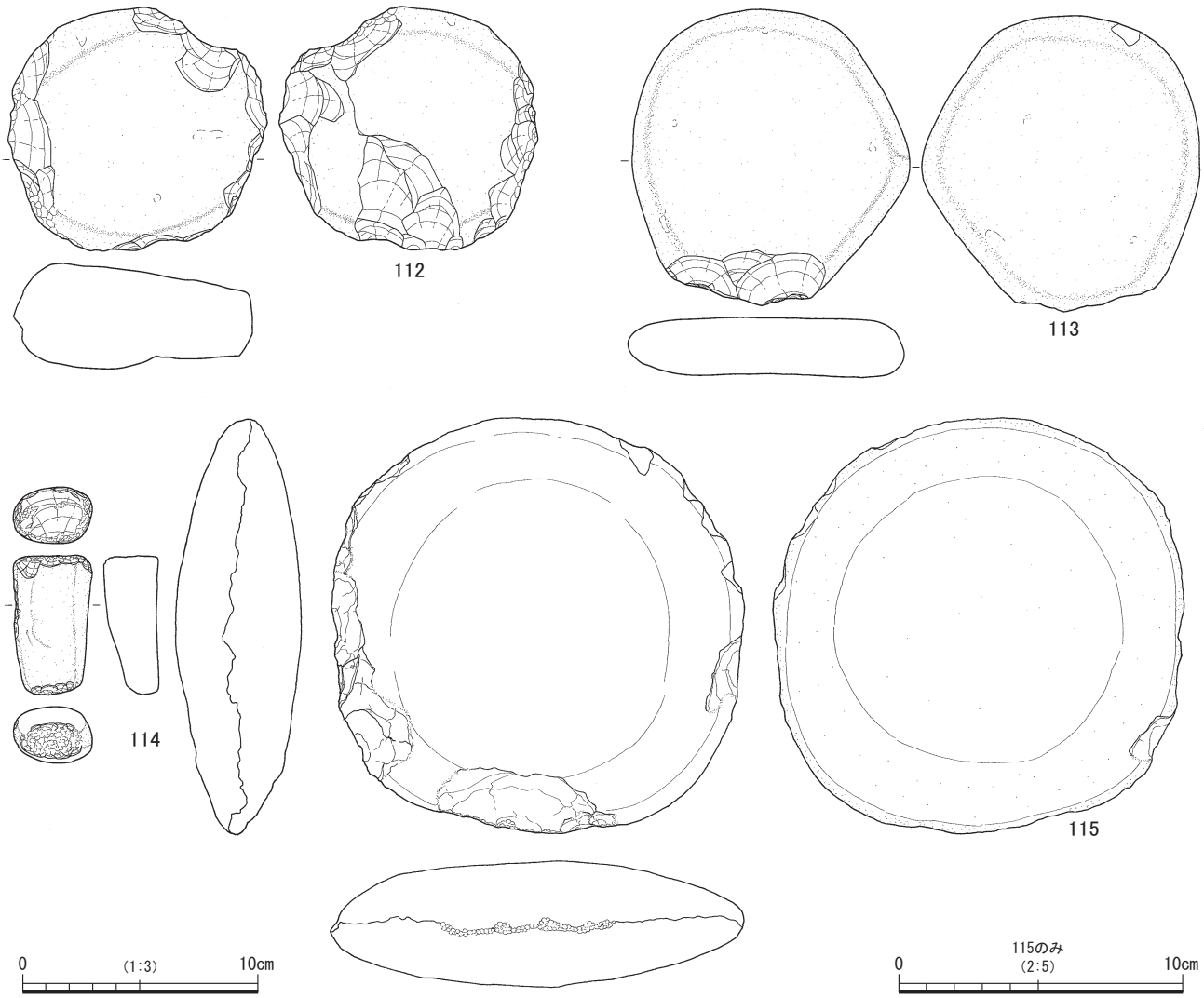

第24図　縄文時代の石器（3）




第25図　縄文時代の石器（４）




第26図　縄文時代の石器(5)




第27図　縄文時代の石器（6）

のもので，直径４～５㎝を測るものである。101は側面の中でも下面に敲打が集中する傾向がある。一部には使用によるとみられる欠損もみられる。102も側面の一部に敲打が偏在するが，101よりは散在する。表面には溝状の削痕が数条みられるが方向はやや不規則である。

**⑦石錘（打欠石器）（第26図　103～111）**

平面形が楕円形もしくは角の丸い方形などの扁平礫の両側を一部打ち欠いて製作している。出土状況をみると，Ｊ～Ｌ-31～35区（調査区のほぼ中央部）に比較的に集中して出土する傾向がある。ただし，36区から西側については，Ⅴ層（アカホヤ）上面まで削平されているので，あくまでも傾向である。

103は楕円形の扁平礫の左右の両端を打ち欠き、その後敲打による加工を加えて抉りを作出するものである。上面には剥離が，下面には敲打が残る。正面には若干の敲打がみられる。104・105は，左右の両端を打ち欠いて抉りを作出するものである。正面・裏面の一部には弱い敲打が若干残る。106は，縦長の楕円形の礫を素材とするものである。左右の両端を敲打によって抉りを作出する。他の石錘（打欠石器）と異なり，中央部は厚みがあり膨らむ。 107は扁平な素材を用いるもので，左右の両端を打ち欠いて抉りを作出することで，平面形が六角形状となるものである。抉りは２箇所とも正面から入れられており，断面形は台形状を呈する。108は半分程度の残存であるが，もともとは横長の楕円形状を呈していたものと考えられる。端部を打ち欠き抉りを作出するものであるが，打点周辺には後からの敲打が入るものである。109は，亜円礫を素材とする。両端を打ち欠き抉りを作出するが，左辺の抉りは浅い。110は円形の扁平礫を素材とするものであり，左右の両端部のうち一方は打ち欠きで，もう一方は敲打によって若干の抉りを作出する。正面は平坦であるが，裏面には素材礫の自然面を多く残

す。111は不定形の偏平礫を素材とするものであり，左右の両端を打ち欠くことで平面形が正方形状となるものである。正面・裏面には加工はなく自然面を残す。

**⑧その他の石器（第27図　112～115）**

敲石・礫器・円盤状石器については，その他の石器としてここで記述する。

**礫器（第27図　112・113）**

扁平礫を素材として端部に打撃を加え，簡単な加工を加える程度の石器である。112は側面の多くに加工を加えて刃部にするもので，左右の両端と下面に特に明瞭にみられる。113は下端部のみに刃部をもつもので，正面から打撃を加える程度の簡単な加工のものである。

**敲石（第27図　114）**

114は，棒状の敲石である。下方に向かって幅が若干狭くなるもので，上面および下面には敲打痕が残る。

**円盤状石器（第27図　115）**

115は凝灰岩の扁平礫を使用したものであり，周縁には粗い加工が認められる。これは剥離によるものではなく，敲打によるものと考えられる。

第５表　縄文時代遺構内出土遺物観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 石材 | 出土遺構 | 遺構検出層位 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 15 | 1 | 丸玉（垂飾品） | 翡翠か | 土坑１ | Ⅶ | 1.4 | 1.3 | 1.1 | 3.5 | 2135 | J-29区 |

第６表　縄文時代土器観察表（１）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 17 | 2 | 深鉢 | | 小牧３Aタイプ | K-37 | Ⅰ | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突 | ○ | | | ○ | ○ | | 明赤褐 | にぶい赤褐 | 一括 | |
| | 3 | 深鉢 | | 円筒形貝殻条痕文 | L-35 | Ⅵ | 底部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 7134 | |
| | 4 | 深鉢 | | 前平式土器 | M-38 | | 胴部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | | 溝２出土 |
| | 5 | 深鉢 | | 前平式土器 | M-38 | | 胴部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | | 溝２出土 |
| | 6 | 深鉢 | | 前平式土器 | M-38 | | 胴部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | | 溝２出土 |
| | 7 | 深鉢 | | 小牧３Aタイプ | M-38 | | 胴部 | | | | 貝殻刺突 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | | 溝２出土 |
| | 8 | 深鉢 | | 吉田式土器 | M-38 | | 口縁部 | | | | 貝殻押引 | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 明赤褐 | | 溝２出土 |
| | 9 | 深鉢 | | 轟A式土器 | M-38 | | 口縁部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | ○ | | ○ | ○ | | オリーブ黒 | にぶい黄褐 | | 溝２出土 |
| | 10 | 深鉢 | | 大平式土器 | M-38 | | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁による鋸歯文 | ○ | | ○ | | ○ | | 橙 | にぶい黄橙 | 7535 | 溝２出土 |
| | 11 | 深鉢 | | 阿高系土器 | M-38 | | 胴部 | | | | 押線文・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | 灰褐 | 灰褐 | 5972 | 溝２出土 |
| | 12 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-30 | Ⅰ | 口縁～胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | | ○ | | 灰褐 | にぶい赤褐 | 一括 | |
| | 13 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | J-35 | Ⅱ | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | | ○ | | にぶい褐 | にぶい褐 | 3369 | |
| | 14 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-33 | Ⅰ | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | | ○ | | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 一括 | |
| | 15 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-29 | Ⅱc | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい赤褐 | 1015 | |
| | 16 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 一括 | |
| | 17 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | にぶい褐 | 3524 | |
| | 18 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-35 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | 明褐 | 7166 | |
| | 19 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | | にぶい黄褐 | 暗褐 | 3537 | |
| | 20 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-31 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | | 明赤褐 | 赤褐 | 762 | |
| | 21 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-29 | Ⅱc | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい赤褐 | 1011 | |
| | 22 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-28・29 | Ⅱc | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい橙 | 橙 | 1007 | |
| | 23 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-32 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 灰褐 | 橙 | 7925 | |
| | 24 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-28 | Ⅱ・Ⅱc | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | | ○ | | 明褐 | 明褐 | 7 | |
| | 25 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-29 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | 赤褐 | 1014 | |
| 18 | 26 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 胴部 | 25 | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい褐 | 3528 | |
| | 27 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-28・29 | ⅡC | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | にぶい褐 | 明褐 | 1005 | |
| | 28 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-29 | Ⅱb・Ⅱc | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | 橙 | 1246 | |
| | 29 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | にぶい褐 | 5565 | |

## 第７表　縄文時代土器観察表（２）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 18 | 30 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-32 | Ⅱa | 口縁部～頸部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | 赤 | 赤 | 3493 | |
| | 31 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | J-35 | Ⅱb | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | | 赤褐 | 赤褐 | 6628 | |
| | 32 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | J-29 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 明褐 | 明褐 | 2112 | 口縁部肥厚 |
| | 33 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | L-34 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 3541 | |
| | 34 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-32 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | ○ | | ○ | | にぶい褐 | にぶい褐 | 7862 | |
| | 35 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-32 | Ⅱb | 胴部 | | | | 細沈線・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 7751 | |
| | 36 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | J-27 | Ⅱb | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 5823 | |
| | 37 | 深鉢 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-32 | Ⅱb | 胴部 | | | | 貝殻腹縁刺突・貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7816 | 表面風化 |
| | 38 | 台付皿 | Ⅰ | 丸尾式土器 | K-35 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | | 明褐 | 明褐 | 6885 | |
| 19 | 39 | 鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | L-30・K-32 | Ⅰ・Ⅱa | 口縁部 | | | | 磨消縄文・沈線・凹点文・ミガキ | | | | | | | 橙 | 橙 | 2652 | |
| | 40 | 鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-31・K-31 | Ⅱa・Ⅱb | 口縁部 | | | | 磨消縄文・沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 橙 | 橙 | 2079 | |
| | 41 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-29・L-28・I-26ほか | Ⅱa・Ⅱb | 口縁部～胴部 | 31 | | | 磨消縄文・沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 明赤褐 | 明赤褐 | 1785 | |
| | 42 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-38・K-27 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 沈線・ミガキ ユビオサエ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 6422 | |
| 20 | 43 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-27 | Ⅱb | 口縁部 | | | | ミガキ・ユビオサエ | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 6428 | |
| | 44 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-28 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 6008 | |
| | 45 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-32 | Ⅰ | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 46 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | L-29 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | | ○ | | 黒褐 | 黒褐 | 1290 | |
| | 47 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | L-30 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい橙 | 3106 | |
| | 48 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | L-29 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | | ○ | | 橙 | 橙 | 1287 | |
| | 49 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-31 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 押引連点文・条痕 | ○ | | | | ○ | | 黒褐 | 黒褐 | 763 | |
| | 50 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-34 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 沈線・ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 一括 | |
| | 51 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | I-28 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 赤褐 | 赤褐 | 2137 | |
| | 52 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | I-29 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 2140 | |
| | 53 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-27 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 沈線・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 5817 | |
| | 54 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | I-29 | Ⅱb | 口縁部 | | | | 沈線・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 2144 | |
| | 55 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-27 | Ⅱb | 口縁部 | 33 | | | ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 5747 | |
| | 56 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J・K-34 | Ⅰ | 口縁部 | | | | ミガキ・条痕 | ○ | | | | ○ | | 褐 | 褐 | 一括 | |
| 21 | 57 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-25 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい橙 | 5312 | |
| | 58 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-27 | Ⅱb | 頸部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 5827 | |
| | 59 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-28 | Ⅱb | 頸部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 5830 | |
| | 60 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-29 | Ⅱc | 頸部 | | | | ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 1712 | 内面風化 |
| | 61 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | K-27 | Ⅱb | 胴部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | | | ○ | | 赤褐 | 赤褐 | 6751 | |
| | 62 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J・K-32 | Ⅱa・Ⅱb | 胴部 | | | | 沈線・凹点文・ミガキ | ○ | | | | ○ | | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 2674 | |
| | 63 | 深鉢 | Ⅱ | 西平系土器 | J-27 | Ⅱb | 胴部 | | | | ミガキ | ○ | | | | ○ | | 褐 | 褐 | 5832 | |
| | 64 | 深鉢 | | その他 | F・G-12 | Ⅰ | 口縁部～胴部 | 30.5 | | | ミガキ・突帯 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 14T（確認調査時） | 無刻目突帯文土器 |
| | 65 | | | その他 | K-29 | Ⅱa | 口縁部 | | | | ミガキ・突帯 | ○ | | | | ○ | ○ | 黄褐 | 黄褐 | 1059 | 補修孔あり |
| | 66 | 深鉢 | | その他 | K-37 | Ⅰ | 口縁部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 67 | 深鉢 | | その他 | J-30・31 | Ⅰ | 口縁部 | | | | 貝殻条痕 | ○ | | | | ○ | | 暗褐 | 暗褐 | 一括 | 種子圧痕あり |
| | 68 | | | その他 | K-31 | Ⅱa | 胴部 | | | | ナデ | ○ | | | | ○ | | 橙 | 橙 | 766 | |

## 第８表　縄文時代土器観察表（３）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 21 | 69 | | Ⅳ | その他 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | | | | ナデ | ○ | | | | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 276 | |
| | 70 | | Ⅳ | その他 | K-36 | Ⅱb | 底部 | | | | 底部網代圧痕 | ○ | | | | ○ | | にぶい黄橙 | 黒褐 | 6887 | |
| | 71 | | Ⅳ | その他 | K-31 | Ⅱa | 底部 | | 5.2 | | ミガキ | ○ | | | | ○ | | 黒 | 黒褐 | 2391 | |

## 第９表　縄文時代石器観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 石材 | 区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 22 | 72 | 打製石鏃 | 安山岩 | L-31 | Ⅰc | 2.85 | 2.0 | 0.35 | 1.0 | 一括 | |
| | 73 | 抉り入石器 | 安山岩 | K-27 | Ⅱa | 2.8 | 3.5 | 1.1 | 10.0 | 5304 | 西北九州産 |
| | 74 | スクレイパー | 玉随 | J-24 | Ⅰ | 4.6 | 5.0 | 1.16 | 28.0 | 一括 | |
| 23 | 75 | スクレイパー | ホルンフェルス | K-35 | Ⅱa | 8.9 | 5.3 | 1.16 | 73.5 | 4363 | |
| | 76 | 打製石斧 | ホルンフェルス | L-34 | Ⅱb | 9.2 | 8.4 | 2.3 | 208.0 | 3530 | |
| | 77 | 打製石斧 | ホルンフェルス | K-35 | Ⅱa | 9.1 | 9.5 | 1.34 | 112.0 | 4274 | |
| | 78 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-32 | | 10.2 | 10.5 | 1.1 | 154 | 7169 | |
| | 79 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-35 | | 12.2 | 6.7 | 1.45 | 151.5 | 3374 | |
| 24 | 80 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-30・31 | Ⅰ | 8.7 | 5.5 | 2.71 | 118.5 | 一括 | |
| | 81 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-30 | Ⅱa | 9.0 | 5.8 | 1.55 | 103.5 | 3099 | |
| | 82 | 打製石斧 | ホルンフェルス | K-27 | Ⅱ | 7.0 | 7.4 | 2.72 | 105.0 | 一括 | |
| | 83 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-35 | Ⅱa | 9.9 | 5.3 | 2.68 | 135.0 | 4234 | |
| | 84 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-31 | Ⅱb | 9.6 | 5.4 | 1.15 | 91.0 | 7278 | |
| | 85 | 打製石斧 | ホルンフェルス | L-29 | Ⅱa | 16.3 | 8.1 | 2.8 | 241.0 | 1273 | |
| | 86 | 打製石斧 | ホルンフェルス | J-37 | Ⅰ | 7.5 | 3.6 | 2.98 | 66.0 | 一括 | |
| 25 | 87 | 調整剥片（打製石斧） | ホルンフェルス | J-30 | Ⅱb | 6.5 | 3.7 | 1 | 65.8 | 6984 | |
| | 88 | 調整剥片（打製石斧） | ホルンフェルス | L-34 | Ⅱa | 7.6 | 3.8 | 0.5 | 22.3 | 3182 | |
| | 89 | 調整剥片（打製石斧） | ホルンフェルス | L-33 | | 8.4 | 5 | 0.9 | 35.8 | 一括 | |
| | 90 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-32 | Ⅱa | 11.87 | 11.25 | 4.81 | 917 | 809 | 鉄分付着 |
| | 91 | 磨・敲石 | 砂岩 | L-35 | Ⅰ | 10.99 | 11.89 | 4.63 | 714 | 一括 | 鉄分付着 |
| | 92 | 磨・敲石 | 砂岩 | L-30 | Ⅱb | 11.2 | 7.4 | 3.42 | 431 | 6818 | 鉄分付着 |
| | 93 | 磨・敲石 | 砂岩 | L-32 | Ⅱb | 9.1 | 8.5 | 4.1 | 532 | 3046 | |
| | 94 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-32 | Ⅱb | 7.7 | 9.5 | 5.67 | 475 | 7678 | 鉄分付着 |
| | 95 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-32 | Ⅱa | 6.8 | 7.1 | 2.6 | 131 | 5398 | 鉄分付着 |
| 26 | 96 | 磨・敲石 | 凝灰岩 | K-35 | Ⅱb | 10.1 | 7.2 | 3.9 | 356 | 7104 | 鉄分付着 |
| | 97 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-35 | Ⅱa | 8.9 | 8.5 | 2.16 | 182 | 160 | 鉄分付着 |
| | 98 | 磨・敲石 | 頁岩 | L-32 | Ⅱa | 8.98 | 7.71 | 3.69 | 221 | 818 | 風化激しい・鉄分付着 |
| | 99 | 磨・敲石 | 砂岩 | L-32 | Ⅱa | 11.1 | 11.2 | 5.0 | 920 | 2015 | |
| | 100 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-32 | Ⅱa | 5.2 | 8.4 | 1.65 | 92 | 673 | 鉄分付着 |
| | 101 | 磨・敲石 | 砂岩 | K-36 | Ⅱb | 4.7 | 4.2 | 1.4 | 40 | 7044 | 小型品・鉄分付着 |
| | 102 | 磨・敲石 | 砂岩 | I-27 | Ⅰ | 3.9 | 3.8 | 1.6 | 35 | 一括 | 小型品 |
| | 103 | 石錘 | 砂岩 | L-33 | Ⅱb | 8.9 | 7.3 | 1.98 | 195 | 7847 | 鉄分付着 |
| | 104 | 石錘 | 砂岩 | L-35 | Ⅱa | 6.6 | 6.2 | 2.3 | 135 | 一括 | |
| | 105 | 石錘 | 砂岩 | K-35 | Ⅱb | 6.3 | 5.7 | 1.2 | 63 | 7106 | 鉄分付着 |
| | 106 | 石錘 | 砂岩 | J-33 | Ⅱa | 14.5 | 7.1 | 3.7 | 580 | 4613 | 縦長 |
| | 107 | 石錘 | 砂岩 | K-29 | Ⅱc | 7.9 | 7.3 | 1.72 | 148 | 1670 | |
| | 108 | 石錘 | 砂岩 | L-34 | Ⅱa | 5.0 | 5.9 | 2.4 | 87 | 5563 | |
| | 109 | 石錘 | 砂岩 | K-32 | Ⅱb | 7.4 | 7.9 | 1.8 | 171.5 | 一括 | 鉄分付着 |
| | 110 | 石錘 | 砂岩 | I-27 | Ⅱb | 7.7 | 7.5 | 1.59 | 130 | 6775 | |
| | 111 | 石錘 | 砂岩 | K-29 | Ⅱc | 7.6 | 7.2 | 1.97 | 181 | 1668 | |
| 27 | 112 | 礫器 | 砂岩 | L-39 | Ⅱa | 7.3 | 6.8 | 3.4 | 197 | 1661 | |
| | 113 | 礫器 | 砂岩 | J-26 | Ⅱa | 12.52 | 12.78 | 3.62 | 588 | 667 | |
| | 114 | 敲石 | 頁岩 | K-32 | Ⅱb | 6.96 | 3.28 | 2.21 | 69 | 3491 | 鉄分付着 |
| | 115 | 円盤状石器 | 砂岩 | K-29 | Ⅱc | 15.1 | 14.7 | 4.5 | 812 | 1010 | |

## 第２節　弥生時代の調査

本遺跡の弥生時代の遺物包含層は，縄文時代後・晩期層と同じくⅡｂ層である。弥生時代の遺構は，調査区東側で土坑が１基検出された。土坑は一部のみの検出で全体像は不明である。遺構内からは，山ノ口Ⅱ式の甕が出土している。

弥生土器は，J・K-27～29区とK・L-31～35区の周辺に集中して散布が見られた。J-35区では，山ノ口Ⅱ式の大甕底部が出土した。

### １　弥生時代の遺構

**土坑２（第28～30図）**

K-28区のⅡｂ層で検出したが，東側は用水管等の設置による掘削で，西側は溝状遺構８（中世）により消滅している。残存するところでは，最大長1.42m，幅0.72m，検出面からの深さ0.11mの遺構である。埋土は単層で，粘性としまりのある黒色土である。Ⅱｃ層と類似するが，Ⅱｃ層よりややしまりは弱い。

116～118は，埋土から出土した甕型土器の口縁部から胴部にかけての破片と底部片である。これらは概ね山ノ口Ⅱ式の甕の破片と考えられ，同一個体の可能性もある。

### ２　弥生時代の遺物

本遺跡で出土した弥生時代の遺物は，Ⅱｂ層から出土したものである。以下に抽出した遺物の分類を述べる。

**(1) 土器（第31～36図）**

**①山ノ口Ⅱ式土器**

**甕形土器（第31～33図　119～145）**

119～145は，甕形土器である。口縁部は「く」字状であり，口縁部の断面形状には，三角形のものや四角形で端部中央部をやや凹ませることにより，口唇部が溝状となるものがみられる。胴部には，断面形が三角形の突帯が３条巡るものが多く，ハケやナデによる器面調整痕が残る。内面の屈曲部付近では，接合痕による僅かな段がみられる。脚部は充実した脚台であるが，底面をほんの僅かに上げ底としたものも多くみられる。脚部外面の接地面近くは，口唇部と同様に端部中央部をやや凹ませることにより，溝状とするものが多くみられる。

119～121は，口縁部の断面形状が四角形で端部中央部をやや凹ませるものである。胴部には，断面形が三角形の突帯が３条巡る。122・123は119～121とほぼ同じ特徴のものであるが，胴部以下が欠損で確認できないもので，胴部の突帯は２条以上であった可能性がある。124は，胴部の突帯が１条のみ確認できる。125は胴部片で，突帯は３条施される。

126・127は，口縁部の断面形状が三角形のものである。胴部には三角形の突帯が３条巡る。なお，口縁部形態が三角形のものは本遺跡ではこの２点のみの出土である。

128・129は，胴部に断面M字状の突帯１条を有する甕形土器である。

130～136は，口縁部を一括している。いずれも口縁部の断面形状は四角形で端部中央部をやや凹ませるものである。この中で，130・135・136については確実に胴部突帯を有しないものである。

137～145は，底部を一括している。いずれも脚部は充実した脚台で，脚部外面の接地面近くは，口唇部と同様に端部中央部をやや凹ませることにより，溝状とするものである。この中で138は，外面の器面調整はハケメが明瞭であるが，他の土器は基本的にヘラケズリである。また，多くは底面を僅かに上げ底としたものであるが，140・143・145は完全な平底である。

**壺形土器（第34図　146～161）**

146～161は，壺形土器である。146～150は山ノ口式土器に特有の一般的な壺形土器の口縁部で，口唇部はやや下がり気味である。

146～148は口縁部が厚く，断面が三角形状となるもので，内面にはナデ調整がみられる。

149は口縁部の厚みが薄いもので，口唇部には浅い凹みが溝状に巡るものである。150は他と比較して口径の小さいものである。

151・153は，二叉口縁類似壺形土器の口縁部である。二叉口縁壺形土器に類似しているが，口縁部のすぐ下位に小さな突帯を巡らせて二叉口縁状に見せている壺形土器である。口縁部の直径が大振りであるので，広口壺の可能性もある。152は，二叉口縁の壺形土器である。口縁部の下部に口縁部と同様な形状の突帯を巡らせることで口縁がもう一つ存在するようにみせるものである。

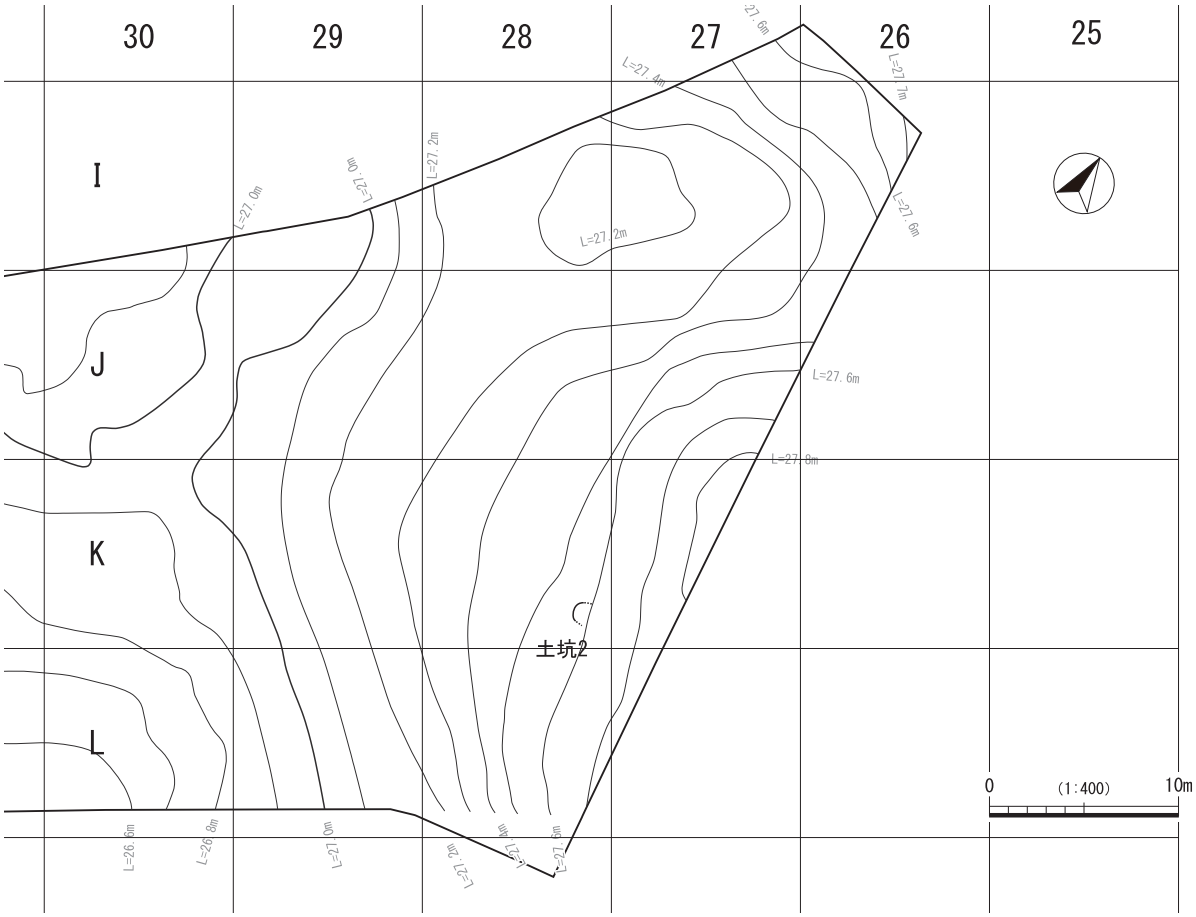
154は，壺の頸部から胴部にかけての破片である。少なくとも３条の突帯を横位に巡らせるものである。

155は，広口壺の口縁部である。やや平べったい口縁部の端部には凹みがみられる。

156～163は，壺の底部を一括している。162はケズリが明瞭なもので，赤みがかっており他の土器とは印象が異なる。163は，底部の強い丸みが特徴的である。

**大型甕形土器（第35・36図　164～175）**

164～175は，甕形土器の中でも大型のものを集めた。甕形土器と同様に，口縁部は逆Ｌ字状であり，端部の中央部をやや凹ませる。内面の屈曲部付近では，接合痕による僅かな段がみられる。胴部から口縁部については，大きく「く」字状に開き，口縁部下位約２㎝のところに体部にほぼ直角に３㎝弱に及ぶ高さの突帯が貼り付けられている。胴部から口縁部にかけては若干のカーブを描いて立ち上がるものである。この中で，特に173は口唇部上に種実とみられる圧痕が残るものである。175は若干風化しているが，比較的厚手の底部である。ほぼ正位置で出土しているが，掘り込みは確認されなかった。




第28図　弥生時代遺構配置図

**小型甕形土器（第36図　176～180）**

176～180は，小型甕形土器である。口縁部直径が概ね20㎝程度以下のものとした。また，鉢形土器との区別は，外面のススの付着の有無によって煮炊きに使用したとみられるものを基本的に甕形土器としている。

**高坏（第36図　181～184）**

181～184は，高坏である。

181はほぼ完形のもので，口縁部は外反し端部の中央部をやや凹ませる。胴部は丸みをおびるもので，口縁部と胴部の間には明瞭な屈曲がみられる。胴部の下にはやや上げ底の脚部が取り付けられており，口縁部～胴部と脚部の高さ比率はほぼ同じとなっている。脚部外面には，ケズリによる調整痕が明瞭に残る。

182・183は，高坏の坏部である。183は胎土や色調，焼成などの特徴から181と同一個体の可能性がある。

184は口唇部のほぼ中央に，口縁から胴部外面に向かって，焼成前の穿孔がみられる土器である。口縁部が体部から剥がれているため，さらに下部については明確ではない。田原迫ノ上遺跡出土遺物にも同様のものが存在する。

**②その他の弥生土器（第36図　185～191）**

山ノ口式土器に含まれないものを一括した。山ノ口式土器よりも時期が古いとみられるものも含んでいる。

185～188は，口縁部もしくは胴部外面に刻み目のある突帯を巡らす土器である。これらは弥生時代前期～中期前半頃に属する可能性がある。

189は，鉢形土器である。口縁部は平坦で，胴部が強く屈曲し．屈曲部から内側へ外反するものである。内外面に丁寧なヘラミガキなどが施される。

190は，甕形土器の底部である。底部に向かってカーブを描きながら幅を狭めるもので，底部は平底である。

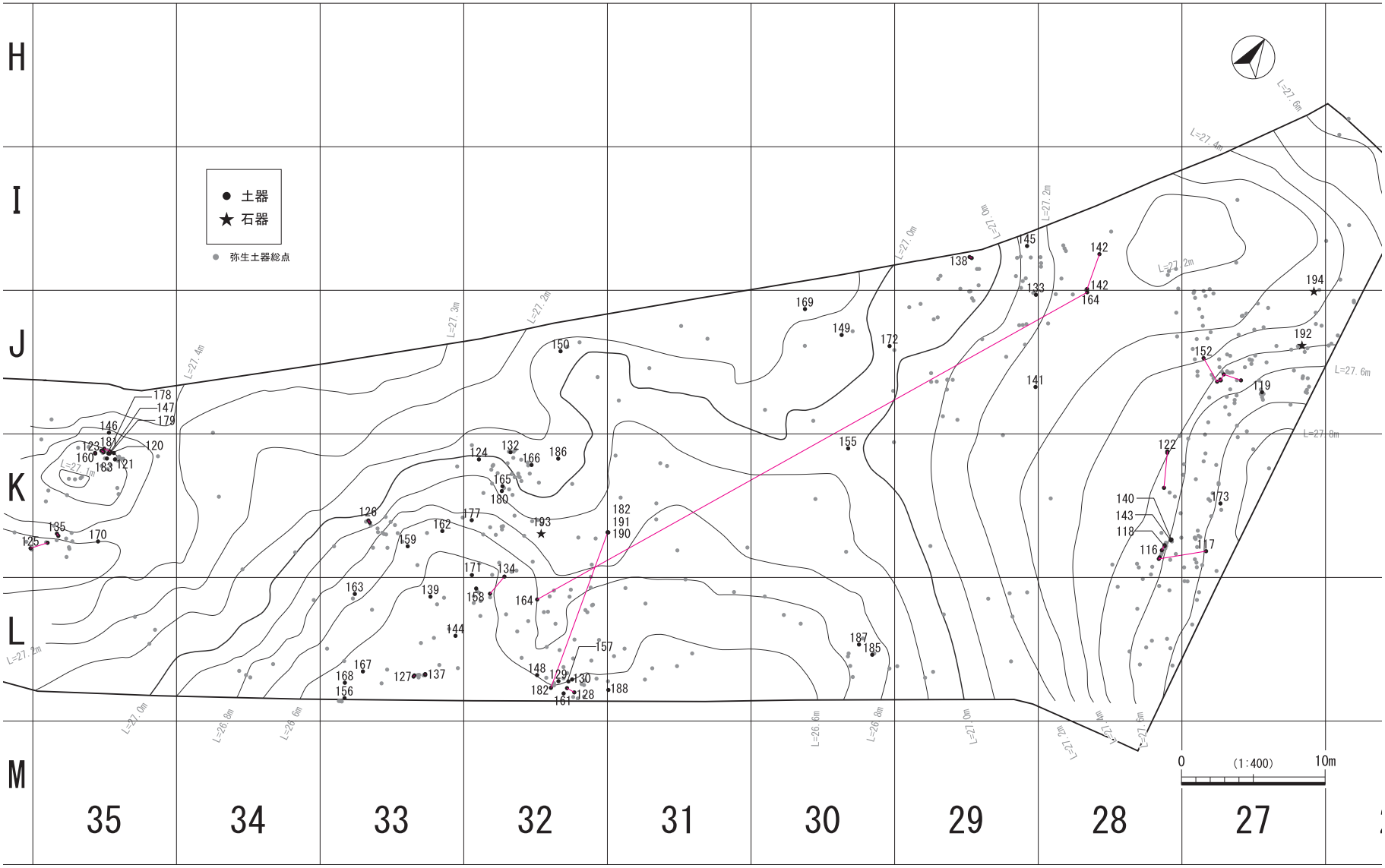
191は，壺形土器の胴部である。残存部の中でも上端部は，製作時における輪積み部分から欠損していると考えられ，擬口縁状となっている。胎土には小石を多く含む特徴的なものである。

**(2) 石器（第37図　192～195）**

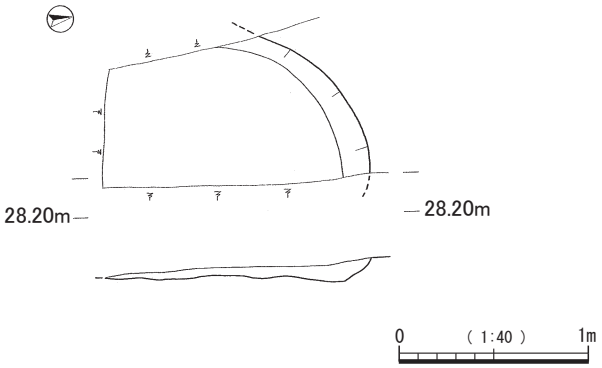
磨製石鏃が４点出土している。

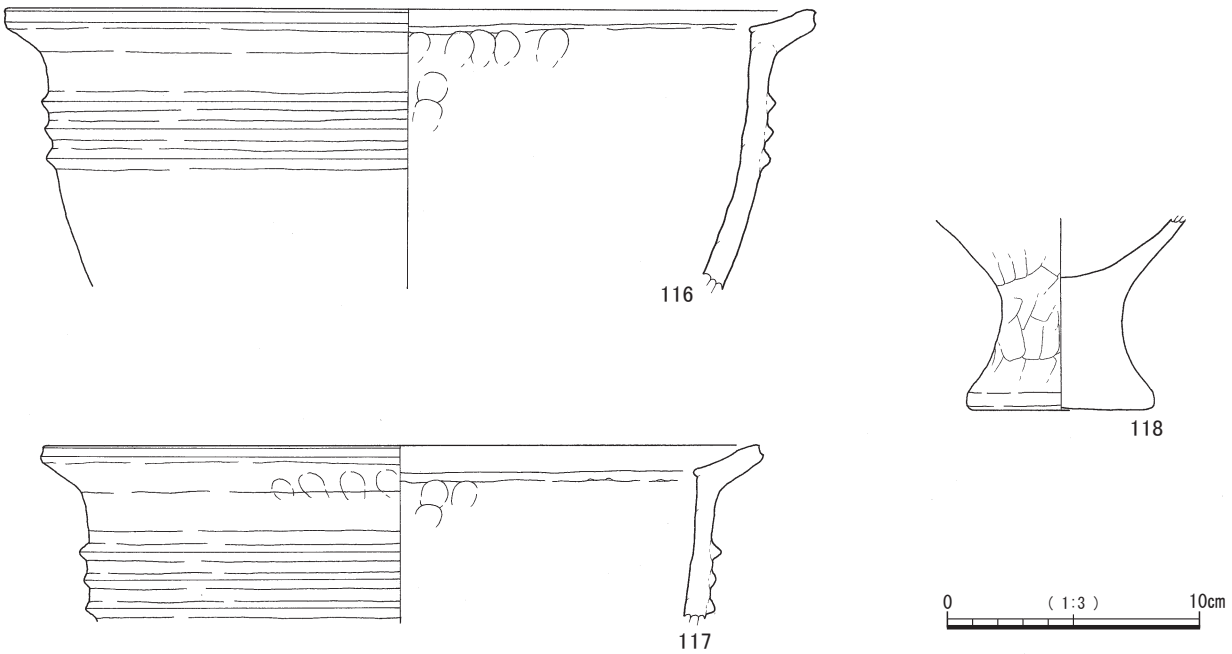
192は，基部の片側の角をわずかに欠くもののほぼ完形品である。黒色頁岩製で，裏面には基部を除く二側縁に沿って稜がつくられており，中央部が平坦になるように仕上げている。表面には際立った稜はみられない。表面は先端方向に向かって鋭い角度で磨き上げている。

193は先端を欠損するが，両側縁を鋭角に磨き上げるとともに中央部は平坦に仕上げている。他の石鏃と異な

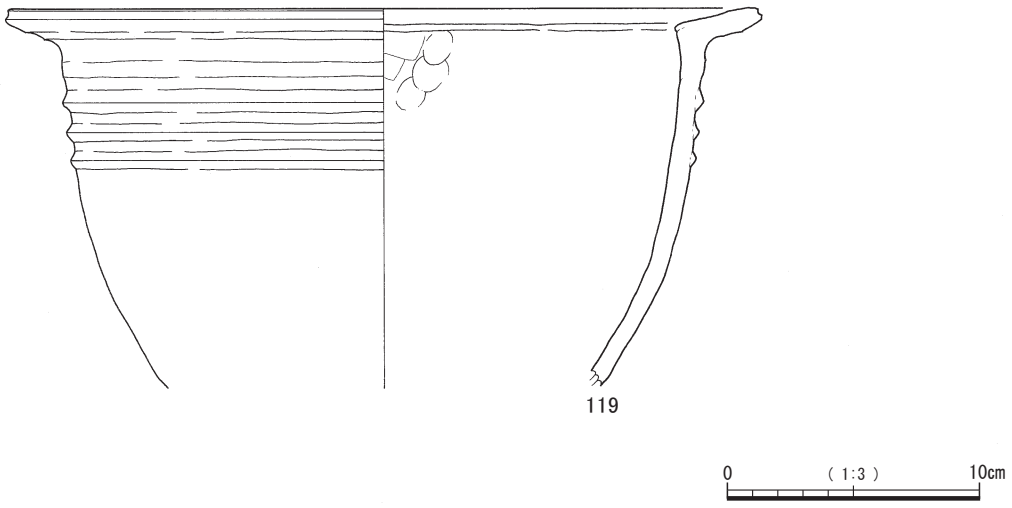



第29図　弥生時代遺物出土状況

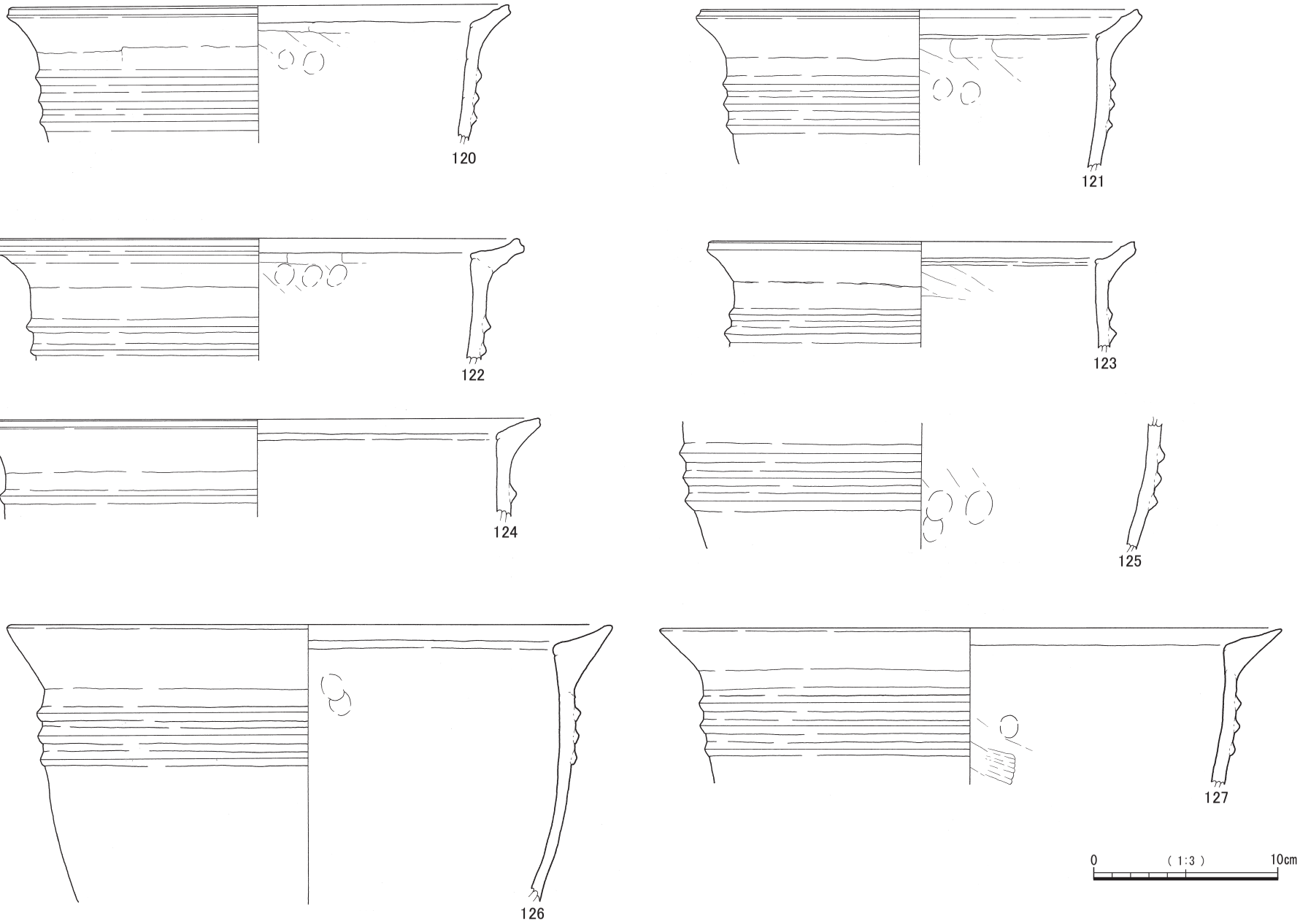


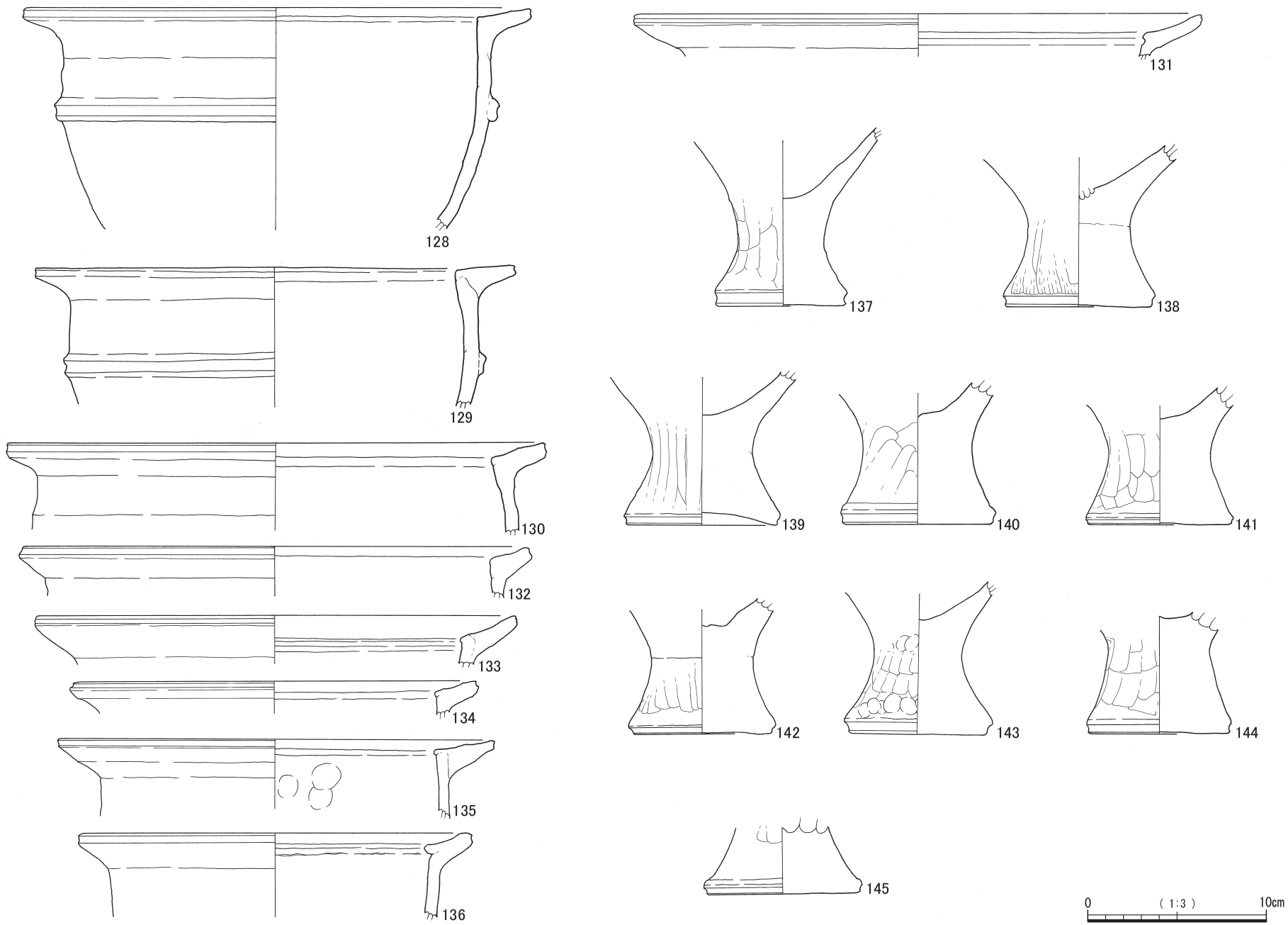

第30図　土坑２及び出土遺物



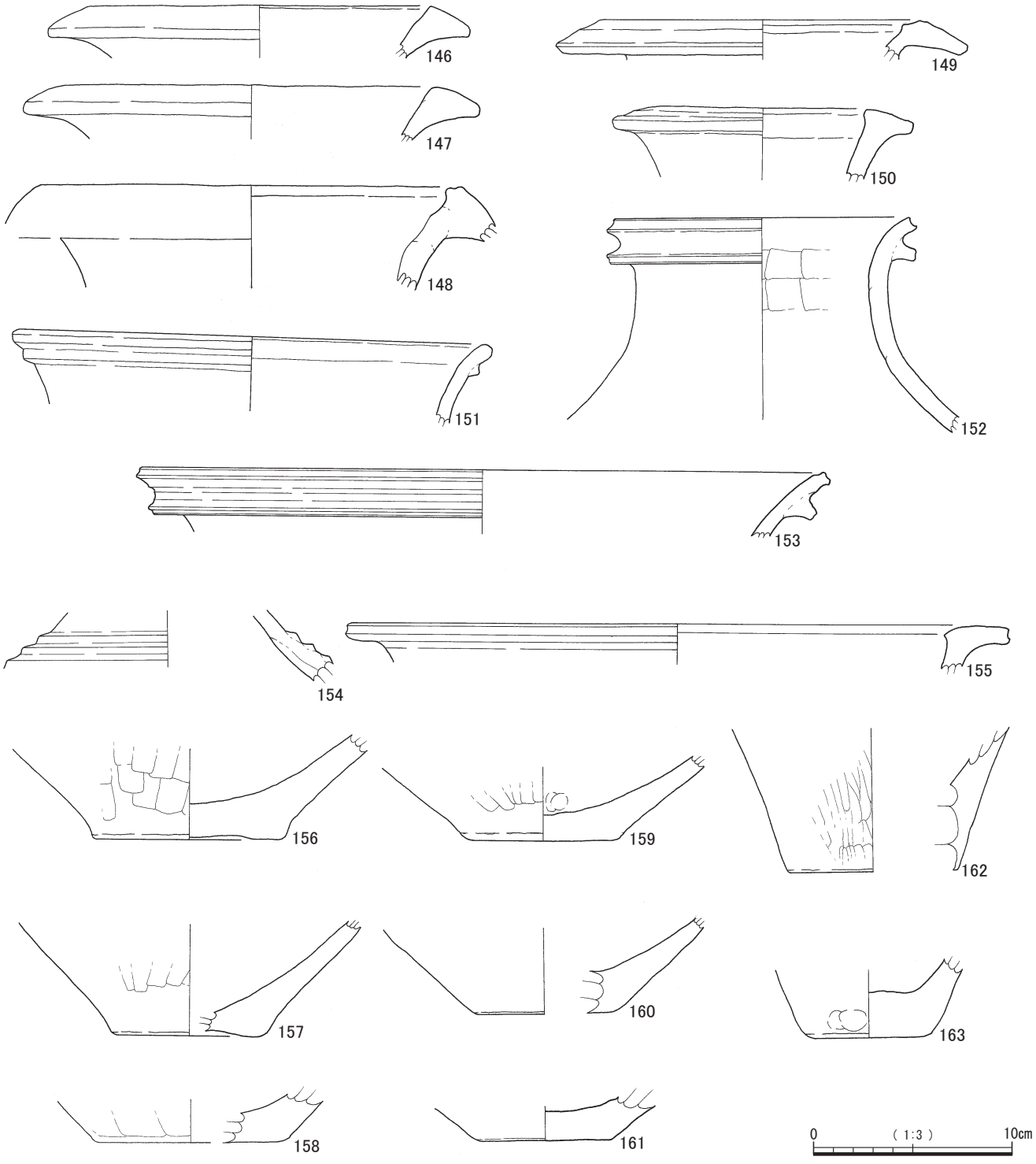

第31図　弥生時代の土器（１）




第32図　弥生時代の土器（2）




第33図　弥生時代の土器（3）

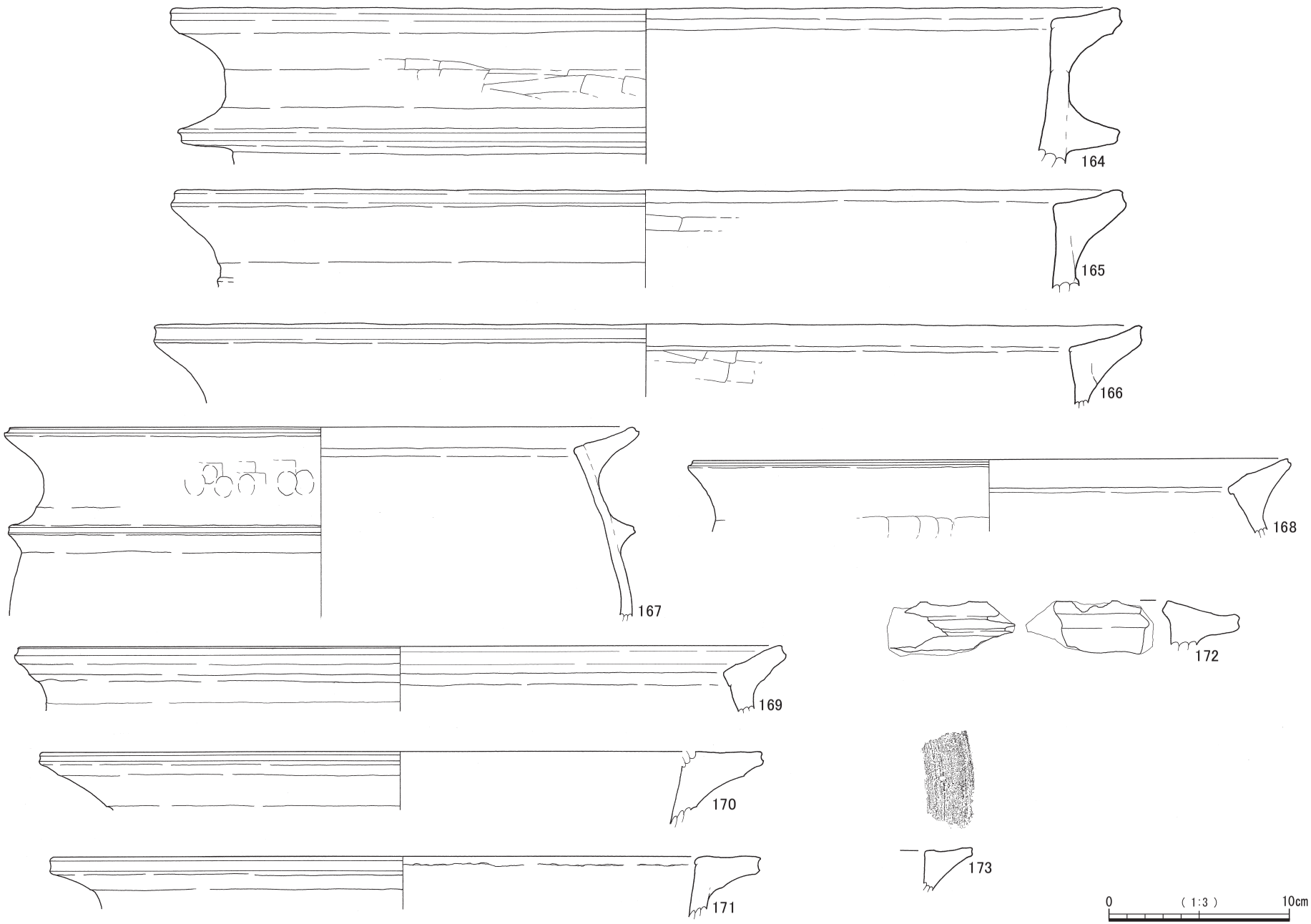



第34図　弥生時代の土器（4）

り，両側縁はやや丸みを帯び，外弯気味に仕上げるものである。

194は，片側の基部を欠損するもので，両側縁に鋭角に磨き仕上げている。断面形でみた場合，背面側にわずかに稜が残る。

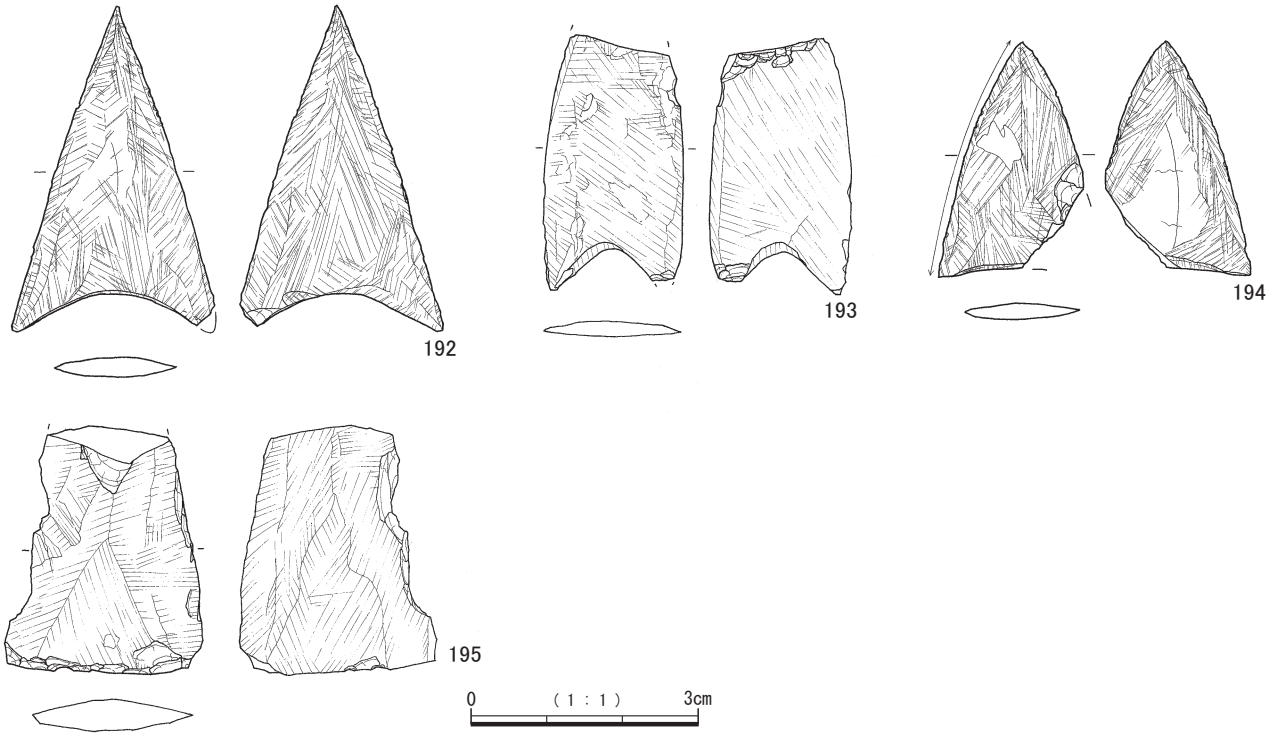
195は，先端部と片側の側縁が欠損しているものである。下半分は基部を除く二側縁に沿って稜がつくられており，全体で見た場合「人」字形に稜が残る。




第35図　弥生時代の土器(5)




第36図　弥生時代の土器（6）




第37図　弥生時代の石器

第10表　弥生時代遺構内出土遺物観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 白色粒 | 黒色粒 | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 30 | 116 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-28 | SK-145 | 口縁～胴部 | 32 | | | ナデ・ユビオサエ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | 褐 | 6781 | |
| | 117 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-27・K-28 | SK-145・Ⅱa | 口縁～胴部 | 28.4 | | | ナデ・ユビオサエ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | 黄褐 | 6794 | |
| | 118 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-28 | SK-145 | 底部 | 7 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 6784 | |

第11表　弥生土器観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 白色粒 | 黒色粒 | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 31 | 119 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | J-27 | | 口縁～胴部 | 29.8 | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | 橙 | 5859 | |
| 32 | 120 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 27.2 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 594 | |
| | 121 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | | 口縁～胴部 | 24 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 593 | |
| | 122 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-28 | Ⅱa・Ⅱb | 口縁～胴部 | 28.6 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 明赤褐 | 明黄褐 | 5110 | |
| | 123 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa・Ⅱb | 口縁～胴部 | 23.1 | | | ナデ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 860 | |
| | 124 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 30.4 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 黄褐 | 黄褐 | 2637 | |
| | 125 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-36 | Ⅱb | 胴部 | | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | 褐 | 6899 | |
| | 126 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-33 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 32.6 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 明赤褐 | にぶい褐 | 3744 | |
| | 127 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-33 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 33.5 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 明赤褐 | にぶい褐 | 827 | |
| 33 | 128 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 28.2 | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 灰黄褐 | 明褐 | 832 | |
| | 129 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 26.7 | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 赤褐 | 明褐 | 3697 | |
| | 130 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 30 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 黒 | 橙 | 1151 | 外面にスス付着 |
| | 131 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | J-28 | Ⅰ | 口縁部 | 31.6 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい褐 | 黒褐 | 一括 | |
| | 132 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 28.6 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 明褐 | 明褐 | 886 | |

## 第12表　弥生土器観察表（2）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 白色粒 | 黒色粒 | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 33 | 133 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | J-29 | Ⅱa | 口縁部 | 26.8 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐灰 | にぶい赤褐 | 1703 | |
| | 134 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱb | 口縁部 | 22.8 | | | ナデ・ユビオサエ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 橙 | 明赤褐 | 7933 | |
| | 135 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 24.4 | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 4314 | |
| | 136 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-31 | Ⅰ | 口縁部 | 21.8 | | | ケズリ・ナデ | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | | 橙 | オリーブ黒 | 一括 | |
| | 137 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-33 | Ⅱb | 底部 | | 6.8 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 赤褐 | 黒褐 | 7730 | |
| | 138 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | I-29 | Ⅱa | 底部 | | 8 | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい褐 | 褐 | 743 | |
| | 139 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | L-33 | Ⅱb | 底部 | | 8.2 | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 褐 | 3575 | |
| | 140 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-27 | Ⅱc | 底部 | | 8.2 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい黄褐 | 黄褐 | 5693 | |
| | 141 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | J-29 | Ⅱa | 底部 | | 7.8 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 黒褐 | 437 | |
| | 142 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | I-28 | Ⅱa | 底部 | | 7.6 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 橙 | 灰褐 | 3281 | |
| | 143 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | K-27 | Ⅱc | 底部 | | 7.6 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | 黒褐 | 5692 | |
| | 144 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | I-33 | Ⅱa | 底部 | | 7.6 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 黒褐 | 3585 | |
| | 145 | 甕 | 山ノ口Ⅱ | I-29 | Ⅰ | 底部 | | 8.4 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | オリーブ褐 | オリーブ褐 | 739 | |
| 34 | 146 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 21.1 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 604 | |
| | 147 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 22.8 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 588 | |
| | 148 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱb | 口縁部 | 21.2 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 明赤褐 | にぶい赤褐 | 3690 | |
| | 149 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | J-30 | Ⅱa | 口縁部 | 20.6 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 暗褐 | 褐 | 2963 | |
| | 150 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | J-32 | Ⅱa | 口縁部 | 15 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい褐 | 明褐 | 757 | |
| | 151 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | F・G-12 | Ⅰ | 口縁部 | 24 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 152 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | J-27 | Ⅱa・Ⅱb | 口縁～胴部 | 14.8 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 黒褐 | 黄褐 | 5019 | |
| | 153 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | J-35 | Ⅰ | 口縁部 | 34.4 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 灰黄褐 | にぶい橙 | 一括 | |
| | 154 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-34 | Ⅰ | 頸部 | | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい褐 | 一括 | |
| | 155 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-30 | Ⅱa | 口縁部 | | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 橙 | 橙 | 1318 | |
| | 156 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | I-33 | Ⅱa | 底部 | | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | にぶい黄橙 | 822 | |
| | 157 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | | 底部 | | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい橙 | 橙 | 3608 | 外面の一部にススけ付着 |
| | 158 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱb | 底部 | | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | 褐 | 灰褐 | 7921 | 外面の一部にススけ付着 |
| | 159 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-33 | Ⅱa | 底部 | | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 黒褐 | 1130 | |
| | 160 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | J-35 | Ⅱa | 底部 | | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 明赤褐 | 4232 | |
| | 161 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱa | 底部 | | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 赤褐 | 橙 | 831 | |
| | 162 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | K-33 | Ⅱa | 底部 | | | | ミガキ・ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 221 | |
| | 163 | 壺 | 山ノ口Ⅱ | L-32 | Ⅱb | 底部 | | | | ハケメ・ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 褐 | 明褐 | 7777 | |
| 35 | 164 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | I-28 | Ⅱa | 口縁部 | 52.4 | | | ナデ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | にぶい橙 | 3280 | 若干赤色を帯びる |
| | 165 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱb | 口縁部 | 52.5 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 浅黄橙 | 黄灰 | 7842 | |
| | 166 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-31 | Ⅱb | 口縁部 | 54.3 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 3468 | |
| | 167 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | I-33 | Ⅱa | 口縁部 | 35 | | | ナデ | | | ○ | | | ○ | ○ | | 橙 | 灰黄褐 | 5544 | 若干赤色を帯びる |

## 第13表　弥生土器観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 型式 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | | | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 白色粒 | 黒色粒 | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | | |
| 35 | 168 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | I-33 | Ⅱa | 口縁部 | 33.2 | | | ナデ | | | ○ | ○ | | | ○ | | 橙 | 橙 | 2835 | |
| | 169 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | J-30 | Ⅱa | 口縁部 | 42.4 | | | ナデ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 明赤褐 | 明赤褐 | 2966 | |
| | 170 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 40 | | | ナデ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | にぶい黄橙 | 橙 | 118 | |
| | 171 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 39.1 | | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | にぶい褐 | にぶい赤褐 | 3815 | |
| | 172 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | J-30 | Ⅱa | 口縁部 | | | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 橙 | 橙 | 1743 | |
| 36 | 173 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-27 | Ⅱa | 口縁部 | | | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 暗褐 | 暗褐 | 5628 | 種実圧痕あり |
| | 174 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | K-31 | I | 口縁部 | 42.4 | | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 黒褐 | 褐 | 一括 | 口縁部に特徴あり |
| | 175 | 大甕 | 山ノ口Ⅱ | J-35 | | 底部 | | 10.2 | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | にぶい黄 | にぶい黄褐 | 一括 | |
| | 176 | 小型甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | I | 口縁～胴部 | 19.7 | | | ユビオサエ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 橙 | 明褐 | 一括 | |
| | 177 | 小型甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 20 | | | ユビオサエ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい黄橙 | 褐灰 | 1972 | |
| | 178 | 小型甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16.8 | | | ケズリ・ナデ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい黄橙 | 黒褐 | 587 | |
| | 179 | 小型甕 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 脚部 | | 5.3 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | にぶい赤褐 | 暗褐 | 595 | |
| | 180 | 小型甕 | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱb | 脚部 | | 6.4 | | ハケメ・ナデ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい橙 | 灰褐 | 7839 | |
| | 181 | 高坏 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa・Ⅱb | 完形 | 12 | 8 | 11.8 | ナデ・ユビオサエ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | 褐 | にぶい橙 | 596 | |
| | 182 | 高坏 | 山ノ口Ⅱ | L-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 11.4 | | | ナデ・ユビオサエ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 829 | |
| | 183 | 高坏 | 山ノ口Ⅱ | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 11.1 | | | ナデ・ユビオサエ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | オリーブ褐 | 褐灰 | 578 | |
| | 184 | 鉢か | 山ノ口Ⅱ | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | | | | 穿孔・ナデ | | | | | | ○ | ○ | | 橙 | にぶい橙 | 一括 | 口縁部に穿孔あり |
| | 185 | 甕 | | L-30 | Ⅱa | 口縁部 | 27 | | | 刻目突帯 | | | ○ | ○ | | | ○ | | 明赤褐 | 灰黄褐 | 1099 | |
| | 186 | 甕 | | K-32 | Ⅱb | 胴部 | | | | 刻目突帯・ミガキ | | | ○ | ○ | | | ○ | | 褐灰 | 暗灰褐 | 3471 | |
| | 187 | 甕 | | L-30 | Ⅱb | 胴部 | | | | 刻目突帯・ミガキ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい橙 | にぶい橙 | 3105 | |
| | 188 | 甕 | | L-31 | Ⅱa | 胴部 | | | | 刻目突帯・ミガキ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 840 | |
| | 189 | 鉢か | | L-34 | I | 口縁部 | 9.9 | | | ミガキ | | | ○ | ○ | | | ○ | | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 190 | 壺 | | K-31 | | 底部 | | 5.5 | | ケズリ・ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 橙 | にぶい黄橙 | 313 | スス・炭化物がわずかに付着 |
| | 191 | 甕 | | K-31 | | 胴部 | | | | ナデ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | 橙 | にぶい黄橙 | 313 | スス・炭化物がわずかに付着 |

## 第14表　石器・石製品観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 出土区 | 層 | 出土遺構 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 石材 | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 37 | 192 | 磨製石鏃 | J-27 | Ⅱb | — | 4.2 | 2.7 | 0.25 | 2.5 | 粘板岩 | 5757 | |
| | 193 | 磨製石鏃 | J-32 | Ⅱa | — | 3.5 | 1.9 | 0.2 | 2 | 粘板岩 | 1487 | |
| | 194 | 磨製石鏃 | J-27 | Ⅱb | — | 3.15 | 1.8 | 0.2 | 1.5 | 粘板岩 | 5796 | |
| | 195 | 磨製石鏃 | J-37 | Ⅱ | — | 3.3 | 2.5 | 0.4 | 4 | 粘板岩 | — | |

## 第３節　古墳時代の調査

古墳時代の遺構として地下式横穴墓１基と溝状遺構３条が確認された。本遺跡の古墳時代の遺物包含層は，古代～近世と同じくⅡａ層である。

地下式横穴墓は，Ｊ－30区において溝状遺構３を掘り進めている中で床面付近で確認された。溝状遺構１・２は調査区の西端部付近で，溝状遺構３は調査区の中央部よりやや東側で検出された。いずれもほぼ南北に走り，断面形はＶ字状を呈し，埋土中からは遺物が確認された。溝状遺構２は，Ｊ～Ｌ－36～39区（北側）及びＬ・Ｍ－38・39区（南側）で検出されている。北側と南側の溝状遺構は市道で分断されていたが，溝状遺構の方向と埋土及び出土した遺物の状況が類似することから，本来は一連のものであったと考えられる。本遺構からは最も多くの遺物が出土しており，かつ種類も豊富である。

36区から39区付近では表層下はＶ層となり，古墳時代の遺物包含層は残存していない。35区から東側には古墳時代の遺物包含層であるⅡａ層が残存するが，古墳時代の遺物は古代・中世の遺物量と比べて極めて少なく，まばらに確認される程度であった。

なお，甕形土器は出土量が多く，口縁部～胴部にかけての形状に特色があり，その特徴から以下のようにⅠ～Ⅲ類に分類することが可能である。

**・甕Ⅰ類土器**（在地タイプ）

いわゆる成川様式土器の中でも，笹貫式とみられる特徴を有するものである。口縁部が内湾もしくは直行するもので胴部には刻み目突帯を巡らす。胴部上半もしくは口縁部に最大径がある。胴下半は張りをもたず，やや直線的に底部に至る器形となる。突帯は時計回りに一周巡らした後に，余った部分を下方へと逃がして貼り付けるものが多い。

土器の表面を観察すると，ミガキののちにハケメや板ナデ（板状工具によるナデ）が施されるが，土器製作時の輪積みの痕跡を残すものも多い。胎土の色調は，褐色系である。

**・甕Ⅱ類土器**（長胴タイプ）

日向地域でみられる「長胴甕」に類似するもので，甕Ⅰ類よりも，胴部の横幅が狭く，長細い印象をもつものである。口縁端部を幾分外反させることにより，くびれをつくる。胴部に最大径があり，胴下半から膨らみをもちながら底部に至る器形である。基本的に突帯はなく，無文である。

土器の表面を観察すると，縦方向もしくは斜め方向のミガキののちに，ハケメや板ナデ（板状工具によるナデ）が施されるが，土器製作時の輪積みの痕跡を残すものがほとんどである。この類の甕は，後述する甑とセットになるとみられる。

土器の胎土には，小礫が含まれることが多く，胎土の色調は白色系のものが多いことも特徴である。

**・甕Ⅲ類土器**（折衷タイプ）

Ⅰ類とⅡ類の特徴にあてはまらないものや両者の折衷的なものを一括したが，さらに以下の３つに細分した。

甕Ⅲ－１類

甕Ⅰ類と近い器形をもつが，突帯に刻み目を施さないもの，突帯をもたないものである。

甕Ⅲ－２類

口縁端部が外反し，胴部に最大径をもつ甕Ⅱ類に近い特徴を持ちながら刻み目突帯を有するものである。

甕Ⅲ－３類

上記の分類にあてはまらないものを一括した。

以下，遺構・包含層出土の甕形土器については，この分類に従い，記述する。

### １　古墳時代の遺構（第38図）

#### (1) 地下式横穴墓（第39図　196）

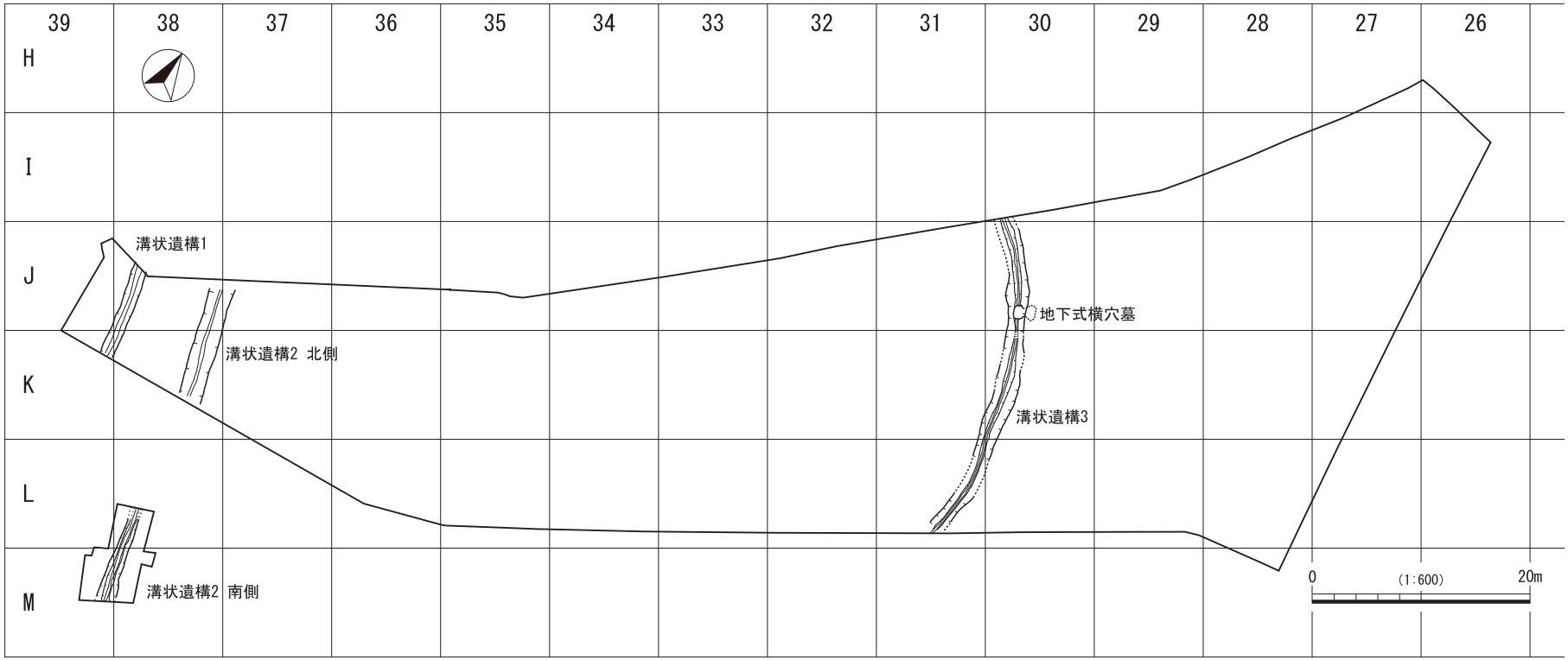
Ｊ－30区において検出された。当初，溝状遺構３の東側壁面に地層の乱れが見られたため，慎重に調査を進めたところ，溝状遺構３の底面に土坑状の掘り込みと，さらに壁面側に横穴があることを確認した。そこで，横穴を半截したところ，しまった黒色土が入っており，その奥は空洞となっていた。これらのことから検出された遺構が，地下式横穴墓であると判断した。調査は，安全かつ効率的な調査方法を関係機関とも検討しながら実施した。羨道を全掘した後，引き続き玄室の調査に着手することも検討したが，崩落防止の安全対策を最優先とし，随時天井部をとりはずすための先行トレンチを入れながら玄室の構造を立体的に把握できるよう努めた。竪坑部分はⅧ層とⅨ層の境目付近まで，羨道及び玄室はⅨ層まで掘り込んで構築されていた。

規模は竪坑が幅1.6×1.4ｍで深さ1.4ｍ，羨道が幅0.7ｍで高さ0.4ｍ，奥行0.3ｍ，玄室が幅1.6ｍ，奥行1.4ｍ，高さ0.3ｍであった。側壁には地下式横穴墓を構築する際に使用したと考えられる幅５㎝程度の工具の痕跡が残っていたが，天井部については不明瞭で確認できなかった。また，玄室の底面中央にほぼ円形のピットが確認された。

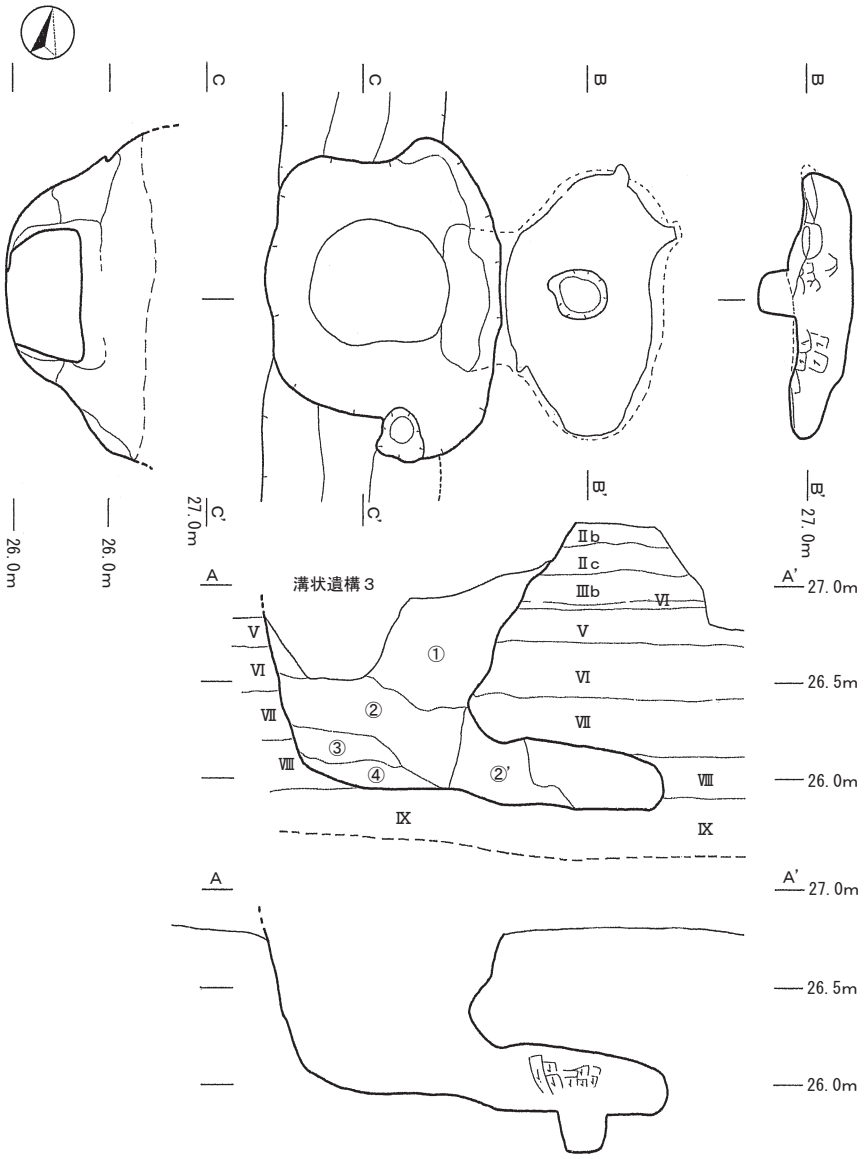
調査の結果，玄室内からは副葬品・供献品などの遺物は確認されなかったが，閉塞土中からは土器片が出土している。なお，溝状遺構３との時間的な先後関係については，検出状況から溝状遺構３が地下式横穴よりも新しいと考えられる。本遺構は，旧志布志町内で発見された初めての地下式横穴墓となった。

196は，羨道の閉塞土内から出土した土器片である。甕形土器の口縁部で，小破片ではあるがハケメ等が明瞭に残る。

#### (2) 溝状遺構１（第40～42図　197～210）




第38図　古墳時代遺構配置図

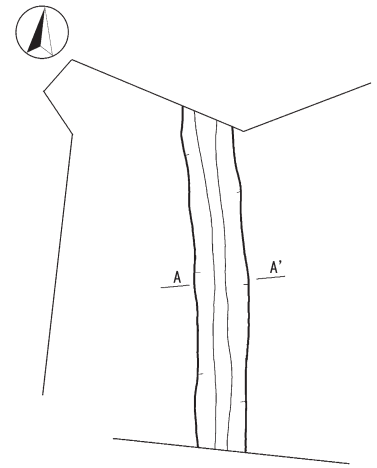


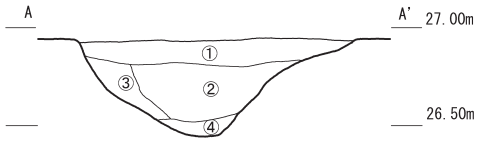

埋土①　粘性があり，しまりの強い赤黒色土。
埋土②　粘性があり，しまりの強い黒色土。
　　アカホヤ火山灰のブロックが入る。
埋土②'　埋土②と同じであるが，しまりがない。
埋土③　粘性がややあり，しまりの強い黒褐色土。
　　アカホヤ火山灰のブロックが入る。
埋土④　粘性がややあり，しまりの強いアカホヤ
　　火山灰混じりの黒褐色土。




第39図　地下式横穴墓及び出土遺物

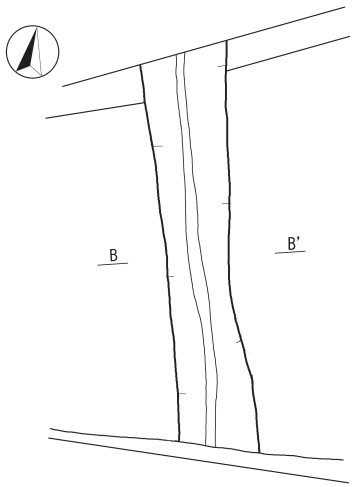
溝状遺構１

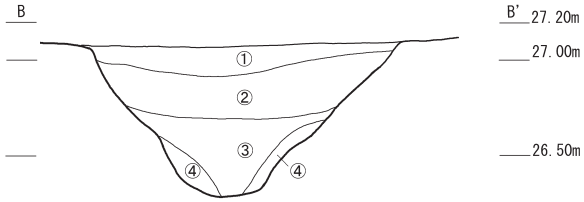



いずれの埋土も粘性が若干あり，しまりがない。
埋土①　径10～15㎜の橙色粒子を僅かに含む黒褐色土。
埋土②　径20～50㎜の橙色ブロックを多少含む明褐色土。
埋土③　径20～50㎜の橙色ブロックを僅かに含む黒褐色土。
埋土④　径１～２㎜の橙色粒子を僅かに含む暗褐色土。

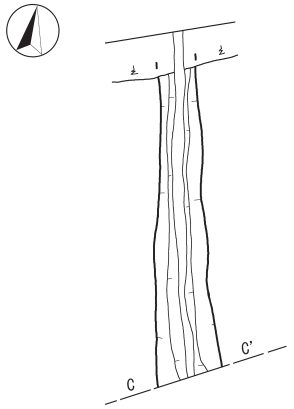
溝状遺構２　北側

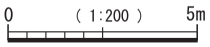


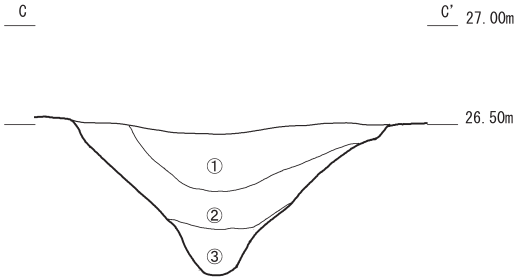



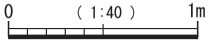

埋土①　粘性及びしまりのない黒褐色土。
埋土②　粘性はなく，しまりがある褐色土。
　　アカホヤ火山灰を僅かに含む。
埋土③　粘性はあるが，しまりのない褐色土。
　　アカホヤ火山灰土のブロックを少し含む。
埋土④　粘性はあるが，しまりのない暗褐色土。

溝状遺構２　南側



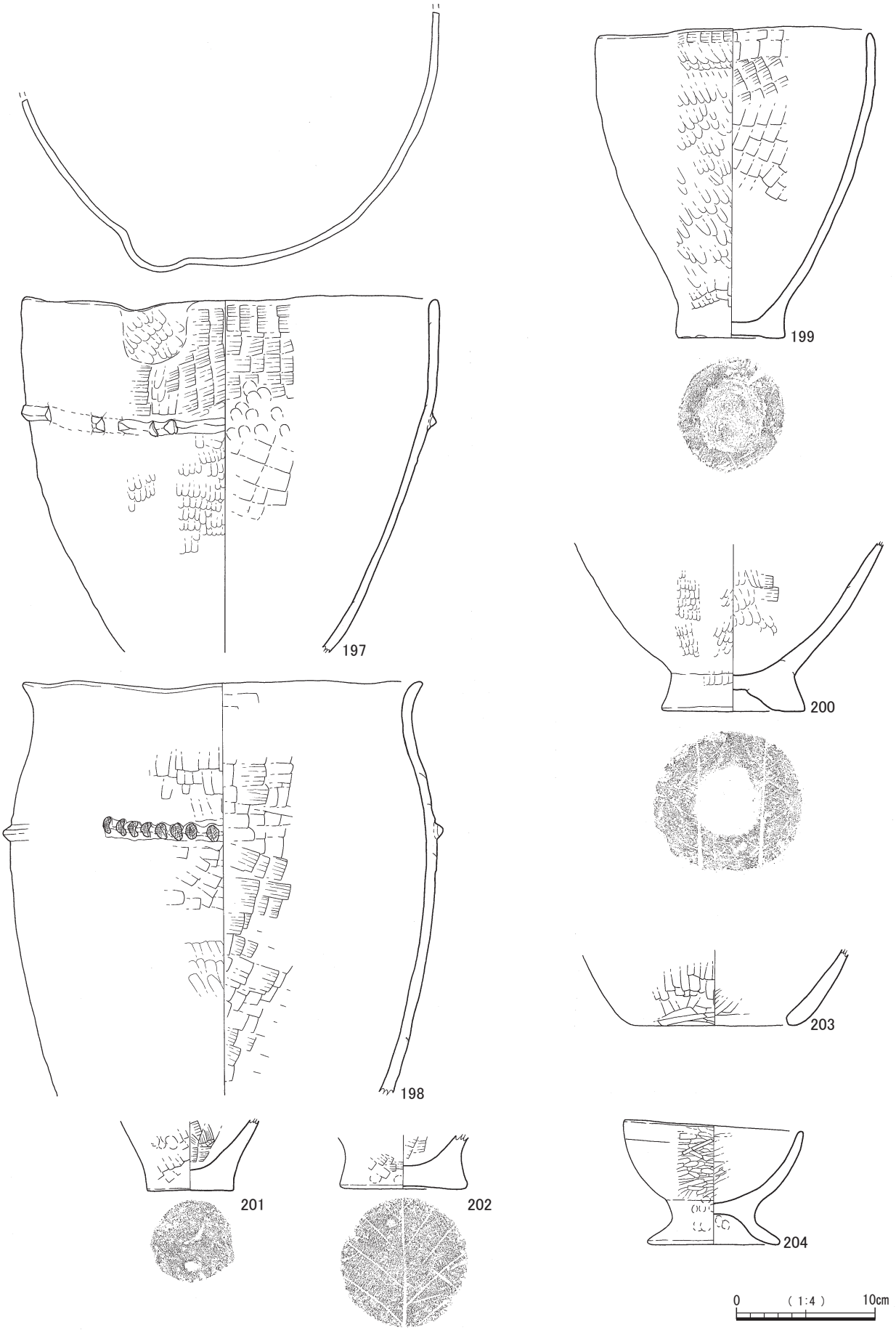



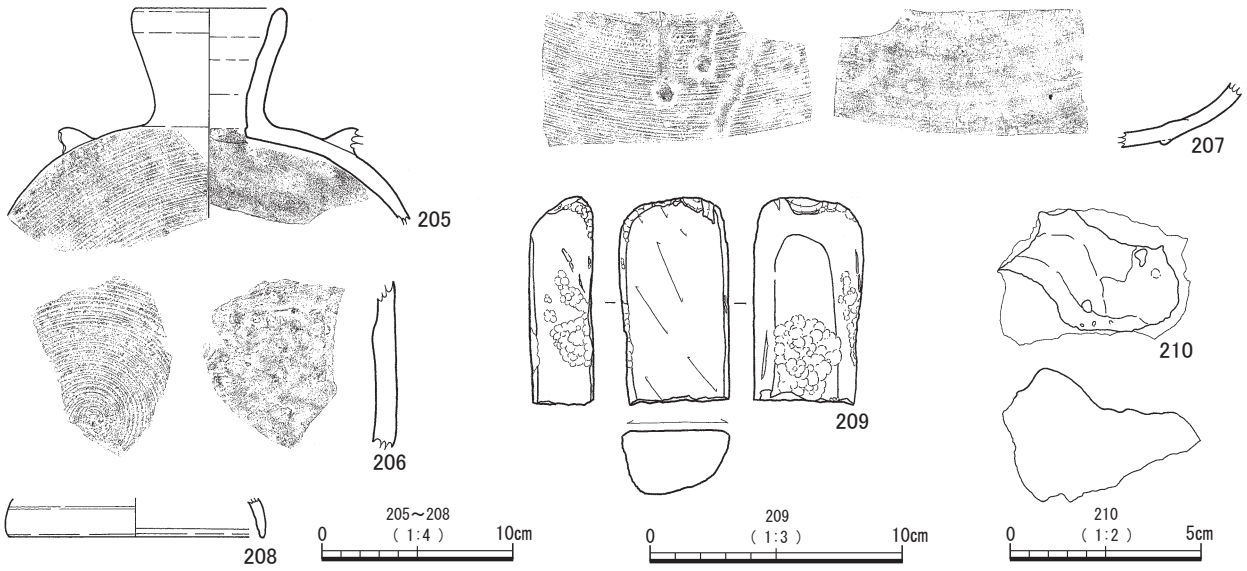




埋土①　粘性がややあり，しまりのある赤黒色土。
　　御池火山灰・池田降下軽石・アカホヤ火山灰を僅かに含む。下面付近から土器が多く出土した。
埋土②　埋土①とほぼ同じであるが，埋土①よりしまりが強い。
埋土③　粘性がややあり，しまりのある黒褐色土。
　　御池火山灰・池田降下軽石・アカホヤ火山灰を僅かに含む。

第40図　溝状遺構１・２




第41図　溝状遺構１出土遺物（１）




第42図　溝状遺構１出土遺物（２）

溝状遺構１は調査区の西側，Ｊ・Ｋ－38・39区で検出された。この付近はⅤ層上面まで削平を受けており，この面での検出となった。ほぼ南北に検出された遺構は長さ約９ｍ，幅約1.5m，検出面からの深さ約0.5mを測り，断面形はＶ字形を呈する。

埋土中からは古墳時代の土器が出土している。そのほとんどが笹貫式土器の甕である。197～202は，甕形土器である。197の口縁部はほぼ直行し，胴上部に刻み目を施した１条の突帯を巡らせ，胴部から底部に向かってすぼまる器形をもつ。また，口唇部が注ぎ口状に湾曲した部分がある。198は胴部から口縁部へ内湾しながら立ち上がり，口縁端部が外反する。刻み目のある突帯を１条巡らせた胴部に最大径がある。底部は残存しないが，球胴状の器形と考えられる。器面調整は行うものの輪積みの痕跡が観察できる。199は口縁部の半分程度を欠損するが，ほぼ完形品に近い。胴部から口縁部へは内湾気味に立ち上がる。底部は幾分上底気味に成形されている。口縁部から胴部にかけては輪積みの痕跡を明瞭に残す。200は，胴下半から底部にかけて残存する。底部から胴部にかけては膨らみをもちながら立ち上がる。底部は上底で，接地面には２つの木葉痕が観察できる。201・202は，底部である。202は接地面に向かってやや広がる器形で，底面には木葉痕が残る。197は甕Ⅰ類，198は甕Ⅱ類，199は甕Ⅲ類と考えられる。

203は小片ではあるが，甑と考えられる。外面はケズリやナデによる器面調整が行われるが，内面は丁寧なミガキが施される。

204は脚付鉢である。鉢部は内外面ともミガキ，脚部はナデによる器面調整が施される。

205～207は，須恵器の提瓶である。205は取っ手が退化したと考えられる突起が肩部に残る。カキメによる器面調整で，部分的に自然釉がかかる。206は胴部で，器面調整はカキメである。207は底部で，垂れ下がった自然釉が残る。208は，須恵器の坏蓋と考えられる。

209は砥石で，背面・左側面・先端部に敲打痕がある。

210は多孔質の鉄滓である。鉄分の含有は少ない。裏面には炉壁が付着している。

**(3) 溝状遺構２（第40・43～51図　211～314）**

溝状遺構２は，Ｊ・Ｋ-37・38区からＬ・Ｍ-38・39区にかけて検出した。本遺構のほぼ中央部分が市道によって削平されており，北側部分は溝状遺構１と同様にⅤ層上面，南側部分はⅦ層での検出である。北側部分と南側部分は連続しないが，溝状遺構の方向と埋土及び出土遺物から同一の溝状遺構と判断した。

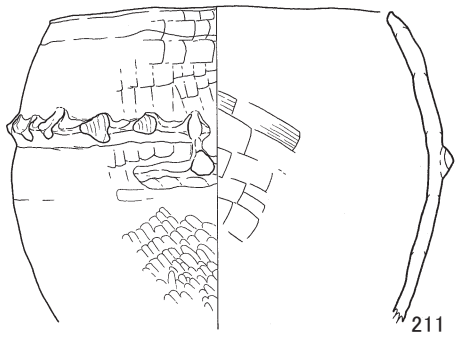
北側部分は長さ約10.5m，幅約2.2m，深さ約0.8mを測る。Ⅸ層まで掘り込まれて溝状遺構は構築されている。南側部分は長さ約８ｍ，深さ約0.4mを測る。幅は約１～1.8mとなり，溝状遺構２の北側部分に向かって徐々に狭くなっている。Ⅺ層まで掘り込まれている。

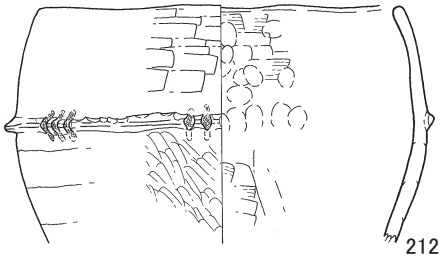
遺構内からは，土器・須恵器・砥石・鉄滓が出土した。土器は，笹貫式新段階に特有の内湾口縁を含む甕形土器や甑・壺などもみられる。211～314は，溝状遺構２の埋土から出土した遺物である。以下，器種毎に記述する。

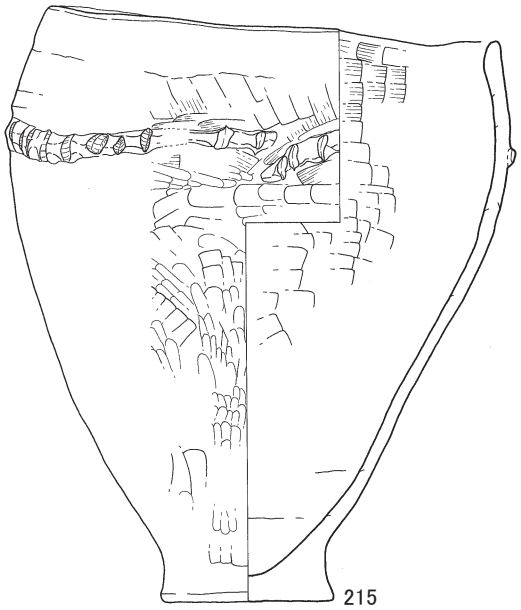
**甕形土器**

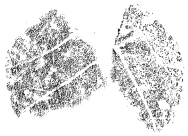
211～253は輪積み痕を残すものが多い甕形土器で，前記の分類に従い３分類した。器面調整を行うものの輪積みの痕跡を残すものが多い。

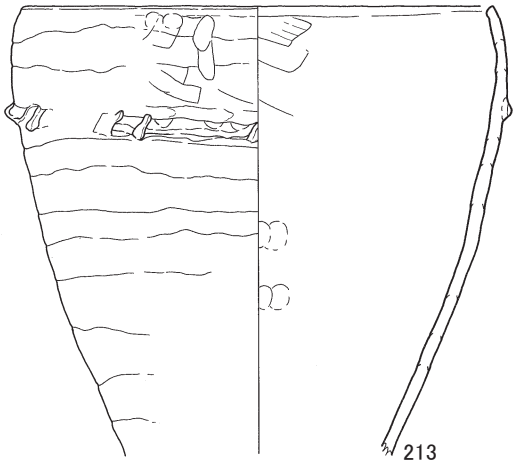
211～225は口縁部が内湾もしくは直行し，胴部には突

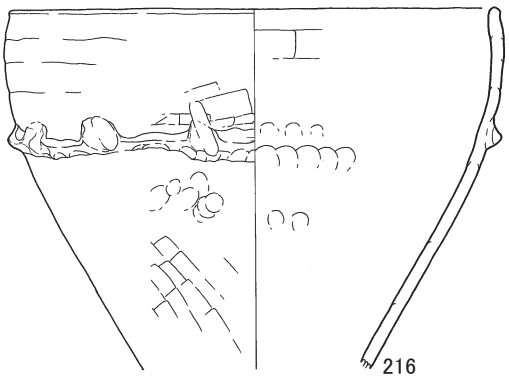


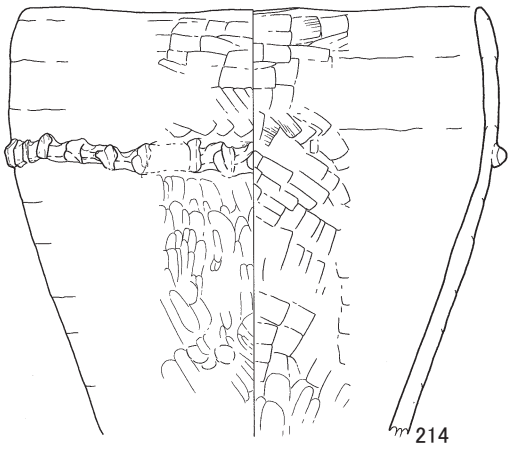



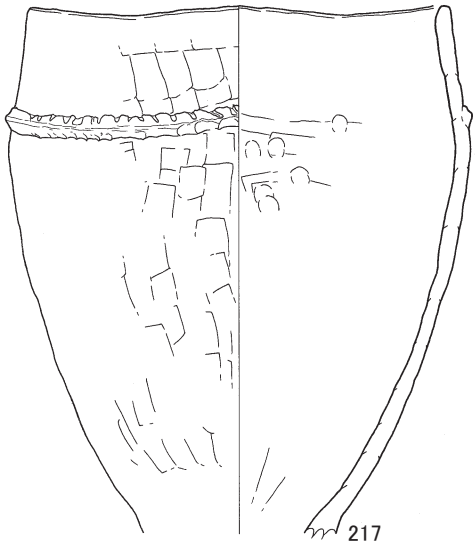



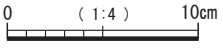





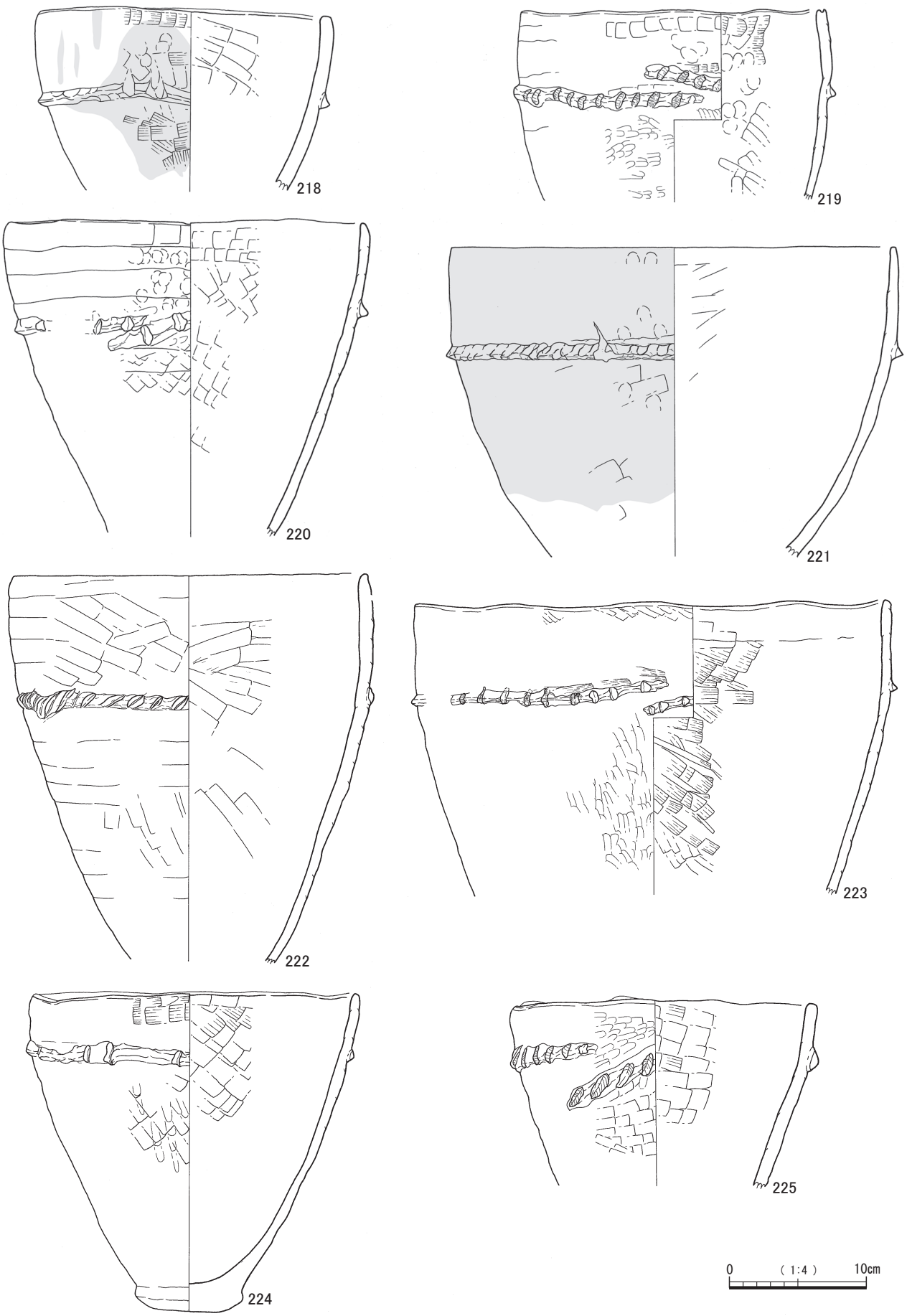



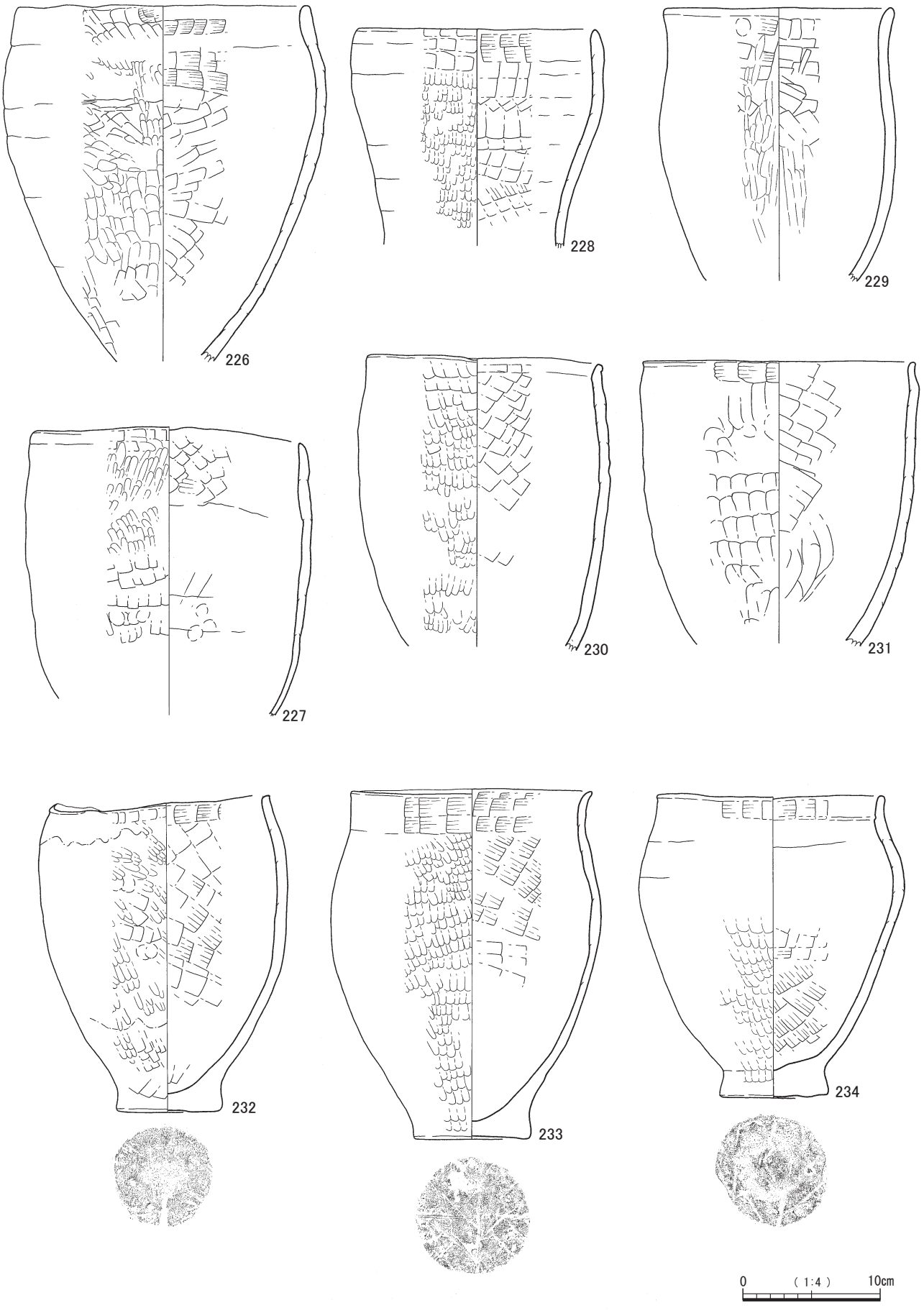




第43図　溝状遺構２出土遺物（１）




第44図　溝状遺構２出土遺物（２）




第45図　溝状遺構２出土遺物（３）

帯を巡らす甕Ⅰ類土器である。

211～218は，口縁部が内湾するものである。211の口縁部は大きく内湾し，突帯には大きめの刻みを施す。212の突帯には間隔を置いて刻み目が施される。213は，輪積みの痕跡を明瞭に残す。また，突帯には２個一組の刻み目が間隔を置いて施される。215はほぼ完形品である。内湾する口縁部は端部で器壁が幾分厚くなる。最大径となる口縁部直下にまばらな刻み目を有する１条の突帯を巡らす。胴下半は幾分丸みをもちながら底部に至る。平底の底面には木葉痕が残る。216は，胴部から底部に向かい急激にすぼまる器形となる。217の突帯は，断面三角形に成形するために上下から摘まみ出している。器面は全体的にケズリ状の調整を行うが，口縁上部は横方向のナデ調整である。

218～225は，口縁部がほぼ直行するものである。218・219・221の胴部は幾分膨らみをもつが，残存する器形からは長胴化しないと考えられる。218は，突帯を四等分する位置に１つずつ刻み目を施している。222の突帯は他の土器と比べて高さがなく，下方の位置に巡らしている。また，輪積み痕の幅が狭い。224・225の口縁部は幾分外傾するが，胴部の器形と刻み目突帯を有することから甕Ⅰ類土器とした。また，224の底部は平坦でなく，不安定な形状を示す。

226～234は胴部が細長く，突帯をもたないことから甕Ⅱ類土器に分類できる。

226～228は，口縁部が内湾する。226は，大きく膨らむ胴部から底部に向かって細長く伸びる器形である。227は，口縁端部が僅かに内湾する。228は胴部に最大径をもち，胴下半はすぼまるように細長く底部に至る器形と考えられる。229～234は口縁端部が外反し，その直下にくびれをもつ器形である。230～232の口縁端部の外反は僅かである。232～234は，木の葉底である。

235～251は，甕Ⅰ類と甕Ⅱ類に分類できなかった甕Ⅲ類土器である。

235・236は甕Ⅰ類に類似するが，刻み目を施さない断面三角形の突帯を巡らせるものである。いずれも最大径は口縁部にある。235は，口縁部に明瞭な輪積み痕が観察できる。236の突帯上部は器面と接着するために突帯に沿ってナデ調整を施すが，下部は突帯を押しつけるだけの粗い調整を施すものである。

237～247は甕Ⅱ類に類似するが，刻み目突帯を胴部に巡らすものである。いずれも，甕Ⅱ類土器の特徴である口縁端部もしくは口縁部が外反する。237と238以外は，胴部に最大径がある。237の口縁端部は段差をもつ程度に波打ち，刻み目突帯は貼り付ける位置が上下しながら巡る。238の口唇部直下と突帯上部には所々窪む程度の強い横方向のナデを施す。さらに，突帯の刻み目は工具を強く押しつけたために，一部は胴部まで刻みが及ぶ。239の器面調整は他の土器と比べて丁寧で，輪積み痕がほとんど残らない。また，突帯の刻みは間隔を置いて施される。240は，口縁部から胴部にかけて輪積み痕が残る。241の口縁端部はかなり波打ち，刻み目突帯は一周する間に上下に動く。242の口縁部の器壁は，胴部と比べ幾分厚くなる。突帯の幅は部分的に狭くなるなど不安定である。244は，かまぼこ形の突帯に間隔を置いて３個１単位の刻みを施す。口縁部の調整は割と丁寧である。246・247は，直行する口縁部と膨らみをもつ胴部の境に突帯を巡らす。247の胴部外面は，薄く剥落している。細い突帯をほぼ水平に巡らせ，器面調整は内外面とも丁寧である。248～250は口縁端部が肥厚し，胴部に最大径があるものである。248の内面調整は，特に雑である。249は粘土を折り曲げて口縁端部を作り，口唇部は平坦に仕上げる。内外面とも丁寧な器面調整である。248・250には輪積み痕が残る。251は胴下部で幾分膨らみをもちながら，直線的に口縁部へ至る器形である。口縁部下に刻み目突帯を，口縁外端にも高さのない刻み目突帯を巡らせる。２つの刻み目突帯の間は工具ナデによる調整痕が斜位に施される。252は，屈曲部に竹管文を施した突帯を巡らせる。器面調整は内外面とも丁寧である。

甕形土器の底部については一括して掲載する。その中でも，底部の接地面が張り出すものと円柱状のものと大別できる。

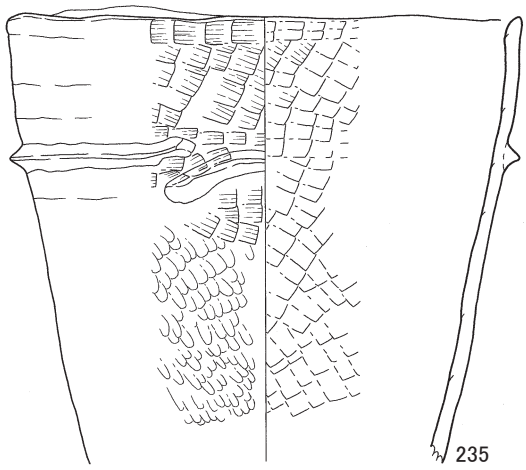
253～261は，接地面が張り出す形状を呈するものである。253・256・257・259は，上げ底気味となる。254は器面調整が粗く，輪積み痕が胴下部まで残る。255は，張り出しの強くなる部分と弱くなる部分が混在する。256の内面調整は丁寧で，焼成も良好である。

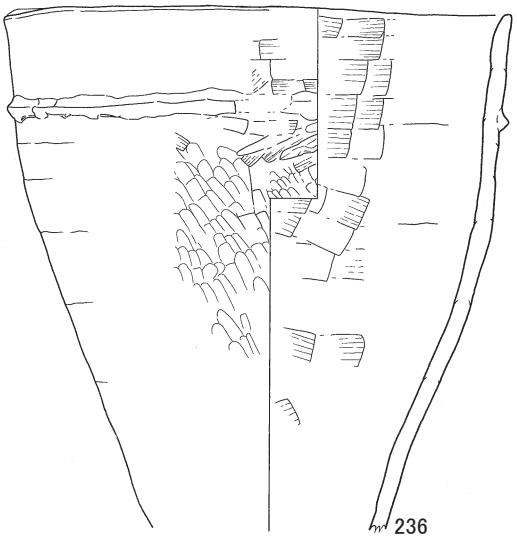
262～269は，円柱状の底部となる。262・264・266は上げ底気味となり，269は，底面中央部がかすかに窪む。262の成形・器面調整は丁寧である。264は高さのない底部で，胴部に向けて膨らみながら立ち上がる器形である。外面の器面調整は粗い。265は，底部外面の調整は粗い。266は，胴下部が膨らみながら立ち上がる器形である。267は，成形・器面調整とも丁寧である。255・258・259・260・261・263・264・265・267・268は，底面に木葉痕が観察できる。特に258には複数の木葉痕が残る。

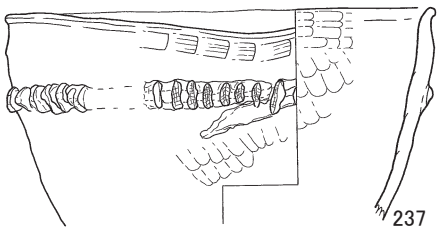
なお，甕形土器に付着した炭化物の年代分析（ＡＭＳ年代測定）を行っている。その結果，古いもので５世紀前半の年代を示すものもあったが，概ね６世紀中頃から７世紀中頃の年代が多くみられた。

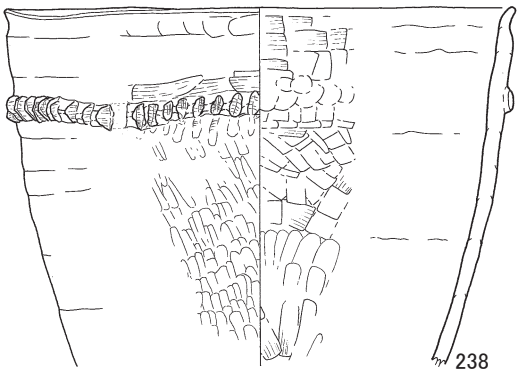
**甑形土器**

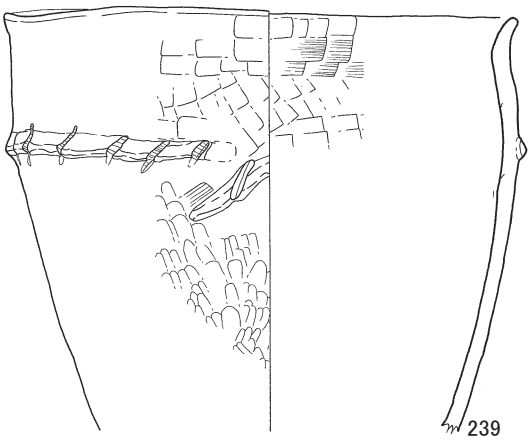
270～274は甑形土器で，口縁部から底部に向かって直線的にすぼまり，下端は器壁を厚く仕上げる。胴下半部には横位に黒色もしくは褐色に変化した部分が巡り，その上部の表面が薄く剥落する。いずれの蒸気孔の口径も７～８㎝を測る。270は，大振りの刻み目突帯を巡らす。

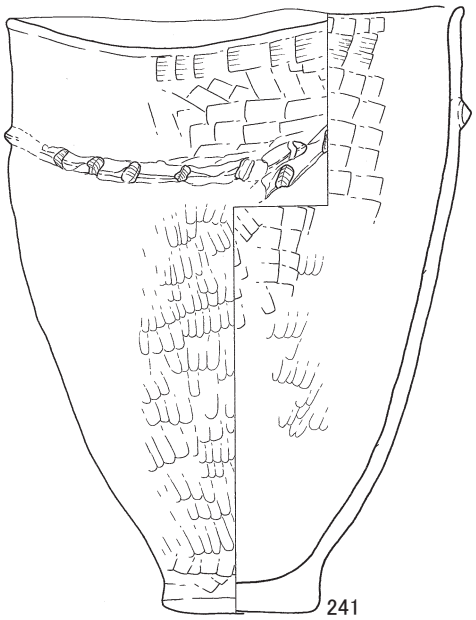


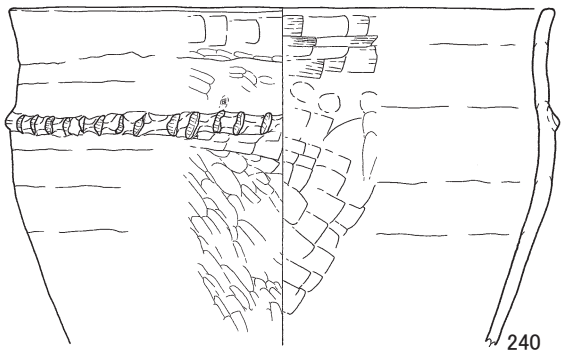



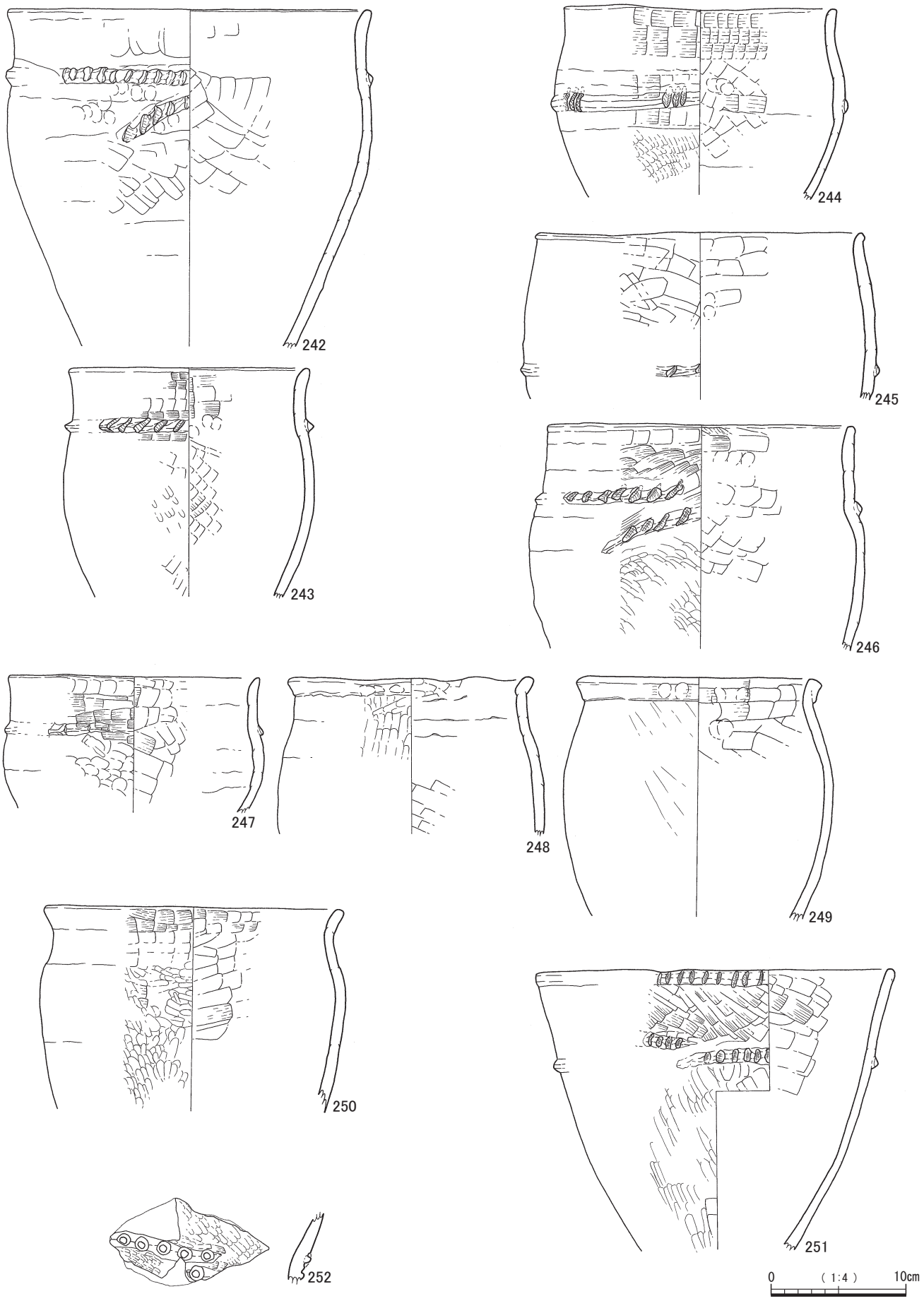



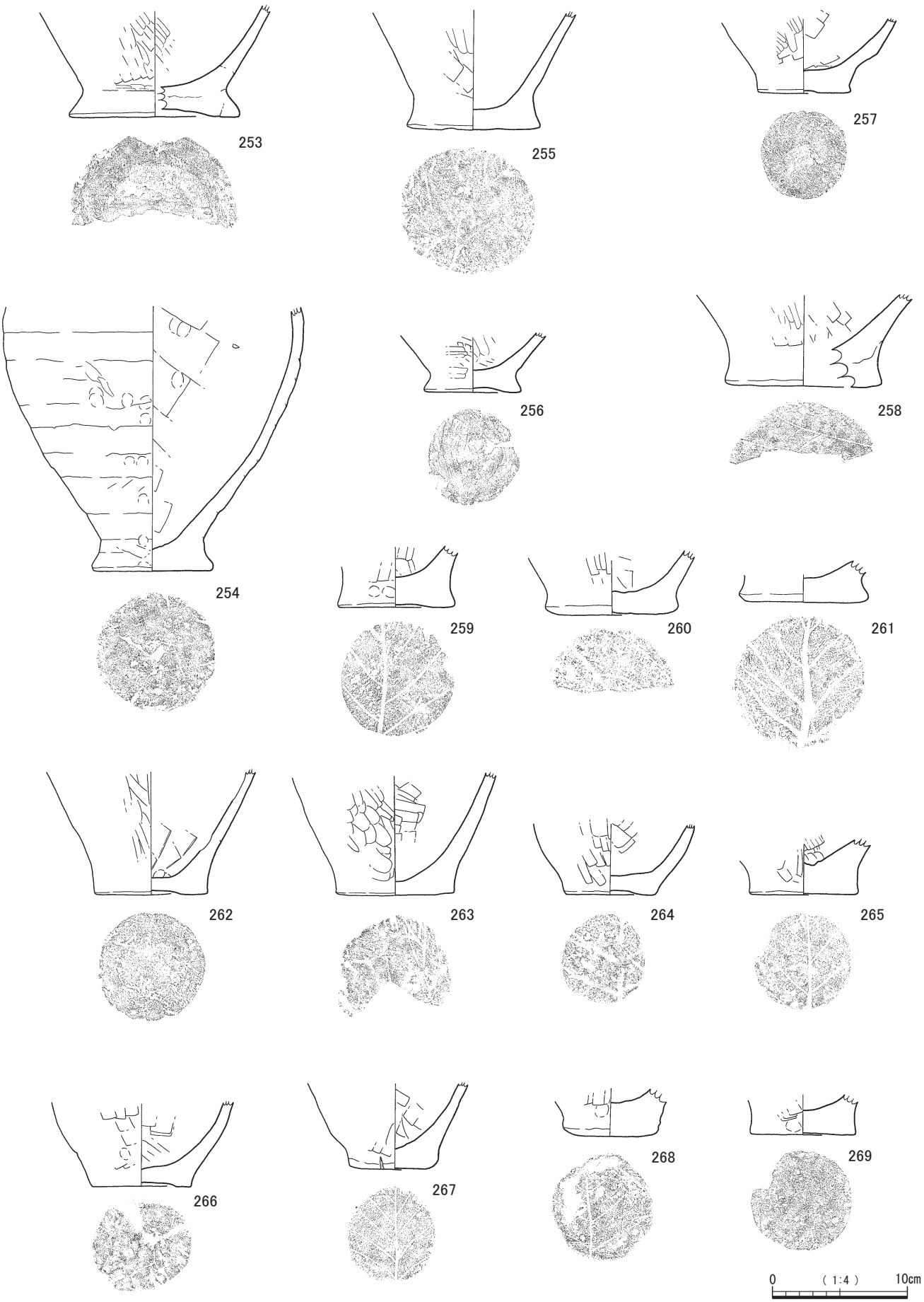




0 ( 1:4 ) 10cm

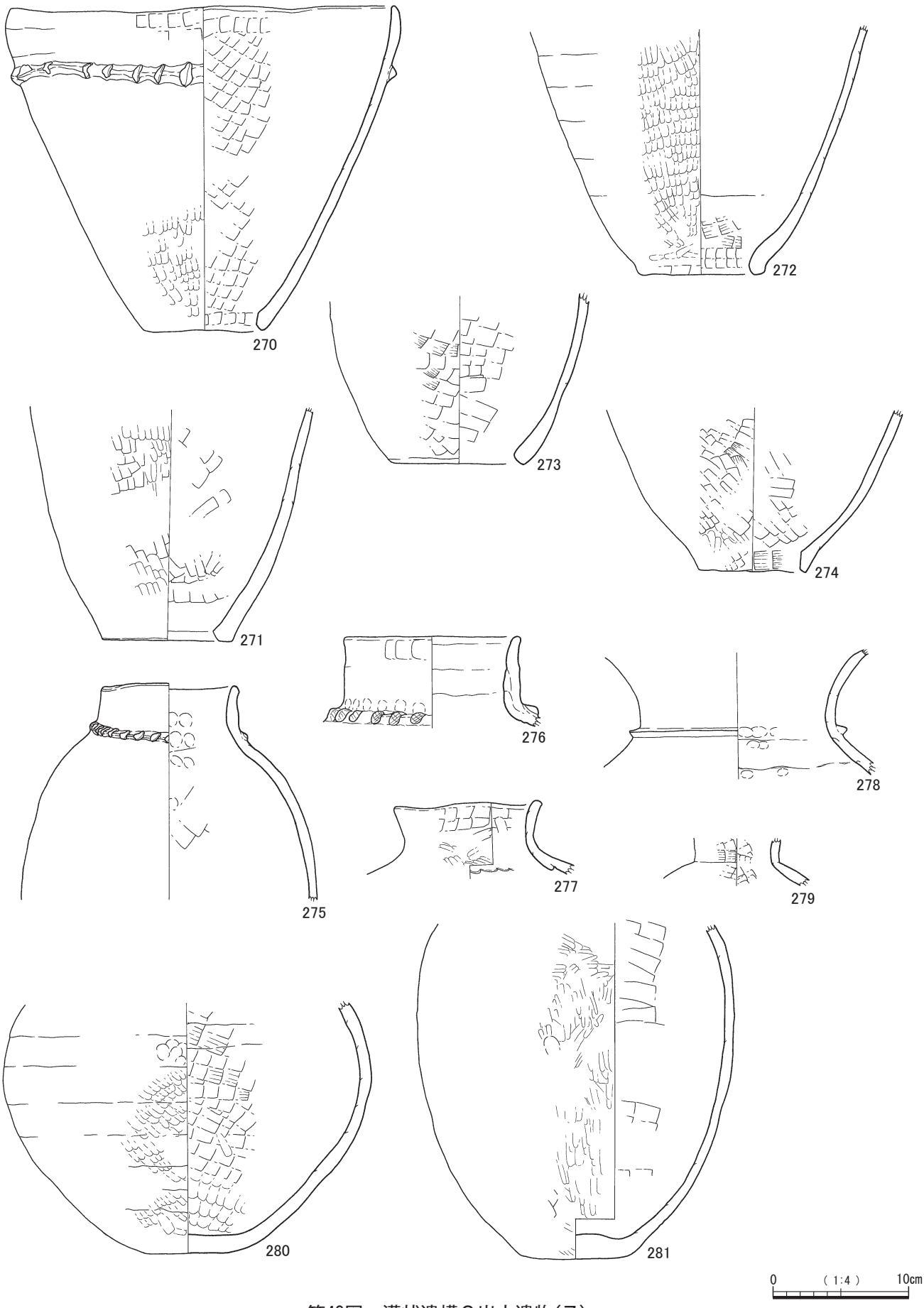
第46図　溝状遺構２出土遺物（４）



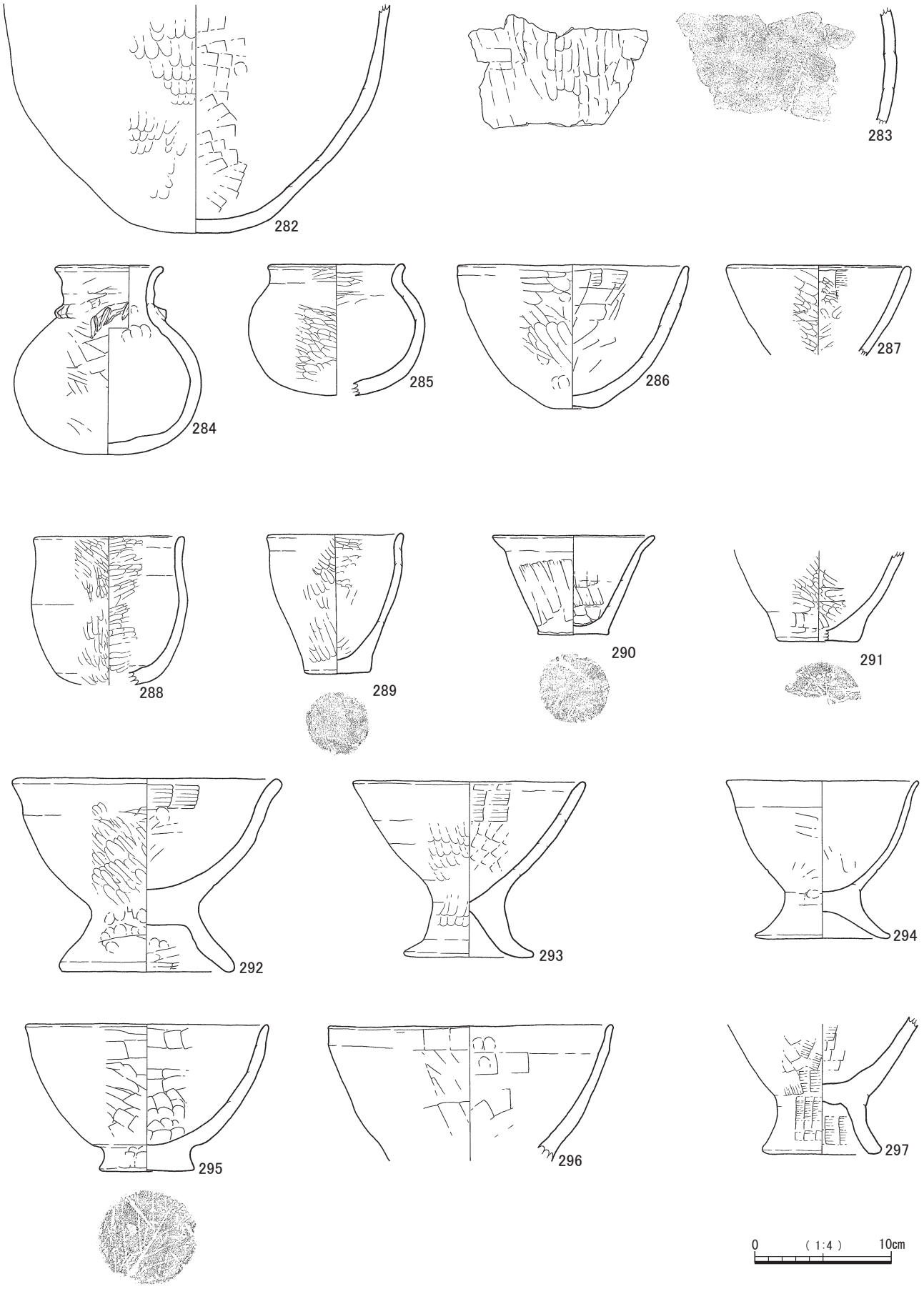

第47図　溝状遺構２出土遺物（５）



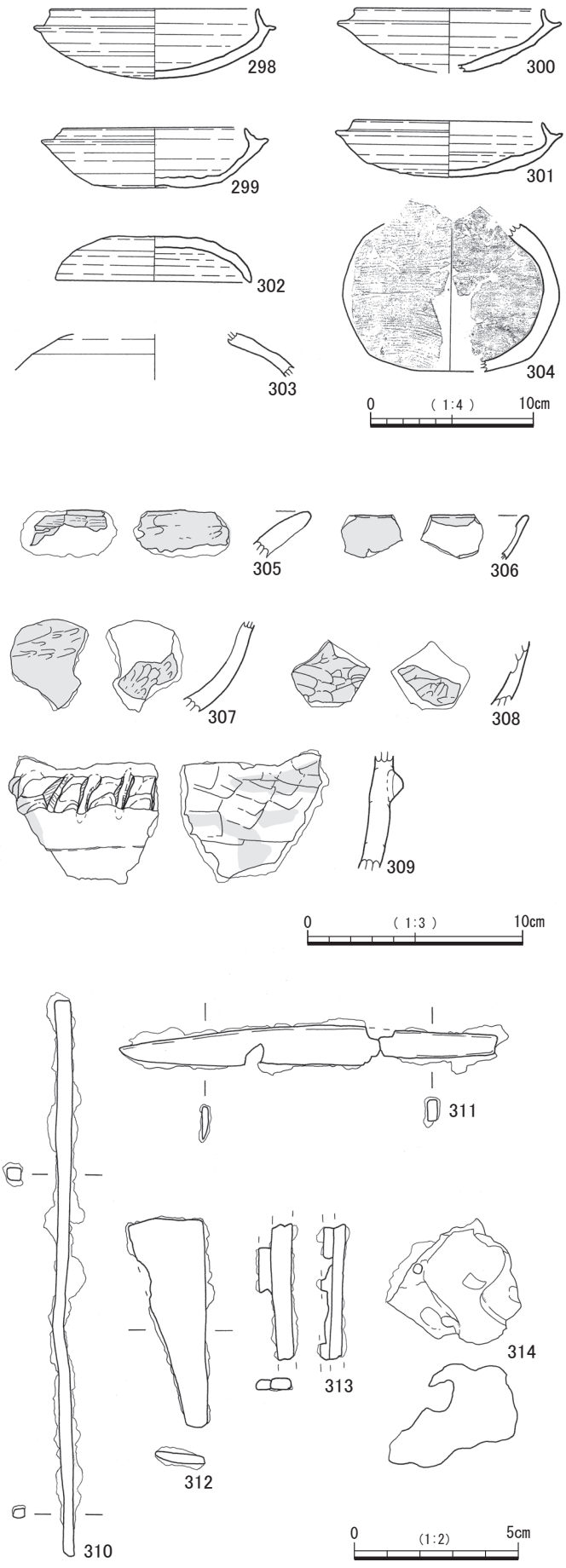

第48図　溝状遺構２出土遺物（６）




第49図　溝状遺構２出土遺物（７）




第50図　溝状遺構２出土遺物（８）




第51図　溝状遺構２出土遺物（９）

胴下半の外面調整は胴上半より丁寧に工具ナデを縦方向に施す。271は，胴部外面の表面が剥落する。272の器面調整は，内外面とも丁寧である。273の外面は，底部から７～８㎝を残して表面が剥落する。274は，底部下端から約４㎝の位置に表面が剥落する部分が巡る。

**壺形土器**

275～283は，壺形土器である。275・276は直行する口縁部をもち，器面調整は粗い。275は口縁部と胴部の屈曲部に小振りな，276は大振りな刻み目突帯を巡らす。275の胴部は，細身の長胴と考えられる。277はやや外反する口縁部をもち，口唇部はやや内傾する。外面の器面調整は口縁部がナデ，胴部にはミガキが施される。278は，口縁端部が欠損する。大きく外反する口縁部と胴部の境に断面三角形の突帯を巡らす。精製された胎土で丁寧に成形されている。279は小振りな壺で，精製された胎土で製作されている。280の胴部は大きく膨らみ，球形に近い器形となるが，平底である。281も平底で細長い胴部となる。内外面とも丁寧な器面調整が行われる。282は底部付近まで幅2.5㎝程度の板状の粘土を積み上げた痕跡が残り，底部は丸みを帯びた平底である。

**小型土器**

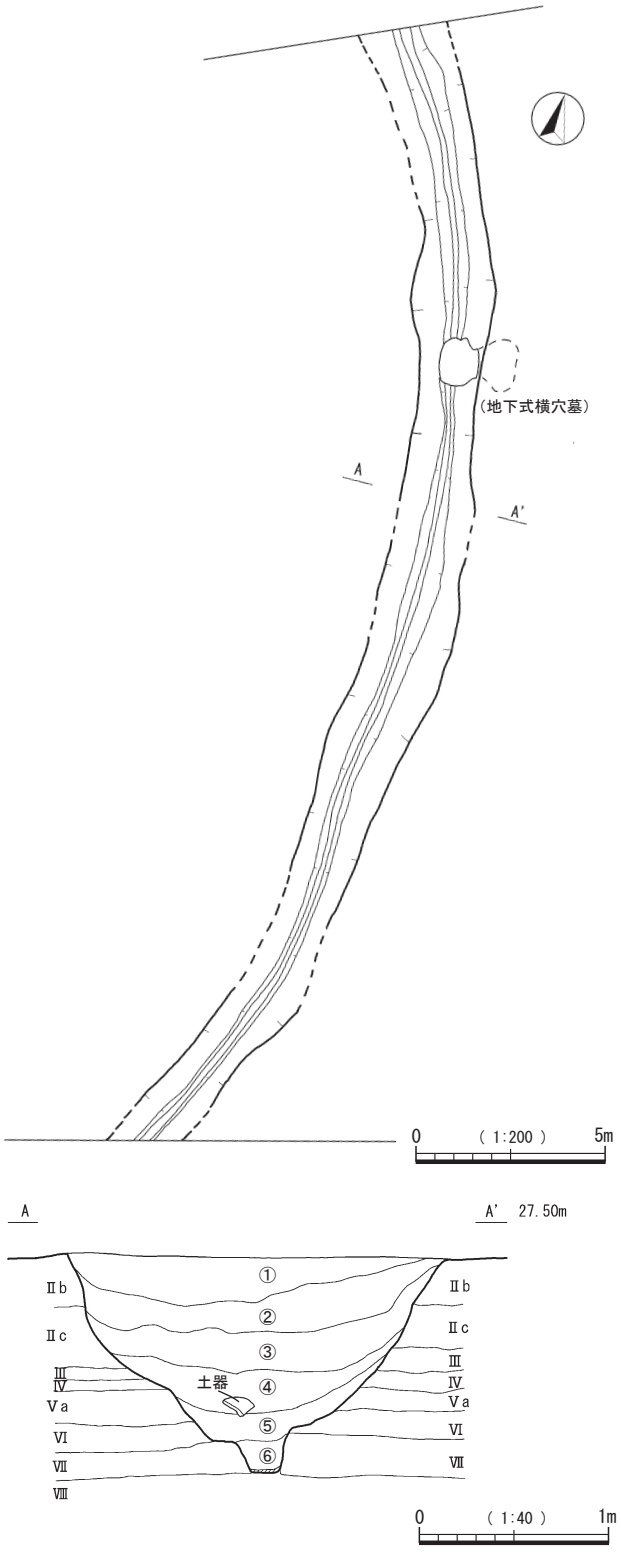
284・285は，小型の丸底壺である。284は器壁の薄い口縁部は直行気味に立ち上がり，口縁端部が外反する。胴部との境に刻み目突帯を巡らす。285の短い口縁部は端部を丸く収め，胴部境から外反する。いずれの器面調整も内外面とも丁寧である。

286～291は，鉢である。286の口縁部は端部が細くなり，腰部付近で湾曲しながら底部に至る。底部は摩耗のため砂粒が露出し，底面中央部が僅かに窪む。287は，内外面とも丁寧な調整が施される。288の口縁部は端部がやや外反し，胴中央部に最大径がある。底部は平底に近い丸底である。器面調整は丁寧である。289は口縁端部がやや外反し，膨らみながら底部に至る器形を呈する。290は289と比較すると，高さはないが，口縁部は大きく開く。291の底面には，棒状工具による押し引き状の刺突が弧状に観察できる。

292～297は，脚付鉢である。292は他のものと比べ器壁が厚く，特に鉢部と脚部の接合部分はさらに厚くなる。底部近くには輪積み痕も僅かに残る。293・294は，黄白色の色調である。293は脚部から口縁部に向かって直線的に伸び，294は湾曲しながら伸び，口縁端部が外反する。295は木葉痕が残る柱状の底部をもつ鉢で，底部から口縁部まで丸みをもつ器形である。296の底部は欠損するが，脚をもつ鉢と考えられる。297は，脚坏鉢の脚部と考えられる。

**須恵器**

298～304は，須恵器である。298～301は坏，302は坏蓋，303・304は壺である。302はカキメによる器面調整




埋土①～③　極めて類似する黒色土。
埋土①は埋土②・③と比べて粘性がやや強く，しまりがやや弱い。また，御池火山灰の含有率が埋土①７％、埋土②20％，埋土③⑮％と違いがある。
埋土④・⑤　類似する黒色土で，粘性・しまりともある。埋土⑤がアカホヤ火山灰をやや多く含む。
埋土⑥　粘性・しまりともある赤黒色土。
御池火山灰・池田降下軽石・アカホヤ火山灰を僅かに含む。

第52図　溝状遺構３

が行われる。

**その他の土器**

305～309は，赤みの強い色調の土器片である。これらは科学分析を行っている。その結果はⅤ章に掲載したので参照いただきたい。

**鉄製品等**

310・313は棒状鉄器であるが，その用途については不明である。311は，長さ5.8㎜を測る刀子，312は方頭鏃と考えられる。314は，多孔質の鉄滓である。

**(4) 溝状遺構３（第52～54図　315～341）**

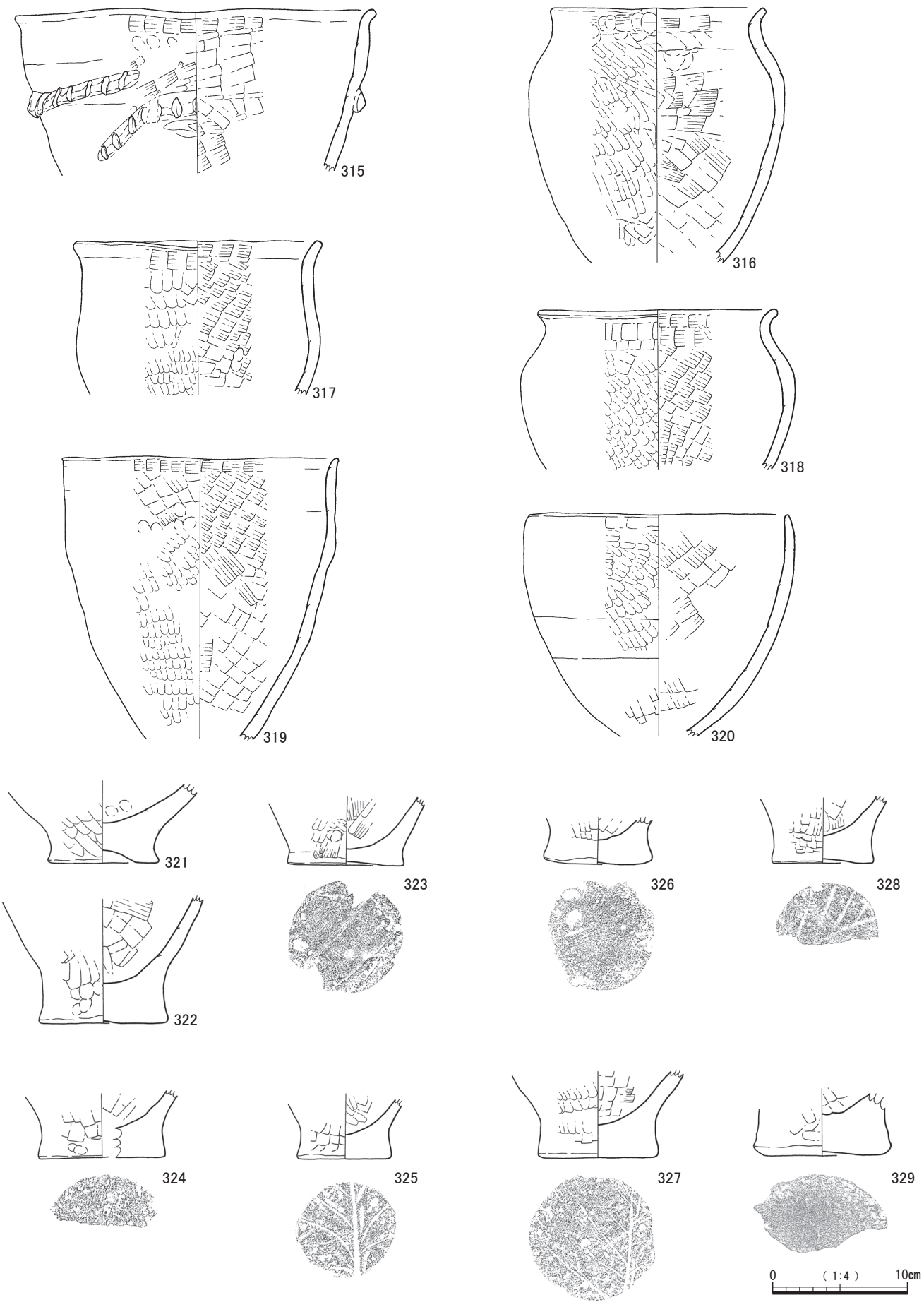
Ｊ・Ｋ・L-30・31区，南北に弧を描くように検出された溝状遺構である。Ⅱｂ層を少し掘り下げた面で検出し，長さ約31.5m，幅1.5～1.9m，検出面からの深さ1～1.3mを測り，断面は薬研堀状となり，底面の幅は，0.15～0.3mと狭い。

遺構内からは土器・須恵器・石器が出土した。

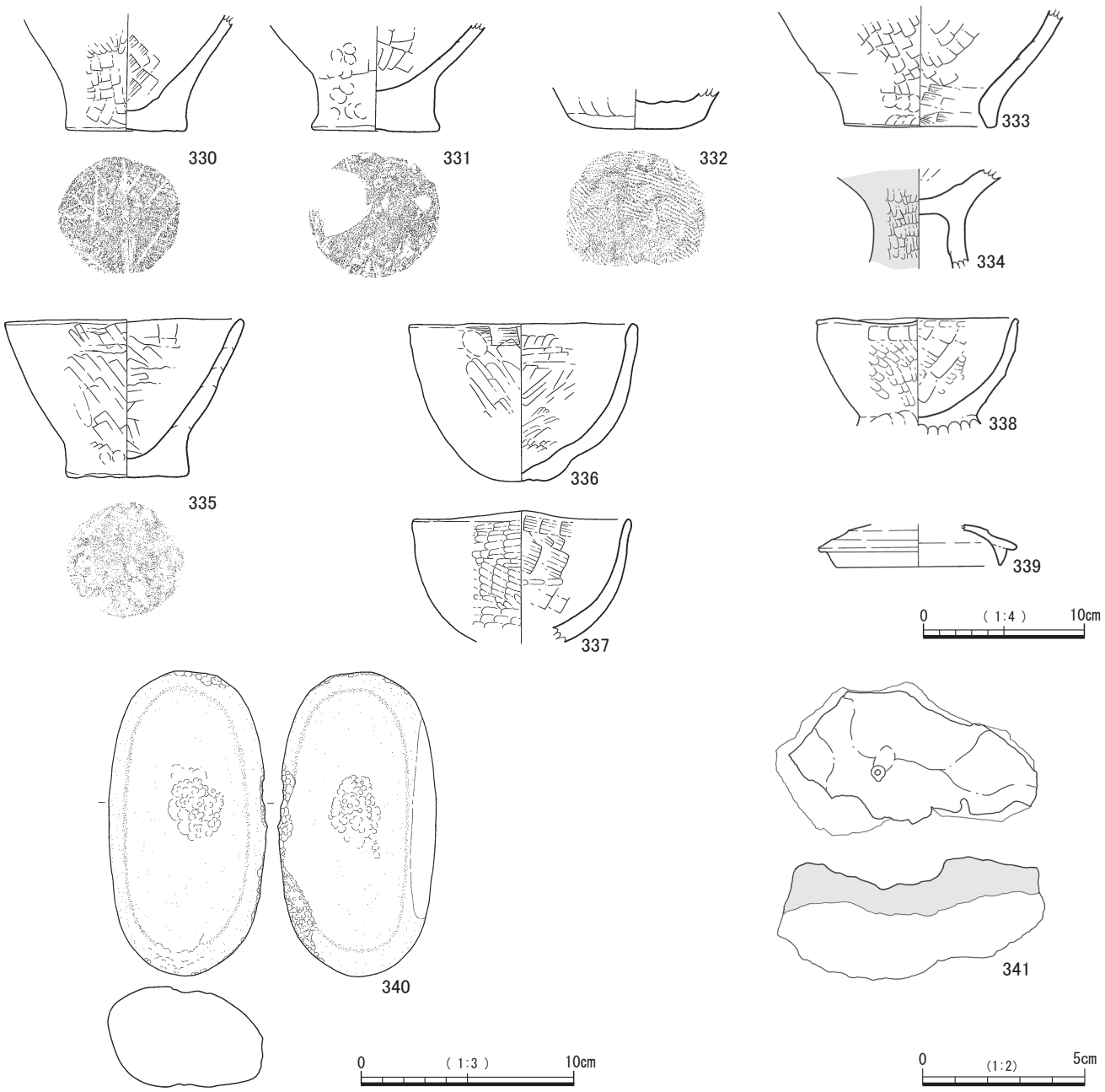
315～332は，甕形土器である。315は口縁部から胴部へ直線的に伸びる器形で，口縁端部が外反する。胴部には幅の一定しない１条の刻み目突帯が巡るが，幅が広くなる部分の突帯は垂れ下がったように貼り付けられている。甕Ⅰ類土器と考えられる。316～318は口縁部が外反し，その直下にくびれをもち，胴部に最大径がある。胴部下半が欠損しているものもあるが，その特徴から甕Ⅱ類土器と考えられる。316の外面には濃淡はあるが，全体的に煤が残る。317・318は口縁部内外面は横ナデ，胴部は幅の狭い工具で斜位・縦位のナデが施される。319は甕Ⅰ塁土器と類似した器形ではあるが，刻み目突帯をもたない。成形が粗く，器壁の厚さは不均一である。320は口縁部から底部近くまで同じように湾曲をもつが，底部の形状は不明である。321～332は，甕形土器の底部である。底部の接地面が幾分張り出すものがほとんどである。321は接地面の張り出しが強く，上げ底となる。底部から胴部にかけては開き気味に立ち上がる。323・328・329は，底面中央部が窪む。323～331は，底面に木葉痕が残る。332は平底ではあるが，不安定な形状となる。底面にはハケメが明瞭に残る。

333は甑形土器で，上部は欠損している。外面にはやや斜め方向のタテケズリが明瞭に残る。334は脚部である。色調や器面調整から高坏と考えられるが，脚付鉢の可能性もある。335～338は，鉢である。335は口縁部付近には輪積みの痕跡が残り，平底である。336は，内面に比べ外面の器面調整が粗い。平底気味の丸底となる。337は脚付鉢と考えられるが，脚部分は欠損している。338の内外面は，成形・器面調整が丁寧である。339は，須恵器の坏蓋である。

340は敲石である。表裏面の中央部と側面に敲打痕が残る。341は，多孔質の鉄滓である。表面から1/3程度の深さまでガラス質となっていることが確認できる。




第53図　溝状遺構３出土遺物（１）




第54図　溝状遺構３出土遺物（２）

## ２　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は主にⅡａ層から出土し，古墳時代後期とみられる遺物が主体を占める。以下，抽出した遺物について述べる。

### (1) 土器（第55～56図　342～377）

本遺跡で出土した古墳時代の土器は，その形態的特徴や供伴して出土する須恵器の年代等から，おおむね古墳時代後期のものと考えられる。土器付着炭化物の年代分析結果からもそれを肯定できるような年代結果が出ている。また，土器の形態的特徴などから次のような器種分類が可能である。

煮炊具

甕形土器・甑形土器

貯蔵具

壺形土器

供膳具

高坏・鉢・脚付鉢・模倣坏など

以下，器種毎に記述する。

**甕形土器**

342～345は，甕形土器の口縁部である。342の口縁端

部は内湾し，１条の刻み目突帯を巡らす。口縁部には輪積み痕が観察できる。343・344の口縁部は直行し，１条の刻み目突帯を口縁部直下に貼り付ける。343は，口縁部外面上部の器面に浅い刻み目を施す。344の口唇部は，平坦面をもつ。345の口縁部は外反し，胴部は膨らみをもつ。他の土器と比べ器壁が幾分薄い。342・344は甕Ⅰ類土器に，345は甕Ⅱ類土器に，343は甕Ⅲ類に分類できる。346は，突帯上に竹管文を施すものである。347～356は，甕形土器の底部である。底部の接地面が張り出すものと円柱状となるものと大別できる。また，底面中央部が窪むか上底状になるものが多い。348の内面は，ミガキが施される。底面には２つの木葉痕が角度を変えて残る。甕に分類したが，他の器種の可能性もある。349の底面と外面には指頭痕が多く残る。これは，底面端部を摘まみ出すように張り出しを作ることにより，上底となっている。356の胎土は土師器のように緻密であるが，底部の成形は粗い。347・349・356以外は，底面に木葉痕が確認できる。

**甑形土器**

本遺跡で確認される甑形土器は口縁部から底部にかけてすぼまるもので，底部は筒抜けとなるものである。完形のものはない。357・358・360の下端部は器壁が厚くなるが，359の下端部は幾分薄くなる。358の内面調整は，工具ナデで丁寧に施す。360は下端部が外側に大きく張り出し，底面には木葉痕が観察できる。361は，甑形土器の取手部分と考えられる。362は小破片であるが，下端部が外側に大きく張り出すことから甑形土器とした。

**壺形土器**

本遺跡での出土量は少なく，４点の掲載である。363・364の口縁部は，外反する。363は頸部に刻み目突帯が巡り，外面はナデが丁寧に施される。364は胎土に砂粒が多く，成形も粗い。365は，口縁上部を欠損する。外面はナデ調整を丁寧に施す。366は丸底で，内面調整が丁寧である。

**その他の土器**

367～369は，須恵器の坏を模倣したものと考えられる。367は口縁部が内湾する椀形で，底部は欠損するが丸底と考えられる。全体的に器壁は厚いが，特に底部付近では厚くなる。内外面とも器面調整は丁寧である。368は平底の底部から口縁部まで直線的に伸び，口縁端部は細くなる。器面調整は粗く，輪積み痕が残る。369の直行しながら端部がすぼまる口縁部は，坏身のたちあがりを意識したものと考えられる。

370・371は，高坏の脚部と考えられる。370は大型の高坏で，器壁は極めて厚く，胎土には砂粒を多く含む。371の内面調整は丁寧である。

372・373は，鉢の胴下部から底部である。373の底面には木葉痕が残る。

374・375は，脚付鉢の脚部である。374は脚部の裾が広がり，端部がすぼまる。375の脚端部は丸く収める。

376・377はいずれも小振りな底部であるが，器種不明である。377は，上底気味となる。

**(2) 須恵器（第56～58図　378～414）**

本遺跡で出土した須恵器はその特徴から，おおむね古墳時代後期のものと考えられる。一部に７世紀中頃～８世紀初頭の可能性のあるものも含まれるが，ここでは便宜上古墳時代の遺物として扱っている。

煮炊具が存在しないため，ここでは供膳具から先に分類する。

供膳具

・坏（坏蓋・坏身・高台坏含む）

・その他（鉢・高坏など）

貯蔵具

・壺類（横瓶含む）

・甕類

以下，器種毎に記述する。

**坏**

378～381は，坏蓋である。378は頂部が山形の擬宝珠様のつまみをもち，端部近くの内面に断面三角形のかえりがつく。379～381のつまみの有無については，不明である。いずれも端部を下方に幾分湾曲させる。

382・383は，坏身である。382のたちあがりの端部は丸く収めるが，383は断面三角形となる。

**鉢**

384～386は，鉢である。384・385の口縁部は，直線的に立ち上がるが，胴部から底部に向かっては幾分膨らみをもつ器形と考えられる。386は底部から口縁部に向かって器壁が薄くなりながら直線的に開く。

**高坏**

387～389は，高坏の脚部である。388・389の裾は，大きく開くと考えられる。

**壺**

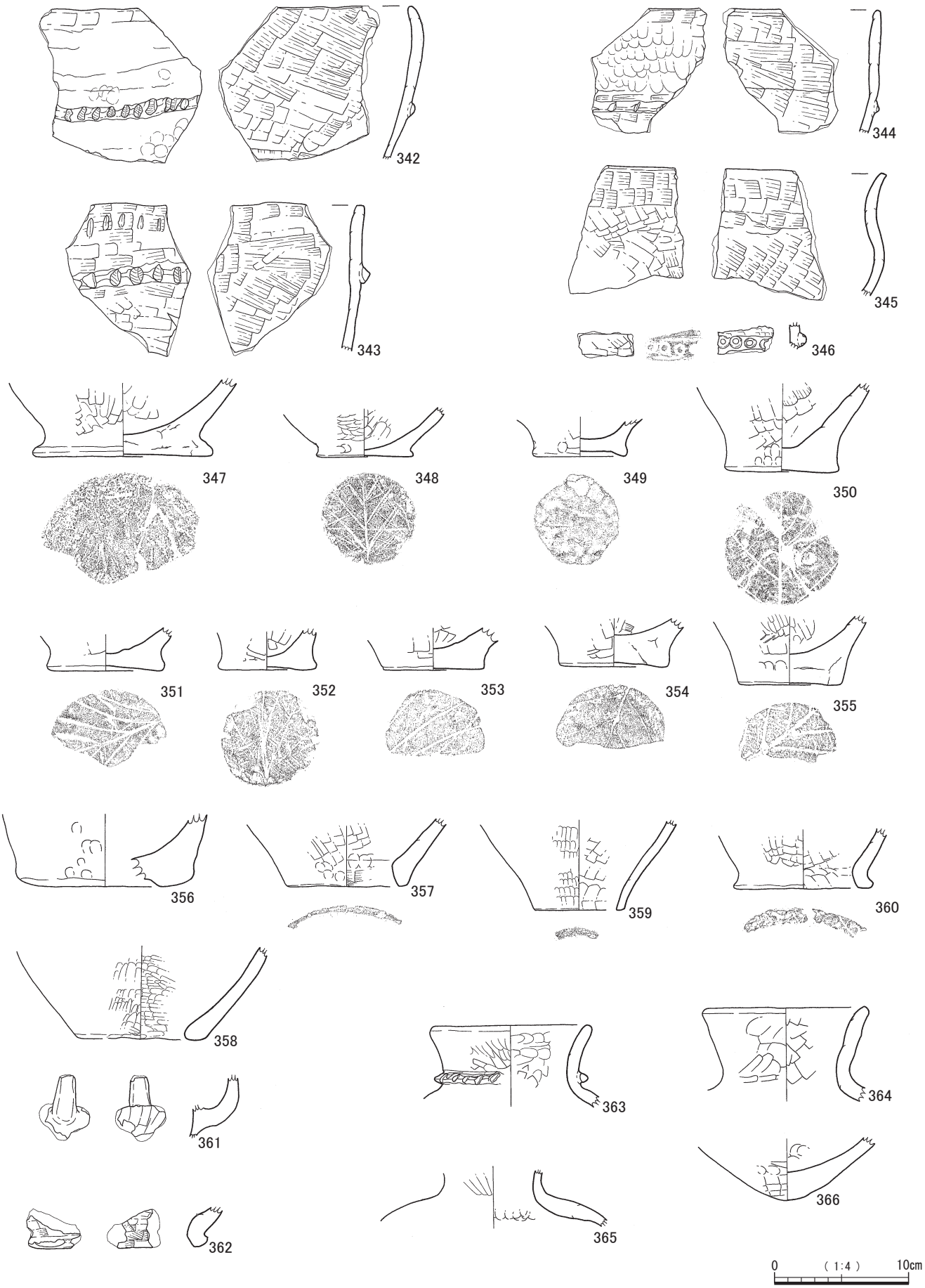
390～396は，壺である。390は，口縁部が外に開く短頸壺である。391は口縁部で，その端部は細く尖るように収め，口縁部には２本の沈線が巡る。392は口縁上部が欠損するが，長頸壺と考えられる。393・394は小壺の胴部で，口縁部・底部を欠損する。395・396は，胴部片である。

**横瓶**

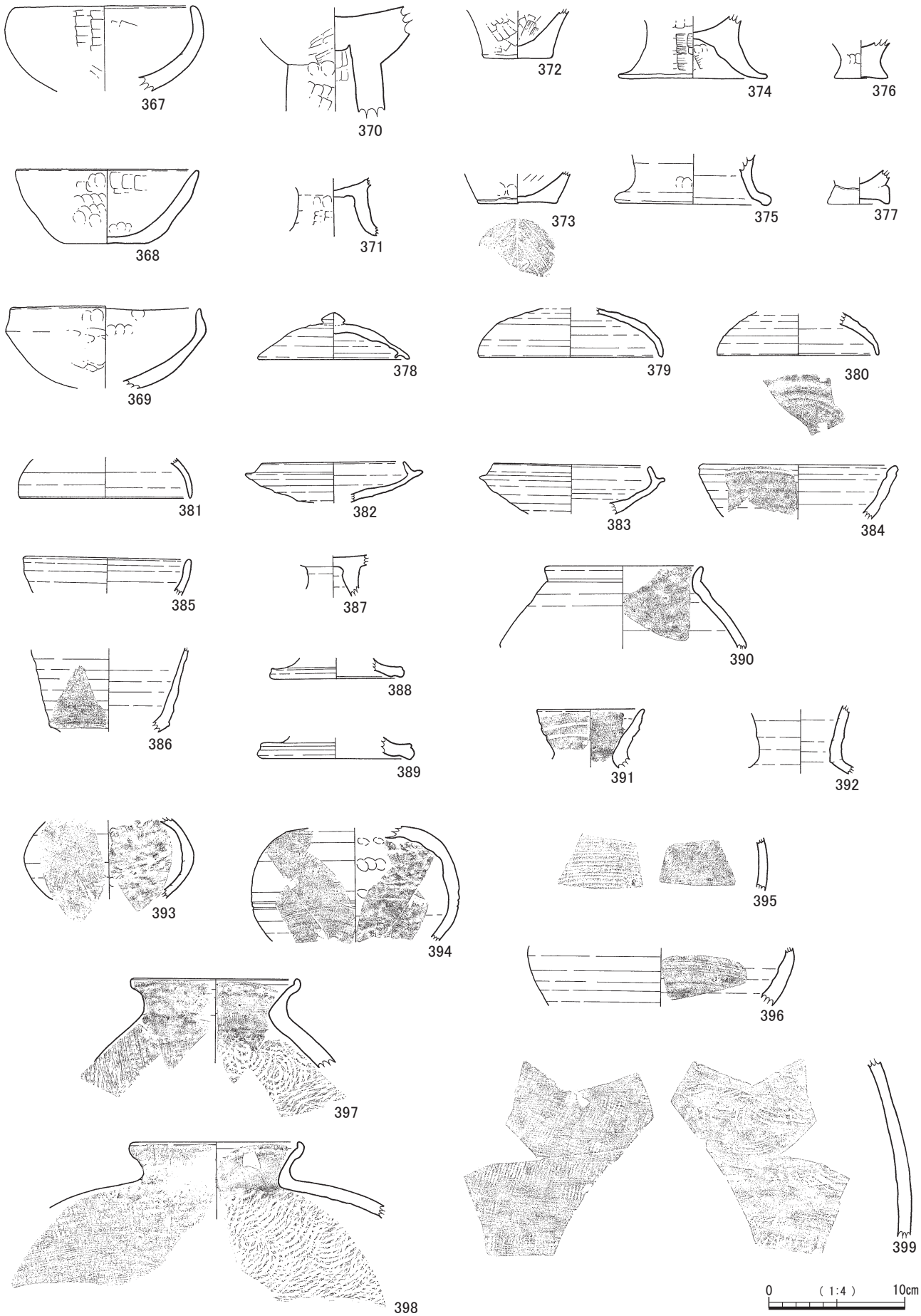
397～401は，横瓶である。胴部外面には格子目状のタタキが施され，その後ナデ消している。また，内面は同心円当て具痕が残る。397・398は口縁部が外に開き，端部が内湾する。399～401は胴部片で，400・401は内面に同心円当て具痕が明瞭に残る。

**甕**

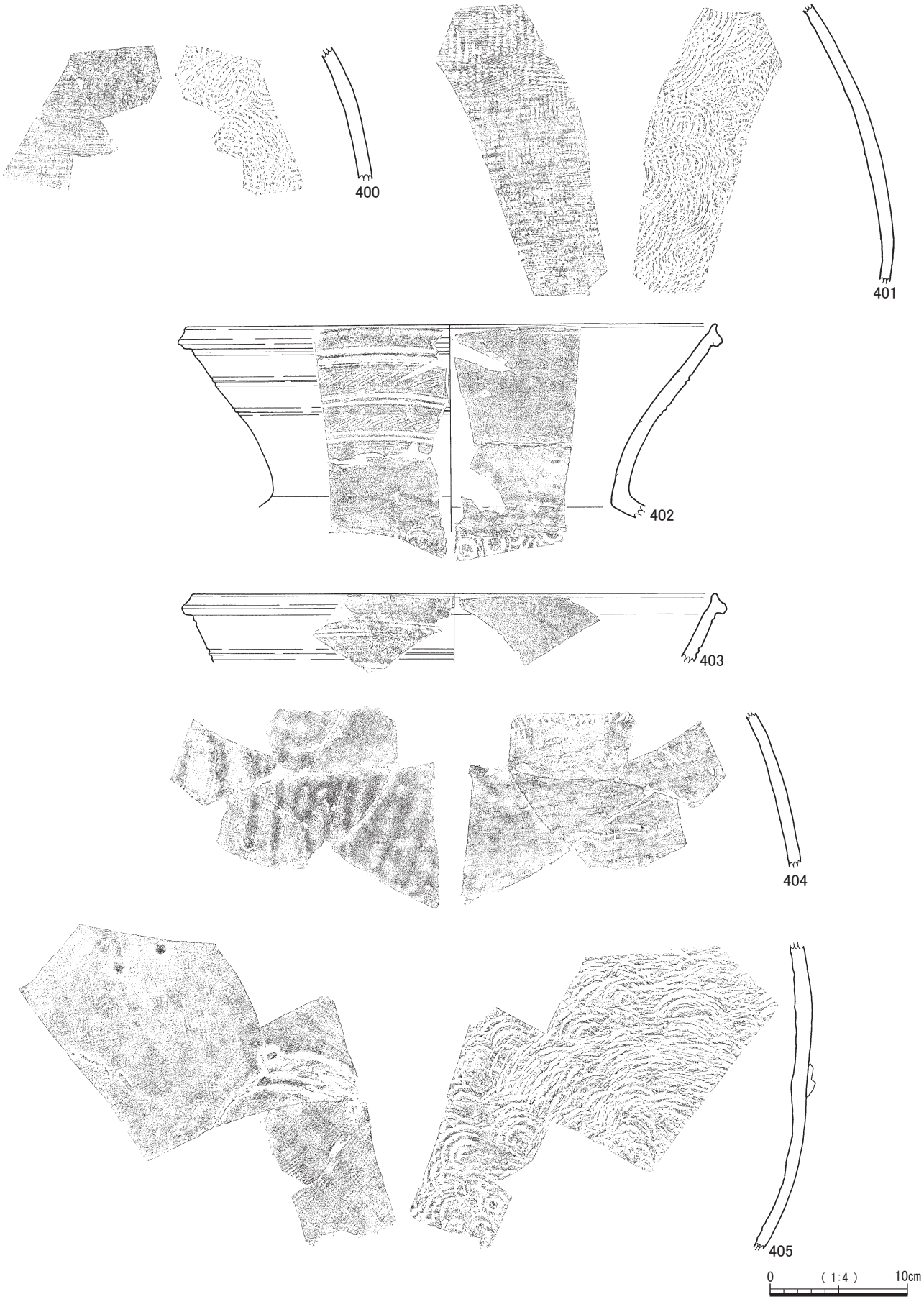
402～414は，甕である。402の口縁部は胴部境目から



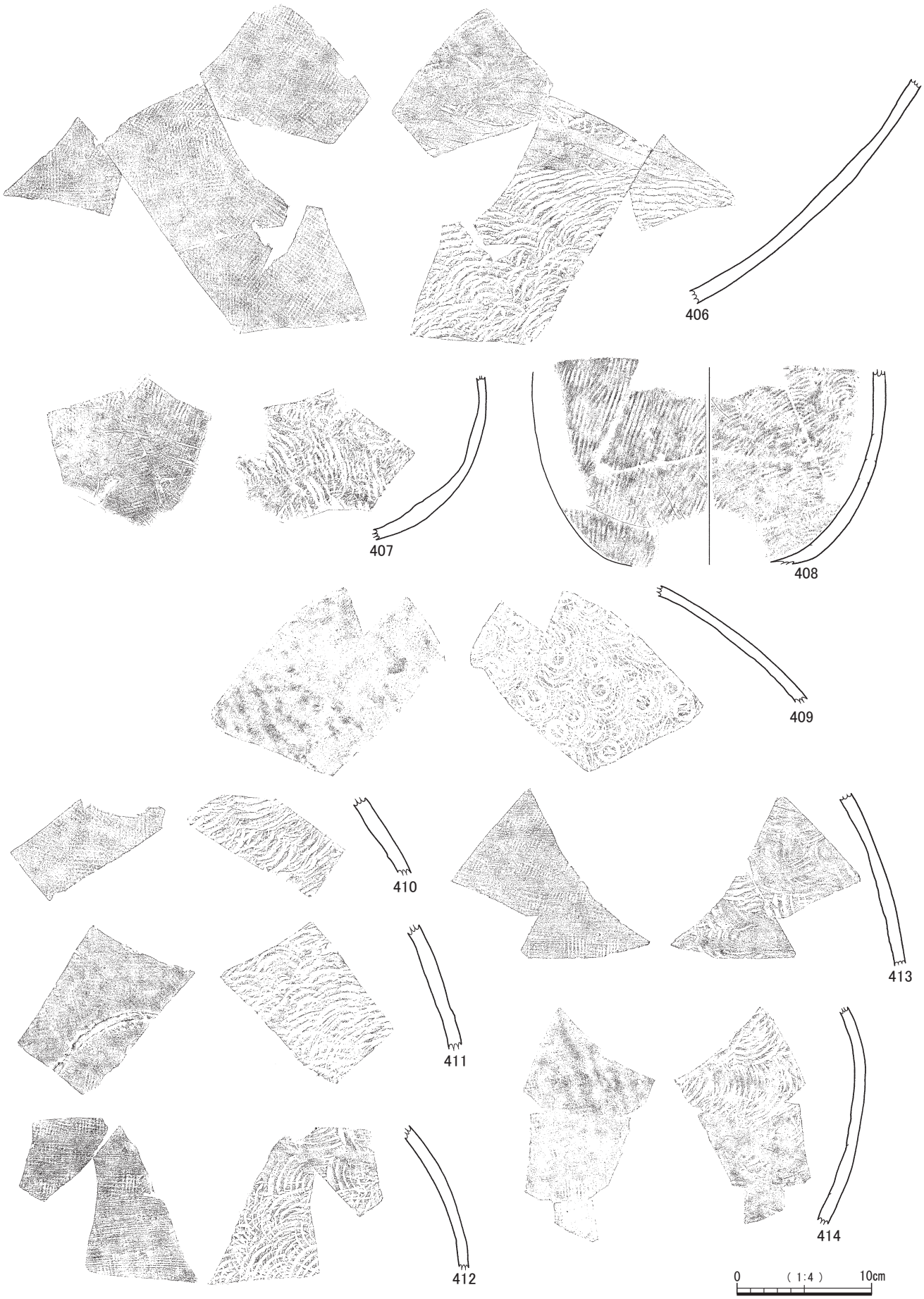

第55図　古墳時代の遺物（１）



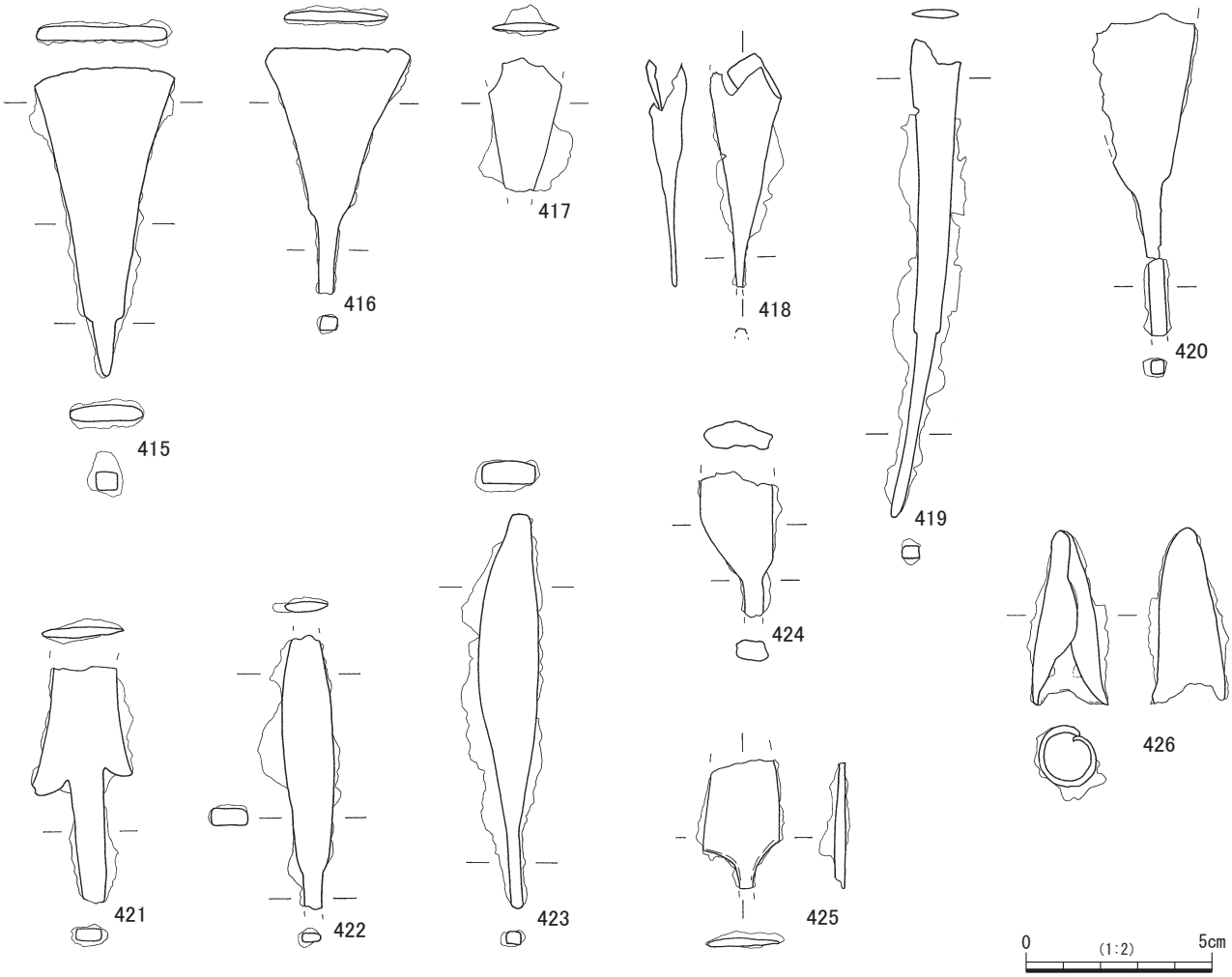

第56図　古墳時代の遺物（2）




第57図　古墳時代の遺物（3）




第58図　古墳時代の遺物（4）




第59図　溝状遺構３出土遺物（５）

大きく外反し，外に開く。端部で外側に肥圧させ，上下に稜をもつ。外面には沈線を２段に巡らせ，その間にヘラ描き沈線文様を斜位に施す。403にも自然釉がかかり，器形・文様構成はほぼ同じと考えられる。404は釉垂れが残る。405の外面には坏の口縁部の一部が癒着し，釉垂れが残る。407は胴下部に３本の沈線が巡り，部分的に自然釉がかかる。408は小型甕の胴下半であるが，底部は欠損する。外面には平行文状のタタキを施し，内面は同心円当て具痕が残る。409の外面には自然釉がかかり，内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。411の外面には，坏の口縁部が癒着する。414の外面には自然釉がかかる。

**(3) 鉄製品（第59図　415～426）**

包含層から鉄鏃11点と鉄鐸１点が出土した。表土から出土した１点を除き，いずれもⅡ層出土である。

**鉄鏃**

415～417は，方頭鏃である。415は，腐食により茎部の形状が不明瞭である。416は，全長6.6cm，最大幅2.9cm，厚さ0.5cmを測る。417は，刃部中央部分以外は欠損している。

418は圭頭鏃である。錆膨れによる裂けが鏃身部に見られる。419は長身の鉄鏃である。420の鏃身部の上端は欠損している。419・420は，ともに圭頭鏃の可能性が考えられる。

421は腸抉鏃で，上部と片方の腸抉が欠損する。

422・423は，柳葉鏃である。424・425は鏃身上部が欠損していることから，全体像が不明である。

**鉄鐸**

426は，円錐状の鉄製品で鉄鐸と考えられる。最大長4.4cm，最大幅2.2cmを測り，舌については確認されていない。

## 第15表　古墳時代遺構内出土土器観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 39 | 196 | 甕 | | 地下式横穴墓 | 口縁部 | — | — | — | ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | | 橙 | 橙 | 羨道閉塞土中から出土 |
| 41 | 197 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構1 | 口～胴部 | 35.8 | — | 22.0 | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 黄橙 | 70，82，83，87・注口状の口縁部 |
| | 198 | 甕 | Ⅱ | 土坑2 | 口～胴部 | 14.5 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 30，35，62 |
| | 199 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構1 | 完形 | 19.8 | 7.6 | 22.2 | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 96，99，102，107,110 |
| | 200 | 甕 | | 溝状遺構1 | 胴～底部 | — | 10.4 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい橙 | 68，69，83，90，91，92 |
| | 201 | 甕 | | 溝状遺構1 | 底部 | — | 6.3 | — | ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 赤褐 | 赤褐 | 52 |
| | 202 | 甕 | | 溝状遺構1 | 底部 | — | 8.8 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 橙 | 55 |
| | 203 | 甑 | | 溝状遺構1 | 底部 | — | 12.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | 橙 | 黄橙 | 51 |
| | 204 | 脚付鉢 | | 溝状遺構1 | 完形 | — | 9.6 | 9.0 | ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 37 |
| 42 | 205 | 提瓶 | 須恵器 | 溝状遺構1 | 口～胴部 | 8.0 | — | — | カキメ | | | | | | ○ | 褐灰 | 褐灰 | 22 |
| | 206 | 提瓶 | 須恵器 | 溝状遺構1 | 胴部 | — | — | — | カキメ | | | | | | ○ | 褐灰 | 褐灰 | 79 |
| | 207 | 提瓶 | 須恵器 | 溝状遺構1 | 胴部 | — | — | — | カキメ | | | | | | ○ | 褐灰 | 褐灰 | 一括 |
| | 208 | 蓋 | 須恵器 | 溝状遺構1 | 口～胴部 | 7.2 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 褐灰 | 褐灰 | 一括 |

## 第16表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 種別 | 出土遺構 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 42 | 209 | 敲石 | 砂岩 | 溝状遺構1 | 7.9 | 4.2 | 2.5 | 146.5 | 一括 | |
| | 210 | 鉄滓 | 鉄関連 | 溝状遺構1 | 5.0 | 2.7 | 2.5 | 43.0 | — | 多孔質の滓　鉄分の含有少，裏面に炉壁が付着 |

## 第17表　古墳時代遺構内出土土器観察表（2）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 43 | 211 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 18.2 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 黄橙 | 452，453，476，477 |
| | 212 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 19.2 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 黄橙 | 7448，7451，7453，7455 |
| | 213 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 25.6 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 橙 | 447，461，515，546，553 |
| | 214 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 24.0 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 赤褐 | 241，336，337，338，339，341 |
| | 215 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 完形 | 23.6 | 9.0 | 31.5 | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | | | ○ | にぶい橙 | 明赤褐 | 5979，5983，5984，7393，7438，7692，7744 |
| | 216 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 25.6 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 5，346，347，348，349，350，351 |
| | 217 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 22.4 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | | ○ | 浅黄橙 | 橙 | 288，289，290，291，292，313（AMS③） |
| 44 | 218 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 21.6 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黒褐 | 明褐 | 43，59，110，212，213，214，216，217，218，256，334 |
| | 219 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 26.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | | ○ | 橙 | 橙 | 7749，7764 |
| | 220 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 22.4 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 135，138，149，151，154，158，312 |
| | 221 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 32.8 | — | — | 板ナデ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 103，105，314，321，359，368，369，487，489 |
| | 222 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 26.0 | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 明褐 | 7744 |
| | 223 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 35.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 明褐 | 417，418，432，433，552 |
| | 224 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 完形 | 25.0 | 4.5 | 23.3 | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄褐 | にぶい黄橙 | 550，551，587 |
| | 225 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 22.6 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7538（AMS④） |
| 45 | 226 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 21.2 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 7744 |
| | 227 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 19.7 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 412，453，556 |
| | 228 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 17.4 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄橙 | 明黄橙 | 378 |
| | 229 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 17.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい褐 | 橙 | 236，238，239，240，329，398（AMS①） |
| | 230 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 完形 | 18.6 | — | 20.8 | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 15，16，17，18，19，20，46，47，74 |
| | 231 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 完形 | 10.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 450 |
| | 232 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 完形 | 17.2 | 7.2 | 22.6 | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7391，7393，7443，7540，7705 |
| | 233 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 完形 | 17.6 | 8.5 | 25.3 | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 420，440，463，464，466，467，488，512，584 |
| | 234 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構2 | 完形 | 14.2 | 8.0 | 22.1 | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 459，518，520，521，566，569，591 |
| 46 | 235 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 27.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 312，322，371，477（AMS⑤） |
| | 236 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 26.7 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 6216，7416，7461，7463，7464，7467，7515，7517，7554 |
| | 237 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 11.3 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 黄橙 | 7538，7539，7541，7700，7701，7705 |
| | 238 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 27.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 明黄褐 | 492，493，577 |
| | 239 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 27.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄褐 | 明黄褐 | 452，562，564，581 |
| | 240 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 28.8 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 136，140，141，150，190，191，192，193，196，197 |
| | 241 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 完形 | 2.4 | 7.8 | 32.0 | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 323，324，374，375，377，403，484，490，493，532，533 |

## 第18表　古墳時代遺構内出土土器観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 47 | 242 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 26.8 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 5925，7462，7464，7514 |
| | 243 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 18.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7700 |
| | 244 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 20.4 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | | 赤褐 | 橙 | 428 |
| | 245 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 24.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | 淺黄橙 | 淺黄橙 | 5934，5947，5948，6310，7371，7372，7373，7374，7430 |
| | 246 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 23.0 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 174，175，176，178，180，182，183，184，185，186，188，189，282，283，284，285，286，287，309 |
| | 247 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 18.6 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | 明褐 | 7744 |
| | 248 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 18.2 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | 橙 | 橙 | 7453，7464，7513，7518，7555 |
| | 249 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 18.2 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | — |
| | 250 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 22.4 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7537，7741（AMS②） |
| | 251 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 26.4 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 447，516，537，565 |
| | 252 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 頸部 | — | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 明褐 | 7688，7748 |
| 48 | 253 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 12.6 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 明黄褐 | 7764 |
| | 254 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底～胴部 | — | 8.6 | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 橙 | 7741 |
| | 255 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 10.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | にぶい橙 | 7744 |
| | 256 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.7 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | にぶい橙 | 364 |
| | 257 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 30 |
| | 258 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 11.8 | — | ケズリ・板ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 橙 | 21 |
| | 259 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 8.8 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 明赤褐 | 344 |
| | 260 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 9.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 黒褐 | 343 |
| | 261 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 9.5 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | 黒褐 | 352 |
| | 262 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 8.7 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7553，7574 |
| | 263 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 8.8 | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい橙 | 245，390，445 |
| | 264 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底～胴部 | — | 長軸7.0<br>短軸6.6 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 橙 | — |
| | 265 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.6 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 22 |
| | 266 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.4 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 5916，5917，5919，7347，7459，7554 |
| | 267 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 6.4 | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 浅黄橙 | 274 |
| | 268 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | 橙 | 橙 | 355 |
| | 269 | 甕 | 底部 | 溝状遺構2 | 底部 | — | 7.6 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 535 |
| 49 | 270 | 甑 | | 溝状遺構2 | 完形 | 28.4 | 9.0 | 24 | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 422，507，508，510，571 |
| | 271 | 甑 | | 溝状遺構2 | 胴～底部 | — | 9.6 | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明黄褐 | 7705 |
| | 272 | 甑 | | 溝状遺構2 | 底～胴部 | — | 10.0 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 230，232，246，400，436 |
| | 273 | 甑 | | 溝状遺構2 | 胴～底部 | — | 10.2 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 明赤褐 | 7462 |
| | 274 | 甑 | | 溝状遺構2 | 胴～底部 | — | 8.0 | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 7537，7705，7741 |
| | 275 | 壺 | | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 9.6 | — | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 淺黄橙 | 橙 | 5957，5959，5960，5961，5963，6335，7378，7379，7380，7410，7444，7471，7492，7493，7545 |
| | 276 | 壺 | | 溝状遺構2 | 口縁部 | 13.0 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 淡橙 | 淡橙 | 6227，7347 |
| | 277 | 壺 | | 溝状遺構2 | 口縁部 | 11.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 6301，6302，7451 |
| | 278 | 壺 | | 溝状遺構2 | 頸部 | 頸部<br>15.6 | — | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 5980，7403 |
| | 279 | 壺 | | 溝状遺構2 | 頸部 | — | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 208 |
| | 280 | 壺 | | 溝状遺構2 | 胴～底部 | — | 6.0 | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 263，264 |
| | 281 | 壺 | | 溝状遺構2 | 底～胴部 | — | 4.0 | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 明赤褐 | 5972，6349，6351，7385，7386，7421，7425，7451，7506（赤色顔料塗布か） |
| 50 | 282 | 壺 | | 溝状遺構2 | 胴～底部 | — | 5.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい黄橙 | 293，294，295 |
| | 283 | 壺 | | 溝状遺構2 | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい黄橙 | 6352 |
| | 284 | 小壺 | | 溝状遺構2 | 完形 | 7.4 | 3.8 | 13.9 | ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 5951，5952，5954，6321，6322，6323，6324，6325，6326，6327，6328，6330，6331，6332，6333，7375，7376，7412，7413，7518 |
| | 285 | 小壺 | | 溝状遺構2 | 口～胴部 | 10.0 | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 5937，5939，5942，5943，5944，6316，6317，6318，7368 |
| | 286 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 完形 | 17.0 | — | 10.5 | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 灰黄褐 | 明赤褐 | 441 |
| | 287 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 口縁部 | 13.2 | — | — | ミガキ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 一括 |
| | 288 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 完形 | 11.2 | — | — | ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 7358，7451，7500，7503，7504 |
| | 289 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 完形 | 9.8 | 4.8 | 10.3 | ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 黄橙 | 395 |
| | 290 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 完形 | 12.0 | 5.2 | 7.3 | ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 灰黄褐 | にぶい黄褐 | 360 |
| | 291 | 鉢 | | 溝状遺構2 | 底～胴部 | — | 6.0 | — | ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | — |

## 第19表　古墳時代遺構内出土土器観察表（４）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 50 | 292 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 完形 | 19.8 | 12.9 | 14.3 | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 7391，7538，7540，7704 |
| | 293 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 完形 | 17.4 | 9.6 | 12.9 | ケズリ・ハケメ・ミガキ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 473484 |
| | 294 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 完形 | 14.2 | 10.0 | 11.6 | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 5906，6237，6379 |
| | 295 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 完形 | 17.9 | 7.0 | 10.8 | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄橙 | 明黄橙 | 7536 |
| | 296 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 口縁～胴部 | 21.2 | — | — | ケズリ・板ナデ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 黄橙 | 7464，7467，7518 |
| | 297 | 脚付鉢 | | 溝状遺構２ | 胴～底部 | — | 8.6 | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 黒褐 | 111，210，211，332 |
| 51 | 298 | 坏身 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 完形 | 13.0 | — | 4.3 | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 373 |
| | 299 | 坏身 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 完形 | 11.4 | — | 3.6 | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 1382，1397，1447，1449，2545，3500 |
| | 300 | 坏身 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 完形 | 11.6 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 266 |
| | 301 | 坏身 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 完形 | 11.6 | — | 3.4 | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 6309 |
| | 302 | 蓋 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 完形 | 12.0 | 5.2 | 2.75 | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 7446 |
| | 303 | 小壺 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 頸～胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 一括 |
| | 304 | 小壺 | 須恵器 | 溝状遺構２ | 胴部 | — | 20.2 | — | ケズリ・カキメ・ナデ | | | | | | ○ | 灰色 | 灰色 | 87 |
| | 305 | 鉢 | 赤色土器 | 溝状遺構２ | — | — | — | — | ハケメ | | | | | | ○ | 橙 | 橙 | 174 |
| | 306 | 鉢 | 赤色土器 | 溝状遺構２ | — | — | — | — | ナデ・ミガキ | | | | | | ○ | にぶい橙 | 明赤褐 | 一括（赤色顔料分析No.８） |
| | 307 | 鉢 | 赤色土器 | 溝状遺構２ | 胴部 | — | — | — | ナデ・ミガキ | | | | | | ○ | 赤褐 | 赤褐 | 一括（赤色顔料分析No.７） |
| | 308 | 鉢 | 赤色土器 | 溝状遺構２ | 胴部 | — | — | — | ナデ・ミガキ | | | | | | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 7122（赤色顔料分析No.11） |
| | 309 | 甕 | 赤色土器 | 溝状遺構２ | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 橙 | 明赤褐 | 7560（赤色顔料分析No.12） |

## 第20表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（２）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 種別 | 出土遺構 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 51 | 310 | 棒状 | 鉄器 | 溝状遺構２ | 17.3 | 1.0 | 0.6 | 14.5 | 132 | |
| | 311 | 刀子 | 鉄器 | 溝状遺構２ | 11.7 | 1.2 | 1.2 | 13.5 | — | |
| | 312 | 鉄鏃 | 鉄器 | 溝状遺構２ | 6.5 | 2.5 | 0.5 | 17.0 | 443 | 方頭鏃 |
| | 313 | 棒状 | 鉄器 | 溝状遺構２ | 4.1 | 1.2 | 0.3 | 4.5 | — | ２点が錆着，鉄鏃基部の可能性 |
| | 314 | 鉄滓 | 椀形滓 | 溝状遺構２ | 4.1 | 3.9 | 2.9 | 45 | 一括 | 椀形滓 |

## 第21表　古墳時代遺構内出土土器観察表（５）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 53 | 315 | 甕 | Ⅰ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 27.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい褐 | にぶい褐 | — |
| | 316 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 16.2 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 890 |
| | 317 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 18.6 | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 橙 | 2511 |
| | 318 | 甕 | Ⅱ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 18.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 1907 |
| | 319 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 20.6 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | — |
| | 320 | 甕 | Ⅲ | 溝状遺構３ | 口縁～胴部 | 20.0 | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | | | | ○ | ○ | ○ | にぶい赤褐 | 橙 | 2509，2929，2930 |
| | 321 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 7.8 | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい浅黄橙 | 橙 | 2954 |
| | 322 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 9.2 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 2764 |
| | 323 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 8.6 | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | 橙 | — |
| | 324 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 9.4 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | （底部に小豆大の丸石の痕跡） |
| | 325 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 7.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 2765 |
| | 326 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 8.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | 橙 | 2750 |
| | 327 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 8.4 | — | ケズリ・ハケメ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | にぶい黄橙 | 橙 | — |
| | 328 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 7.6 | — | ケズリ・ハケメ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 橙 | — |
| | 329 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 10.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 892 |
| 54 | 330 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 7.5 | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい黄橙 | — |
| | 331 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 8.0 | — | ケズリ・板ナデ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 2510 |
| | 332 | 甕 | 底部 | 溝状遺構３ | 底部 | — | 8.6 | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄褐 | 橙 | — |
| | 333 | 甑 | | 溝状遺構３ | 底部 | — | 9.4 | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | | ○ | 褐 | 褐 | 2513 |
| | 334 | 高坏 | | 溝状遺構３ | 底部 | — | — | — | ケズリ・ミガキ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 浅黄橙 | （内面黒色化） |
| | 335 | 鉢 | | 溝状遺構３ | 完形 | 14.9 | 7.7 | 9.9 | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 891 |
| | 336 | 鉢 | | 溝状遺構３ | 完形 | 14.3 | 3.0 | 9.8 | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 橙 | 889 |

## 第22表　古墳時代遺構内出土土器観察表（6）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 54 | 337 | 脚付鉢 | | 溝状遺構3 | 口～胴部 | 13.6 | — | — | ケズリ・ミガキ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | 黄褐色 | 明赤褐 | — |
| | 338 | 脚付鉢 | | 溝状遺構3 | 口～胴部 | 12.5 | — | — | ケズリ・ミガキ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 1713 |
| | 339 | 坏蓋 | 須恵器 | 溝状遺構3 | — | 12.2 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | | 灰 | 灰 | — |

## 第23表　古墳時代遺構内出土遺物観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 種別 | 出土遺構 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 54 | 340 | 磨・敲石 | 磨・敲石 | 溝状遺構3 | 14.0 | 7.5 | 4.3 | 750 | 一括 | 砂岩・凹石 |
| | 341 | 鉄滓 | 鉄滓 | 溝状遺構3 | 7.9 | 5.2 | 4 | 98 | 一括 | |

## 第24表　古墳時代土器観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 55 | 342 | 甕 | Ⅰ | Ⅰ-31 | Ⅱb | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 橙 | 867 |
| | 343 | 甕 | Ⅲ | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 850 |
| | 344 | 甕 | Ⅰ | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ナデ，一部ヒダ状あり | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 804 |
| | 345 | 甕 | Ⅱ | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 橙 | 849 |
| | 346 | 甕 | Ⅲ | L-31 | Ⅰ | 胴部 | | | | ハケメ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 |
| | 347 | 甕 | 底部 | K-30 | Ⅱa | 底部 | — | 13.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい黄橙 | 367，864，865 |
| | 348 | 甕 | 底部 | — | Ⅰ | 底部 | — | 7.0 | — | ケズリ・ミガキ | ○ | | | | ○ | ○ | 橙 | 褐灰 | — |
| | 349 | 甕 | 底部 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 6.8 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい橙 | 3034 |
| | 350 | 甕 | 底部 | J-30 | Ⅱa | 底部 | — | 7.6 | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 黄橙 | 浅黄橙 | 488，489，493，711 |
| | 351 | 甕 | 底部 | L-31 | — | 底部 | — | 9.0 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 |
| | 352 | 甕 | 底部 | L-29 | — | 底部 | — | 7.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 橙 | 一括 |
| | 353 | 甕 | 底部 | J-29 | Ⅱa | 底部 | — | 7.4 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 453 |
| | 354 | 甕 | 底部 | J-30 | Ⅱa | 底部 | — | 8.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 明赤褐 | 497・498 |
| | 355 | 甕 | 底部 | J-29 | Ⅱa | 底部 | — | 7.6 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 赤褐 | 橙 | 749 |
| | 356 | 甕か | 底部 | J-29 | Ⅱa | 底部 | — | 13.4 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 486 |
| | 357 | 甑 | | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 9.2 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | にぶい黄橙 | 5432 |
| | 358 | 甑 | | K-33 | Ⅱa | 底部 | — | 9.4 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 4683 |
| | 359 | 甑 | | J-27 | Ⅱa | 底部 | — | 6.6 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい褐 | にぶい褐 | 5343 |
| | 360 | 甑 | | J-30 | Ⅰ | 底部 | — | 10.6 | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | にぶい赤褐 | 460 |
| | 361 | 甑 | | K-36 | Ⅱb | 取手 | — | — | 4.4 | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明褐 | 明赤褐 | 6901 |
| | 362 | 甑 | | K・L-28・29 | Ⅰ | 底部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 赤褐 | — |
| | 363 | 壺 | | J-36 | Ⅱa | 口縁部 | 6.0 | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明黄褐 | 明黄褐 | 4211，4230 |
| | 364 | 壺 | | J-36 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 12.0 | — | — | ケズリ・板ナデ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | 一括 |
| | 365 | 壺 | | K-32 | Ⅱa | 口縁～頸部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 309，494，495 |
| | 366 | 壺 | | M-38 | 25T | 底部 | — | 5.2 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい橙 | 黒褐 | 一括 |
| 56 | 367 | 模倣坏 | | K-35 | Ⅰ | 口縁～底部 | 14.1 | — | — | ナデ，ユビオサエ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 一括 |
| | 368 | 模倣坏 | | J-30 | — | 口縁～胴部 | — | 13.2 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 6770，6771 |
| | 369 | 模倣坏 | | L-30 | Ⅱa | 完形 | 13.6 | 6.0 | 5.5 | ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 2568，2569 |
| | 370 | 高坏 | | — | Ⅰ | 坏～脚部 | — | — | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 明赤褐 | 明赤褐 | — |
| | 371 | 高坏か台付鉢 | | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 3991 |
| | 372 | 脚台付鉢 | | — | Ⅰ | 脚部 | — | 11.0 | — | ケズリ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | — |
| | 373 | 脚台付鉢 | | K-39 | Ⅰ | 底部 | — | 11.0 | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 |
| | 374 | 鉢 | | — | — | 底部 | — | 5.0 | — | ケズリ・ハケメ・ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | — |
| | 375 | 鉢 | | J-36 | Ⅱa | 底部 | — | 5.6 | — | ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 橙 | 719 |
| | 376 | 小型土器 | | I-26 | Ⅱb | 底部 | — | 4.0 | — | ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 橙 | 淡橙 | 6530 |
| | 377 | 小型土器 | | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 4.6 | — | ユビオサエ・ナデ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | 556 |
| | 378 | 蓋 | | L-33 | Ⅱa | フタ | 11.4 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 2787，3558 |
| | 379 | 蓋 | | L-31 | Ⅱa | フタ | 13.6 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 2284，8019 |
| | 380 | 蓋 | | K-33 | — | フタ | 10.0 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括（窯印『＃？』あり） |
| | 381 | 蓋 | | K-31 | Ⅱa | フタ | 12.6 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 4170 |

## 第25表　古墳時代土器観察表（2）

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 類・種別 | 出土遺構 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 胎土 | | | | | | 色調 | | 取上No.（備考） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 角閃石 | 雲母 | 金雲母 | 石英 | 長石 | 輝石 | 外面 | 内面 | |
| 56 | 382 | 坏身 | 須恵器 | L-31 | Ⅱa | 身 | 13.4 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 2255 |
| | 383 | 坏身 | 須恵器 | J-30 | Ⅱa | 身 | 10.6 | — | — | ケズリ・ナデ | | | | | | ○ | 灰黄 | 灰黄 | 4694，4695 |
| | 384 | 坏身 | 須恵器 | L-35 | | 口縁部 | 11.0 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 4053 |
| | 385 | 坏身 | 須恵器 | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 9.2 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 386 | 鉢 | 須恵器 | K-36 | Ⅱb | 胴～底部 | — | — | — | ナデ | | | | | | | 灰 | 灰 | 6643 |
| | 387 | 高坏 | 須恵器 | J-35 | Ⅱb | 脚部 | — | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 7632 |
| | 388 | 高坏 | 須恵器 | K-35 | | 口縁～底部 | 9.8 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 6611 |
| | 389 | 高坏 | 須恵器 | K-35 | Ⅱb | 口縁部 | 8.5 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 7123 |
| | 390 | 短頸壺 | 須恵器 | K-37 | Ⅰ | 口縁部 | 8.8 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 391 | 小壺 | 須恵器 | L-31 | Ⅱa | 脚部 | 5.8 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 23T |
| | 392 | 長頸瓶 | 須恵器 | K-32 | Ⅰ | 頸部 | 6.2 | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 393 | 小壺 | 須恵器 | K-30 | Ⅱa | 頸～胴部 | — | — | — | ナデ・ユビオサエ・カキメ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 1155，1320，2049 |
| | 394 | 小壺 | 須恵器 | J-30 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | ナデ・ユビオサエ・カキメ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 504 |
| | 395 | 壺？ | 須恵器 | J-29 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 462 |
| | 396 | 壺 | 須恵器 | L-34 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | ナデ | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 397 | 横瓶 | 須恵器 | K-32 | Ⅰ | 口縁部 | 12.2 | — | — | 格子目タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 398 | 横瓶 | 須恵器 | J-29 | Ⅱa | 口縁部 | 12.2 | — | — | 格子目タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 455 |
| | 399 | 横瓶 | 須恵器 | L-33 | Ⅱb | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 7615，8068，8080 |
| 57 | 400 | 横瓶 | 須恵器 | J-29 | Ⅱa | 肩部 | — | — | — | 格子目タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 445，1788 |
| | 401 | 横瓶 | 須恵器 | J-29 | Ⅱa | （胴部） | — | — | — | 格子目タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 456，457 |
| | 402 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱa | 口縁部 | 40.0 | — | — | 沈線文 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 260，1502，3795，4645 |
| | 403 | 甕 | 須恵器 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 40.0 | — | — | 沈線文 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 1834 |
| | 404 | 甕 | 須恵器 | L-32 | | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 245，825，1926，3576 |
| | 405 | 甕 | 須恵器 | L-32 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 229，1859，1861，1919，3611 |
| 58 | 406 | 甕 | 須恵器 | L-34 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黒褐 | 黒褐 | 1108，2904，4580 |
| | 407 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | 格子目タタキ・ナデ・ケズリ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 165，4620，4648，5449 |
| | 408 | 小型甕 | 須恵器 | K-30 | Ⅱb | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰白 | 灰白 | 3068，3069，3070，3071，3072，3073，3074，3075，3076，3077，3078，3079，3080，3081，3082，3083，3084，3085 |
| | 409 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰白 | 灰白 | 3789，3790 |
| | 410 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅰ | 肩部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 一括 |
| | 411 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 灰 | 灰 | 206，3801 |
| | 412 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱa | 肩部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黄灰 | 黄灰 | 3566 |
| | 413 | 甕 | 須恵器 | L-31 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 |
| | 414 | 甕 | 須恵器 | L-33 | Ⅱb | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，カキメ，同心円当具痕 | | | | | | ○ | 黄灰 | 黄灰 | 7944 |

## 第26表　古墳時代遺物観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 種別 | 出土遺構 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 59 | 415 | 方頭鏃 | 鉄器 | K-36 | Ⅱb | 8.4 | 3.7 | 1.1 | 30.0 | 6896 | |
| | 416 | 方頭鏃 | 鉄器 | L-34 | Ⅱb | 6.6 | 2.9 | 0.5 | 17.5 | 7099 | |
| | 417 | 方頭鏃 | 鉄器 | L-31 | Ⅰ | 3.6 | 2.9 | 0.9 | 6.0 | 一括 | |
| | 418 | 圭頭鏃 | 鉄器 | I-26 | Ⅱb | 6.0 | 1.9 | 1.1 | 4.0 | 5839 | 錆膨れによる裂け |
| | 419 | 鉄鏃 | 鉄器 | J-29 | Ⅱa | 12.8 | 1.6 | 0.7 | 24.5 | 500 | |
| | 420 | 鉄鏃 | 鉄器 | L-33 | Ⅱa | 6.7 | 2.8 | 0.5 | 23.0 | 1114 | |
| | 421 | 腸抉鏃 | 鉄器 | J-31 | Ⅱb | 6.4 | 2.8 | 0.6 | 13.0 | 7282 | |
| | 422 | 柳葉鏃 | 鉄器 | L-32 | Ⅱa | 7.4 | 2.2 | 0.5 | 13.0 | 1843 | |
| | 423 | 柳葉鏃 | 鉄器 | L-32 | Ⅱa | 10.8 | 2.2 | 0.8 | 31.0 | 250 | |
| | 424 | 鉄鏃 | 鉄器 | L-30～34 | Ⅱa | 3.9 | 2.0 | 0.7 | 7.0 | — | |
| | 425 | 鉄鏃 | 鉄器 | J，K-29 | Ⅱa | 3.5 | 2.4 | 0.5 | 6.5 | 一括 | |
| | 426 | 鉄鐸 | 鉄器 | L-33 | Ⅱb | 4.4 | 2.2 | 2.0 | 16.5 | 一括 | 円錐状鉄器 |

## 第４節　古代の調査

本遺跡の古代の包含層は，Ⅱ層（Ⅱａ・Ⅱb層含む）である。包含層は中世とほぼ同じであり，区別は困難な部分があるが，確実に古代といえるものを抽出することができたので，それについて述べる。

遺構は，帯状硬化面が検出された。帯状硬化面１の硬化部分の埋土中には紫コラ（開聞岳起源：874年）が入っていることが判明している。

遺物は，土師器（黒色土器を含む）・須恵器・鉄製品が出土している。

以下に，遺構・遺物に分けて記述する。

### １　古代の遺構

当該時期の遺構はいずれもⅡｂ層上面での検出である。Ⅱｂ層は赤黒色土からなる層であり，遺構埋土も基本的に赤黒色土もしくは黒色土に類似していたことから遺構検出は容易ではなく，状況に応じてサブトレンチなどを設定し調査を進めた。

調査の結果，帯状硬化面が３条検出された。帯状硬化面１と２，帯状硬化面２と３がそれぞれ交差する。以下に各遺構について個別に説明する。

#### (1) 帯状硬化面１（第60・61図）

帯状硬化面１は，本遺跡で検出されたもので最も長い帯状硬化面である。K－29区付近で途切れ，南北に分かれる。これはたまたま検出できなかったものである可能性が考えられる。

北側部分はH～J－27～29区で検出し，長さ約25m，幅約60㎝を測る。I－28区で帯状硬化面２とX字状に交わるが，本遺構はその上で検出したことから本遺構の方が新しいと考える。また，北側部分では紫コラ（開聞岳起源：874年）が明瞭に観察された。

南側部分はK・L－29・30区で長さ約15m，幅約60㎝の規模で検出した。北側部分と南側部分の方向性から同一の帯状硬化面と判断した。なお，北側部分で観察された紫コラは南側部分では確認されなかった。

#### (2) 帯状硬化面２（第60・61図　427）

I－28区からL－29区にかけて検出し，長さ約37m，幅1.5mの規模である。帯状硬化面２は帯状硬化面１とI－28区で，帯状硬化面３とL－29区で交差する。交差する部分において,帯状硬化面１を除去するとその下に帯状硬化面２を検出できたことから，前述のとおり帯状硬化面１が新しいと考えられる。

途中では分岐・もしくは派生した可能性のある枝状部分もあるが，当初からなのか時期差によるものかは確認できなかった。帯状硬化面３とも交叉するが，当初は本遺構の方が初めに検出されたので，本遺構の方が新しいと考える。

427は鉄器の一部で，形状はヘラなどに類似する。残存部分は少ないので，本来の形状・用途などは不明である。

この他には，埋土中から炭化したウメの種核が出土している。詳細に関しては第Ⅵ章を参照いただきたい。

#### (3) 帯状硬化面３（第60・61図）

L－29区で東西方向に走る長さ約５m，幅約40㎝の帯状硬化面を検出した。本来は一定の長さをもつ遺構であったと考えられるが，一部のみの検出であった。帯状硬化面２を除去した後に検出されたものであることから帯状硬化面２より古いと考えられる。

### ２　古代の遺物

遺物は,土師器と須恵器が出土している。以下に土師器と須恵器それぞれについて記述する。

#### (1) 土師器（第62図　428～460）

428・429は，坏である。428は腰部が丸く内湾しながら立ち上がる箱形を呈し，胴部の器壁が薄い。429は高台を有し，底部見込にヘラ書きの文様とみられるものが施される。

430・431は，椀である。430は，口径が16.4㎝と比較的大きい。湾曲する体部をもつ。431は，口径が17.4㎝と比較的大きい。口縁端部が若干外反する。口縁部にススが付着し，体部に墨書がみられる。文字の可能性があるが，判読できない。

432は柱状高台椀，433・434は坏，435・436は高台椀の底部，437は蓋である。

以上のうち，428と437は形状からみて須恵器の模倣品と考えられる。

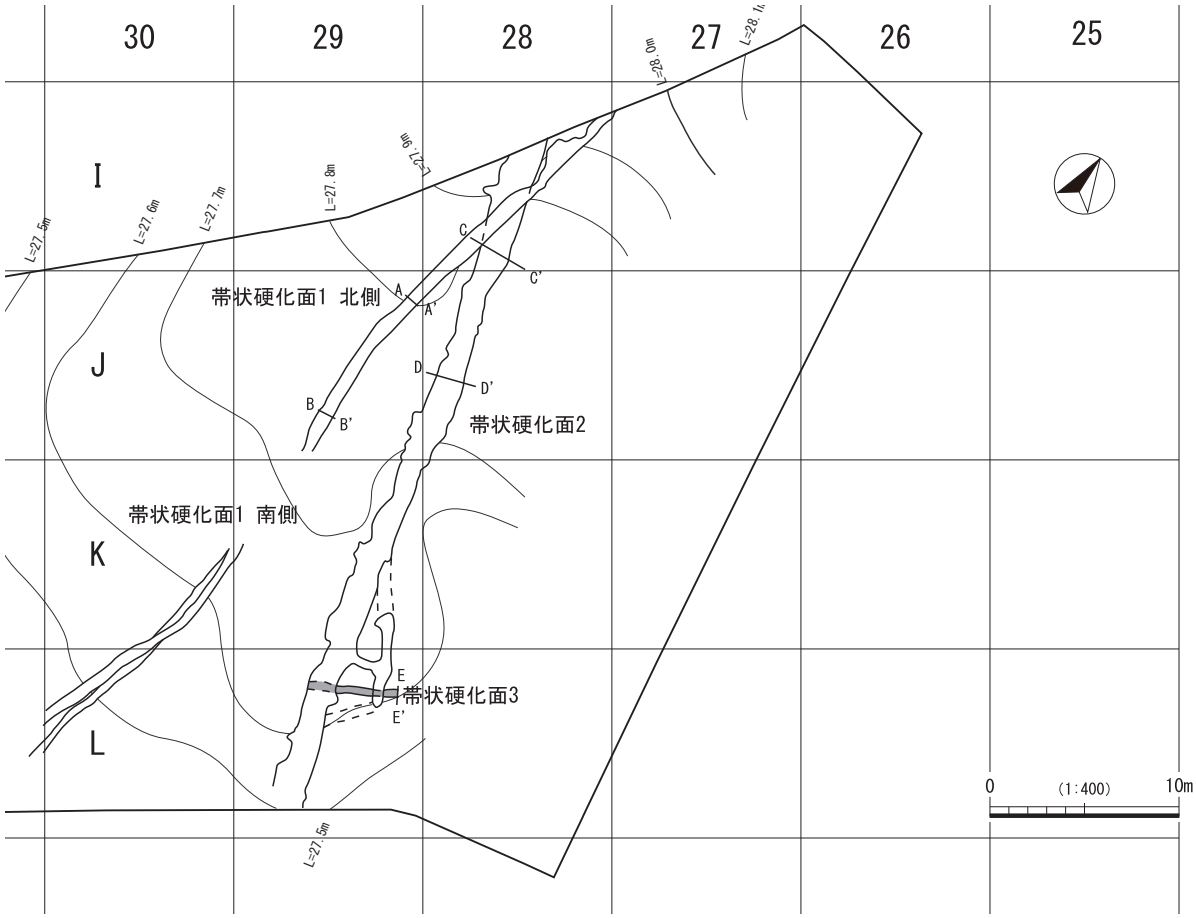
438～447は黒色土器のＡ類（内黒土器）の椀であり，いずれも内面はミガキが施される。439は厚手で他の土師器とは雰囲気が異なる。440は外面の残存部分の左半分が黒色化している。内面にハケメがみられる。441は内面にミガキがあるが，風化のため不明瞭である。外側もイブシによる黒色化が観察できる。443は全体的にイブシによる黒色化が観察できる。

448～450は，高台のついた坏もしくは皿である。内面見込みには，布目圧痕が確認される。布目圧痕がつくものとしては，焼塩土器が想起されるが，この土器は形状など全く異なるものであり，別の用途を考えたい。

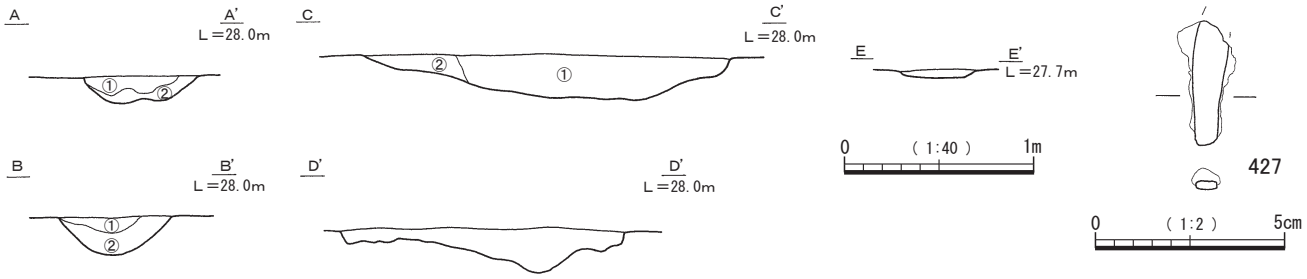
451・452は高坏である。赤みがかっており，赤色顔料が塗布された可能性がある。451には坏部が接着部分でハガレた跡が観察される。452は内面が赤色であり，赤色顔料が塗布された可能性がある。

453は削り出し高台の可能性がある椀で，大型のものであり，鉢の可能性もある。

454～456は，小型の壺である。外面の調整が，回転台を用いていると考えられるので，古代のものとして扱っている。赤みがかっており，赤色顔料が塗布された可能



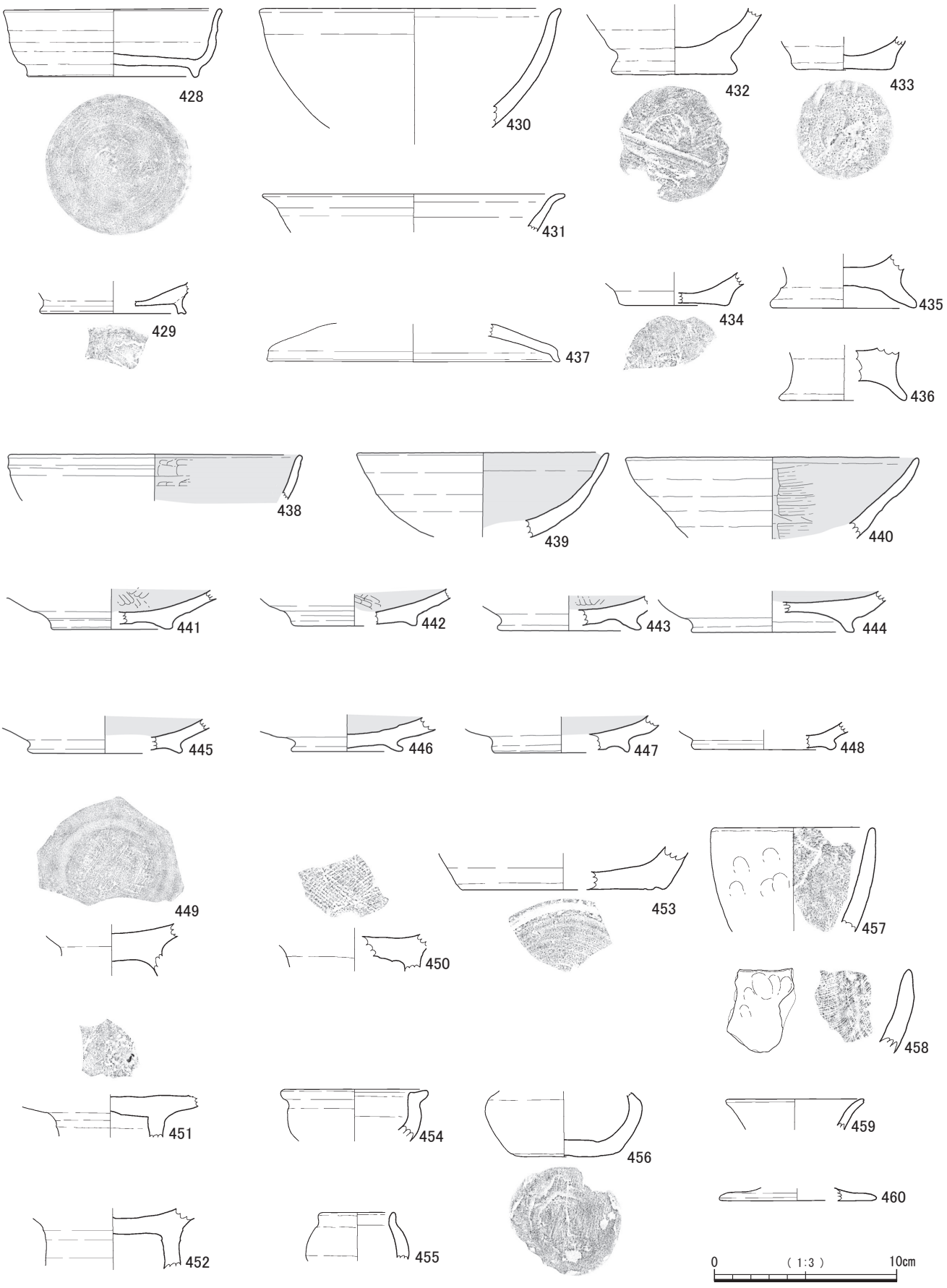

第60図　古代遺構配置図



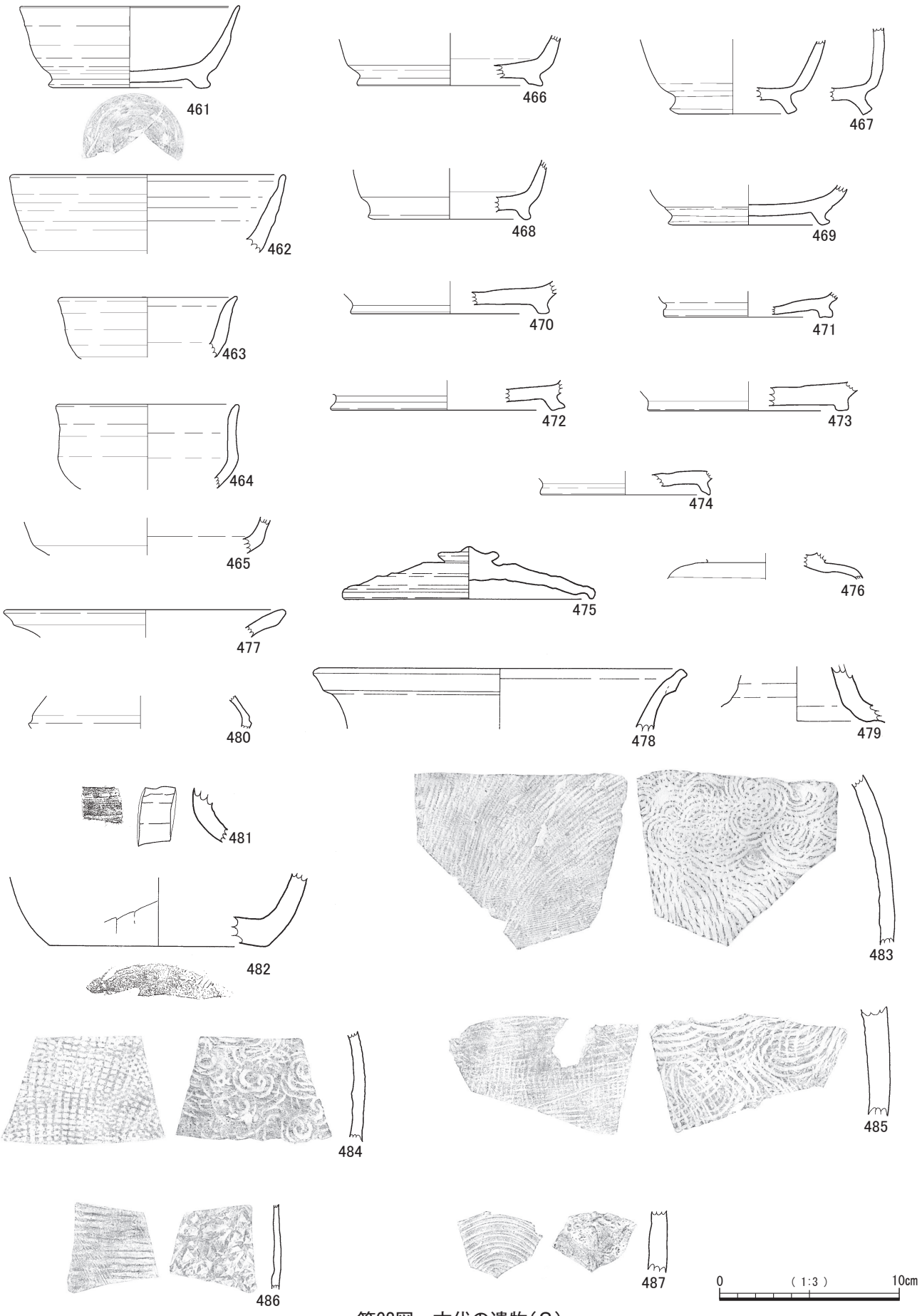

第61図　帯状硬化面断面図及び出土遺物

第27表　古代帯状硬化面埋土観察表

| 遺構名 | 断面箇所 | 検出面 | 大きさ(cm) 幅 | 大きさ(cm) 深さ | 埋土No. | 色調 | 埋土 | 遺物等 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 帯状硬化面1 | 北側 | Ⅱb | 60 | 16 | ① | 暗黄褐色 | 粘性やや有り。しまり強。軽石粒（直径1～2㎜），黄色粒（直径1㎜以下），にぶい黄橙色土ブロック（直径5～30㎜）をわずかに含む。紫コラの良好な層状部分がある。 | 鉄製品 | 紫コラ検出（874年開聞岳噴出物） |
| | | | | | ② | 赤黒色 | 粘性やや有り。周囲の土よりは若干固い。軽石粒（直径1～2㎜），黄色粒（直径1㎜以下）をわずかに含む。 | | |
| | 南側 | Ⅱb | 58 | 20 | ① | 暗黄褐色 | 粘性やや有り。しまり強。軽石粒（直径1～2㎜），黄色粒（直径1㎜以下），にぶい黄橙色土ブロック（直径5～30㎜）をわずかに含む。紫コラの良好な層状部分がある。 | | |
| | | | | | ② | 黒色 | 粘性やや有り。周囲の土よりは若干固い。軽石粒（直径1～2㎜），黄色粒（直径1㎜以下）をわずかに含む。 | | |
| 帯状硬化面2 | 北側 | Ⅱb | 144 | 24 | ① | 黒色 | 固くしまった硬化面。湿ると黒光りする。褐色3～7㎜の塊状ブロック，3㎜幅で10～15㎝の筋状ブロックをわずかに含む。 | | |
| | | | | | ② | 暗黄褐色 | ①よりも固くしまった硬化面。極小のオレンジパミス・極小の白パミスをわずかに含む。紫コラの良好な層状部分がある。 | | 帯状硬化面1の部分 |
| | 南側 | Ⅱb | 150 | 24 | ① | 黒色 | 固くしまった硬化面。湿ると黒光りする。褐色3～7㎜の塊状ブロック，3㎜幅で10～15㎝の筋状ブロックをわずかに含む。 | | |
| 帯状硬化面3 | 北側 | Ⅱb | 38 | 6 | ① | 黒色 | 粘性なし。しまりが強く固く硬化している。極小の御池火山灰・白色粒をごくわずかに含む。 | | |


428
430
432
433
431
429
437
434
435
436
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
453
457
458
451
454
456
459
452
455
460
0
( 1:3 )
10cm

第62図　古代の遺物（１）


461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
0
( 1:3 )
10cm

第63図　古代の遺物（2）

性がある。456は，胎土がマーブル状（赤色系と白色系の２色の胎土が大理石模様のように混じり合っている）である。

457・458は，焼塩土器である。内面に布目の圧痕がある。外部に指頭圧痕による調整が明瞭である。457は逆円錐形を呈する。

459・460は，不明遺物である。赤みがかっており，赤色顔料が塗布された可能性がある。459は，小型品（壺・鉢など）の口縁部の可能性がある。460は，高坏の底部の可能性もあるが全形が不明である。胎土はマーブル状である。

**(2) 須恵器（第63図　461～487）**

461～474は，高台を有する坏（坏B）である。462～465は口縁部～胴部の残存状況から，高台を有する坏として扱っている。466～474は，底部である。いずれも底部の下部が外側へと張り出すもので，８世紀代前半の特徴を有するものである。この中で，473は器表面が風化しており，粉っぽくなっている。

475は，蓋である。擬宝珠状のつまみをもつ。476は小片で，蓋の可能性がある。

477・478は，壺類（瓶）の口縁部である。479は長頸壺である。

480は，小型の壺である。肩部には溝状の文様が一条に巡るもので，自然釉がかかる。

481・482は，壺である。481は外面に自然釉がかかる。482は外面にケズリがあり，弱くナデる。

483～486は，須恵器の甕である。483と486は外面に平行タタキがある。483は内面に同心円当て具痕が，486は内面に車輪文当て具痕がそれぞれ施される。484と485は外面に格子目タタキ，内面に同心円当て具痕がある。

487は，不明遺物である。須恵器の甕，横瓶，平瓶などの可能性がある。外面には回転したカキメがある。

**第28表　古代遺構内出土遺物観察表**

| 挿図No. | 掲載No. | 器種 | 材質 | 出土遺構 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 61 | 427 | 鉄製品 | 鉄 | 帯状硬化面２ | 8.4 | 3.7 | 1.1 | 30 | 6896 | ヘラ状 |

**第29表　古代遺物観察表（１）**

| 挿図No. | 掲載No. | 種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 62 | 428 | 土師器 | 坏 | K-34 | Ⅱa | 口縁～底部 | 11.8 | 9.3 | 3.8 | ナデ | 橙 | 橙 | 4506 | 須恵器の模倣品 |
| | 429 | 土師器 | 坏 | K-38 | Ⅱa | 底部 | — | 8 | — | ナデ | 橙 | 橙 | — | 底部見込みにヘラ書きの文様 |
| | 430 | 土師器 | 埦 | L-33 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16.4 | — | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 3803 | 湾曲する体部 |
| | 431 | 土師器 | 埦 | K-35 | Ⅱb | 口縁部 | 17.4 | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 3466 | 墨書土器　口縁部スス付着 |
| | 432 | 土師器 | 柱状高台椀 | K-41 | Ⅰc | 底部 | — | 6.9 | — | ナデ | 橙 | 橙 | 27T | 柱状高台椀 |
| | 433 | 土師器 | 坏 | J-35 | Ⅱb | 底部 | — | 5.1 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 6625 | — |
| | 434 | 土師器 | 坏 | K-41 | — | 底部 | — | 7.8 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | — | — |
| | 435 | 土師器 | 埦 | K-31 | Ⅱa | 底部 | — | 8 | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 3725 | — |
| | 436 | 土師器 | 埦 | K-31 | Ⅱa | 底部 | — | 6.6 | — | ナデ | 浅黄橙 | 淡橙 | 3726 | — |
| | 437 | 土師器 | 蓋 | K-29 | Ⅱa | — | 17 | — | — | ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 1311 | 須恵器の模倣品　上部欠損 |
| | 438 | 黒色土器 | 埦 | L-28 | Ⅱa | 口縁部 | 16 | — | — | ナデ・ミガキ | 淡黄 | 浅黄橙 | 5081 | 黒色土器Ａ類（内黒土師器） |
| | 439 | 黒色土器 | 埦 | I-26 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 13.8 | — | — | ナデ | にぶい黄橙 | 黒褐 | 6492 | 厚手で他の土師器とは雰囲気が異なる |
| | 440 | 黒色土器 | 埦 | K-33 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16 | — | — | ナデ・ミガキ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 2226 | 黒色土器Ａ類（内黒土師器） |
| | 441 | 黒色土器 | 埦 | J-25，26 | Ⅱa | 底部 | — | 6.6 | — | ナデ・ミガキ | 灰黄 | 灰黄 | — | 内面は黒色　外面は，残存部分の左半分が黒色化 |
| | 442 | 黒色土器 | 埦 | J-25，26 | Ⅱa | 底部 | — | 6.8 | — | ナデ・ミガキ | 灰黄 | 黒褐 | — | 黒色土器Ａ類（内黒土師器） |
| | 443 | 黒色土器 | 埦 | K-30 | Ⅱa | 底部 | — | 7.8 | — | ナデ・ミガキ | 黄灰 | 黒褐 | 1154 | 内側は風化のため不明瞭<br>外側はイブシによる黒色化 |
| | 444 | 黒色土器 | 埦 | L-33 | Ⅱa | 底部 | — | 8.9 | — | ナデ・ミガキ | にぶい橙 | 橙 | 1115 | 黒色土器Ａ類（内黒土師器） |
| | 445 | 黒色土器 | 埦 | L-32 | Ⅱa | 底部 | — | 8.2 | — | ナデ・ミガキ | にぶい黄橙 | 黒 | 3612 | 黒色土器Ａ類（内黒土師器） |

## 第30表　古代遺物観察表(2)

| 挿図No. | 掲載No. | 種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 62 | 446 | 黒色土器 | 埦 | J-31 | Ⅱa | 底部 | — | 6.2 | — | ナデ・ミガキ | 浅黄 | 黒 | 4074 | 黒色土器A類（内黒土師器） |
| | 447 | 黒色土器 | 埦 | K-27 | Ⅱa | 底部 | — | 7.6 | — | ナデ・ミガキ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 5478 | 内黒 |
| | 448 | 黒色土器 | 埦 | K-31 | Ⅰ | 底部 | — | 6 | — | ナデ・ミガキ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | 黒色土器に似るが，黒色ではない |
| | 449 | 土師器 | 高台付皿 | L-31 | Ⅱa | 底部 | — | 2.7 | — | 布目痕・ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | 高坏もしくは高台付皿の可能性<br>見込に布目圧痕 |
| | 450 | 土師器 | 高台付皿 | H-26 | Ⅱa | 底部 | — | 7.4 | — | 布目痕・ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 4948 | 高坏もしくは高台付皿の可能性<br>見込に布目圧痕 |
| | 451 | 土師器 | 高坏 | K-34 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 橙 | 橙 | 3298 | ハガレ　赤みがかっている<br>赤色顔料塗布か |
| | 452 | 土師器 | 高坏 | M-38 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | 内面赤色　赤みがかっている<br>赤色顔料塗布か |
| | 453 | 土師器 | 鉢か埦 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 11 | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 3719 | 削り出し高台の可能性あり |
| | 454 | 土師器 | 壺 | L-30 | Ⅰ | 口縁部 | 8 | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | 小壺か　赤みがかっている<br>赤色顔料塗布か |
| | 455 | 土師器 | 壺 | K-32 | Ⅱa | 口縁～胴部 | — | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 2190 | 小壺か　赤みがかっている<br>赤色顔料塗布か |
| | 456 | 土師器 | 壺 | L-30 | Ⅱa | 肩～底部 | — | 6 | — | ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | 胎土がマーブル状で赤みがかっている。赤色顔料塗布か |
| | 457 | 土師器 | 焼塩土器 | K-34 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 9.2 | — | — | 布目痕・ユビオサエ | 橙 | 橙 | 4519 | — |
| | 458 | 土師器 | 焼塩土器 | K-35 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | 布目痕・ユビオサエ | 明赤褐 | 明赤褐 | 一括 | — |
| | 459 | 土師器 | 不明 | I-27 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 7.6 | — | — | ナデ | 明赤褐 | 明赤褐 | 6384 | 赤みがかっている。赤色顔料塗布か |
| | 460 | 土師器 | 不明 | J-27 | Ⅱb | 底部 | 12.4 | 8.6 | 4.4 | ナデ・ケズリ | 橙 | 橙 | 5670 | 胎土がマーブル状で赤みがかっている。赤色顔料塗布か |
| 63 | 461 | 須恵器 | 高台付の坏 | L-34 | Ⅱb，Ⅱa | 口縁～底部 | 15.5 | 8.8 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 3545 | 坏B |
| | 462 | 須恵器 | 高台付の坏 | I-28 | Ⅱa | 口縁～胴部 | — | 15.4 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 410 | 坏B |
| | 463 | 須恵器 | 高台付の坏 | K-35 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 10 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 6665 | 坏B |
| | 464 | 須恵器 | 高台付の坏 | K-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 10.4 | 7.5 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 625 | 坏B |
| | 465 | 須恵器 | 高台付の坏 | L-30 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | ナデ | 灰白 | 灰 | 一括 | 坏B |
| | 466 | 須恵器 | 高台付の坏 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 9.9 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 1476 | 坏B |
| | 467 | 須恵器 | 高台付の坏 | I-26 | Ⅰ | 底部～胴部 | — | 6.1 | — | ナデ | 灰 | 灰 | — | 坏B |
| | 468 | 須恵器 | 高台付の坏 | L-32 | Ⅱa | 底部 | — | 8.8 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 1646 | 坏B |
| | 469 | 須恵器 | 高台付の坏 | L-35 | Ⅰ | 底部 | — | 8.6 | — | ナデ | にぶい赤褐 | 灰褐 | 一括 | 坏B |
| | 470 | 須恵器 | 高台付の坏 | K-34 | Ⅱb | 底部 | — | 11 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 4610 | 坏B |
| | 471 | 須恵器 | 高台付の坏 | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | 9.3 | — | ナデ | 灰 | 灰黄褐 | 一括 | 坏B |
| | 472 | 須恵器 | 高台付の坏 | J-32，33 | Ⅰ | 底部 | — | 12.4 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 一括 | 坏B |
| | 473 | 須恵器 | 高台付の坏 | H-25 | Ⅰ | 底部 | — | 11 | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | — | 坏B・全体的に風化している |
| | 474 | 須恵器 | 高台付の坏 | L-34 | Ⅰ | 底部 | — | 9 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | 坏B |
| | 476 | 須恵器 | 蓋 | L-30 | Ⅱa | — | — | 6 | — | ナデ | 灰 | 灰黄 | 一括 | — |
| | 475 | 須恵器 | 蓋 | K-36 | Ⅱa | 完形 | 13.6 | — | 2.8 | ナデ | 灰 | 灰 | 724 | — |
| | 477 | 須恵器 | 壺類(瓶) | K-33 | Ⅱa | 口縁部 | 15.5 | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | — | 壺類（瓶など）の口縁部 |
| | 478 | 須恵器 | 壺類(瓶) | K-34 | Ⅱa | 口縁部 | 20 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | — |
| | 479 | 須恵器 | 長頸壺 | K-37 | Ⅰ | 頸部 | — | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | — |
| | 480 | 須恵器 | 小壺 | K-37 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 一括 | 肩部に自然釉がかかる |
| | 481 | 須恵器 | 壺 | J-26 | Ⅰ | 頸部 | — | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | — | — |
| | 482 | 須恵器 | 壺 | K-34 | Ⅱa | 底部 | — | 12 | — | ケズリ・ナデ | 灰 | 灰 | — | — |
| | 483 | 須恵器 | 甕 | M-38 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・<br>同心円当具痕 | 灰 | 灰 | — | — |
| | 484 | 須恵器 | 甕 | K-41 | Ⅰc | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・<br>同心円当具痕 | 黄灰色 | 黄灰色 | 一括 | — |
| | 485 | 須恵器 | 甕 | L-31 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・<br>同心円当具痕 | 灰 | 灰 | 2269 | — |
| | 486 | 須恵器 | 甕 | L-36 | Ⅱb | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ具・<br>車輪文当具痕 | 褐灰 | 灰白 | 7027 | — |
| | 487 | 須恵器 | 甕・壺類 | K-32 | Ⅱb | 胴部 | — | — | — | カキメ | 黄灰色 | 黄灰色 | 3477 | 須恵器の甕，横瓶，平瓶などの可能性 |

## 第５節　中世の調査

本遺跡の中世の包含層は，Ⅱ層（Ⅱａ・Ⅱb層含む）である。本遺跡では古墳時代とともに,中心となる時代のひとつである。

遺構は，掘立柱建物跡４棟（大型掘立柱建物跡１棟含む），竪穴建物跡３棟，土坑20基，溝状遺構５条，帯状硬化面２条，柱穴跡多数を検出した。遺物は，土師器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器・滑石製石鍋・砥石・碁石・土錘などが出土した。

特に，Ｋ・Ｌ－32・33区周辺には，焼土域や柱穴跡などが多く検出されているが，この部分はⅡb層上面において若干の硬化がみられた。また，このエリアでは，炭化ご飯塊や炭化籾塊，炭化種実（桃核・マメ類など）が集中して出土しており，本遺跡における特徴的なエリアとなっている。

以下に，遺構・遺物に分けて記述する。

### １　中世の遺構（第64・65図）

当該時期の遺構はいずれもⅡｂ層上面での検出である。Ⅱｂ層は赤黒色土からなる層であり，遺構埋土も基本的に赤黒色土もしくは黒色土に類似していることから遺構検出は容易ではなく，状況に応じてサブトレンチなどを設定し活用して調査を進めた。

#### (1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，４棟検出された。柱穴跡は調査時から多数検出されているが，明確な建物としてまとまるのは４棟である。いずれも屋内施設（カマド・炉など）は確認されていない。これらは，若干方向が異なることから，時期差や性格の違いなどが考えられる。

**①掘立柱建物跡１（第66図）**

Ｋ－34・35区で検出し，最大長6.49m，最大幅4.49mの遺構である。本来は２間×３間の建物であるとみられるが，南西隅の柱穴を検出できなかった。柱穴①～⑥・⑧では柱痕跡とみられる部分が検出された。

**②掘立柱建物跡２（第67・68図　488・489）**

Ｊ・Ｋ・Ｌ－34区で検出し，最大長13m，最大幅6.1mの大型の掘立柱建物で，２間×５間の建物である。

柱穴の底面に方形状の落ち込みが確認されているものが多いが，西側列と東側列は南北方向にほぼ整然と並ぶ傾向がある。これに対して北側列と南側列は東西方向に「く」字状に並ぶものである。

柱穴①が若干浅めであったり，柱穴⑥が若干小ぶりであったりはしているが，概ね底面の標高には大きな違いはない。

以下に，本建物を構成する柱穴の中で特徴的なものについて個別に説明する。柱穴②・③・⑥・⑪・⑫・⑬は，それぞれ別個の土坑として調査を進めたが，検討の結果，大型掘立柱建物を構成する柱穴であることが明らかとなった。

柱穴①・④・⑥・⑭の４基では確認されていないが，それ以外の柱穴には底面に方形に近い凹み（深さ１～３cm程度）が存在する。この凹みでは，いずれも底面（最下部）では目立った硬化は確認できなかったが，逆に柱穴⑭では掘り込みが確認されないかわりに方形の硬化がみられた。本来は柱のアタリであると考えられる。いずれも溝状遺構９に切られる。

柱穴③においては，埋土中のサンプルから，炭化した種実（ササゲ属）が検出された。詳細については第Ⅵ章を参照いただきたい。

また，柱穴④からは土師器が出土している。

488・489は，柱穴④の埋土中から出土した土師器である。488は土師器坏で，489は土師器小皿である。いずれも底部はヘラ切り痕が残るものである。

**③掘立柱建物跡３（第69図）**

Ｊ－32・33区で検出し，最大長8.5m，最大幅4.3mの遺構である。２間×４間の総柱建物である。本遺跡で検出された掘立柱建物の中で，唯一の明確な総柱建物である。柱筋は若干ずれており，また柱穴も比較的小さなものである。

**④掘立柱建物跡４（第66図）**

Ｋ－28・29区で検出し，最大長７m，最大幅５mの遺構である。２間×３間の建物であるが，１基の柱穴（柱穴⑪）が内側に存在しているので，総柱建物であった可能性も考えられる。

柱穴④・⑦・⑩・⑪は，底面に硬化した部分があり，柱のアタリと考える。他の柱穴では底部における明瞭な硬化部分は確認できなかった。

#### (2) 竪穴建物跡（第64・65図）

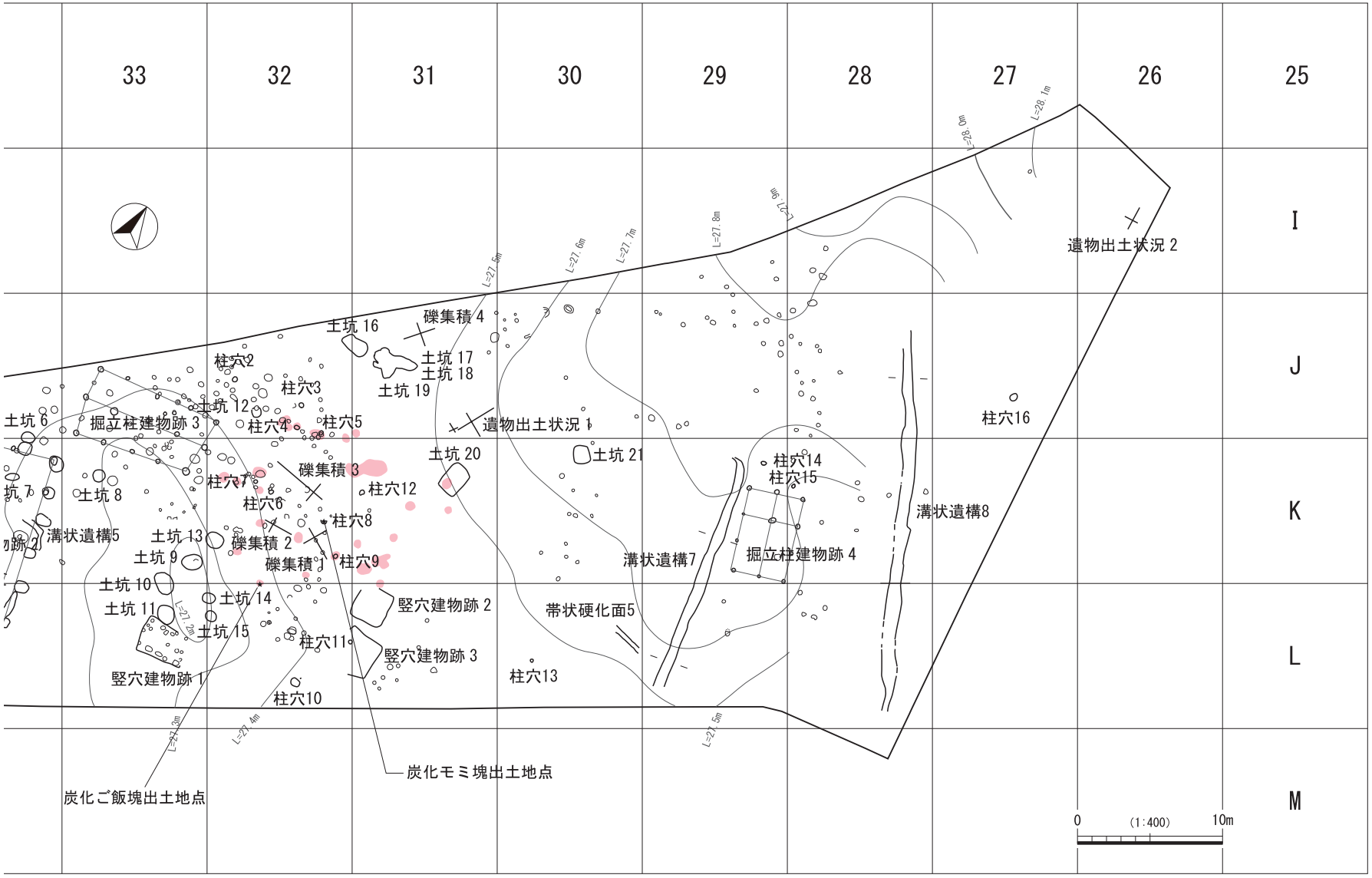
合計３基が検出された。いずれも南北方向に軸を向けている。床面中央には，炉跡とみられる焼土がみられる。床面の壁際の四隅には柱穴跡があり，さらに壁際に沿って四隅の柱穴の間にもやや小さめの柱穴跡が類基並ぶ。埋土は，基本的に埋め返されたような土質であった。

**①竪穴建物跡１（第70図　490）**

Ｌ－33区，最大長3.4m，幅2.1m，検出面からの深さ0.35mを測る遺構である。炭化物の集中を確認したため精査を行ったところ,底面からの壁面の立ち上がりや柱穴がやや整然と並ぶことが判明したことから遺構と判断した。もとは長方形の竪穴建物跡であったと考えられるが全形を確認できていない。

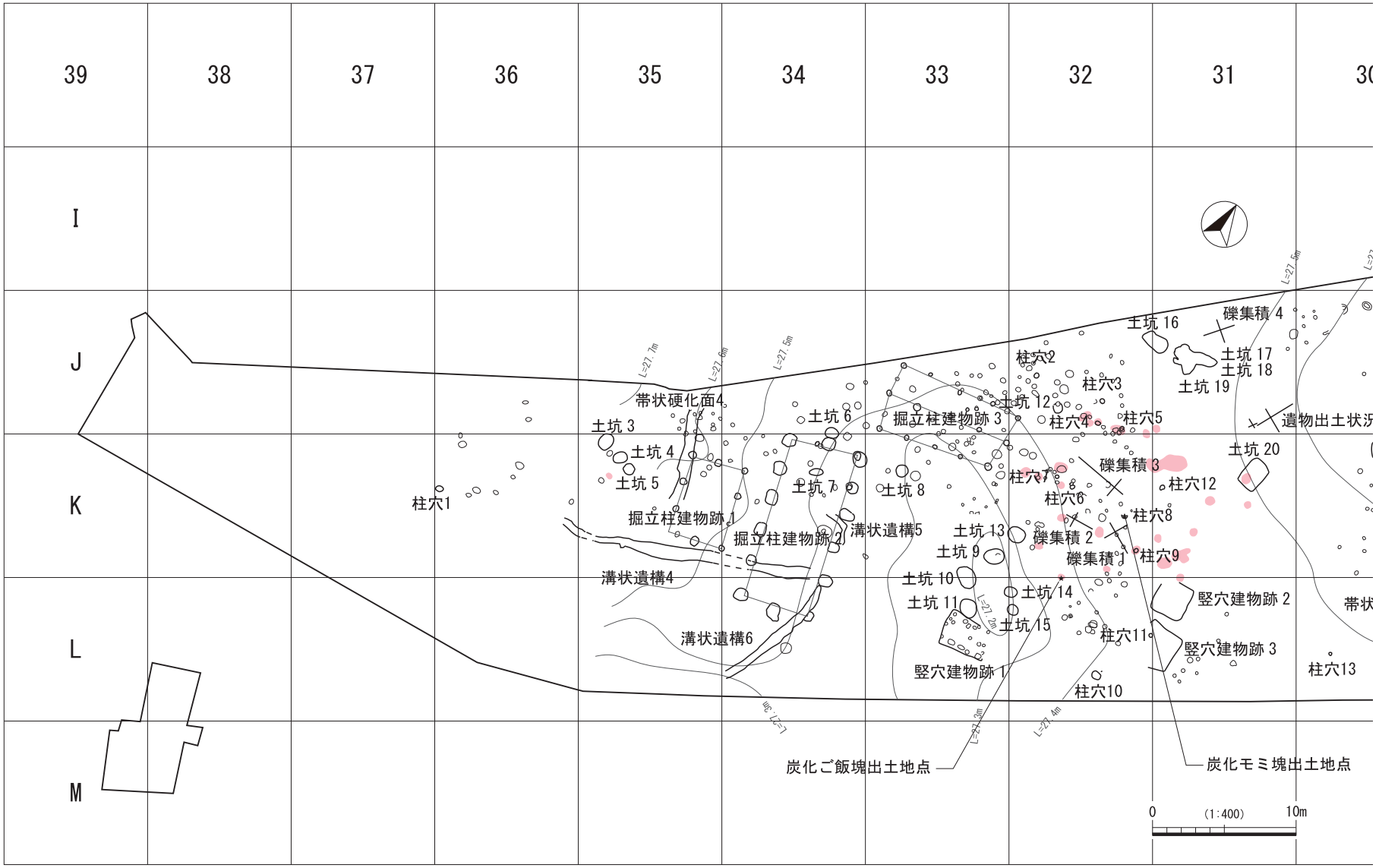
遺構内からは，中世の遺物や炭化物が出土している。この炭化物については，年代分析を行っている。第Ⅴ章を参照いただきたい。

遺構内から土師器が出土した。490は中世の完形の土師器であり，底部が糸切りの小皿である。床面近くで出土したものであるが，横倒しになった状態での出土であ




※赤色部分は焼土範囲

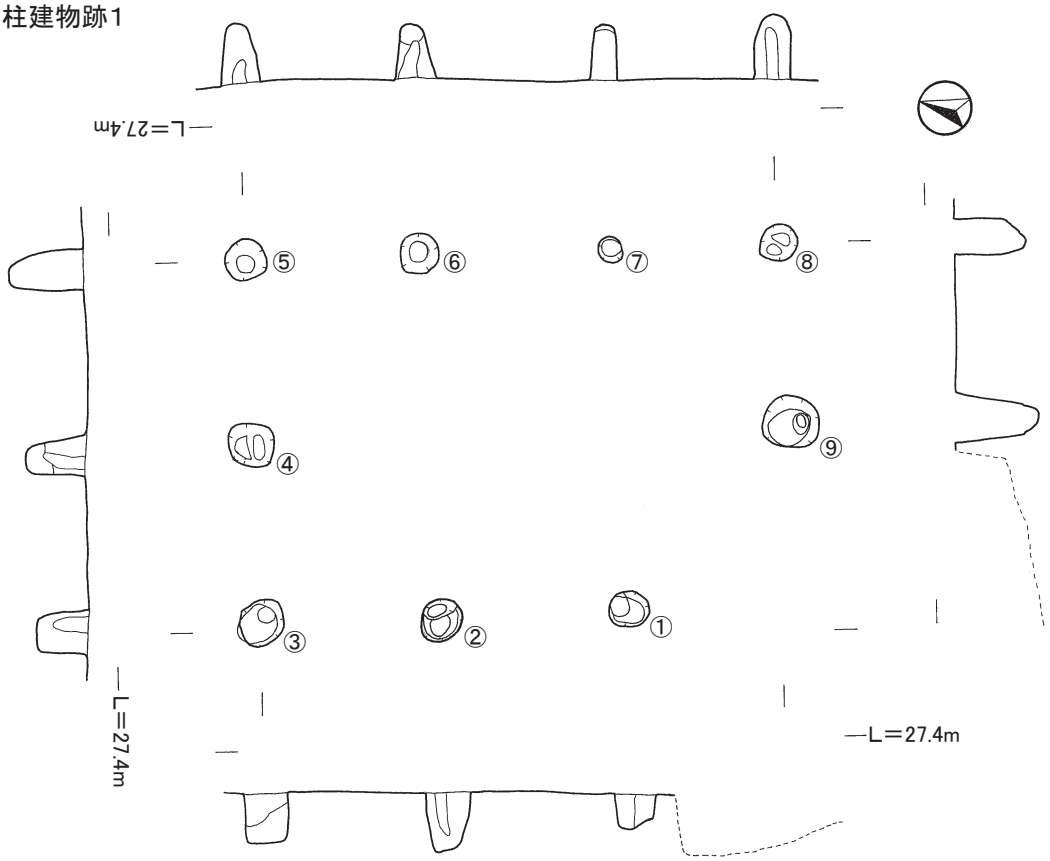
第64図　中世遺構配置図(1)



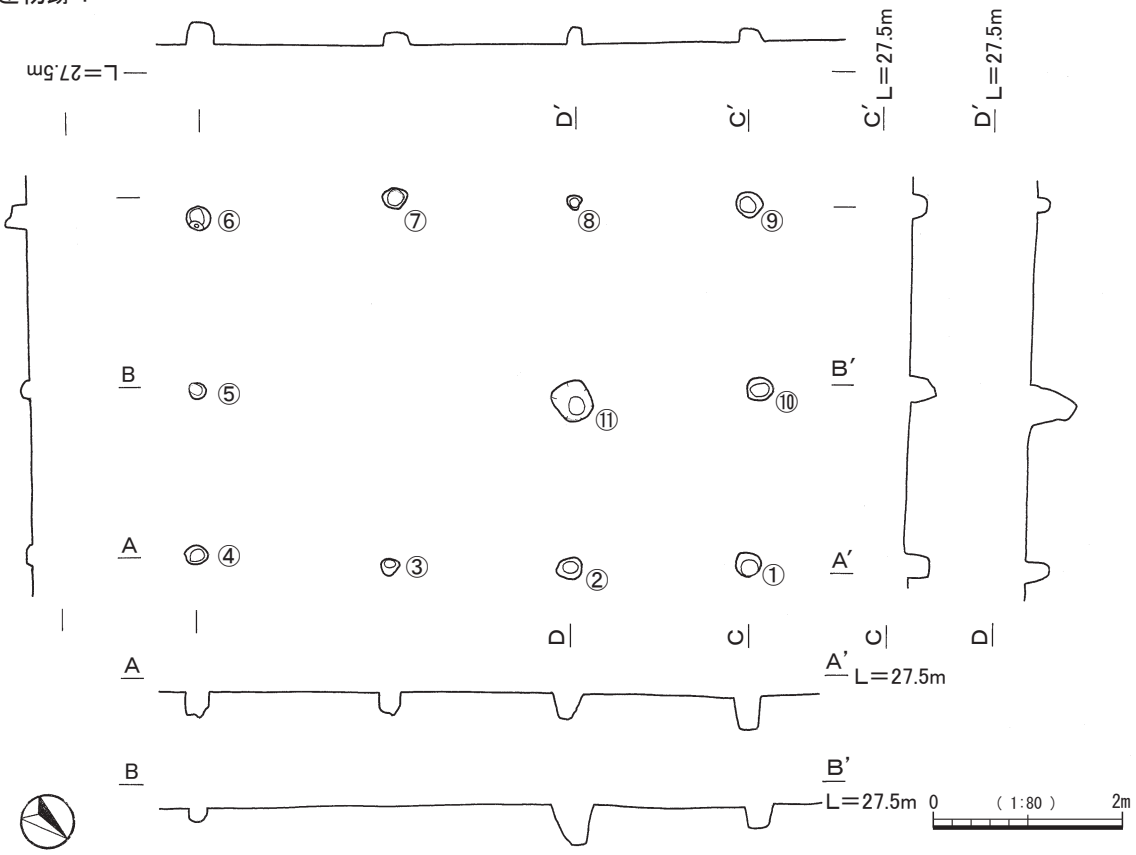

※赤色部分は焼土範囲

第65図　中世遺構配置図(2)

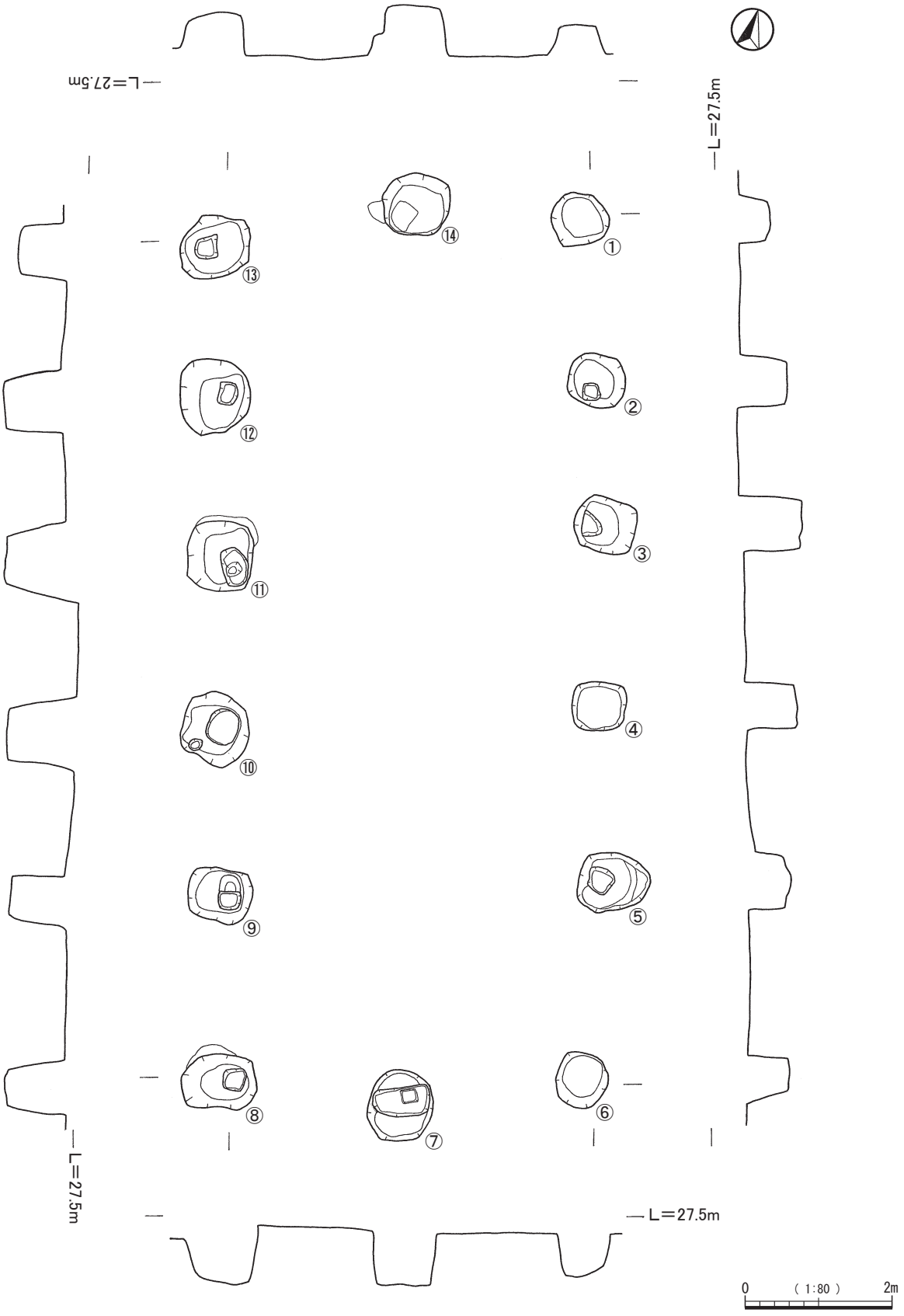
掘立柱建物跡1



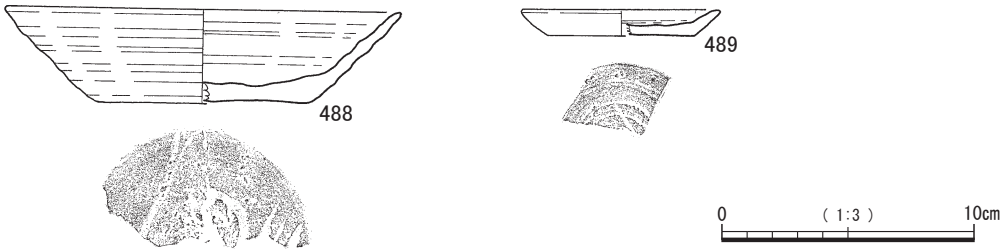

掘立柱建物跡4



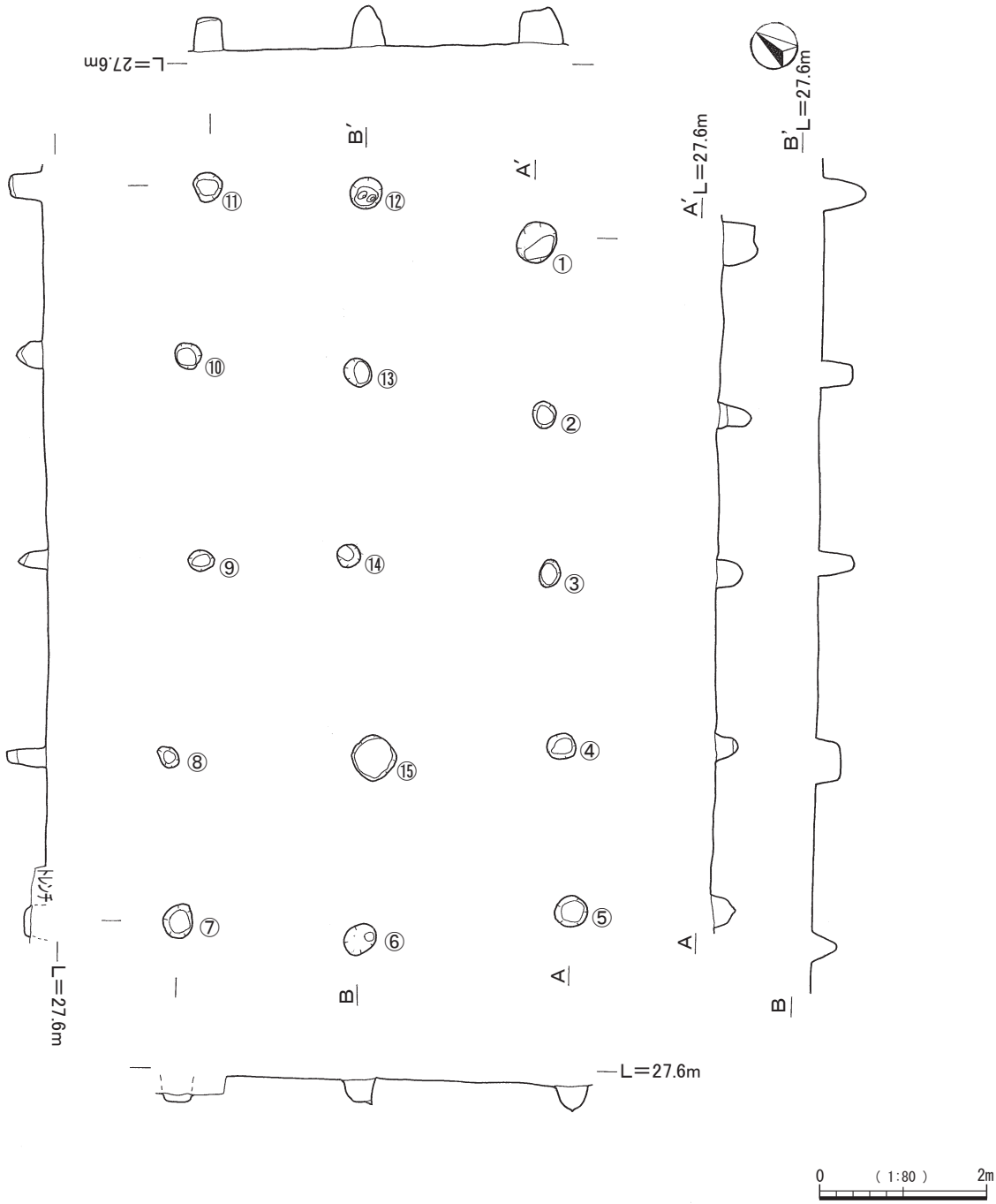

第66図　掘立柱建物跡１・４




第67図　掘立柱建物跡２




第68図　掘立柱建物跡２出土遺物




第69図　掘立柱建物跡３

第31表　掘立柱建物跡１の各柱穴

| 柱穴No. | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | 色調 | 詳細 | |
| ① | 47 | 38 | 40 | 赤黒色土 | 粘性・しまりややあり。御池火山灰土（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ火山灰土ブロック（直径５～24㎜）をわずかに含む。 | |
| ② | 52 | 45 | 57 | | | |
| ③ | 54 | 52 | 54 | | | |
| ④ | 47 | 44 | 60 | | | |
| ⑤ | 43 | 38 | 68 | | | |
| ⑥ | 41 | 40 | 60 | | | |
| ⑦ | 27.5 | 25 | 60 | | | |
| ⑧ | 40 | 39 | 64 | | | |
| ⑨ | 60 | 55 | 90 | | | やや大型の柱穴 |

・建物の大きさ：6.49m×4.49m

第32表　掘立柱建物跡２の各柱穴

| 柱穴No. | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | 色調 | 詳細 | |
| ① | 75 | 64 | 50 | 黒褐色土 | 粘性ややあり。しまり非常に強い。御池火山灰（直径１㎜以下），白色粒（直径１㎜以下），軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。炭化物（直径１～２㎜）もごく少量含む。土器小片（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| ② | 78 | 71 | 63 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ③ | 83 | 75 | 84 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ④ | 73 | 65 | 72 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり・土師器坏・小皿出土 |
| ⑤ | 92 | 87 | 54 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑥ | 73 | 68 | 58 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑦ | 97 | 91 | 68 | | | 他の柱穴よりも若干小振りである。軽石出土 |
| ⑧ | 102 | 72 | 86 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑨ | 85 | 73 | 80 | | | |
| ⑩ | 102 | 93 | 92 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑪ | 101 | 88 | 104 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑫ | 97 | 94 | 74 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり・凝灰岩（30×15cm程度）片 |
| ⑬ | 93 | 85 | 64 | | | 底面に隅丸方形の凹みあり |
| ⑭ | 90 | 85 | 72 | | | 底面に隅丸方形の硬化部分あり |

・建物の大きさ：13m×6.1m

第33表　掘立柱建物跡３の各柱穴

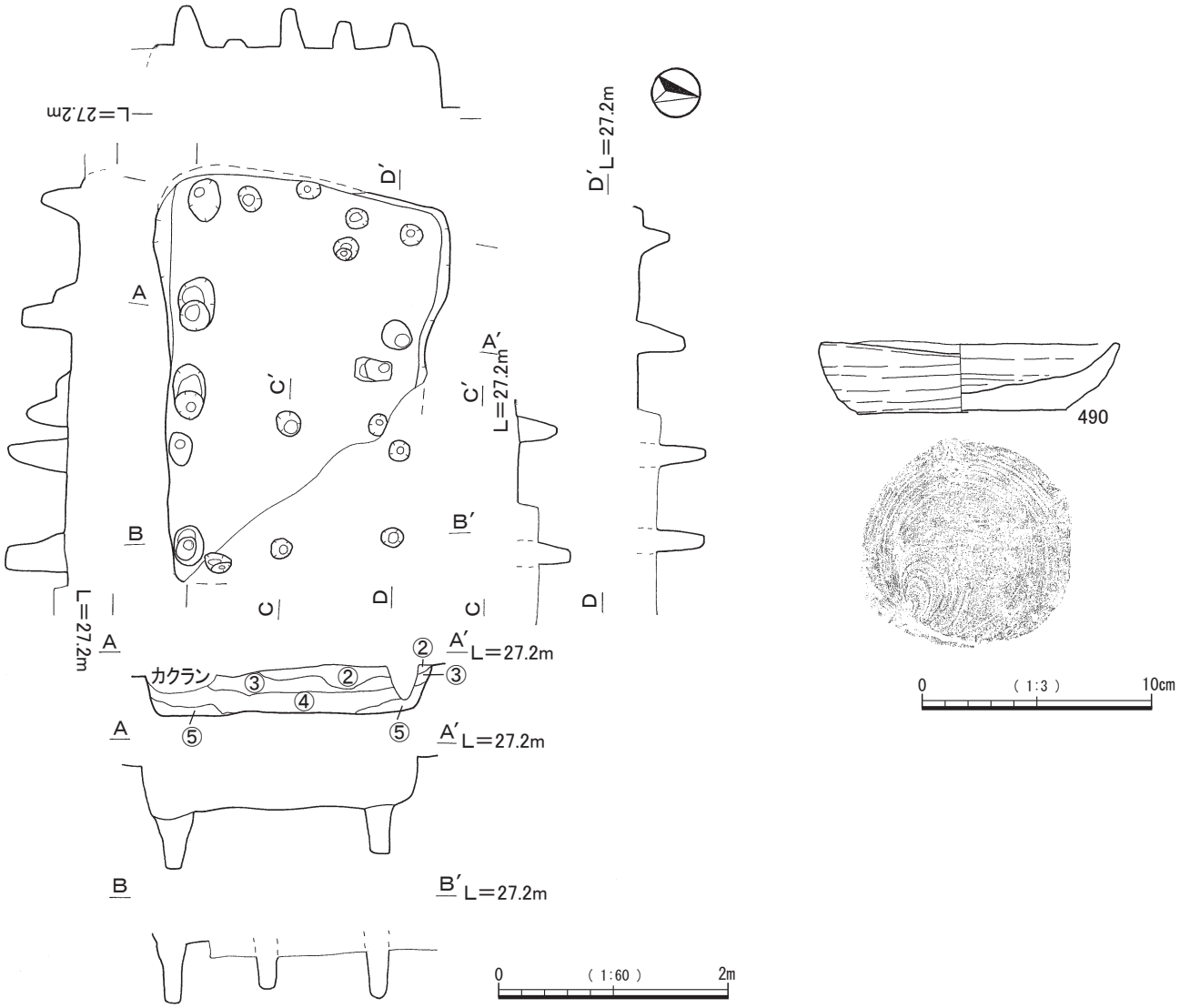
| 柱穴No. | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | 色調 | 詳細 | |
| ① | 50 | 28 | 44 | 黒褐色土 | 粘性・しまりなし。アカホヤ火山灰（Ｖ層）土ブロック(直径３㎜)をわずかに含む。 | |
| ② | 22 | 20 | 43 | | | |
| ③ | 30 | 22 | 35 | | | |
| ④ | 26 | 24 | 25 | | | |
| ⑤ | 32 | 16 | 25 | | | |
| ⑥ | 42 | 40 | 42 | | | |
| ⑦ | 40 | 18 | 11 | | | 先行トレンチにより既掘 |
| ⑧ | 18 | 12 | 44 | | | |
| ⑨ | 26 | 18 | 38 | | | |
| ⑩ | 24 | 22 | 30 | | | |
| ⑪ | 36 | 30 | 40 | | | |
| ⑫ | 40 | 36 | 58 | | | |
| ⑬ | 32 | 26 | 45 | | | |
| ⑭ | 20 | 20 | 40 | | | |
| ⑮ | 52 | 50 | 42 | | | |

・建物の大きさ：8.5m×4.3m

第34表　掘立柱建物跡４の各柱穴

| 柱穴No. | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | 色調 | 詳細 | |
| ① | 27 | 26 | 37 | 黒色土 | 粘性・しまりあり。アカホヤ火山灰土（直径10㎜）をわずかに含む。 | 底面に硬化部分あり |
| ② | 30 | 23 | 27 | | | |
| ③ | 22 | 19 | 23 | | | 底面に硬化部分あり・本柱穴のみ施設内に存在する |
| ④ | 28 | 22 | 20 | | | |
| ⑤ | 19 | 19 | 20 | | | |
| ⑥ | 26 | 24 | 37 | | | |
| ⑦ | 32 | 27 | 15 | | | |
| ⑧ | 15 | 14 | 20 | | | 底面に硬化部分あり |
| ⑨ | 28 | 27 | 15 | | | |
| ⑩ | 28 | 26 | 50 | | | |
| ⑪ | 45 | 40 | 42 | | | |

・建物の大きさ：7m×5m




第70図　竪穴建物跡１及び出土遺物

り，意図的に置かれたものではなく，埋まる過程で埋土とともに入ったものである可能性が高い。

なお，埋土については，以下のとおりである。

埋土①　粘性があり，しまりの強い黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下）と軽石粒（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土②　粘性があり，しまりの強い黒褐色土である。御池火山灰（径１㎜以下）と軽石粒（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土③　粘性としまりがある黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下）と池田降下軽石（径１～２㎜），礫（径10～20㎜）をわずかに含む。

埋土④　粘性があり，しまりの非常に強い黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下）をわずかに含む。

埋土⑤　粘性があり，しまりの非常に強い黒色土である。浅黄橙色の焼土塊片（径５～40㎜）をわずかに含む。

**②竪穴建物跡２（第71図）**

Ｌ－31区，最大長2.4m，幅1.9m，検出面からの深さ0.4mを測る遺構である。隅丸方形を呈する竪穴建物跡である。後世の撹乱によって一部が切られる。底面壁側には柱穴が整然と並ぶ。

なお，埋土については，以下のとおりである。

埋土①　粘性がややあり，しまりのある黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下）と軽石粒（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土②　粘性がややあり，しまりのある黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下）と灰白色砂質土ブロック（径５～20㎜）をわずかに含む。

埋土③　粘性としまりがある黒色土である。御池火山

灰（径１㎜以下）と白色粒（径１～２㎜）をわずかに含む。

埋土④　粘性があり，しまりのややある灰白色土である。

埋土⑤　粘性がややあり，しまりの強い黒色土である。池田降下軽石（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土⑥　粘性・しまりもややある灰白色土である。

**③竪穴建物跡３（第71図　491）**

Ｌ－31・32区，最大長2.2m，幅1.9m，検出面からの深さ0.46mを測る方形の竪穴建物跡である。一部を後世の撹乱によって切られる。遺構内埋土からは中世の遺物が出土する。底面には，数基の柱穴があるが，やや不規則であるので全てが本遺構に伴うものかは明瞭ではない。埋土中からは，白磁の破片が出土している。491は白磁碗の口縁部である。

なお，埋土については，以下のとおりである。

埋土①　粘性・しまりのある黒色土である。御池火山灰（径１㎜）と焼土塊片（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土②　粘性がややあり，しまりのある黒褐色土である。御池火山灰（径１㎜以下），軽石粒（径２～５㎜），焼土塊片（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土③　粘性がややあり，しまりのある黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下），軽石粒（径２～５㎜），焼土塊片（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土④　粘性がややあり，しまりのある黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下），軽石粒（径２～５㎜），焼土塊片（径２～５㎜）をわずかに含む。

埋土③より黒みが強い。

埋土⑤　粘性・しまりがややある浅黄橙色土である。灰土もしくは火山灰の可能性のある砂質層である。

埋土⑥　粘性はややあるが，しまりのない赤黒色土である。御池火山灰（径１㎜以下），灰白色砂質土ブロック（径５～20㎜）をわずかに含む。

埋土⑦　粘性があり，しまりの強い黒色土である。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（径１～２㎜），アカホヤ火山灰ブロック（径５～30㎜）をわずかに含む。

埋土⑧　粘性がややあり，しまりの強い黒色土である。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。

**(3) 柱穴（第72図）**

おおむね直径が60cm以内のもので，深めのものを柱穴とした。本遺跡では，300基以上の柱穴が検出されている。その中で，掘立柱建物跡となったものも存在するが大多数のものは建物としてまとめることができなかった。ここでは，遺物が出土したもの，有機物（炭化米・炭化種実など）が出土したもの，その他特徴的なもの（検出面にて小石が集中するもの）などに限って図面を掲載した。

時期は不明なものもみられるが，遺物が入っているものはほぼすべてが中世のものであるので，基本的には中世のものと判断している。

**①　柱穴１（第73図　492）**

Ｋ－36区で検出し，最大長58cm，幅41cm，検出面からの深さ25.7cmの遺構である。本遺構が検出された36区付近では表層下はⅤ層となり，中世の遺物包含層は存在していないが，数基の柱穴が検出された。本遺構は，その中で唯一の遺物を伴うものであり，土師器小皿の完形品が出土している。

492は，埋土内から出土した完形の土師器の小皿である。底部には糸切り痕が明瞭に残る。

**②　柱穴２（第73図　493）**

Ｊ－32区で検出し，最大長36cm，幅33cm，検出面からの深さ57.5cmの遺構である。

493は，白磁の破片である。白磁碗Ⅳ類（玉縁）の碗である。

**③　柱穴３**

Ｊ－32区で検出し，最大長33cm，幅30cm，検出面からの深さ24.5cmの遺構である。

埋土中には焼土塊や木炭片が混入するもので，炭化したイネ（炭化モミ塊）も検出されている。詳細に関しては，第Ⅵ章を参照いただきたい。

**④　柱穴４（第73図　494）**

Ｊ－32区で検出し，最大長34cm，幅30cm，検出面からの深さ41.5cmの遺構である。埋土中から青磁坏の底部が出土している。

494は，青磁坏である。腰部でふくらみをもつもので，口縁部及び高台は欠損している。

**⑤　柱穴５（第73図　495）**

Ｊ－32区で検出し，最大長29cm，幅25cm，検出面からの深さ34.5cmの遺構である。埋土中の，焼土が多く混入する層中から495の土師器小皿が出土している。

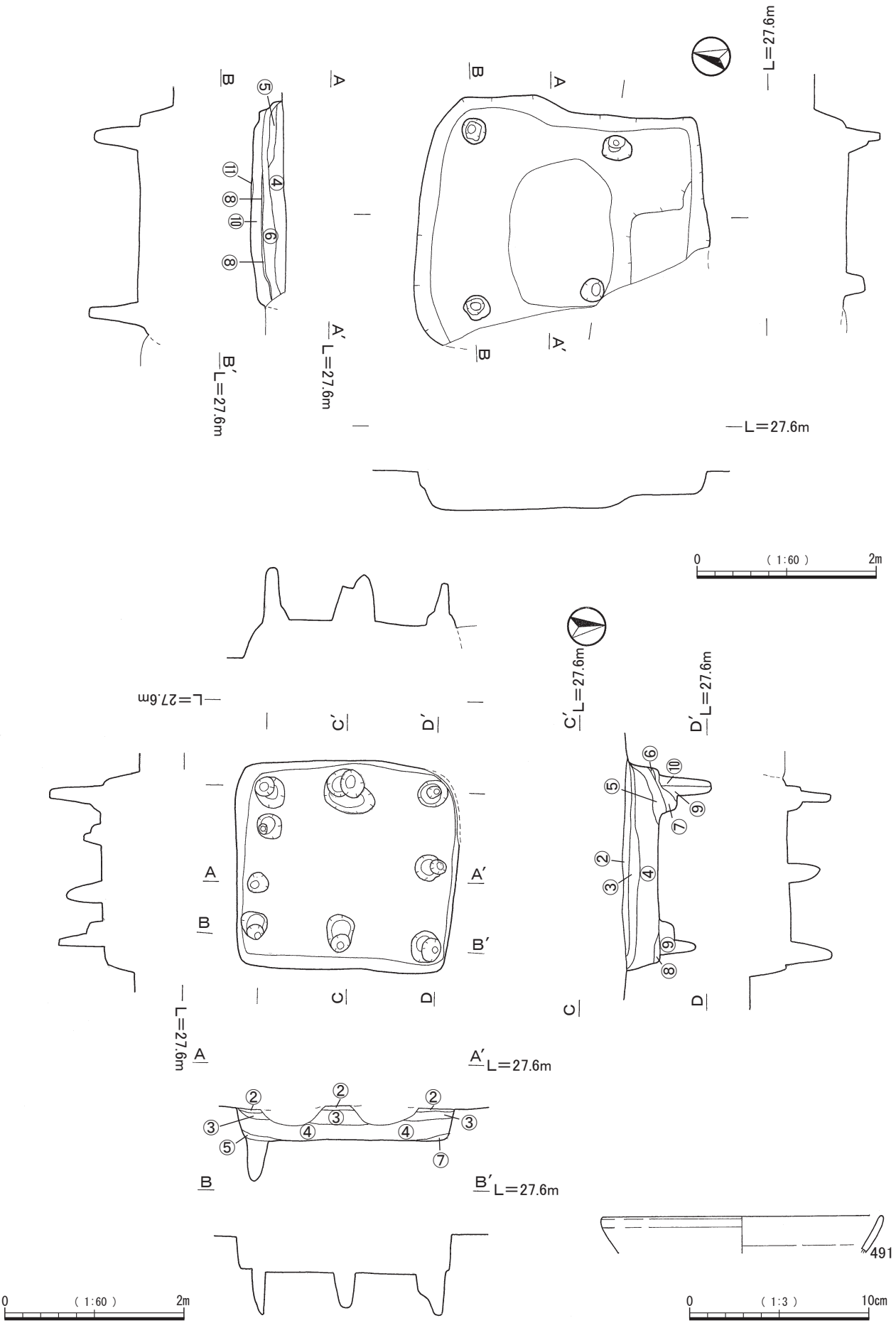
本柱穴の周囲からは，遺物の出土は確認されていないが，埋土中に浅黄色の焼土塊が入るものが散見された。

495は，土師器の小皿である。底面には糸切り痕が残る。

**⑥　柱穴６（第73図　496～499）**

Ｋ－32区で検出し，最大長50cm，幅43cm，検出面からの深さ66cmの遺構である。

柱穴の検出面から埋土上面にかけて，土師器小皿や常滑産甕の破片が出土した。496は，土師器の小皿である。底部には糸切り痕が残る。497～499は常滑産の甕である。497は，口縁部から肩部にかけてのものである。肩部外面やや上方には「米」字形の車輪状の窯印が二つ並んで




第71図　竪穴建物跡２・３及び出土遺物

施される。498・499は胴部で，外面にはナデ，内面にはケズリが施される。これらは同一個体の可能性がある。

また，埋土中からは炭化物が出土している。この炭化物は，種実同定の結果，マメ類であることが明らかになっている。詳細については第Ⅵ章を参照いただきたい。

**⑦　柱穴７**

Ｋ－32区で検出し，最大長27cm，幅26cm，検出面からの深さ29.5cmの遺構である。この柱穴跡では，埋土を掘り下げ中に炭化したモモ種核が検出されている。

**⑧　柱穴８（第74図　500・501）**

Ｋ－32区で検出したものであるが，半分は既掘のため検出できなかった。最大長30cm，残存幅15cm，検出面からの深さ62.5cmの遺構である。検出面近くで炭化モミ塊が出土した。また，土師器や青磁などのほかに炭化桃核などが出土している。500は，土師器坏の底部である。底面は丁寧に調整がされており，切り離しの痕跡が観察できない。また，ハケメもしくは板状圧痕の可能性がある。501は，青磁碗の口縁部破片である。鎬連弁文の碗であり，やや白っぽい色調のものである。口唇部には突起状となった部分がある。

**⑨　柱穴９（第74図　502）**

Ｋ－32区で検出し，最大長28cm，幅25cm，検出面からの深さ23cmの遺構である。浅黄橙色の焼土塊が入る。

502は，青磁碗である。口縁端部が外方へ開くものである。内外面には貫入が多く見られる。

**⑩　柱穴10（第74図　503～509）**

Ｌ－32区で検出し，最大長60cm，幅52cm，検出面からの深さ32cmの遺構である。やや大きめであるが，それに比して比較的浅い柱穴である。埋土中からは，土師器坏・小皿のほかに高台のある黒色土器椀底部などが出土しており，中には完形品も数点みられる。埋土中からは，直径２cm，厚さ１cm程度の扁平な自然礫も出土している。

503～509は，土師器である。503～506は，坏である。４点ともにほぼ同規格のものである。507は黒色土器Ａ類（内黒）埦の底部である。低く張り出す高台を有する。508は坏の可能性があるが，底部のみであるので明らかでない。若干柱状高台に類似する低い高台をもつものである。509は，小皿である。底面にはヘラ切り痕がのこる。

**⑪　柱穴11**

Ｌ－32区で検出し，最大長29cm，幅24cm，検出面からの深さ40cmの遺構である。人頭大の焼土塊の入った柱穴跡である。竪穴建物跡３に隣接する。

焼土塊は，サンプルを採取し，水洗・ふるいがけを行った。その際に採取できた炭化物について，種実同定を行ったところ，イネの炭化胚乳が確認されている。詳細に関しては，第Ⅵ章を参照いただきたい。

**⑫　柱穴12（第74図　510）**

Ｋ－31区で検出し，最大長40cm，幅31cm，検出面からの深さ38cmの遺構である。埋土中から銭貨が出土している。

510は銭貨であり元豊通寶である。埋土中で検出している。元豊通寶は北宋皇帝の神宗の元豊元（1078）年初鋳であり，北宋銭である。

**⑬　柱穴13（第74図　511）**

Ｌ－30区で検出し，最大長20cm，幅18cm，検出面からの深さ66cmの遺構である。柱穴内から，土師器の小皿が出土した。

511は，ほぼ完形の土師器の小皿である。つくりは粗く，底部はヘラ切りであるが，不安定であり平坦面はみられない。

**⑭　柱穴14**

Ｋ－29区で検出し，最大長34cm，幅24cm，検出面からの深さ40.5cmの遺構である。ハマグリに類似した２枚貝が多く埋土中にみられた。底面では，柱のアタリが確認されており，柱が立てられていたことが確認される。掘立柱建物跡４に近接するが関連は不明である。

**⑮　柱穴15**

Ｋ－28区で検出し，最大長20cm，幅17cm，検出面からの深さ21cmの遺構である。検出面にて，小型の貝殻がまとまって確認された。埋土中には良好な貝殻は確認できなかったが，粉末状になったものがわずかにみられた。

底面については，柱のアタリは明確でなく，柱穴であったかも不明瞭である。

**⑯　柱穴16**

Ｊ－27区で検出し，最大長32cm，幅30cm，検出面からの深さ22cmの遺構である。検出面において小石が集中して確認された。

底面にはⅢａ，Ⅲｂ層が硬化した部分があり，柱のアタリと考える。

**(4) 土坑**

中世に該当するとみられる土坑は19基検出された。遺物を含むものとそうでないものがある。おおむね直径が70cm以上のものであり，深さが最大長を超えないものである。

**①　土坑３（第75図）**

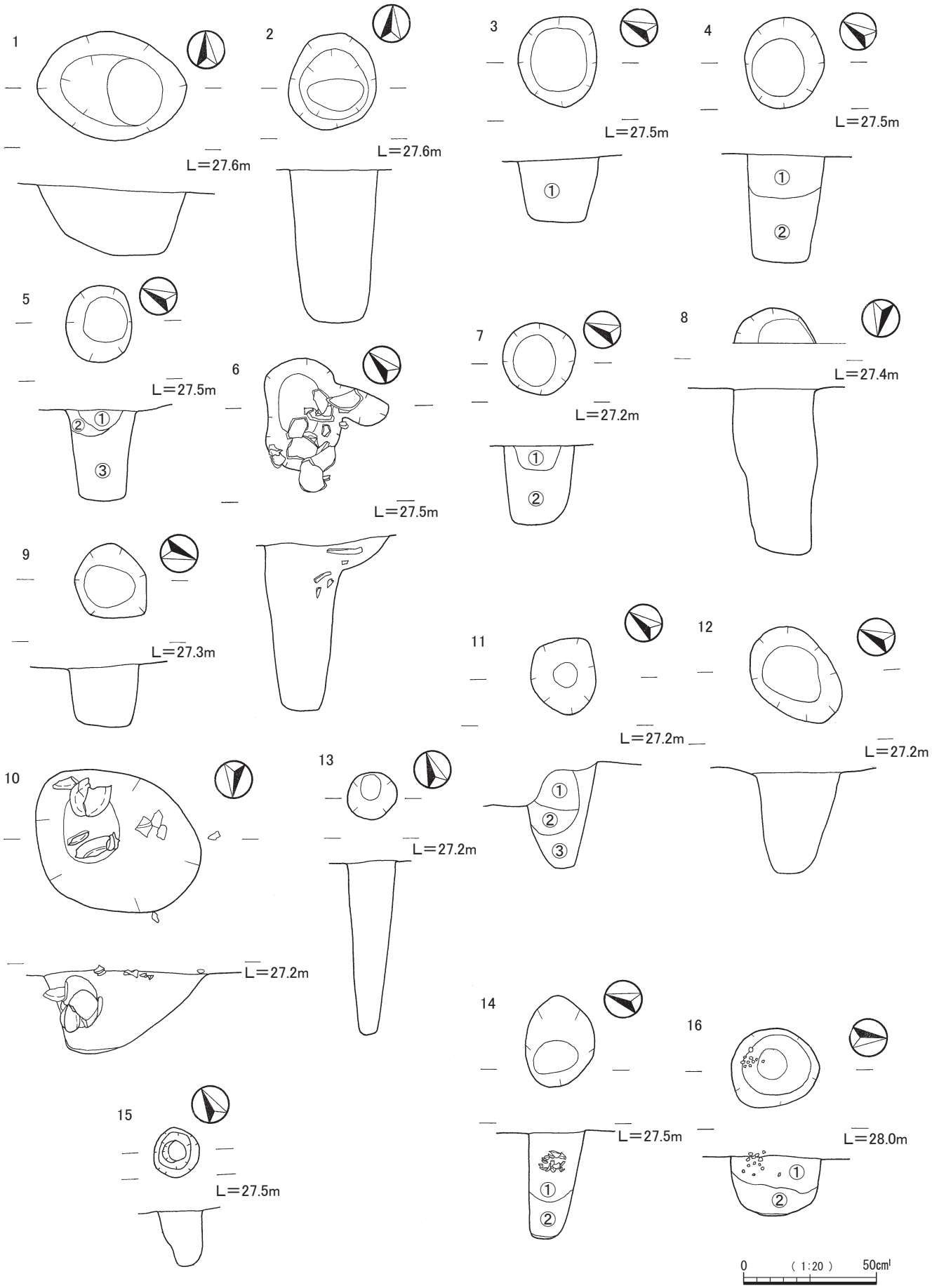
Ｋ－35区で検出し，最大長1.15m，幅0.9m，検出面からの深さ0.4mの遺構である。底面は，丸みを帯びており，フラットな部分は少ない。

**②　土坑４（第75図）**

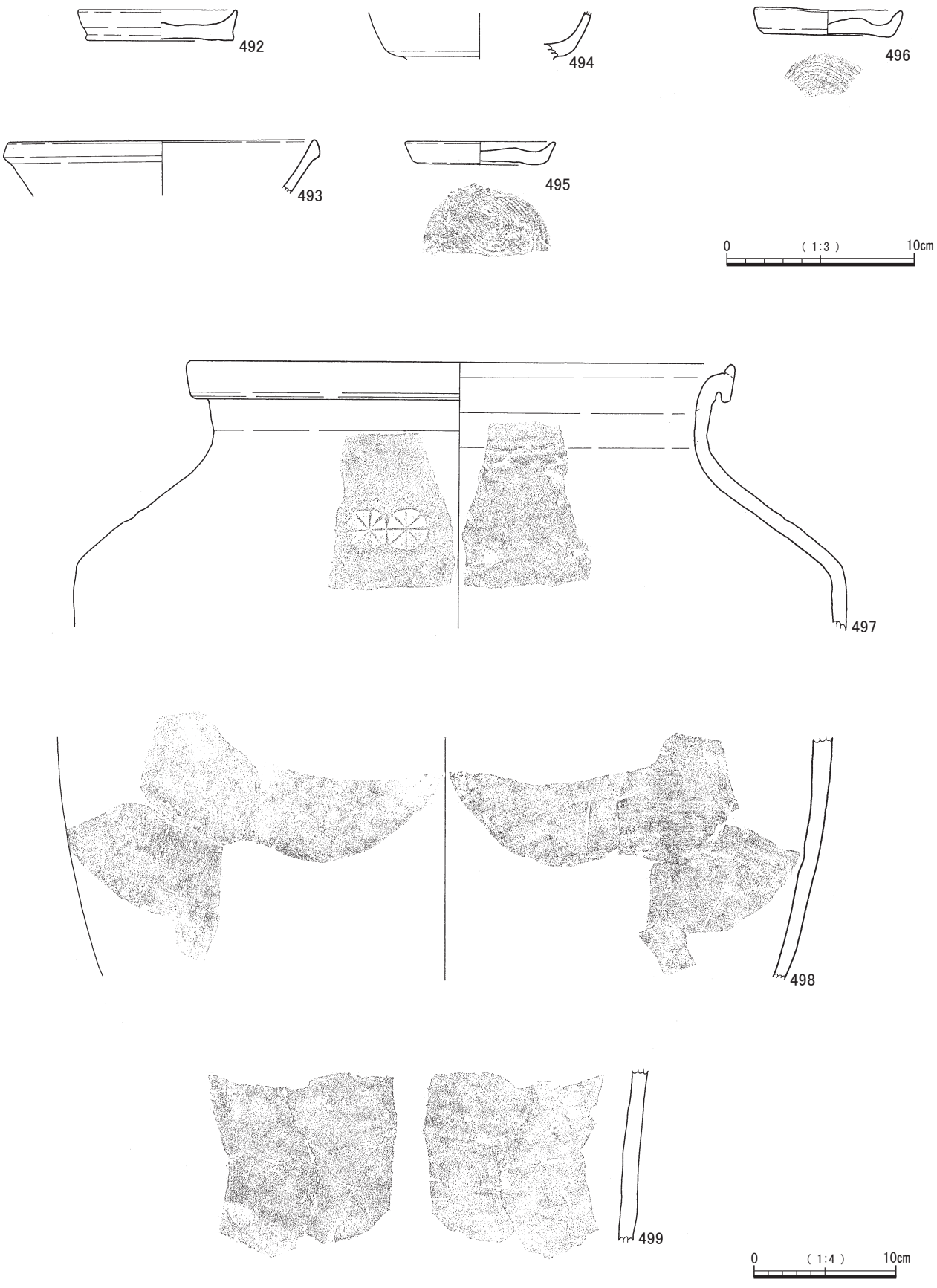
Ｋ－35区で検出し，最大長0.98m，幅0.75m，検出面からの深さ0.3mの遺構である。底面は丸みを帯びている。

**③　土坑５（第75図）**

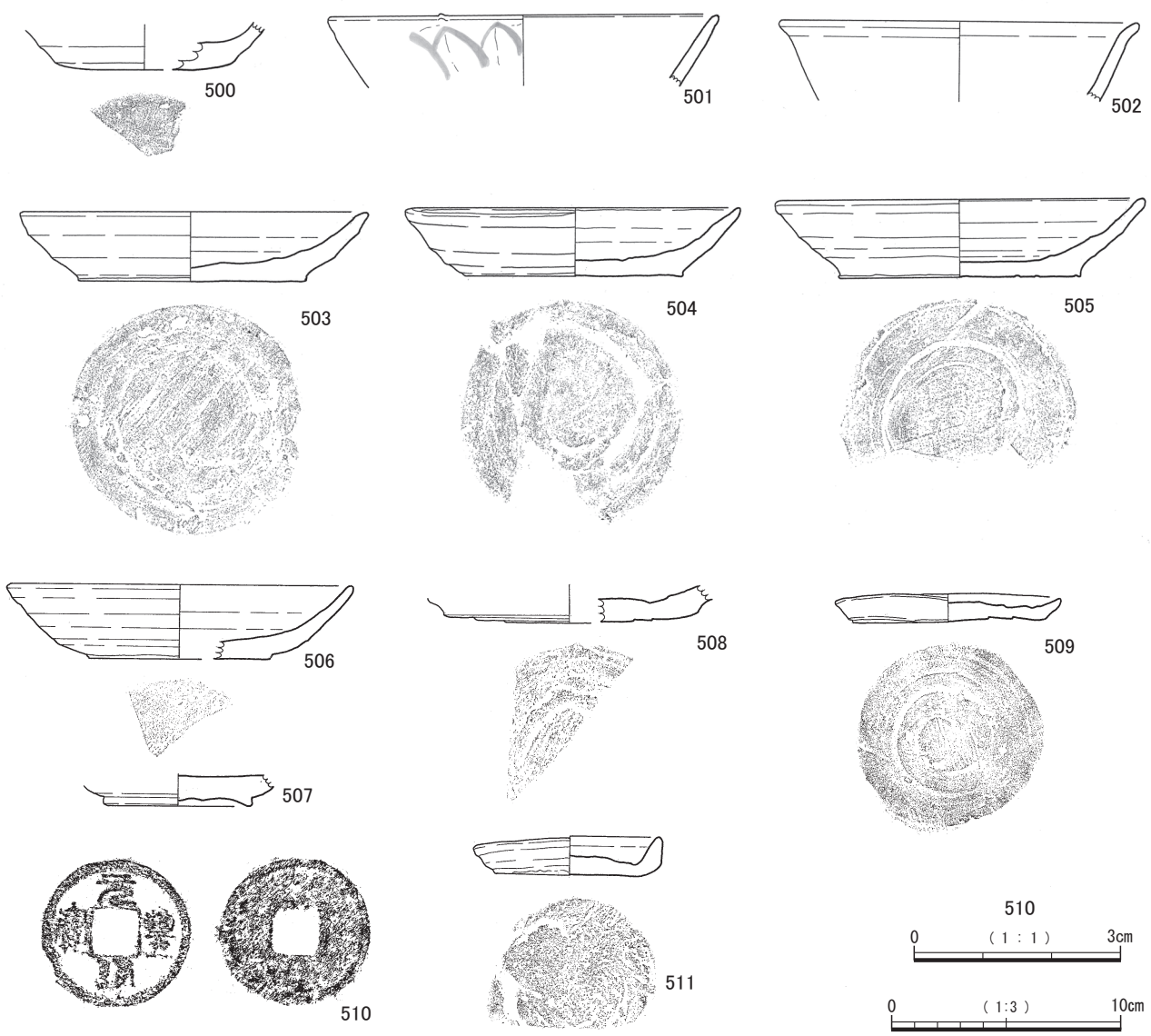
Ｋ－35区で検出し，最大長0.79m，幅0.74m，検出面からの深さ0.29mの遺構である。底面は丸みを帯びてい


1
L=27.6m
2
L=27.6m
3
L=27.5m
①
4
L=27.5m
①
②
5
L=27.5m
②
①
③
6
L=27.5m
7
L=27.2m
①
②
8
L=27.4m
9
L=27.3m
10
L=27.2m
11
L=27.2m
①
②
③
12
L=27.2m
13
L=27.2m
14
L=27.5m
①
②
15
L=27.5m
16
L=28.0m
①
②
0
( 1:20 )
50cm

第72図　柱穴１～16




第73図　柱穴出土遺物１



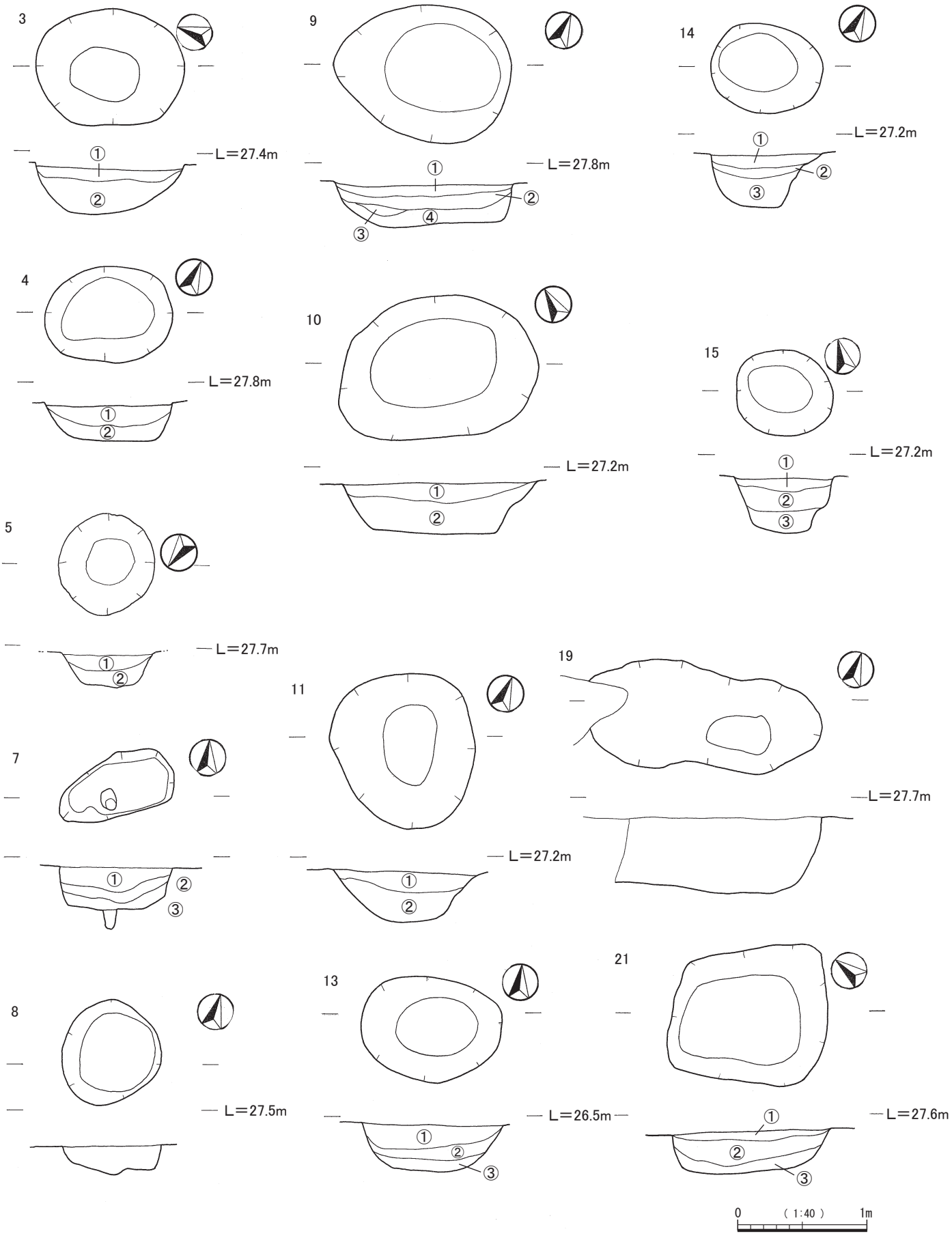

第74図　柱穴出土遺物２

第35表　柱穴観察表（１）

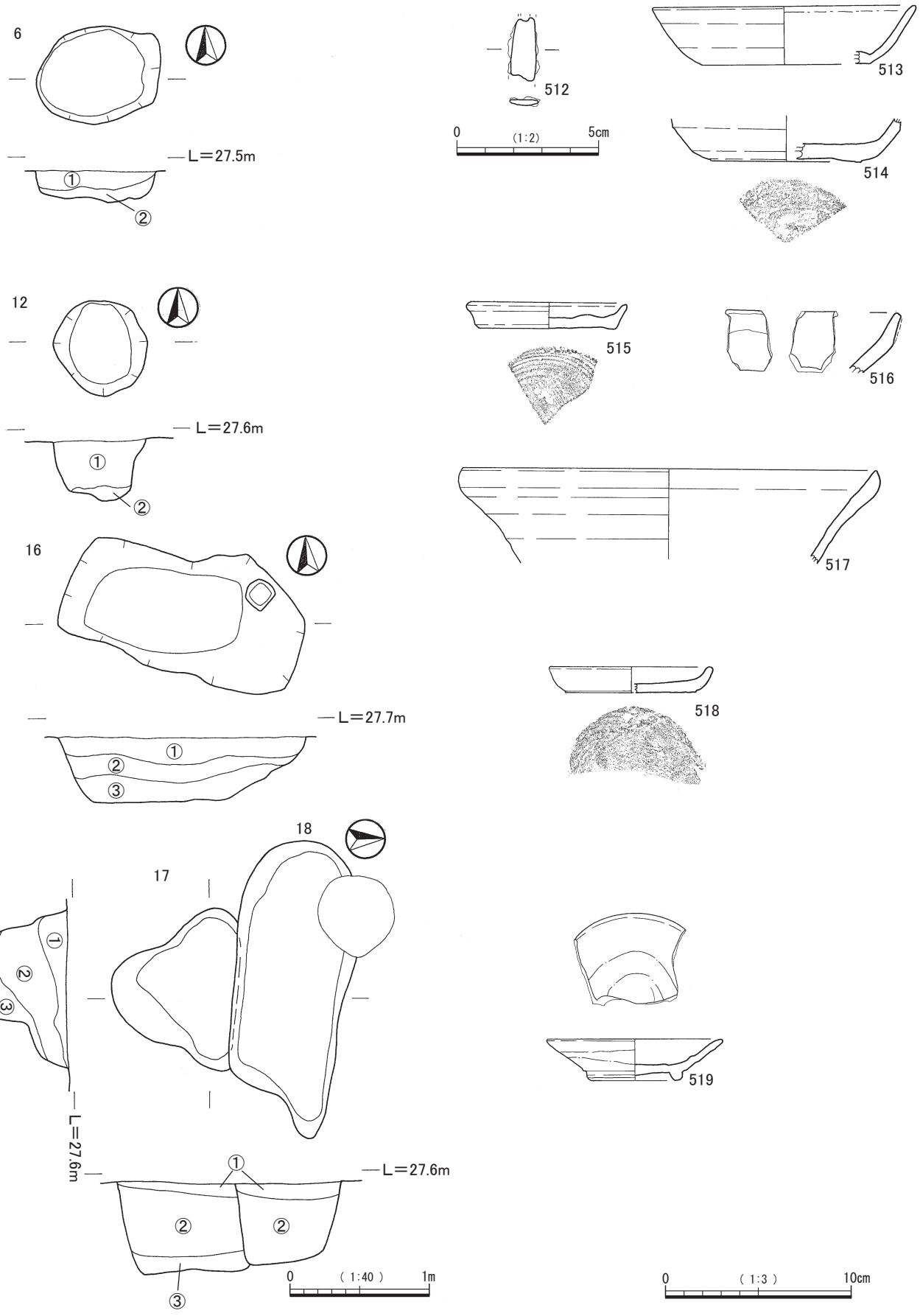
| 遺構番号 | 大きさ(cm) | | | 埋土No. | 埋土色調 | 埋土の注記 | 遺物等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | | |
| 柱穴１ | 58 | 41 | 25.7 | — | 黒色土 | 粘性，しまりやや有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ（Ｖ層）ブロック（直径７～10㎜）をわずかに含む。 | 土師器小皿 |
| 柱穴２ | 36 | 33 | 57.5 | — | 黒褐色土 | 粘性なし。しまりなし。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ（Ｖ層）ブロック（直径３㎜）をわずかに含む。 | 土器・青磁破片 |
| 柱穴３ | 33 | 30 | 24.5 | — | 黒褐色土 | 粘性，しまりやや有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），白色粒（直径１㎜以下），土器小片（直径１～２㎜），炭化物（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | 土器・青磁破片・炭化胚乳 |
| 柱穴４ | 34 | 30 | 41.5 | ① | 赤黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。御池火山灰土（直径１㎜以下），アカホヤ火山灰土（直径２～５㎜）をわずかに含む。焼土塊（浅黄橙色土：２～５㎜）を埋土中に少量含む。 | 青磁坏 |
| | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰土（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）ををわずかに含む。①よりも若干明るい。 | |

第36表　柱穴観察表（２）

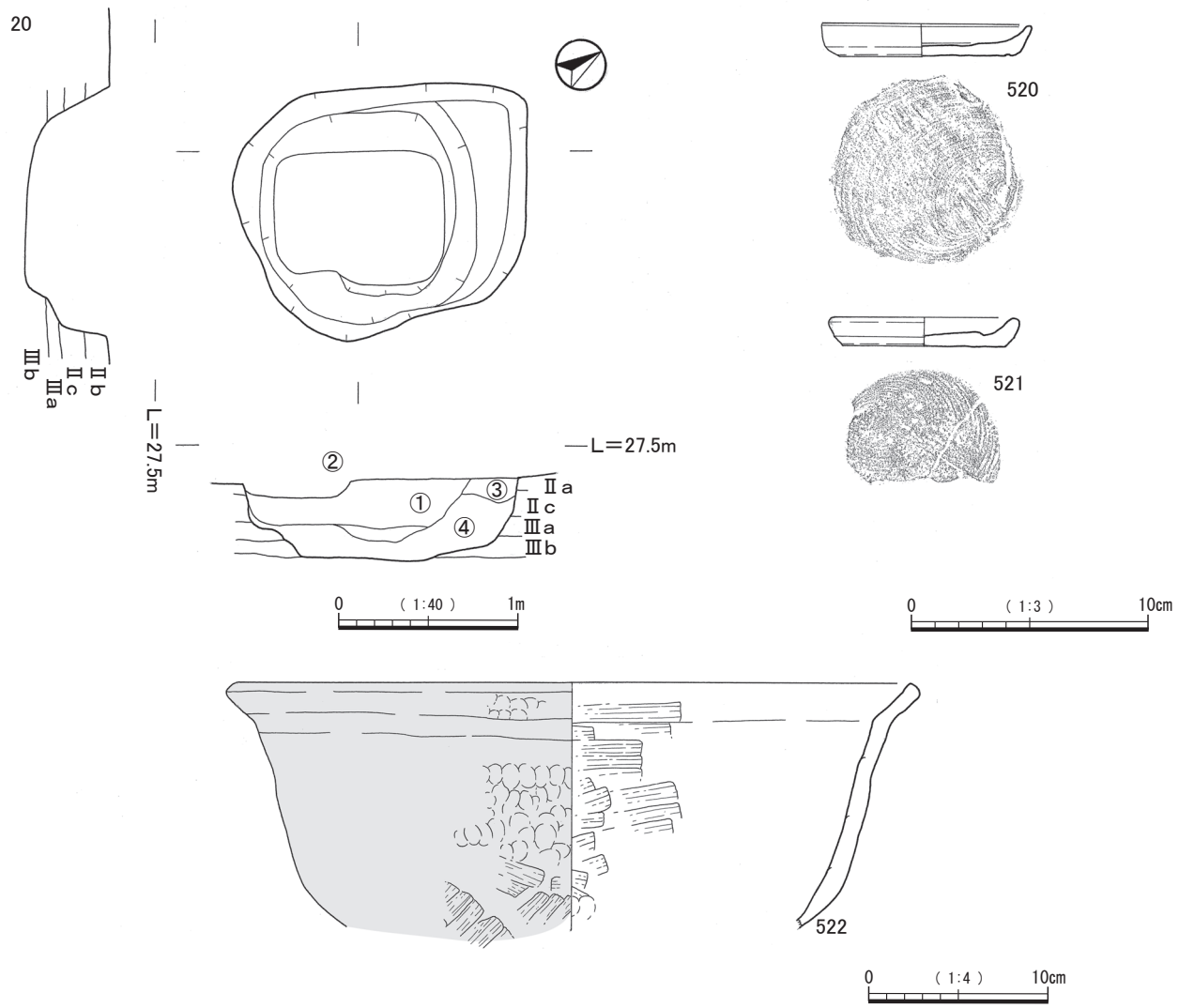
| 遺構番号 | 大きさ(cm) | | | 埋土No. | 埋土色調 | 埋土の注記 | 遺物等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 長軸 | 短軸 | 深さ | | | | |
| 柱穴５ | 29 | 25 | 34.5 | ① | 黒褐色土 | 粘性やや有り。しまり強。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。底面に土師器皿あり。 | 土師器小皿 |
| | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性，しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜），軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | ③ | 黒色土 | 粘性やや有り。しまりなし。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），焼土塊片（にぶい黄橙色：直径１～２㎜），炭化物片をごく少量含む。 | |
| 柱穴６ | 56 | 43 | 66 | — | 黒色土 | 粘性やや有り。しまりなし。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），焼土塊片（にぶい黄橙色：直径１～２㎜），炭化物片をごく少量含む。 | 常滑甕、炭化種子 |
| 柱穴７ | 27 | 26 | 29.5 | ① | 赤黒色土 | 粘性なし。しまり非常に強。池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ火山灰土（直径２～５㎜），炭化物（直径１～２㎜），焼土塊（浅黄橙色土：２～５㎜））をわずかに含む。 | 炭化モモ種核 |
| | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性，しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| 柱穴８ | 30 | 15 | 62.5 | — | 黒色土 | 粘性、しまりやや有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜），アカホヤ火山灰土ブロック（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | 青磁・炭化物（モミ） |
| 柱穴９ | 28 | 25 | 23 | — | 赤黒色土 | 粘性なし。しまり非常に強。池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ火山灰土（直径２～５㎜），炭化物（直径１～２㎜），焼土塊（浅黄橙色土：２～５㎜）をわずかに含む。 | 青磁碗 |
| 柱穴10 | 60 | 52 | 32 | — | 黒褐色土 | 粘性，しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | 土師器坏・小皿完形数点 |
| 柱穴11 | 29 | 24 | 40 | ① | にぶい黄橙色 | 粘性なし。しまり非常に強。池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ火山灰土（直径２～５㎜），炭化物（直径１～２㎜），焼土塊（浅黄橙色土：２～５㎜）をわずかに含む。焼土塊が入る。 | 竪穴３に隣接炭化物（イネの胚乳破片） |
| | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性,しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | ③ | 黒色土 | 粘性,しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| 柱穴12 | 40 | 31 | 38 | — | 黒色土 | 粘性やや有り。しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），焼土塊（浅黄橙色：直径２～５㎜），軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | 銭貨（元豊通宝） |
| 柱穴13 | 20 | 18 | 66 | — | 赤黒色土 | 粘性やや有り。しまり強い。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１㎜以下）をわずかに含む。 | 土師器小皿 |
| 柱穴14 | 34 | 24 | 40.5 | ① | ｵﾘｰﾌﾞ黒色土 | 粘性やや有り。しまりなし。御池火山灰（直径１㎜以下），白色粒（直径１㎜以下）をわずかに含む。白色の貝殻が数十個詰まっていた。一部風化しているが，残存状況のよいものも含まれる。なお，埋土中の白色粒は風化した貝殻片の一部である可能性あり。ハマグリに類似した２枚貝が多く埋土中にみられた。 | 貝殻 |
| | | | | ② | 黒色土 | 粘性有り。しまりやや有り。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。貝殻片は含まれないが，白色の粒子をわずかに含むので，貝殻片が風化したものの可能性がある。。 | |
| 柱穴15 | 28 | 22 | 21 | — | ｵﾘｰﾌﾞ黒色土 | 粘性やや有り。しまりなし。御池火山灰（直径１㎜以下），白色粒（直径１㎜以下）をわずかに含む。検出面にて白色の貝殻がみられたが，その下には一切みられなかった。なお，埋土中の白色粒は風化した貝殻片の一部である可能性有り。 | 貝殻 |
| 柱穴16 | 32 | 30 | 22 | ① | 黒色土 | 粘性やや有り。しまり強。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜），砂粒（直径１～２㎜）をわずかに含む。検出面にて，小石（直径５～25㎜）が多く確認されている。 | 小石が多く出土 |
| | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性，しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | |




第75図　土坑３～５・７～11・13～15・19・21




第76図　土坑６・12・16～18及び出土遺物




第77図　土坑20及び出土遺物

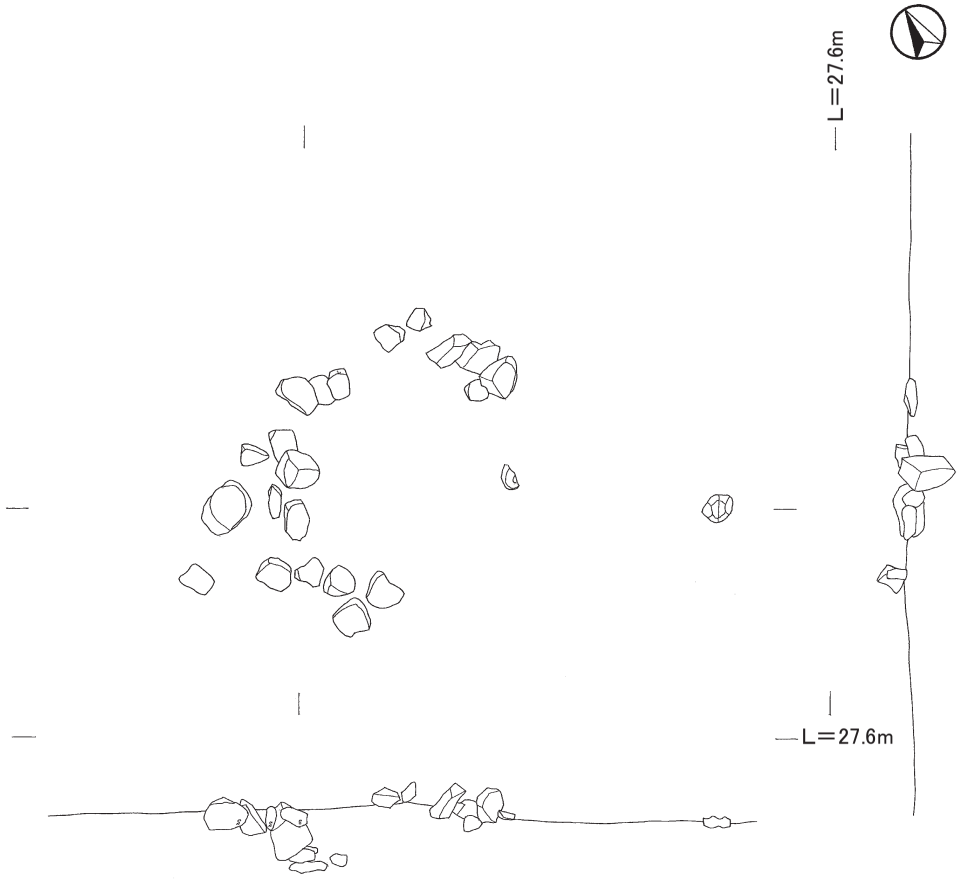
第37表　中世土坑観察表(１)

| 掲載No. | 区 | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | | 遺物等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長軸 | 短軸 | 深さ | No. | 色調 | 注記 | |
| 土坑３ | K-35 | 115 | 90 | 40 | ① | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。池田降下軽石（直径１～２㎜），軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径２～５㎜），アカホヤブロック（直径５～50㎜）をわずかに含む。①よりも若干黒っぽい。 | |
| 土坑４ | K-35 | 98 | 75 | 30 | ① | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤ火山灰土（直径５～10㎜），軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径２～５㎜），アカホヤブロック（直径５～50㎜）をわずかに含む。①よりも若干黒っぽい。 | |
| 土坑５ | K-36 | 79 | 74 | 29 | ① | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。池田降下軽石（直径１～２㎜），軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 赤黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径２～５㎜），アカホヤブロック（直径５～50㎜）をわずかに含む。①よりも若干黒っぽい。 | |
| 土坑６ | J-34 | 83 | 71 | 23 | ① | 黒色土 | しまりややあり，粘性ややあり。アカホヤブロック（直径５～50㎜）をわずかに含む。 | 鉄製品 |
| | | | | | ② | 黒色土 | しまりあり，粘性なし。アカホヤ細粒子含む。埋土①より若干黒っぽい。 | |
| 土坑７ | K-34 | 92 | 51 | 34 | ① | 黒色土 | しまりなし，粘性なし。アカホヤブロック（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | 土師器片 |
| | | | | | ② | 黒色土 | しまりあり，粘性なし。アカホヤ細粒子含む。埋土①より若干黒っぽい。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | しまりあり，粘性なし。池田黄色パミスを含む。やや黄褐色っぽい。 | |
| | | | | | ④ | 黒色土 | しまりなし，粘性なし。橙色粒子（直径1～2㎜）をわずかに含む。 | |

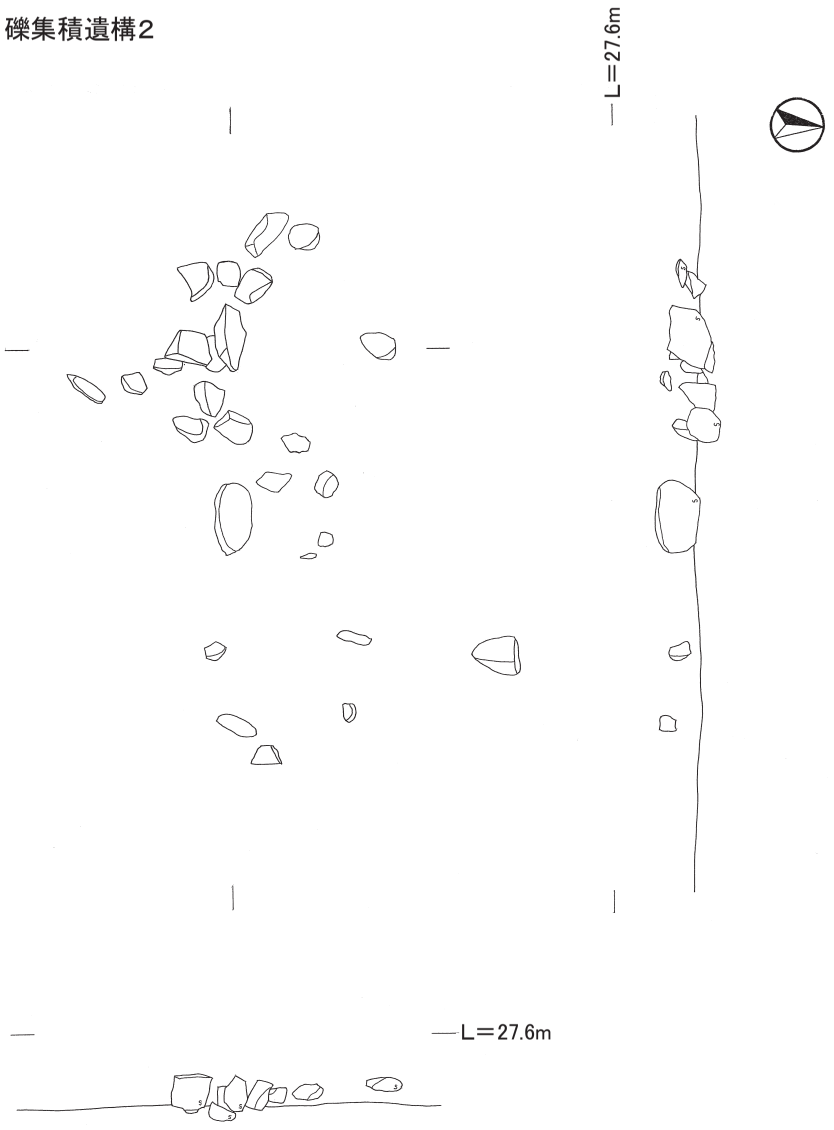
第38表　中世土坑観察表（２）

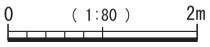
| 掲載No. | 区 | 大きさ(cm) | | | 埋土 | | | 遺物等 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長軸 | 短軸 | 深さ | No. | 色調 | 注記 | |
| 土坑８ | K-33 | 80 | 75 | 22 | | 黒褐色土 | 粘性ややあり，しまりなし。アカホヤブロック（直径５～10㎜）をわずかに含む。 | |
| 土坑９ | K-33 | 138 | 106 | 36 | ① | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），白色粒（２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | 粘性あり。しまり強。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。若干硬化している。 | |
| | | | | | ④ | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１～２㎜）をわずかに度含む。埋土３よりも若干黒っぽい。 | |
| 土坑10 | K･L-33 | 157 | 111 | 39 | ① | 黒色土 | 粘性あり。しまりややあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（１～２㎜）をわずかに含む。１よりも若干明るい。 | |
| 土坑11 | L-33 | 119 | 111 | 41 | ① | 黒色土 | 粘性あり。しまりややあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（１～２㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（１～２㎜）をわずかに含む。１よりも若干明るい。 | |
| 土坑12 | J-32 | 72 | 69 | 44 | ① | 黒褐色土 | しまりなし，粘性なし。アカホヤブロック（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | 土師器・輸入陶器 |
| | | | | | ② | 黒褐色土 | しまりなし，粘性ややあり。埋土①より少し黄色く，茶色く見える。池田パミスが所々に見られる。 | |
| 土坑13 | K-32 | 110 | 83 | 37 | ① | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），軽石（２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | 粘性あり。しまり強。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| 土坑14 | L-32･33 | 87 | 69 | 43 | ① | 黒色土 | 粘性あり。しまりややあり。御池火山灰（直径１㎜以下）を２％程度，アカホヤ火山灰土（直径５～10㎜）１％程度，軽石（直径10㎜以上）１％程度含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下）を２％程度，池田降下軽石（直径２～５㎜）１％程度含む。 | |
| | | | | | ③ | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下）を３％程度，池田降下軽石（直径２～５㎜）１％程度含む。 | |
| 土坑15 | L-32･33 | 75 | 66 | 45 | ① | 黒色土 | 粘性あり。しまりややあり。御池火山灰（直径１㎜以下），アカホヤ火山灰土（直径５～10㎜），軽石（直径10㎜以上）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ③ | 赤黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。２よりも若干黒っぽい。 | |
| 土坑16 | J-31 | 176 | 98 | 45 | ① | 黒褐色土 | アカホヤブロック（直径５～10㎜）をわずかに含む。しまり・粘性なし。 | 東播系須恵器 |
| | | | | | ② | 黒色土 | アカホヤブロック（直径10㎜以上）をわずかに含む。しまりあり，粘性ややあり。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | 明確なパミスが見られない。Ⅱｃ層よりより黒く見える土。 | |
| 土坑17 | J-31 | 119 | 91 | 58 | ① | 黒色土 | しまり，粘性ややあり。アカホヤブロック（直径３～７㎜）ををわずかに含む。 | 土師器片 |
| | | | | | ② | 黒色土 | 埋土①と同様だがアカホヤブロック（直径５～10㎜）の大きさがより大きくなる。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | しまり，粘性ややあり。池田降下軽石（直径１～２㎜）ををわずかに含む。 | |
| 土坑18 | J-31 | 216 | 90 | 59 | ① | 黒色土 | しまり，粘性ややあり。アカホヤブロック（直径３～10mm）ををわずかに含む。 | 白磁皿 |
| | | | | | ② | 黒色土 | しまり，粘性あり。アカホヤブロック（直径５～10mm）をわずかに含む。 | |
| 土坑19 | J-31 | 180 | 81 | 60 | | 黒色土 | しまり，粘性ややあり。アカホヤブロック（直径３～50㎜）をわずかに含む。 | 土師器片 |
| 土坑20 | K-31 | 165 | 140 | 46 | ① | 黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径５～10㎜），アカホヤブロック（直径10～50㎜）をわずかに含む。 | 土師器・鍋片 |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径５～10㎜），２％程度，アカホヤブロック（直径10～20㎜）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径５～10㎜），アカホヤブロック（直径５～10㎜）をわずかに含む。埋土②よりも若干しまりが強い | |
| | | | | | ④ | 赤黒色土 | 粘性ややあり。しまりあり。池田降下軽石（直径１～２㎜），アカホヤブロック（直径５～10㎜）をわずかに含む。 | |
| 土坑21 | J･K-30 | 120 | 101 | 32 | ① | 黒色土 | 粘性あり。しまりややあり。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１㎜以下）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ② | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。 | |
| | | | | | ③ | 黒色土 | 粘性，しまりあり。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。②よりも若干黒っぽい。 | |

礫集積遺構1



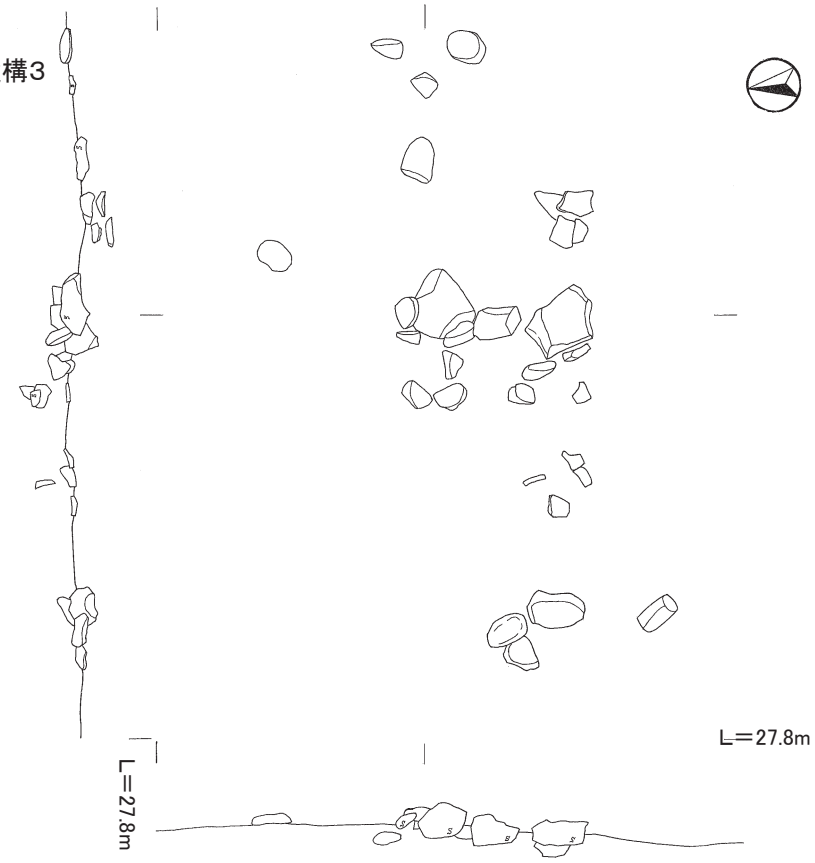

礫集積遺構2



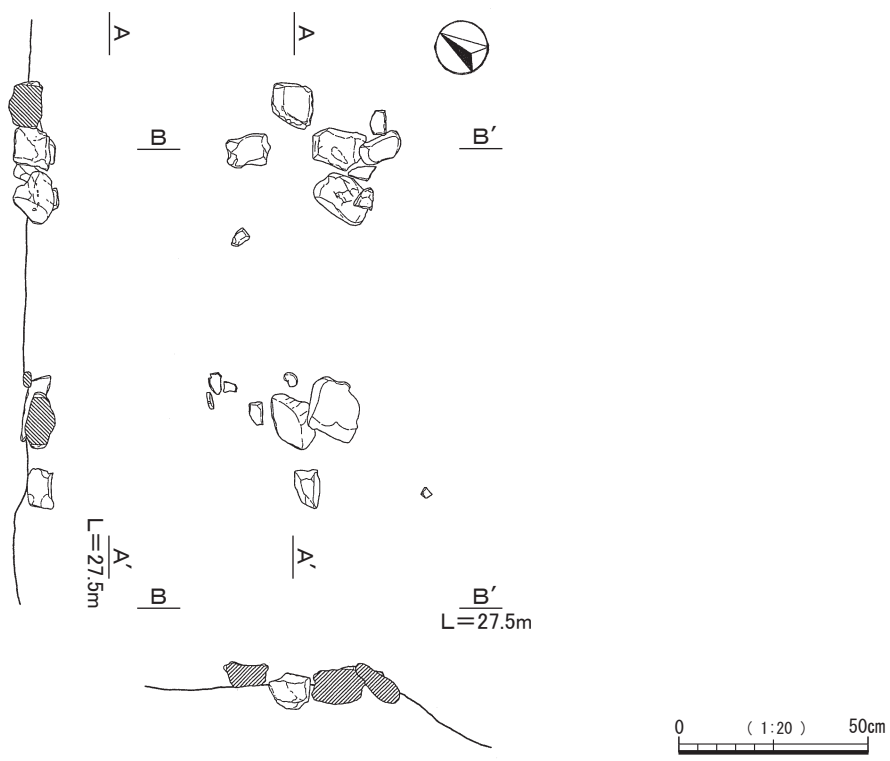




第78図　礫集積遺構１・２

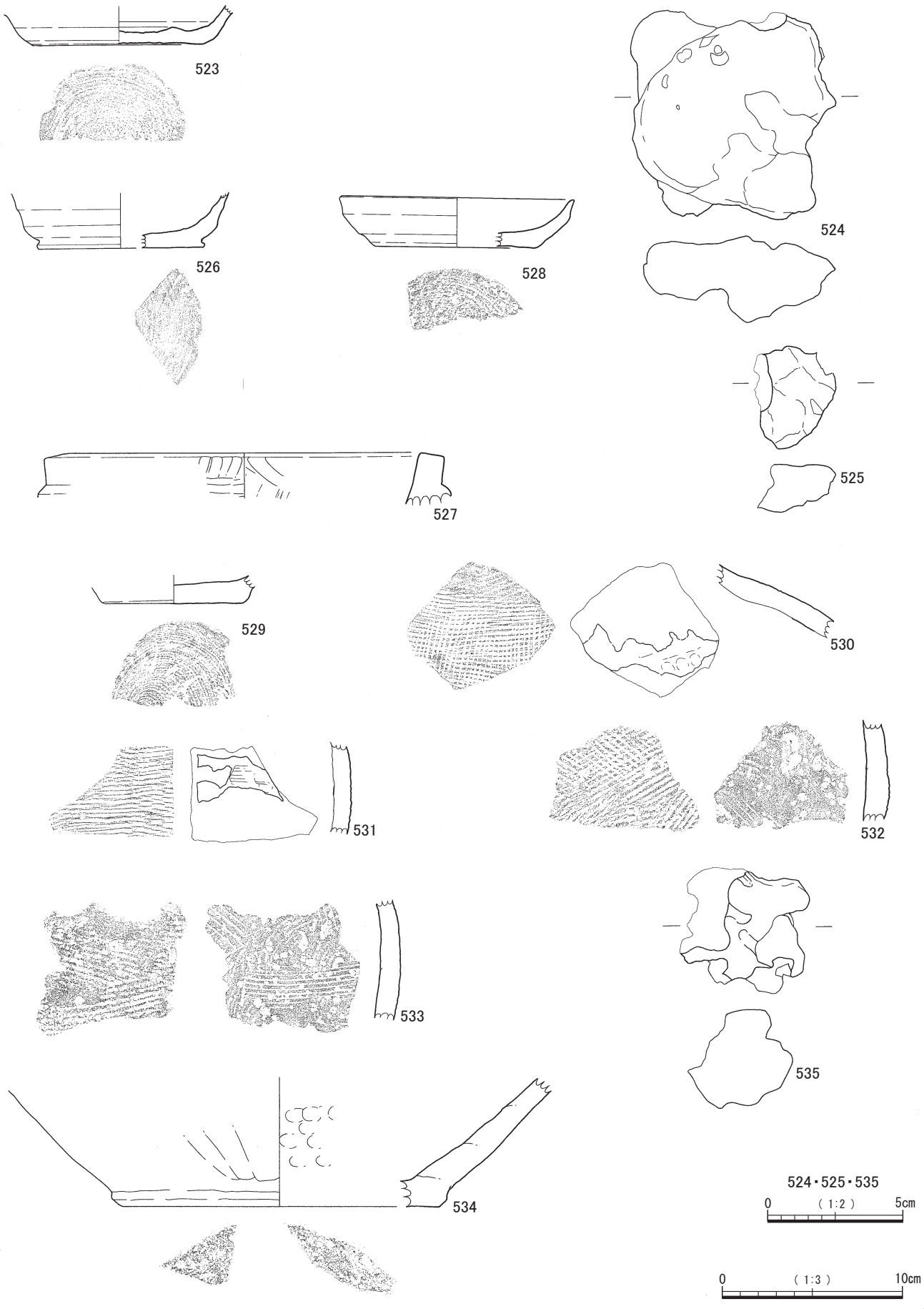
礫集積遺構3



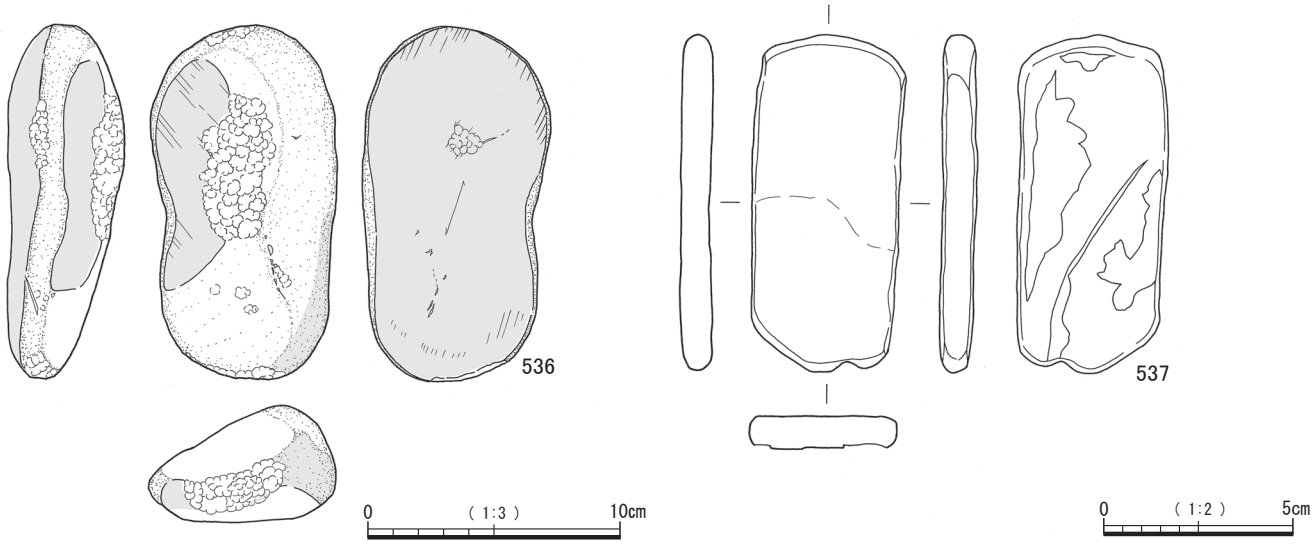

礫集積遺構4




第79図　礫集積遺構３・４




第80図　礫集積遺構１・２・３出土遺物




第81図　礫集積遺構４出土遺物

るが，若干フラットな部分がみられた。比較的深さの浅い土坑である。

**④　土坑６（第76図　512）**

Ｊ・Ｋ－34区で検出し，最大長0.83m，幅0.71m，検出面からの深さ0.23mの遺構である。

土器片４点，自然石１点，鉄製品１点が出土した。

本遺跡の他の土坑と比べると浅いもので，池田降下軽石の堆積層（Ⅲ層）まで掘削は及ばない。

512は，埋土内から出土した鉄製品である。ヘラやファスナーの取っ手に類似した形状のもので，孔があるが，孔の部分で欠損していることが確認される。

**⑤　土坑７（第75図）**

Ｋ－34区で検出し，最大長0.92m，幅0.51m，検出面からの深さ0.34mの遺構である。

底面で検出された小型ピットは，下方に19cm程度入り込むものである。本遺構によって切られた可能性が大きく，本遺構に伴うものとは考えにくい。

土師器片が出土している。ただし，小片のため実測は行っていない。

**⑥　土坑８（第75図）**

Ｋ－33区で検出し，最大長0.8m，幅0.75m，検出面からの深さ0.22mの遺構である。池田自然堆積層（Ⅲ層）まで掘削が及ばない浅い土坑である。

土器片３点が出土した。

**⑦　土坑９（第75図）**

Ｋ－33区で検出し，最大長1.38m，幅1.06m，検出面からの深さ0.36mの遺構である。

**⑧　土坑10（第75図）**

Ｋ・Ｌ－33区で検出し，最大長1.57m，幅1.11m，検出面からの深さ0.39mの遺構である。比較的深めの土坑であり，底面にはフラットな部分がある。

**⑨　土坑11（第75図）**

Ｌ－33区で検出し，最大長1.19m，幅1.11m，検出面からの深さ0.41mの遺構である。

比較的深めの土坑であり，底面にはフラットな部分がある。

**⑩　土坑12（第76図　513～517）**

Ｊ－32区で検出し，最大長0.72m，幅0.69m，検出面からの深さ0.44mの遺構である。

底面で検出された小型ピットは，本遺構によって切られた可能性が大きく，本遺構に伴う柱穴とは考えにくい。

埋土中から土師器の坏・小皿，輸入陶器が出土している。513・514は，ともに土師器の坏である。514については，底面にヘラ切り痕が残る。515は，土師器の小皿である。底面には糸切り痕が残る。516は，輸入陶器である。517は東播系須恵器の鉢の口縁部である。口縁部が若干肥厚するものである。

**⑪　土坑13（第75図）**

Ｋ－32区で検出し，最大長1.1m，幅0.83m，検出面からの深さ0.37mの遺構である。底面は丸みを帯びており，フラットな部分は少ない。

**⑫　土坑14（第75図）**

Ｌ－32・33区で検出し，最大長0.87m，幅0.69m，検出面からの深さ0.43mの遺構である。

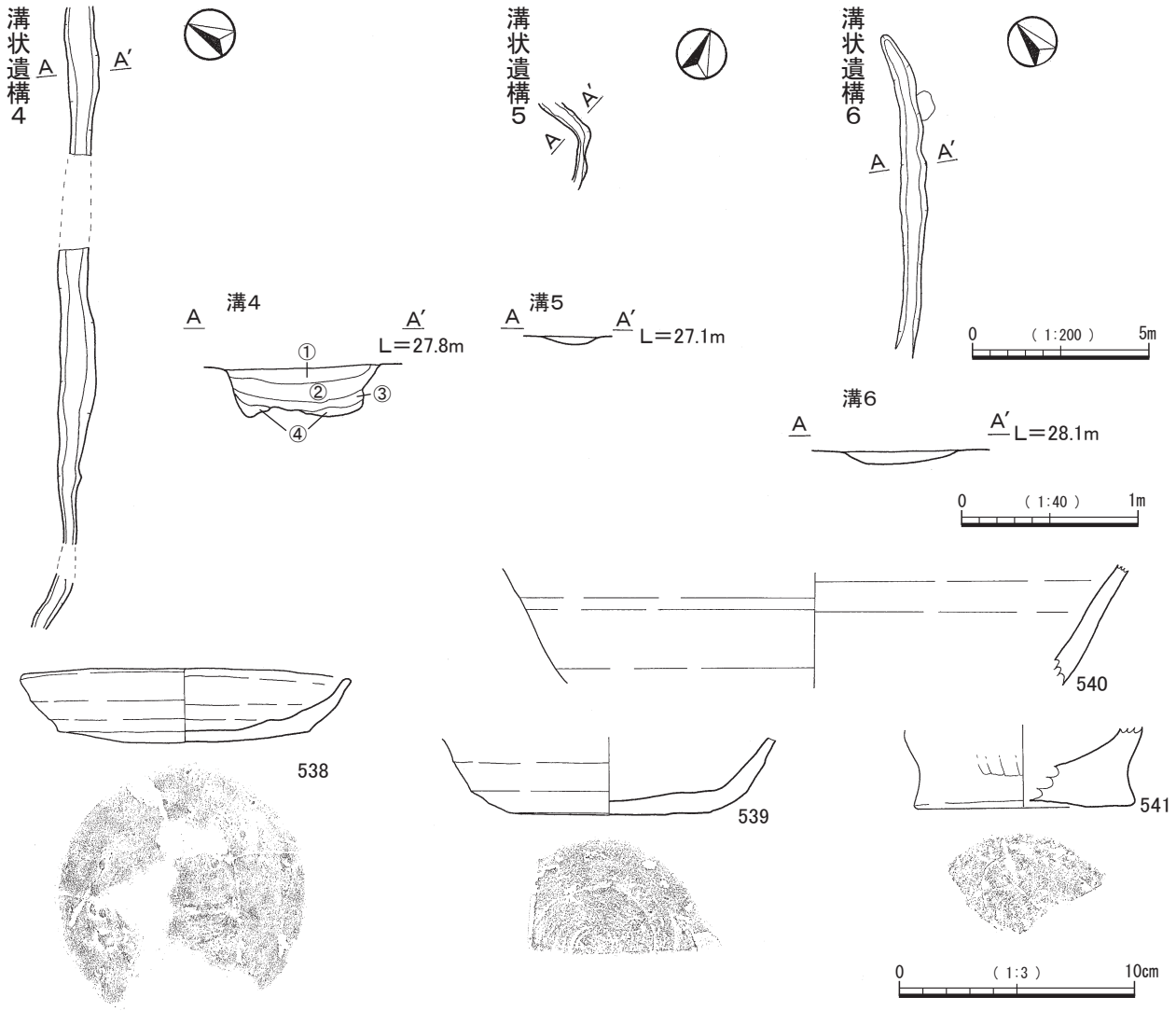
**⑬　土坑15（第75図）**

Ｌ－32・33区で検出し，最大長0.75m，幅0.66m，検出面からの深さ0.45mの遺構である。

**⑭　土坑16（第76図　518）**

Ｊ－31・32区で検出し，最大長1.76m，幅0.98m，検出面からの深さ0.45mの遺構である。

形状については，平面形は「く」字状となっており，複数遺構の切り合いからなる可能性があるが，土層断面




第82図　溝状遺構４～６及び出土遺物

からは明確に区別できるような状況になかった。埋土から518の土師器の小皿が出土した。

518は，土師器の小皿で，底面には糸切り痕が残る。

**⑮　土坑17（第76図　519）**

Ｊ－31区で検出し，最大長1.19m，幅0.91m，検出面からの深さ0.58mの遺構である。土坑18に切られる。

519は，白磁の皿でⅧ類とされるものである。体部下半は無釉となっている。見込み部分には，蛇の目状に釉剥ぎが施される。

**⑯　土坑18（第76図）**

Ｊ－31区で検出し，最大長2.16m，幅0.9m，検出面からの深さ0.59mの遺構である。池田自然堆積層（Ⅲ層）上面まで掘削が及ぶ。また，土坑17を切る。

**⑰　土坑19（第75図）**

Ｊ－31区で検出し，最大長1.8m，幅0.81m，検出面からの深さ0.6mの遺構である。

土師器の小片が出土しているが，小片のため実測は行っていない。

**⑱　土坑20（第77図　520～522）**

Ｋ－31区で検出し，最大長1.65m，幅1.4m，検出面からの深さ0.46mの隅丸方形状の遺構である。

遺構内からは古墳時代の土器・中世土師器，鉄滓の細片なども出土している。

520・521は，土師器の小皿である。いずれも糸切りの底部である。522は，土師器の鍋である。外面にはユビオサエがランダムに入る。内面にはハケメ調整が施される。外面には煤が付着しており，煮炊きに使用されたことがうかがえる。遺構底面の南東側のへりに偏って出土している様子が確認されている。

**⑲　土坑21（第75図）**

Ｋ－30区で検出し，最大長1.2m，幅1.01m，検出面からの深さ0.32mの平面形が隅丸方形となる遺構である。底面はやや丸みを帯びているが，フラットな部分もある。

**(5) 礫集積遺構**

４基の礫等が集積された遺構が検出されている。１～３については近接して大型の礫がまばらに集中するもので，一部に土器・石器などのほかに鉄滓も含む。４はひとつだけ離れて存在している。これらにはいずれも掘り込みは確認されていない。

**① 礫集積遺構１（第78・80図　523～525）**

Ｋ－32区で検出し，最大長0.85m，幅0.84mを測る遺構である。礫等が馬蹄形に並ぶもので，南側には礫がみられない。周辺には焼土の広がりが散見される。

523は土師器坏の底部で，糸切りが明瞭に残る。内面見込みの中心部には回転ナデによる突起状の隆起が見られる。524・525は，いずれも椀形滓である。524は鉄分が多く残っており重量もあるのに対して，525は多孔質で非常に軽いという対照的なものである。

**② 礫集積遺構２（第78・80図　526・527）**

Ｋ－32区で検出し，最大長1.5m，幅1.35mを測る遺構である。大ぶりの礫がややまばらに集中する。周辺の焼土はほぼ同じ状態で検出しているが，一旦乾燥が進むと不明瞭となってしまうようなものであったため，範囲は示せていない。遺構内からではないが，周辺から近接して少量の炭化物や銭貨（皇宋通寶・元豊通寶・元祐通寶）が出土している。

526は土師器坏の底部で，糸切りが明瞭に残る。底部は若干柱状で裾が張り出すもので，体部下半には膨らみをもつものである。

527は，滑石製石鍋の口縁から鍔部分にかけての破片である。外面にはケズリ痕が見られる。

**③ 礫集積遺構３（第79・80図　528～535）**

Ｋ－32区で検出し，最大長1.7m，幅0.9mを測る遺構である。大ぶりの礫とともに，やや大型の中世須恵器片や鉄滓がややまばらに集中する。

528・529は，土師器坏である。528は完形のものであり，胴部上半で若干の屈曲をもつ。底部には糸切り痕と板状圧痕が残る。

530～533は，中世須恵器の甕（４点）である。530・531は比較的精緻なつくりであることから，神出産の東播系須恵器甕であるとみられる。また，532・533は，軟質であることから魚住産の東播系須恵器とみられる。534は，常滑産の甕の底部である。外面にはケズリがみられ，内面にはユビオサエがランダムに残る。535は鉄滓である。比較的小型の椀形滓で，本遺構の構成礫と同様に集積されていたものである。

**④ 礫集積遺構４（第79図　536・537）**

Ｊ－31区で検出し，最大長1.14m，幅0.5mを測る遺構である。礫がまばらに集中するものである。本遺構にも，白磁の小片などが混入していた。

536は，磨敲石である。磨面と敲打痕が確認される。また，表面のところどころに，傷のようなものが確認される。鉄錆と考えられる若干の黒色系の付着物が認められるものであるので，鉄器生産に関わる遺物の可能性がある。

537は砥石であり，ところどころに自然面を残しながらも，ほぼ表裏の全面にわたって砥石として使用された痕跡が残る。

**(6) 溝状遺構**

中世に属する溝状遺構は５条である。帰属する時期については，他の溝状遺構や他の遺構，切り合い関係，遺構内出土遺物などを検討した結果として導かれたものである。

**① 溝状遺構４（第82図）**

Ｋ－34～36区で検出し，最大長17.8m，幅0.85m，検出面からの深さ0.26mの規模で，Ｋ－34～36区を東西に走る溝である。近世以降の溝状遺構にほぼ直角に切られている。陶磁器・土師器などの小片が数点出土しているが，実測に耐えうるものはなかった。

**② 溝状遺構５（第82図）**

Ｋ－34区で検出し，最大長2.6m，幅0.29m，検出面からの深さ0.04mの遺構である。「く」字状のカーブを描くものである。南端部では特に浅くなっており，そのまま消えてゆくものであるが，その方向から本来は溝状遺構６と一連のものであった可能性もある。掘立柱建物跡２の東側柱穴１基の一部を切る。

538・539は，土師器の坏である。538はほぼ完形に復元できる。底部はヘラ切り痕が残るもので，底部が若干外に張り出す。539は口唇部を焼成後に削り平坦面を作るものである。

**③ 溝状遺構６（第82図）**

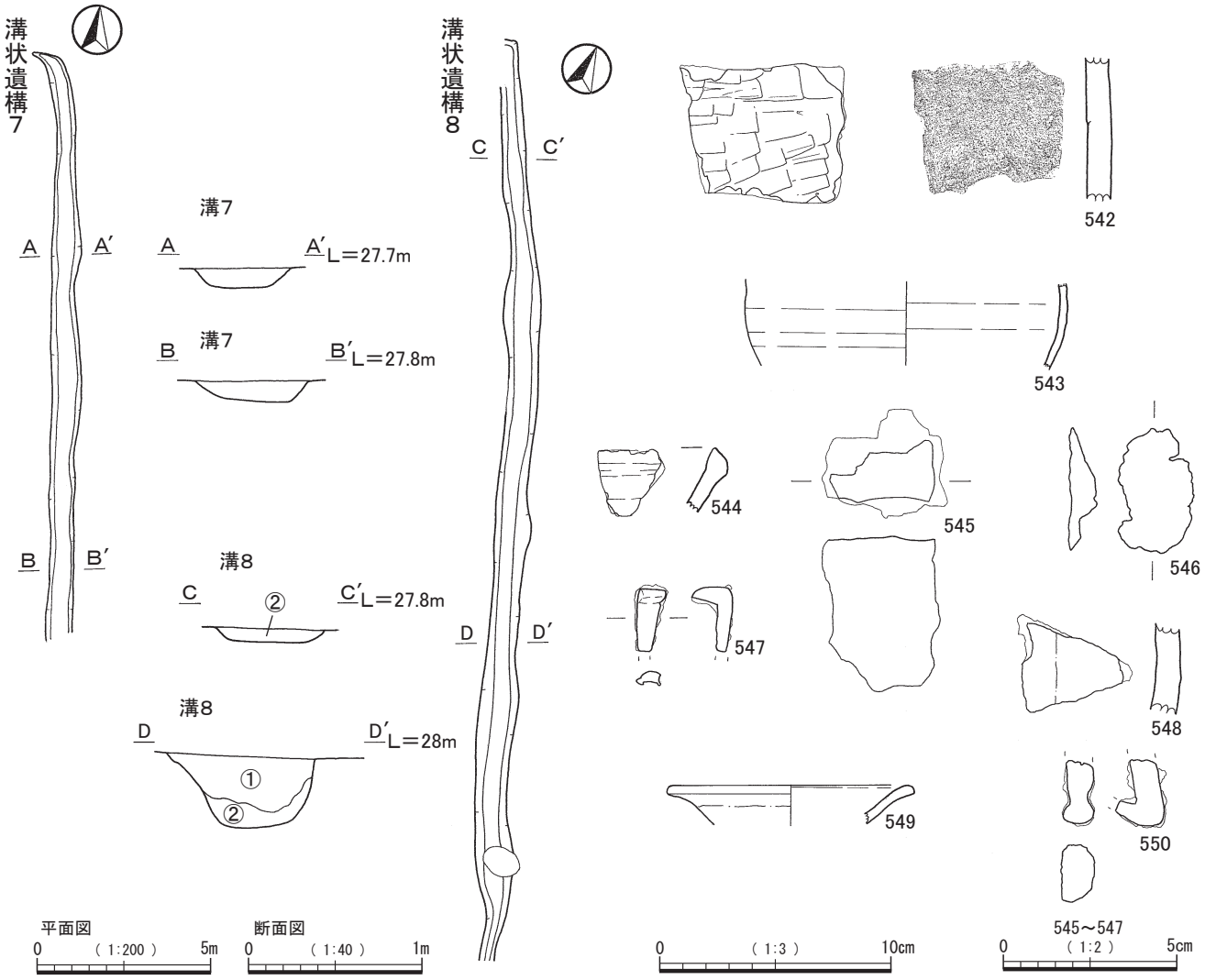
Ｌ－34区で検出し，最大長9.75m，幅0.62m，検出面からの深さ0.06mの遺構である。南北方向に走る溝である。掘立柱建物２の南東側隅の柱穴の一部を切る。

土器・陶器片が，少量出土している。540は，輸入陶器の壺類とみられる胴部である。内外面に横方向のナデが残る。541は，古墳時代土器の甕の底部である。底面に木葉痕が残る。

**④ 溝状遺構７（第83図）**

Ｋ・Ｌ－29区で検出し，最大長16.5m，幅0.54m，検出面からの深さ0.12mの遺構である。北端部で西側に若干湾曲するが，その先は徐々に浅くなり，検出ができなかった。埋土と検出面のⅡｂ層土は非常に類似しているが，乾燥すると明確に違いが認識できた。また，埋土の色や質は均一で，中に明確なパミスは認められなかった。

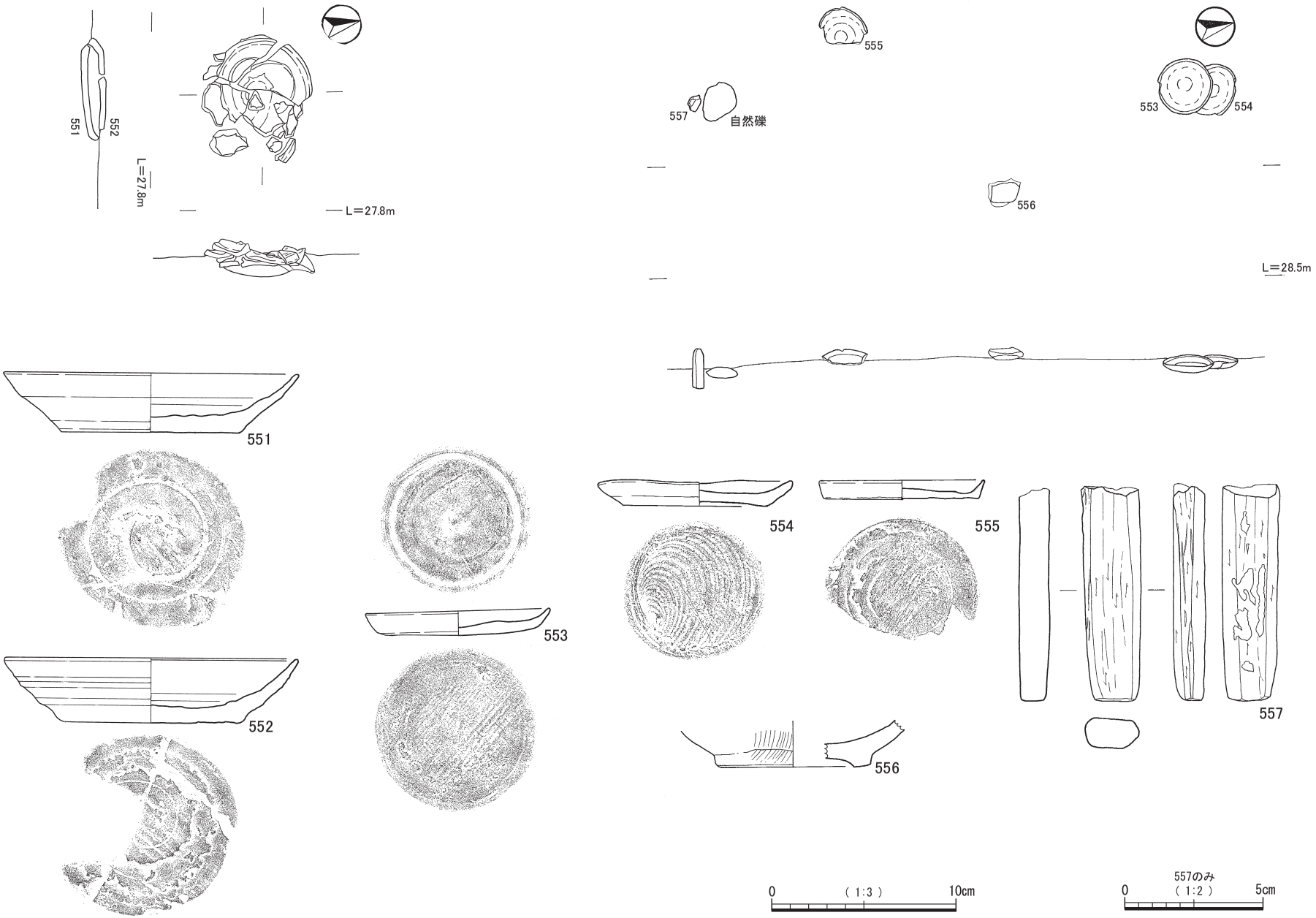
遺構内からは土器・陶磁器・鉄器などが少量出土している。542は，常滑産の甕の胴部片である。内外面にケズリの調整痕が残る。断面には製作時の粘土帯の痕跡が観察される。543は，小型の壺の胴部である。内外面に




第83図　溝状遺構７・８及び出土遺物

第39表　中世溝状遺構埋土観察表

| 遺構名 | 検出面 | 大きさ(cm) 幅 | 大きさ(cm) 深さ | 埋土No. | 色調 | 埋土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 溝状遺構４ | Ⅱb | 85 | 26 | ① | 赤黒 | 粘性有り。しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。Ⅱ層土に類似している。 | 陶磁器・土師器小片出土（掲載遺物はなし） |
| | | | | ② | 黒 | 粘性有り。しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），アカホヤ火山灰（直径２～５㎜）をわずかに含む。Ⅱ層土に類似している。 | |
| | | | | ③ | 黒 | 粘性有り。しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下）をわずかに含む。Ⅱ層土に類似している。アカホヤ火山灰（直径５～10㎜）をわずかに含む。Ⅱ層土に類似する。 | |
| | | | | ④ | 黒褐 | 粘性有り。しまり非常に強い。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜）をわずかに含む。アカホヤ火山灰（ブロック直径５～30㎜）。アカホヤが多く混じる。 | |
| 溝状遺構５ | Ⅱ | 29 | 4 | | 赤黒 | 粘性やや有り。しまり有り。御池火山灰（直径1㎜以下），池田降下軽石（直径２～５㎜），アカホヤ火山灰（ブロック直径10～30㎜）をわずかに含む。 | 土師器坏出土 |
| 溝状遺構６ | Ⅱ | 62 | 6 | | 黒 | 粘性やや有り。しまり有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径2～5㎜）アカホヤ火山灰（ブロック直径５～15㎜）をわずかに含む。 | 輸入陶器・古墳時代甕等出土 |
| 溝状遺構７ | Ⅱa | 54 | 12 | | 黒褐 | 粘性なし。しまりなし。白っぽく，はっきりと帯状に走っている様相が見られる。パミスは見られない。乾燥しやすく，乾くと白さ・明るさが出てくる。 | 常滑甕・輸入陶器・銅塊・鉄滓出土 |
| 溝状遺構８ | Ⅱ | 84 | 40 | ① | 黒 | 粘性有り。しまり有り。御池火山灰（直径1㎜以下），池田降下軽石（直径１～５㎜）をわずかに含む。 | 輸入陶器・白磁小型皿・鉄製品出土 |
| | | | | ② | 黒 | 粘性やや有り。しまりやや有り。御池火山灰（直径１㎜以下），池田降下軽石（直径１～２㎜）をわずかに含む。 | |




第84図　特徴的な遺物の出土状況

はナデによる調整痕が明瞭である。輸入陶器と考えられる。544は，東播系須恵器鉢の口縁部である。口縁部の外面が肥厚する。545は鉄滓で，鉄分を多く含み，緻密で重量がある。精錬滓の可能性もある。546は緑青が見られる金属塊である。銅を多く含む製品を熱溶解させた後に再度固まったものとみられる。547は，鉄製品である。Ｌ字形の形状で角釘と考えられる。

**⑤　溝状遺構８（第83図）**

Ｊ～Ｌ－28区で検出し，最大長27m，幅0.84m，検出面からの深さ0.4mを測り，調査区内で最も大きい溝状遺構である。

埋土内からは，土器・陶磁器片が出土している。548は輸入陶器である。外面には釉垂れが見られる。549は白磁の小型皿である。550は鉄製品で，鍵形を呈する。用途不明である。

**(7) 特徴的な出土状況を示す土器**

**①　Ｊ－31区出土の合わせ口の土器（第84図　551・552）**

Ｊ-31区において，２点（551・552）が合わせ口となった土師器坏が出土している。いずれもヘラ切りで，体部が外方へ開く。遺構内の出土遺物であることが考慮されたため，検出地点の周辺を精査したところ，周囲よりも若干色調が暗いことが確認された。しかしながら，不明瞭であったため遺構としては扱っていない。なお，周辺には完形の土師器皿や陶磁器片なども多く出土している。

**②　Ｉ－26区出土の土器等（第84図　553～557）**

553～557は，Ｉ-26区でまとまって出土した土師器小皿及び白磁碗の底部，砥石，自然礫である。553～555は土師器小皿である。553は完形の皿である。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。見込みには，ナデが明瞭に残るものである。554は，完形品である。底部は糸切りで，わずかに上げ底状となるものである。555は底部がヘラ切りで，板状圧痕がみられる小皿である。556は，白磁碗の底部である。高台の特徴や色調，調整などの特徴から，白磁碗Ⅳ類（玉縁碗）の底部とみられるものである。557は，棒状の砥石である。断面形はそろばん玉状で，各面を砥面として使用していることが確認できる。

小皿はいずれも正位で，砥石は直立した状態で出土しており，意図的に配置された可能性もある。また，554・555は完形品であり重なって出土しているが，底部はそれぞれヘラ切りと糸切りである。検出地点は周囲よりも若干色調が暗く，遺構の可能性も考慮されたが，不明瞭であったため，遺構として扱っていない。また，砥石に近接して拳大の自然礫が出土している。

## ２　中世の遺物

**(1) 土師器（瓦器・瓦質土器含む）**

器種は坏と小皿がある。口径が11cm以上のものを坏，それ以下のものを小皿とした。また，坏，小皿以外のものをその他，加工品とした。

**坏（第85・86図　558～579）**

底部の切り離しが，ヘラ切りと糸切りのものがある。

558～572はヘラ切り底で，法量は口径12.4～15.8cm，底径7.2～11.4cm，器高1.45～3.7cmである。

558～560はほぼ同規格のものであり，口径は15.8cmで共通するものである。561は，底部と体部の境が明瞭である。回転横ナデの痕跡が特に明瞭である。562と563は色調が橙色を呈すもので，規格・調整ともに同様のものである。564～572は，腰部に明瞭なケズリや弱めのケズリが観察できる。その中でも特に565・569・570は，特に腰部のケズリが明瞭である。

573～579は，糸切り底である。法量は口径11cm～12.4cm，底径4.5～8.8cm，器高2.85～3.9cmにおさまるものである。573～579は，腰部に弱めのケズリが観察できる。

573は直線的に立ち上がり，口縁部は先細っている。底部がレンズ状に膨らむ。内面見込にナデ調整の痕跡が観察できる。574と575は色調がにぶい黄橙色であり，規格・調整ともに同様のものである。574は，見込みがやや盛り上がる整形である。腰部が内湾しながら立ち上がる。内にナデ調整の痕跡が観察できる。575は，口縁部が直線的に立ち上がる。口縁部は先細りとなっている。内にナデ調整の痕跡と外部に指頭圧痕による調整が明瞭である。576と577は色調が浅黄橙色であり，類似するものである。576は，内面見込にナデ調整の痕跡が観察できる。底部と体部の境が明瞭であり，底部が柱状となるものである。腰部が内湾しながら直線的に立ち上がる。577と578は，腰部が内湾しながら立ち上がる。577～579は，底部に板状圧痕が観察できる。579は丸く内湾しながら立ち上がるものである。他の坏と比較するとやや小ぶりで口径に比して器高が高い印象を受ける。若干異なる特徴のものである。

**小皿（第87図　580～610）**

底部の切り離しが，ヘラ切りと糸切りのものがある。

580～595は，ヘラ切り底である。法量は，口径８～10.2cm，底径6.6～8.2cm，器高0.8～1.1cmにおさまるものである。

580～584はほぼ同規格のものであり，器高1.1～1.25cmの範囲で収まるものである。580～589は，内面見込みに指ナデ痕が明瞭に残る。582は器形がいびつであるが，底部に板状圧痕が観察できる。583～586は底部の厚みが薄いもので，接地面が平らになるように調整されたものである。584～587は，板状圧痕が観察できる。588～595は，底部に板状圧痕が観察できる。592は，底部がレンズ状に脹らむ。内面見込みに指ナデ痕が明瞭に残る。593は器形がいびつであり，接地面は不安定である。594は，器高が低く胴部が短い。内面見込みに指ナデ痕が明

瞭に残る。595は底部を丁寧にナデるもので，口径も比較的大きい。

596～610は，糸切り底である。法量は，口径７～8.7cm，底径3.2～7.5cm，器高1.05～1.9cmにおさまるものである。

596～607は，胴部の立ち上がりの外への張り出しが比較的強いものである。596～598・602・606は，内面見込みに指ナデ痕が明瞭に残る。608～610は小ぶりのもので，内側にナデ調整の痕跡が観察できる。598・599・601は，底部に板状圧痕が観察できる。597～600は色調がにぶい黄橙色であり，口縁部の開き具合や口径などの形状等の特徴が類似するものである。604はくびれが明瞭であり，厚い底部をもつ。口縁部をやや丸く整形している。板状圧痕が観察できる。608と609はほぼ同規格のものであり，器高が1.3cmと共通するものである。608と610は色調が浅黄橙であり，規格・調整ともに同様のものである。

**柱状高台皿**

611～621は柱状高台皿であり，高台部分は充実となるものである。高台部分は，重厚なつくりで，高さ約３cm，幅７～８cmにもなるものである。底部の切り離しは糸切りである。法量は，底径6.2～10.4cm，器高3.8～4.5cmにおさまるものである。618は，高台部分の外部に指頭圧痕による調整が明瞭である。

**耳皿**

622～625は，耳皿の可能性があるものを一括した。胴部から口縁部をつまみ上げている。622の底部切り離しは糸切りである。623の底部切り離しはヘラ切りである。625はつまみ上げ部分が弱く，製作時の変形の可能性もあるが，可能性のあるものとして掲載している。

**瓦器**

626～642は瓦器である。いずれも薄手のもので，内外面の両側もしくは一方にイブシがなされており，暗灰色で軟質の比較的粗雑なつくりのものである。

626～633は，内面のミガキが比較的丁寧なもので，口縁部下の内面には沈線を巡らせるものである。634・635は，底部である。いずれも高台を有するが，特に635は小振りのものである。636は，皿である。内面見込みにはジグザグに暗文を施文する。これらは楠葉型瓦器とみられるものである。

637～639は先述のものよりも粗い調整のもので，外面にはユビオサエ痕が残るものである。637は椀の口縁部で，638は皿，639は椀の底部で低い高台を有する。これらは，和泉型瓦器とみられる。

640～642は瓦器の特徴を有するが，産地などは不明のものである。640は若干肥厚する口縁部であり，椀の可能性がある。641・642は小型釜の可能性があり，楠葉型瓦器の特殊器種に類似する。

**瓦質土器**

643～667は瓦質土器である。

643～647は口縁部から数cm下の外面に鍔状の突起を巡らすもので，羽釜である。この中で，643や646は胎土が白色系であり丁寧なつくりのもので，関西系のものに似るが，口縁端部が内側に突出することから京都産ではないことが判明している。また，643は山陰に，644は摂津に類似のものがあることが指摘されている。特に645は硬質のものであり特徴的である。

648～656は，球胴状の体部をもつもので，体部上半で，くびれをもって外側に開くものであり，鍋である。外面には煤が付着することから煮炊具として使用されたことが確認されるものである。復元口径が30cm以内の中型のものと，30cm以上の大型のものとがある。

648～652は復元口径が30cm以上となるもので，外面はユビオサエ・ナデが、内面にはハケメが残る比較的粗雑なつくりのものである。胎土中には金雲母を含むものであることから，在地産であることが確認される。

653～656は，復元口径が30cm以内におさまるもので，比較的薄手で硬質のものである。これらの土器は頸部を有し，そこから上方へ向かって一旦開くまでは上記の鍋と同様であるが，口唇部付近でさらに内湾する点が異なる。

657～660は口縁が直行するもので，口縁端部を外側へと張り出させるものである。657は，口縁部内面に強い横ナデを施して溝状にするものである。659・660はともに，口縁部から１cmほど下部の内面で屈曲するものである。これらの土器は口縁部のみの破片であるため，器種は明確ではないが，鍋・甑などの煮炊具の可能性があるため，ここで一括している。

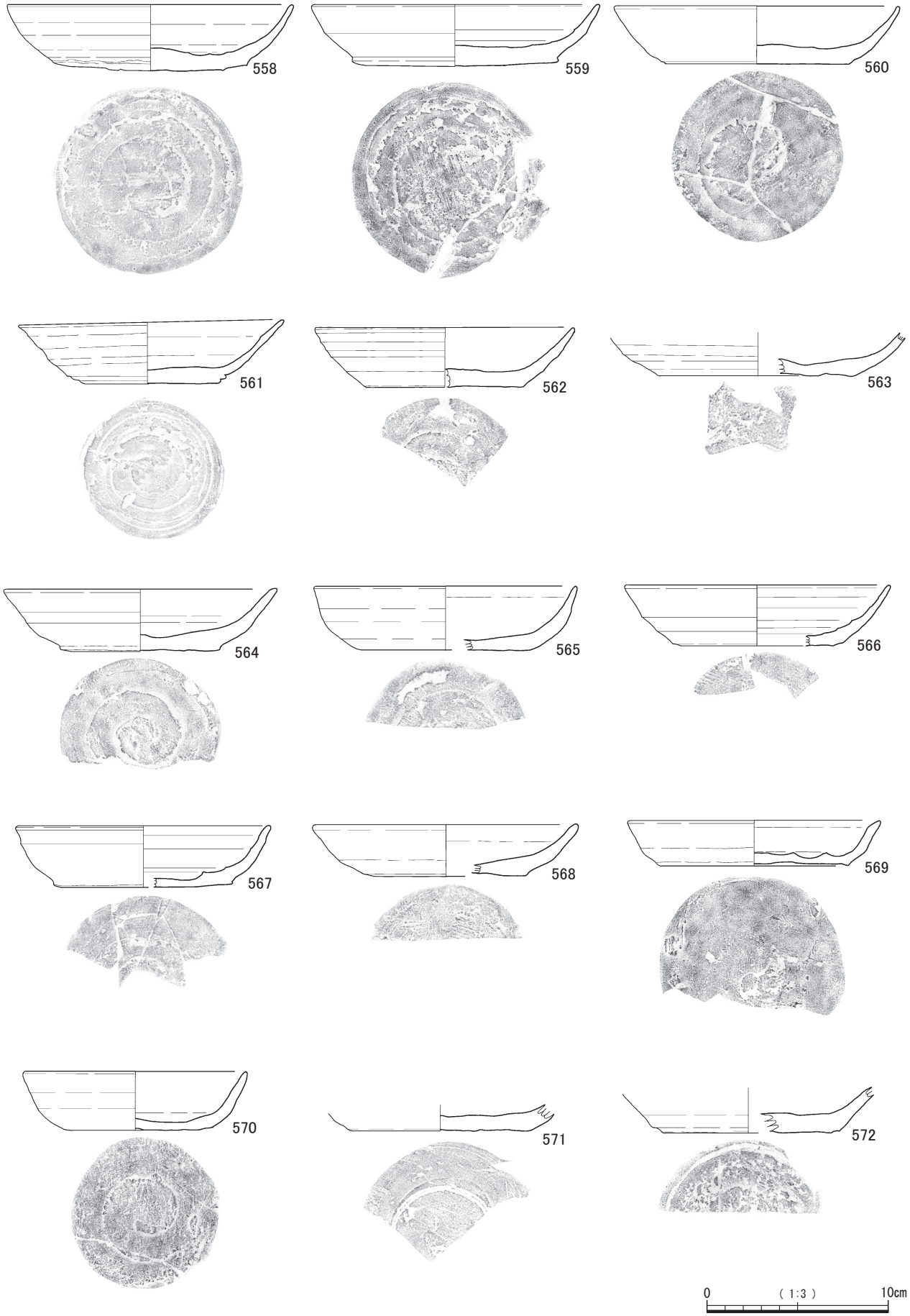
661～665は，焙烙（煎具）の可能性のあるものを一括している。特に，663は完形に復元できるもので，坏・皿等に形状が類似するものであるが，外面には煤が付着することから，焙烙の可能性があるものとして扱っている。

666・667は口縁部の破片で，いずれも文様を有する。666は口縁部が肥厚するもので，667は，口縁端部が欠損するものである。いずれも破片であるので，器種は明確ではない。

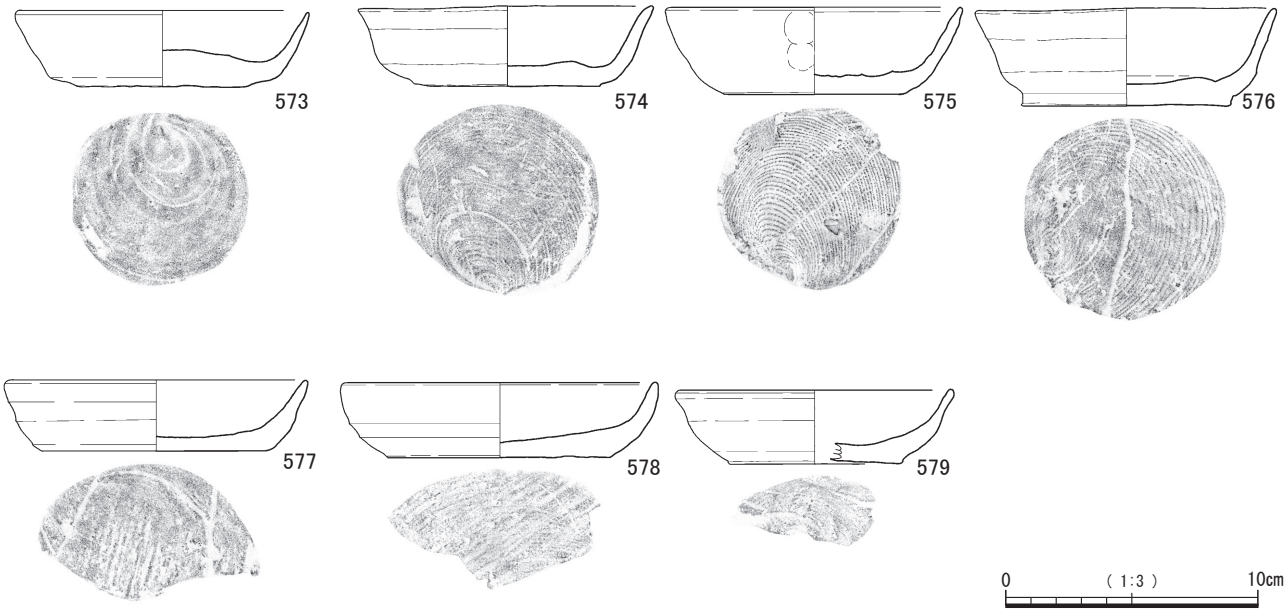
**(2) 国産陶器**

国産陶器は，各産地のものが出土している。ただし，少量のみの出土にとどまるものも多いことから，掲載は鉢（摺鉢含む）→甕・壺の順に分けて行った。実際の掲載箇所については分類・器種ごとに別々になっていることを了承いただきたい。

以上のことを踏まえたうえで，以下に掲載順に記載する。




第85図　中世の土師器（１）




第86図　中世の土師器（2）

**鉢**

668～706は，鉢形のものである。

668～688は比較的硬質のものであるので，東播系須恵器の中でも，神出産の可能性が指摘されるものである。

668～675・677は口縁部が残るもので，基本的には口縁部が肥厚するものであるが，668・672のように若干内湾するものや，669のように若干下方にも突き出すものなどがある。また，677は口縁部形状は共通する特徴を有するが，他のものよりもひとまわり小さい。678～680は底部である。切り離し痕は明瞭ではないものが多いが，679には糸切り痕が明瞭に残る。681～688は，神出産としたものの中でも若干焼成が特徴的なものである。具体的には灰褐色もしくは灰白色に近いものである。この中で，682は口縁部外面の肥厚した部分に一条の溝が作出されるものであり，特徴的である。また，684には注口がつく。

689～695は，比較的軟質で，赤っぽい色調のものである。東播系須恵器のなかでも魚住産の可能性が指摘されるものである。

696～726は東播系のものとは，胎土・形状・色調などの若干雰囲気が異なるもので，産地不明のものも含めている。696・697は，硬質のものである。696は，鉢以外の器種の可能性がある。697は注口を有するが，大ぶりにつくられており特徴的な形状のものである。698～700は，他のものよりも小振りなものである。椀などの可能性も有する。この中で，700は注口を有する。701は，軟質で外面にはユビオサエ痕がランダムに残る。702は，胴部の下端部にヘラケズリ痕が残る。701・702は在地の瓦質土器とみられる。703は硬質ではあるが，胎土中には砂粒・小石などが目立つもので，色調は濁色系のものである。これらの特徴から，常滑の鉢Ⅰ類の口縁部にあたるものである。704は小振りの底部であり，外面には糸切り痕が残る。705・706は,硬質で重量のある鉢である。この特徴から，備前産の摺鉢とみられる。705は口縁部で，若干の変形がみられる。内面には３条のカキメ（摺り目）が確認される。706は，底部である。内面には８条を１セットにしたカキメがやや隙間をおいて施される。底部は変形によりやや不安定である。

**甕・壺類**

707～746は，国産陶器の甕・壺類である。

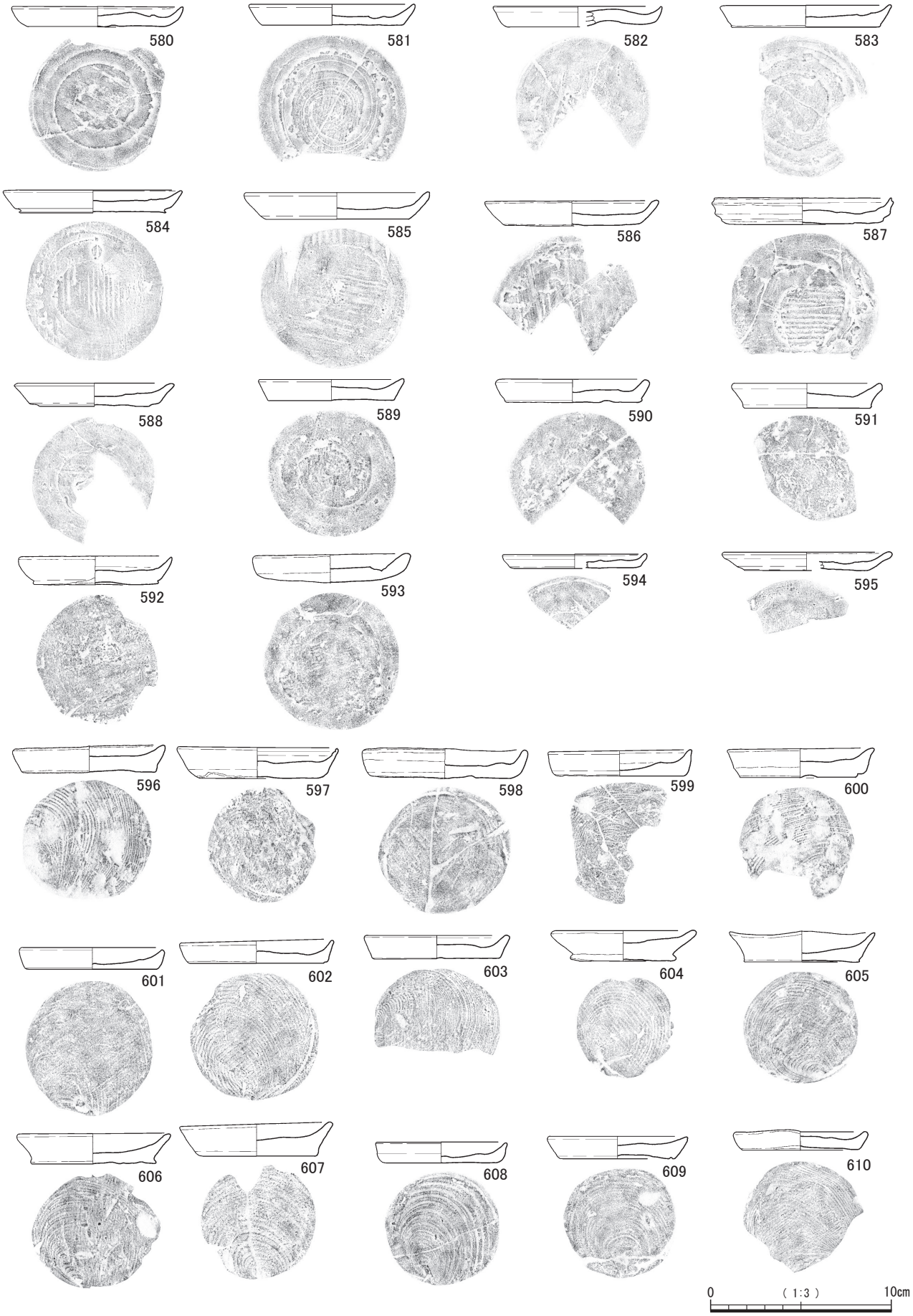
707～727は，国産陶器の中でも，中世須恵器とされるものを掲載している。707～711は甕であるが，いずれも破片であり，全形が判明するものはみられない。灰白色・灰褐色系に発色するやや焼成不良なものである。707は素口縁で，口縁が外方へと開くものである。口縁部断面形状は，コ字形を呈する。口唇部は平坦であるが，ナデ調整が雑なために若干のゆがみをもつ。

708～711は，胴部の破片である。いずれも外面のタタキ目は正格子で，内面当て具は無文である。

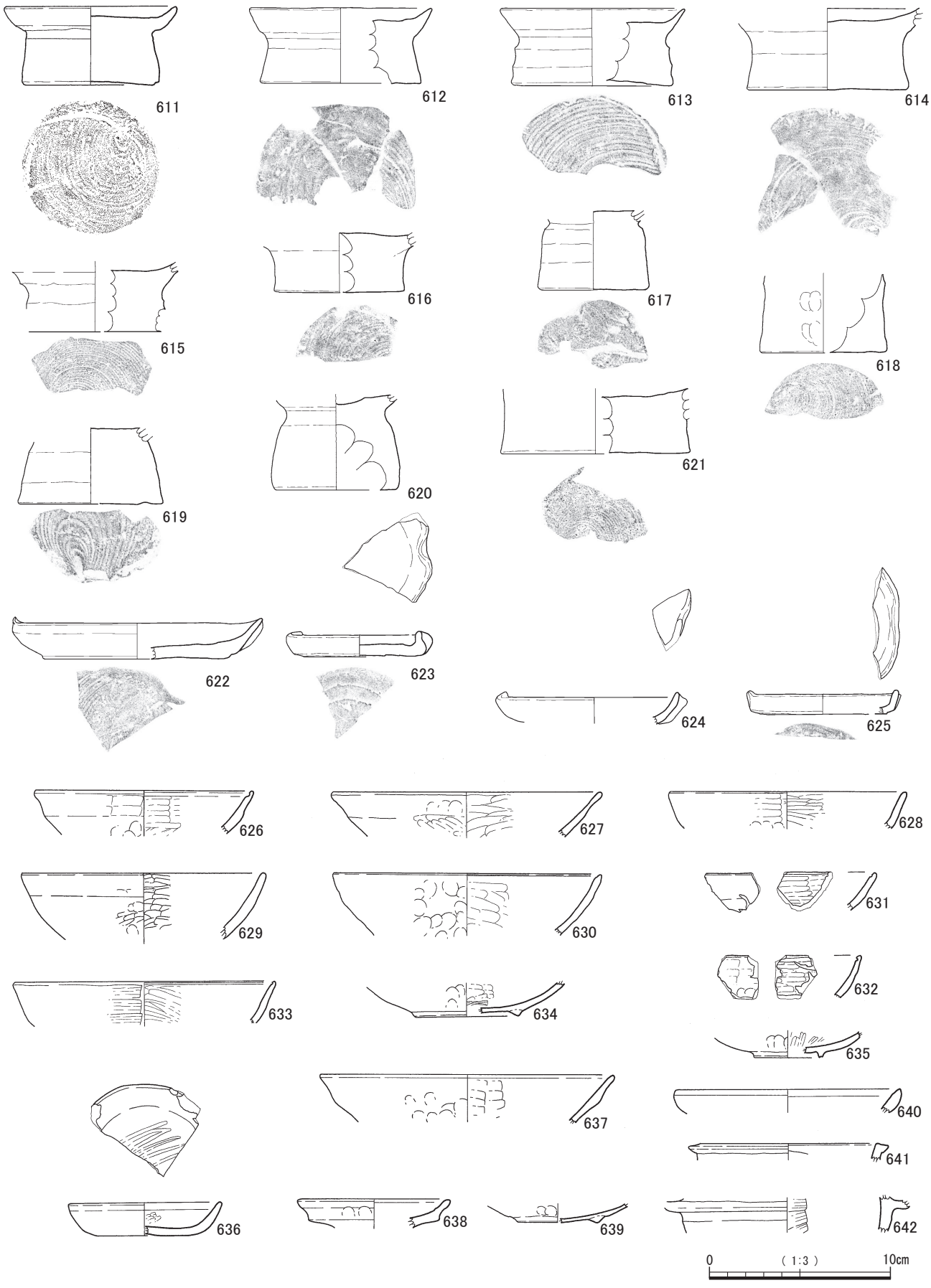
712～718は，比較的硬質なものである。東播系須恵器のなかでも神出産の可能性が指摘されるものである。712は頸部で，713～718は胴部である。いずれも外面には斜位に平行タタキを角度を変えながら施して，綾杉状に仕上げるものである。

719～722は軟質であり，風化が著しいものが多い。東播系須恵器のなかでも魚住産の可能性が指摘されるものである。上述のものと同様に，外面には斜位に平行タタキを施して，綾杉状に仕上げる。

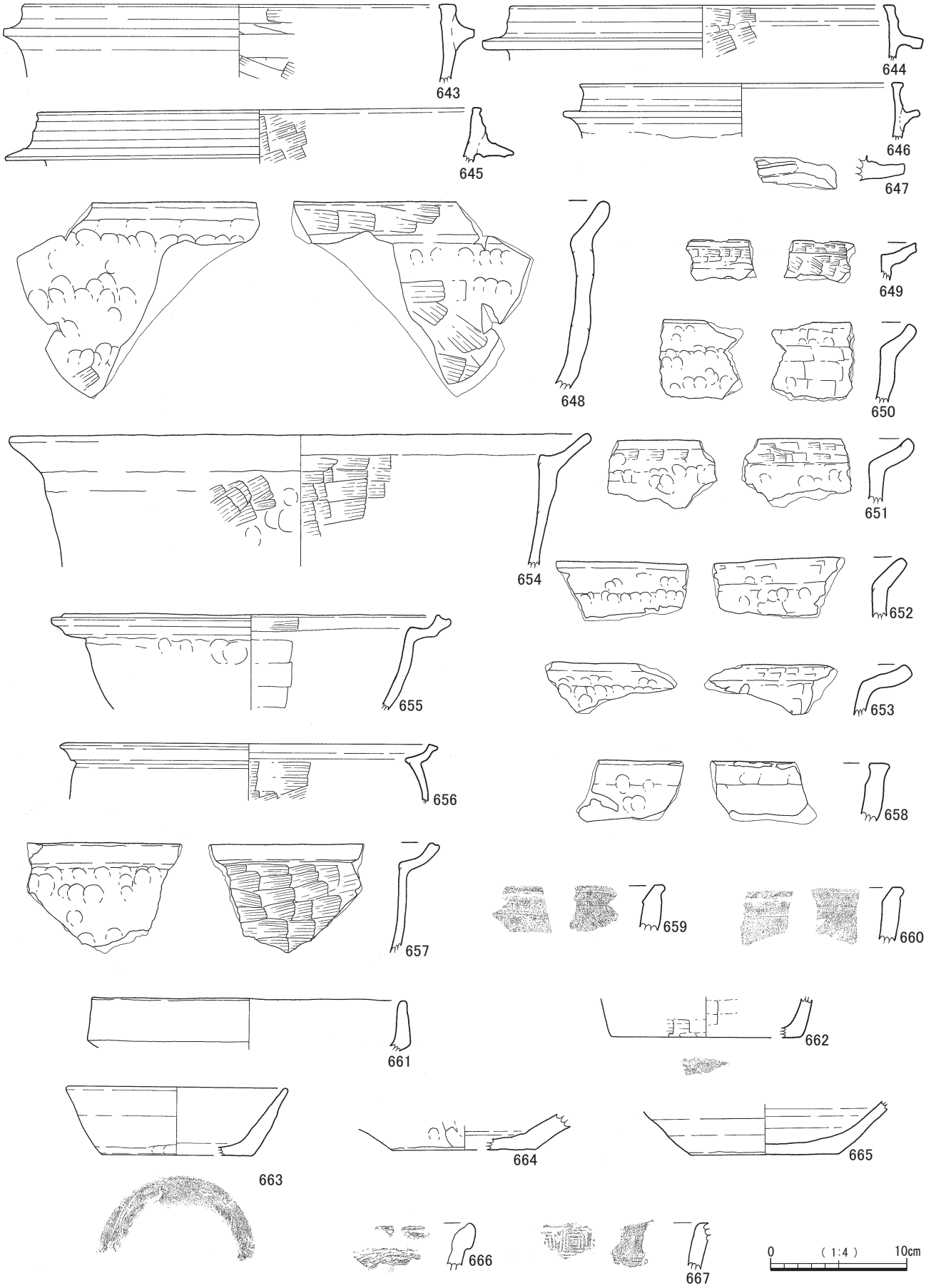
723・724は，底部である。内外面にはナデ・ユビオサエなどがなされており，硬質なものであるが，産地不明



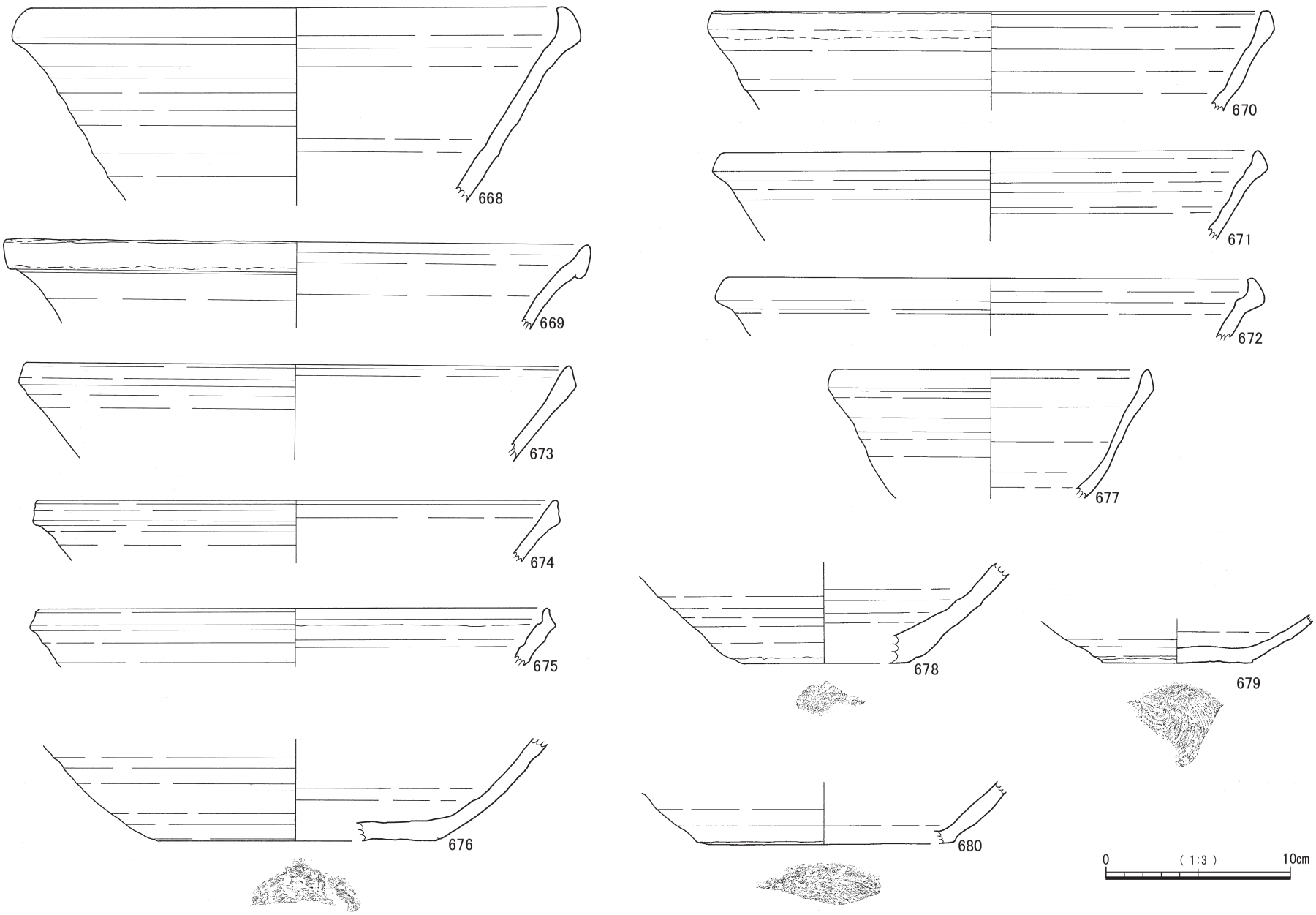

第87図　中世の土師器（3）




第88図　中世の土師器（4）瓦器


643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
0
( 1:4 )
10cm

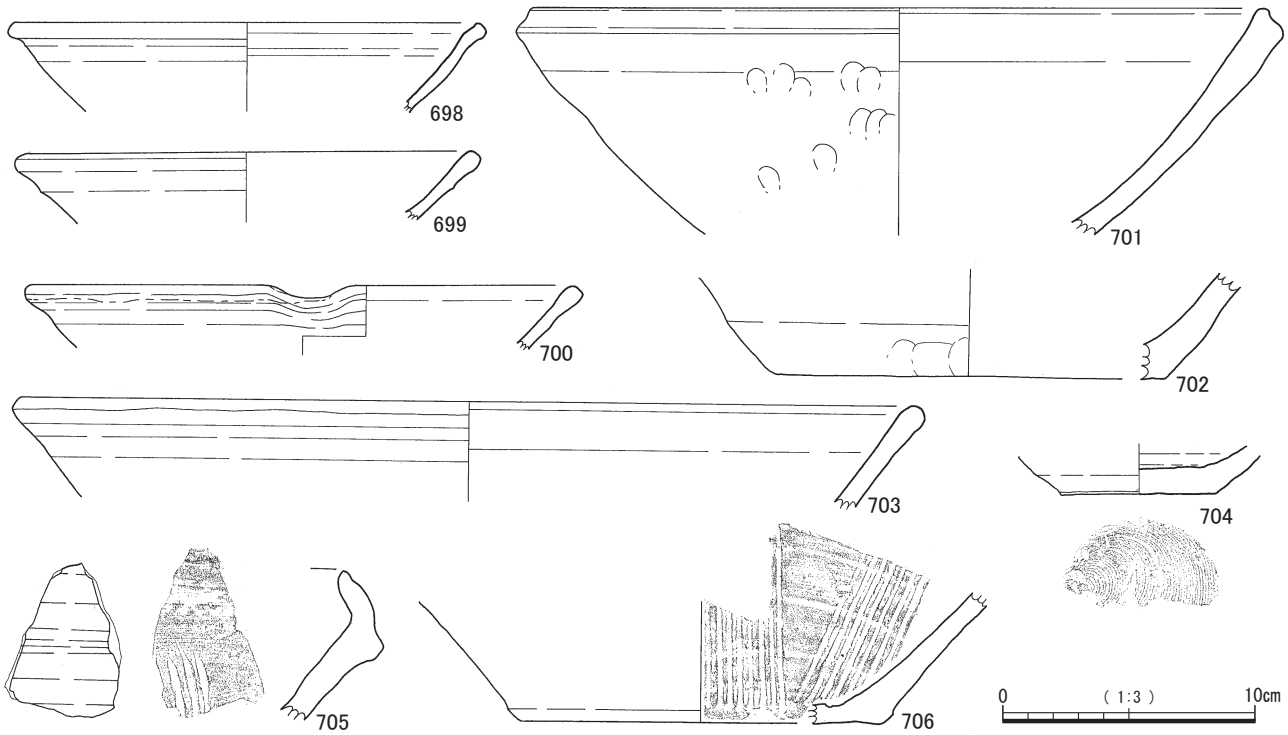
第89図　瓦質土器




第90図　中世陶器(１)・鉢１




第91図　中世陶器(2)・鉢2




第92図　中世陶器（3）鉢3

のものである。特に，724は底部外面に複数の小楕円形（直径約2～3㎜）の圧痕が残る。

725～727は胎土の色調が赤褐色で，胎土中に白色粒（直径1㎜以下）を含むものである。この特徴からカムィヤキ（南島須恵器）とみられる。725は，口縁部の破片である。口縁部は帯状に肥厚させたものである。726・727は胴部片で，比較的粗雑な調整がみられる。

728～745は，硬質で重量のあるものである。色調は褐色系であり，胎土中には砂粒・小石などが多く混入する。これらの特徴から，常滑産のものとみられる。

728～735は，口縁部である。728～734は甕であり，口縁部を折り返して「縁帯」と呼ばれる粘土の帯を巡らすものである。735は比較的小型のもので，広口壺の一種であるが，口縁部を折り曲げてN字状の縁帯を作出するもので，「不識（ふしき）壺」と呼称されるものの口縁部である。

736～741は，肩部から胴部にかけてのものである。特に，739～741は肩部で大きく屈曲する。

742～745は，底部である。742～744は胴部の下端部にユビオサエなどがなされており，わずかに外方へ張り出す。745は，下端部には横方向のナデを施し丁寧に仕上げる。

以上のものはほとんどが大型の甕であるが，735・741・743・745については比較的小振りなものである。また，ほとんどの個体には黄緑色系の自然釉がかかる。

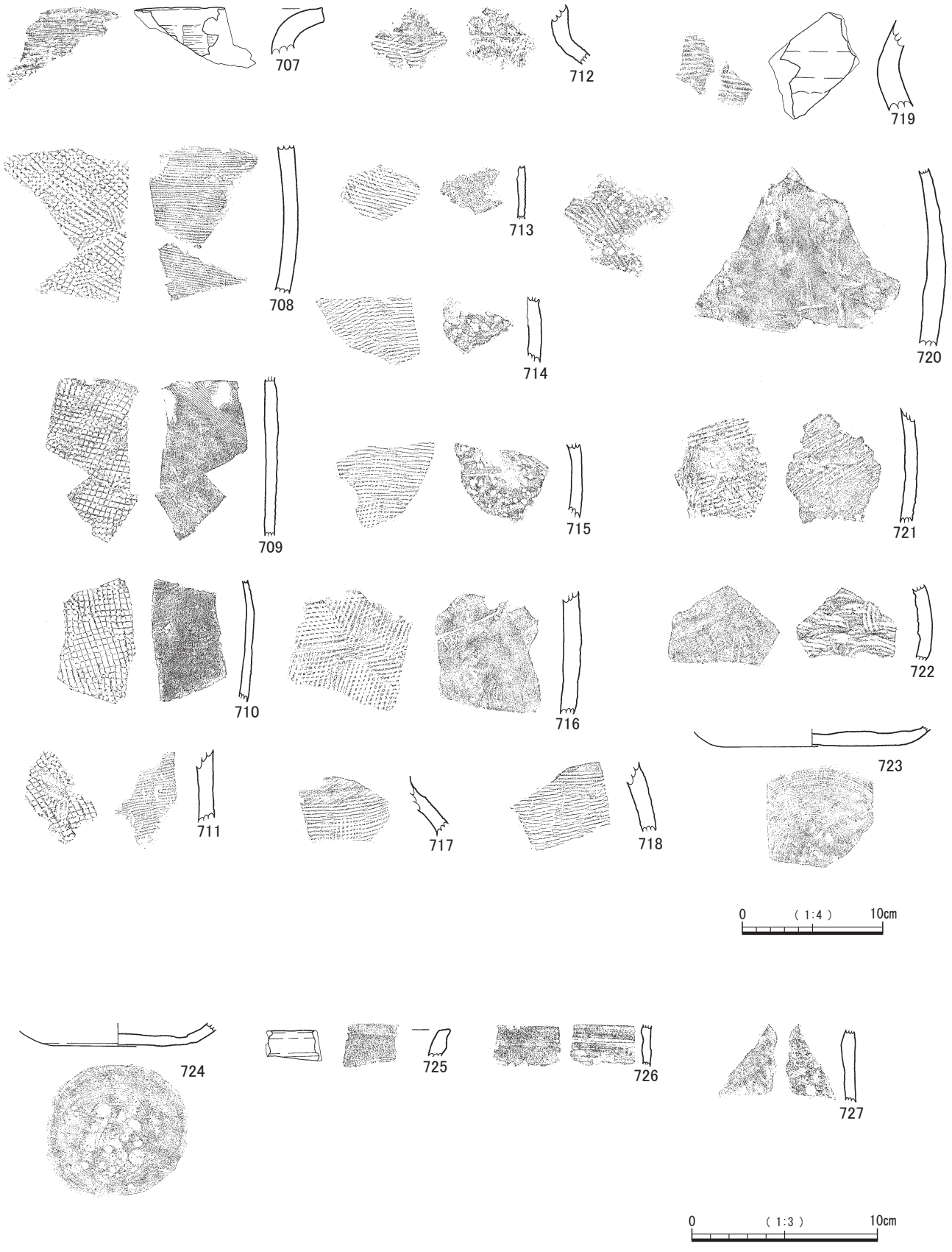
746は，口縁部のみ確認されるもので，口縁部は玉縁状に肥厚する。非常に堅くしまった焼きのもので，硬質で重量のあるものである。胎土中には砂粒を多く含むもので，色調は赤褐色を呈する。これらの特徴から備前焼とみられる。

**(3) 輸入陶磁器（第95図・第96図）**

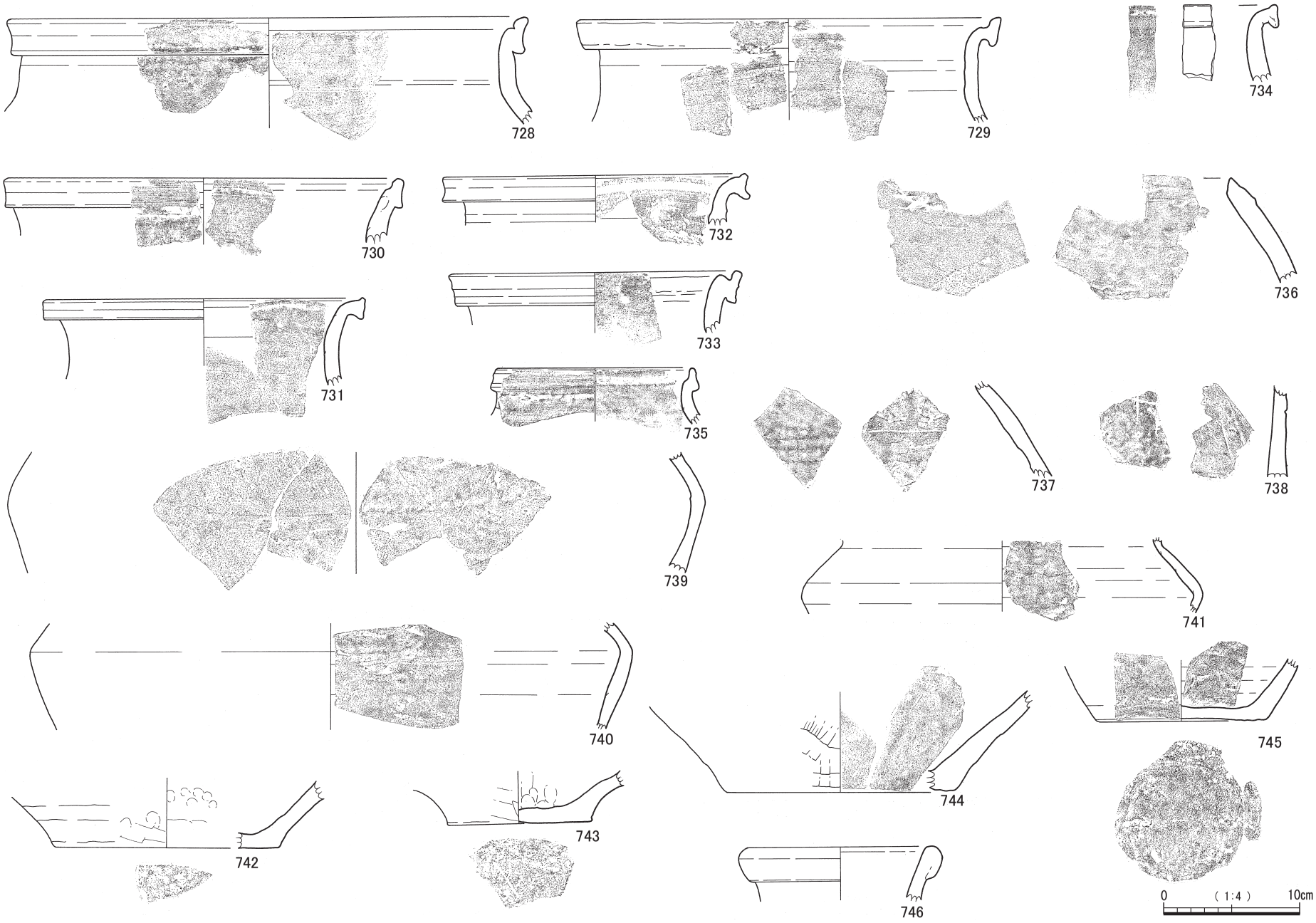
白磁・青磁とともに，輸入陶器が出土している。ここではこれらをまとめて輸入陶磁器として扱う。以下に，白磁・青磁・輸入陶器の順に掲載する。なお，分類にあたっては基本的に大宰府分類を使用する。大宰府分類に当てはまらないものや，特殊なものなどについては適宜示すこととする。

**白磁（第95図）**

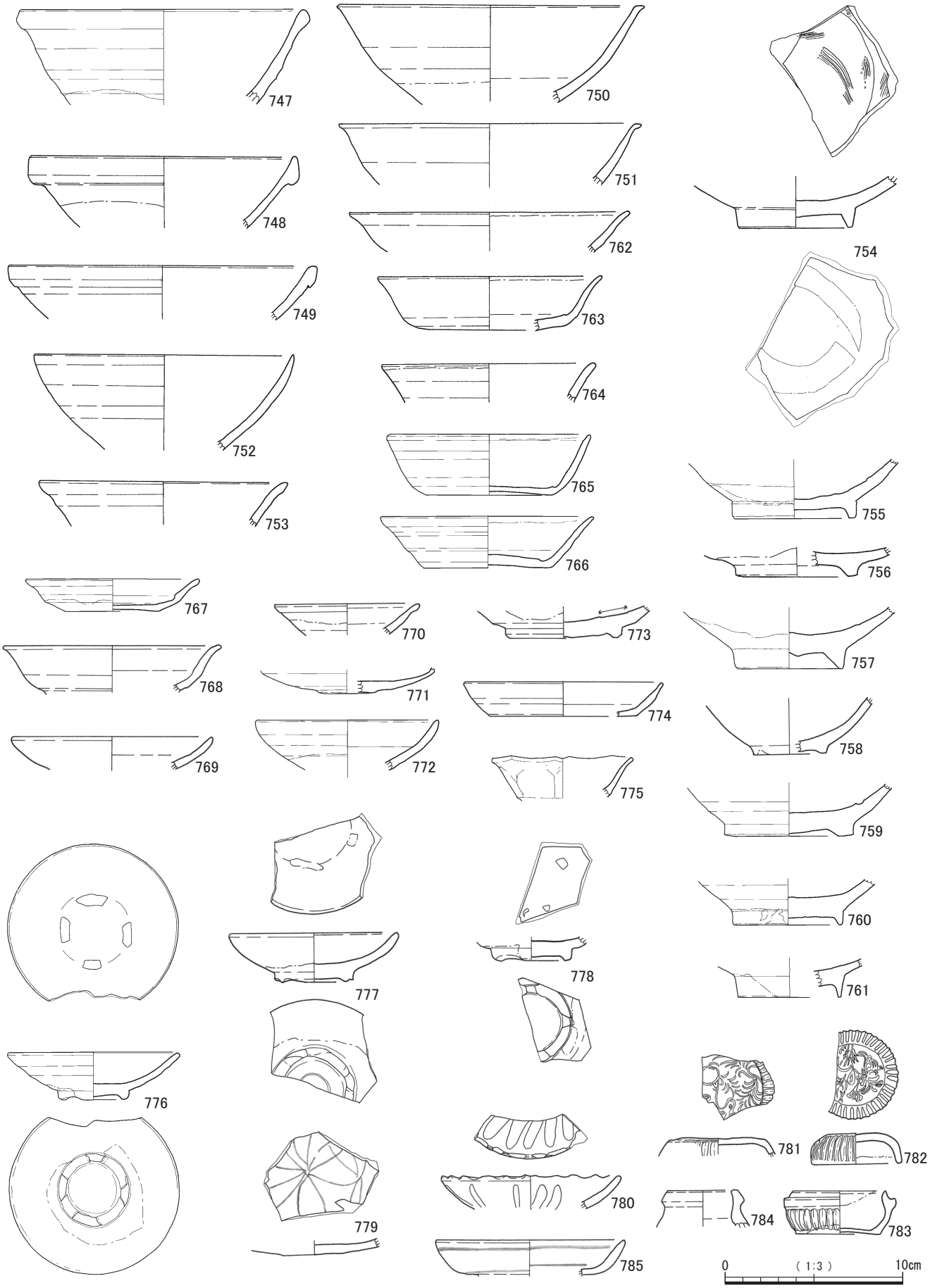
747～785は，白磁である。碗・皿・合子・瓶などがある。747～761は碗で，747～753が口縁部，754～761は，底部である。747～749は口縁部が肥厚し断面形が玉縁状になるもので，大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（玉縁碗）である。750・751は口縁端部が外方に反るもので，白磁碗Ⅴ類（端反碗）である。752はやや内湾した直口縁のもので，白磁碗Ⅱ類にあたる。753は口縁部が浅い玉縁状になるものであり，白磁碗Ⅲ類にあたる。754は，見込みに櫛目文を有する。高台は直立したシャープなものである。755は，見込みに蛇の目状の釉剥ぎを施すものであ



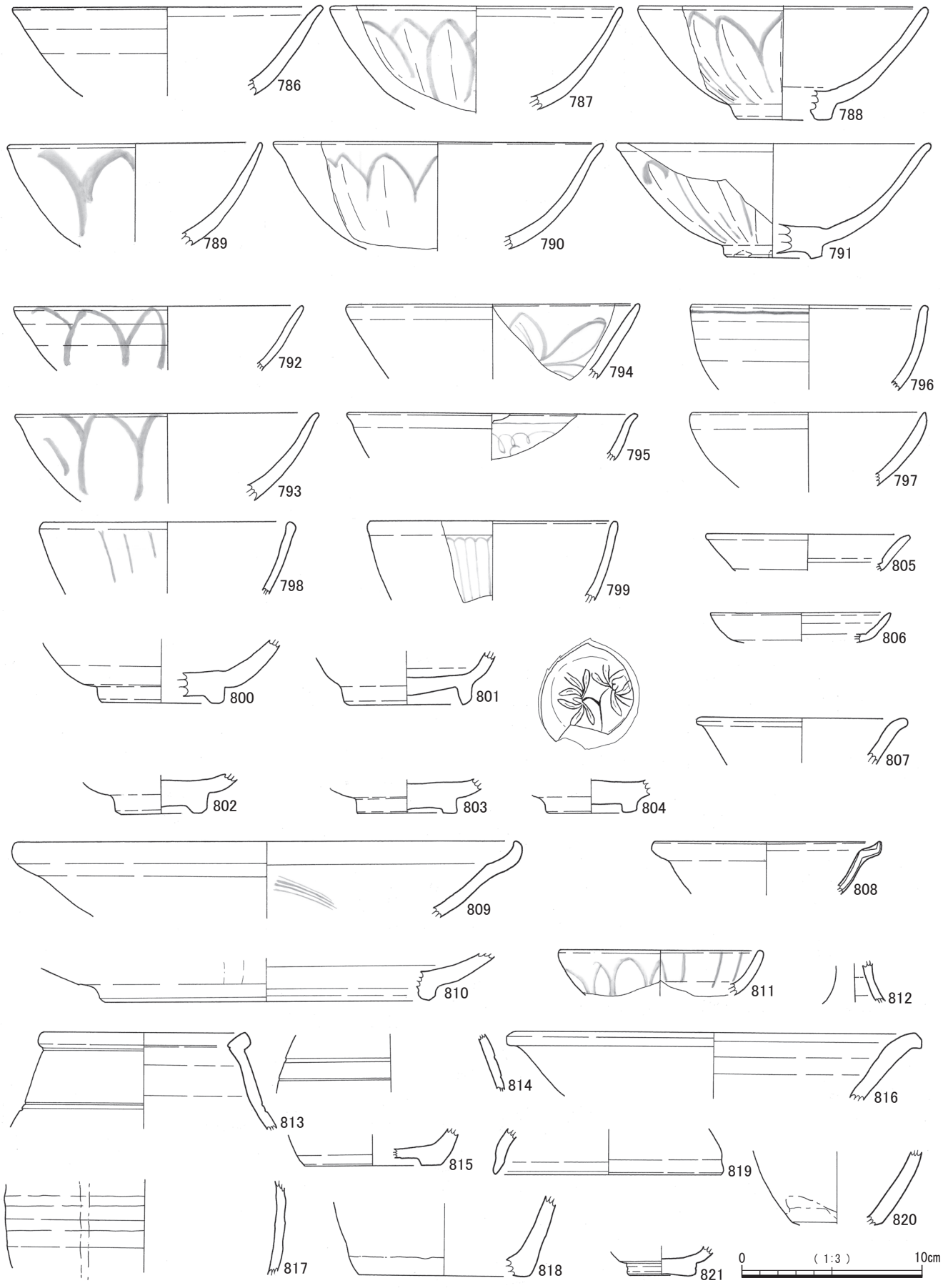

第93図　中世陶器（4）甕・壺1



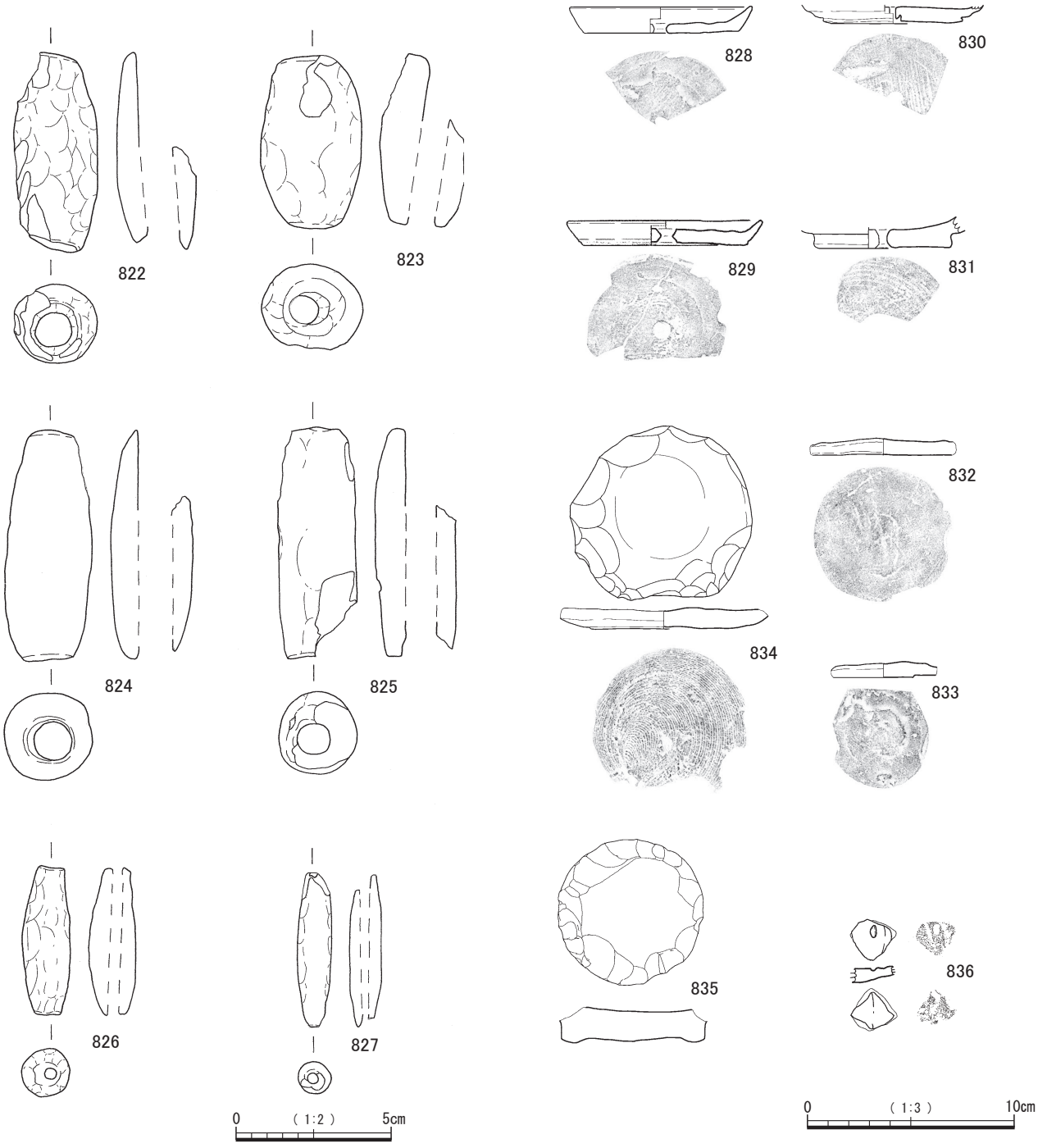

第94図　中世陶器（5）甕・壺2




第95図　輸入陶磁器（１）白磁




第96図　輸入陶磁器（2）青磁・陶器

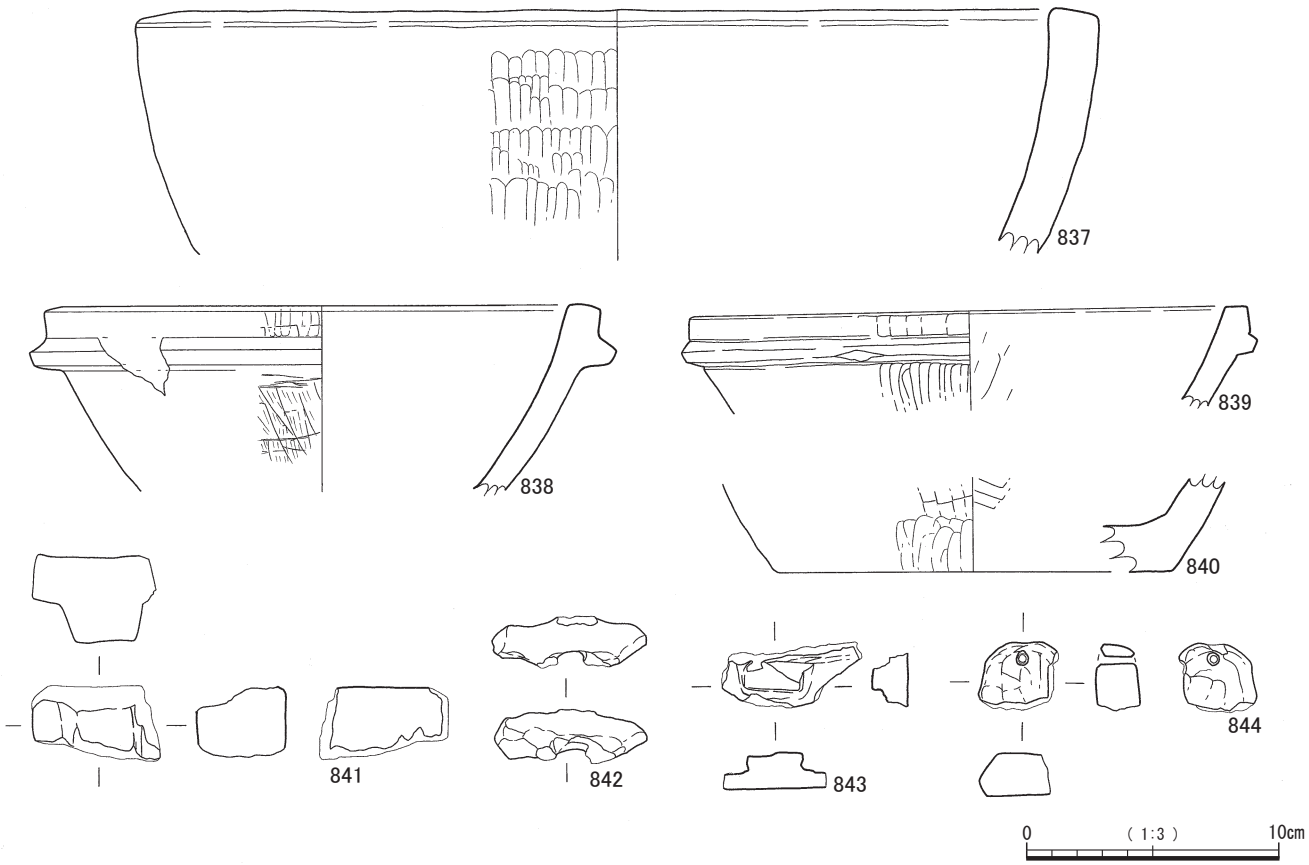



**第97図　再加工品・その他土製品**

る。754～761の底部については，口縁部が欠損しているため確実ではないものの，色調や胎土などの特徴からほとんどが白磁碗Ⅳ類及びⅤ類の底部とみられる。

762～780は，Ⅲである。762～766は箱状の体部を有するもので，口縁端部を釉剥ぎするもので，白磁Ⅲ Ⅸ類（口禿Ⅲ）である。767は直口縁で，体部は鈍角に内側へ屈曲するもので，白磁Ⅲ Ⅷ類にあたる。768は外反する口縁を有するもので，高台がつく。白磁碗Ⅱ類ないしはⅢ類にあたる。769・772は若干内湾する口縁のもので，白磁Ⅲ Ⅶ類にあたる。770は口縁部が外反する小型のもので，白磁Ⅲ Ⅲ類にあたる。771はわずかに外方へと突き出す底部である。Ⅵ類にあたる。

773～785は，中世後半のものとみられるものを掲載した。773は見込みには蛇の目状に釉剥ぎを行うもので，釉薬はやや水色がかったものである。低く横に張った高台を有する。774は釉薬の色調が乳白色の色調を示すも




第98図　滑石製品（石鍋・石鍋転用品）

のであり，丁寧なつくりから徳化窯産とみられる皿である。775は多角坏で上面形は八角形をなす。776～778は森田分類のＤ類に入るもので，見込みには胎土目が残り，高台には４箇所の抉りが入るものである。776と778の高台見込みには赤墨が残るもので，字形は確認できなかったが，分析結果から水銀朱であることが判明している。詳細は第Ⅴ章を参照いただきたい。779は，底部のみの破片である。見込みには「米」字形の文様が刻まれる。780は内外面の文様の様子から「菊皿」と呼称されるもので，森田分類のＥ類に入るものである。

781～783は青白磁の合子である。781・782はそれぞれ蓋であり，型押し成形によるものとみられるもので，上面には陽刻された精緻な文様（花文等）がみられる。783は身であり，体部には連弁が施されるもので，体部の下半では一部露胎となる。これらの３点は，それぞれの径が異なるので，セットになるものではないとみられる。

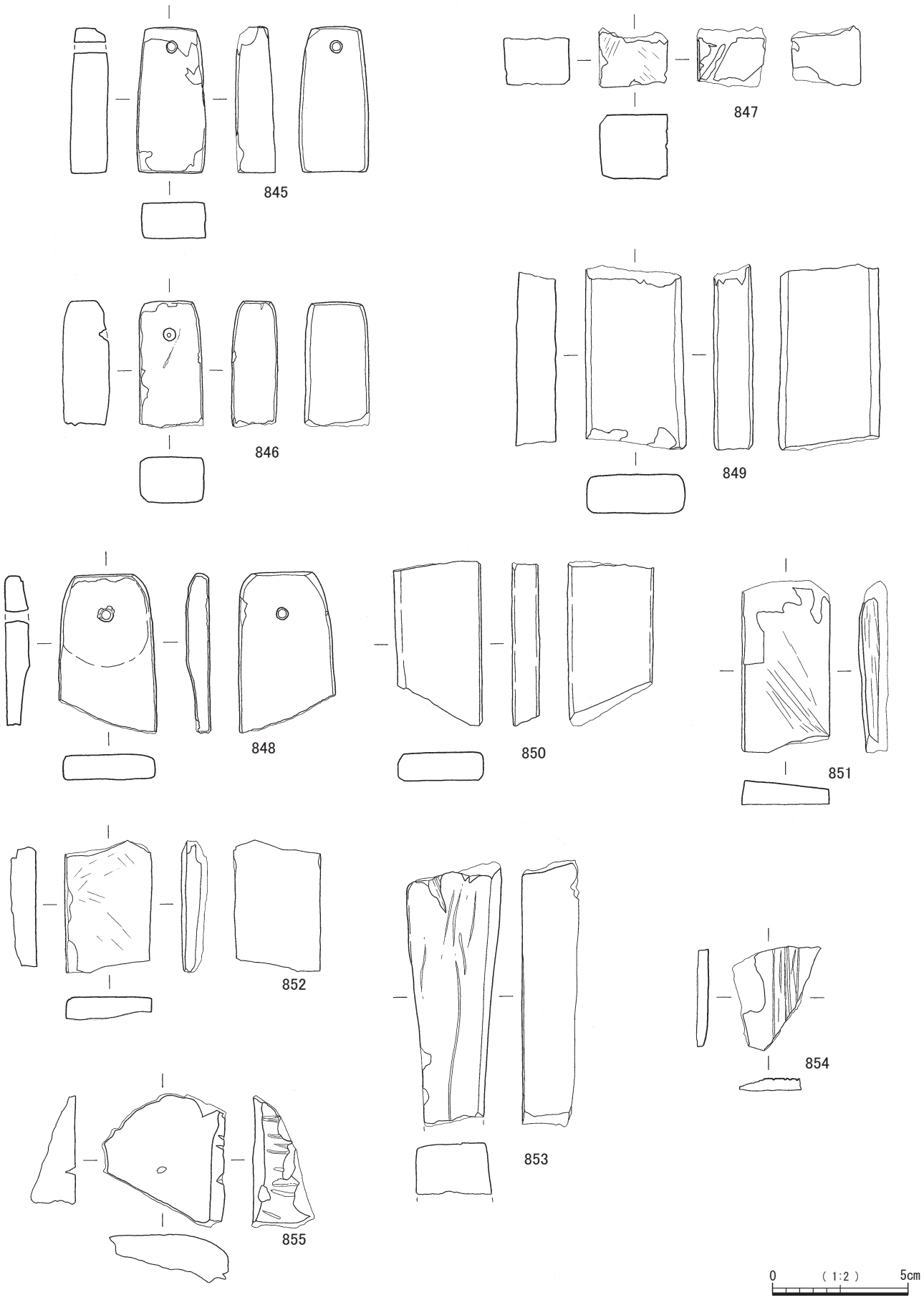
784は青白磁であり，口縁部が肥厚し内湾するものである。壺・瓶等の口縁部とみられるもので，梅瓶の口縁部の可能性もある。

785は白地に青の文様を施した輸入磁器で，青花と呼称されるものである。器種は皿である。表面には貫入が多く入り，胎土が粗く灰色から赤色のものであることから，漳州窯産のものとみられる。

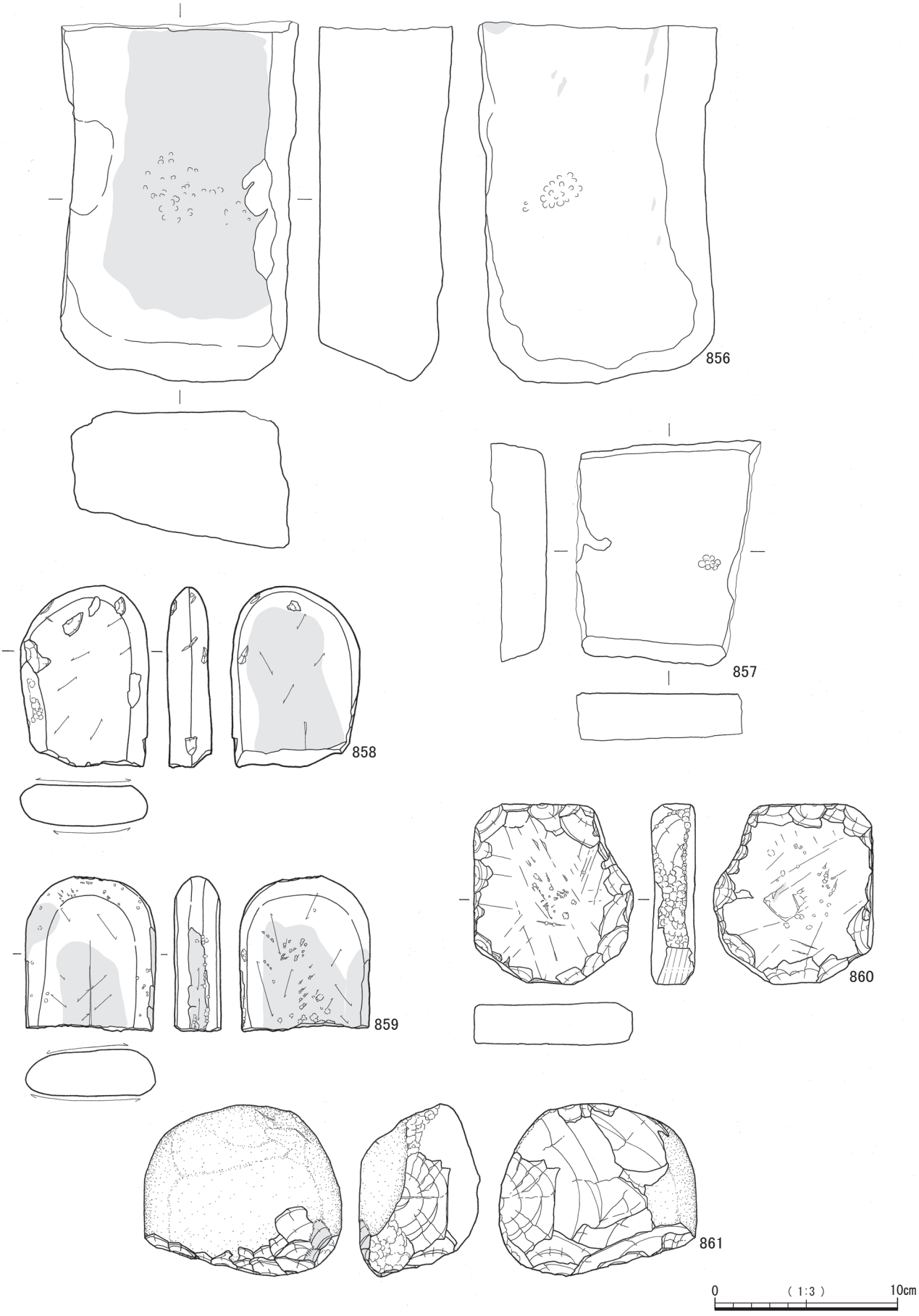
以上のうち，747～772・781～784は中世前半に，773～780・785は中世後半のものとみられる。

**青磁（第96図）**

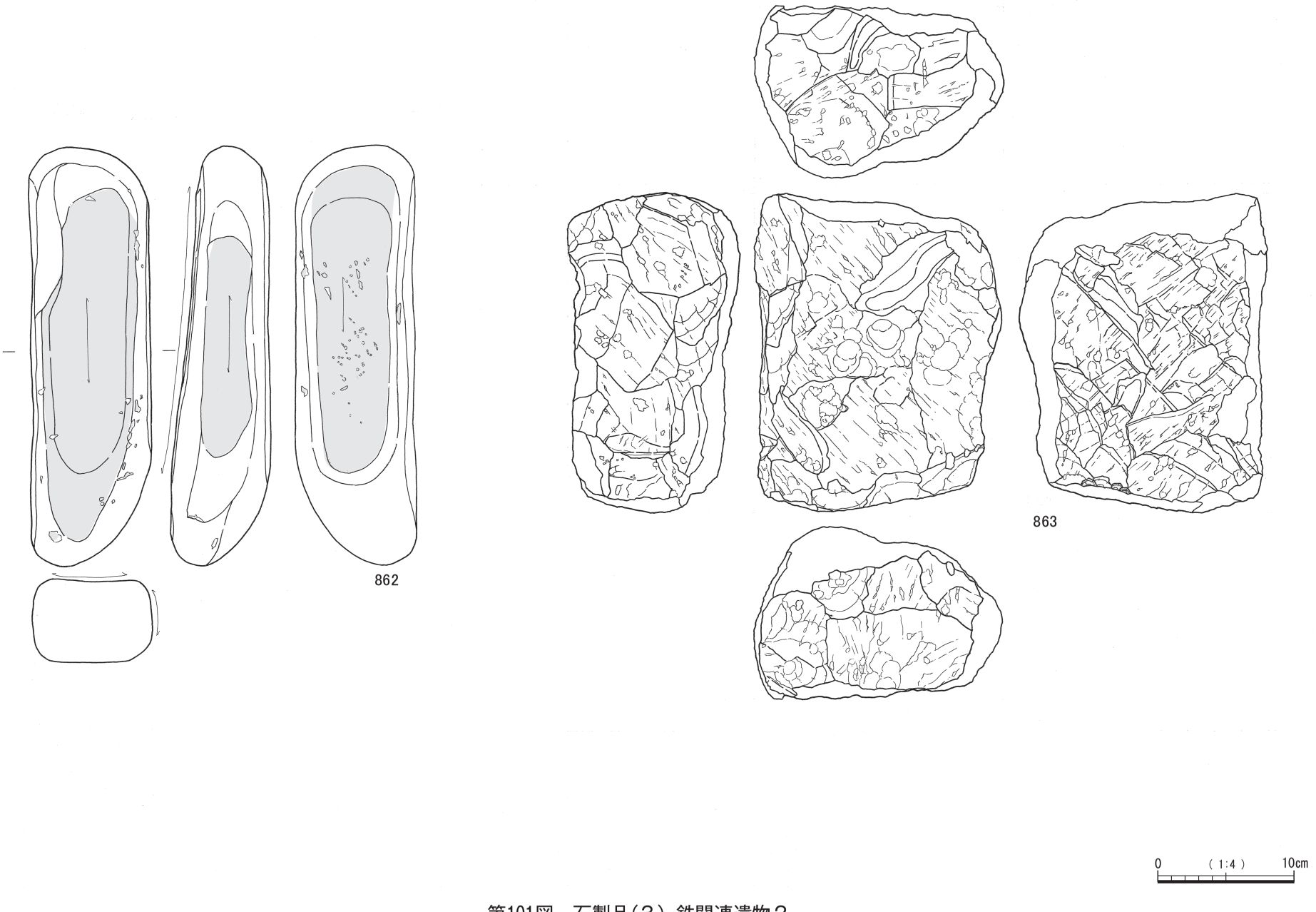
786～812は，青磁である。碗・皿・坏・瓶などがある。786～804は碗で，786～799が口縁部，800～804が底部である。786は口縁端部が丸く肉厚で若干外反する無文のものである。竜泉窯系青磁碗Ⅰ類にあたる。787・788は体部外面に鎬連弁を施すもので，竜泉窯系青磁碗Ⅱ－ｂもしくはｃ類にあたる。789・792・793は鎬のない連弁文を施すもので，竜泉窯系青磁碗Ⅱ－ａ類にあたる。790・791は体部外面に鎬連弁を施すもので，上記のものと類似するが，底部が小さめで比較的丁寧なつくりのものであるので，竜泉窯系青磁碗Ⅱ－ｃ類とⅢ－２類の中間的なものの可能性がある。794・795は，外面は無文で，内面に画花文を施すものである。竜泉窯系青磁碗Ⅰ－２類にあたる。796・797は無文であるが，釉の発色が786とはかなり異なり，明るい色調のものであるので，別に取り上げている。明確な特徴がないため，分類も困難で



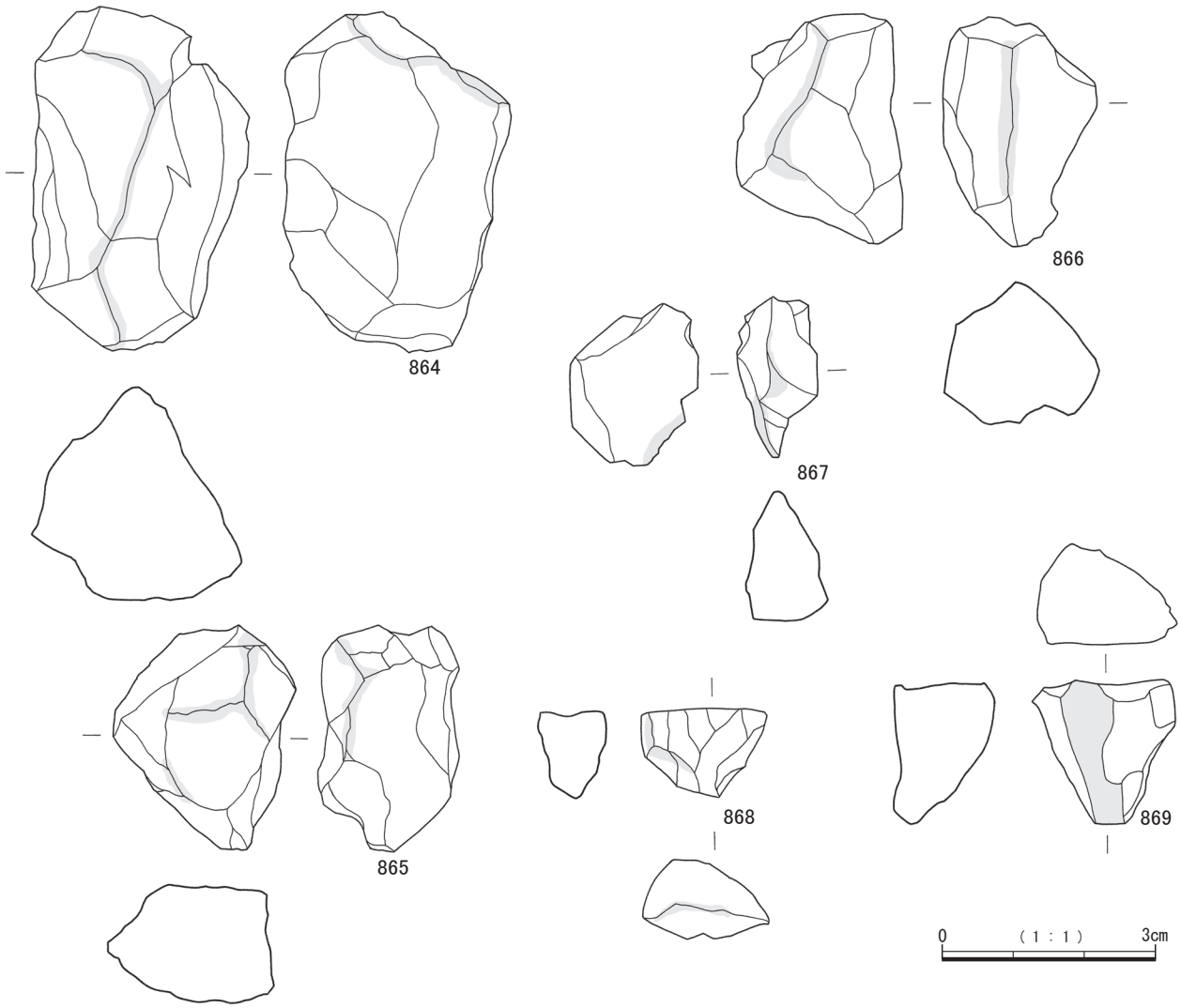

第99図　石製品（１）砥石




第100図　石製品（２）鉄関連遺物１




第101図　石製品（３）鉄関連遺物２




第102図　石製品（4）火打石

あるが，上田分類のＥ類に類似するものであるので，14世紀後半～15世紀前半に該当する可能性がある。

798・799は連弁文が省略されたものであり，上田分類のＢ-Ⅳ類にあたる。時期は15世紀後半～16世紀前半頃とされるものである。800・801は釉色や胎土などの特徴から，786・789などの底部と考えられる。804は見込みに草花文様が施されるもので，竜泉窯系青磁碗Ⅱ類の底部にあたる。

805・806は皿である。体部中位で屈曲し，口縁部は直に引き出す。皿Ⅰ類にあたる。

807・808は坏である。807は口縁部が短く屈曲するものである。808は口縁端部を横に長く屈曲させて，上端には凹みをつくり，さらに端部をつまみ上げるものである。これらはいずれも竜泉窯系青磁坏Ⅲ類にあたる。

809・810は，大皿である。809は口縁端部を横に屈曲させて凹みをつくりそこからさらに内湾させるものである。810は，底部である。高台の接地面の断面形が尖り気味につくられる。811は，内外面の文様の様子から「菊皿」と呼称される皿である。812は，小型の壺・瓶の頸部である。

以上のうち，786～791・800～808・812は中世前半の792～799・809～811は中世後半のものとみられる。

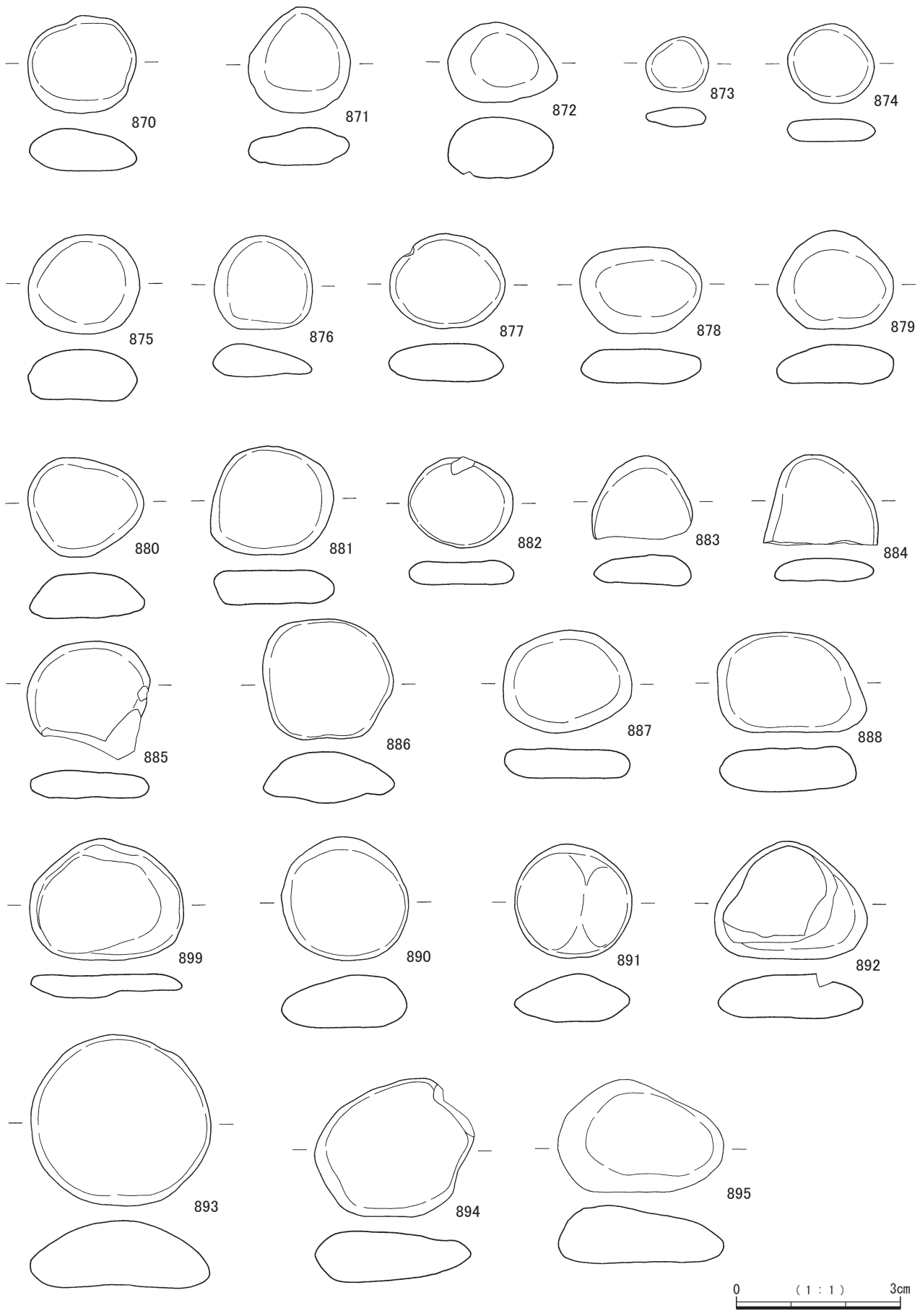
**(4) 輸入陶器（第96図）**

813～821は輸入陶器である。

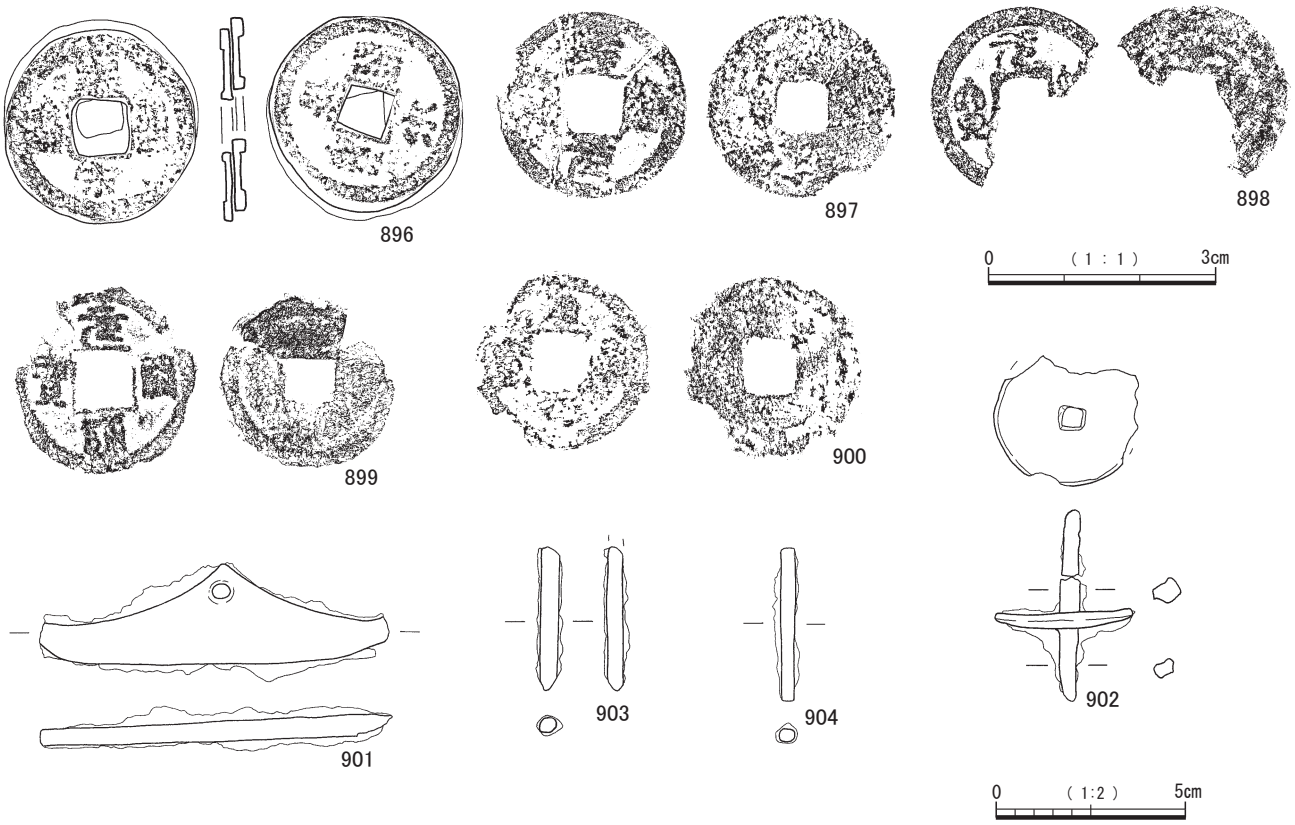
813～815は耳壺とされるものであり，大宰府分類のⅣ類ないしはⅤ類にあたる。

816は大型の鉢とみられるものである。817・818は耳壺・水注などの可能性があるが，破片であるため器種不明である。

819～821は鉄釉のかかる小振りで若干内湾する器形の




第103図　石製品（5）碁石




第104図　銭貨及び金属製品

碗で，「天目碗」とされるものである。輸入天目碗の特徴としては，釉を二度かけすることがあげられるが，本資料はその特徴を備えるものである。

以上の輸入陶器の中で，813～818については中世前半の可能性があり，残る819～821については中世後半の可能性がある。

**(5) その他，加工品等（第97図）**

822～836は土製品とその他である。

822～827は土錘である。いずれも管状のものである。822～825は比較的大型のもので，826・827は小型で細身のものである。822・823・826・827はユビオサエによる成形痕が明瞭に残るが，824・825は表面を丁寧にナデて成形している。

828～835は土器・白磁の底部を利用して再加工したものである。828～831はいずれも土師器小皿の底部中央に穴を開けて加工している。828と829は色調が橙であり，つくりも類似するものである。828～830は底部の切り離しがヘラ切りで，831は糸切りである。830は板状圧痕が観察できるもので，穿孔部が２箇所存在する。１箇所は貫通しているが，もう１箇所は孔が存在するものの，先端が尖った凹みとなるものであり，貫通していない。

832～835は円盤状に加工したものである。器高は１cm以下である。832・833は側面の加工はケズって丁寧におこなうもので，834・835は荒割りの状態を残す。832は底部の切り離しがヘラ切りで，底部に板状圧痕が観察できる。833は底部の切り離しが糸切りである。本遺跡で出土している小皿の底径は約６～７cmであるのに対して，本資料は直径が約５cmであるので，もとの底部破片からかなり削り込んでいることとなる。834は側面の加工が荒割りの状態のもので，底部の切り離しがヘラ切りである。特に内面に打ち欠きの痕跡が明瞭に残る。835は白磁碗の底部を打ち欠いて円盤状に面加工したものである。

836は，土製品ではないがその他のものとしてここで取り上げている。土師器小皿の底部である。籾痕が内面見込みに明瞭に確認できる。

**滑石製品（石鍋・石鍋転用品）（第98図）**

837～844は,滑石製品である。滑石製の石鍋は著名な産地としては長崎県西海市周辺の西彼杵半島が挙げられるが，本遺跡のものもそれに類するものとみられる。

837～840は滑石製の石鍋である。いずれも，外面には煤が付着するもので，煮炊きに使用されたことがうかがえる。837は大型のもので，外面は縦方向のケズリがみられるものである。残存部分には鍔は確認できないが，本来は２箇所ないしは４箇所の耳状の突起があったものとみられる。838・839はいずれも口縁端部から１cmほど下方の外面に鍔を巡らすものである。外面にはおおむね

縦方向のケズリが確認される。840は底部である。底部の外面にも接地面まで縦方向のケズリが確認される。

841～844は，滑石製の石鍋の破片を再加工した製品である。841は，837では確認できなかった耳状の突起部分である。明確な製品ではないが，再加工している部分が確認できる。842は，石鍋の取っ手部分を再加工したとみられるものである。穿孔があり，孔の中には鉄器の一部が残っている。843は「バレン状製品」と呼称されるものである。耳状の突起部分を利用して加工した可能性のあるものである。石鍋は度重なる使用によって底部が抜けてしまうことがあるが，その際に底に生じた穴やひびなどに入れ込んで，補強するために使用されたとされるものである。844は上端付近に穿孔するもので，権や錘などとしての目的で再加工された可能性がある。

**石製品（第99図～第103図）**

845～895は石製品である。砥石・磨敲石・火打石・碁石などが出土している。

**砥石（第99図）**

845～855は砥石である。845～853は短冊状の平面形を呈するものである。854・855は破片であり不定形であるが本来は短冊状であった可能性もある。短冊状のものは，断面形が方形もしくは長方形のものが多い。845・848のように上端部に穿孔のあるものもあり，いわゆる「堤（さげ）砥石」として用いられたとみられる。また，846は，穿孔がみられるが貫通していないものである。854は裏面が剥がれているために一部のみであるが，表面には，併行する数条の溝状となった使用痕が観察される。855も一部のみの残存であるが，側面にあたる部分には数条の溝状となって残る使用痕が観察される。

**鉄関連遺物（第100図・第101図）**

856～863はいわゆる金床石や鉄分の付着する磨敲石，礫器などである。

856は比較的大型の石皿状のもので，表面と裏面の中央部付近に弱い敲打のあとが観察されるものである。表面の一部が赤色化しており，被熱痕であるとみられる。857も同様のものであるが，裏面は欠損している。正面には敲打痕が残る。860～863は通常であれば磨敲石・礫器などとするものであるが，平坦面には研磨痕のみでなく，敲打がみられたり，炭化物の痕跡や錆状の付着物などがわずかにみられたりするものである。861は，礫器であるが，通常刃部としている部分の一部に，光沢のみられる研磨痕・削痕がみられたりするものである。862は，大型の砥石である。砥石としての用途のほかに，弱い敲打がまばらにみられるものである。863は，軽石製品である。数箇所に鉄器によるとみられる筋状部分がみられる。本資料は，明確な形状を意識してつくられたものではないが，鉄に関連する作業に使用された可能性があるため，ここで扱っている。

**火打石（第102図）**

864～869はガラス質の石材（石英・水晶など）を用いたもので，角の部分がつぶれているものである。これは，調整等によるものではなく，火打金等の発火具との打撃によってできた使用痕であると考えられる。一部には，錆の痕跡も残る。大きさも幅４㎝程度のものから15㎝程度のものまで幅広い。

**碁石（第103図）**

870～895は，白色ないしは黒色に近い発色をした直径１～2.5㎝程度（１点のみ直径３㎝程度）の円盤形のものである。ここではこれらを「碁石」の可能性のあるものとして扱っている。ただし，870・872は白色系の色調のものであるが数はごく少なく，黒色系のものが多くを占める。特に，872は多孔質のものであり，検討を要するものである。また，893は灰色系を呈するもので，陶器の可能性があるが，これも碁石の可能性のあるものとして扱った。

**銭貨（古銭）（第104図）**

896～900は銭貨である。本遺跡では元豊通寶・元祐通寶・皇宋通寶・熙寧元寶のほかに不明銭がある。不明なもの以外はいずれも中国の北宋銭である。総数で５枚が出土した（皇宋通寶が２枚出土）。なお，これらの銭貨のうち，元豊通寶・元祐通寶・皇宋通寶の３種類については，K-32区で検出された礫集積遺構の近辺から出土しているものであり，周辺で検出された焼土群や後述する炭化米塊などどの関連性も考慮されるものである。

896は，皇宋通寶である。北宋皇帝４代である仁宗の寶元元（1038）年初鋳である。かなりの数がつくられており，これまで国内で出土した渡来銭の中では最も多いとされる。字体は真書である。本資料のみ２枚重ねの状態で，裏面を背中合わせにして錆着している。

897は，熙寧元寶である。北宋皇帝６代である神宗の熙寧元（1068）年初鋳である。字体は，篆書である。

898は，元豊通寶である。神宗の元豊元（1078）年初鋳である。ただし，16世紀後半から17世紀前半にかけて本邦での模鋳銭としても大量に存在するものでもある。字体は，篆書である。「通」の部分が欠損しており，「豊」の字の最上部もわずかに残存するものである。

899は，元祐通寶である。北宋皇帝７代である哲宗の元祐元（1086）年初鋳である。字体は，篆書である。

以上の北宋銭は基本的に小平銭（一文銭）とみられる。

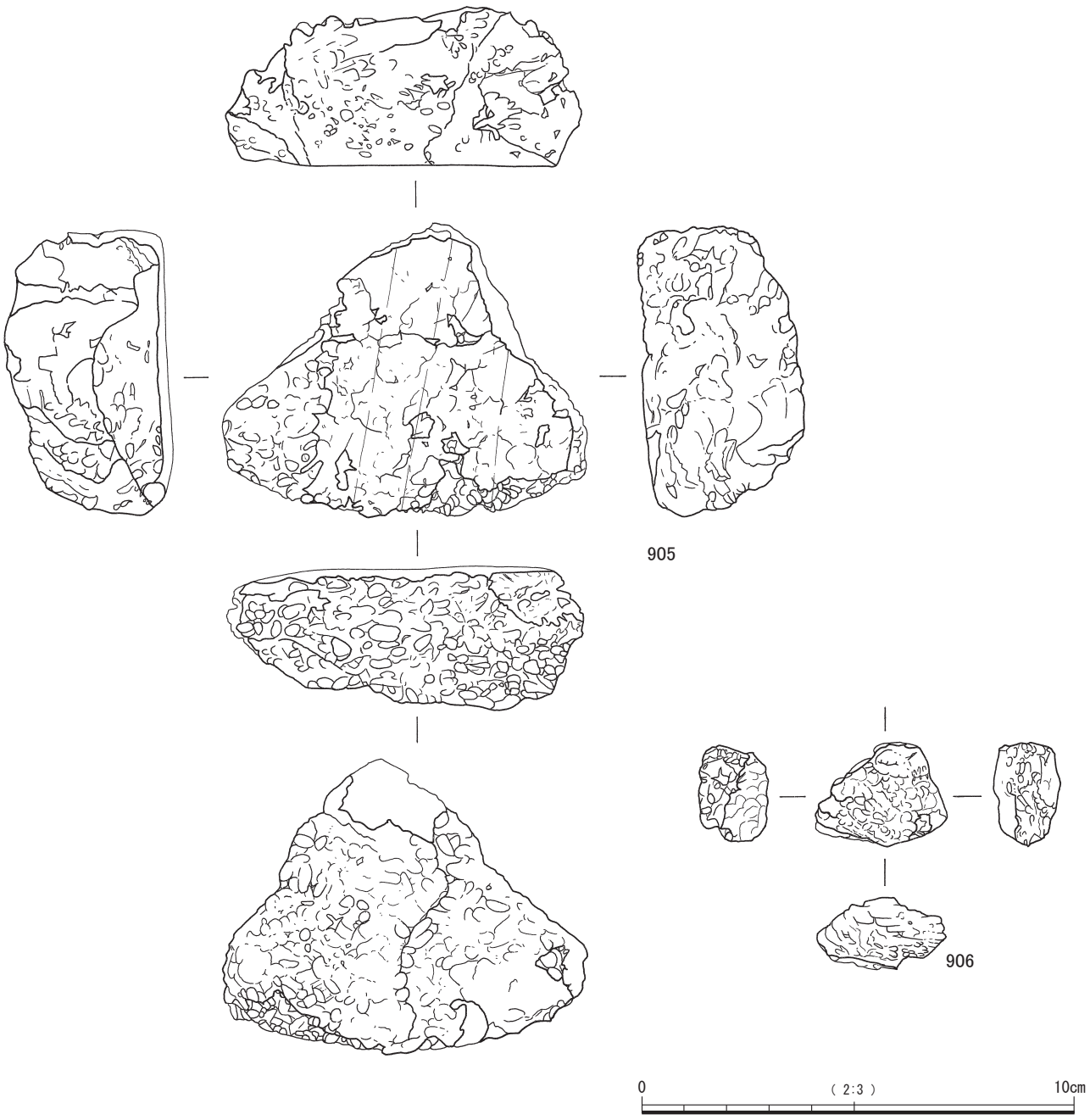
900は風化・錆化等により銭文が明瞭でないため不明なもので，模鋳銭の可能性もある。大きさから一文銭とみられる。

**鉄製品（第104図）**

901～904は鉄製品である。中世に帰属するとみられるものについてここで扱っている。




第105図　炭化ご飯塊周辺遺物出土状況




第106図　炭化ご飯塊・炭化モミ塊

901は，二等辺三角形状の鉄製品である。横長の二等辺三角形をした板状の鉄製品で，上部の尖った部分の付近に１箇所の穿孔がみられるものである。「山形」に分類される火打金とみられる。902は円盤状の鉄製品と棒状の鉄製品を組み合わせたもので，鉄製紡錘車である。

903・904については鉄製紡錘車と関係するとみられる棒状鉄製品である。これらは本来は一体であった可能性があるため，ここで取り上げている。

**その他の遺物（第106図）**

905は，Ｌ・Ｋ-32区で検出された比較的大型の炭化物である。検出時から，炭化した粒の塊であることが確認できたので，取り上げた後に分析・検討した結果，炭化ご飯塊（水を加えて煮たり蒸したりして炊いた米が炭化したもの）であることが判明している。

本資料は，６面のうち５面は破面である。残る１面については，平坦であり，筋状の痕跡がわずかながら観察されるもので，何かに押しつけられたような状況である。容器に入れられていた可能性も指摘されるが，調査時には容器そのものやその可能性のあるものは確認できなかった。

なお，本資料の検出部分の上面は焼土で覆われていた。焼土は，剥がれるように取り除くことができ，下から炭化ご飯塊・炭化桃核等を検出することができた。

906は，K-32区の柱穴８に近接して検出された炭化物塊である。取上後に，分析・検討を行った結果，炭化した稲籾の塊であることが判明している。

905・906の周辺からは，炭化した稲のほかにも，炭化した桃核・マメ類などが出土しており，第105図ではその状況を示している。

周辺には焼土域が広がっており，炭化物もそれに呼応するように分布する。土坑・竪穴建物跡なども焼土域・炭化物分布域にはあまり存在していない。

鉄滓を伴う礫集積も存在するので，何らかの活動が行われた場であることが想定される。

また，905および906そのものと，その直下や周辺で出土した炭化物について，種実同定や分析等を行っている。詳細は第Ⅴ章を参照いただきたい。

**第40表　中世遺構内出土土器等観察表（１）**

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 68 | 488 | 土師器 | 坏 | 掘立２-④ | 完形 | 15.8 | 8.0 | 3.8 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 4491・4492 | |
| | 489 | 土師器 | 小皿 | 掘立２-④ | 完形 | 9.2 | 7.2 | 1.0 | ヘラ切り | 橙 | にぶい橙 | 4583 | |
| 70 | 490 | 土師器 | 坏 | 竪穴建物跡１ | 完形 | 13.0 | 9.0 | 3.1 | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 7951 | |
| 71 | 491 | 白磁 | 椀 | 竪穴建物跡３ | 口縁部 | 15.6 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | — | |
| 73 | 492 | 土師器 | 皿 | 柱穴１ | 完形 | 8.5 | 7.7 | 1.6 | 糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | — | |
| | 493 | 白磁 | 椀 | 柱穴２ | 口縁～胴部 | 16.8 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | — | Ⅳ類，玉縁 |
| | 494 | 青磁 | 坏 | 柱穴４ | 胴～底部 | — | 8.8 | — | — | オリーブ灰 | 胎：緑灰 | 7687 | |
| | 495 | 土師器 | 皿 | 柱穴５ | 完形 | 8.0 | 6.4 | 1.2 | 糸切り | 褐灰 | にぶい黄橙 | 7423 | |
| | 496 | 土師器 | 小皿 | 柱穴６ | 底部 | — | 7.0 | — | 糸切り | 褐灰 | 灰 | 4396 | |
| | 497 | 常滑 | 甕 | 柱穴６ | 口縁～肩部 | 38.6 | — | — | ケズリ・ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 4380・4428・4431・4435 | 肩部にスタンプ文あり |
| | 498 | 常滑 | 甕 | 柱穴６ | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 黄灰 | 灰 | 4426・4430・4432・4433・4372・4377 | |
| | 499 | 常滑 | 甕 | 柱穴６ | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 黄灰 | 浅黄 | 4381・4399・4872 | |
| 74 | 500 | 土師器 | 坏 | 柱穴８ | 胴～底部 | — | 4.0 | — | ヘラ切りか | にぶい橙 | にぶい黄橙 | 7891 | |
| | 501 | 青磁 | 椀 | 柱穴８ | 口縁～胴部 | 17.0 | — | — | — | 明オリーブ灰 | 胎：明オリーブ灰 | 7890 | |
| | 502 | 青磁 | 椀 | 柱穴９ | 口縁～胴部 | 15.6 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：明オリーブ灰 | 7980 | |
| | 503 | 土師器 | 坏 | 柱穴10 | 完形 | 15.2 | 9.8 | 3.0 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 8017 | |
| | 504 | 土師器 | 坏 | 柱穴10 | 完形 | 14.6 | 9.3 | 3.0 | ヘラ切り | 橙 | にぶい橙 | 8018・8049 | |
| | 505 | 土師器 | 坏 | 柱穴10 | 完形 | 16.2 | 10.6 | 3.4 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 7971 | |
| | 506 | 土師器 | 坏 | 柱穴10 | 完形 | 15.0 | 8.0 | 3.2 | ヘラ切り・ナデ | 橙 | 橙 | 7967 | |
| | 507 | 黒色土器 | 椀 | 柱穴10 | 底部 | — | 6.4 | — | ミガキ | にぶい黄橙 | 褐灰 | 7970 | |
| | 508 | 土師器 | 坏 | 柱穴10 | 底部 | — | 11.0 | — | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 8049 | |
| | 509 | 土師器 | 小皿 | 柱穴10 | 完形 | 9.8 | 8.2 | 1.2 | ヘラ切り | 黄橙 | 黄橙 | 8016 | |

**第41表　中世遺構内出土遺物観察表（１）**

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 74 | 510 | 銭貨 | 元豊通寶 | 柱穴12 | 2.2 | 2.2 | 0.1 | 1.5 | 7309 | |

**第42表　中世遺構内出土土器等観察表（２）**

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 74 | 511 | 土師器 | 小皿 | 柱穴13 | 完形 | 8.2 | 6.5 | 1.7 | 糸切り | にぶい橙 | にぶい橙 | — | |

**第43表　中世遺構内出土遺物観察表（２）**

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 76 | 512 | 鉄器 | 鉄製品 | 土坑６ | 2.3 | 1.1 | 0.3 | 1.0 | — | |

## 第44表　中世遺構内出土土器等観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 76 | 513 | 白磁 | 皿 | 土坑12 | 完形 | 13.8 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | — | 口禿 |
| | 514 | 土師器 | 小皿 | 土坑12 | 底部 | — | 8.0 | — | 糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | — | |
| | 515 | 土師器 | 小皿 | 土坑12 | 底部 | — | 7.4 | — | 糸切り | 淡黄 | 淡黄 | — | |
| | 516 | 輸入陶器 | 鉢 | 土坑12 | 口縁部 | — | — | — | — | 橙 | 橙 | — | |
| | 517 | 東播系須恵器 | 摺鉢 | 土坑12 | 口縁部 | 23.0 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | — | |
| | 518 | 土師器 | 小皿 | 土坑16 | 完形 | 8.6 | 7.0 | 1.4 | 糸切り | 淡黄 | 淡黄 | 7098 | |
| | 519 | 白磁 | 皿 | 土坑17 | 完形 | 9.4 | 5.2 | 2.2 | 見込部：蛇の目釉はぎ | 灰白 | 胎：灰黄 | — | |
| 77 | 520 | 土師器 | 小皿 | 土坑20 | 完形 | 8.8 | 7.4 | 1.3 | 糸切り | にぶい橙 | にぶい橙 | 2950 | |
| | 521 | 土師器 | 小皿 | 土坑20 | 完形 | 7.6 | 6.8 | 1.2 | 糸切り・ナデ | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 2945 | |
| | 522 | 土師器 | 鍋 | 土坑20 | 口縁～胴部 | 39.0 | — | — | ハケメ・ユビオサエ・ナデ | にぶい赤褐 | 明褐 | 561・689・691・2942・2943・7094・7096 | |
| 80 | 523 | 土師器 | 坏 | 礫集積1 | 胴～底部 | — | 9.4 | — | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 21 | |

## 第45表　中世遺構内出土遺物観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 80 | 524 | 鉄滓 | 椀形滓 | 礫集積1 | 9.2 | 8.1 | 36.4 | 252.0 | — | レキ集中No.22 |
| | 525 | 鉄滓 | 椀形滓 | 礫集積1 | 3.9 | 3.2 | 1.7 | 16.0 | 一括 | 礫集中 |

## 第46表　中世遺構内出土土器等観察表（4）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 80 | 526 | 土師器 | 坏 | 礫集積2 | 胴～底部 | — | 8.0 | 3.0 | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 19 | |
| | 527 | 滑石製品 | 石鍋 | 礫集積2 | 口縁部 | 22.0 | — | — | ケズリ | 黒褐 | 黒褐 | 20 | 重量：110.5ｇ |
| | 528 | 土師器 | 坏 | 礫集積3 | 完形 | 12.8 | 8.7 | 2.2 | 糸切り | にぶい黄橙 | 灰黄 | 27 | |
| | 529 | 土師器 | 皿 | 礫集積3 | 胴～底部 | — | 7.7 | — | 糸切り | にぶい黄橙 | 灰白 | 33 | |
| | 530 | 須恵器 | カメ | 礫集積3 | 胴部 | — | — | — | ハケメ・ユビオサエ・格子目タタキ | 黄灰 | 灰 | 26 | |
| | 531 | 須恵器 | カメ | 礫集積3 | 胴部 | — | — | — | ハケメ・ユビオサエ・平行タタキ | 黄灰 | 灰白 | 24 | |
| | 532 | 須恵器 | カメ | 礫集積3 | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・ナデ・ケズリ・ユビオサエ | 黄灰 | にぶい黄橙 | 22 | |
| | 533 | 須恵器 | カメ | 礫集積3 | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ハケメ | 黄灰 | にぶい黄橙 | 15 | |
| | 534 | 常滑 | 甕 | 礫集積3 | 底～胴部 | — | 17.4 | — | ヘラケズリ・ナデ・ユビオサエ | 黄灰 | 灰 | 16・853・875 | |

## 第47表　中世遺構内出土遺物観察表（4）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 80 | 535 | 鉄滓 | 椀形滓 | 礫集積3 | 5.4 | 5.1 | 3.6 | 56.5 | — | レキ集中4号 |
| 81 | 536 | 石器 | 磨敲石 | 礫集積4 | 13.9 | 7.4 | 4.6 | 612.0 | SS５－５ | 石槌か |
| | 537 | 石製品 | 砥石 | 礫集積4 | 8.9 | 3.9 | 8.5 | 590.5 | 6843 | |

## 第48表　中世遺構内出土土器等観察表（5）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 82 | 538 | 土師器 | 皿 | 溝状遺構5 | 完形 | 14.0 | 10.6 | 3.0 | ヘラケズリ | 橙 | 橙 | 4497 | |
| | 539 | 土師器 | 皿 | 溝状遺構5 | 完形 | 14.0 | 8.4 | 3.3 | 糸切 | 橙 | 橙 | 4501 | 口縁端をケズって平坦にしている |
| | 540 | 輸入陶器 | 壺 | 溝状遺構6 | 胴部 | — | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰 | 4471 | |
| | 541 | 笹貫式 | 甕 | 溝状遺構6 | 底部 | — | 9.4 | — | ケズリ・ナデ | 橙 | にぶい黄橙 | 4467 | 木葉底 |
| 83 | 542 | 常滑 | 甕 | 溝状遺構7 | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 灰黄褐 | 褐灰 | 23 | |
| | 543 | 輸入陶器 | 鉢か | 溝状遺構7 | 胴部 | — | — | — | — | 灰白 | 橙 | 10 | |
| | 544 | 東播系須恵器 | 鉢 | 溝状遺構7 | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 黄灰 | 灰白 | 28 | 東海系の可能性あり |

## 第49表　中世遺構内出土遺物観察表（5）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 83 | 545 | 鉄滓 | 椀形滓 | 溝状遺構7 | 3.0 | 1.7 | 4.3 | 63.0 | — | メタル分多い |
| | 546 | 銅塊 | — | 溝状遺構7 | 3.5 | 2.0 | 0.8 | 13.5 | — | |
| | 547 | 鉄製品 | 釘か | 溝状遺構7 | 2.0 | 0.9 | 0.3 | 1.5 | — | |

## 第50表　中世遺構内出土土器等観察表（6）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 83 | 548 | 輸入陶器 | 黄釉盤 | 溝状遺構8 | 胴部 | — | — | — | — | 浅黄 | 胎：褐灰 | — | |
| | 549 | 白磁 | 皿 | 溝状遺構8 | 口縁部 | 10.2 | — | — | — | 灰黄 | 胎：灰白 | — | |

## 第51表　中世遺構内出土遺物観察表（6）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 83 | 550 | 鉄製品 | 不明鉄製品 | 溝状遺構8 | 2.0 | 0.8 | 1.7 | 9.0 | — | 鉤状 |

## 第52表　中世遺構内出土土器等観察表（7）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 84 | 551 | 土師器 | 坏 | 土器出土状況1 | 完形 | 15.9 | 9.5 | 3.5 | ヘラ切り | 橙 | にぶい橙 | 4078 | 552と合口で出土 |
| | 552 | 土師器 | 坏 | 土器出土状況1 | 完形 | 16.0 | 9.6 | 3.2 | ヘラ切り | にぶい橙 | にぶい橙 | 4079 | 551と合口で出土 |
| | 553 | 土師器 | 皿 | 土器出土状況2 | 完形 | 10.0 | 8.0 | 1.5 | ヘラ切り | 浅黄橙 | 橙 | 6669 | 554と重なって出土 |
| | 554 | 土師器 | 皿 | 土器出土状況2 | 完形 | 10.5 | 7.7 | 1.4 | 糸切り | にぶい橙 | 橙 | 6670 | 553と重なって出土 |
| | 555 | 土師器 | 皿 | 土器出土状況2 | 完形 | 9.0 | 8.4 | 1.0 | ヘラ切り | にぶい橙 | にぶい黄橙 | 6672 | |
| | 556 | 白磁 | 碗 | 土器出土状況2 | 底部 | — | 8.2 | — | — | 浅黄橙 | 胎：灰白 | 6671 | |

## 第53表　中世遺構内出土遺物観察表（7）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名・出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 84 | 557 | 石製品 | 砥石 | 土器出土状況2 | Ⅱb | 7.8 | 2.0 | 1.1 | 31.08 | 6679 | 直立した状態で検出 |

## 第54表　中世土器等観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 85 | 558 | 土師器 | 坏 | L-32 | Ⅱa | 口縁～底部 | 15.8 | 10.8 | 3.7 | ナデ，ヘラ切り | 灰白～灰黄 | 浅黄橙～にぶい黄褐 | 7303 | |
| | 559 | 土師器 | 坏 | L-32 | Ⅱb | 完形 | 15.8 | 11.4 | 3.4 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 7307 | |
| | 560 | 土師器 | 坏 | J-31 | Ⅱa | 完形 | 15.8 | 10 | 3.2 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 759 | |
| | 561 | 土師器 | 坏 | L-29 | Ⅱa | 完形 | 14.5 | 7.2 | — | ヘラ切り | 明黄褐 | 明黄褐 | 1280 | |
| | 562 | 土師器 | 坏 | L-26 | Ⅱa | 口縁～底部 | 14.2 | 8.6 | 3.3 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 一括 | |
| | 563 | 土師器 | 坏 | L-28 | Ⅱa | 胴部～底部 | — | 9.6 | — | ナデ，ヘラ切り | 橙 | 橙 | 428 | |
| | 564 | 土師器 | 坏 | L-38 | Ⅱa | 口縁～底部 | — | 8.8 | — | ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 4337 | |
| | 565 | 土師器 | 坏 | K-34 | Ⅱb | 口縁～底部 | — | 9.2 | 3.58 | ヘラ切り | 橙 | 黄橙 | 4572 | |
| | 566 | 土師器 | 坏 | J-27 | Ⅱa | 完形 | 14.4 | 8.4 | 3.4 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 5152 | |
| | 567 | 土師器 | 坏 | I-26 | Ⅱa | 完形 | 13.8 | 9.8 | 3.4 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 6042 | |
| | 568 | 土師器 | 坏 | L-34 | Ⅱa | 口縁～底部 | — | 9 | — | ヘラ切り | 橙 | にぶい橙 | 一括 | |
| | 569 | 土師器 | 坏 | K-27 | Ⅰb | 完形 | 14 | 10.4 | 2.8 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 570 | 土師器 | 坏 | K-35 | Ⅱa | 完形 | 12.4 | 9 | 3.3 | ナデ，ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 628 | |
| | 571 | 土師器 | 坏 | I-26 | Ⅱa | 底部 | — | 9.8 | — | ヘラ切り | 灰黄褐 | 灰褐～にぶい橙 | 6146 | |
| | 572 | 土師器 | 坏 | L-30 | Ⅱa | 底部 | — | 9 | — | ヘラ切り | 橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| 86 | 573 | 土師器 | 坏 | L-34 | Ⅱa | 底部 | — | 6.8 | 3.05 | ナデ，糸切り | 淡黄 | 淡黄 | 4358 | |
| | 574 | 土師器 | 坏 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 11.7 | 7.4 | 3.2 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 319 | |
| | 575 | 土師器 | 坏 | K-37 | Ⅰ | 完形 | 11.85 | 7.25 | 3.5 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | 外面にユビオサエあり |
| | 576 | 土師器 | 坏 | K-35 | Ⅱa | 完形 | 11.9 | 8.2 | 3.9 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 611 | |
| | 577 | 土師器 | 坏 | L-33 | Ⅱb | 完形 | — | 4.5 | 2.85 | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 7723 | |
| | 578 | 土師器 | 坏 | K-35 | Ⅱa | 口縁～底部 | 12.4 | 8.8 | 3 | ナデ，糸切り | 浅黄橙～灰白 | 浅黄橙～灰白 | 一括 | |
| | 579 | 土師器 | 坏 | J-32 | Ⅰ | 完形 | 11 | — | 2.95 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| 87 | 580 | 土師器 | 小皿 | I-25 | Ⅱa | 完形 | 9.4 | 7.5 | 1.1 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 641 | |
| | 581 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱa | 完形 | — | 7.8 | 1.2 | ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 651 | |
| | 582 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱb | 口縁～底部 | — | 8 | 1.1 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 6166 | |
| | 583 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱa | 完形 | — | 8 | 1.25 | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 6052 | |
| | 584 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱa | 完形 | 9.8 | — | 1.25 | ヘラ切り | 小麦色憲房 | 小麦色憲房 | — | |
| | 585 | 土師器 | 小皿 | L-30 | Ⅱb | 完形 | 10.2 | — | 1.5 | ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 6820 | |
| | 586 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱa | 完形 | 9.6 | 7.5 | 1.4 | ナデ，ヘラ切り | にぶい黄橙 | 浅黄橙 | 6054 | |
| | 587 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱb | 完形 | — | 8.2 | 1.5 | ナデ，ヘラ切り | 浅黄橙 | にぶい橙 | 6799 | |
| | 588 | 土師器 | 小皿 | J-26 | Ⅱa | 完形 | — | 7 | — | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 一括 | |
| | 589 | 土師器 | 小皿 | K-35 | Ⅱa | 完形 | — | 7 | 1.2 | ナデ，ヘラ切り | 橙 | 橙 | 158 | |
| | 590 | 土師器 | 小皿 | K-35 | Ⅱa | 完形 | — | 7.5 | 1.3 | ナデ，ヘラ切り | 橙～明褐 | 橙～明褐 | 159 | |

## 第55表　中世土器等観察表（2）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 87 | 591 | 土師器 | 小皿 | L-31 | Ⅱa | 底部 | — | 7 | 1.4 | ヘラ切り | 黄橙 | 黄橙 | 1800 | |
| | 592 | 土師器 | 小皿 | K-35 | Ⅱa | 完形 | 8.6 | 6.6 | 1.5 | ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 150 | |
| | 593 | 土師器 | 小皿 | K-31 | Ⅱa | 完形 | — | 7.8 | — | ヘラ切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 1389 | |
| | 594 | 土師器 | 小皿 | I-26 | Ⅱb | 口縁～底部 | 8 | 7.2 | 0.8 | ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 6536 | |
| | 595 | 土師器 | 小皿 | K-27 | Ⅱb | 口縁～底部 | — | 6.8 | 1.05 | ヘラ切り | 橙～にぶい橙 | 橙～にぶい黄橙 | 6551 | |
| | 596 | 土師器 | 小皿 | K-37 | Ⅰ | 完形 | 8.4 | 7.2 | 1.5 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| | 597 | 土師器 | 小皿 | K-35 | Ⅱa | 完形 | 8.7 | 6.5 | 1.7 | 糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 152 | |
| | 598 | 土師器 | 小皿 | K-31 | Ⅱa | 完形 | 8.5 | 7.5 | 1.5 | 糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 535 | |
| | 599 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 8 | 7.4 | 1.4 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 264 | |
| | 600 | 土師器 | 小皿 | K-37 | Ⅰ | 完形 | 8.2 | 6.4 | 1.65 | 糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 601 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅰ | 完形 | 8.3 | 7.3 | 1.4 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| | 602 | 土師器 | 小皿 | J-31 | Ⅱa | 完形 | 8.6 | 7.4 | 1.35 | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 690 | |
| | 603 | 土師器 | 小皿 | K-30 | Ⅱa | 口縁～底部 | 8 | 7 | 1.3 | ナデ，糸切り | にぶい褐 | 褐灰 | 371 | |
| | 604 | 土師器 | 小皿 | JK-34 | Ⅱa | 完形 | — | 5.8 | 1.7 | 糸切り | 灰白～灰黄 | 灰黄～浅黄 | — | |
| | 605 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 8.2 | 6.4 | 1.6 | ナデ，糸切り | 淡黄～灰白 | 淡黄～灰白 | 331 | |
| | 606 | 土師器 | 小皿 | K-36 | Ⅱa | 完形 | — | 7.2 | 1.8 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 723 | |
| | 607 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 8.4 | — | 1.9 | 糸切り | にぶい橙 | にぶい橙 | 314 | |
| | 608 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 7.5 | 6 | 1.3 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 797 | |
| | 609 | 土師器 | 小皿 | L-32 | Ⅱa | 完形 | 7.7 | 3.2 | 1.3 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 1660 | |
| | 610 | 土師器 | 小皿 | K-32 | Ⅰ | 完形 | 7.5 | 6.3 | 1.05 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| 88 | 611 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-32 | Ⅱa | 口縁～底部 | 9.45 | 7.6 | 4.3 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 7305 | |
| | 612 | 土師器 | 柱状高台皿 | L-35 | Ⅱa | 口縁～底部 | — | 8.8 | 4.2 | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 138 | |
| | 613 | 土師器 | 柱状高台皿 | L-35 | Ⅱa | 完形 | — | 9 | 4.3 | ナデ、糸切り | 淡黄色 | 淡黄色 | 3968 | |
| | 614 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-31 | Ⅰ | 口縁～底部 | — | 8.8 | 4.5 | ナデ、糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 2028 | |
| | 615 | 土師器 | 柱状高台皿 | L-33 | Ⅱa | 底部 | — | — | 3.8 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| | 616 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 6.2 | — | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 291 | |
| | 617 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | 7.8 | — | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 一括 | |
| | 618 | 土師器 | 柱状高台皿 | L-35 | Ⅰ | 底部 | — | 6.8 | 4.4 | ナデ，糸切り | 浅黄橙～灰白 | — | 3937 | |
| | 619 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-34 | Ⅱa | 底部 | — | 8 | — | ナデ，糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| | 620 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | 7.4 | 4.4 | ナデ，糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 4813 | |
| | 621 | 土師器 | 柱状高台皿 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 10.4 | — | ナデ，糸切り | 浅黄 | 浅黄 | 225 | |
| | 622 | 土師器 | 耳皿 | L-37 | Ⅱa | 口縁～底部 | 13.6 | 10.2 | 2.3 | ナデ・糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 3713 | |
| | 623 | 土師器 | 耳皿 | I-26 | Ⅱa | 口縁～底部 | 8 | 6.8 | 1.4 | ナデ・ヘラ切り | 橙 | 橙 | 5497 | |
| | 624 | 土師器 | 耳皿 | I-26 | Ⅱb | 口縁～底部 | 10.6 | — | 1.7 | ナデ | 灰褐 | 橙 | 6164 | |
| | 625 | 土師器 | 耳皿か | K-31 | Ⅱb | 口縁～底部 | — | 8 | 1.3 | ナデ・糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 7328 | 変形した小皿の可能性あり |
| | 626 | 楠葉型瓦器 | 椀 | K-30 | Ⅰ | 口縁部 | 12.0 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | — | |
| | 627 | 楠葉型瓦器 | 椀 | L-34 | — | 口縁部 | 14.6 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 628 | 楠葉型瓦器 | 椀 | K-32 | Ⅱb | 口縁部 | 13.0 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | 7752 | |
| | 629 | 楠葉型瓦器 | 椀 | L-30 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 13.4 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | 7262 | 風化で不明確な部分あり |
| | 630 | 楠葉型瓦器 | 椀 | J-32 | Ⅰ | 口縁部 | 14.8 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 631 | 楠葉型瓦器 | 椀 | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | 16.0 | — | — | ミガキ・ナデ | 灰 | 灰 | 1819 | |
| | 632 | 楠葉型瓦器 | 椀 | L-33 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 633 | 楠葉型瓦器 | 椀 | L-30 | — | 口縁部 | 14.2 | — | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 634 | 楠葉型瓦器 | 椀 | K・L-28 | Ⅰ | 底部 | — | 6.0 | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 灰黄 | 黄灰 | 一括 | |
| | 635 | 楠葉型瓦器 | 椀 | J-32，33 | Ⅰ | 底部 | — | 4.0 | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 黒褐 | 黒褐 | 一括 | |
| | 636 | 楠葉型瓦器 | 皿 | L-30 | Ⅱa | 口縁～底部 | — | 6.4 | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 黒褐 | 褐灰 | 398 | |
| | 637 | 和泉型瓦器 | 椀 | K-33 | Ⅱa | 口縁部 | 17.2 | — | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 灰 | 灰 | — | |
| | 638 | 和泉型瓦器 | 皿 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 8.4 | — | — | ミガキ，ナデ，ユビオサエ | 褐灰 | 黒 | 1634 | |

## 第56表　中世土器等観察表（3）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 88 | 639 | 和泉型瓦器 | 椀 | L-32 | I | 底部 | — | 4.8 | — | ミガキ, ナデ, ユビオサエ | 褐灰色 | 褐灰色 | 一括 | |
| | 640 | 瓦器 | 椀 | K-26 | I | 口縁部 | 12.2 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | 29T |
| | 641 | 瓦器 | 小型釜か | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 11.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰白 | 一括 | 楠葉と類似・特殊容器か |
| | 642 | 瓦器 | 小型釜か | J・K-32 | I | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 灰 | 灰白 | 一括 | 楠葉と類似・特殊容器か |
| 89 | 643 | 瓦質土器 | 羽釜 | K-30 | Ⅱa | 口縁部 | 23.8 | — | — | ナデ・ハケメ | 灰白 | 灰黄 | 1071 | |
| | 644 | 瓦質土器 | 羽釜 | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | 32.2 | — | — | ナデ・ハケメ | 灰 | 灰 | 3665 | 楠葉野田に類似資料あり |
| | 645 | 瓦質土器 | 羽釜 | L-30 | I | 口縁部 | 33.0 | — | — | ナデ・ハケメ | 黄灰 | 浅黄 | 一括 | |
| | 646 | 瓦質土器 | 羽釜 | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 24.0 | — | — | ナデ・ハケメ | 灰白 | 灰白 | 1519・1561 | |
| | 647 | 瓦質土器 | 羽釜 | J-26 | I | 羽釜の羽 | — | — | — | ナデ・ハケメ | 黒褐 | にぶい黄褐 | 一括 | |
| | 648 | 瓦質土器 | 鍋 | I-27 | Ⅱb | 口縁～胴部 | — | — | — | ナデ・ハケメ | 赤黒 | 極暗赤褐 | 3489・5688・5729・5751・5752・5771 | |
| | 649 | 瓦質土器 | 鍋 | L-33 | カクラン | 口縁部 | — | — | — | ナデ・ハケメ | 灰赤 | 黒褐 | 一括 | |
| | 650 | 瓦質土器 | 鍋 | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ナデ・ハケメ | 黒褐 | 灰黄褐 | 2290 | |
| | 651 | 瓦質土器 | 鍋 | L-32 | — | 口縁部 | — | — | — | ナデ, ケズリ, ユビオサエ | 黒 | 橙 | 1617 | |
| | 652 | 瓦質土器 | 鍋 | J-27 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ナデ, ケズリ, ユビオサエ | にぶい黄褐 | にぶい黄褐 | 5028 | |
| | 653 | 瓦質土器 | 鍋 | K-27 | Ⅱb | 口縁部 | — | — | — | ナデ, ケズリ, ユビオサエ | 黒褐 | 灰黄褐 | 6554 | |
| | 654 | 瓦質土器 | 鍋 | K-31 | I | 口縁～胴部 | 32.0 | — | — | ナデ, ケズリ, ユビオサエ | 灰黄褐 | にぶい黄橙 | 一括 | 27T |
| | 655 | 瓦質土器 | 鍋 | K-32 | I | 口縁～胴部 | 22.0 | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 黒褐 | 黒褐 | 一括 | |
| | 656 | 瓦質土器 | 鍋 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 29.0 | — | — | ハケメ, ユビオサエ | にぶい黄橙 | 黒褐 | 1107 | |
| | 657 | 瓦質土器 | 鍋 | K-31 | Ⅱa | 口縁～胴部 | — | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 暗褐色 | 赤灰 | 1415 | |
| | 658 | 瓦質土器 | 鍋 | J-31 | Ⅱb | 口縁部 | — | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 明赤褐 | にぶい橙 | 7003 | |
| | 659 | 瓦質土器 | 鍋 | L-33 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 明褐 | 明褐 | 392 | |
| | 660 | 瓦質土器 | 鍋 | L-33 | Ⅱb | 口縁部 | — | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 橙 | 橙 | 7773 | |
| | 661 | 瓦質土器 | 焙烙か | L-35 | I | 口縁部 | 23.0 | — | — | ハケメ, ユビオサエ | 黒褐 | にぶい橙 | — | |
| | 662 | 瓦質土器 | 焙烙か | J・K-33 | — | 底部 | — | 14.2 | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| | 663 | 瓦質土器 | 焙烙か | L-31 | Ⅱb | 完形 | 16.4 | 11.0 | 5.1 | ナデ | にぶい橙 | 橙 | 3019・7005・7010 | |
| | 664 | 瓦質土器 | 焙烙か | L-34 | I | 底部 | — | 7.8 | — | ナデ | にぶい橙 | 灰黄 | — | |
| | 665 | 瓦質土器 | 焙烙か | K-31 | Ⅱa | 底部 | — | 8.0 | — | ナデ | 灰黄 | 浅黄 | 1380 | |
| | 666 | 瓦質土器 | 鉢か | I-27 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 褐灰 | 胎：灰黄 | 4832 | 内面剥離 |
| | 667 | 瓦質土器 | 鉢か | I-24 | I | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | スタンプ文 |
| 90 | 668 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | I | 口縁部 | 28.8 | — | — | ナデ | 灰黄 | 灰黄 | 一括 | |
| | 669 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | 31.6 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 345 | 口唇部に自然釉付着が認められる |
| | 670 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-34 | Ⅱa | 口縁部 | 30.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 619 | |
| | 671 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-28 | Ⅱa | 口縁部 | 30.0 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 1680 | |
| | 672 | 東播系須恵器 | 鉢 | J・K-34 | I | 口縁部 | 28.4 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | — | |
| | 673 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-32 | Ⅱb | 口縁部 | 29.2 | — | — | ナデ | 灰黄 | 灰黄 | 8022 | |
| | 674 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-31 | — | 口縁部 | 28.0 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| | 675 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-34 | — | 口縁部 | 28.6 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| | 676 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | Ⅱa | 胴～底部 | — | 15.0 | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 144 | |
| | 677 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-31 | I | 口縁部 | 17.4 | — | — | ナデ | 灰 | 黄灰 | — | |
| | 678 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-34 | — | 胴～底部 | — | 8.8 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 679 | 東播系須恵器 | 鉢 | L－32 | Ⅱb | 底部 | — | 8.0 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 7855 | |
| | 680 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | I | 胴～底部 | — | 14.2 | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| 91 | 681 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-28 | Ⅱb | 口縁部 | 28.0 | — | — | ナデ | 灰黄 | 灰黄 | 5004・6568・6809・6810 | |
| | 682 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 37.8 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 4293 | |
| | 683 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-31 | I | 口縁部 | 39.0 | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | — | |
| | 684 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-31 | Ⅱa | 口縁部 | 27.4 | — | — | ナデ | 黒褐 | 黒褐 | 692・758・2435 | |
| | 685 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-30 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| | 686 | 東播系須恵器 | 鉢 | I-27 | Ⅱa | 口縁部 | 28.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰白 | 5188 | |

## 第57表　中世土器等観察表（4）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| | 687 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-28 | Ⅱa | 口縁部 | 32.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 688 | 東播系須恵器 | 鉢 | K・L-31 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 529・一括 | |
| | 689 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 30.6 | — | — | ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 4258 | |
| | 690 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-36 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 28.4 | — | — | ナデ | にぶい黄橙 | 灰黄 | 716 | 内面は風化 |
| | 691 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 23.6 | — | — | ナデ | にぶい黄橙 | 灰黄褐 | 3375 | |
| 91 | 692 | 東播系須恵器 | 鉢 | J・K-34 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | ナデ | にぶい橙 | にぶい橙 | 一括 | |
| | 693 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-31 | Ⅱa | 口縁部 | 27.6 | — | — | ハケメ，ナデ | 明黄褐 | 橙 | 一括 | |
| | 694 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-31 | Ⅱ | 口縁部 | 16.4 | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | |
| | 695 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-30 | Ⅱa | 口縁部 | 21.8 | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | |
| | 696 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-35 | Ⅱa | 口縁部 | 22.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 571 | 古墳須恵器に類似するが，胎土や焼きの状態から東播とした |
| | 697 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 698 | 東播系須恵器 | 椀 | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 18.4 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 699 | 東播系須恵器 | 鉢 | L-33 | — | 口縁部 | 20.0 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 一括 | |
| | 700 | 東播系須恵器 | 鉢 | J-32 | Ⅱa | 口縁部 | 21.4 | — | — | ナデ | 黄灰 | 黄灰 | 699 | |
| | 701 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-31 | Ⅰ | 口縁部 | 29.0 | — | — | ナデ | 灰黄 | 灰黄 | 一括 | 27T |
| 92 | 702 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-28 | Ⅱa | 胴～底部 | — | 19.2 | — | ナデ | 灰 | 灰 | 4891 | 椀の可能性あり |
| | 703 | 常滑 | 片口鉢 | K-31 | — | 口縁部 | 35.0 | — | — | ナデ | 灰 | 灰 | 2472 | |
| | 704 | 東播系須恵器 | 鉢 | K-32 | Ⅱa | 底部 | — | 6.0 | — | ナデ | 灰 | 灰白 | 303 | |
| | 705 | 備前 | 摺鉢 | J-34・35 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | ナデ・カキメ | 灰 | 黒褐 | 一括 | |
| | 706 | 備前 | 摺鉢 | L-31 | Ⅱa | 底部 | — | 7.2 | — | ナデ・カキメ | 褐灰 | 褐灰 | 279 | |
| | 707 | 中世須恵器 | 甕 | J・K-34 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | 格子目タタキ・ハケメ | 黄灰 | 褐灰 | — | |
| | 708 | 中世須恵器 | 甕 | J・K-34 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・ハケメ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 709 | 中世須恵器 | 甕 | K-31 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・ハケメ | 灰 | 灰 | 一括 | 27T |
| | 710 | 中世須恵器 | 甕 | K-31 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・ハケメ | 灰 | 灰 | 一括 | 27T |
| | 711 | 中世須恵器 | 甕 | K-35 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ・ハケメ | 黄灰 | 灰 | 143 | |
| | 712 | 中世須恵器 | 甕 | J-30・31 | Ⅰ | 頸部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 灰 | 灰黄 | — | |
| | 713 | 中世須恵器 | 甕 | K-35 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 黄灰 | 灰黄 | 4239 | |
| | 714 | 中世須恵器 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 黒褐 | にぶい黄橙 | 548 | |
| | 715 | 中世須恵器 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 黒褐 | 黄灰 | 550 | |
| | 716 | 中世須恵器 | 甕 | L-35 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 暗黄灰 | 灰黄 | 137 | |
| 93 | 717 | 中世須恵器 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 頸部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 黒褐 | 黄灰 | 871 | |
| | 718 | 中世須恵器 | 甕 | K-30 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 黒褐 | 橙 | 1329 | |
| | 719 | 中世須恵器 | 甕 | K-28 | — | 頸部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 浅黄 | 浅黄 | 一括 | |
| | 720 | 中世須恵器 | 甕 | I-28 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | 浅黄 | 灰黄 | 一括 | |
| | 721 | 中世須恵器 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 302 | |
| | 722 | 中世須恵器 | 甕 | L-33 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | 平行タタキ・ナデ<br>同心円当て具痕 | 黄灰 | 黒褐 | 3594 | |
| | 723 | 中世須恵器 | 甕か | J-30 | Ⅱa | 底部 | — | 7.2 | — | ナデ | 黄灰 | 灰 | 503 | 底面に竹管状のスタンプあり，指紋とみられる痕跡もある |
| | 724 | 須恵器 | 鉢か | L-32 | Ⅱa | 底部 | — | — | — | ナデ | 黄灰 | 灰 | 1601 | |
| | 725 | カムィヤキ | 鉢か | L-34 | Ⅱa | 口唇部 | — | — | — | ナデ・ユビオサエ | 灰 | 灰 | 3235 | |
| | 726 | カムィヤキ | 鉢か | I-27 | Ⅱ | 胴部 | — | — | — | ナデ・ユビオサエ | オリーブ黒 | 灰 | 一括 | |
| | 727 | カムィヤキ | 鉢か | K-34 | — | 胴部 | — | — | — | ナデ・ユビオサエ | 灰 | 灰 | 一括 | |
| | 728 | 常滑 | 甕 | — | Ⅰ | 口縁部 | 38.0 | — | — | ケズリ・ナデ | オリーブ | 胎：灰 | — | |
| | 729 | 常滑 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 31.6 | — | — | ケズリ・ナデ | 灰白 | 胎：灰 | 317 | |
| | 730 | 常滑 | 甕 | J・K-33 | — | 口縁部 | 19.0 | — | — | ケズリ・ナデ | にぶい褐 | 胎：褐灰 | 一括 | |
| 94 | 731 | 常滑 | 甕 | J-34 | Ⅰ | 口縁部 | 24.0 | — | — | ケズリ・ナデ | 灰褐 | 胎：褐灰 | 一括 | |
| | 732 | 常滑 | 甕 | K-34 | Ⅱa | 口縁部 | 23.4 | — | — | ケズリ・ナデ | 橙 | 橙 | 3347 | |
| | 733 | 常滑 | 甕 | J・K-34 | Ⅰ | 口縁部 | 21.0 | — | — | ケズリ・ナデ | 暗褐 | 胎：褐灰 | 一括 | |
| | 734 | 常滑 | 甕 | J-30 | Ⅰ | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 灰褐 | 灰褐 | 一括 | |

## 第58表　中世土器等観察表(5)

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 94 | 735 | 常滑 | 広口壺 | J･K-33 | — | 口縁部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 褐 | 胎：褐灰 | 一括 | 別名　不識壺 |
| | 736 | 常滑 | 甕 | K-31 | Ⅰ | 頸部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | にぶい褐 | にぶい褐 | — | 27T |
| | 737 | 常滑 | 甕 | L-35 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | オリーブ | 胎：灰 | 3935 | |
| | 738 | 常滑 | 甕 | K-35 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 灰オリーブ | 胎：灰 | 一括 | |
| | 739 | 常滑 | 甕 | K-32 | Ⅱa | 胴(肩？)部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 灰 | 灰 | 878･4406 | |
| | 740 | 常滑 | 甕 | K-35 | Ⅱa上 | 肩部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | 褐 | 胎：にぶい褐 | 610 | |
| | 741 | 常滑 | 甕 | J-34 | — | 頸部 | — | — | — | ケズリ・ナデ | オリーブ黄 | 胎：灰 | 3406 | |
| | 742 | 常滑 | 甕 | K-32 | Ⅱa上 | 底部 | — | 16.6 | — | ケズリ・ナデ | 黒褐色 | 黒褐色 | 547 | |
| | 743 | 常滑 | 甕 | L-35 | Ⅰ | 底部 | — | 10.6 | — | ケズリ・ナデ | 赤褐色 | にぶい黄色 | 一括 | |
| | 744 | 常滑 | 甕 | K-31 | Ⅱa上 | 胴～底部 | — | 16.0 | — | ケズリ・ナデ | にぶい褐 | 胎：橙 | 313 | |
| | 745 | 常滑 | 甕 | K-34 | Ⅱa上 | 胴～底部 | — | 12.6 | — | ケズリ・ナデ | 灰褐 | 胎：灰褐 | 618 | |
| | 746 | 備前 | 甕 | L-30 | Ⅰ | 口縁部 | 14.0 | — | — | ケズリ・ナデ | 黒褐 | 胎：褐灰 | 一括 | |
| 95 | 747 | 白磁 | 碗 | J-27 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 5034･5506 | |
| | 748 | 白磁 | 碗 | I-26 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 14.8 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 5508 | |
| | 749 | 白磁 | 碗 | K-31 | Ⅱa | 口縁部 | 17.2 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 2364 | |
| | 750 | 白磁 | 碗 | I-27 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 17.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 727 | |
| | 751 | 白磁 | 碗 | J･K-31 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 16.7 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 752 | 白磁 | 碗 | I-27 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 13.9 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 6385 | |
| | 753 | 白磁 | 碗 | J-28 | Ⅱb | 口縁部 | 13.4 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 5658 | |
| | 754 | 白磁 | 碗 | K-31 | Ⅱa | 底部 | — | 6.4 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 539 | |
| | 755 | 白磁 | 碗 | L-33 | — | 底部 | — | 7.0 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 756 | 白磁 | 碗 | J-31 | Ⅱb | 底部 | — | 6.7 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 7276 | |
| | 757 | 白磁 | 碗 | L-30 | Ⅱa | 底部 | — | 6.0 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 404 | |
| | 758 | 白磁 | 碗 | I-26 | Ⅱb | 胴～底部 | — | 4.0 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 6800 | |
| | 759 | 白磁 | 碗 | L-29 | Ⅱa | 底部 | — | 2.9 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 896 | |
| | 760 | 白磁 | 碗 | K-35 | Ⅰ | 底部 | — | 6.0 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 761 | 白磁 | 碗 | L-34 | Ⅱa | 底部 | — | 5.8 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 191 | |
| | 762 | 白磁 | 皿 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 16.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：黄褐 | 1857 | 口禿 |
| | 763 | 白磁 | 皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 12.6 | 8.0 | 3.0 | — | 灰白 | 胎：橙 | 1506 | 口禿 |
| | 764 | 白磁 | 皿 | J-31 | Ⅱa | 口縁部 | 12.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 6850 | 口禿 |
| | 765 | 白磁 | 皿 | K-32 | Ⅱa | 完形 | 11.4 | 7.0 | 3.4 | — | 明オリーブ灰 | 胎：灰白 | 294･8037 | 口禿 |
| | 766 | 白磁 | 皿 | K-31 | Ⅱa | 完形 | 11.9 | 7.2 | 2.8 | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | 334･350 | 口禿 |
| | 767 | 白磁 | 皿 | J-32 | Ⅱa | 完形 | 9.8 | 4.8 | 1.8 | — | 灰 | 灰 | 5387 | |
| | 768 | 白磁 | 皿 | J-26 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 12.2 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：灰 | 一括 | |
| | 769 | 白磁 | 皿 | L-36 | Ⅱb | 口縁部 | 11.2 | — | — | — | 浅黄 | 胎：灰白 | 6653 | |
| | 770 | 白磁 | 皿 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 8.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 1882 | |
| | 771 | 白磁 | 皿 | I-27 | Ⅱa | 胴～底部 | — | 3.2 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 6389 | |
| | 772 | 白磁 | 皿 | I-26 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 10.2 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 6438 | |
| | 773 | 白磁 | 皿 | J-31 | Ⅱa | 底部 | — | 6.0 | — | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | 7018 | 高台付皿 |
| | 774 | 白磁 | 皿 | I-27 | Ⅰ | 完形 | 12.2 | 9.2 | 1.8 | — | 灰白 | 胎：浅黄 | 一括 | 徳化窯か |
| | 775 | 白磁 | 皿 | K-31 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 7.7 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 776 | 白磁 | 皿 | L-31 | Ⅰ | 完形 | 9.6 | 3.3 | 2.7 | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 一括 | 朱墨（水銀朱） |
| | 777 | 白磁 | 皿 | L-32 | Ⅱa | 完形 | 9.4 | 4.4 | 2.7 | — | 淡黄 | 胎：灰白 | 275 | |
| | 778 | 白磁 | 皿 | I-27 | Ⅰ | 底部 | — | 4.0 | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰 | 一括 | 朱墨（水銀朱） |
| | 779 | 白磁 | 皿 | K-34 | Ⅰ | 底部 | — | 3.5 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | — | |
| | 780 | 白磁 | 皿 | L-31 | Ⅰc | 口縁～胴部 | 10.0 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | — | 菊皿 |
| | 781 | 青白磁 | 合子 | K-30 | Ⅱa | 上部 | — | — | — | — | 明オリーブ灰 | 胎：灰白 | 405 | フタ |
| | 782 | 青白磁 | 合子 | L-30 | Ⅱa | 完形 | 5.0 | — | 1.7 | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | 1106 | フタ |

## 第59表　中世土器等観察表（6）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 95 | 783 | 青白磁 | 合子 | L-27 | Ⅱa | 完形 | 5.2 | 4.7 | 2.4 | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | 5490 | 身 |
| | 784 | 青白磁 | 小壺 | K・L-29 | — | 口縁部 | 4.0 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | — | 梅瓶か |
| | 785 | 青花 | 皿 | K-35 | Ⅱa | 完形 | 10.6 | 7.0 | 1.9 | — | 灰 | にぶい黄橙 | 一括 | |
| 96 | 786 | 青磁 | 碗 | K-34 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 17.0 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | — | 無文 |
| | 787 | 青磁 | 碗 | K-31 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 16.2 | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰 | 672・694・808・1418・7281 | 鎬連弁 |
| | 788 | 青磁 | 碗 | L-35 | Ⅰ | 完形 | 16.0 | 5.2 | 6.2 | — | オリーブ灰 | 胎：灰 | 一括 | 鎬連弁 |
| | 789 | 青磁 | 碗 | K-31 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 14.0 | — | — | — | オリーブ | 胎：にぶい黄 | 一括 | 鎬連弁 |
| | 790 | 青磁 | 碗 | K-32 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 18.2 | — | — | — | オリーブ黄 | 灰オリーブ | 7864 | 鎬連弁 |
| | 791 | 青磁 | 碗 | L-35 | Ⅱa | 完形 | 17.4 | 5.4 | 6.3 | — | 灰白 | 胎：灰白 | 814 | 鎬連弁 |
| | 792 | 青磁 | 碗 | J-26 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 15.0 | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰オリーブ | — | 連弁 |
| | 793 | 青磁 | 碗 | L-30 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16.6 | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰 | 390 | 連弁 |
| | 794 | 青磁 | 碗 | K-35 | Ⅱb | 口縁～胴部 | 16.2 | — | — | 内面　画　花文 | 緑灰 | 胎：灰白 | 6663 | 画花 |
| | 795 | 青磁 | 碗 | J-30 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 16.0 | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰 | 一括 | 画花 |
| | 796 | 青磁 | 碗 | I-27 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 13.0 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：明オリーブ灰 | 一括 | |
| | 797 | 青磁 | 碗 | K-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 11.8 | — | — | — | 明緑灰 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 798 | 青磁 | 碗 | K-35 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 13.6 | — | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 4265 | 線連弁 |
| | 799 | 青磁 | 碗 | L-31 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 13.8 | — | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 一括 | 線連弁 |
| | 800 | 青磁 | 碗 | K-31 | Ⅱa | 底～胴部 | — | 6.6 | — | — | オリーブ黄 | 胎：灰黄 | 679 | |
| | 801 | 青磁 | 碗 | J-27 | Ⅰ | 底部 | — | 7.0 | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | — | |
| | 802 | 青磁 | 碗 | L-35 | Ⅱa | 底部 | — | 4.4 | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 632 | |
| | 803 | 青磁 | 碗 | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | 5.4 | — | — | オリーブ | 胎：灰白 | 629 | |
| | 804 | 青磁 | 碗 | L-32 | Ⅱb | 底部 | — | 5.0 | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰白 | 2026 | 草花 |
| | 805 | 青磁 | 皿 | L-31 | Ⅱb | 口縁部 | 11.2 | — | — | — | オリーブ黄 | 胎：灰白 | 7016 | |
| | 806 | 青磁 | 皿 | L-30 | Ⅱa | 完形 | 10.0 | 7.6 | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 375 | |
| | 807 | 青磁 | 坏 | K-32 | — | 口縁～胴部 | 11.4 | — | — | — | 灰オリーブ | 胎：灰 | 一括 | |
| | 808 | 青磁 | 坏 | J-28 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 12.4 | — | — | — | 緑灰 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 809 | 青磁 | 大皿 | L-32 | Ⅱa | 口縁部 | 27.6 | — | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 270 | |
| | 810 | 青磁 | 大皿 | J-27 | Ⅰ | 胴～底部 | — | 19.6 | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | — | 高台あり |
| | 811 | 青磁 | 皿 | J-27 | Ⅰ | 口縁～胴部 | 11.4 | — | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 一括 | 菊皿 |
| | 812 | 青磁 | 小型壺 | J-30 | — | 頸部 | — | — | — | — | オリーブ灰 | 胎：灰白 | 7054 | |
| | 813 | 輸入陶器 | 壺 | K-32 | Ⅱa | 口縁部 | 11.0 | — | — | — | 浅黄 | 胎：灰 | 675 | |
| | 814 | 輸入陶器 | 壺 | J-27 | Ⅰ | 胴部 | — | — | — | — | 灰 | 胎：灰 | 4763 | |
| | 815 | 輸入陶器 | 壺 | J-27 | Ⅰ | 底部 | — | 7.6 | — | — | 灰 | 胎：灰 | — | |
| | 816 | 輸入陶器 | 鉢 | K-31 | Ⅰ | 口縁部 | 22.2 | — | — | — | 灰 | 胎：灰 | 一括 | 27T |
| | 817 | 輸入陶器 | 壺 | K-32 | Ⅱa | 胴部 | — | — | — | — | 灰 | 胎：灰 | 507 | |
| | 818 | 輸入陶器 | 壺 | I-26 | Ⅱa | 底部 | — | 9.4 | — | — | 浅黄 | 胎：黄褐 | 4980 | |
| | 819 | 輸入陶器 | 天目碗 | K-31 | Ⅱa | 口縁部 | 12.4 | — | — | — | 黒 | 胎：灰 | 2350 | |
| | 820 | 輸入陶器 | 天目碗 | L-30 | Ⅱa | 胴～底部 | — | 5.0 | — | — | 黒 | 胎：灰 | 386 | |
| | 821 | 輸入陶器 | 天目碗 | I-27 | Ⅱ | 底部 | — | 3.6 | — | — | 灰 | 胎：灰 | 一括 | |

## 第60表　中世遺物観察表（1）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 822 | 土製品 | 土錘 | K-34 | Ⅱa | 6.3 | 2.7 | 2.7 | 26.5 | 181 | にぶい橙／にぶい橙 |
| | 823 | 土製品 | 土錘 | L-33 | Ⅰ | 5.5 | 3.2 | 3.2 | 40.5 | — | 灰白／灰白 |
| | 824 | 土製品 | 土錘 | J-31 | Ⅱa | 7.4 | 2.7 | 2.7 | 39.5 | 2516 | 淡黄／淡黄 |
| | 825 | 土製品 | 土錘 | J-27 | Ⅱa | 7.3 | 2.5 | 2.6 | 38.0 | 5130 | にぶい黄／にぶい黄 |
| | 826 | 土製品 | 土錘 | K-28 | Ⅱa | 4.7 | 1.5 | 1.5 | 8.5 | 4877 | 橙／橙 |
| | 827 | 土製品 | 土錘 | J-30 | Ⅱa | 4.9 | 1.1 | 1.1 | 4.5 | 1751 | 灰／灰 |

## 第61表　中世遺物観察表（2）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 97 | 828 | その他 | 穿孔土器 | I-26 | Ⅱa | 口縁～底部 | 8.8 | 7.4 | 1.3 | ヘラ切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 5381 | 穿孔あり |

## 第62表　中世遺物観察表(3)

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 主文様・調整 | 色調 外面 | 内面 | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 829 | その他 | 穿孔土器 | J-27 | Ⅱa | 口縁～底部 | 4.65 | — | 1.15 | ヘラ切り | 浅黄橙～橙 | 浅黄橙～橙 | — | 穿孔あり |
| | 830 | その他 | 穿孔土器 | I-27 | Ⅱa | 胴～底部 | — | 6.6 | — | ヘラ切り | 橙 | 橙 | 5345 | 穿孔あり |
| | 831 | その他 | 穿孔土器 | K-35 | Ⅱa | 底部 | — | 6.6 | — | 糸切り | 浅黄橙 | 浅黄橙 | 4291 | 穿孔あり |

## 第63表　中世遺物観察表(4)

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 出土区 | 層 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 832 | その他 | 円盤状加工品 | K-34 | I | — | 7 | 0.8 | — | 一括 | 底部ヘラ切り(にぶい黄橙／にぶい黄橙) |
| | 833 | その他 | 円盤状加工品 | L-34 | I | — | 5 | 0.75 | — | 一括 | (橙／橙) |
| | 834 | その他 | 円盤状加工品 | K-35 | I | — | 8 | 0.6 | — | 一括 | 底部糸切り(浅黄橙／灰白) |
| | 835 | その他 | 円盤状加工品 | I-29 | — | — | — | — | — | 1784 | メンコ(灰白／浅黄) |
| | 836 | 土師器 | その他 | K-32 | Ⅱa | — | — | — | — | 一括 | 見込みに刷痕あり(玄米)(にぶい黄橙／にぶい黄橙) |

## 第64表　中世遺物観察表(5)

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 出土区 | 層 | 部位 | 法量(cm) 口径 | 底径 | 器高 | 主文様・調整 | 色調 外面 | 内面 | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 98 | 837 | 石製品 | 石鍋 | I-26 | Ⅱa | 口縁～胴部 | 38.0 | — | — | ケズリ | 灰 | オリーブ黒 | 665 | 重量：646.5g |
| | 838 | 石製品 | 石鍋 | K-32 | Ⅱa | 口縁～胸部 | 22.0 | — | — | ケズリ | 灰色 | にぶい黄橙 | 207・262・898・2027 | 重量：350.0g |
| | 839 | 石製品 | 石鍋 | J-34 | I | 口縁部 | 21.8 | — | — | ケズリ | 灰色 | 灰色 | 一括 | 重量：87.0g |
| | 840 | 石製品 | 石鍋 | I-34 | Ⅱa | 底部 | — | 15.6 | — | ケズリ | 黒褐 | 浅黄 | 4357 | 重量：168.0g |

## 第65表　中世遺物観察表(6)

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 出土区 | 層 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 98 | 841 | 石製品 | 転用品 | L-32・33 | I | 3.0 | 4.8 | 3.5 | 71.5 | 一括 | |
| | 842 | 石製品 | 転用品 | L-33 | Ⅱa | 6.0 | 2.0 | 1.8 | 27.0 | 2810 | |
| | 843 | 石製品 | 転用品 | I-26 | Ⅱa | 5.2 | 2.3 | 1.9 | 21.0 | 4969 | |
| | 844 | 石製品 | 転用品 | J-30 | — | 2.7 | 3.6 | 1.7 | 22.0 | 一括 | |
| 99 | 845 | 石製品 | 砥石 | L-31 | — | 5.3 | 2.45 | 1.35 | 36.0 | 一括 | 頁岩 |
| | 846 | 石製品 | 砥石 | J-27 | I | 4.6 | 2.35 | 1.65 | 36.0 | — | 砂岩 |
| | 847 | 石製品 | 砥石 | I-27 | I | 2.2 | 2.55 | 2.4 | 20.0 | 一括 | 砂岩 |
| | 848 | 石製品 | 砥石 | L-30 | Ⅱ | 5.85 | 3.6 | 9.0 | 29.5 | 63 | 砂岩 |
| | 849 | 石製品 | 砥石 | K-34 | — | 6.5 | 3.7 | 1.45 | 74.0 | 3868 | 砂岩 |
| | 850 | 石製品 | 砥石 | L-29 | Ⅱa | 6.0 | 3.2 | 1.0 | 36.5 | 1043 | 砂岩 |
| | 851 | 石製品 | 砥石 | L-31 | Ⅱa | 6.3 | 3.2 | 0.9 | 31.0 | 2292 | 頁岩 |
| | 852 | 石製品 | 砥石 | K-32 | I | 4.5 | 3.15 | 9.0 | 20.5 | 一括 | 頁岩 |
| | 853 | 石製品 | 砥石 | I-26 | Ⅱb | 9.8 | 3.6 | 1.9 | 94.0 | 6524 | 砂岩 |
| | 854 | 石製品 | — | L-27 | Ⅱa | 2.8 | 3.2 | 4.2 | 6.0 | 一括 | 砂岩 |
| 100 | 855 | 石製品 | 砥石 | J-30, 31 | I | 4.9 | 4.5 | 2.3 | 36.0 | — | 砂岩 |
| | 856 | 石製品 | 砥石 | — | — | 19.7 | 12.9 | 8.4 | 3350.0 | — | |
| | 857 | 石製品 | 砥石 | — | — | 10.0 | 12.2 | 3.1 | 595.5 | — | |
| | 858 | 石製品 | 砥石 | L-31 | I | 9.8 | 7.0 | 2.5 | 253.0 | 3914 | 砂岩 |
| | 859 | 石製品 | 砥石 | L-28 | Ⅱb | 8.4 | 7.1 | 2.5 | 2768.0 | 6695 | 砂岩 |
| | 860 | 石製品 | 砥石 | L-28 | Ⅱa | 9.8 | 2.4 | 8.6 | 351.0 | 5077 | 砂岩 |
| | 861 | 石製品 | 砥石 | L-33 | Ⅱb | 9.3 | 10.8 | 6.6 | 802.0 | 7779 | 砂岩 |
| 101 | 862 | 石製品 | 砥石 | L-30 | — | 30.9 | 9.5 | 6.2 | 3400.0 | — | 砂岩 |
| | 863 | 石製品 | 軽石製品 | — | — | 23.5 | 18.3 | 12.7 | 1324.0 | 3167 | 軽石 |
| 102 | 864 | 石製品 | 火打石 | K-31 | I | 4.85 | 3.2 | 3.0 | 48.5 | 一括 | |
| | 865 | 石製品 | 火打石 | L-33 | I | 3.1 | 2.5 | 1.6 | 15.0 | — | 石英 |
| | 866 | 石製品 | 火打石 | L-30 | — | 3.2 | 2.1 | 1.9 | 14.5 | — | 水晶 |
| | 867 | 石製品 | 火打石 | J-28 | I | 2.2 | 1.1 | 1.8 | 4.0 | 一括 | |
| | 868 | 石製品 | 火打石 | K-32 | Ⅱa | 1.2 | 2.2 | 1.1 | 3.0 | 1553 | 水晶 |
| | 869 | 石製品 | 火打石 | L-32 | Ⅱa | 2.0 | 2.0 | 1.4 | 5.5 | 一括 | |
| 103 | 870 | 石製品 | 碁石 | K-32 | Ⅱa | 2.0 | 1.8 | 0.8 | 5.0 | 2195 | |
| | 871 | 石製品 | 碁石 | K-29 | Ⅱa | 1.9 | 1.9 | 0.7 | 4.5 | 1033 | |
| | 872 | 石製品 | 碁石 | L-32 | Ⅱa | 2.0 | 1.4 | 1.1 | 3.5 | 1586 | |
| | 873 | 石製品 | 碁石 | I-26 | Ⅱa | 1.2 | 1.0 | 0.3 | 0.5 | 6395 | |

第66表　中世遺物観察表（7）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 103 | 874 | 石製品 | 碁石 | J-30 | Ⅱa | 1.6 | 1.4 | 0.4 | 2.0 | 711 | |
| | 875 | 石製品 | 碁石 | J-33 | Ⅰ | 2.0 | 1.8 | 0.9 | 4.5 | 一括 | |
| | 876 | 石製品 | 碁石 | K-32 | Ⅱb | 1.8 | 1.7 | 0.6 | 3.0 | 7960 | |
| | 877 | 石製品 | 碁石 | K-31 | Ⅱa | 2.1 | 1.7 | 0.7 | 4.5 | 一括 | |
| | 878 | 石製品 | 碁石 | J-28 | Ⅱa | 2.2 | 1.6 | 0.6 | 3.5 | 4920 | |
| | 879 | 石製品 | 碁石 | K-32 | Ⅱa | 2.1 | 1.8 | 0.7 | 4.8 | 784 | |
| | 880 | 石製品 | 碁石 | K-32 | Ⅱa | 2.1 | 1.8 | 0.8 | 5.0 | 一括 | |
| | 881 | 石製品 | 碁石 | L-31 | Ⅰ | 2.2 | 2.0 | 0.6 | 5.5 | — | |
| | 882 | 石製品 | 碁石 | J・K-29 | Ⅱa | 1.9 | 1.6 | 0.4 | 2.5 | 一括 | |
| | 883 | 石製品 | 碁石 | L-30 | Ⅱa | 1.8 | 1.5 | 0.5 | 3.0 | 1092 | |
| | 884 | 石製品 | 碁石 | K-31 | Ⅱa | 2.1 | 1.6 | 0.4 | 3.5 | 1425 | |
| | 885 | 石製品 | 碁石 | J-30 | Ⅱa | 2.2 | 1.9 | 0.5 | 3.0 | 2098 | |
| | 886 | 石製品 | 碁石 | J-27 | Ⅱa | 2.4 | 2.2 | 0.9 | 6.5 | 5630 | |
| | 887 | 石製品 | 碁石 | K-34 | Ⅰ | 2.3 | 1.8 | 0.5 | 4.0 | 一括 | |
| | 888 | 石製品 | 碁石 | K-31 | Ⅱa | 2.7 | 1.8 | 0.8 | 7.0 | 3741 | |
| | 889 | 石製品 | 碁石 | J-31 | Ⅰ | 2.8 | 2.2 | 0.4 | 6.0 | — | |
| | 890 | 石製品 | 碁石 | J-30 | Ⅰ | 2.3 | 2.2 | 1.0 | 7.5 | — | |
| | 891 | 石製品 | 碁石 | K-36 | Ⅱa | 2.1 | 2.1 | 0.9 | 6.0 | 一括 | |
| | 892 | 石製品 | 碁石 | J-28 | Ⅱa | 2.3 | 2.2 | 0.8 | 6.5 | 4801 | |
| | 893 | 石製品 | 碁石 | K-34 | Ⅱa | 3.3 | 3.1 | 1.2 | 16.0 | 一括 | |
| | 894 | 石製品 | 碁石 | L-32 | Ⅱa | 2.9 | 2.5 | 0.9 | 11.0 | 1139 | |
| | 895 | 石製品 | 碁石 | I-26 | Ⅱb | 3.0 | 2.1 | 1.0 | 9.0 | 6583 | |
| 104 | 896 | 銭貨 | 皇宋通寶 | K-32 | — | 2.7 | 2.5 | 0.3 | 5.5 | — | 皇宋通寶・２枚重ね |
| | 897 | 銭貨 | 熙寧元寶 | J-32 | — | — | — | — | 2.5 | — | 熙寧元寶 |
| | 898 | 銭貨 | 元豊通寶 | K-32 | Ⅱa | 2.4 | 2.4 | 0.1 | 1.0 | — | 元豊通寶（半分） |
| | 899 | 銭貨 | 元祐通寶 | K-32 | — | — | — | — | 1.5 | — | 元祐通寶 |
| | 900 | 銭貨 | 不明 | L-32 | Ⅱb | 2.4 | 2.4 | 0.1 | 2.0 | 7672 | 不明 |
| | 901 | 鉄製品 | 火打金 | J-26 | Ⅰ | 9.3 | 2.8 | 1.1 | 35.0 | 一括 | |
| | 902 | 鉄製品 | 紡錘車 | K-31 | Ⅱa | 5.0 | 3.8 | 3.8 | 13.5 | 676 | |
| | 903 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | L-32 | Ⅱb | 3.8 | 0.7 | 0.5 | 2.5 | 7945 | |
| | 904 | 鉄製品 | 棒状鉄製品 | L-31 | Ⅱa | 4.0 | 0.6 | 0.6 | 2.0 | 337 | |
| 106 | 905 | 炭化米 | 炭化ご飯塊 | K-32 | Ⅱa | 8.4 | 6.7 | 3.5 | — | — | |
| | 906 | 炭化米 | 炭化モミ塊 | K-32 | Ⅱa | 3.2 | 2.4 | 1.9 | — | — | |

## 第６節　近世・その他の調査

溝状遺構と土坑を検出した。遺物は肥前系白磁や寛永通寶などが出土している。特に，溝状遺構については，埋土中にパミスを含む砂質層の堆積がみられた。この層は，桜島噴出物であり，Ｐ１（大正３【1914】年）もしくはＰ２（安永８【1779】年）とみられる。

### (1) 近世の遺構

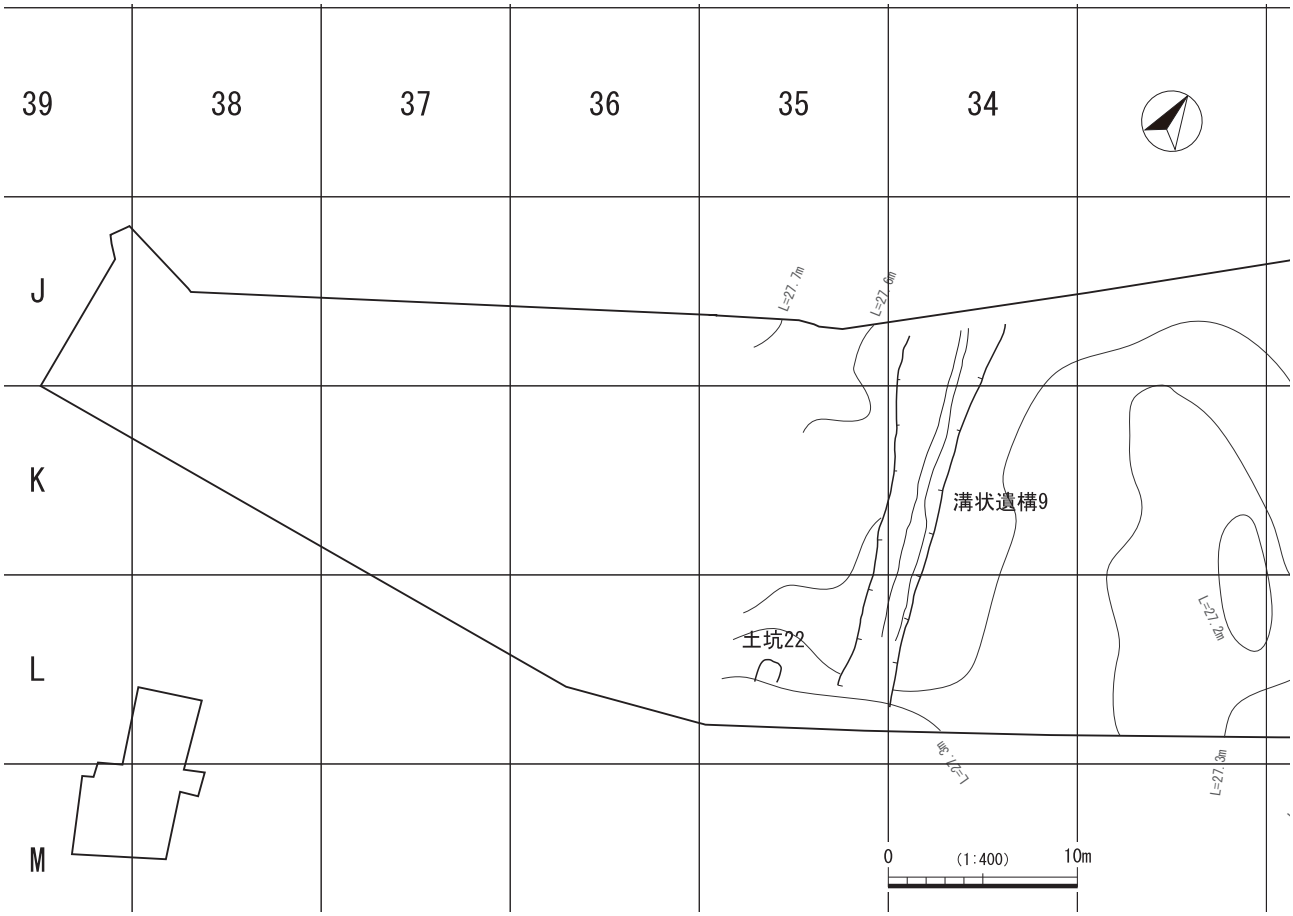
ア　溝状遺構９（Ｊ～Ｌ-34・35区検出）

南北方向に走るもので，最大長21.28m，幅2.4m，底面までの最大深さ0.3mである。底面近くでは溝状遺構とほぼ同じ方向に帯状硬化面が走る。ここでは形状から，溝状遺構として扱っているが，底面に帯状硬化面がみられることから，道路として使用された可能性がある。埋土中には，縄文時代から近世にかけての遺物が出土しているが，Ｐ１もしくはＰ２に類似するパミスが入っていることと，肥前系の染付や薩摩焼などの近世の陶磁器がみられることから，帰属時期は近世以降であると考えられる。907は古墳時代の須恵器である。外面には沈線により区画された施文帯内に斜め方向に貝殻腹縁による文様を連続して施す。小型高坏の坏部にあたるものとみられるものである。908は土師器の坏で，ほぼ完形である。底部は糸切りである。909は青磁碗の破片である。鎬連弁文の碗である。910は口縁部外面の釉を剥ぎ取る白磁で，口禿皿の口縁部である。911は外面には格子目タタキが施される。樺番城産とみられるもので，やや焼成不良である。912・913は瓦質土器である。912は鉢もしくは壺とみられるもので，口縁部下に鍔状突起が巡るが貼付部分から欠損する。内面にはケズリが施される。913は壺形のもので，肩部には二条の沈線を巡らすものである。914は軽石製品である。一部を欠損するが，断面三角形のもので，アイロンに類似した形状のものである。残存部分は丁寧な表面加工が施される。

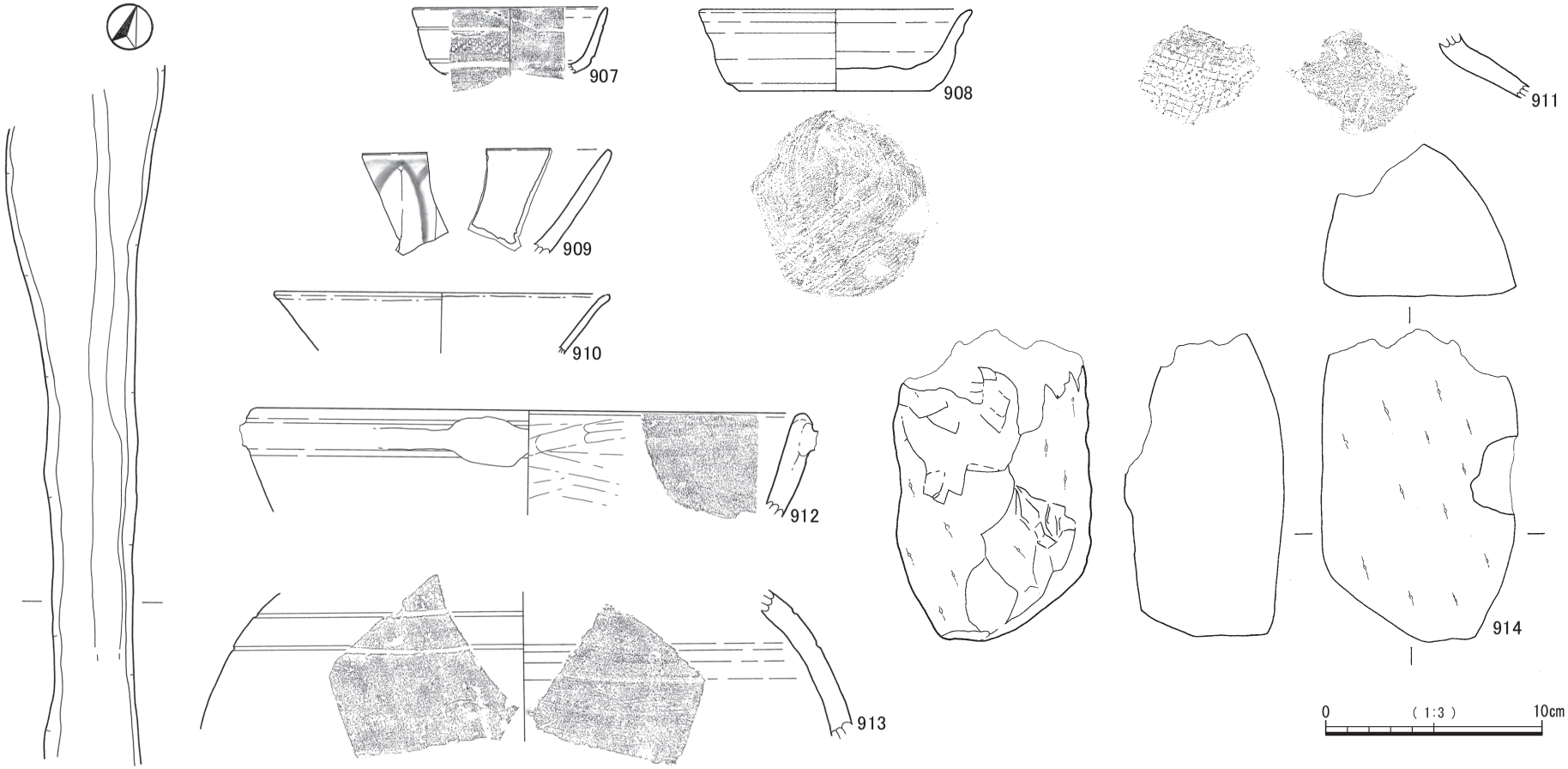
イ　土坑22（Ｌ-35区）

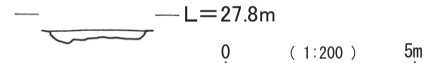
最大長1.41m，幅1.21m，検出面からの深さ0.45mの遺構である。検出時には焼土を伴う黒色部分が明瞭にみられた。底面付近では，壁面に沿って拳大の円礫が巡るように配置される。この礫を除去した状態で被熱痕がみられる。礫は，ほとんどが砂岩の円礫であり，凝灰岩と軽石を１点ずつ含む。円礫は河原石とみられるが，数点は磨・敲石の可能性のあるものがあり，このうち１点について図化を行った。

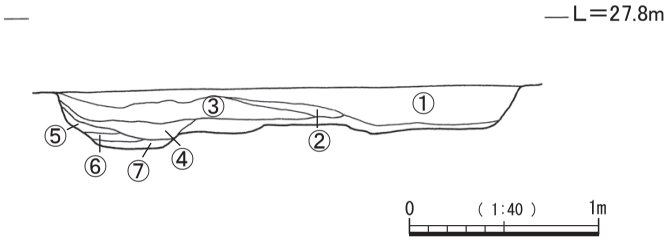
これらの状況から，掘り込みを伴う炉であったとみられ，煙道は確認されていないもののカマドの可能性も指摘される。Ⅱ層にて検出された遺構であるが，肥前系の染付や陶器など国産の近世陶磁器の小破片とともに検出されたので，近世の遺構であると判断した。915は磨敲




第107図　近世遺構配置図



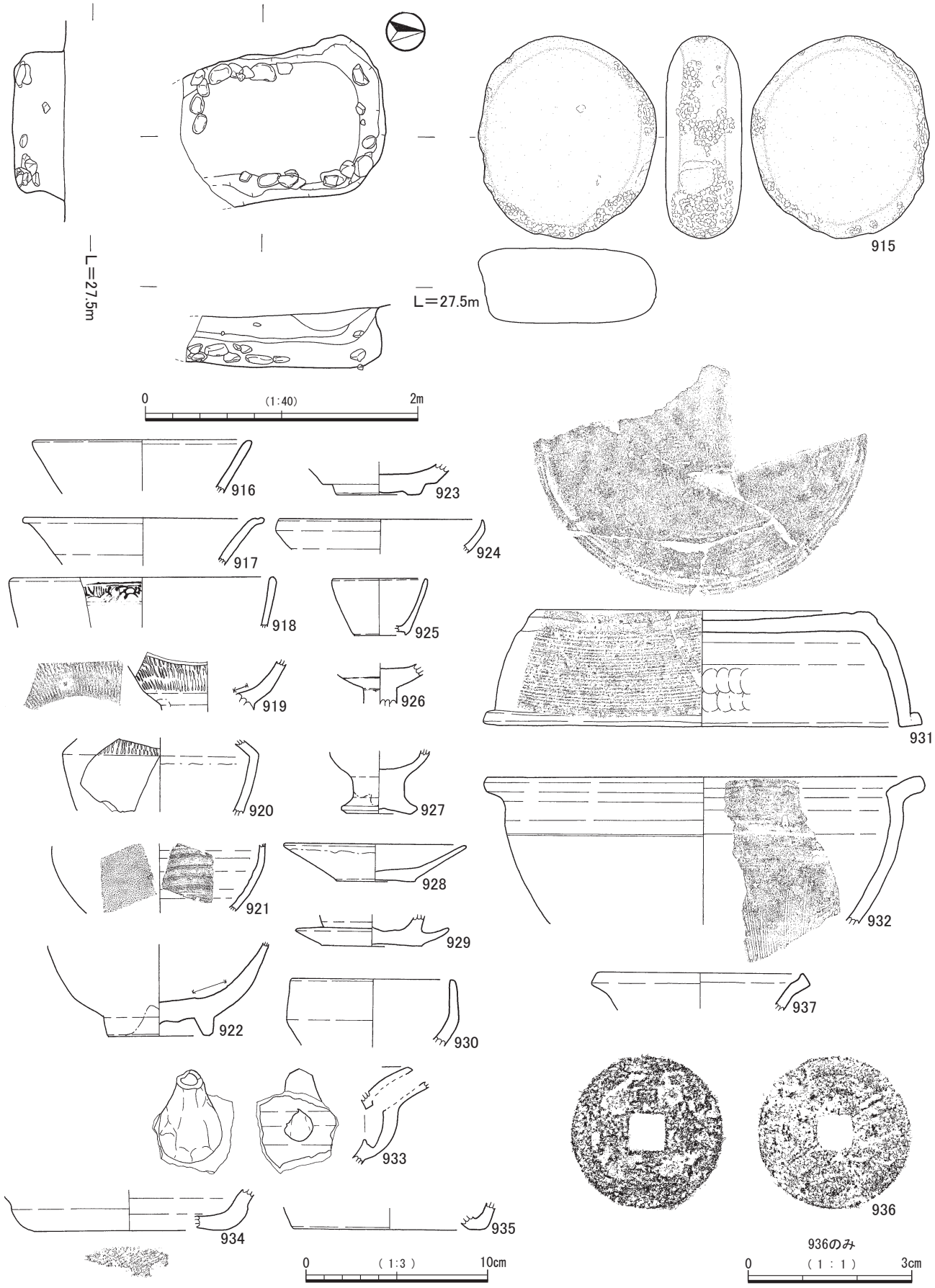



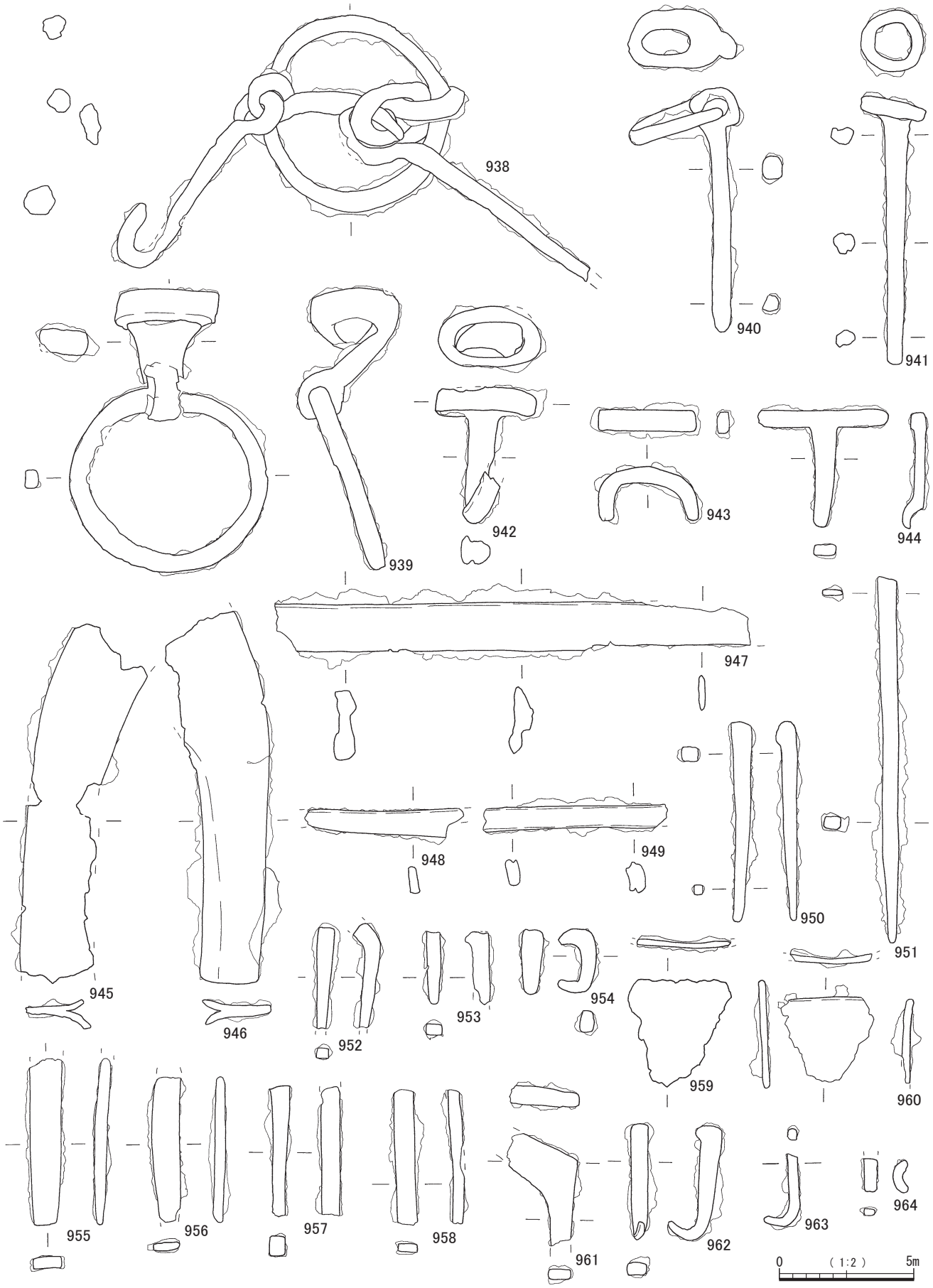

第67表　溝状遺構9埋土観察表

| 大きさ(cm) 幅 | 大きさ(cm) 深さ | 埋土No. | 色調 | 埋土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 240 | 30 | ① | 赤黒色 | 粘性やや有り。しまりやや有り。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（直径2～5㎜），P1もしくはP2（桜島火山灰）（直径2～5㎜）をわずかに含む。 | |
| | | ② | 黒褐色 | 粘性なし。しまり非常に強い。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（直径1～2㎜），P1もしくはP2（直径1～2㎜）をわずかに含む。Ⅱａ層に類似している。 | 硬化面 |
| | | ③ | 黒褐色 | 粘性やや有り。しまりやや有り。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（ブロック直径5～50㎜），P1もしくはP2（直径1～2㎜）をわずかに含む。Ⅱａ層に類似している。 | |
| | | ④ | 黒色 | 粘性やや有り。しまり非常に強い。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（ブロック直径5～30㎜），P1もしくはP2（直径1～2㎜）をわずかに含む。 | 硬化面 |
| | | ⑤ | 黒色 | 粘性やや有り。しまり有り。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（ブロック直径5～50㎜），P1もしくはP2（直径1～2㎜）をわずかに含む。 | |
| | | ⑥ | 黒色 | 粘性やや有り。しまり非常に強い。御池火山灰（直径1㎜以下），アカホヤ火山灰（ブロック直径5～30㎜）をわずかに含む。 | 硬化面 |
| | | ⑦ | 暗褐色 | 粘性やや有り。しまり非常に強い。地山（Ⅴ層下部とⅥ層上面）が硬化したもの。 | 硬化面 |

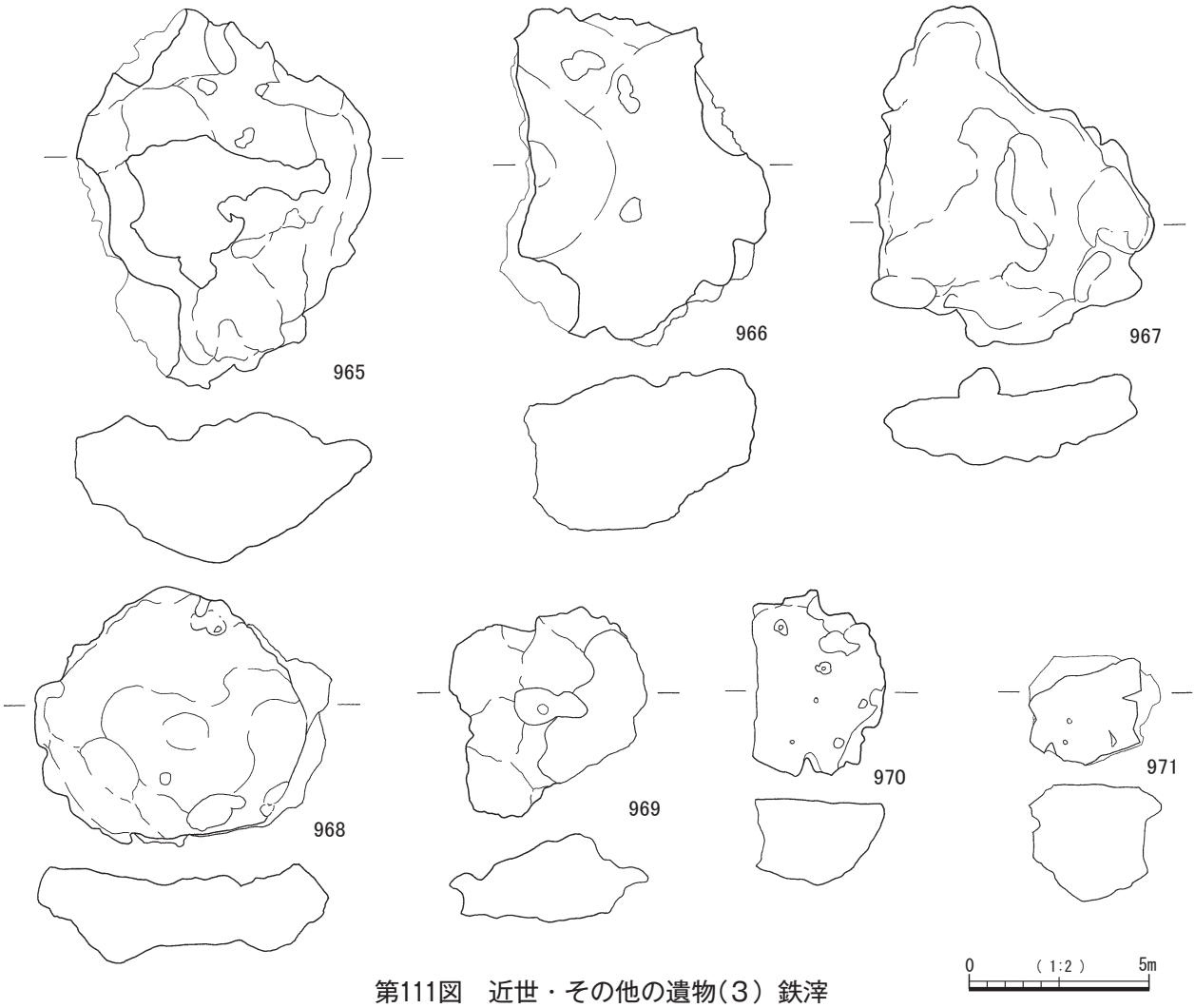
第108図　溝状遺構９及び出土遺物




第109図　近世・その他の遺物(1)




第110図　近世・その他の遺物（２）その他の金属製品




第111図　近世・その他の遺物（3）鉄滓

石で，本遺構の構成礫のひとつである。研磨痕や敲打痕も明瞭なものであるので，縄文石器を再利用したものの可能性も考えられるものである。

**(2) 近世・その他の遺物**

916・923はともに国産天目である。特に923は瀬戸大窯産のものである。917・918・924～926は肥前系のものである。917は溝縁皿である。17世紀頃のものとみられる。918・926は染付である。919～922・927～933は薩摩焼である。919～922・927～929は加治木・姶良系窯の製品である。特に，919・920は飛びガンナによる施文がなされる。また，920は「からから」と呼称される酒器である。931は大型の蓋であり，外面には横ナデの痕跡が数条の細い筋となって残る。932は内面にカキメが入るもので，擂鉢である。口縁部は外側に開く。

934は土師質の土器の底部である。底部には煤が付着するので，焙烙（煎具）の可能性がある。935も土師質の土器で，底部に穴があいた状況のものであったことが想定される。936は寛永通寶である。鉄四文銭で，万延元（1860）年初鋳とされる。裏面には波紋が11波入る。937は，中世における京都産の「て」の字状皿に似るが色調・胎土の特徴は弥生・古墳時代頃の土器に類似する。このような特徴を有するため，時代不明遺物とした。

**金属製品**

938～945は馬具であり，轡（くつわ）・喰（はみ）である。断面が円形の棒状鉄製品の一端を加工したもの（一方は環状で，もう一方は鉤状）と，環状の鉄製品などを組み合わせている。中世の可能性も指摘されるが，形態的に時代変化の乏しいものであるので，時代不明遺物として掲載している。

945・946は鋤先である。947～949は刃物の可能性がある。950～958・961～964は用途は不明であるが，棒状のものもしくは棒状のものを折り曲げたものである。釘や針，釣り針などを含む可能性がある。959・960は鍋の破片である。口縁部付近とみられる。

965～971は鉄滓である。古墳時代の溝や中世の礫集積遺構の中にも類似のものが入るが，時期等については明確ではないのでここで一括している。

## 第68表　近世遺構内出土土器等観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名・出土区 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 108 | 907 | 古墳須恵器 | 鉢 | 溝状遺構９・K-35 | 口縁～胴部 | 9.0 | — | — | ケズリ・ナデ | 灰 | 灰 | 4019・4023 | 小型高坏の坏部か |
| | 908 | 土師器 | 坏 | 溝状遺構９・L-34 | 完形 | 12.6 | 8.8 | 3.7 | ナデ・糸切り | にぶい黄橙 | にぶい黄橙 | 3828 | |
| | 909 | 青磁 | 碗 | 溝状遺構９・K-34 | 口縁～胴部 | — | — | — | — | 明オリーブ灰 | 胎：明オリーブ灰 | 3928 | 鎬連弁文 |
| | 910 | 白磁 | 皿 | 溝状遺構９・K-34 | 口縁～胴部 | 15.4 | — | — | — | 灰白 | 胎：灰白 | 3907 | 口禿皿 |
| | 911 | 中世須恵器 | 甕 | 溝状遺構９・L-35 | 胴部 | — | — | — | 格子目タタキ，ナデ | 明赤褐 | 褐灰 | 4063 | |
| | 912 | 瓦質土器 | 鉢 | 溝状遺構９・L-35 | 口縁～胴部 | 25.0 | — | — | ケズリ | にぶい赤褐 | にぶい赤褐 | 4054・4438 | |
| | 913 | 瓦質土器 | 鉢・壺類 | 溝状遺構９・K-35 | 胴部 | — | — | — | ハケメ・ナデ | 黄灰 | 灰白 | 3977 | |

## 第69表　近世遺構内出土遺物観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名・出土区 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 108 | 914 | 石製品 | 軽石製品 | 溝状遺構９・K-34 | 14.3 | 8.9 | 7.4 | 204.5 | 3348 | |
| 109 | 915 | 石器 | 磨敲石 | 土坑22・L-35 | 11.1 | 9.7 | 3.6 | 733.0 | — | 遺構の構成礫・縄文石器の再利用か |

## 第70表　近世土器等観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名・出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 109 | 916 | 肥前系 | 天目 | L-31 | I | 口縁部 | 12.8 | — | 8 | ナデ | 赤黒 | 胎：赤黒 | 7485 | |
| | 917 | 唐津産 | 溝縁皿 | J-28 | I | 口縁部 | 13.0 | — | 14 | ナデ | 灰 | 胎：灰 | — | |
| | 918 | 肥前系 | 染付碗 | J-26 | I | 口縁部 | 15.0 | — | 11 | ナデ | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | |
| | 919 | 薩摩焼 | 碗 | K-39 | I | 胴部 | — | — | 11 | ナデ・飛びガンナ | 赤褐 | 胎：赤褐 | 一括 | 加治木・姶良系，山元窯 |
| | 920 | 薩摩焼 | からから | L-30 | I | 底部 | — | — | 13 | ナデ・飛びガンナ | にぶい赤褐 | 胎：にぶい赤褐 | 一括 | 加治木・姶良系，山元窯 |
| | 921 | 薩摩焼 | 碗 | K-35 | I | 胴部 | — | — | — | ナデ | 灰褐 | 胎：褐 | 一括 | 鮫肌釉 |
| | 922 | 薩摩焼 | 碗 | K-35 | I | 胴～底部 | — | 6.0 | — | ナデ | 灰オリーブ | 胎：灰オリーブ | 一括 | 加治木・姶良系 |
| | 923 | 瀬戸 | 天目 | I-27 | Ⅱ | 底部 | — | 4.8 | — | ナデ | にぶい黄橙 | 胎：褐 | 一括 | 瀬戸大窯産 |
| | 924 | 白磁 | 皿 | J-26 | I | 口縁部 | 11.4 | — | — | ナデ | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | 肥前系か |
| | 925 | 白磁 | 猪口 | L-31 | I | 完形 | 5.4 | 3.0 | 3 | ナデ | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | 肥前系か |
| | 926 | 染付 | 仏飯器 | K-37 | I | 脚部 | — | — | — | ナデ | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | 肥前系か |
| | 927 | 薩摩焼 | 仏飯器 | K-37 | I | 脚部 | — | 4.4 | — | ナデ | 灰白 | 胎：灰白 | 一括 | 加治木・姶良系 |
| | 928 | 薩摩焼 | 皿 | J-30・31 | I | 完形 | 10.2 | 4.4 | 2 | ナデ・糸切り | にぶい赤褐 | 胎：暗褐 | 一括 | 加治木・姶良系・27T |
| | 929 | 薩摩焼 | 灯明皿受具 | L-35 | Ⅱa | 底部 | 5.4 | — | — | ナデ・糸切り | 橙 | 胎：にぶい黄橙 | 132 | 加治木・姶良系 |
| | 930 | 薩摩焼 | 白化粧碗 | K-35 | I | 口縁～胴部 | 9.0 | — | — | ナデ | 灰黄 | 胎：灰黄 | 一括 | 竪野系 |
| | 931 | 薩摩焼 | 蓋 | L-37 | I | 完形 | 24.4 | 18.4 | 6.2 | ナデ | 灰褐 | 胎：黒褐 | 一括 | 苗代川系 |
| | 932 | 薩摩焼 | 摺鉢 | L-37 | I | 口縁～胴部 | 24.3 | — | — | ナデ | 黒褐 | 胎：黒褐 | 一括 | 苗代川系 |
| | 933 | 薩摩焼 | 土瓶 | J・K-33 | I | 注口部 | 11.4 | — | — | ナデ | 灰オリーブ | 胎：灰オリーブ | 一括 | 苗代川系 |
| | 934 | 土師器 | 焙烙 | K-33 | Ⅱa | 底部 | 11.0 | — | — | ナデ | 黒褐 | 浅黄橙 | 883 | 煤付着 |
| | 935 | 土師器 | 鉢 | K-36 | I | 底部 | 11.0 | — | — | ナデ | 灰白 | 灰白 | 一括 | 底部に孔あり |

## 第71表　近世遺物観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名・出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 109 | 936 | 銭貨 | 寛永通寶 | M-39 | I | 2.9 | 3.0 | 0.2 | 4.5 | 7527 | 鉄四文銭・裏面に11波 |

## 第72表　その他の土器等観察表

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 器種 | 遺構名・出土区 | 層 | 部位 | 法量（cm） | | | 主文様・調整 | 色調 | | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | | 外面 | 内面 | | |
| 109 | 937 | 土器 | 不明 | J-28 | I | 口縁部 | — | — | — | ナデ | 橙 | 橙 | 一括 | |

## 第73表　その他の遺物観察表（１）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名・出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 110 | 938 | 鉄器 | 馬具(ハミ) | L-35 | Ⅱ | 18 | 7.0 | 1.1 | 118.5 | — | |
| | 939 | 鉄器 | 馬具(ハミ) | L-35 | Ⅱ | 10.6 | 7.2 | 3.4 | 82.0 | — | |
| | 940 | 鉄器 | 馬具(ハミ) | L-35 | Ⅱ | 9.0 | 4.2 | 2.4 | 31.0 | — | |
| | 941 | 鉄器 | 馬具 | L-34 | Ⅱa | 9.9 | 2.4 | 2.5 | 19.0 | 3197 | |
| | 942 | 鉄器 | 馬具(ハミ) | L-35 | Ⅱ | 5.0 | 4.0 | 2.3 | 21.5 | — | |
| | 943 | 鉄器 | U字形 | J-27 | Ⅱa | 4.0 | 1.2 | 1.0 | 11.5 | 5142 | 馬具の一部の可能性あり |
| | 944 | 鉄器 | 馬具か | J-31 | Ⅱa | 4.3 | 0.8 | 0.5 | 13.0 | 560 | |
| | 945 | 鉄器 | 鋤 | L-33 | Ⅱa | 12.8 | 3.6 | 1.0 | 58.5 | 4571 | 古墳時代土器・白磁等が近接して出土 |

第74表　その他の遺物観察表（２）

| 挿図No. | 掲載No. | 類・種別 | 名称 | 遺構名・出土区 | 層 | 長さ（cm） | 幅（cm） | 厚さ（cm） | 重さ（g） | 取上No. | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 110 | 946 | 鉄器 | 鋤 | L-33 | Ⅱa | 13.8 | 3.2 | 0.7 | 85.0 | 4570 | 古墳時代土器・白磁等が近接して出土 |
| | 947 | 鉄器 | 小刀 | L-32 | Ⅱa | 17.4 | 2.7 | 2.4 | 37.5 | 1585 | |
| | 948 | 鉄器 | 刀子か | K-31 | Ⅱa | 5.7 | 1.2 | 1.0 | 7.0 | 336 | |
| | 949 | 鉄器 | 刀子か | K-32 | Ⅱa | 6.8 | 1.4 | 1.1 | 9.0 | 297 | |
| | 950 | 鉄器 | 棒状 | K-32 | Ⅱa | 7.4 | 1.0 | 0.5 | 8.0 | 一括 | |
| | 951 | 鉄器 | 棒状 | I-26 | Ⅱa | 13.5 | 1.3 | 0.7 | 23.5 | 5227 | |
| | 952 | 鉄器 | 棒状 | L-35 | Ⅱa | 3.9 | 1.0 | 0.5 | 3.5 | 3112 | |
| | 953 | 鉄器 | 棒状 | L-32 | Ⅱa | 2.7 | 0.8 | 0.6 | 2.5 | 272 | |
| | 954 | 鉄器 | カスガイか | J-32 | Ⅱa | 2.3 | 1.3 | 0.9 | 4.0 | 一括 | |
| | 955 | 鉄器 | 棒状 | J-30 | Ⅱa | 6.1 | 1.4 | 0.5 | 13.0 | 一括 | |
| | 956 | 鉄器 | 棒状 | I-26 | Ⅱa | 5.4 | 1.3 | 0.5 | 8.5 | 5202 | |
| | 957 | 鉄器 | 棒状 | L-32 | Ⅱa | 4.8 | 0.9 | 0.9 | 8.5 | 271 | |
| | 958 | 鉄器 | 棒状 | L-33 | Ⅱa | 5.0 | 1.2 | 0.5 | 9.0 | 205 | |
| | 959 | 鉄器 | 鍋 | K-32 | Ⅱa | 4.0 | 3.8 | 0.8 | 8.5 | 293 | 口縁部か |
| | 960 | 鉄器 | 鍋 | L-33・34 | — | 3.1 | 3.2 | 1.1 | 10.0 | 一括 | 口縁部か |
| | 961 | 鉄器 | 不明 | J-30・31 | I | 3.7 | 2.6 | 1.0 | 12.0 | — | |
| | 962 | 鉄器 | 釣針か | L-33 | Ⅱb | 4.4 | 1.1 | 0.7 | 6.0 | 7772 | |
| | 963 | 鉄器 | 釣針か | L-33 | Ⅱa | 2.7 | 1.4 | 0.6 | 2.0 | 207 | |
| | 964 | 鉄器 | 不明 | J-30 | Ⅱb | 1.2 | 0.6 | 0.3 | 0.5 | 一括 | |
| | 965 | 鉄滓 | 椀形滓 | I-26 | Ⅱa | 10.2 | 8.1 | 3.9 | 345.5 | 6102 | |
| | 966 | 鉄滓 | 椀形滓 | K-32 | Ⅱa | 9.9 | 7.7 | 4.3 | 324.5 | 310 | |
| | 967 | 鉄滓 | 椀形滓 | K-32 | Ⅱa | 9.4 | 7.5 | 3.2 | 223.5 | 5808 | |
| | 968 | 鉄滓 | 椀形滓 | K-31 | Ⅱa | 8.4 | 7.1 | 3.0 | 220.0 | 2941 | |
| | 969 | 鉄滓 | 椀形滓 | L-35 | Ⅱa | 6.3 | 5.1 | 2.4 | 67.5 | 3130 | |
| | 970 | 鉄滓 | 椀形滓 | L-35 | Ⅱa | 5.1 | 3.7 | 2.3 | 77.5 | 3148 | |
| | 971 | 鉄滓 | 椀形滓 | L-34 | Ⅱa | 3.7 | 3.5 | 2.9 | 57.5 | 一括 | |

# 第Ⅴ章　自然科学分析

## 第１節　自然科学分析の概要

安良遺跡の自然科学分析は，平成29年11月に放射性炭素年代測定分析２点，炭化種実塊の構造解析を株式会社パレオ・ラボへ，平成31年２月に放射性炭素年代測定２点，樹種同定，種実同定を加速器分析株式会社へ，平成31年３月に放射性炭素年代測定をパレオ・ラボに，令和元年９月に放射性炭素年代測定，樹種同定を加速器分析株式会社へ依頼した。

また，令和元年には埋文センターにも赤色顔料が付着したとみられる土器の分析を依頼している。それぞれの分析結果の詳細は以下に述べる。

## 第２節　放射性炭素年代測定

### １　はじめに

鹿児島県志布志市志布志町に位置する安良遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### ２　試料と方法

試料は，B調査区から得られた炭化種実塊（1号，２号）である。測定試料は，炭化種実塊から直接採取したイネ炭化種子各1点である（測定試料は，炭化種実塊の報告参照)。試料の時期は，中世と推定されている。

測定試料の情報，調製データは第75表のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，14C年代，暦年代を算出した。

### ３　結果

第76表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した$^{14}C$年代，暦年較正結果を，第112図にそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}C$年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。$^{14}C$年代（yrBP）の算出には，$^{14}C$の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した$^{14}C$年代誤差（±１σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の$^{14}C$年代がその$^{14}C$年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の$^{14}C$濃度が一定で半減期が5568年として算出された$^{14}C$年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の$^{14}C$濃度の変動，および半減期の違い（$^{14}C$の半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}C$年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された$^{14}C$年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は$^{14}C$年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### ４　分析結果

暦年較正結果のうち２σ暦年代範囲（確率95.4％）に着目すると，炭化種実塊のイネ炭化種子は，1号（PLD-34608）が1162-1251 cal AD（95.4％）で，12世紀後半から13世紀中頃，２号（PLD-34609）が1210-1271 cal AD（95.4％）で，13世紀代の暦年代範囲を示した。

イネは１年生の栽培種であり，炭化種子の年代は種実の結実年代を示す。

**【参考文献】**


Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1), 337-360.

中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の$^{14}C$年代編集委員会編『日本先史時代の$^{14}C$年代』PP.3-20，日本第四紀学会.

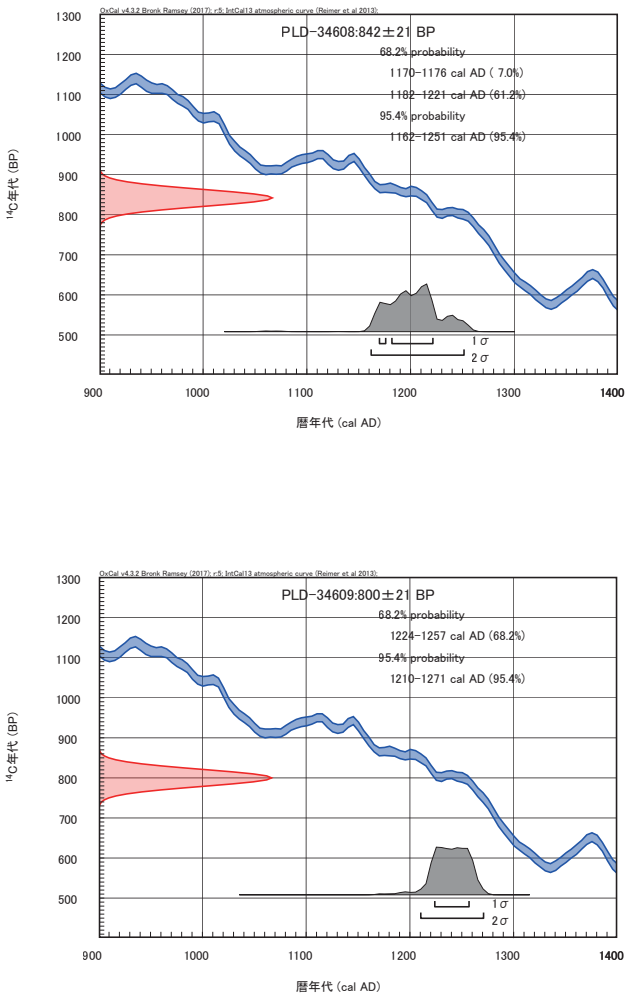
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP」『Radiocarbon』55(4)PP.1869-1887.

第75表　測定試料および処理

| 測定番号 | 遺跡データ | 試料データ | 前処理 |
|---|---|---|---|
| PLD-34608 | 調査区：B<br>遺物：1号炭化種実塊 | 種類：炭化種実（イネ炭化種子1点）<br>状態：dry | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N） |
| PLD-34609 | 調査区：B<br>遺物：2号炭化種実塊 | 種類：炭化種実（イネ炭化種子1点）<br>状態：dry | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N） |

第76表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

| 測定番号 | δ13C（‰） | 暦年較正用年代（yrBP±1σ） | $^{14}$C年代（yrBP±1σ） | $^{14}$C年代を暦年代に較正した年代範囲 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1σ暦年代範囲 | 2σ暦年代範囲 |
| PLD-34608 | −26.36±0.15 | 842±21 | 840±20 | 1170–1176 cal AD（ 7.0%）<br>1182–1221 cal AD（61.2%） | 1162–1251 cal AD（95.4%） |
| PLD-34609 | −28.85±0.15 | 800±21 | 800±20 | 1224–1257 cal AD（68.2%） | 1210–1271 cal AD（95.4%） |




第112図　暦年較正結果

## 第３節　安良遺跡出土の炭化種実塊の保存処理

### １　はじめに

安良遺跡から出土した炭化種実塊２点の保存処理を行った。

### ２　資料と方法

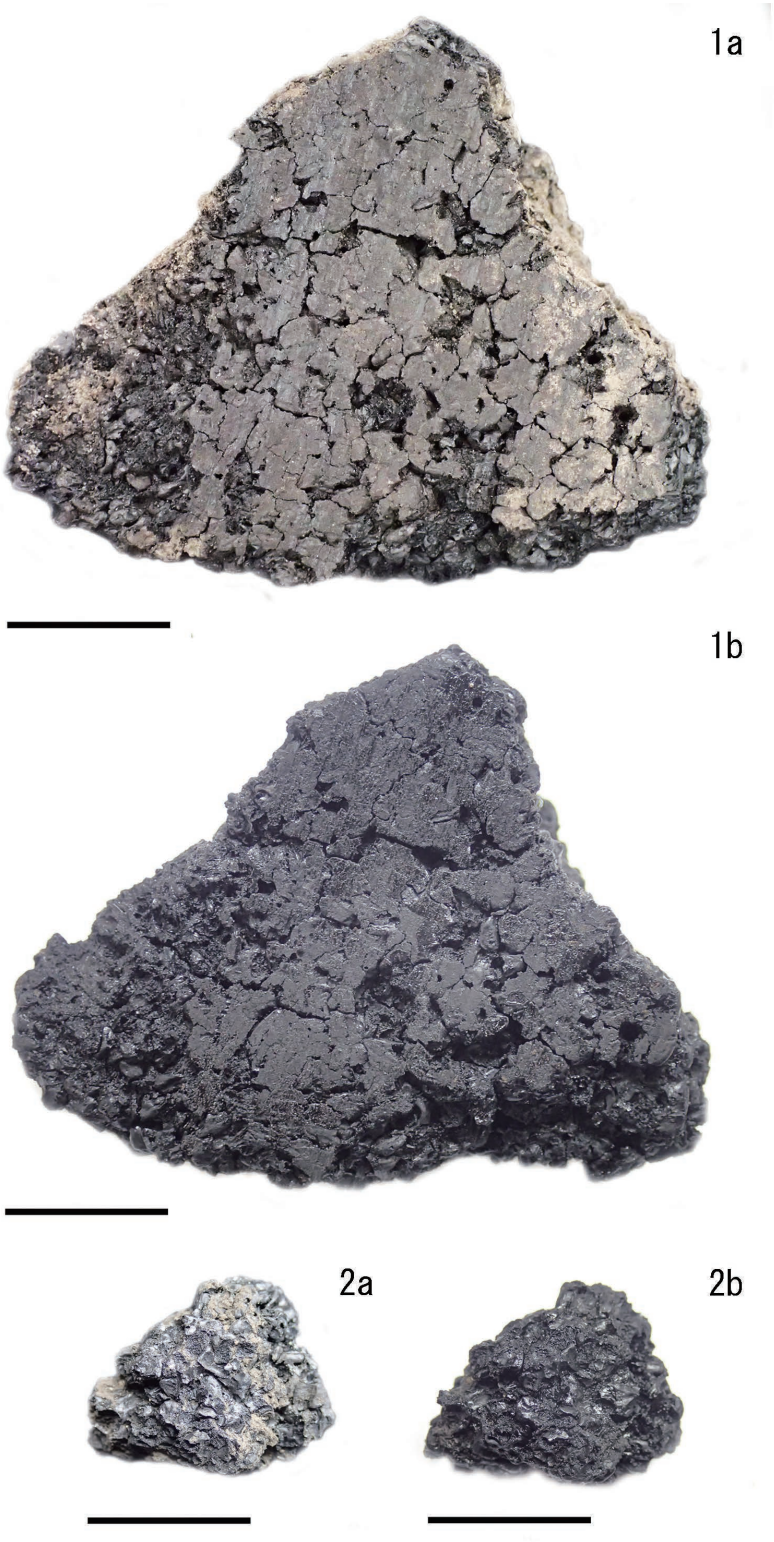
資料は，炭化種実塊１号（分析No.１）と２号（分析No.２）の２点である。保存処理前の資料の法量は，分析No.1が長径83.5mm，短径67.2mm，厚さ35.4mm。分析No.２が長径32.2mm，短径24.3mm，厚さ19.3mmであった。

保存処理には，パラロイドB72の9～15％アセトン溶液を用いた。まず，資料を撮影し，法量を計測した。炭化種実塊は大変脆い状態のため，筆を用いてパラロイド・アセトン溶液を資料の表面に少量ずつ含ませて，乾燥させる作業を溶液が浸み込まなくなるまで繰り返し行った。保存処理を施した後，再度計測を行った。保存処理済の資料は，埋文センターに保管されている。

### ３　結果

保存処理後の法量は，分析No.１が長径83.0mm，短径65.4mm，厚さ35.6mm。分析No.２が長径32.3mm，短径24.4mm，厚さ18.8mmであった。保存処理の段階で，剥離した種実塊を接着したため，やや法量に違いがみられるものの，大きな変化は見られなかった。なお，今回の保存処理は，資料を強固に固化したわけではないため，取り扱いには十分な注意が必要である。

保存処理済みの資料の保管については直射日光を避け，温度および湿度が比較的一定な暗所に置くのが望ましい。また，湿気を吸いやすいため，定期的に乾燥状態を観察する必要がある。




第113図　安良遺跡出土の炭化種実塊と保存処理後の写真
1　炭化種実塊（1号①），2　炭化種実塊（2号①）
a：保存処理前，b：保存処理後，スケール：2cm

## 第４節　安良遺跡出土の炭化種実塊の構造解析

### １　はじめに

鹿児島県志布志市志布志町に位置する安良遺跡は，縄文時代から近世までの複合遺跡である。中世の包含層から出土した炭化種実塊２個体について，走査型電子顕微鏡やX線CT画像解析を行い，内部の構造と炭化過程についての検討を行った。

### ２　資料と方法

資料は，B調査区の包含層から出土した炭化種実塊１号（分析No.１）と２号（分析No.２）の２点である。炭化種実塊から採取した種子を用いた放射性炭素年代測定の結果，１号が12世紀後半から13世紀中頃，２号が13世紀代の暦年代範囲を示した（第２節参照）。

試料の全体を観察後，デジタルカメラによる外面形態の写真撮影を行った。その後，走査型電子顕微鏡（超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510）を用いて，非蒸着で撮影を行った。分析No.１は大型で，塊のまま走査型電子顕微鏡で撮影するのは困難であったため，塊から剥離した破片の走査型電子顕微鏡写真撮影を行った。

X線CT画像解析は，炭化種実塊を充分に乾燥させた後，ラップで包んで試料台に固定し，ヤマト科学株式会社製の三次元計測X線CT装置（TDM3000H-FP）でX線CT画像を撮影した。X線管電圧は280KV，X線管電流は0.140mA，ビュー数1800，フレーム平均数１，検出器の積分時間は0.5secである。それぞれ任意の直交する三方向（上面（xy），正面（xz），右側面（yz））について数mm単位で断層写真撮影を行い，２DCT画像（スライス画像）を構築した。コントラストは透視画像と反転しており，X線が透過しやすい部分ほど濃いグレーで表示されている。断層像（CT像）の再構成は装置付属のソフトウェアを用い，マトリックスサイズ（各XYZ：1024pixel），再構成視野サイズ（各XYZ：30mm），再構成画素サイズ（各XYZ：0.029mm）の条件で再構成した。

炭化種実塊を構成する種実の計測は，分析No.１は11点，分析No.２は４点について，いずれも塊から剥離した完形に近い炭化種子を対象としてデジタルノギスで小数点第二位まで計測し，炭化種子の最小値，最大値，平均値，１標準偏差を求めた。なお，分析後は，パラロイドB72アセトン溶液による保存処理を行った。資料は，埋文センターに保管されている。

### ３　結果

３-１　炭化種実塊の外面形態の観察および同定

［分析No.1］

分析No.１は，長径83.5mm，短径67.2mm，厚さ35.4mmであった。第114図の上面は平坦面で種実は潰れており，上面の種実の形状は不明で，2.0mm程度の密な層がみられた（第115図-１，２）。上面以外の面は粒状のイネ種子が塊をなしていた（第115図-３～７）。すべての面を観察して同定した結果，イネの炭化種子（いわゆる炭化米）のみが観察された。どの面の種子も変形や膨張が著しかった。遊離した炭化種子の重量から完形個体数に換算すると，分析No.１の重量は種子約5,410点分に相当する。上面以外の面は，すべて埋没中などに割れた破断面と推定される。

分析No.１の上面は右上から左下方向に向かって，0.9mm前後の一定間隔の間に細い隆起がみられ，植物質の圧痕と推定される（第115図-８）。さらに圧痕とは直交する方向に線状の細い圧痕が１箇所みられた（第117図-９）。

［分析No.２］

分析No.２は，長径32.2mm，短径24.3mm，厚さ19.3mmであった。糊着力がほとんどなく，一部に籾が付着するイネ炭化種子で構成されている。小穂軸や護頴は観察できなかった。すべての面で観察されるイネは粒状で，密な面はみられなかった（第116図）。遊離した炭化種子の重量から完形個体に換算すると，分析No.２の重量は種子約390点分に相当する。炭化種子のほとんどには胚が残存していた。外面では穂状に粒が並ぶような状態は観察できなかったが，ある程度一定方向に粒が並ぶ様相が観察できた（第117図-15，16）。

次に，炭化種実の記載を行い，図版に写真を示して同定の根拠とする。

(1) イネ　Oryza sativa L.　炭化籾・炭化種子（頴果）　イネ科

籾は完形ならば側面観は長楕円形。縦方向に明瞭な稜線があり，基部は突出する。表面には縦方向に規則的に並ぶ顆粒状突起がある。分析No.2では，籾の完形個体はなかったが，種子の周囲に籾殻がみられた。

種子（頴果）は上面観が両凸レンズ形，側面観は楕円形。分析No.１では胚のあった一端が窪み，分析No.２では胚が残存する。両面に縦方向の２本の浅い溝がある。分析No.１の種子の完形個体11点の大きさは，長さ4.17～5.60（平均4.67±0.39）mm，幅2.18～2.90（平均2.43±0.23）mm。分析No.２の種子の完形個体４点の大きさは，長さ3.96～4.79（平均4.36±0.34）mm，幅2.16～2.84（平均2.51±0.29）mm（第77表）。

第119図に示した炭化種子の大きさは，長さ5.60mm，幅2.90mm（分析No.１：PLD-34608），長さ4.40mm，幅2.60mm（分析No.２：PLD-34609）。

分析No.１と２共に変形した個体が多く，特に分析No.1は水分で膨張したと思われる個体が多かったため，種実の形状の検討は行わなかった。

**第77表　種実塊粒径計測値**

（単位：㎜）

| 分析No. | 法量 | | 年代測定番号 |
|---|---|---|---|
| | 長さ | 幅 | |
| No.1 | 4.62 | 2.77 | |
| | 4.64 | 2.21 | |
| | 4.59 | 2.22 | |
| | 4.56 | 2.38 | |
| | 4.46 | 2.18 | |
| | 4.17 | 2.54 | |
| | 4.92 | 2.50 | |
| | 4.80 | 2.36 | |
| | 4.18 | 2.27 | |
| | 5.60 | 2.90 | PLD-34608 |
| | 4.78 | 2.42 | |
| 最小値 | 4.17 | 2.18 | |
| 最大値 | 5.60 | 2.90 | |
| 平均値 | 4.67 | 2.43 | |
| 標準偏差 | 0.39 | 0.23 | |
| No.2 | 4.29 | 2.43 | |
| | 4.79 | 2.16 | |
| | 4.40 | 2.60 | PLD-34609 |
| | 3.96 | 2.84 | |
| 最小値 | 3.96 | 2.16 | |
| 最大値 | 4.79 | 2.84 | |
| 平均値 | 4.36 | 2.51 | |
| 標準偏差 | 0.34 | 0.29 | |

3-2　炭化種実塊のX線CT画像による内部構造の観察

炭化種実塊を正面，右側面，上面から撮影したX線CT画像を第118図と第119図に示す。画像の白色部分は種実の間に残る土壌を示し，黒色部分は内部の空洞を示す。

［分析No.１］

内部構造の観察の結果，後述する上面の一部を除いて，炭化米塊内部の種子は粒の形状を保ち，方向は不規則で，表面に露出しているイネ種子の形状と比較して特に形状の違いはみられなかった（第119図）。また，内部にイネ以外の種実の可能性がある形状は観察されなかった。

［分析No.２］

分析No.２のおよそ中央部の範囲の二次元画像において，種子の周囲が二重になっており，種子の周囲に籾殻が付着している状況と推定された（第119図（A-A’やB-B’））。またA-A’ではイネの長軸方向である長楕円形が二重になっており，内部が空洞の個体が一定方向に連なっている状態が観察できた。A-A’と直交するC-C’ではイネの短軸方向が多く観察できた。種子の内部が消失し，空洞化している個体も多い。以上の観察から，一部ではイネが籾の状態で同一方向をむいて集積していると推定された。

遺跡から出土した炭化米塊の内部構造をX線CTで観察すると，おにぎりなどの調理後の米は，表面を手で握った結果，外縁部は米粒同士が糊着して形状が変形し，かつ米の密度が高いのに対し，内部は粒の形状が明瞭に残り，粒の間には空隙があるという特徴をもつ（佐々木ほか，2009）。今回検討した炭化種実塊のうち，分析No.１は一面が平坦で植物の圧痕が付いており，炊いた米が容器か包みに押し付けられた状態で炭化したと推定される。分析No.２のイネは籾の状態であったと推定され，規則的な方向性をもつ部分が観察されたため，穂の状態であった可能性もある。

## ４　考察

炭化種実塊について外部形態の観察および同定，CT画像による内部構造の観察を行った。

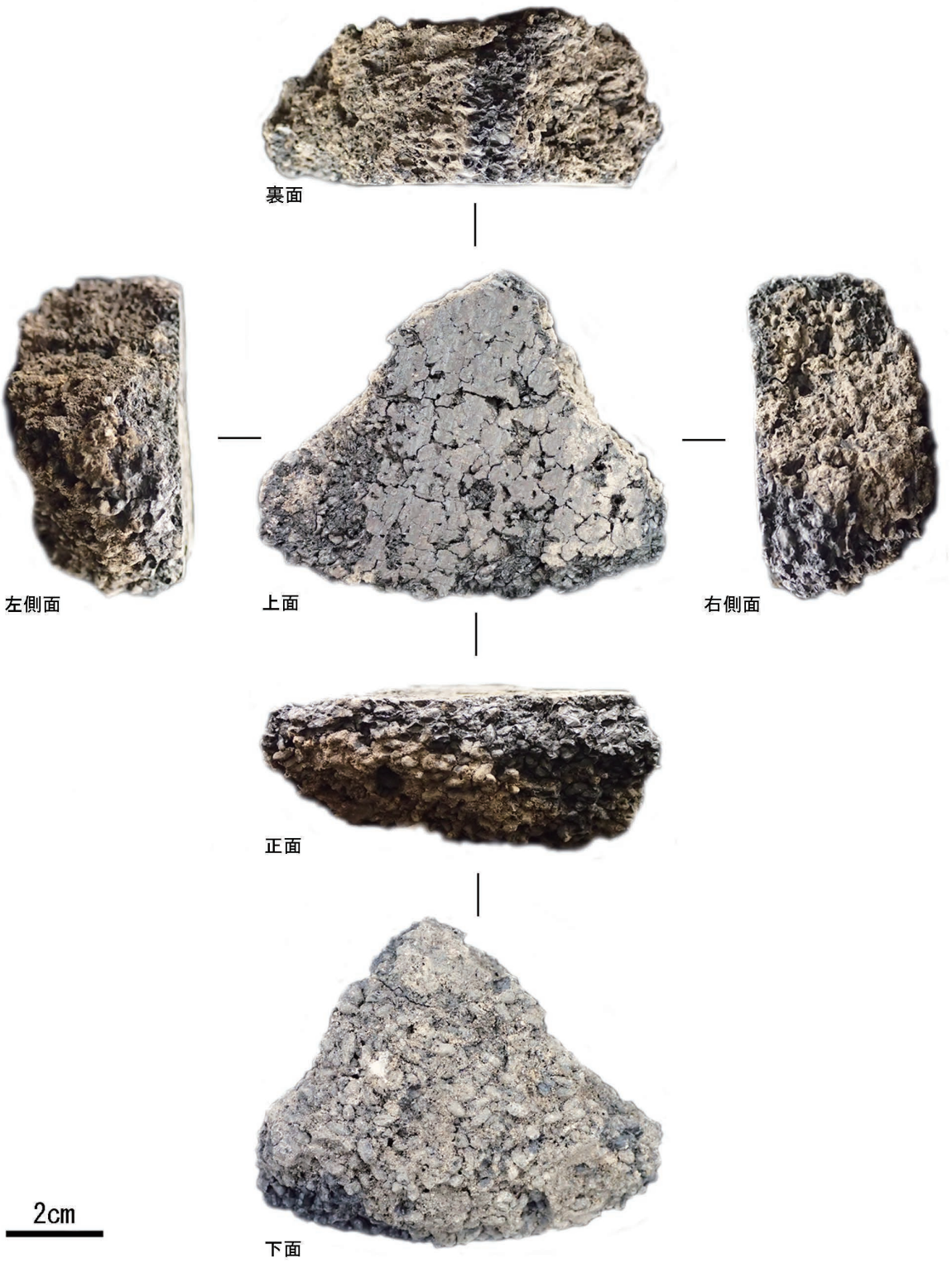
その結果，種子はイネ（いわゆる炭化米）で，分析No.１は容器に入れられたご飯，分析No.2は籾の状態で炭化していた。

分析No.１の容器や包み自体は残っていなかったが，上面は平坦で，一定方向に植物質の圧痕が残っていた。圧痕部分の植物組織を拡大して観察できなかったため，容器の材質については不明であるが，一定間隔で見えた隆起の間隔は１㎜未満と狭く，また間隔が必ずしも均質ではないため，スノコなどの編組製品ではなく，木材の可能性がある。平坦面以外は粒が変形し，密な状態で糊着しているため，炊いたコメを例えば押し寿司のように容器に強く押し付けて入れていた可能性が考えられる。

これまで九州地方では，米を炊き，容器や包みに入れた状態で炭化した塊は報告されておらず，当時の調理状態を示す資料として重要と考えられる。

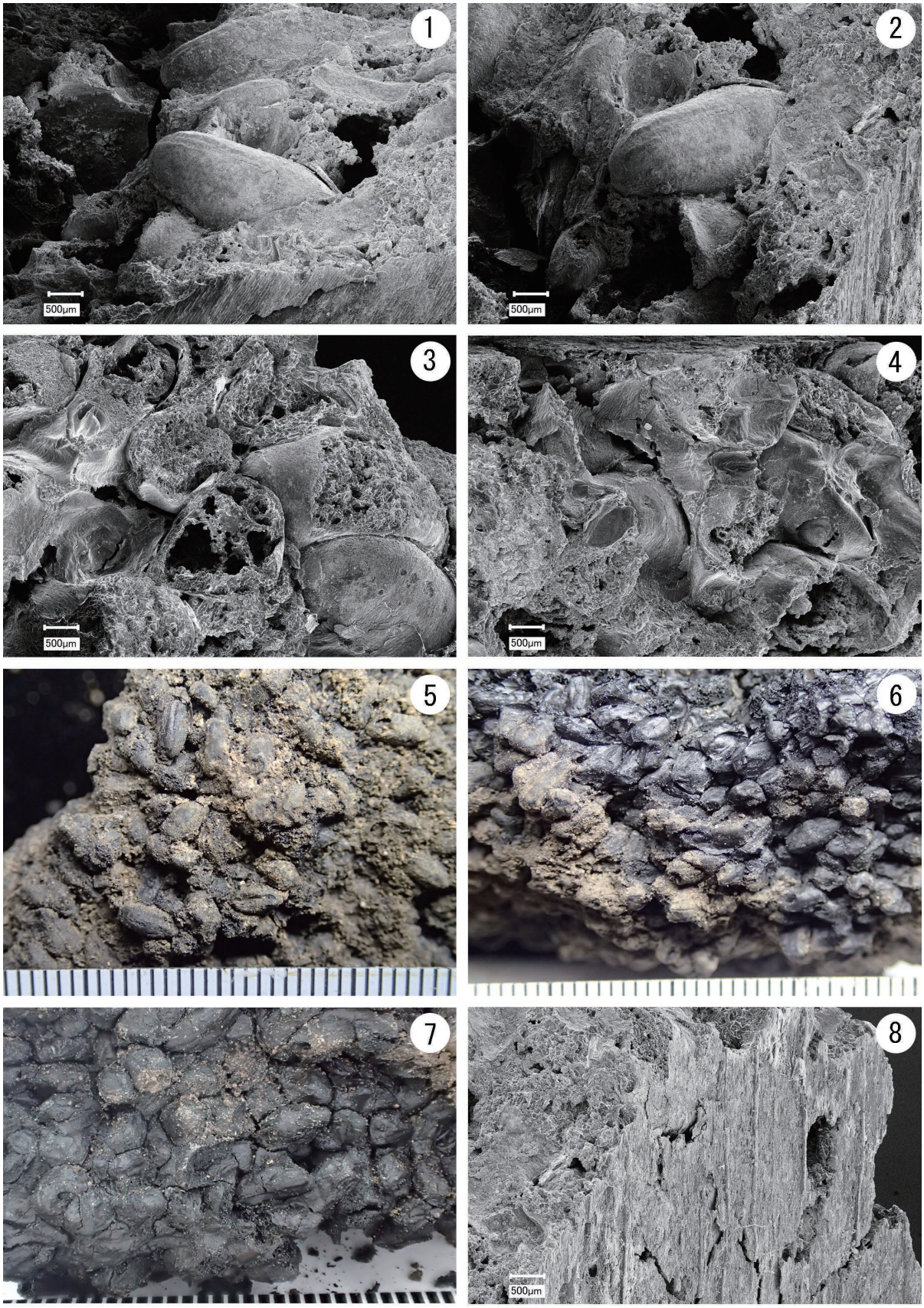
**【引用文献】**

佐々木由香・バンダリ　スダルシャン・米田恭子・村田健太郎・小石川篤2009「北川表の上遺跡出土炭化種実同定および炭化種実塊のX線CT画像解析による検討」財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター編『港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告(42)　北川表の上遺跡』：PP.423-435，横浜市教育委員会.




第114図　安良遺跡出土の炭化種実塊と全体写真（１）

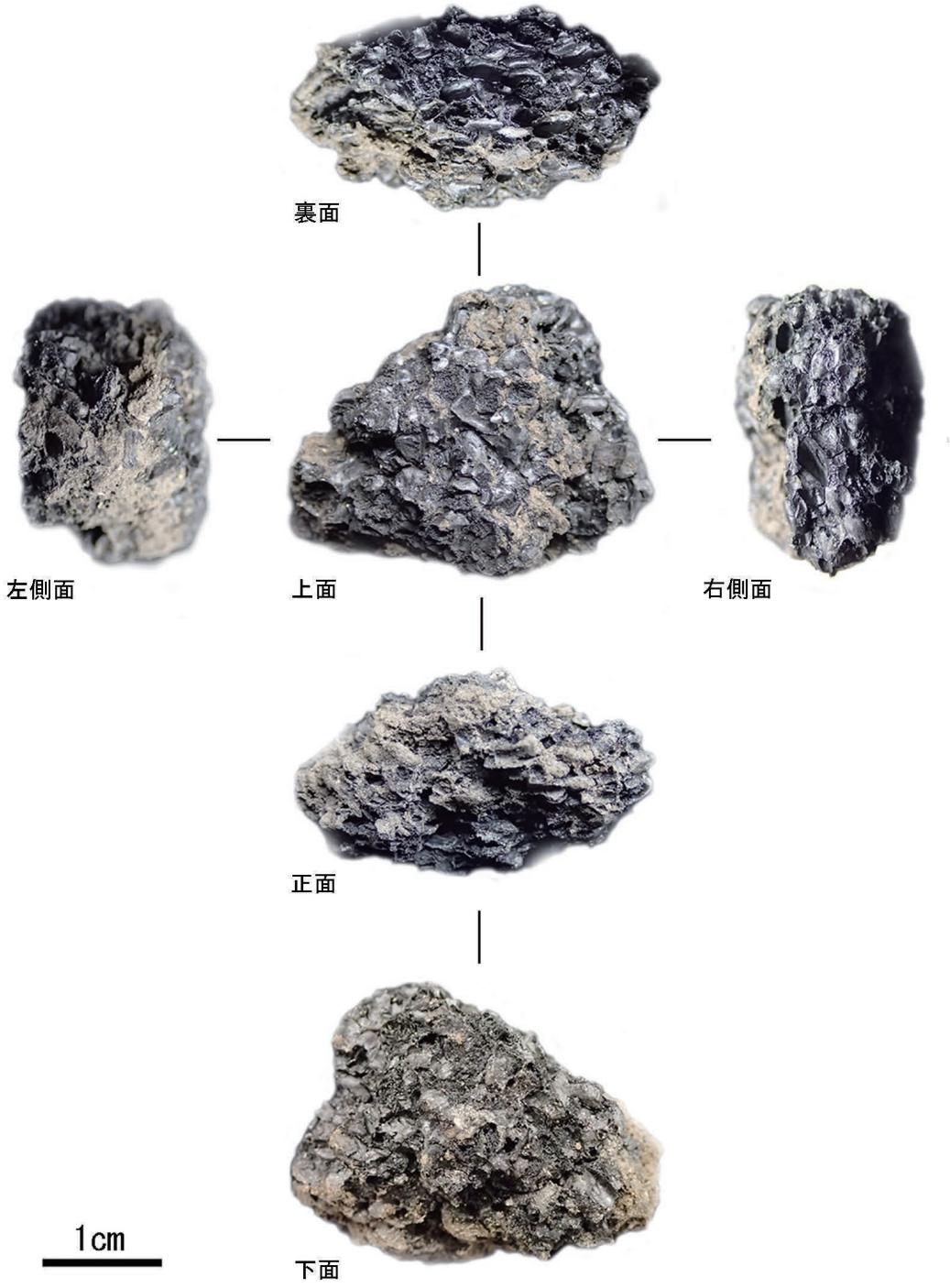
１　分析No.１（１号）



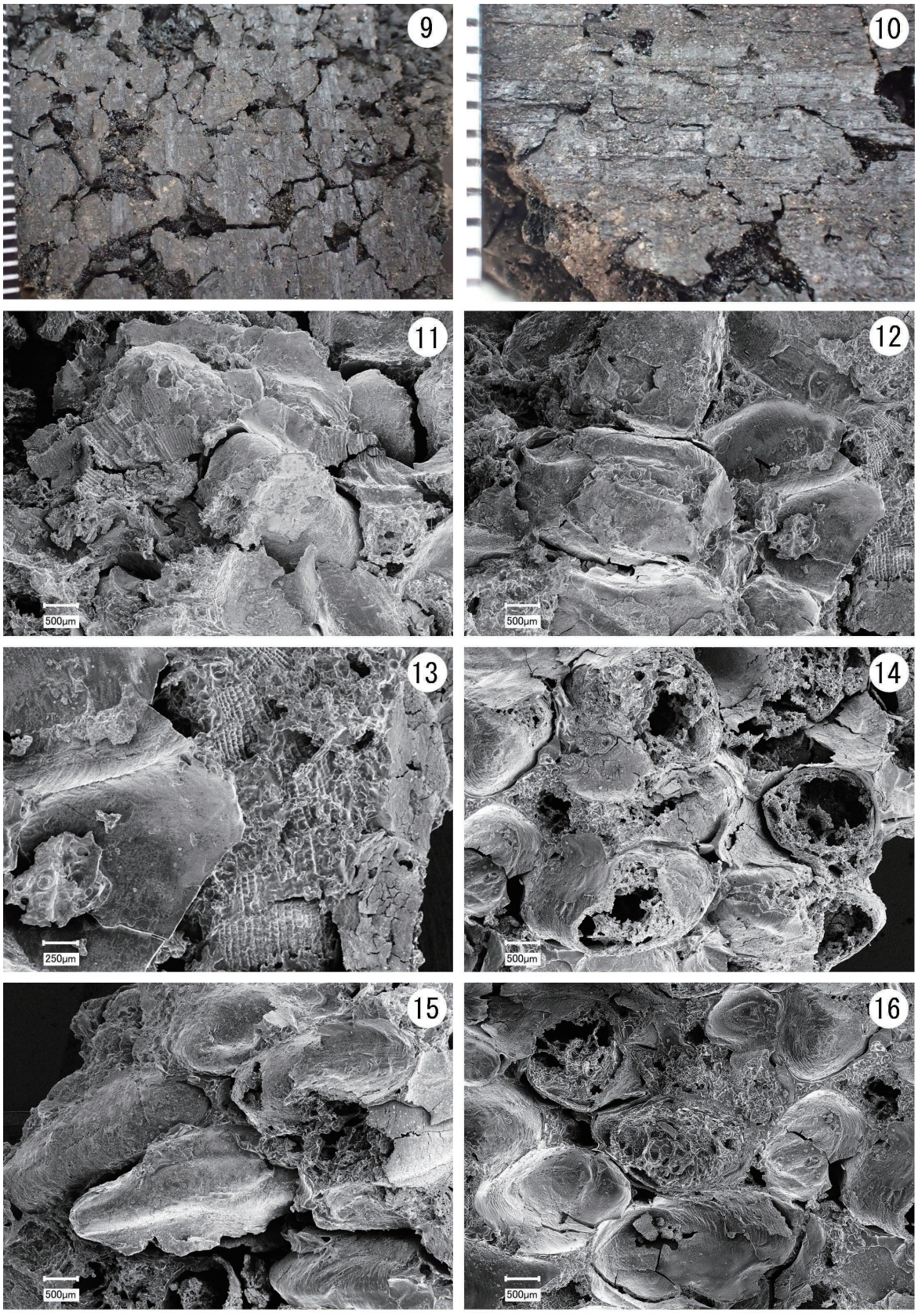

第115図　安良遺跡出土の炭化種実塊の拡大写真（１）

１～４・８　炭化種実塊（分析No.１）の走査型電子顕微鏡写真

５～７　炭化種実塊（分析No.１）のデジタルカメラ写真



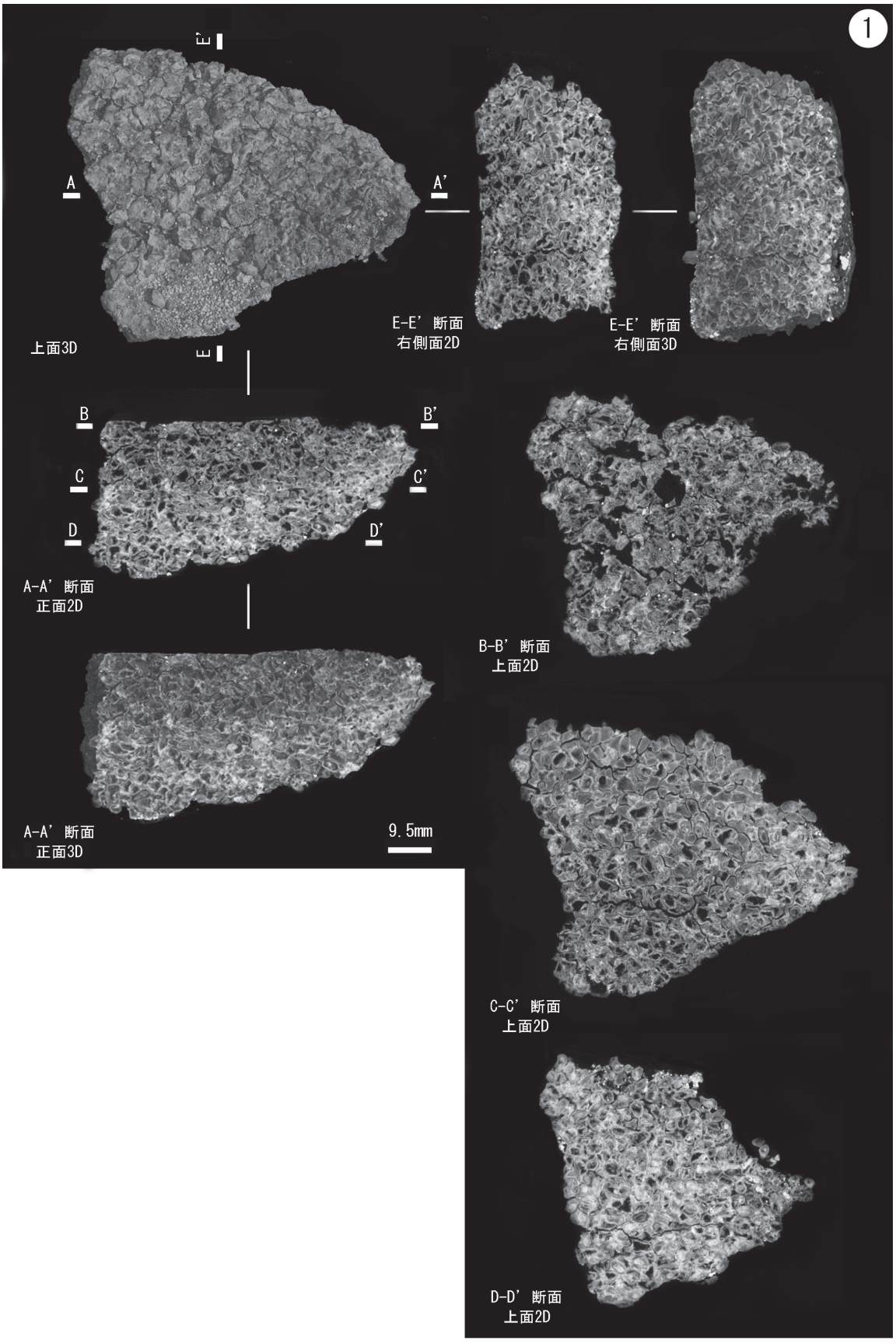

第116図　安良遺跡出土の炭化種実塊の拡大写真（2）
2　分析No.2（2号）




第117図　安良遺跡出土の炭化種実塊の拡大写真（2）

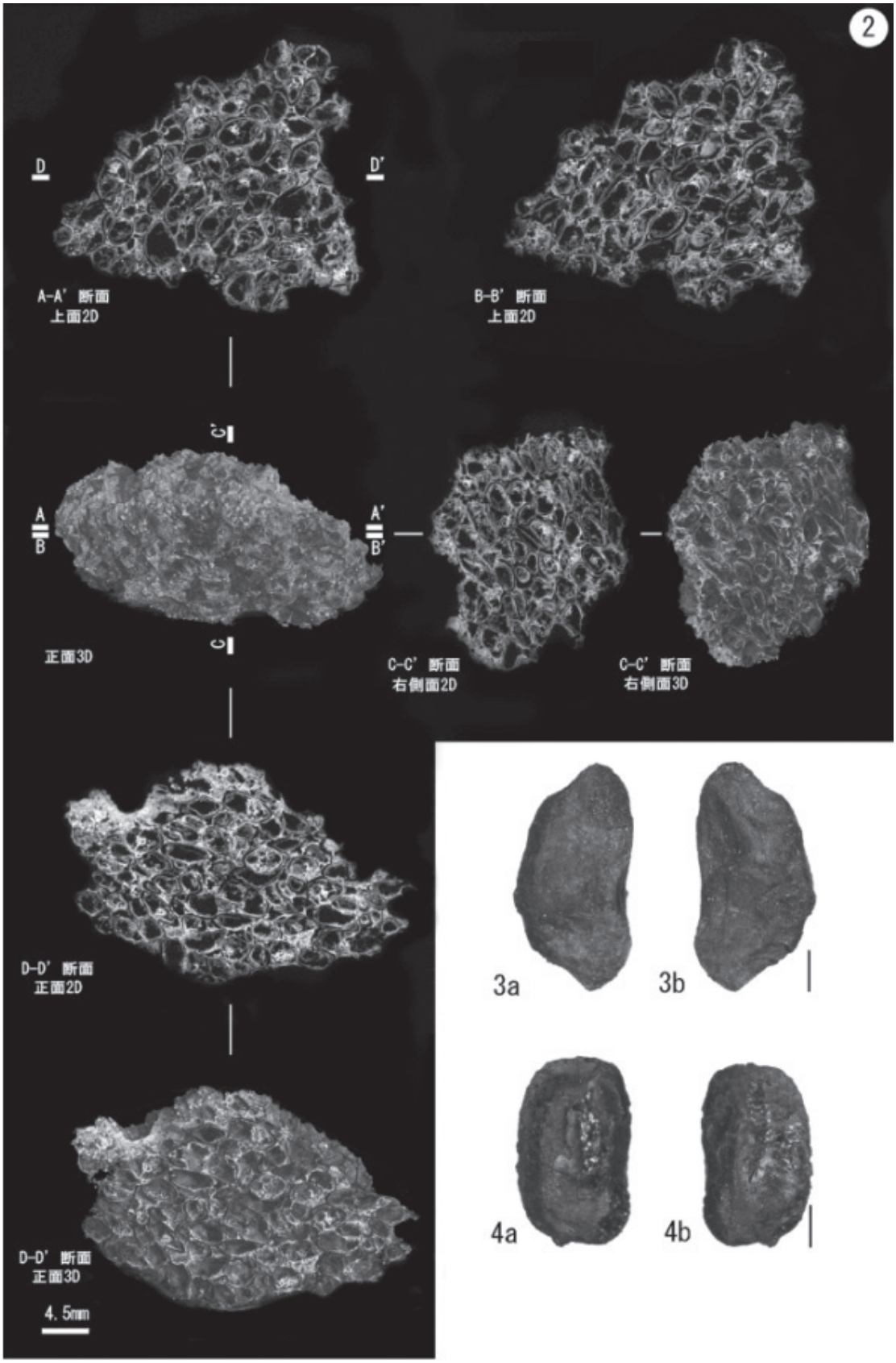
9・10　炭化種実塊（分析No.1）のデジタルカメラ写真

11～16　炭化種実塊（分析No.2）の走査型電子顕微鏡写真




第118図　安良遺跡出土の炭化種実塊のＣＴ画像（１）

１　分析No.１（１号）




第119図　安良遺跡出土の炭化種実塊のＣＴ画像（２）

２　分析No.２（２号），３・４　イネ炭化種子（３：PLD-34608，４：PLD-34609）

## 第５節　安良遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

### １　測定対象試料

鹿児島県に所在する安良遺跡の測定対象試料は，遺構から出土した炭化物８点である（第78表）。なお，これらのうち２点（試料３，５）については，同一試料の樹種同定が実施されている（第６節参照）。また，同じ遺構から出土した試料を含む炭化種実の同定が行われている（第７節参照）。

### ２　化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，土等の付着物を取り除く。

⑵　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」，１M未満の場合は「AaA」と第78表に記載する。

⑶　試料を燃焼させ，二酸化炭素（$CO_2$）を発生させる。

⑷　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

⑹　グラファイトを内径１mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

### ３　測定方法

加速器をベースとした$^{14}$C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，$^{14}$Cの計数，$^{13}$C濃度（$^{13}$C/$^{12}$C），$^{14}$C濃度（$^{14}$C/$^{12}$C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### ４　算出方法

⑴　$\delta^{13}$C は，試料炭素の$^{13}$C 濃度（$^{13}$C/$^{12}$C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第78表）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

⑵　$^{14}$C年代（Libby　Age：yrBP）は，過去の大気中$^{14}$C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。$^{14}$C年代は$\delta^{13}$Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第78表に，補正していない値を参考値として第79表に示した。$^{14}$C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，$^{14}$C年代の誤差（±１$\sigma$）は，試料の$^{14}$C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

⑶　pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の$^{14}$C濃度の割合である。pMCが小さい（$^{14}$Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（$^{14}$Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}$Cによって補正する必要があるため，補正した値を第78表に，補正していない値を参考値として第79表に示した。

⑷　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の$^{14}$C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の$^{14}$C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，$^{14}$C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１$\sigma$＝68.2％）あるいは２標準偏差（２$\sigma$＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が$^{14}$C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，$\delta^{13}$C補正を行い，下一桁を丸めない$^{14}$C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として第79表，第120図に示した。なお，暦年較正年代は，$^{14}$C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

### ５　測定結果

測定結果を第78表，第79表に示す。

試料８点の$^{14}$C年代は，1570±20yrBP（試料８）から390±20yrBP（試料４）の間にある。暦年較正年代（1$\sigma$）は，最も古い８が430～538cal　ADの間に３つの範囲，最も新しい４が1448～1610cal　ADの間に２つの範囲で示される。

今回測定された炭化物の多くは炭化材と見られる（細片のため不明なものもある）。炭化材については，次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は，その年輪が成長した

年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が，樹木が伐採され死んだ年代を示し，内側の年輪は，最外年輪からの年輪数の分，古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料には樹皮が確認されていないことから，炭化材となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は，すべて60％を超える適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

**【文献】**


Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian analysis of radiocarbon dates」『*Radiocarbon*』51(1)，337-360

Reimer, P.J. et al. 2013「IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP」『*Radiocarbon*』55(4)，1869-1887

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977「Discussion: Reporting of $^{14}C$ data」『*Radiocarbon*』 19(3)，355-363


**第78表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$補正値）**

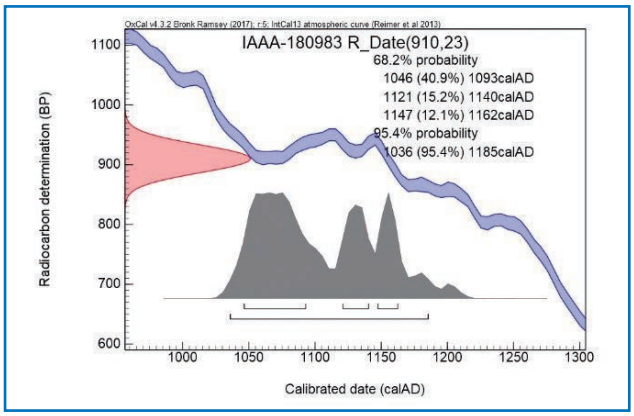
| 測定番号 | 試料名 | 採取場所 | 試料 | 処理 | $\delta^{13}C$(‰) | | $\delta^{13}C$補正あり | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 形態 | 方法 | (AMS) | | Libby Age (yrBP) | pMC(%) |
| IAAA-180983 | 1 | K-35　焼土域 | 炭化物 | AAA | -26.44 | ±0.27 | 910±20 | 89.29±0.26 |
| IAAA-180984 | 2 | 竪穴建物跡　SI-30 | 炭化物 | AAA | -30.25 | ±0.24 | 780±20 | 90.69±0.26 |
| IAAA-180985 | 3 | 竪穴建物跡　SI-30 | 炭化物 | AAA | -24.66 | ±0.31 | 440±20 | 94.63±0.28 |
| IAAA-180986 | 4 | 竪穴建物跡　SI-31 | 炭化物 | AAA | -25.34 | ±0.35 | 390±20 | 95.24±0.28 |
| IAAA-180987 | 5 | 竪穴建物跡　SI-35 | 炭化物 | AAA | -25.69 | ±0.28 | 950±20 | 88.83±0.26 |
| IAAA-180988 | 6 | 柱穴跡　SK39 | 炭化物 | AAA | -22.64 | ±0.28 | 940±20 | 88.95±0.26 |
| IAAA-180989 | 7 | 柱穴跡　SK39 | 炭化物 | AAA | -24.44 | ±0.41 | 850±20 | 89.93±0.27 |
| IAAA-180990 | 8 | 地下式横穴　羨道部 | 炭化物 | AaA | -24.72 | ±0.32 | 1570±20 | 82.3±0.25 |

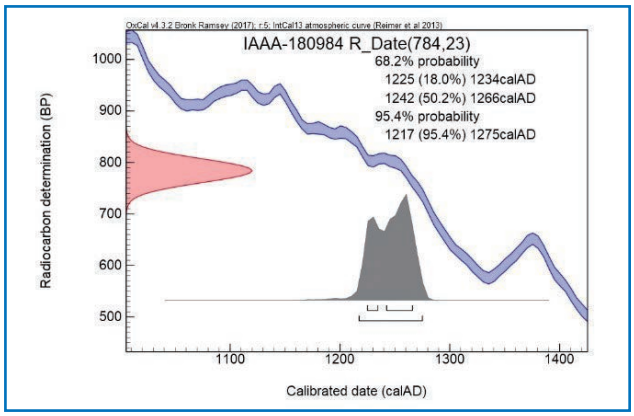
［IAA登録番号：#9217］

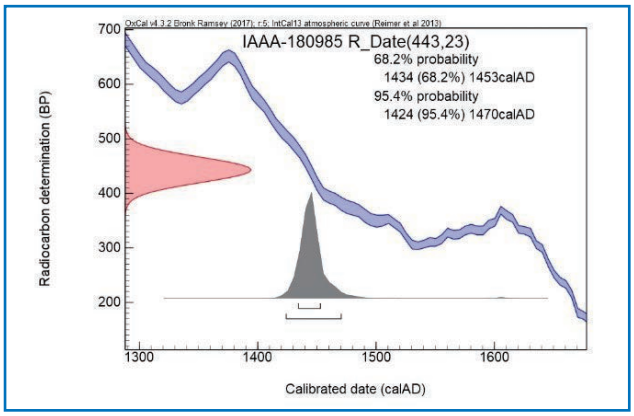
**第79表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$未補正値，暦年較正用$^{14}C$年代，較正年代）**

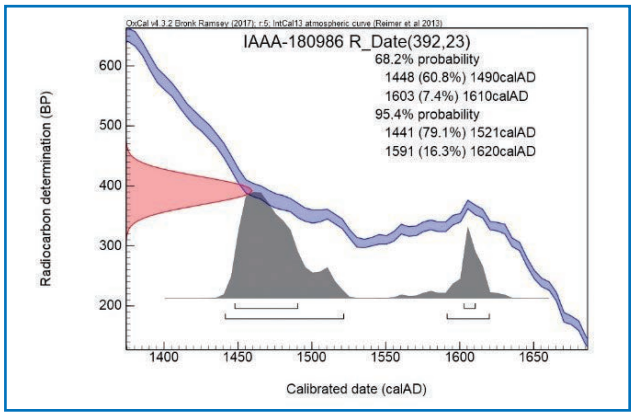
| 測定番号 | $\delta^{13}C$補正なし | | 暦年較正用 (yrBP) | 1σ暦年代範囲 | 2σ暦年代範囲 |
|---|---|---|---|---|---|
| | Age (yrBP) | pMC(%) | | | |
| IAAA-180983 | 930±20 | 89.03±0.26 | 910±23 | 1046calAD-1093calAD(40.9%) | 1036calAD-1185calAD(95.4%) |
| | | | | 1121calAD-1140calAD(15.2%) | |
| | | | | 1147calAD-1162calAD(12.1%) | |
| IAAA-180984 | 870±20 | 89.72±0.25 | 784±23 | 1225calAD-1234calAD(18.0%) | 1217calAD-1275calAD(95.4%) |
| | | | | 1242calAD-1266calAD(50.2%) | |
| IAAA-180985 | 440±20 | 94.7±0.27 | 443±23 | 1434calAD-1453calAD(68.2%) | 1424calAD-1470calAD(95.4%) |
| IAAA-180986 | 400±20 | 95.17±0.27 | 392±23 | 1448calAD-1490calAD(60.8%) | 1441calAD-1521calAD(79.1%) |
| | | | | 1603calAD-1610calAD( 7.4%) | 1591calAD-1620calAD(16.3%) |
| IAAA-180987 | 960±20 | 88.7±0.26 | 951±23 | 1029calAD-1049calAD(18.5%) | 1024calAD-1059calAD(26.4%) |
| | | | | 1085calAD-1124calAD(38.0%) | 1065calAD-1154calAD(69.0%) |
| | | | | 1137calAD-1150calAD(11.7%) | |
| IAAA-180988 | 900±20 | 89.38±0.25 | 940±23 | 1036calAD-1051calAD(12.5%) | 1030calAD-1155calAD(95.4%) |
| | | | | 1082calAD-1128calAD(40.7%) | |
| | | | | 1134calAD-1151calAD(15.0%) | |
| IAAA-180989 | 84±20 | 90.03±0.26 | 852±24 | 1169calAD-1216calAD(68.2%) | 1154calAD-1256calAD(95.4%) |
| IAAA-180990 | 156±20 | 82.34±0.24 | 1565±24 | 430calAD-493calAD(55.7%) | 422calAD-549calAD(95.4%) |
| | | | | 511calAD-517calAD( 4.8%) | |
| | | | | 529calAD-538calAD( 7.7%) | |

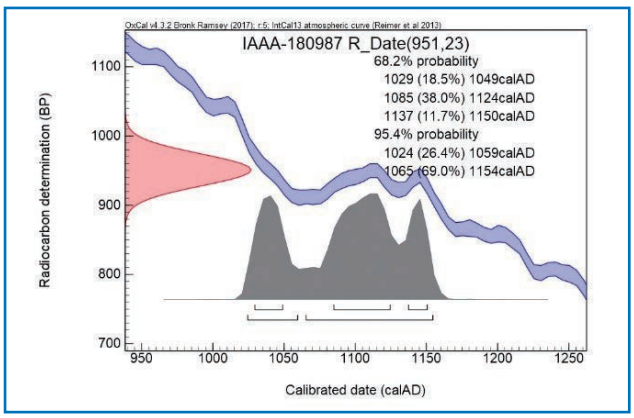
［参考値］

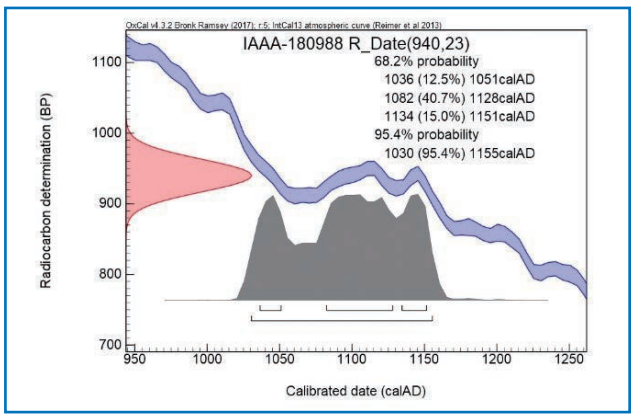


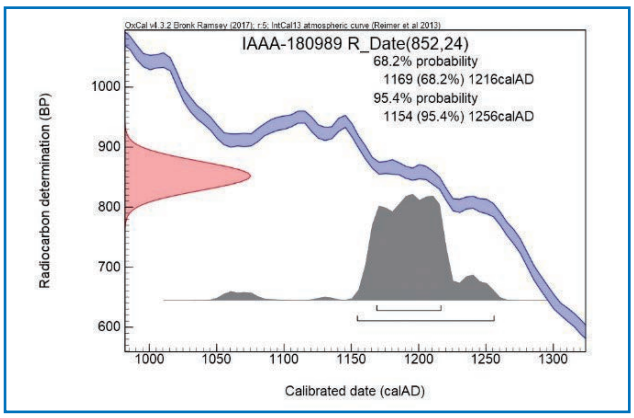



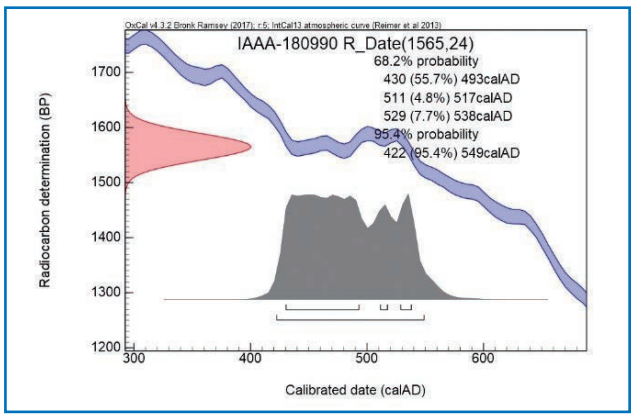




第120図　暦年較正年代グラフ（参考）

## 第６節　安良遺跡から出土した炭化材の樹種

### １　試料

鹿児島県に所在する安良遺跡の遺構から出土した炭化材２点を対象に，当時の木材における植物利用を調査する目的で樹種同定を行った。

なお，これらの試料については，同一試料の放射性炭素年代測定が実施されており，試料３は15世紀，試料５は11～12世紀の年代値が示されている（第５節参照）。

また，遺構等は異なるが，同遺跡で出土した炭化種実の同定も行われている（第７節参照）。

### ２　分析方法

炭化材試料はステンレス剃刀を用いて横断面，放射断面，接線断面の３方向断面を割り出し，反射光式顕微鏡Nikon ECLIPSE 80iで観察し，現生標本を参考に同定した。

### ３　結果

同定結果を第80表に示した。出土した炭化材はコナラ属クヌギ節とクヌギ節に近似する構造を持つ炭化材であった。以下，分類群ごとに形態を記載する。

・コナラ属クヌギ節（*Quercus* sect.Aegilops）

かなり大きな道管が数列配列したのち，厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材。放射細胞は同性で単列と広放射組織がある。

・アカガシ亜属またはクヌギ（subgen.*Cyclobalanopsis* or sect.*Aegilops*）

試料３は構造が複雑にねじ曲がり，安定した断面が得られなかった。１年輪分の横断面が観察できないが，徐々に小さくなる厚壁の丸い道管が見られ，接線断面と思われる面に大きな広放射組織が確認できた。クヌギ節に似るが，年輪初めの道管の大きさが確認できないので，アカガシ亜属の可能性もある。

### ４　考察

試料が出土した遺構の種類から，これらの炭化材は燃料材もしくは炭化した住居構築材の可能性がある。また試料３は構造的に激しく捻れ，根材や枝基部材と推測されることから，柱材や製品ではなく燃料材の可能性が高いと考えられる。

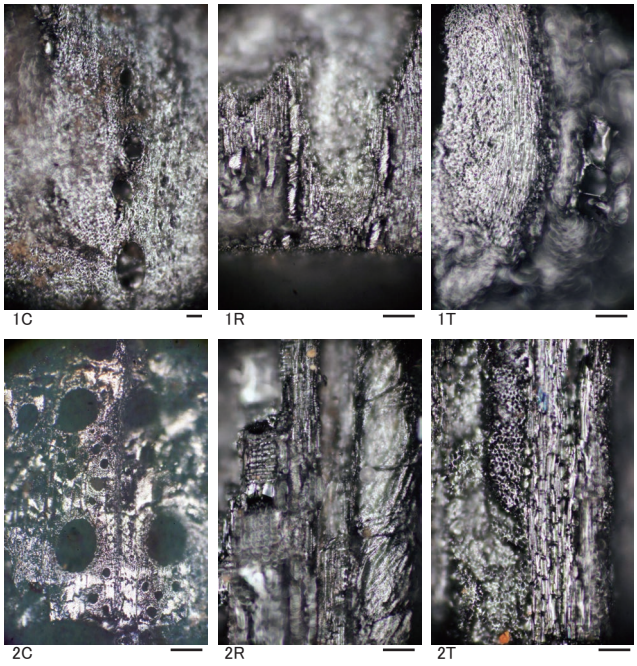
クヌギ節は造林が容易で伐採後もひこばえが出やすく燃料材などとして重宝されていたと考えられる。ただ，古代以降の九州地方ではシイ属やクスノキ属の利用が高率を占め，クヌギ節材の出土例は少なく，鹿児島県内では既存の出土例はないようである（伊東・山田2012）。

### 【文献】

伊東隆夫・山田昌久2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社．449p.

第80表　安良遺跡出土炭化材の樹種

| 試料No. | 区 | 遺構 | 取上番号 | 樹木種 |
|---|---|---|---|---|
| 3 | L-31 | 竪穴建物跡2（SI30） | — | アカガシ亜属またはクヌギ節 |
| 5 | L-32 | 竪穴建物跡1（SI35） | 7982 | クヌギ節 |




第121図　安良遺跡出土炭化材

１　アカガシ亜属（No.３），２　クヌギ節（No.５），Ｃ：横断面，Ｒ：放射断面，Ｔ：接線断面，スケールは0.1m

## 第７節　安良遺跡から出土した炭化種実

### １　試料

鹿児島県に所在する安良遺跡から出土した炭化種実40点を対象に，当時の食料としての植物利用を調査する目的でこれらの種類の同定を行った。

なお，炭化種実試料と同じ遺構の一部から出土した炭化物について，放射性炭素年代測定が実施されている。炭化種実試料27（取上№4437）が出土した柱穴跡６は11～12世紀，試料33・34が出土した竪穴建物跡３は15～17世紀，試料38が出土した地下式横穴墓は５～６世紀の値が示されている（第５節参照）。また，同遺跡で出土した炭化材の樹種同定も行われている（第６節参照）。

### ２　分析方法

炭化種実試料は肉眼及び実体顕微鏡Nikon　SMZ-10で観察し，現生標本を参考に同定した。

### ３　結果

同定結果を第81表に示した。出土した炭化種実はモモ，ウメ，カキノキ属，マメ科A，マメ科B，イネ，オオムギ，イネ科A，ササゲ属の分類群に同定された。以下，分類群ごとに形態を記載する。

なお，モモとウメについては計測可能な試料の高さ，幅，厚さを計測し，第81表の備考に示した。

・モモ（*Amygdalus persica* L.）

炭化した完形核，半分に割れた核と破片が出土した。２面の卵形で頂部はやや丸みを帯びた核がほとんどであるが，かなり突出して尖るものもある。基部は裂孔状である。接合部分の片側に基部から頂部に向かって深くまっすぐな亀裂が２本ほど走る。縦方向にやや深く太い流理状の溝が数本走り，深い孔が数個ある。現在食用としているモモの核よりはかなり小さいサイズである。

・ウメ（*Armeniaca mume*（Sieb. et Zucc.）de Vriese）

炭化した完形核が出土した。核は２面でほぼ球に近く，基部は裂孔状。モモのような深い溝は無いが接合部分の片側に基部から頂部に向かってやや深くまっすぐな亀裂が２本ほど走る。表面は浅い凹凸があり，浅くやや小さい孔がまばらに数十個ある。

・カキノキ属（*Diospyros*）

炭化した種子が出土した。種子は高さ9.3㎜の扁平な半楕円形で，基部がやや潰れたような不明瞭なへそがある。平滑な表面には細かい流線状模様がある。10㎜前後の大きさの種子のカキノキ属はリュウキュウガキやトキワガキなど何種類かあり，区別は困難である。

・マメ科A（Fabaceae A）

炭化した種子が出土した。種子は変形した円形，扁平で２面，一端が少しへこんだへそがある。半分に割れた種子では内部にへそから中央に向かってスプーン状のへこみがある。このようなマメ科種子はヤマフジやナツフジなどがあるが，確定には至らなかった。なお，マメ科Bは小破片であった。

・イネ（*Oryza sativa* L.）

炭化した穎果と種子(玄米)，胚乳が出土した。一部は塊状である。穎は上下端が尖った長卵形で，基部から頂部にかけて２，３本明瞭な稜があり，穎表面は瓦状構造である。玄米は種皮がついているため穎の瓦状模様が表面に印象されていて，胚も付着している。精米された胚乳は稜が残る場合があるが，表面が平滑になり，細長い楕円形で，胚は取れている場合が多い。

・オオムギ（*Hordeum vulgare* L.）

炭化した種子が出土した。種子は細長い紡錘形で両端は尖る。背面基部には楕円形の孔があり，腹面は中央に深い溝が１本ある。

・イネ科A（Gramineae A）

炭化した種子は線形で，腹面基部に楕円形のへそがあり，背面中央に１本溝が走る。

・ササゲ属（*Vigna*）

やや角ばった楕円形で２つに割れ，内部にやや伸びた子葉の痕跡が見られる。表面のへそは剥がれていた。

### ４　考察

古墳時代頃の年代値が示されている地下式横穴墓からはイネのみ出土した。

Ⅱa層については，検出された遺構出土試料の年代値から，おおむね古代から中世頃に属すると思われる。Ⅱa層では，モモ核が多く出土し，塊状の炭化米も出土した。また，オオムギ，ササゲ属，カキノキ属とやや大きなマメ科も出土した。モモ核は完形のほか，破片や半分に割れたものがある。出土数が最も多いのはモモ核であるが，現在食用としているモモの核よりはかなり小さいことから，果実も小さいものだった可能性がある。本遺跡で出土したモモ核は高さが17.3㎜～21.3㎜で，太田1986に掲載されている奈良末～平安のモモ核と比較しても小さい範囲に入る。本遺跡で出土したモモ核は全て炭化しているため，若干収縮した可能性はある。焼けたモモ核については甲骨の占いなどに関連している可能性があり，宮城県多賀城市の山王遺跡(阿部ほか2001)など炭化したモモ核が大量に出土する古代遺跡は多い。

試料11(2009)のイネは，一部胚が残っているものがあり，表面の観察では上下方向の稜線に横方向の規則的なしわが確認できるものがあることから，種皮が残った玄米の状態あるいは軽く搗いた種子が加熱されたようである。コメは生の保管状態で炭化されると互いの種子の間にかなり隙間ができるが，本遺跡で出土した炭化米の塊は一方が平らで互いの種子が隙間なく接着した状態で，しかも種子がやや潰れたり曲がった状態が多いことから，一度炊飯され柔らかくなった米が手で成型され，板などに密着した状態で炭化したと考えられる。食べる寸前まで準備された米が食べられることなく，しかも廃棄や腐

敗せずこのような状態で出土するのは珍しいと言える。県内の出土例は中世頃とされる上野城跡(パリノサーヴェイ2004)で粒状のイネとオオムギ，コムギ，ササゲ属を含むマメ類が出土していて，穀類の利用としては類似した傾向にある。

**【文献】**


阿部美和・辻誠一郎2001「(8)山王遺跡の古代植物遺体群」『山王遺跡八幡地区の調査』２．宮城県教育委員会・宮城県土木部．181-206.

太田三喜1986「古代遺跡出土の桃核について」『考古学と自然科学』　第19号　85-99.

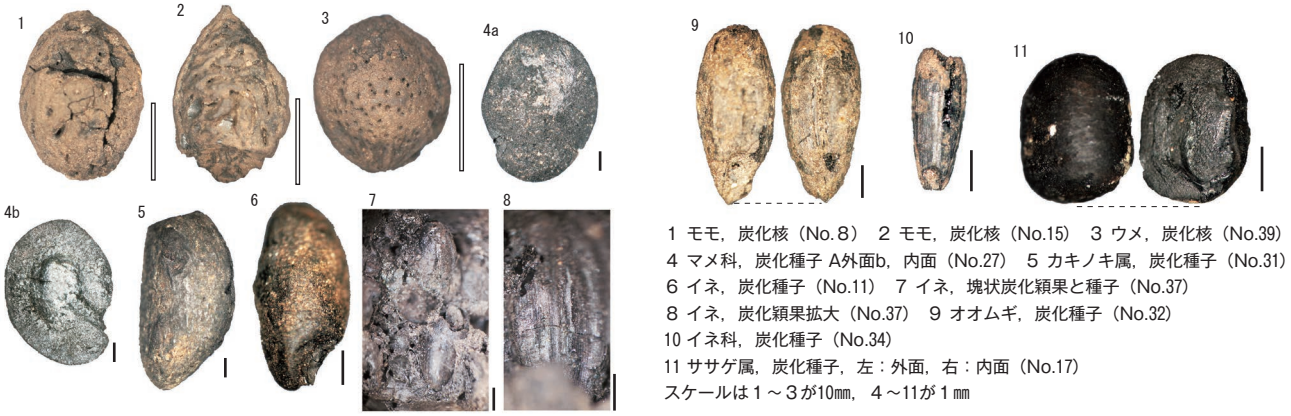
パリノサーヴェイ株式会社2004「第２節　上野城跡出土種実の同定」『上野城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(68)．202-207



なお，本分析は古代の森研究舎の協力を得て行った。


**第81表　安良遺跡出土炭化種実一覧表**

| 試料No. | 区 | 層 | 遺構 | 取上No. | 分類群名 | 出土部位 | 個数 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | L-32 | Ⅱa | | 1147 | モモ | 核炭化破片 | 4 | |
| 2 | L-32 | Ⅱa | | 1574 | モモ | 核炭化破片 | 5 | |
| 3 | L-32 | — | | 1589 | モモ | 核炭化破片 | 14+ | |
| 4 | L-32 | Ⅱa | | 1592 | モモ | 核炭化破片 | 12+ | |
| 5 | L-32 | Ⅱa | | 1593 | モモ | 核炭化破片 | 5+ | |
| 6 | L-32 | Ⅱa | | 1594 | モモ | 核炭化破片 | 1 | 高19.0　幅14.3(mm) |
| 7 | L-32 | Ⅱa | | 1595 | モモ | 核炭化破片 | 6+ | |
| 8 | L-32 | Ⅱa | | 1596 | モモ | 核炭化完形 | 1 | 高21.3　幅16.4　厚13.3(mm) |
| 9 | L-32 | Ⅱa | | 1921 | モモ | 核炭化破片 | 3 | |
| 10 | L-32 | Ⅱa | | 1924 | モモ | 核炭化破片 | 1 | 高17.4　幅15.0(mm) |
| 11 | L-32 | Ⅱa | 炭化ご飯塊出土地点 | 2009 | イネ | 種子炭化 | 50+ | L・K32区 |
| 12 | L-32 | Ⅱa | | 2010 | モモ | 核炭化完形欠け | 1 | |
| 13 | L-32 | Ⅱa | | 2012 | モモ | 核炭化完形 | 1 | 高17.3　幅14.1　厚11.0(mm) |
| | | | | | モモ | 核炭化半分 | 1 | |
| | | | | | モモ | 核炭化破片 | 9 | |
| 14 | L-32 | Ⅱa | | | モモ | 核炭化破片 | 2 | |
| 15 | L-32 | Ⅱa | | | モモ | 核炭化完形欠け | 1 | |
| 16 | L-32 | — | 柱穴11 | | イネ | 胚乳破片 | 4 | |
| 17 | L-34 | — | 掘立柱建物２-柱穴③ | | ササゲ属 | 種子炭化半分 | 2 | |
| 18 | K-28 | Ⅲ | | 1055 | モモ | 核炭化完形欠け | 1 | |
| 19 | K-31 | Ⅱa | | 1378 | モモ | 核炭化完形 | 1 | 高17.5　幅13.2　厚10.5(mm) |
| 20 | K-31 | Ⅱa | | 1455 | モモ | 核炭化破片 | 5 | |
| 21 | K-32 | Ⅱa | | 1999 | モモ | 核炭化半分 | 1 | |
| 22 | K-32 | Ⅱa | | 2005 | モモ | 核炭化破片 | 4 | |
| 23 | K-32 | Ⅱa | | 2008 | モモ | 核炭化破片 | 17 | |
| 24 | K-32 | Ⅱa | | 2181 | モモ | 核炭化半分 | 1 | 高21.0　幅16.0(mm) |
| 25 | K-32 | Ⅱa | | 2186 | モモ | 核炭化破片 | 4 | |
| 26 | K-32 | Ⅱa | | | モモ | 核炭化完形欠け | 1 | |
| 27 | K-32 | | 柱穴６ | 4437 | マメ科A | 種子炭化完形 | 1 | |
| | | | | | マメ科A | 種子炭化半分 | 2 | |
| 28 | K-32 | | 柱穴８ | 7892 | モモ | 核炭化破片 | 4 | |
| 29 | K-32 | | 柱穴７ | | モモ | 核炭化破片 | 9 | |
| 30 | | | 炭化ご飯塊出土地点 | | オオムギ | 未熟種子炭化完形 | 2 | L・K32区 |
| 31 | | | 炭化ご飯塊出土地点 | | カキノキ属 | 種子炭化完形 | 2 | L・K32区 |
| 32 | | | 炭化ご飯塊出土地点 | | オオムギ | 種子炭化完形 | 3 | L・K32区 |
| 33 | | | 竪穴建物２　埋土② | | オオムギ | 種子炭化完形 | 1 | |
| 34 | | | 竪穴建物２　埋土⑦ | | イネ科A | 種子炭化完形 | 1 | |
| 35 | | | 竪穴建物３　埋土 | | マメ科B | 種子炭化破片 | 4 | |
| 36 | | | 竪穴建物３　B内埋土 | | 非種実のみ | | | |
| 37 | | Ⅱa上 | 柱穴８ | スミ⑮ | イネ | 穎果と種子塊 | | |
| 38 | | | 地下式横穴墓埋土 | | イネ | 胚乳炭化 | 1 | |
| 39 | | Ⅱa上 | 帯状硬化面２ | | ウメ | 核炭化完形 | 1 | 高15.0　幅13.5　厚11.0(mm) |
| 40 | | | 柱穴３ | | イネ | 胚乳炭化 | 3 | 木炭とモミ塊がともに埋土中に存在 |




1 モモ，炭化核（No.８）　2 モモ，炭化核（No.15）　3 ウメ，炭化核（No.39）
4 マメ科，炭化種子 A外面b，内面（No.27）　5 カキノキ属，炭化種子（No.31）
6 イネ，炭化種子（No.11）　7 イネ，塊状炭化穎果と種子（No.37）
8 イネ，炭化穎果拡大（No.37）　9 オオムギ，炭化種子（No.32）
10 イネ科，炭化種子（No.34）
11 ササゲ属，炭化種子，左：外面，右：内面（No.17）
スケールは１～３が10㎜，４～11が１㎜

**第122図　安良遺跡出土炭化種実**

## 第８節　放射性炭素年代測定

### １　試料と方法

測定試料の情報，調製データは第82表のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた$^{14}$C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，$^{14}$C年代，暦年代を算出した。

### ２　結果

第83表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}$C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した$^{14}$C年代，第123図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

$^{14}$C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。$^{14}$C年代（yrBP）の算出には，$^{14}$Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した$^{14}$C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の$^{14}$C年代がその$^{14}$C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の$^{14}$C濃度が一定で半減期が5568年として算出された$^{14}$C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の$^{14}$C濃度の変動，および半減期の違い（$^{14}$Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}$C年代の暦年較正にはOxCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された$^{14}$C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は$^{14}$C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### ３　考察

２σ暦年代範囲は，試料No.１（PLD-38023）が５世紀前半～７世紀前半，試料No.２（PLD-38024）が５世紀前半～６世紀末，試料No.３（PLD-38025）が６世紀前半～７世紀前半，試料No.４（PLD-38026）が５世紀前半～６世紀後半，試料No.５（PLD-38027）が５世紀前半～７世紀初頭となる。

なお，土器付着炭化物の年代については，土器の煮炊き内容物に海産物が含まれる可能性があるため，海洋リザーバー効果の影響も合わせて検討する必要がある（小林2014）。今回の土器付着炭化物の$\delta^{13}$C 値は，吉田が示した（吉田2012），植物のほとんどすべてに該当するとみなして良いC3植物に由来する-33～-23‰の範疇に収まる。ただし，$\delta$13C値は，同位体比質量分析計（IRMS）での測定値で検討を行う必要性があり，加速器質量分析計（AMS）による測定値は参考値に留めておく必要がある（小林2014）。参考値ではあるが，今回の土器付着炭化物の年代は，海洋リザーバー効果の影響を考慮する必要がない可能性が示唆される。

また，試料の炭素含有量は，試料No.２以外は50%を超えている。土器付着炭化物の通常の炭素含有率は，50～60%とされるため（小林2017），50%を超える試料No.２以外の試料は，化学処理，測定上問題ないと判断される。一方，炭素含有量がかなり低い試料は，土器胎土や埋没土壌に含まれる鉱物起源の古い微量の炭素の影響を受け，数百$^{14}$C年程度，相対的に古い年代値を示す場合がある（小林2017）。このため，炭素含有量が37%を示した試料No.２の年代値の評価には注意を要する。

**【参考文献】**


Bronk Ramsey, C. 2009「Bayesian Analysis of Radiocarbon dates」『Radiocarbon』51(1), 337-360.

小林謙一2014「弥生移行期における土器使用状況からみた生業」『国立歴史民俗博物館研究報告』185, 283-347.

小林謙一2017『縄紋時代の実年代－土器型式編年と炭素14年代－』263p，同成社.

中村俊夫2000「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の$^{14}$C年代編集委員会編『日本先史時代の$^{14}$C年代』3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P.,


**第82表　測定試料および処理**

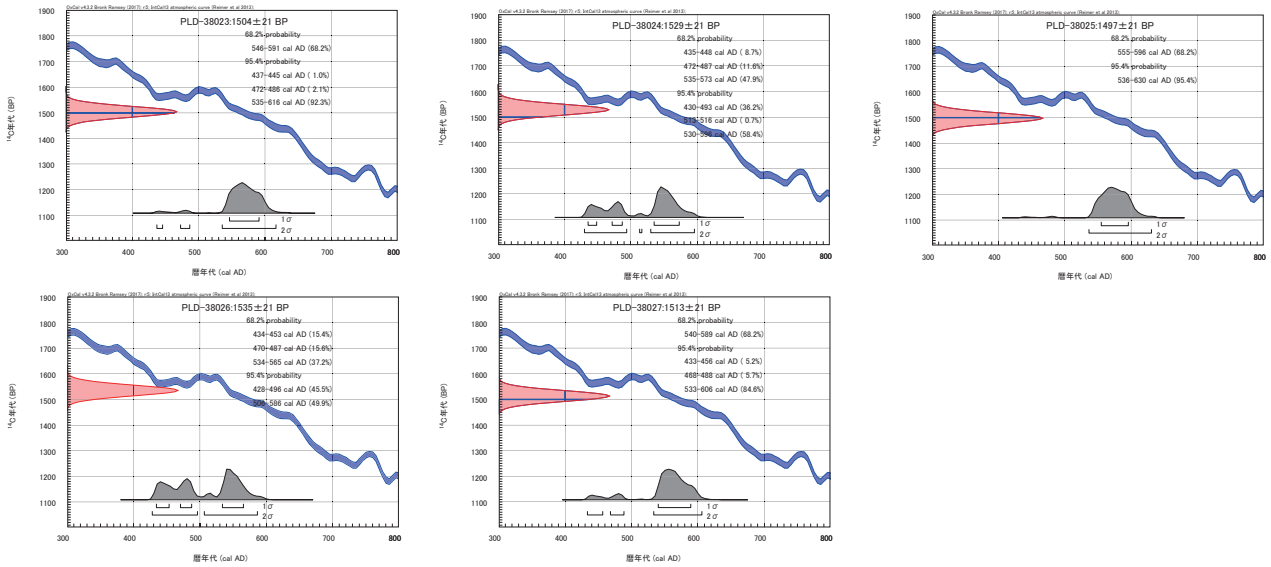
| 測定番号 | 遺跡データ | 試料データ | 前処理 |
|---|---|---|---|
| PLD-38023 | 調査区：J38<br>遺物No.SD2-239<br>試料No.1<br>その他：掲載No.229 | 種類：土器付着物<br>（胴部中ほど・外面）<br>器種：口縁部外反・無文<br>状態：dry<br>ガス化重量：2.25mg<br>炭素含有量：1.29mg | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄<br>（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） |
| PLD-38024 | 調査区：M38<br>遺物No.7537<br>試料No.2<br>その他：掲載No.250 | 種類：土器付着物<br>（胴部中ほど・外面）<br>器種：口縁部外反・無文<br>状態：dry<br>ガス化重量：2.12mg<br>炭素含有量：0.88mg | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄<br>（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） |
| PLD-38025 | 調査区：J38<br>遺物No.SD2-216<br>試料No.3<br>その他：掲載No.217 | 種類：土器付着物<br>（胴部中ほど・外面）<br>器種：口縁部直行・突帯<br>状態：dry<br>ガス化重量：2.18mg<br>炭素含有量：1.21mg | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄<br>（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） |
| PLD-38026 | 調査区：M38<br>遺物No.7538<br>試料No.4<br>その他：掲載No.225 | 種類：土器付着物<br>（突帯の下付近・外面）<br>器種：口縁部内湾・刻目突帯<br>状態：dry<br>ガス化重量：2.26mg<br>炭素含有量：1.24mg | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄<br>（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） |
| PLD-38027 | 調査区：K38<br>遺物No.SD2-322<br>試料No.5<br>その他：掲載No.235 | 種類：土器付着物<br>（口縁部～突帯の上・外面）<br>器種：口縁部内湾・間隔のあいた刻目突帯<br>状態：dry<br>ガス化重量：2.75mg<br>炭素含有量：1.71mg | 超音波洗浄<br>有機溶剤処理：アセトン<br>酸・アルカリ・酸洗浄<br>（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N） |

Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013「IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP」『Radiocarbon』55(4), 1869–1887.

吉田邦夫2012「古食性分析〈縄文人の食卓〉」吉田邦夫編『アルケオメトリア：考古遺物と美術工芸品を科学の眼で透かし見る』44–55，東京大学総合博物館.

**第83表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果**

| 測定番号 | δ13C (‰) | 暦年較正用年代 (yrBP±1σ) | 14C年代 (yrBP±1σ) | 14C年代を暦年代に較正した年代範囲 | |
|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 1σ暦年代範囲 | 2σ暦年代範囲 |
| PLD-38023<br>試料No.1<br>掲載No.229 | −28.13±0.24 | 1504±21 | 1505±20 | 546–591 cal AD（68.2%） | 437–445 cal AD（ 1.0%）<br>472–486 cal AD（ 2.1%）<br>535–616 cal AD（92.3%） |
| PLD-38024<br>試料No.2<br>掲載No.250 | −28.14±0.21 | 1529±21 | 1530±20 | 435–448 cal AD（ 8.7%）<br>472–487 cal AD（11.6%）<br>535–573 cal AD（47.9%） | 430–493 cal AD（36.2%）<br>513–516 cal AD（ 0.7%）<br>530–596 cal AD（58.4%） |
| PLD-38025<br>試料No.3<br>掲載No.217 | −28.01±0.25 | 1497±21 | 1495±20 | 555–596 cal AD（68.2%） | 536–630 cal AD（95.4%） |
| PLD-38026<br>試料No.4<br>掲載No.225 | −27.99±0.23 | 1535±21 | 1535±20 | 434–453 cal AD（15.4%）<br>470–487 cal AD（15.6%）<br>534–565 cal AD（37.2%） | 428–496 cal AD（45.5%）<br>506–586 cal AD（49.9%） |
| PLD-38027<br>試料No.5<br>掲載No.235 | −27.92±0.22 | 1513±21 | 1515±20 | 540–589 cal AD（68.2%） | 433–456 cal AD（ 5.2%）<br>468–488 cal AD（ 5.7%）<br>533–606 cal AD（84.6%） |




**第123図　暦年較正結果**

## 第９節　安良遺跡における放射性炭素年代

### １　測定対象試料

鹿児島県に所在する安良遺跡の測定対象試料は，遺構から出土した炭化材5点である（第84表）。

### ２　化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い，土等の付着物を取り除く。

(2)　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3)　試料を燃焼させ，二酸化炭素（$CO_2$）を発生させる。

(4)　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5)　精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

(6)　グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

## 3　測定方法

加速器をベースとした$^{14}$C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，$^{14}$Cの計数，$^{13}$C濃度（$^{13}$C/$^{12}$C）$^{14}$C濃度（$^{14}$C/$^{12}$C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 4　算出方法

(1)　$\delta$13C は，試料炭素の$^{13}$C 濃度（$^{13}$C/$^{12}$C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第84表)。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2)　$^{14}$C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中$^{14}$C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。$^{14}$C年代は$\delta^{13}$Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第84表に，補正していない値を参考値として第85表に示した。$^{14}$C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，$^{14}$C年代の誤差（±1$\sigma$）は，試料の$^{14}$C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC (percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の$^{14}$C濃度の割合である。pMCが小さい（$^{14}$Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（$^{14}$Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}$Cによって補正する必要があるため，補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表２に示した。

(4)　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の$^{14}$C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の$^{14}$C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，$^{14}$C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1$\sigma$＝68.2%）あるいは２標準偏差（2$\sigma$＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が$^{14}$C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，$\delta^{13}$C補正を行い，下一桁を丸めない$^{14}$C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表２，図１に示した。なお，暦年較正年代は，$^{14}$C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal　BC/AD」という単位で表される。

## 5　測定結果

測定結果を第84・85表に示す。

試料の$^{14}$C年代は，試料１が830±20yrBP，試料２が890±20yrBP，試料３が700±20yrBP，試料４が970±20yrBP，試料5が1540±20yrBPである。暦年較正年代（1$\sigma$）は，試料1が1187～1247cal ADの範囲，試料２が1050～1189cal ADの間に３つの範囲，試料３が1275～1295cal ADの範囲，試料4が1023～1147cal ADの間に３つの範囲，試料5が434～565cal　ADの間に3つの範囲で示される。

今回測定された試料はいずれも炭化材と見られ，次に記す古木効果を考慮する必要がある。

樹木の年輪の放射性炭素年代は，その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が，樹木が伐採され死んだ年代を示し，内側の年輪は，最外年輪からの年輪数の分，古い年代値を示すことになる（古木効果)。今回測定された試料には樹皮が確認されていないことから，炭化材となった木が死だ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

試料の炭素含有率は，すべて60%を超える適正な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

## 【文献】


Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1),

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4)

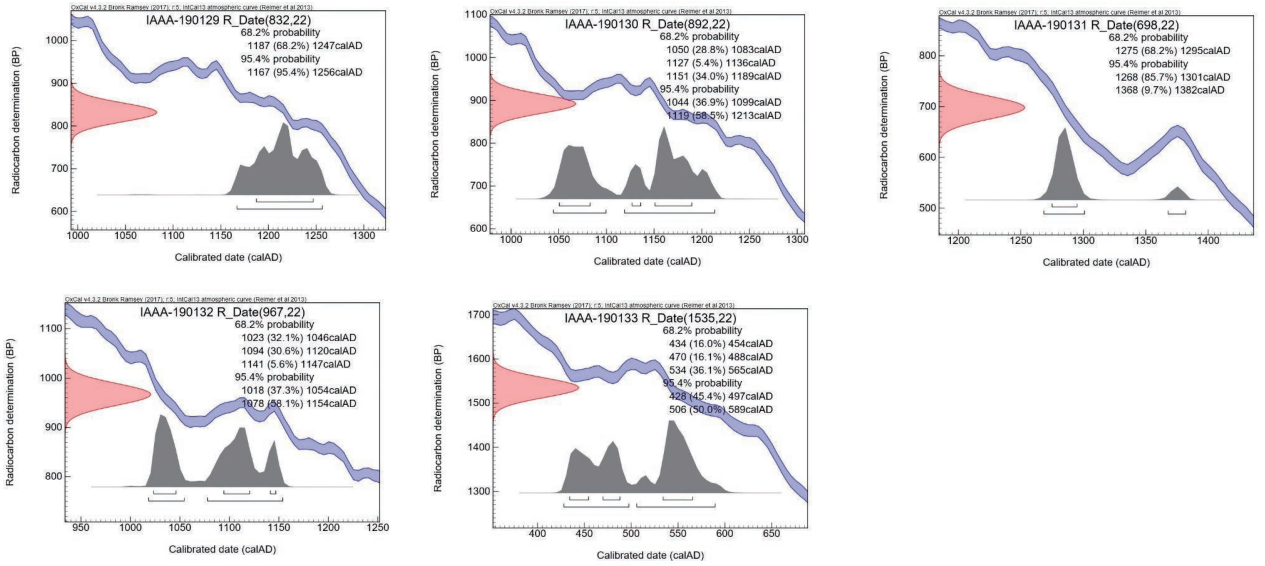
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of $^{14}$C data, *Radiocarbon* 19(3)


**第84表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}$C補正値）**

| 測定番号 | 試料名 | 採取場所 | 試料形態 | 処理方法 | $\delta^{13}$C(‰) (AMS) | $\delta^{13}$C補正あり | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | Libby Age (yrBP) | pMC(%) |
| IAAA-190129 | 1 | 柱穴跡12 | 炭化材 | AAA | 27.12±0.25 | 830±20 | 90.15±0.25 |
| IAAA-190130 | 2 | 柱穴跡11 | 炭化材 | AAA | 27.29±0.25 | 890±20 | 89.48±0.26 |
| IAAA-190131 | 3 | 溝状遺構７ | 炭化材 | AAA | 25.20±0.25 | 700±20 | 91.67±0.26 |
| IAAA-190132 | 4 | K-35区焼土 | 炭化材 | AAA | 25.77±0.25 | 970±20 | 88.66±0.25 |
| IAAA-190133 | 5 | 溝状遺構３ | 炭化材 | AAA | 25.94±0.25 | 1,540±20 | 82.60±0.24 |

第85表　放射性炭素年代測定結果（δ13C未補正値，暦年較正用14C年代，較正年代）

| 測定番号 | δ13C補正なし | | 暦年較正用 (yrBP) | 1σ暦年代範囲 | 2σ暦年代範囲 |
|---|---|---|---|---|---|
| | Age (yrBP) | pMC(%) | | | |
| IAAA-190129 | 870±20 | 89.76±0.25 | 832±22 | 1187calAD-1247calAD(68.2%) | 1167calAD-1256calAD(95.4%) |
| IAAA-190130 | 930±20 | 89.06±0.25 | 892±22 | 1050calAD-1083calAD(28.8%)<br>1127calAD-1136calAD( 5.4%)<br>1151calAD-1189calAD(34.0%) | 1044calAD-1099calAD(36.9%)<br>1119calAD-1213calAD(58.5%) |
| IAAA-190131 | 700±20 | 91.63±0.25 | 698±22 | 1275calAD-1295calAD(68.2%) | 1268calAD-1301calAD(85.7%)<br>1368calAD-1382calAD( 9.7%) |
| IAAA-190132 | 980±20 | 88.52±0.24 | 967±22 | 1023calAD-1046calAD(32.1%)<br>1094calAD-1120calAD(30.6%)<br>1141calAD-1147calAD( 5.6%) | 1018calAD-1054calAD(37.3%)<br>1078calAD-1154calAD(58.1%) |
| IAAA-190133 | 1550±20 | 82.44±0.23 | 1,535±22 | 434calAD-454calAD(16.0%)<br>470calAD-488calAD(16.1%)<br>534calAD-565calAD(36.1%) | 428calAD-497calAD(45.4%)<br>506calAD-589calAD(50.0%) |




第124図　暦年較正年代グラフ(参考)

## 第10節　安良遺跡から出土した炭化材の樹種

### はじめに

本報告では，遺跡より出土した炭化材に対して，木材組織の特徴から樹種同定を行う。木材は，セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり，木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。木材は，花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから，比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

### 1　試料

鹿児島県に所在する安良遺跡の柱穴12内埋土,柱穴11内埋土①よりそれぞれ出土した炭化材２点（試料１，２）である。

なお，これらの同一試料を含む5点の炭化材の放射性炭素年代測定が実施されており，試料１は12～13世紀，２は11～12世紀の年代値が示されている（第８節参照）。

### 2　分析方法

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の断面を作製し，落射顕微鏡（OPTIPHOTO-２：Nikon）によって50～1000倍で観察した。同定は，木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### 3　結果

同定結果を第86表に示した。出土した炭化材はそれぞれコナラ属クヌギ節と，コナラ属アカガシ亜属に同定された。以下，分類群ごとに形態を記載する。

・コナラ属クヌギ節

*Quercus sect. Aegilops*　ブナ科

年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では，厚壁で丸い小道管が，単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔を示し，放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で単列のものと

大型の広放射組織からなる複合放射組織を示す。

・コナラ属アカガシ亜属

*Quercus subgen.Cyclobalanopsis*　ブナ科

中型から大型の道管が，1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で，単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

## 4　考察

同定の結果，安良遺跡の炭化材は，コナラ属クヌギ節1点，コナラ属アカガシ亜属1点であった。

コナラ属クヌギ節にはクヌギ，アベマキなどがあり，本州，四国，九州に分布する。落葉の高木で，高さ15m，径60cmに達する。強靭で弾力に富んだ材で，器具や農具などに用いられる。また，油分を多く含むため，燃料材として優良で多用されている。なお，宮崎県の熊野原遺跡では竪穴住居の住居構築用材，熊本県の蒲生・上の原遺跡では焼失家屋の建築材の報告例が見られる。

コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ，イチイガシ，アラカシ，シラカシなどがあり，本州，四国，九州に分布する。常緑高木で，高さ30m，径1.5m以上に達する。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材であり，広く用いられるが，西南日本では弥生時代以降，特に鍬や鋤などの農耕具を中心に用いられる傾向にある。また，燃料材としては最良とされる。京田遺跡ではコナラ属アカガシ亜属の鍬の報告例が多く見られる。また，鹿児島県では建築部材の例は見られないが，弥生時代後期に熊本県の蒲生・上の原遺跡より焼失家屋の建築材の例が見られる。しかし，コナラ属クヌギ節と同様に鍬への利用が多い。

なお，コナラ属クヌギ節，コナラ属アカガシ亜属の九州における建築部材への利用は，弥生時代後期から奈良時代に垂木や柱などが散見されるが少なく，他には杭や堰材などが見られるが圧倒的に鍬への利用が多い。また，平安時代以降ではコナラ属クヌギ節を建築部材に利用した例は九州にはほとんどない。これには，他より成長が早く大木が手に入りやすいスダジイなどのシイ属を建築部材に利用してきたことや，コナラ属アカガシ亜属，コナラ属クヌギ節が農具に適材であることもあり，九州ではあまり建築部材に利用されなかった可能性が考えられる。本遺跡ではコナラ属クヌギ節およびコナラ属アカガシ亜属が柱穴より出土しているため柱材の可能性が高い。

同定された樹種はいずれも温帯から温帯下部の暖温帯に広く分布する樹木であった。コナラ属クヌギ節は山林や乾燥した台地や丘陵を好み，コナラ属アカガシ亜属は陽当たりの良い山野に生育する。またどちらの樹種も二次林要素をもつ樹木が含まれる。いずれの樹木も当時遺跡周辺に生育しており，近隣地よりもたらされたと推定される。

**【文献】**


伊東隆夫・山田昌久2012『木の考古学』雄山閣，p.449.

大塚誠1984「住居跡出土の木材炭化物，宮崎学園都市住居跡出土の木材炭化物」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概要』Ⅳ　宮崎県教育委員会，p.59-66.

古環境研究所1989「第IV章　蒲生・上の原遺跡の自然科学分析１　蒲生・上の原遺跡から出土した炭化材の樹種同定」『蒲生・上の原遺跡－県営農業基盤整備事業に伴う埋蔵文化財の調査－』熊本県文化財調査報告第158集，熊本県教育委員会，p.197-205.

佐伯浩・原田浩1985「針葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩1985「広葉樹材の細胞」『木材の構造』文永堂出版，p.49-100.

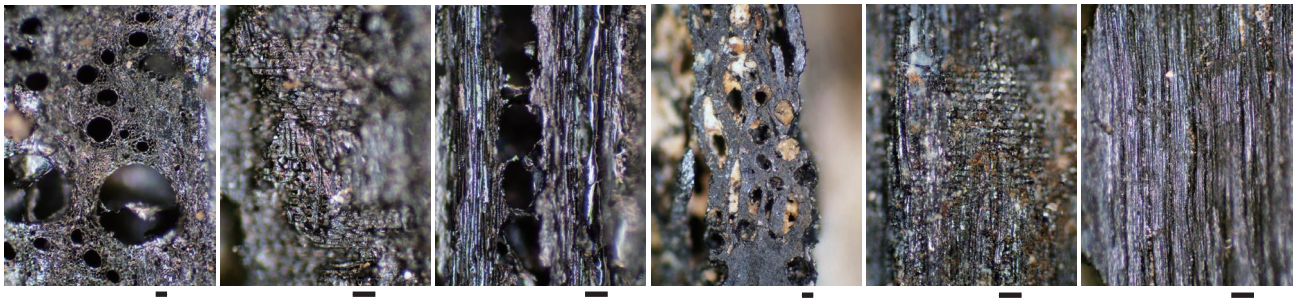
島地謙・伊東隆夫1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣，p.296.

山田昌久1993「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成」『植生史研究』特別第１号，植生史研究会，p.242.

吉田生物所・パレオ・ラボ2005「木製品の樹種同定，京田遺跡木製品の樹種」『京田遺跡』，鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(81)


**第86表　安良遺跡における樹種同定結果**

| 試料番号 | 採取遺構 | 樹種 |
|---|---|---|
| 1 | 柱穴12内埋土 | コナラ属クヌギ節 |
| 2 | 柱穴11内埋土① | コナラ属アカガシ亜属 |



試料番号1（柱穴12内埋土）コナラ属クヌギ節　　試料番号2（柱穴12内埋土）コナラ属アカガシ亜属

**第125図　安良遺跡の炭化材**

## 第11節　安良遺跡出土遺物の科学分析

本遺跡出土の磁器と土器について，次のとおり双眼実体顕微鏡と走査電子顕微鏡による形状観察，及びエネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

### 1　試料

磁器及び土器表面に塗布または付着していた赤色粒子
磁器２点，土器５点　計７点

### 2　観察・分析方法

⑴　形状観察

以下の機器を使用して形状を観察し撮影を行った。

ア　双眼実体顕微鏡（ニコン製SMZ1000）による８～60倍観察

イ　走査電子顕微鏡（日本電子製JCM-6000Plus）による1000～2000倍観察

⑵　成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製XGT-1000，X線管球ターゲット：ロジウム，X線照射径100㎛）を使用し，次の条件により分析を行った。

X線管電圧：15/50kV　　電流：自動設定
測定時間：200秒　　X線フィルタ：なし
試料セル：なし　　パルス処理時間：P３

定量補正法：スタンダードレス

赤色粒子の付着している部分と付着していない部分の分析を行い，比較した。

### 3　結果

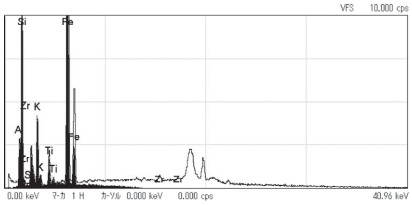
試料の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）とFPM定量結果，双眼実体顕微鏡および走査電子顕微鏡による形状観察結果の１例である。

### 4　考察

蛍光X線分析の結果から，赤色粒子の成分から比較すると水銀の成分をもつものと鉄の成分をもつものに分類できる。水銀の成分をもつ赤色粒子は，朱（水銀朱）である（白磁の皿（試料（１），（２）の２点)。また鉄の成分をもつ赤色粒子の付着の有無で比較すると，付着有の部分の方がわずかではあるが鉄の濃度が高い。このため，土器（試料（３）～（７）計５点）に付着する赤色粒子は鉄を成分とする赤色顔料は，双眼実体顕微鏡および走査電子顕微鏡による形状観察により，針状結晶は見られなかったので，パイプ状ベンガラではなく，鉱物（赤鉄鉱）由来のベンガラと考えられる。

（１）試料No.１　白磁皿（No.777）

スペクトルチャート

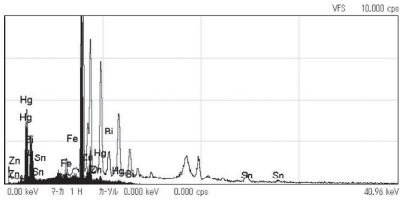



FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 32.03 | 18.91 |
| けい素 | K | 142.35 | 53.07 |
| 硫黄 | K | 1.85 | 0.25 |
| カリウム | K | 58.21 | 8.88 |
| チタン | K | 53.04 | 1.76 |
| 鉄 | K | 1168.49 | 17.03 |
| ジルコニウム | K | 15.90 | 0.11 |

（２）試料No.２　白磁皿（No.778）

スペクトルチャート

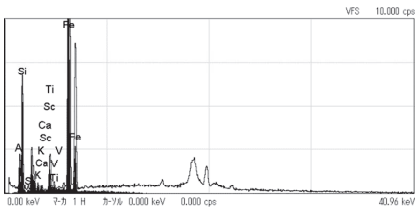



FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| 鉄 | K | 28.28 | 2.51 |
| 亜鉛 | K | 60.33 | 3.35 |
| すず | K | 27.36 | 27.18 |
| 水銀 | L | 236.34 | 54.76 |
| ビスマス | L | 55.41 | 12.20 |

（３）試料No.３　土器（No.307）

スペクトルチャート



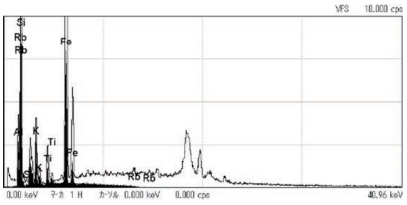

FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 20.95 | 21.84 |
| けい素 | K | 73.79 | 47.74 |
| 硫黄 | K | 1.07 | 0.22 |
| カリウム | K | 5.39 | 1.23 |
| カルシウム | K | 3.62 | 0.65 |
| スカンジウム | K | 0.64 | 0.04 |
| チタン | K | 44.26 | 1.94 |
| バナジウム | K | 1.48 | 0.05 |
| 鉄 | K | 1218.44 | 26.30 |

第126図　安良遺跡の蛍光X線分析スペクトルチャート（成分分析）とFPM定量結果（１）

（４）試料No.４　土器（No.306）

スペクトルチャート

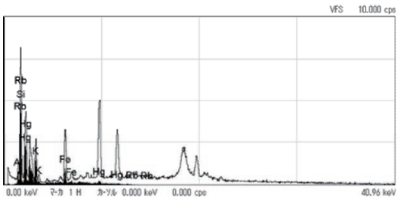


FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 34.36 | 24.56 |
| けい素 | K | 104.39 | 54.47 |
| 硫黄 | K | 0.80 | 0.15 |
| カリウム | K | 36.72 | 7.76 |
| チタン | K | 38.83 | 1.77 |
| 鉄 | K | 44.26 | 11.22 |
| ルビジウム | K | 7.43 | 0.07 |

（５）試料No.５　土器（No.305）

スペクトルチャート

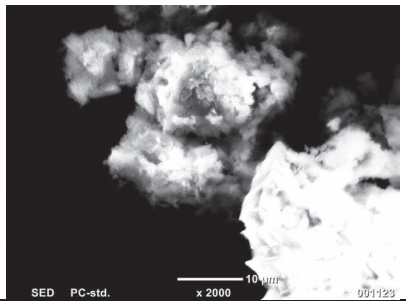


FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 7.55 | 13.91 |
| ケイ素 | K | 50.45 | 57.77 |
| カリウム | K | 20.43 | 13.57 |
| 鉄 | K | 49.85 | 2.93 |
| ルビジウム | K | 7.32 | 0.33 |
| 水銀 | L | 92.69 | 11.49 |



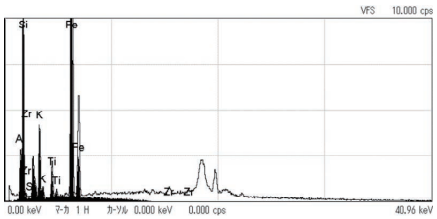
形状観察結果（双眼実体顕微鏡）




形状観察結果（走査電子顕微鏡）

（６）試料No.６　土器（No.308）

スペクトルチャート

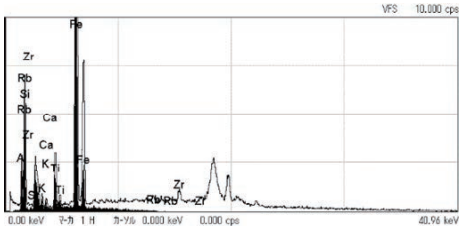


FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 36.34 | 19.82 |
| けい素 | K | 137.13 | 43.79 |
| 硫黄 | K | 1.76 | 0.17 |
| カリウム | K | 30.11 | 3.29 |
| カルシウム | K | 7.24 | 0.65 |
| チタン | K | 108.30 | 2.37 |
| 鉄 | K | 2681.33 | 29.82 |
| ジルコニウム | K | 14.10 | 0.09 |

（７）試料No.７　土器（No.309）

スペクトルチャート



FPM 定量結果

| 元素 | ライン | 強度(cps/mA) | 質量濃度(%) |
|---|---|---|---|
| アルミニウム | K | 25.11 | 28.26 |
| けい素 | K | 53.82 | 41.12 |
| 硫黄 | K | 1.53 | 0.35 |
| カリウム | K | 7.14 | 1.77 |
| カルシウム | K | 4.52 | 0.90 |
| チタン | K | 57.57 | 2.82 |
| 鉄 | K | 1019.8 | 24.43 |
| ルビジウム | K | 6.73 | 0.11 |
| ジルコニウム | K | 18.94 | 0.25 |

第127図　安良遺跡の蛍光Ｘ線分析スペクトルチャート（成分分析）とFPM定量結果（２）

# 第Ⅵ章　総　括

## 第１節　縄文時代

縄文時代の遺構は,集石１基と土坑１基が検出された。

集石は，縄文時代早期のもので掘り込みを有しない。周辺からの出土遺物は極めて少なく，明確な時期は判断できないが，周辺からは前平式・小牧３Ａタイプ・吉田式・条痕文土器などが出土しているので，これらのいずれかの時期に相当するとみられる。

他の遺構としては土坑が１基あり，埋土内からは翡翠製の可能性のある丸玉が確認されている。これは周辺の遺物出土状況や丸玉の形状の特徴などから，縄文時代後期の丸尾式土器・西平系土器に伴う可能性がある。

遺物は，上述した石製品のほかに土器と石器が出土している。

土器については，縄文時代早期，中期，後期，晩期のものが出土している。

縄文時代早期の土器は，小牧３Ａタイプ・前平式土器・吉田式土器・轟Ａ式土器が出土している。

縄文時代中期の土器は，大平式土器と阿高式土器が確認されている。いずれも包含層からではなく，古墳時代の遺構である溝状遺構２内への混入であり，出土数もごく少数である。この中で，特に大平式土器は，当地域（宮崎県南部～志布志湾沿岸地域）を中心として分布するもので，春日式土器から並木式土器へと変遷する過程において注目されている土器である（相美2017)。

縄文時代後期の土器は，丸尾式土器と西平系土器が出土している。

丸尾式土器は市来系土器の最後に位置づけられるもので，口縁部は平縁ないしは山形の形態を有し，外反・「く」字状の断面形態のものである。本遺跡では，鉢形土器のほか，脚台付皿とみられる破片も確認される。

西平系土器は，口縁部が「く」字に内側へ屈曲するもので，屈曲部から口縁部の外面に磨消縄文が施文されるものである。本遺跡で出土した土器は口縁部屈曲部が退化して肥厚したものもみられるが，同じ系統のものとして掲載した。

晩期の土器とみられるものも出土している。突帯を有するものや不明土器などが含まれる。これらのほとんどは縄文時代晩期頃のものと想定されるが，具体的な型式名などは明確ではない。№64のように，口縁部直下と口縁部下７～８㎝程度下の胴部のそれぞれに断面三角形の突帯を貼り付けるものや，№65のように口縁部に断面三角形状の突帯を貼り付け，全面的にミガキによる調整を施すものなどがみられる。

石器・石製品は，石製垂飾品（丸玉）のほか，打製石鏃，スクレイパー，打製石斧，磨・敲石などが出土している。多くがⅡ層中の出土で縄文時代後・晩期の可能性が高い。

この中で，特に重視したいのが打製石斧の調整・加工に係るとみられる剥片である。本遺跡では，打製石斧の再加工が行われた可能性がある。

なお，磨・敲石が多数出土しており，植物加工が行われたことが推察されるが，これに対応する石皿は確認できていない。

また，土坑中から出土した石製垂飾品（丸玉・№１）は，その石材の特徴から翡翠製の可能性が指摘されるものであり，縄文時代後期の丸尾式土器・西平系土器に伴う可能性がある。一方向から穿孔されている様子が観察される。孔の大きな方の外面には，わずかな平坦面があるが，これは他の石製品との摩擦によって生じた「玉ずれ痕」の可能性がある。また，「玉ずれ痕」の状態から，同様の石製品（おそらくはほぼ同規格の石製垂飾品）と連なっていた可能性が考えられる。

## 第２節　弥生時代

弥生時代については，主に山ノ口式Ⅱ式土器が出土している。遺構は土坑が１基検出されており，遺構内埋土には，山ノ口Ⅱ式の甕が入っていた。

包含層中からは，山ノ口Ⅱ式の甕のほか，大甕や高坏なども出土している。

また，刻目突帯を有する甕もみられる。これらは，山ノ口Ⅱ式よりも古相の特徴のものである。しかしながら，いずれも破片であるため一括して扱った。

石器は，磨製石鏃が４点出土しており，いずれも刃部には鋭い加工が施されている。

## 第３節　古墳時代

本遺跡で中心になる時代のひとつである。

遺構は，溝状遺構３条と地下式横穴墓１基を検出した。いずれの溝状遺構も南北方向に走るもので，断面形はＶ字状であり，上面の幅は検出面による違いはあるものの，最大幅約2.5m・最大深約1.5m，底面は平坦であるが十数cmの幅しかないものである。

特に溝状遺構２は，大量の遺物を伴っている。北側と南側の溝状遺構の間には市道があり，分断されるが，方向と埋土状況が類似するので，市道により一部破壊を受けているものの本来は一連のものであったことが想定される。

地下式横穴墓については，旧志布志町域では初の検出例となった。溝状遺構３と切り合い関係にあるもので，小型のものであり遺構の内外からは人骨・副葬品とみら

れるものは一切確認されていない。羨道の閉塞土中から笹貫式土器の甕の口縁部片と，炭化した稲の胚乳がそれぞれ１点ずつ確認されたのみである。

遺物に目を向けると，ほとんどの出土遺物は溝状遺構２からのものであることがあげられる。以下に，溝状遺構２の出土遺物をもとに概要を述べる。

甕は，笹貫式新段階（中村直2002）にあたるものである。底部はほぼすべてが平底である。胴部形態から以下の分類を行っている。

・Ⅰ類：在地的な形態のもので，胴部に最大径をもつ
・Ⅱ類：日向以北にみられる長胴甕の模倣
・Ⅲ類：Ⅰ類とⅡ類の折衷形。その他も含める

特に，Ⅱ類については，甑とセットで使用したことがうかがえるものであり，Ⅰ類とは用途そのものが異なる可能性もある。

甑は，数個体が確認された。全て筒抜けタイプのものである。取っ手が１点のみみられる。子壺・鉢については数個体が確認されている。特に，鉢については，円筒形に近い形状のものも存在し，特徴的である。そのほかの器種としては壺・高坏は存在するが，完形のものはなく，数も極めて少ない。

これらの出土遺物のうち，炭化物の付着が明瞭な５点の土器（甕）について，放射性炭素年代測定を行っている。第85表には，掲載図面と年代分析結果を合わせてまとめている。①～⑤の順に２σ年代値の古い方（５世紀前半～７世紀前半にわたる）から機械的に並べている。わずか５点のみの分析であるが，口縁部～胴部の特徴に注目すると，

①やや内湾気味に直行　→　②外反して明確なくびれを有する　→　③ほぼ直行　→　④外反し，ゆるいくびれを有する　→　⑤内湾する

とまとめることができる。この中で，②と④については日向系の長胴甕の系譜を引くものであるので，除外して①・③・⑤の流れを整理すると，口縁部が直行→内湾という流れとなり，これまでの考え方（中村直1986・2002など）と大きく矛盾しない。ただし，ごく少数の資料であるので，あくまでも参考としておきたい。

一方，溝状遺構２及びその周辺からは，多くはないものの須恵器の出土が確認される。

まず溝状遺構２では，須恵器坏Ｈ（丸底坏）がまとまって出土している。口縁部のかえりが短く，体部外面の１/２程度を回転ヘラケズリすることから豊前Ⅲ-３期（６世紀後半～７世紀前葉）に該当する。他のものとしては，横瓶なども確認されている。これより後出の特徴を示す須恵器は，本遺構からは出土していないことから，年代測定の結果とも矛盾しない。

溝状遺構１では，本県では資料の少ない提瓶（205）が出土している。取っ手部分が退化したものである。

包含層では，坏Ｇの蓋や小型高坏などは，豊前Ⅴ-２期（７世紀第３四半期頃）に，坏Ｂ（高台坏）の坏と蓋は豊前Ⅶ-１期からⅦ-３期（７世紀後半から８世紀後半頃）にそれぞれ該当する。

その他の特徴としては，溝状遺構１～３から出土している磨敲石及び鉄滓があげられる。これらの石器のなかで，棒状のものについてはこれまでも「石槌」とされた例も散見されるが，円形のものもよく観察すると敲打痕や擦痕だけではなく，錆の痕跡のあるものも存在する。また，鉄滓はいずれも椀形滓である。この事実から，本遺跡周辺では古墳時代に鍛冶を行っていた可能性がある。なお，調査区内では鍛冶に関する遺構等については確認できていない。

## 第４節　古代

本遺跡において古代に該当する遺構は，３条の帯状硬化面のみである。このうち，帯状硬化面２については，開聞岳起源のテフラである紫コラが堆積する。紫コラは，貞観16（874）年に開聞岳が噴火した際の噴出物であるとされる。検出時点では帯状硬化面であったが，テフラが堆積している事実から考えると，本来は溝状であった可能性があり，繰り返される後世の開発によって削平されてしまった可能性がある。

帯状硬化面１と３については，それぞれ帯状硬化面２に切られることから，少なくとも古代以前のものとして，古代の遺構とした。

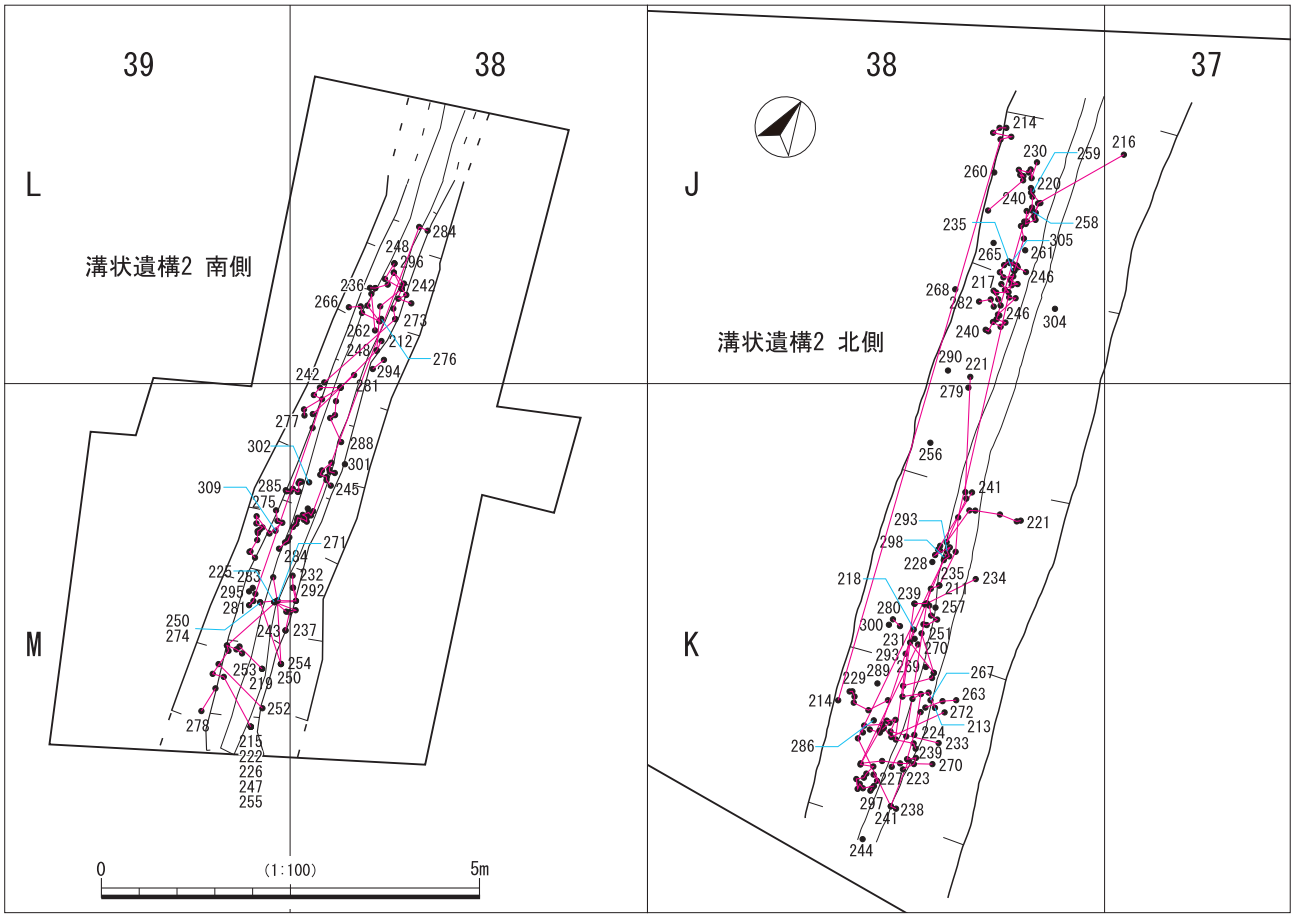
包含層からの出土遺物は，土師器と須恵器がみられる。土師器については，８世紀代の須恵器模倣のものや，10世紀頃の特徴を示す高台付椀などがみられる。９世紀代のものはほとんど確認されていない。他の土器としては，高坏・子壺・焼塩土器なども出土している。

須恵器については，８世紀前半～中頃の特徴を示す高台坏や，比較的厚手につくる甕なども出土している。

## 第５節　中世

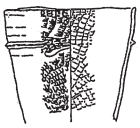
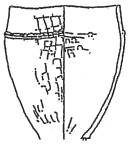
掘立柱建物跡が４棟検出された。このうち掘立柱建物跡２は大型のもので，13ｍ×6.1ｍにもなる長大なものである。また，柱穴も幅が60～100㎝程度であり，他の３基の建物跡の柱穴の多くが幅30㎝前後であることと比較しても，規模の違いが大きい。掘立柱建物跡全般については，いずれも主軸方向から方位を意識して建てられたことが推察される。ただし，わずかであるが若干方向が異なるため，時期差や性格の違いなども考えられる。

竪穴建物跡については，３軒ともに主軸はほぼ方位にあったものである。床面中央には，炉跡とみられる焼土がみられる。床面の壁際の四隅には柱穴跡があり，さらに壁際沿いのその間にも柱穴跡が残る。床面近くには砂質層がみられた。




第128図　溝状遺構２の遺物出土状況

第87表　古墳時代溝状遺構２出土土器の年代測定結果一覧

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 実測図 | |  |  |  |  |  |
| 掲載No. | | 225 | 250 | 235 | 229 | 217 |
| 2σ暦年代範囲 | | 5世紀前半 | | | | 6世紀前半 |
| | | ⟨ | ⟨ | ⟨ | ⟨ | ⟨ |
| | | 6世紀後半 | 6世紀末 | 7世紀初頭 | 7世紀前半 | |
| 特徴 | 口縁部 | やや内湾気味に直行 | 外反 | 直行 | 外反 | 内湾 |
| | 突　帯 | あり・刻み目 | なし | あり・無分 | なし | あり・上端に刻み |
| | 用　途 | 甕 | 蒸気発生器として甑とセットで使用か | 甕 | 蒸気発生器として甑とセットで使用か | 甕 |
| | 備　考 | 在地系 | 日向系・くびれあり | 日向系との折衷形 | 日向系・くびれあり | 在地系<br>色調は在地系よりも白っぽい |

調査区の数箇所では，数基の土坑が集中する傾向がみられた。性格は明らかではないが，特に集中するものは，先行研究や当該時期の成果（上野城跡・山口遺跡における調査成果を参照）から，食料残滓や有機物のごみなどを廃棄するための土坑であった可能性を考慮したい。

溝状遺構も４条検出されている。おおむね，方位にあったものである。

遺物は中国から輸入されたとみられる白磁・青磁等のほか畿内系羽釜，楠葉型瓦器椀・和泉型瓦器椀等が出土している。

これらの遺物の中で注目されるものとしては，輸入陶磁器，炭化米塊周辺出土遺物，柱穴内遺物，土師器，非広域流通品などがある。

まず，中世全体について，以下に同一時間幅における出土遺物の様相について輸入陶磁器を中心として述べる。

・C期（11世紀後半～12世紀前半）

白磁碗Ⅳ類（玉縁碗）が存在する。この時期の確実な

第88表　安良遺跡出土の炭化米塊（分析結果を含む）

| | 炭化ご飯塊 | 炭化ご飯塊片 | 炭化籾塊１号 | 炭化籾塊２号 | 炭化米塊片 |
|---|---|---|---|---|---|
| 法　量 | 長軸8.0×短軸6.5×厚さ2.8cm,<br>36.3g | － | 長軸3.7×短軸2.2×厚さ2.9cm,<br>2.9g | 長軸3.2×短軸2.2×厚さ1.5cm,<br>2.9g | 長軸3.2×短軸2.2×厚さ1.5cm,<br>2.9g |
| 出土遺構 | －（Ⅱａ層出土） | | －（Ⅱａ層出土） | | 柱穴３ |
| 出土状況 | 焼土下で出土 | | 柱穴８に近接して出土 | | 柱穴の埋土内で出土 |
| 所　見 | 一面が偏平で筋状の痕跡あり | 炭化ご飯塊と同一個体の可能性あり | 炭化ご飯塊に比べ脆い | １号と同一個体である可能性あり | 数㎜の小片に分かれる<br>炭化した穎果と種子(玄米) |
| 状　態 | 調理後の米(ご飯) | 調理後の米(ご飯) | 籾 | 籾 | 籾 |
| 年　代 | 1162－1251calAD<br>(12C後半～13C中頃) | ― | 1210－1271calAD<br>(13C代) | ― | ― |
| 備　考 | 平坦面は容器などの圧痕か<br>「おにぎり」ではない | 取上No.2009 | 最も残存状況の良い破片<br>袋状のものに入っていたか | 取上No.炭化物15 | 遺構内一括 |

第89表　県内出土の炭化米塊

| 番号 | 遺跡名 | 住所 | 時代 | 形状 | 備考（特徴など） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 横川城跡 | 霧島市横川町中ノ字城山 | 中世後半 | 一辺４cmの三角形(おむすび状)。表面に布状の痕跡。 | 本郭東側階段状遺構中，他，郭内から出土。 |
| | | | | － | 粟か稗ないし，黍状の小粒子と玄米状の米２種類。 |
| 2 | 別府城跡 | 南さつま市加世田武田字城ノ山 | 中世後半 | 一辺５cm程度の不定形 | 炭化調理米塊か（胚部分はほとんど欠落） |
| 3 | 高城跡 | 垂水市高城字本高城 | 中世後半 | 一辺１～２cm程度の不定形 | 炭化籾塊(穎つき炭化米塊) |

第90表　県内における柱状高台・耳皿等出土遺跡一覧

| No. | 遺跡名 | 所在地 | 柱状高台 | 耳皿 | 瓦器 | | | 備考 | 記載No. |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 和泉 | 楠葉 | 不明 | | |
| 1 | 新平田遺跡 | 伊佐市平出水字新平田 | ○ | | | | | 黒色土器の柱状高台皿 | 11 |
| 2 | 上野城跡 | 薩摩川内市百次町上野 | ○ | | | | ○ | 高杯状と記載。上げ底の底部 | |
| 3 | 小薗遺跡 | 南さつま市金峰町浦之名字小薗 | ○ | | ○ | | ○ | 有孔台付土師皿と記載。上げ底の底部 | |
| 4 | 渡畑遺跡 | 南さつま市金峰町宮崎字渡畑 | ○ | | | | ○ | 黒色土器：小型の高台付皿。充実 | 23～25 |
| 5 | 市頭C遺跡 | 姶良市加治木町木田字市頭 | ○ | | | | | 充実のものと上げ底の両者ともに出土 | 12･14･17･18 |
| 6 | 留守氏館跡 | 霧島市隼人町神宮 | ○ | | ○ | ○ | | 充実のもの | |
| 7 | 桑幡氏館跡 | 霧島市隼人町神宮 | ○ | | ○ | ○ | | 充実のものと上げ底の両者ともに出土 | 3～6･8～10･13･15･16･19～21･26･27 |
| 8 | 新田遺跡 | 鹿屋市輝北町下百引字新田 | ○ | | | | | 土師器（坏）：底部が非常に厚い。充実 | 22 |
| 9 | 領家西遺跡 | 鹿屋市花岡町字領家西 | ○ | | | | | 充実 | |
| 10 | 永吉天神段遺跡 | 曽於郡大崎町永吉字天神 | ○ | | ○ | ○ | | 充実のもの | |
| 11 | 山宮古墓 | 志布志市志布志町安楽字宮下 | ○ | | | | | 明治36年に発見 | 7 |
| 12 | 安良遺跡 | 志布志市志布志町安楽字勢園 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 充実で重厚なもの | 1･2 |
| 13 | 市ノ原遺跡第１地点 | いちき串木野市市来町大字大里字上ノ原前 | | ○ | | | | 古代～中世 | 28･29･32･33 |
| 14 | 麦ノ浦貝塚 | 薩摩川内市陽成町字麦ノ浦 | | ○ | | | | 古代～中世 | 30 |
| 15 | 成岡遺跡 | 薩摩川内市中福良町字成岡 | | ○ | | | | 古代～中世 | 31 |
| 16 | ムシナ遺跡 | いちき串木野市市来町大里 | | ○ | | | | 古代～中世 | 35 |
| 17 | 安茶ヶ原遺跡 | いちき串木野市川上字安茶ヶ原 | | ○ | | | | 古代～中世 | 36 |
| 18 | 向椿城跡 | 日置市東市来町伊作田字上椿ほか | | ○ | | | | 中世 | 37 |
| 19 | 大龍遺跡 | 鹿児島市大竜町 | | ○ | | | | 中世～近世 | 38～41･47 |
| 20 | 柳原遺跡 | 日置市伊集院町下谷口字柳原 | | ○ | | | | 中世 | 42 |
| 21 | 虎居城跡 | 薩摩郡さつま町宮之城屋地字城ノ口 | | ○ | | | | 中世 | 43 |
| 22 | 鹿児島(鶴丸)城本丸跡 | 鹿児島市城山町 | | ○ | | | | 中世～近世 | 44～46 |
| 23 | 上新田遺跡 | 薩摩川内市青山町字上新田 | | ○ | | | | 中世 | 34 |

青磁はみられない。青白磁の合子が次のＤ期にまたがって存在する。黄釉鉄絵盤の可能性があるもの（№548）もこの時期の可能性がある。

・Ｄ期（12世紀中頃～後半）

白磁は碗Ⅴ－４類（端反碗）,龍泉窯系青磁碗Ⅰ類，皿Ⅰ類などがある。同安窯系とみられる櫛点描文の青磁皿も存在するが，小破片のため掲載していない。

・Ｅ期（13世紀初頭～前半）

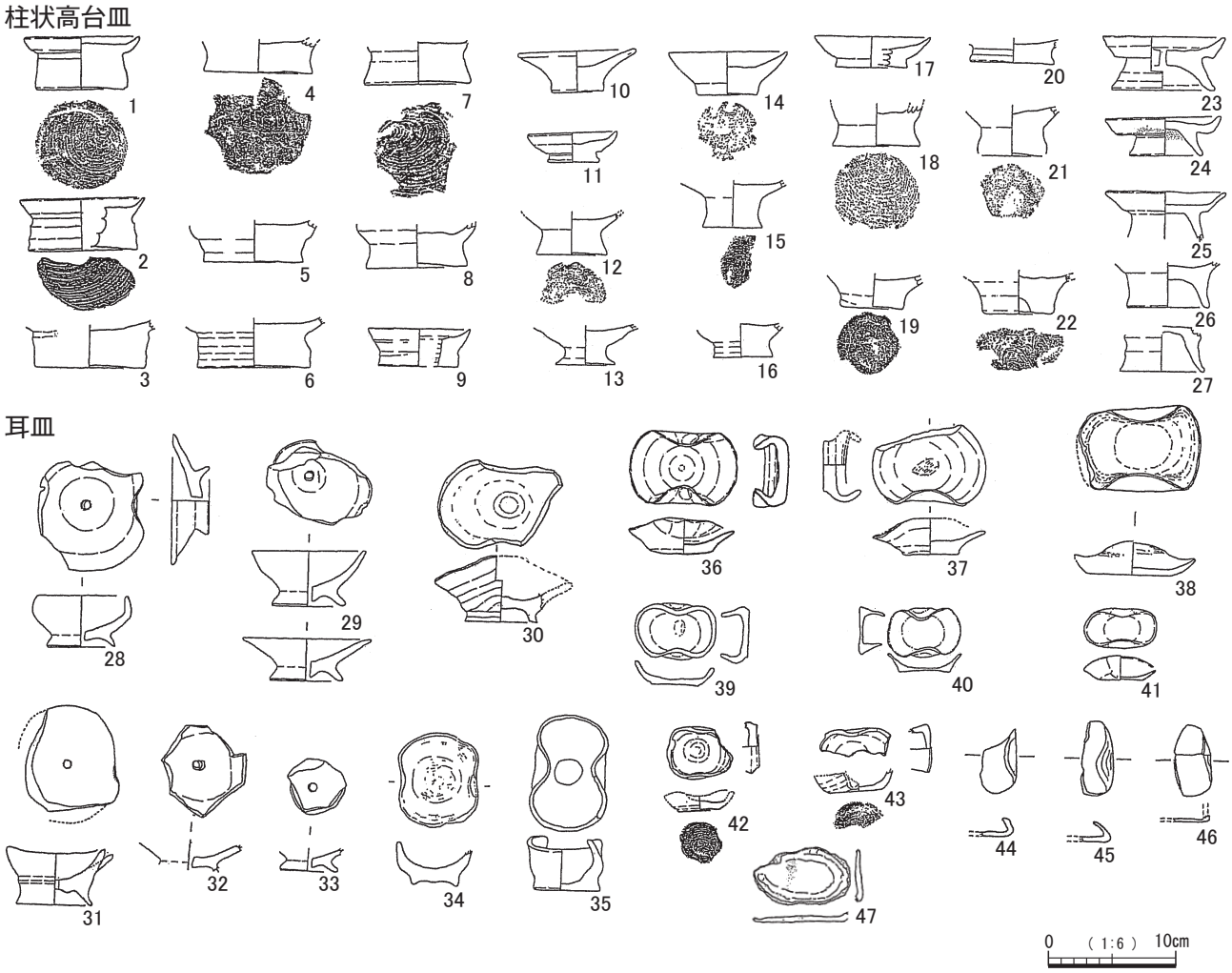
龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（鎬連弁文碗），東播系須恵器などがある。

・Ｆ期（13世紀中頃～14世紀初頭）

白磁皿Ⅸ類が多く存在する。青磁は坏Ⅲ類がみられる。また，龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の可能性のある比較的精緻なもの（№790・791）が存在する。国産陶器では，常滑・櫛番城などがみられる。

・Ｇ期（14世紀初頭～後半）以降

当該時期から中世末まで，様々なものがみられるが，それぞれの遺物量はわずかである。特に，№773は白磁皿であるが，15世紀中葉頃のものであり，近年になって琉球を介した交易に関する資料のひとつとして注目されてきているものである。




第129図　県内出土の柱状高台皿及び耳皿

K・L～32区からは，炭化桃核などとともに炭化物塊が検出されている。これらについて，詳細に分析を行った結果，炭化ご飯（調理米）塊と炭化籾塊であることが確認された。炭化ご飯塊は，検出された時点における上面には明瞭な平坦面があり，元は木箱に入れられていたか，板状のものに押しつけられた状態で炭化したことが推察される。$^{14}$C年代は，ＡＭＳ補正値で1162-1251 calAD（12世紀後半～13世紀）という分析値である。

炭化籾塊は，名称のとおり稲籾の塊であるが，籾は通常の状態では塊とはなり得ないので，元は有機物の入れ物（袋や布等）に入った状態で炭化したものと推察される。$^{14}$C年代はＡＭＳ補正値で1210-1271 cal AD（13世紀代）という分析値である。

いずれも小範囲の焼土域の近くで炭化物や焼土塊とともに出土しているのが特徴である。

なお，上記以外では，焼土域近くの柱穴内から特徴的な出土遺物がみられた。貝殻（ハマグリ・フジノハナガイ等），常滑産陶器，土師器坏・皿などがそれであり，いずれも炭化物や焼土塊を伴うのも共通している。

また，このエリアでは，特徴的な土師器が出土している。まず，土師器であるが，本遺跡では底部がヘラ切りのものと糸切りのものがいずれもみられることが特徴である。特に，№554と№555は小皿であり，重なって出土しているが，それぞれヘラ切りと糸切りである。また，規格もほぼ同じであるので，ヘラ切りから糸切りへの過渡期にあたる資料の可能性がある。時期は12世紀後半～13世紀前半頃を想定している。

土師器に分類している中で，本遺跡での特徴として，柱状高台皿と耳皿の両方が出土していることがあげられる（第90表・第129図）。柱状高台皿は，全国で出土するものであるが，拠点的な遺跡（港湾や神社に関連するもの含む）から出土する傾向があるものである（八峠2002・中世土器研2019）。本県では，これまで新平田遺跡（伊佐市）や，桑幡氏館跡（霧島市），渡畑遺跡（南さつま市）などでの出土例がみられたが，桑幡氏館跡で多くの量が出土した以外は１点もしくは数点の出土にとどまるものであった。本遺跡では，破片も含めると10点は存在している。また，完形のものも複数存在する。重厚につくられるものであり，桑幡氏館跡でも同様のものがみられる。

一方，耳皿はこれまで志布志及び大隅地域ではほとんど出土していない。また，柱状高台皿と耳皿の両者が出土する遺跡も現在のところ本県では皆無である。この事実が何を示すのかは今後検討が必要であるが，重要な成果であると考えたい。

非広域流通品については，瓦器（楠葉型・和泉型）や畿内系の土師器釜がみられた。広域流通品としては，本遺跡でも輸入陶磁器（白磁・青磁）や東播系須恵器鉢，常滑焼などがみられるが，それらと別に一部でのみ流通するものが，瓦器（楠葉型・和泉型）や関西系の土師器釜である。いずれも，本県での出土数は一ケタを超えないものである。

その中で特に，楠葉型瓦器椀については，

Ⅰ：広域流通品ではなく，限られた遺跡のみの出土

Ⅱ：北部九州では，拠点的な遺跡で出土

Ⅲ：南部九州でも，持躰松遺跡・芝原遺跡・鹿児島神宮社家関連遺跡（桑幡氏館跡など）等の拠点的な遺跡で出土

という傾向がある。

以上のことから，安良遺跡も当該時期の拠点遺跡の一部であった可能性がある。また，第90表からは，瓦器が出土する遺跡からは柱状高台皿もみられることが多いということも確認できる。今後，遺構・遺物の検討を進め，明らかにしていく必要がある。

そのほかには，常滑産の甕や広口壺（中野分類６ａ～ｂ期：13世紀後半頃）及び鉢Ⅰ類，備前産摺鉢及び大甕（真壁分類Ⅳ Ｂ後半・乗岡分類中世５期：15世紀頃），樺番城系須恵器甕（熊本県荒尾産：13世紀～14世紀初頭頃），東播系須恵器の鉢・甕（12～13世紀頃），カムィヤキ（12～13世紀頃）などがみられる。これらを概観すると，12～13世紀頃に該当する遺物が中心を占めるが，中には14世紀前半頃のものや，15～16世紀頃に該当するものなどもある。特に，15～16世紀頃に該当する遺物（青磁大皿・白磁皿等）は琉球を介した交易に関連する可能性も指摘されるものもあり，今後は周辺遺跡も含めた検討が課題となる。

## 第６節　近世・その他

溝状遺構１条と土坑１基が検出された。溝状遺構は底面には帯状硬化面が伴うものであり，志布志市内に存在する下原遺跡や安楽小牧Ｂ遺跡などで検出されている遺構にも類似するものである。

遺物は，肥前系の白磁・染付や，薩摩焼などが出土しているが，この中で瀬戸大窯産の天目は，1600年頃のものであることが判明しており，注目される遺物である。

その他の時期不明遺物としては，鉄器や鉄滓がある。鉄器の中には，環状・棒状のものを組み合わせたものがみられるが，これは轡とみられる。筑後国府（10世紀後半～11世紀初頭）や池島・福万寺遺跡（11～12世紀頃）などのものにも類似するが，時期変化による形状変化の乏しいものであるので，これらの類似資料は今回は参考としておきたい。鉄滓については，古墳～近世のいずれの時期に該当するか判然としない。なお，鞴の羽口も出土しているが，小破片のため掲載はしていない。

**【参考・引用文献】**


伊藤正人2000「耳皿ノート」『中近世土器の基礎研究』XV　日本中世土器研究会

岩元康成2012「鹿児島県の遺構内出土完形遺物の組成」『中近世土器の基礎研究』24　日本中世土器研究会

上床真2015「南部九州出土の東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』26　日本中世土器研究会

大坪志子2015『縄文玉文化の研究　九州ブランドから縄文時代の多様性を探る』雄山閣

相美伊久雄2014「南九州東端における７～８世紀の土器様相」『Archaeology from the South』２　新田栄治先生退職記念論文集　新田栄治先生退職記念事業会

相美伊久雄2017「大平式土器再考」『鹿児島考古』第47号　鹿児島県考古学会

相美伊久雄2019「鹿児島県志布志市上苑Ａ遺跡の発掘調査－７世紀代を中心とした鍛冶関連資料の紹介-」『たたら研究会 鹿児島大会発表要旨集』たたら研究会

新里亮人2018『琉球国成立前夜の考古学』同成社

長直信2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産」『古文化談叢』第67集　九州古文化研究会

中村和美2007「南九州の土器・陶器」『中世窯業の諸相』補遺編

中村和美2015「南九州における中世後期の貿易陶磁の様相」『貿易陶磁研究』№35

中村直子1986「成川式土器再考」『鹿大考古』６　鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村直子2002「薩摩・大隅」第５回　九州前方後円墳研究会『古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-（発表要旨資料)』

成尾英仁1997「指宿地方の遺跡に堆積するテフラ-その起源と年代-」『人類史研究』第９号　人類史研究会

日本中世土器研究会編2019『第38回中世土器研究会資料集：柱状高台土器を考える』

橋口亘2002「鹿児島県地域における16～19世紀の陶磁器の出土様相」『鹿児島地域史研究』№１

橋本久和2018『概論 瓦器椀研究と中世社会』真陽社

八峠興2001「柱状高台考」『中世土器研究論集-中世土器研究会20周年記念論集-』日本中世土器研究会

横手伸太郎2019「土師器からみた古代～中世の大隅 -8世紀～13世紀を中心に-」『鹿児島考古』49号　鹿児島県考古学会

# 図　　版



遺跡全景（南側から串間方面を望む）

図版２
















土層断面
①，②Ⅰ～Ⅴ層（表層～アカホヤ火山灰層）　③紫コラを含む帯状硬化面
④，⑤Ⅵ層以下（アカホヤ火山灰層～シラス２次）






















発掘作業風景
①～③遺物包含層掘削状況　④壁面清掃状況　⑤～⑦遺構調査状況

図版４






















縄文時代・弥生時代の遺構・古墳時代の遺構１

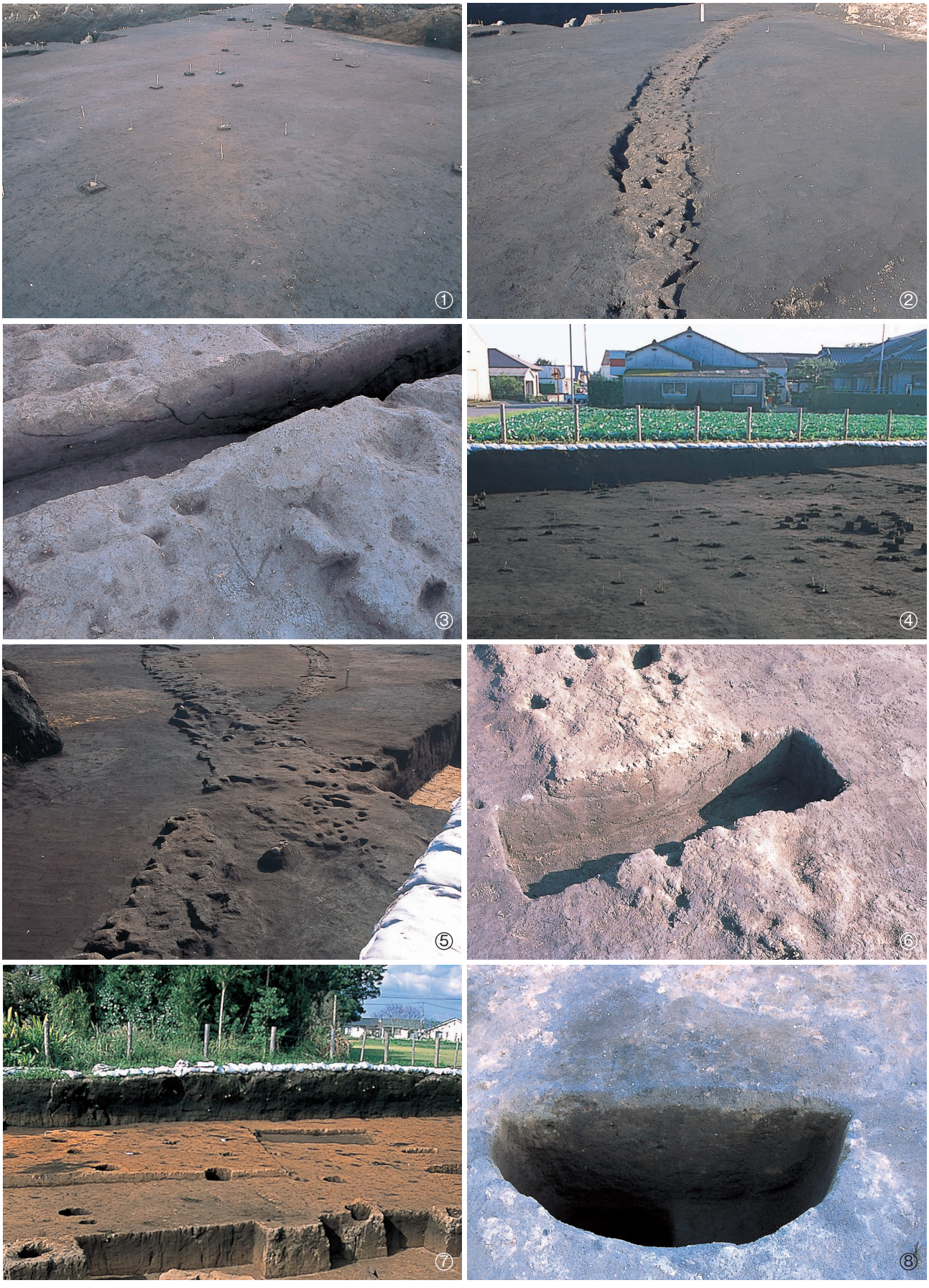
①集積遺構　②土坑２　③土坑３　④地下式横穴墓羨道半裁状況　⑤地下式横穴墓玄室内から見た羨道
⑥地下式横穴墓断ち割り状況　⑦地下式横穴墓完掘状況




古墳時代の遺構２

①溝状遺構１検出状況　②溝状遺構１完掘状況　③溝状遺構２北側遺物出土状況　④溝状遺構２北側完掘状況
⑤溝状遺構２南側遺物出土状況　⑥溝状遺構２南側完掘状況　⑦溝状遺構３遺物出土状況　⑧溝状遺構３埋土状況

図版６




古代の遺構・中世の遺構１

①帯状硬化面１検出状況　②帯状硬化面１完掘状況　③帯状硬化面１埋土状況　④帯状硬化面２検出状況
⑤帯状硬化面１及び２の斬合い状況　⑥帯状硬化面２埋土状況　⑦掘立柱遺物跡１完掘状況　⑧掘立柱建物跡１-柱穴











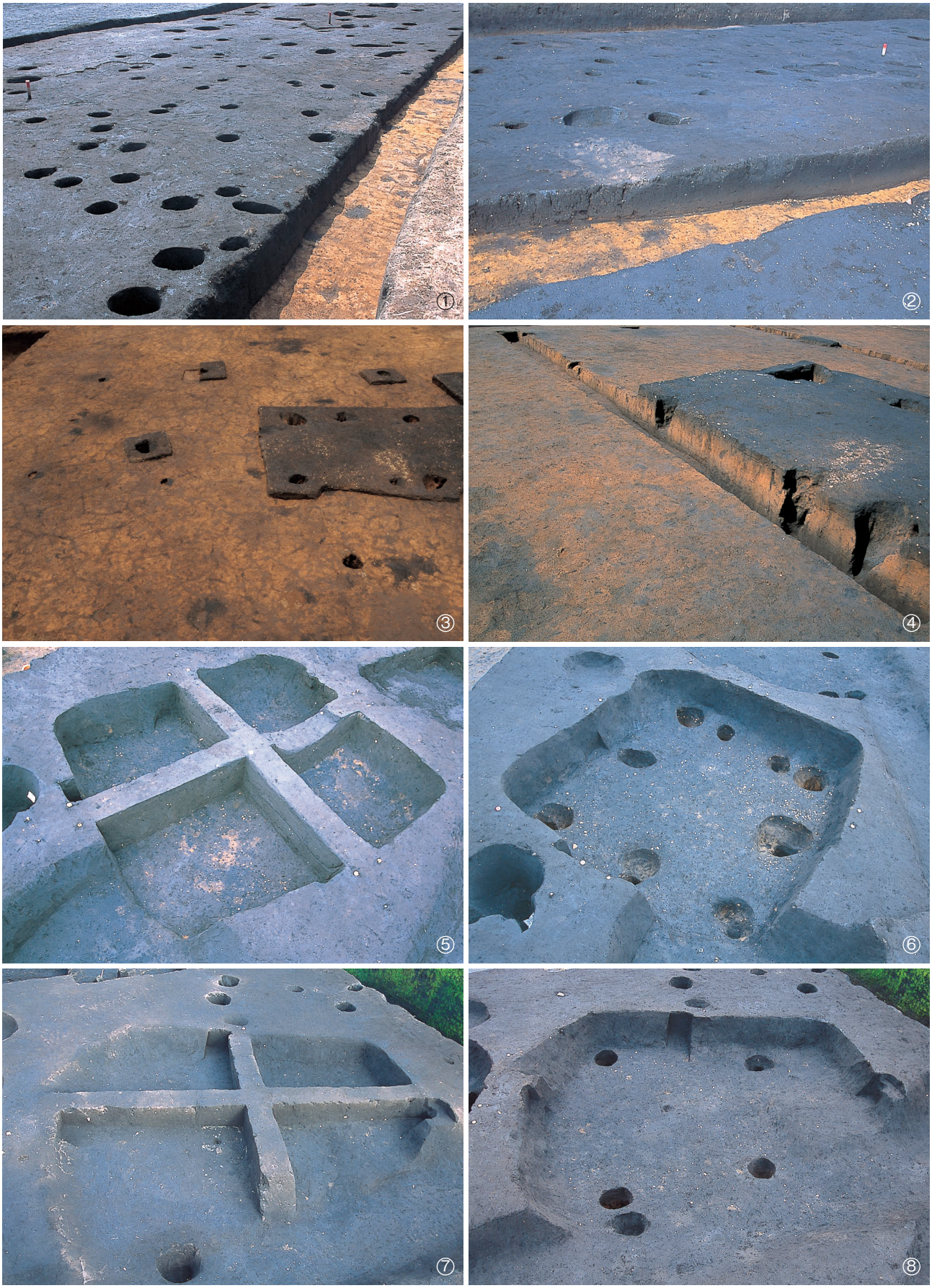





中世の遺構２

①掘立柱建物跡１-柱穴④半截状況　②掘立柱建物跡１-柱穴⑤半截状況　③掘立柱建物跡２完掘状況
④掘立柱建物跡-柱穴③２半截状況　⑤掘立柱建物跡２-柱穴⑨完掘状況

図版８




中世の遺構３

①掘立柱建物跡３検出状況（北側から）　②掘立柱建物跡３検出状況（南側から）　③掘立柱建物跡３完掘状況　④掘立柱建物跡４断ち割り状況　⑤竪穴建物跡２埋土状況　⑥竪穴建物跡２完掘状況　⑦竪穴建物跡３埋土状況　⑧竪穴建物跡３完掘状況




中世の遺構４

①柱穴５半截状況　②柱穴６周辺遺物出土状況　③柱穴６半截状況　④柱穴13半截状況
⑤柱穴14半截状況　⑥柱穴14完掘状況　⑦柱穴15検出状況　⑧柱穴15完掘状況

図版10






















中世の遺構５

①柱穴16検出状況　②柱穴16半截状況　③柱穴12完掘状況　④土坑３完掘状況　⑤土坑４完掘状況
⑥土坑５完掘状況　⑦土坑６完掘状況

























中世の遺構６

①土坑７検出状況　②土坑７完掘状況　③土坑８完掘状況　④土坑９半截状況　⑤土坑10半截状況
⑥土坑11半截状況　⑦土坑12検出状況　⑧土坑12半截状況

図版12




中世の遺構７

①土坑13半截状況　②土坑14半截状況　③土坑15半截状況　④土坑16検出状況　⑤土坑16完掘状況
⑥土坑17・18検出状況　⑦土坑17・18完掘状況　⑧土坑19完掘状況




中世の遺構８

①土坑20完掘状況　②土坑21半截状況　③礫集積１～３検出状況　④礫集積１検出状況
⑤礫集積２検出状況　⑥礫集積３検出状況　⑦，⑧礫集積４検出状況

図版14




中世の遺構９

①溝状遺構５完掘状況　②溝状遺構６完掘状況　③溝状遺構７完掘状況　④溝状遺構８北側完掘状況
⑤溝状遺構８南側完掘状況　⑥特徴的な遺物出土状況１　⑦特徴的な遺物出土状況２









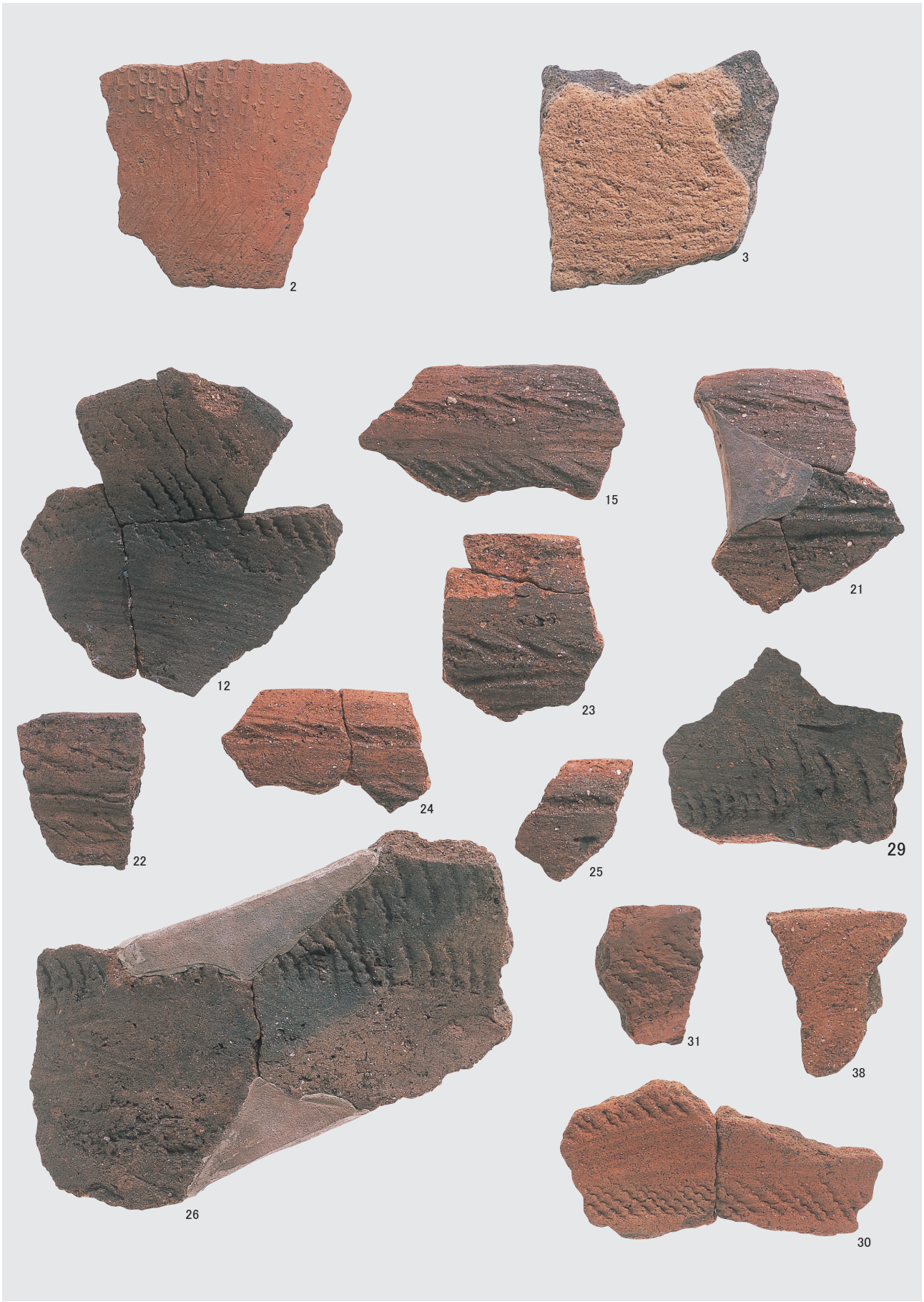




中世の遺物出土状況・近世の遺構

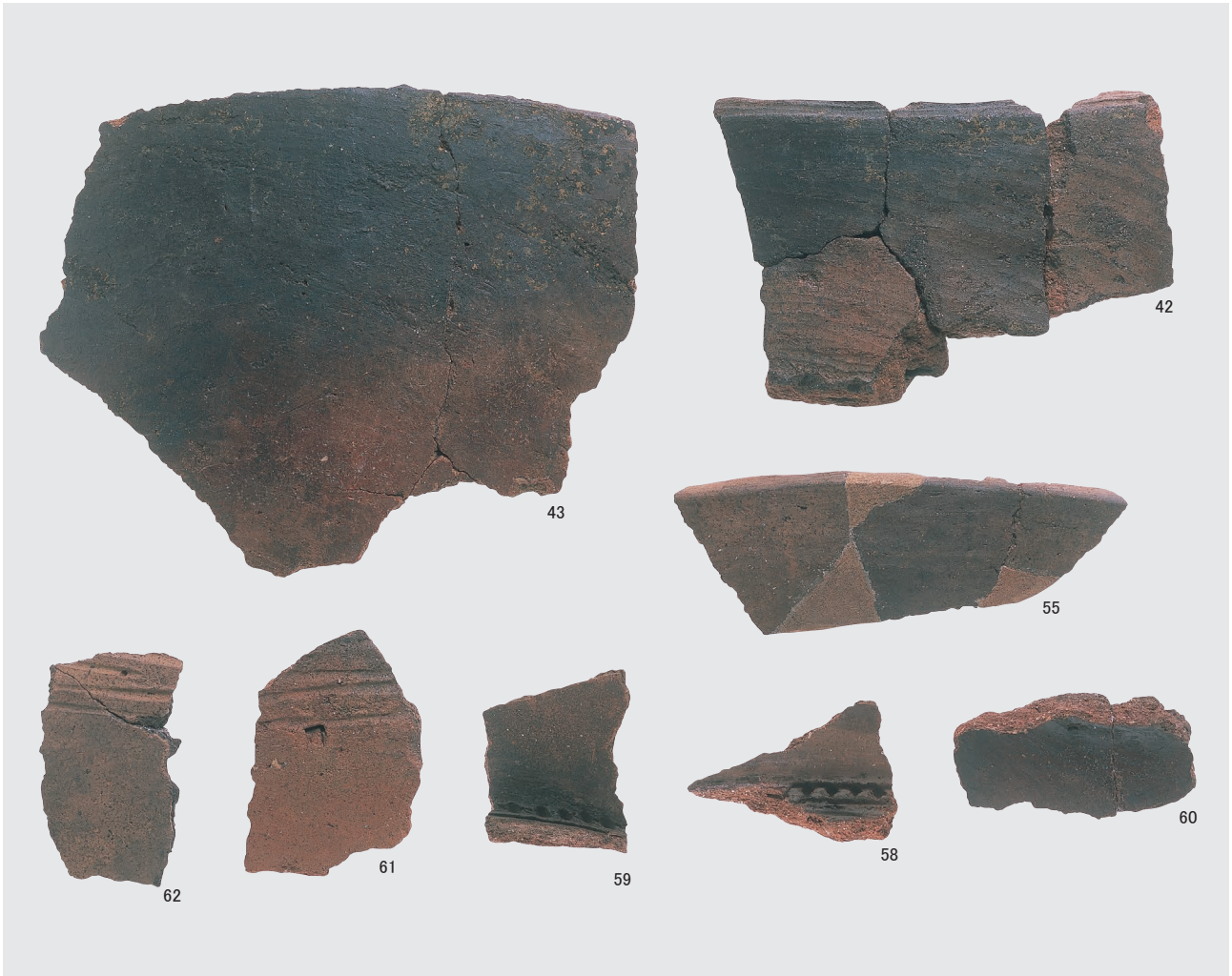
①炭化ご飯塊出土状況　②炭化モミ塊出土状況　③溝状遺構９完掘状況　④土坑22完掘状況

図版16



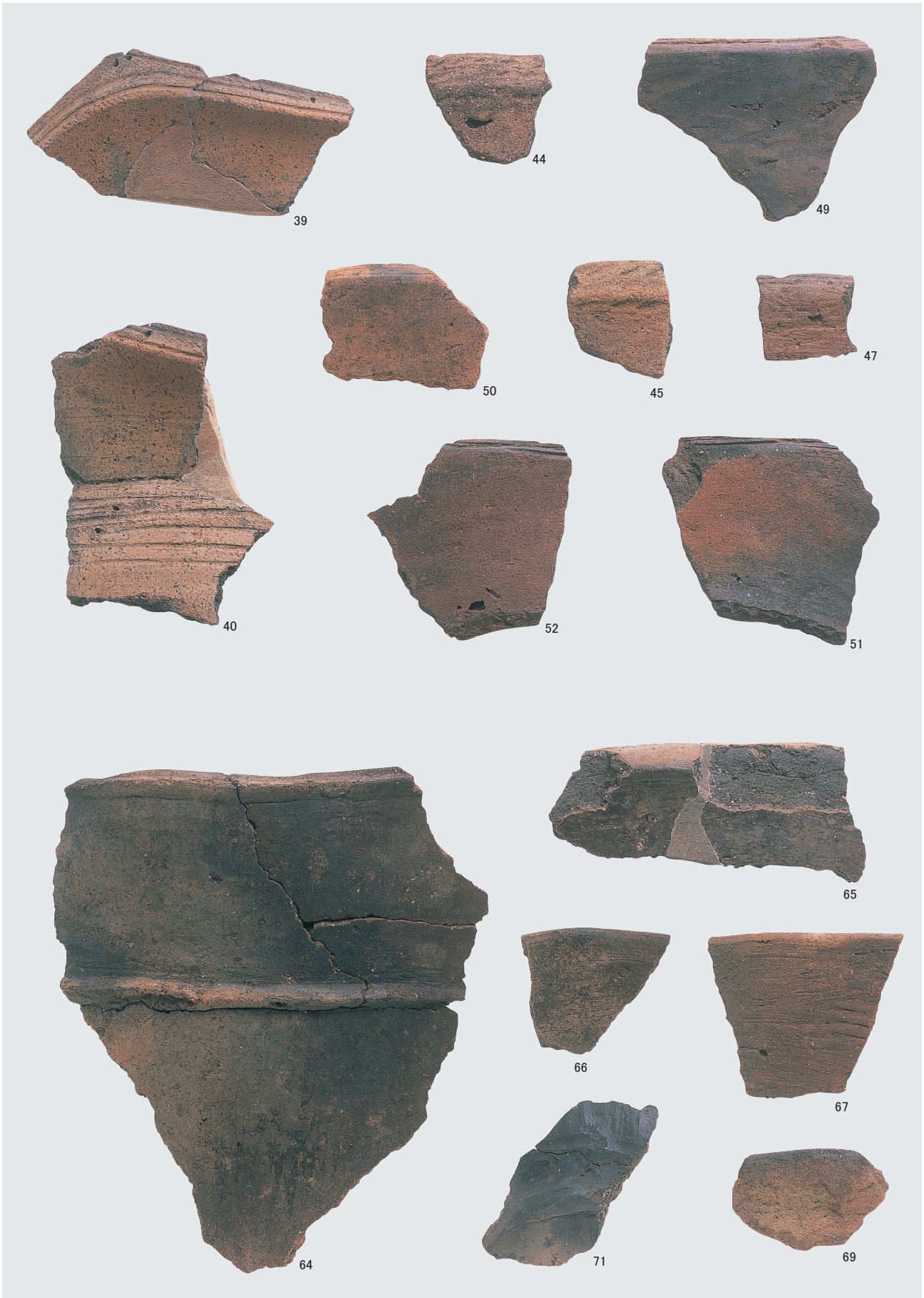

縄文時代の土器（1）




縄文時代の土器（2）

図版18




縄文時代の土器（3）




縄文時代の石器（1）

図版20




縄文時代の石器（2）




縄文時代の石器（3）

図版22




弥生時代の遺構内出土遺物・弥生時代の遺物（1）




弥生時代の遺物（2）

図版24




弥生時代の遺物（3）




古墳時代の遺構内遺物(溝状遺構１)

図版26


215


224


232


233


241


249

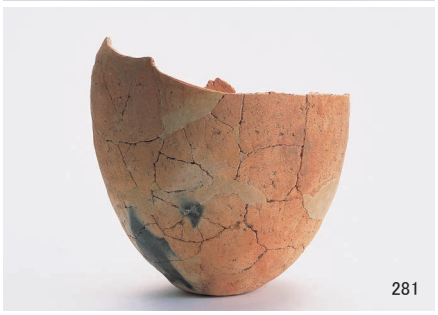
古墳時代の遺構内遺物(溝状遺構２-①)













古墳時代の遺構内遺物(溝状遺構２-②)

図版28



285 284 286
290 289 288



293 292
294 295

古墳時代の遺構内遺物(溝状遺構２-③)


316


320


335


336


340 341

古墳時代の遺構内遺物(溝状遺構３)

図版30




古墳時代の遺物（１）


378
383
380
384
386
389
388
392
390
391
394
396
397
395
398
400
403
402
415
416
417
424
418
419
420
421
425
422
423
426

古墳時代の遺物（２）

# 図版32


428
440
453
449
456
432
450
458
429
431
461
469
475
477
485
486
478
484
487
483
479

古代の遺物










中世の遺構内出土遺物（１）

図版34







中世の遺構内出土遺物（2）




中世の遺構内出土遺物（3）

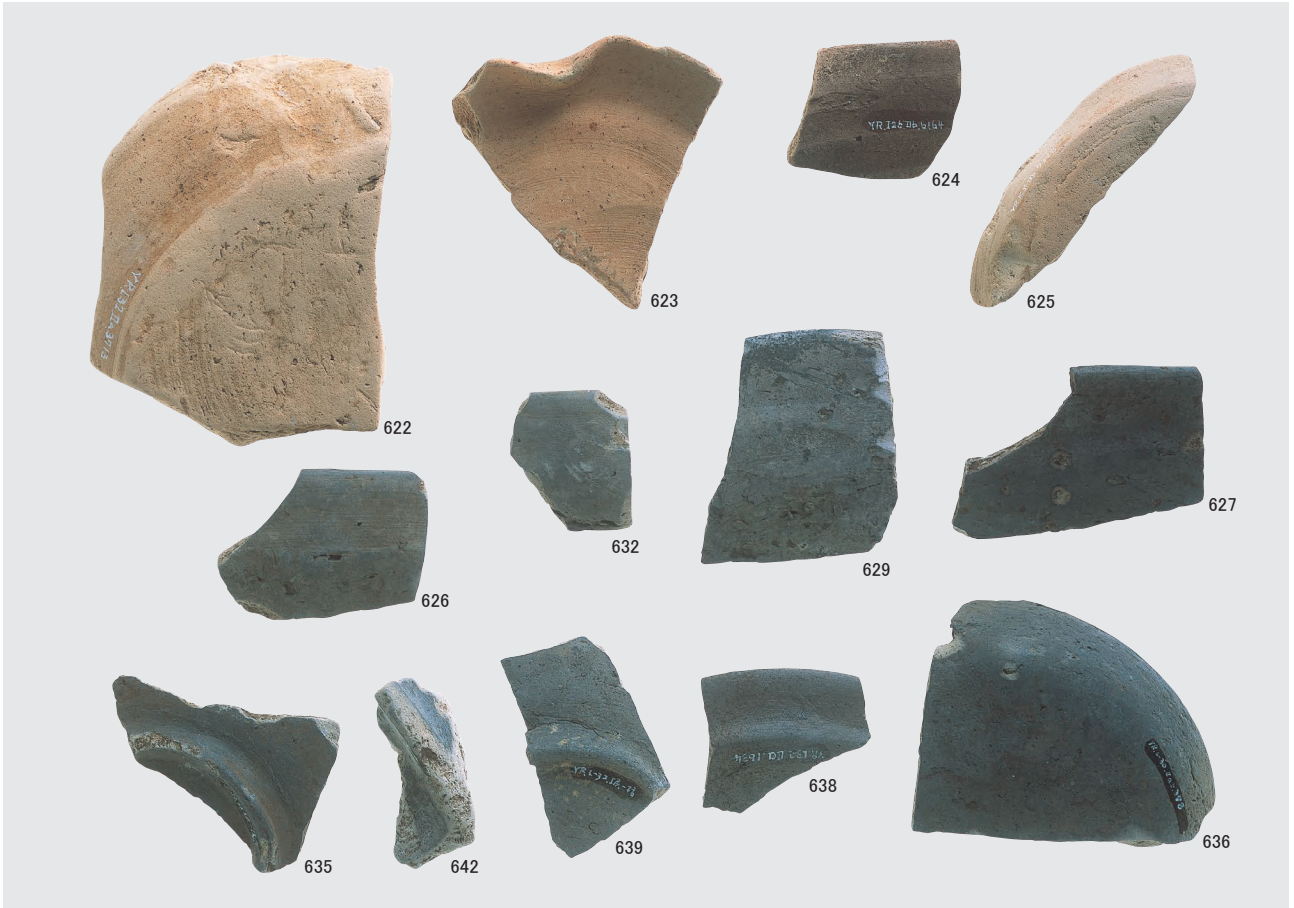
図版36


559 560 575
573
561 558 574


581 585
580 584
582
602
597 598 601 603
593 600 606
592 608

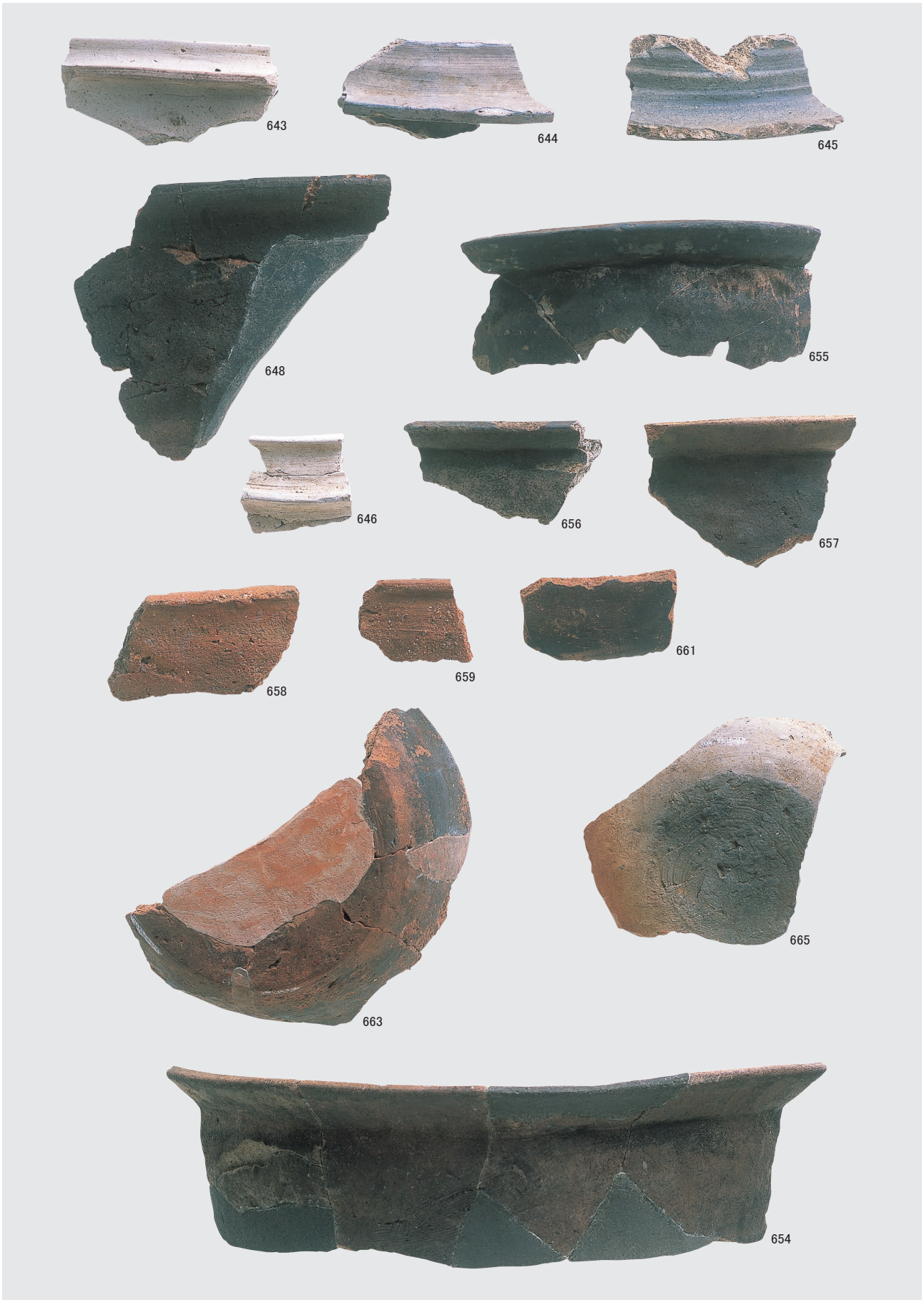
中世の遺物(1)


621
612 613 615
611 619 616

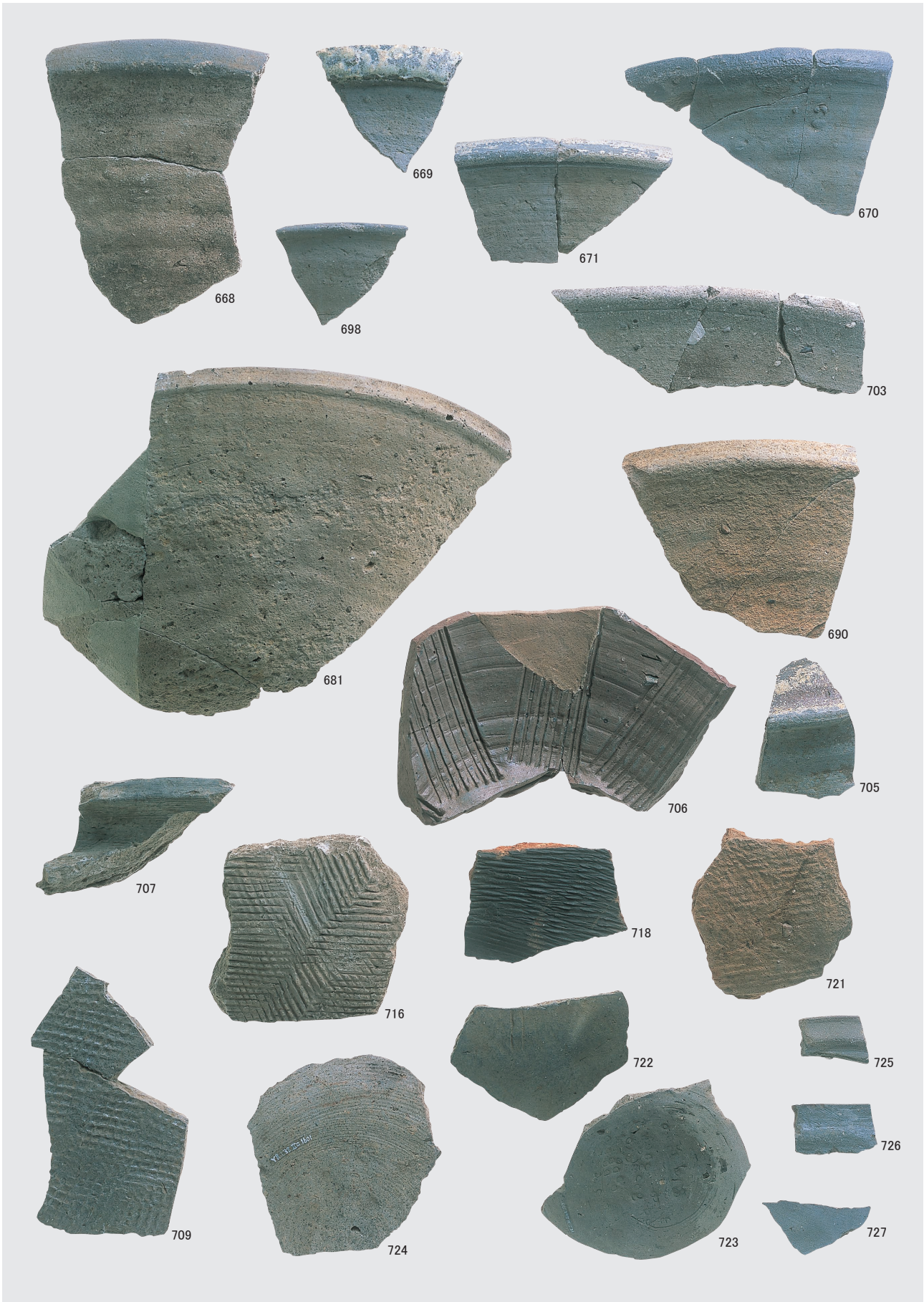

622
623
624
625
626
632
629
627
635
642
639
638
636

中世の遺物（2）

図版38




中世の遺物（3）


668
669
670
671
698
703
681
690
706
705
707
716
718
721
722
725
709
724
723
726
727

中世の遺物（４）

図版40


728
731
732
735
739
746
744
839
837
838
842
844
843
830
829
832
834
828
831
833
822
823
824
825
827
826
836
835

中世の遺物（5）


747
749
750
763
753
773
785
767
774
775
780
782
776
778
784
781
783
786
790
788
789
794
804
808
811
809
813
817
815
820

中世の遺物（6）

図版42

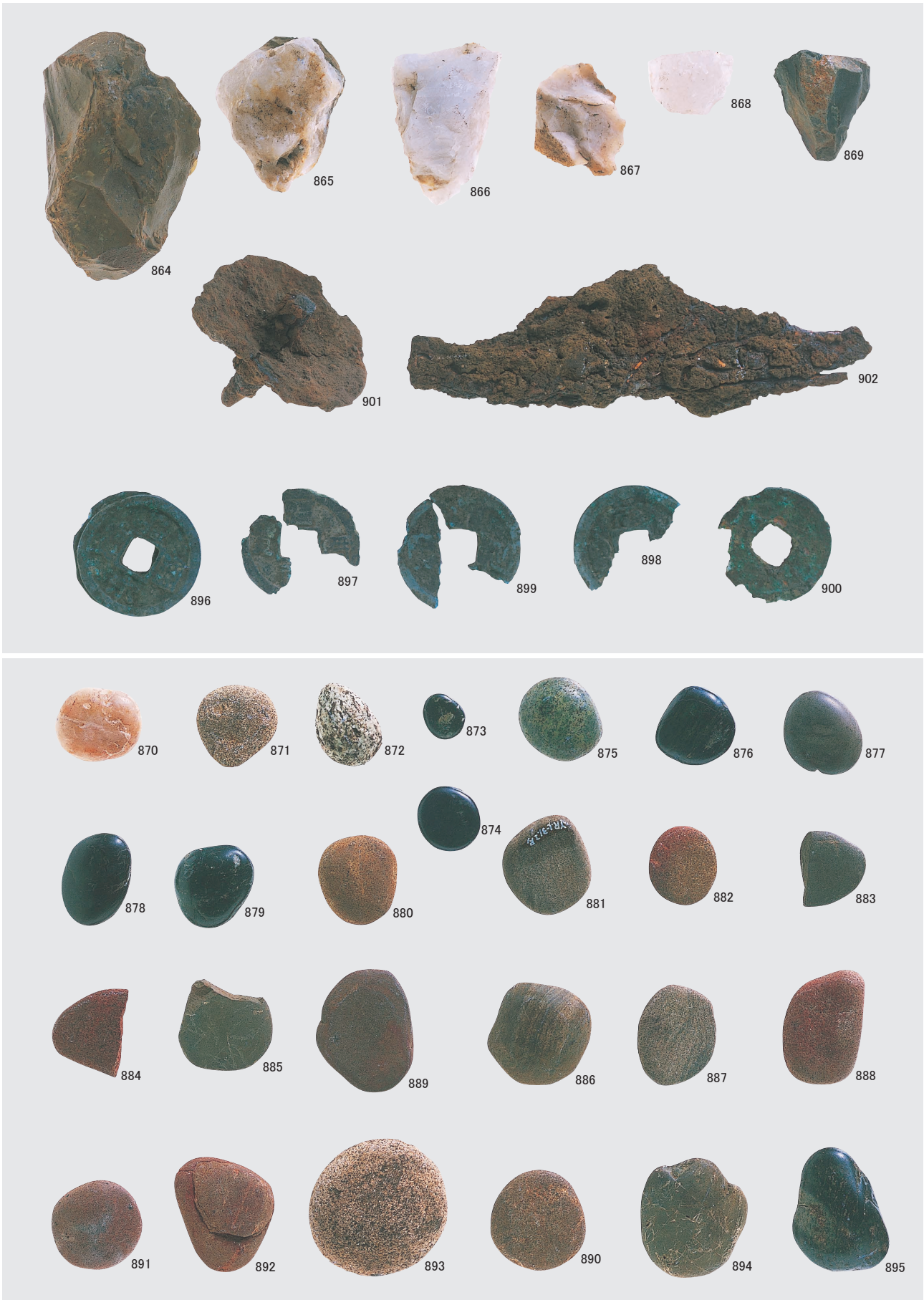


853 849 850 855 847
845 846 848 851 852



862 856 861
857 860 858 859

中世の遺物(7)


864
865
866
867
868
869
901
902
896
897
899
898
900
870
871
872
873
875
876
877
878
879
880
874
881
882
883
884
885
889
886
887
888
891
892
893
890
894
895

中世の遺物（８）

# 図版44




炭化ご飯塊・炭化モミ塊・時代不明の鉄器

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（34）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 安良遺跡

発 行 年 月　　２０２０年３月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　　刷　　日進印刷株式会社
〒892－0846　鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号
TEL　099-222-8291　　FAX　099-223-2715



鹿児島県